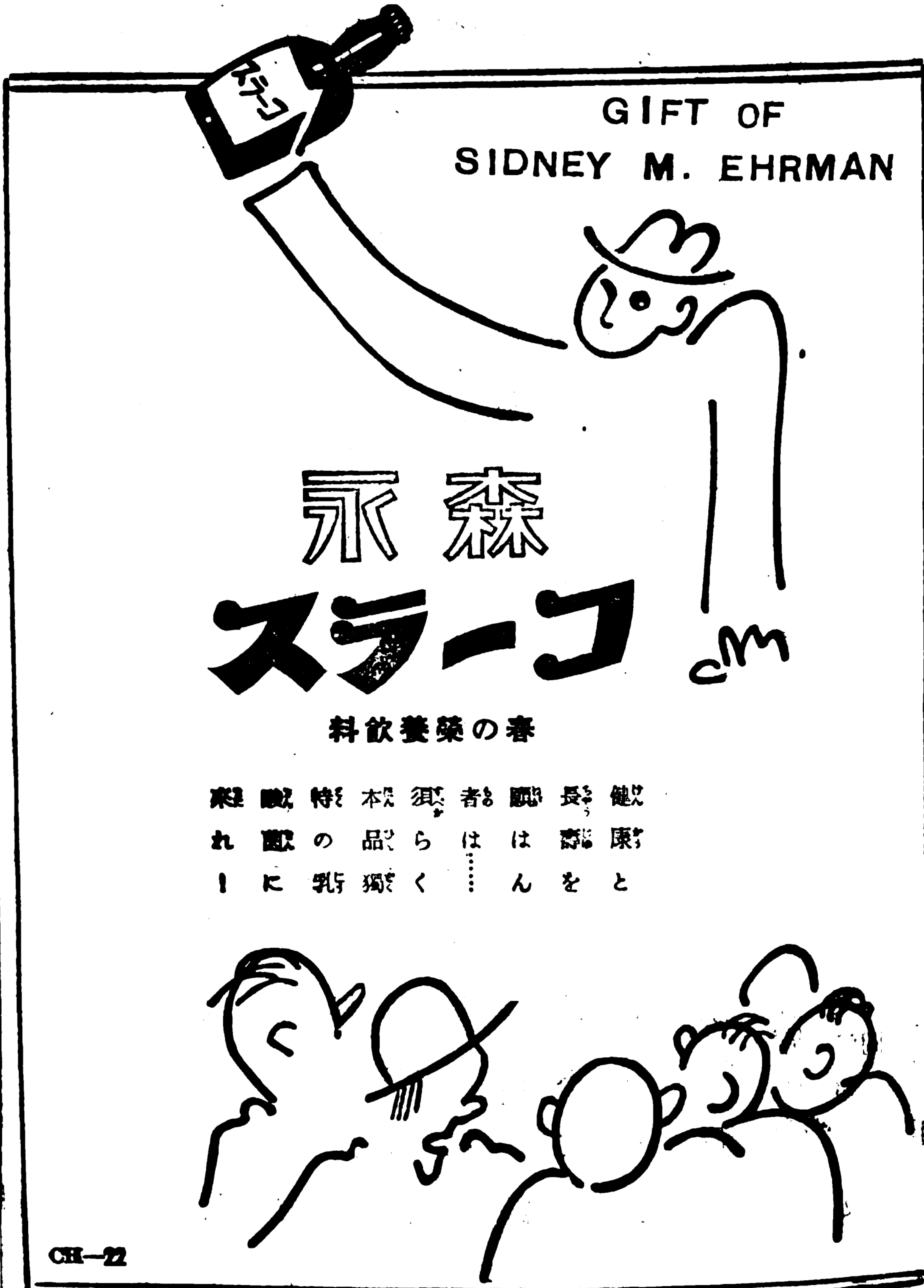
KAIZO

改造

三月號

1928


スラーゴ
永森
スラーゴ
春の榮養飲料
健康と
長壽を
願はん
者は……
須らく
本品獨
特の乳
に
れ!
CH—22



改造三月號目次

自然科學

第三卷第一號

（二月五日發賣） 定價壹圓 郵税十二錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二一番 改造社

無産各派の聯盟

劃期的の普選はとにかく終了した。明るい氣持で新興氣分の潑溂たるところが見られるのを豫期したが、手をかへ、品をかへての彈壓のために陰暗此上ない場面が現出せられ、もの言へば直ぐに選擧違犯を想像するの窮窟を感せしめたのは、普選法の缺陷そのものより來るのは勿論だが、選擧に先だち地方長官の大更迭と招集、警察部長會議させては檢事の大擧出動てふもののしさが人心を萎縮せしめたによる。多年苦鬪の結果獲得された一千萬の有權者が、その選擧權を愉快に行使することができず、まるで罪人が監視の中にあるの思ひであつたことは全國大衆と共に我々の限りなく遺憾とするところであつた。そして無産候補が幾多の壓迫のために政見、主義を滿足に陳べることの出來なかつたのも殘念であつた。そして我々があれほど口を酸くして叫んだ無産戰線の協定ができなかつたことは作戰を有利に展開せしめ得なかつた最大の因だ。眞に無産者の自由獲得の爲に戰ひ、そして無産者の生活利益に即するの念が强かつたならああした不利の戰を戰はなくてもよかつたのだ。我々は將來に於て無産政黨の發展は一にその陣營の統整と戰線の協調が既成政黨より、よりよく行はれるの一事にあると思ふ。あれほど大衆の熱烈な支持を有しながら戰略らしき戰略なく、戰術また既成政黨より拙かつたことも否み得ない。だが今後に於て若しかくの如き狀態が繰返さるるとしたら無産大衆はどういふ地位に陷さるるであらうか。我々は無産議員がどこ迄も無産者の味方である爲めに因學、小我、小兒病より解放されることを望む。議會の內部でも、外部でも今までのやうな小感情が漲つてゐては幾年經つてもその期待は酬いられないであらうことを苦言して無産各派の聯盟乃至は合同を再言するものである。

經濟時評二則（其一）

日銀の動脈硬化に關する山本・井上兩氏の論戰

福田德三

（一）

去一月二十五日東京銀行集會所に於ける一會合に於て、山本達雄、井上準之助兩氏の間に、注目すべき一論戰が行はれたことは、翌二十六日の都下の諸新聞紙の傳ふるところである。私は、親しく其論戰を拜聽したものでないから、新聞紙の記事が、眞を傳へて誤ないものであるか否かを知らぬが、假りに、其れを誤ないものとして（外に致方がないから）考へて見ると、其内容は甚だ重要なものであると思ふ。何となれば、其は、やがて、朝野兩大黨の財界の現狀に關する其れ〲の見解を披瀝したものと云はねばならぬから。山本男は、民政黨最高の財政通であり、井上氏は、現内閣の任命した日銀總裁であつて、兩者の意見は、或る度までは、朝野兩黨の意見なり、政策なりを代表してゐるものと見ても大過ないであらう。

此度の總選擧に際しては、政友會に、地租委讓、民政黨は、義務教育教員俸給國庫支辨を、其れ〳〵にスローガンとしたものと見るべきであらう。六千七百萬圓の地租を市町村に委讓するは、明かに、地方分權の財政々策であり、これに對向して、一億七八千萬圓にも上るべき教員俸給費を、國庫に於いて引受けるは、中央集權主義の財政々策である。此意味に於いて、此度の總選擧は、代議政治の展開に於いて、たしかに、一歩を進めたものと云ひ得る。從來の總選擧は、單に漠然たるスローガンの下に於いて行はれた。殊に、前回の護憲運動と云ふが如きは、俗耳には入り易かつたに相違ないが、憲法政治下に於ける總選擧の題目としては、餘りに空論的であつた。此度は然らず、朝野兩黨とも、端的にして具體的な題目を標榜して、相對立したのであつた、我々は、普選第一回の總選擧としては、これを、歡迎せざるを得なかつたのである。

乍去、此う云ふに、實は、机の上の話で、實際のプラットフォームは、必ずしも、此の理屈通りではなかつた。選擧者の過半は、地方分權主義の地租委讓と、中央集權主義の俸給國庫支辨との眞相を理解して、投票したものとは、到底言ひ得られぬ。況んや、地方分權主義と云つても、政友會が果して、其主義を終始一貫するものであらうか否か、未だ斷言し得られない。否、地租委讓の實施には、幾多の難關が横つてゐる。三土藏相が貴族院昭和クラブに於いて爲した説明によると、地租に代るべき新税を起さないといふ。其れは、誠に結構なことである。然らば、地租委讓から生ずる歳入の缺陥は如何して、これを補ふか、右説明中には、一向言明されてゐない。傳ふるところにては、其補塡は、關税收入の増加、並に公債によつて、これを爲すと云ふ。其れは、大問題であるが、其事については、責任ある言明を與へられてない。然れば、國民が、地租委讓に贊成すべきや否や、遙かにこれを決することは不可能である。其れと同樣に、野黨の俸給支辨は其財源を、何れに求むるか、一向明確に示されてない。言はゞ、狸の皮算用に均しい。而して、其の中央集權的財政々策は、何の點まで一貫して支持せられるのであらうか。其れは、我々には、寸毫も諒解の材料を與へてないことに屬する。

從つて、折角好個のスローガンを與へられたから、我々は、眞面目に考へて、朝野兩黨の何れに與みすべきかを判斷することが出來ないのである。從つて、總選擧の結果朝野兩黨、其の何れの勝利に歸するとも、其れは、地租委讓對國庫支辨主義の何れかゞ勝つたものだとは、言ひ得ない。

將來の事については、右の通り。即ち、此度の選擧は、將來の財政政策については、未だ現實に即した理解と判斷との上に行はれたものと云ふことは出來ないのである。これに反し、當面の問題については判斷を下し得る。與野兩黨其何れか、國民の利益により多く合致する財政々策を、當面の問題について取つたものであるかの判斷これである。

此の判斷を下すについて、右山本・井上兩氏の論戰は、我々に、甚だ重要な資料を供給するものと云はねばならぬ。

（二）

山本・井上兩氏論戰の要旨は、都下諸新聞紙中、最も詳細に報道して呉れた東京日々の記事によると、左の通りであつたといふ。

救濟のみに餘りに急な日銀

之こそ財界當面の大問題

山本達雄男

昨年の財界動亂は來るべきものが來たのである。大正九年の恐慌の打撃癒えざるに加へ震災の慘禍を蒙り爾來經濟界は殆んど何等の整理を見ず政府その他の施設はただ腫物に觸るやうな不安を感ずるの余り彌縫を事としてゐた。三年前吾人の唱へたる金解禁も實行されずなくてその動亂を見、理財を抜きにして台銀に二億、内地銀行に五億合計七億といふ尨大なる國民の負擔に歸する大問題の即決となつた、然るに政府はその上になほ十七億七千萬圓といふ昭和三年度の豫算を樹てた、幸にして議會は解散され傳へらるゝところでは實行豫算は歳出十五億數千萬圓、歳入十七億圓であるといふことで二億數千萬圓の國帑が節約されることになつた。

中央銀行の問題につき一言せんに今日の日本銀行は財界の現狀を救濟するに急にして貸出は激増し通貨も膨脹した、これはやむを得ないことであらうが日銀は財界の心臓で常に清新なる血液を送り出さねばならぬ、然るに兌換券がかく膨脹し増加した貸出も固定するやうでは中央銀行として兌換の基礎の強固を保つ重大職責を如何にするかといふ大問題に當面して來る。それにつけても吾人は金解禁の實行を一日も速かにすべきことを思ふものでかくて始めて通貨の伸縮が經濟界の大道によつて行はれ産業界活動の根底が固めらるゝものである、われわれは經濟界今日の混亂が他日立派な花を咲かすやうに銀行家諸君の奮闘を祈る。

遺憾ながら止むなき事情

井上日銀總裁

實業を保護せざる政治はまことに悲むべきである。しかして吾人は過去における腐敗に懲り今後において國民の希望に副ふやうな内閣が果して何の日に出現するかを疑ふ。今日は財政上眞に節約を必要とする。然るに歴代内閣いづれか眞に財政の緊縮を實行したるものありや。豫算は年々膨脹し公債は同樣增加するしかして忠實なる國民はこれを平然としてこれを呑み乾してゐる。なほ日本銀行の今日の地位につき一言する。日本銀行の今日の地位は平常の場合とやゝ異るものである。即ち去る臨時議會において七億の補償令を決定されて以來日銀の職責は通貨の統制問題を措いて財界の急を救ふ職責を帶ぶるに至つたのである。

しかして今日の膨脹したる通貨及び貸出しの回收について金利政策はその效果が薄弱となつた。これを兌換の基礎を維持す　職能の見地よりすればまことに大問題である財界の急を救ふため遺憾ながらこの事態に立ち至つた、しかしてわれ〳〵は今日の禍を轉じて福となすため金融業者が極めて愼重なる態度を持しかりそめにも變態的金融緩慢から延いて陷り易い弊害に進むことなくこれを戒め健忘症に陷らざらんことを望むものである。

今兩氏の言旨を要約して見ると、左の通りになる。

過去について

山本氏

昨年の財界動亂は來るべきものが來たのである。大正九年の恐慌の打撃癒へざるに加へ、震災の慘禍を蒙り、爾來經濟界は殆んど何等の整理を見ず、政府其他の施設はただ腫物に觸るやうな不安を感じるの餘り彌縫を事としてゐた。（中略）臺灣に二億、內地銀行に五億合計七億と云ふ尨大なる國民の負擔に歸する大問題の即決となつた。

井上氏

過去に於ける腐敗に懲り、今後に於いて、國民の希望に副ふやうな內閣が果して何れの日に出現するかを疑ふ。今日は財政上、眞に節約を必要とする。然るに、歴代內閣何れか眞に財產の緊縮を實行したものなりや。豫算は年々膨脹し、公債は同樣增加する。而して忠實なる國民は、これを平然として呑み乾してゐる。

兩氏の言、趣きを異にしてはゐるが、何れも過去の政府を責むることは、同一轍である。これは、私共の耳には、甚だ異樣に響く。何となれば、山本男は、嘗っては、日銀總裁たり、又た大藏大臣たり、現に民政黨第一の財政權威として重きを爲す人であり、井上氏も亦た嘗て、短期間ではあつたが、大藏大臣たり、殊に日銀總裁としては、長

き經歷を有し、今現に再び其任に在る人である。過去の政府、政治家が責めらるべきものでありとするならば、兩氏共に、其責を分たねばならぬことは、言ふまでもないところである。然るに二氏共に、これを他人事として取扱つて居られる。殊に、東京朝日の記事によれば、井上氏は、昂然的態度を以つて、政治家の健忘を非難せられたといふことである。山本男に對する答辯としては、私共は、井上氏に一理あることを認める。山本氏が、過去の財政不始末を餘所事の如く難詰せられるのは、たしかに、健忘の謗を免れぬ。而も、此く他を責める井上氏も、亦た健忘を以て責めらるべきではなからうか。しかし、私は、今其一事を追窮せんと欲するものではない。兎に角、今日までの政府其何れもが、今日の財界の難局を將來した責を免れ得ないことについては、山本、井上兩氏とも、全く同說である。而して、無論、其れは正しい。誰人が見ても此以外のことは言ひ能はぬのである。

（三）

問題の中核は、右點には存しない。昨年の休銀騷ぎの始末に關する措置、殊に、日銀の其れに關する。

山本氏	井上氏
今日の日銀は、財界の現狀を救濟する急にして、貸出しは激增し、通貨も膨脹した。これは、已むを得ないことであらうが、日銀は、財界の心臟で、常に、清新なる血液を送り出さねばならぬ。然るに、兌換券がかく膨脹し、增加した貸出しも固定するやうでは、中央銀行として兌換の基礎の鞏固を保つ重大職責を如何にするかといふ大問題に當面して來る。	日銀の今日の地位は、不常の場合とやゝ異る。七億の補償金を決定されて以來、日銀の職責は、通貨の統制問題を措いて、財界の急を救ふ職責を帶ぶることとなつた。而して、今日膨脹したる通貨及び貸出しの回收について、金利政策は、其の効果が薄弱となつた。これを、兌換の基礎維持の職能の見地よりすれば、誠に大問題である。財界の急を救ふため遺憾乍らこの事態に立ち至つた。

即ち兩氏とも、事實の認定の上に於いては、全く一致してゐる。其の事實とは（一）通貨の膨脹（二）日銀貸出しの固定化（三）其結果として、日銀の通貨統制機關としての動脈硬化、これである。

今一二の數字をあげて、兩氏の一樣に認容する事實の規模を窺つて見よう。其爲めには、休銀騷ぎの起つた直前の昨年三月十二日と、右討論の行はれた直前の土曜即ち本年一月廿一日とに於ける、日銀週報

中の數字を比較して見る。

（單位百萬圓）

	昭和二年三月十二日	昭和三年一月廿一日	差引増（＋）減（－）
兌換券發行高	一〇九〇・三	一三九一・二	＋三〇〇・九
貸出高	二七八・九	七七九・七	＋五〇〇・八
所有公債高	二八八・七	二〇五・四	－八四・三
預金（政府）	六四七・五	六一二・四	－三五・一
預金（民間）	七九・八	二五五・七	＋一七五・八

兌換發行高の增加額は、三億圓で、これが兩氏の云ふ通貨の膨脹である。（本文起草の際得られた最近の數字即ち二月六日の其れでは、兌換券發行高は、十二億九千七百圓で、昨年三月十二日に比べて、其增加は、二億圓と云ふ數字に降つて居る）。

此の三億圓は、休銀救濟の爲め、全部惹き起された增加であるか否かは、分明に斷言し難いけれども其大々部分の然ることは疑を容れないところである。日本銀行は、補償令の命ずるところによつて、休銀を救濟した。其金は、無論、兌換券の增發によつて支辨したに相違ないであらう。

然れば、右の三億圓又は其れに近い高が、日銀が補償令によつて、銀行救濟の爲めに貸出した高の全部であるかといふと、事實は、左樣でないらしい。日銀が、補償令によつて貸出した高の詳細は其の週報には內譯して示してない。午去、我々は、昨年三月と本年一月とを比較して、略ぼ、其高を知り得る。即ち、日銀貸出し高の增加これである。休銀騷ぎの起る直前、日銀の貸出總額は、二億七千九百萬圓弱であつた。然るに本年一月廿一日に於ては、其總額は、實に七億八千萬圓弱に上つてゐる。即ち、貸出高の增加は、五億以上に上つてゐるのである。此增加の全部が、補償令の作用によるものであるか否かは、分明でないが、假りに、然るものとすると、日銀は、銀行救濟の爲めに、五億圓餘の貸出を爲した。ところが、兌換券發行高の增加は、五億圓に上らず、一月二十一日に於ては、三億圓餘、二月六日に於ては二億圓に止つてゐるのである。これは、何故であらうか。

其說明は、直ぐにつく。其れは、右の二つの增加と並んで、日銀に於ける預金が增加してゐることを見れば足りる。昨年三月十二日の日銀預金總額は、七億二千七百萬圓、本年一月廿一日には、八億六千八百萬圓、即ち一億四千萬圓餘の增加を示してゐる。更らに、民間預金丈けについて見ると、昨年は八千萬圓足らず、本年は、二億五千六百萬圓近くの數字を示してゐる。即ち、民間預金丈けについて見ると

一億七千六百萬圓弱の增加となる。此高を、兌換券增加高の三億圓に加算すると、貸出し增加の五億圓に粗ぼ近い數字が出て來るのである。

此の預金は、財界の狀況次第、何時でも引出され得るものである。其引出し要求に對しては、日銀は、兌換券を增發してこれに應ずるであらう。卽ち此の預金高は、或る意味に於いては、潜勢狀態にある通貨膨脹高とも云ひ得るものである。

我々は、これによつて、次の事を知り得る。銀行救濟の爲めに、日銀から貸出された金高は、其全部が現實の通貨として流通してゐるものではない。貸出された高は、一旦は各銀行の債權者や預金者の手に入つたが、彼等は、其金を死藏せず、これを、色々な形ちに於いて銀行其他へ預け入れた。其れが、流れ流れて、再び日銀の手に歸した。而し日銀に於ける民間預金を膨脹せしむることとなつたのである。

ソコデ、日銀の銀行救濟は、二つの大きな作用を齎らしたことが分る。(一)は、日銀が、五億か又は其れに近い額丈け、從來各銀行が持て餘して居た惡質の貸付金を、各銀行と肩代りして引受けたことこれである。(二)は、其れがために、日銀は、通貨統制の機能を失ひ、私が名けて、動脈硬化と云ふ狀態に陷つたこと、これである。

日銀は、兌換券增加高の三億と、其預つて居る民間預金の增加の一億七千五百萬圓と合計四億七千五百萬圓又は其れに近い金高に當る丈け、性質の極めて惡い貸出しを爲した。其れは、日銀としては、休銀騷ぎの爲めに、背負はされた一種の腫物——山本氏の言を借りて——であるけれども、日本の經濟生活の全體から云へば、休銀騷ぎの爲めに、始めて發生した腫物ではなかつたのである。山本氏の云ふ樣に、大正九年以來段々に增進し來つた腫物なのである。休銀騷ぎの爲めに起つたことは、其の疾くに存してゐた腫物が、多數の民間の手から、日銀に讓られたと云ふことのみであるのである。

これは、日銀としては、決して好んで爲したことではないのは、言ふまでもないところである。御免願れば、無論眞先に御免を蒙つたに相違ない。從つて、井上氏が、其れは、補償令の爲めに課せられた一の迷惑であるが如くに言つてゐるのは、當然の事なのである。

日銀が、此惡性の貸金を引受けたことを、日銀貸出の固定化と山本氏は名けてゐる。誠に、其言の通りである。補償令の定めた期限內に、徐々に回收せらるではあらうが、其回收は、實に困難であり、

急に回收しようとすれば、更らに、財界の惡化を惹き起さぬとも限らぬ厄介千萬な貸出しである。從つて、其大々部分は、固定するものと見なければならぬ。而して、此く固定した貸付け金を有つと云ふことは、中央銀行としての日銀の元より爲すべからざるところである。何となれば、其れが爲めに、日銀は、中央銀行としての職責、通貨統制者としての機能を失ふことになるから。

日銀の貸出しは、絶へず金融市場の動靜を反映するものでなければならぬのである。金融市場が、資金を要することを多くなれば、日銀に對する貸出し要求は增す。日銀は、今日の制度では、保證準備以外にも、制限外發行を爲す權能を與へられて居る。此らの權能によつて、日銀は、貸出しの要求に應じて、其の兌換券發行を增加して貸出す。反對に、金融市場が資金を要さなくなれば、これを預金として各銀行を通じて、日銀に返濟する。日銀の兌換券發行高は、卽ち收縮する。かくて、日銀の兌換券高は、金融市場の要求の增減を、端的に反映することを得るのである。然るに五億に近い貸出高が固定して、其れは、金融市場の繁榮とは、全く沒交涉のものである。其れ丈けは、現實的又は潜勢的兌換券增發として、永く殘存する。其の爲めに、中央銀行たる日銀の兌換券發行高は、金融市場の情勢とは、全く緣のないものとなつて仕舞ふ。これが、私の名けて、日銀の動脈硬化と云ふところの有樣なのであつて、今、日銀は、實に、此狀態に陥つてゐることは、山本氏の指摘し、而して、井上氏の躊躇なく認める通りなのである。

これを要するに、山本・井上兩氏の指摘した三つの事實は、誰人も疑を挾むことの出來ない端的の事實である。而して其內通貨の膨脹は、現實の數字（三億圓）の示す以上に、潜勢力數字のあることを知らねばならぬのであつた。

（四）

ソコデ、責任問題が起る。

山本氏

今日の日本銀行は財界の現狀を救濟するに急にして云々

井上氏

去る臨時議會に於いて七億の補償令を決定されて以來日銀の職責は通貨の統制問題を措いて財界の急を救ふ職責を帶ぶるに至つた

（中略）

財界の急を救ふ爲め遺憾乍らこの事態に立到つた

山本氏は、以上の變態を釀出した責任を、第一に日銀當局者に、而して、言外に、現政府當局者に、歸すべきものとしてゐる。これに對して、井上氏は、其は、議會が、補償金を決定した爲めで、日銀としては甚だ迷惑作ら、已むを得ず甘受したにすぎないと答へて居る。

これは、甚だ重要な論點である。我々は、言葉の上に現はれたところ丈けについては、兩氏とも、決して間違つたことを言つてゐるものでないと斷ずる。しかし、其れは、言葉の上丈けの話である。事實の上の話ではない。

山本氏が、日銀當局と現政府とに、其責ありと云ふは、言葉の上では正しい。何となれば、兩者は、事態此くの如くなるべきを、十分豫知してゐたものに相違ないから。しかし、事實は、如何であつたか。山本氏にして、眞に國を憂ふるものであつたなら、其の指導する民政黨をして、政府と日銀當局とが、此くの如き結果を釀出すべき補償金を議會に提出したとき、極力これを防止せしむべきであつた。然るに當時の民政黨は、果して何事を爲したか。井上氏が、政治家の健忘を痛言したのに。たしかに、山本氏に對する最有力の答辯であつたに相違ない。

其反對に、井上氏が、一切の責任を、補償金の成立に嫁するは、言葉の上では其通りであらうが、事實としては、甚だ失當である。補償金の立案には、井上氏もまた參加したに相違ない。日銀當局たる井上氏にして其の成立を不可と確信してゐたなら、職を賭して、これと爭ひ、容れられずんば、即ち職責を全ふべかりしのみではないか。又は、これに代るべき他の方法を工夫案出して、政府に獻策するならば、政府必ずしも、無下にはこれを斥けなかつたらう。其容れられざるとき、即ち同じく其職を去るべきであつたではないか。井上氏は、不本意ではあつたらうが、兎に角、日銀當局として、政府の此立案に贊同したに相違ない。然れば少くとも、責を現政府當局と相分つべきものと云はねばならぬ。

此點に於いて、健忘の評は、山本氏よりも、更らにより多く井上氏に加へられねばならぬ。況んや、補償金成立前の休銀整理始末については、井上氏は、殆んど其全部の責任を負ふべきものであり、山本氏は殆んど負ふべき責任を有つてゐないのである。

私は今休銀整理始末に就て評論せんと欲するものではない。が、其の始末は、全く亂暴千萬なものであつた（此問題については、昨年末の

ジアパンタイムスに掲げた摘文を見られたい）。私は休銀整理の始末は其出立點に於いて誤つてゐたものなるを斷言する。殊に（一）固定貸の肩代りの爲めに、小銀行は彌が上にも壓迫されたこと。（二）昭和銀行の設立は、全く財閥擁護の用しか成さず休銀の救濟には、殆んど無用であつたこと。（三）預金の切捨てを出立點としたことの根本的に誤れること。（四）日銀から獨立しての整理の可能（信託制度又は國家管理）の可能について少しも考慮せざりしこと等の缺點をあげて置かねばならぬ。しかし、最大の缺點は、折角の補償金は、今日までの休銀整理のやり方では、殆んど、財閥擁護の用を爲したのみで、休銀其ものゝ救濟としても、債權者、預金者の擁護としても、殆んど其用を爲さず、徒らに、國民の負擔を增したに止ることを指摘せねばならぬ。

而して、其代價は、實に、日銀の動脈硬化であるのである。

（五）

終りに、此の變態からの脱出の問題が殘る。

山本氏

吾人は金解禁の實行を一日も速かにすべきことを思ふ。かくて始めて通貨の伸縮が經濟界の大道によつて行はれ産業界活動の根底が固めらるゝのである。

井上氏

我々は今日の禍を轉じて福となすたる金融業者が極めて愼重なる態度を持しかりそめにも變態的金融經營から延いて陷り易き弊害に染むことなりこれを戒め健忘症に陷らざらんことを望む。

井上氏は、此變態からの脱出について、唯だ道德的說法を爲すに止る。金融業者が如何に愼重なる態度を持したとて、健忘症を根治したとて、現成の日銀動脈硬化は、寸毫も解され得るものではない。言葉を換へて言へば、井上氏は、何等の救治法を示して居らず、唯他を責めるのみなのである。心細いこと、此上なし。

山本氏は、これに對して、具體的な方策を、いとも、明瞭に示してゐる。曰く、金輸解禁。

私は、昔しからの金輸解禁論者である。而して、今我邦の物價の低落してゐる現狀に鑑みて、其解禁は、即時にこれを斷行すべしと主張するものである。若し時日を經過するときは、兌換券の增發（其れは極めて起り易い狀態にあること、前述の如し）起り、物價昂騰することあれば解禁は、またく實行難に陷るであらうと信ずる。

此點に於いては、私は、山本男と（而して民政黨と）全く其見ると

ころを一にする。

乍併、日銀動脈硬化、其れより起る日銀統制力の喪失を救ふ爲めには、金輸解禁は、當面的には、何等の作用をも有たぬことを指摘せねばならぬ。何となれば、金輸解禁により、日銀の兌換券發行高が我邦の貿易の實狀と合致するやうになり、餘分の金貨は持出されて、兌換券高を國民救濟の實情に照應せしめるやうになるとても、右の固定貸の回收せられざる限り、何億圓かは、全く其作用以外に置かれ、而して、然る限り、日銀の通貨統制は、硬化狀態に止ることを免れ得ないから。山本男の救治法は、此の當面の動脈硬化症に對しては、二階から目藥ほどの用をも爲さぬと云はねばならぬのである。

從つて、山本氏も井上氏同樣、日銀動脈硬化の問題については、我々國民をして安心せしむべき何等の方策をも示してゐないと云はねばならぬ。

かくて、民政黨も、現政府（少くとも、井上氏によつて代辯せられた）も、此の重要な問題については、何等具體的政策を持たず、若くは、持つてゐても、これを、國民の前に示さずして、此度の總選擧に向つたものなるを確め得たことになる。

私は、此點を提げて、既成政黨の全部に對向する無産黨候補のプラットフオームに立つた。茲には、唯要領をのみ記すに止めた。

（其二）東京市佛貨債事件の敗訴

（一）

二月九日夕刊の各新聞は、東京市が佛貨債事件で、終いに敗訴したとの記事をのせてゐる。今國民紙の記事を、左に轉載する。

【パリ八日發聯合】一九一二年度發行五分利付東京市債を所有する佛國人側より東京市を相手どつて提起した、右市債の利子をフラン相場でなく金フランで支拂ふべしとの訴訟は、去る二月一日の裁判に於ては被告東京市に有利な解釋が與へられ、裁判所は一時判決の言渡しを延期し

たが、俄然形勢逆轉し、佛國裁判所は本日の公判に於て東京市は有利子を金フランで支拂ふべきものとすとの判決を言ひ渡した。

右について、東京市には未だ公式の入電はないが、目下紛爭となつてゐる市債は五千萬フラン（元金償却金）で、これを舊フランで支拂へば五千萬圓、新フランで支拂へば一千萬圓で濟み、こゝに四千萬圓の差額を生じ、今後の外債問題に影響する所が少くないので、市電氣局では取敢ず九日午前十時から關係當局者會合對策につき協議を重ねてゐる。

この問題に對して直接交渉の衝に當つてゐる市電氣局北林庶務課長は曰く

第一回の訴訟は大正十五年三月三十一日フルビオ博士が原告で提起されたが、東京市は當時帝大教授杉山直次郎氏がフランスへ行く機會があつたのを幸ひ、博士を囑託として權利確認の反訴を起して爭つた結果、フルビオ博士は間もなく訴訟を取下げて解決したが、續いて同年十二月ジャン・アカール氏、此マイテール・ウワール夫人、ベイ・スイフ未亡人の三人が原告となつて第二回目の訴訟を起したが、その後原告側に和解の模樣が見え、東京市に有利な情勢が見えて來たので、市は敢へて反訴を起さずそのまゝにした、然るに最近に至つて第三回の訴訟が提起されたので市から口頭辯論に當時電氣局の瀬川主計課長外一名を出張させたが、昨年暮まで一回の辯論もなかつたので、瀬川君は一切を大使館とフランス辯護士會有數の專門家に依賴して歸朝したのです、昨日外務省の入電には市側に有利な情勢にあるとのことでしたが、若し敗訴になつたとすれば市は今後何年を繼續しても反訴を起して飽くまで爭ふ決心でゐます。

私は、此問題については、すでに、一昨年十月、即ち東京市が、抑も應訴したとき、東京市は必ず敗訴するであらうことを、市から派遣されて行かんとしつゝあつた某氏に語りて、其の反省を促し、更らに筆を取つて一文を草して言つた。「我等は、豫感的に云ひたい、今回の訴訟に於ける東京市の勝味は、先づ十中の二三分しか無い、其二三分も餘程努力するものとしての二三分であつて、今日までに現はれた經過までは、二三分は愚か、一分一厘の勝味も無いものと察せられる」と。（「國際信義の立場より見たる東京市佛貨債問題」第四頁）

其後、東京市から、杉山教授の鑑定書（勝訴すべしとの意見）を示されたけれども、私は、一向、それに贊成することが出來なかつた。東京市は、此の訴訟の爲めに、わざ／＼高價な旅費を給して、吏員を派遣したり、杉山教授に囑託したり、多額の費用を使つたやうだが、終に、敗訴したものと見へる。彼の當時、少しは、私の言にも、耳を藉してゐたらば、こんな無駄費ひも免れ得たらうに。甚だ馬鹿々々しい次第であるが、更らに反訴を起して飽まで爭ふなどとは、無鐵砲に

る程がある。

私は、問題の所在を東京市民諸君が、知り置かれんことを望み、市當局に對しては、更らに反訴を起して飽迄爭ふことの異を演ぜられざらんことを切望するものであるから、一度公表した右論文の要點を左に摘記して、評論に代へて置く。

（二）

東京市の佛貨公債を所有する一佛蘭西人が、同國の或裁判所に東京市を相手取つて最近期限の利息の支拂に就て一つの訴訟を起したことは、本邦の新聞紙上に於て散見する所である、我輩は其訴訟の內容を確かに知らないから、如何なる要求をしたか分らないが、新聞紙の記事を誤りなきものとすれば、原告は百二十五法の利息を磅若くは其爲替相場を以て支拂ふ可しとする判決を要求するに在つた樣である。百二十五法と云ふのは、日佛兩貨幣の平價で云へば四十六圓二十五錢ばかりに當るのであるが、今日現在（九月二十一日）の日佛爲替の相場（銀行一覽拂十七法四十五參）から云へば七圓二十二錢五厘にしか當らないのである。從つて右原告の訴訟が勝ちを得れば、東京市は原告に對して四十六圓二十五錢を支拂はなければならないし、是れと反對に右原告の敗訴に歸して、恐らく東京市の希望するであらう通りに現在の日佛爲替の相場で支拂ふとすれば、總額僅かに七圓二十二錢五厘丈けで濟む譯である。而して是れは今回の利拂にのみ止まらず、向後の利拂にも適用せられ、延いては元金總額の償還にも適用せられることになるであらう。元金は約九千萬法殘つて居ると云ふ話であるからして、之を平價で支拂へば約三千三百三十萬圓を償還しなければならないが、現在の爲替相場で支拂ふことになると約五百二十萬圓で事足りる譯であつて、元利を通計すれば兩者の懸隔は甚だ大なるものとなる。從つて東京市としては此訴訟の勝敗に重大なる關係を持つて居る。然し佛蘭西に於ける東京市債券の所有者としては恐らくヨリ以上の重大なる關係を持つて居る譯である。

經濟上の立場を考へるに就ても亦若干項目に分けて見よう。

A　先づ第一に著しく目立つ事實は、何故佛蘭西に於て佛貨公債として募集する債券面に外貨の磅を掲出したかと云ふことである。極く皮相的に云へば、元來英貨債として磅で募入して貰ひたいものを、當時金融界の事情を考慮して佛蘭西に於て募集したのに違ひないから、其募集たる東京市は磅の手取を希望したものであること言ふ迄もなく從つて右の Fro.... Equivalent to £.... と云ふ文句を態々入れたものと云へるかも知れない。其れは要するに便利上の問題であつて當否

論議の問題ではなからう。然し當時では便利であつたものが今は反つて紛議の禍根となつて居るのである。一體、我國の官民ともに歐羅巴と云へば唯だ英國あるを知つて大陸あることを知らない。世界に對して英國本位の考へ方をして、恰かも日本は英國の屬國たる如き態度を標榜して恬として顧みない。故に、當時に於て便利と云ふのは英國本位の見方で便利であると云ふたに過ぎないので、其外には大した理由を發見するに苦しむのである。大袈裟な云ひ方であるが、固陋なる英國本位觀が今回の紛議の種を蒔いたものと云ひ得られるであらう。佛貨債に Equivalent to fr. 4,000,000 として外國貨を掲げると云ふことは、假令狹隘なる概念法學の立場に立つても充分問題を惹き起すのである即ち Equivalent to fr. 4,000,000 とした事は單純なる貨幣名目解釋を直ちに許さないことになる。Equivalent to fr. 4,000,000 と云ふ文句は法（フラン）の實質を考慮すると云ふことを明かにしたのである。而して前述の條例には其事實を具體的に「英貨一磅ニ對シ佛貨二十五法二十二參」と書いてある。然し實質を考慮に入れると云ふことは、經濟上今日までの通説たる所謂金屬主義（Metalism）の採る所である。例へば、我貨幣法第二條に「純金ノ量目二分ヲ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス」としてある。此條文を嚴格に解すれば、純金の量目二分に當る圓でなければ圓ではない譯である。然し斯かる議論は實際には唱へられない。二分の何割にしか當らぬ圓を圓として授受して怪しまない。假りに我輩が俸給を貰ふ時に、月給何圓と云ふ辭令を受けたから金二分の何倍かを戴かねばならぬと云つて訴訟を起したならば、我國の裁判所は何んと裁くであらうか。恐らく我輩の訴訟は成立しないであらう。少くとも斯の如き訴訟を起せば好奇の業として世人の嘲笑を招くに止まるであらう、これが貨幣名目主義（Nominalism）の強い論據とする所である。然し今我輩は經濟理論を論述する場合ではないから、此點は論じまい。現在の場合の東京市債に就て云へば右の場合とは著しく違つて居つて、Equivalent to fr. 4,000,000 と云ふことは積極的に實質を考慮したものと解釋せられる餘地は充分に在るのである。況んや東京市債條例に前掲のやうな明文あるに於てをや。

之を分り易く云へば、東京市は四百萬磅の債務を負ふことを覺悟して立ち、而も之を天下に公示したのである。信義誠實の問題から云へば無論の事、金錢貸借の通理から云つても、法理論は別として經濟上から見ると、東京市が負擔した債務は四百萬磅であつて壹億八拾八萬法ではない、東京市條例に「英貨壹磅ニ對シ佛貨二十五法二十二參」と書いたのは、當時に於ては東京市自らを保護したのである、當時急激なる事件が起つて、右の換算率が變つた場合に損失を被ることを防ぐべく明記したものと見られ得る、幸ひ當時は其事がなかつたから問

題が起らなかつたに過ぎない。然し今日では其問題が起つた、而して其れは東京市に取つては不利に、佛蘭西の債權者に取つては有利に使用せられ得る文言とならぬことを保し得られないのである。各利札毎に一々磅額を示してあることは、單に一片の形式と見ることは出來ない。東京市から云へば自己擁護の爲めに一々明言したものと見られ得よう。

B　次に各利札毎にアンヴエルス、ブルユクセルに於て支拂はれた場合は、時の爲替相場によると云ふ文句が掲げられてある。或人は此文句こそ東京市に取つて有利に解せらる可き有力なる武器と云はれたが、我輩は其人に對して次の如く答へた。此一言は諸刄の劍である。然し之を毒にもなれば藥にもなり、何れの場合でも有力である。然し之を毒とするか藥とするかは巨匠を俟つて始めて決せられる問題である。舊式の概念法學の天地に跼蹐して居る人々には毒にも出來ず藥にも出來ないであらう。今回の訴訟に於て東京市が勝つとすれば此文句で勝つであらうし、反對に負けるとすれば、此文句で主なる敗因が形造られるであらう。此點を法理論を離れて經濟上から論じて見よう。成程、表面から云へば、アンヴエルス、ブルユクセルで利息を支拂ふ時に、其時の爲替相場によつて換算し、白耳義法で十二法を支拂はねばならぬこともあらうし又反對に十一法にて足りることもあらうと解釋される。

其れ丈けの事を考へて此一言があるので勝つと云ふのは極めて皮相の見解ではあるまいか。何故ならば、右の一言は今日の場合に於て單に當面の解釋に委す可きものではなく、原則的の重要を持つ可きものである。其原則的の重要と云ふのは、少くとも利息の支拂に當つて、債務者が現實的なる其時々の爲替相場と云ふものを採用することを公認したものである。從つて佛蘭西の法が今日現實の場合とは正反對に騰貴して居たものとすれば、如何なるかを考へて見なければならぬ。若しCurrent rate of exchange の文句がなくて、單に十二法五十參を支拂ふとしてあれば、少くとも當面の問題は起るまいが、此文句ある以上は、例へば極端なる場合を想像して、佛蘭西の百法に對し白耳義法二百法なる相場が建つて居つたとしたら如何なるであらうか、此場合には十二法五十參の利息を支拂ふ爲めに二十五法の白耳義法を支拂はなければならぬ。其時に東京市は即時に二十五法を支拂ふであらうか如何であらうか。此場合は二つに分けて考へられる。

甲、百法對二百法の相場なるものが白耳義法の下落に因つて成立した相場である場合

乙、反對に右の相場が佛蘭西法の非常なる騰貴に因つて成立した場合

甲の場合に於ては假令請求通りに支拂つても何等の差がない、東京

市の負擔は其れが爲めに增大することは斷じてない、唯白耳義法が獨り下つたので、名目は二十五法を支拂ふと云つても磅又は圓に換算した額には變りはない。其反對に乙の場合に於ては事態が全く違ふ。東京市の支拂ふべき金額は著しく增大するのである。何となれば、之を圓又は磅に換算した額が倍若くは其れに近くなるであらうから、此場合に於ては東京市は果して直ちに債券所有者の要求に應ずるか否か、十の八九應しないものと考へられない。然せざれば東京市の當局者は背任の譏を受くることを覺悟しなければならぬ。而して此場合に訴訟が起されたとすれば、東京市の主張は如何であらうか、恐らく前揭のCurrent rate of exchange の文句を武器として擔ぎ出すであらう。曰く「東京市の負擔したものは白耳義法でもなければ佛蘭西法でもない磅である、即ち二十五法二十二參即ち一磅の法である、十何法即ち一磅の其法ではない」と、併し乍ら自己の不利なる場合に於ける主張は他人の爲めに有利なる論據でなければならぬ、少くとも經濟上は然うである。之を極端に詰めて考へて見れば、東京市が負擔した四百萬磅は即ち二志〇片有餘の圓額である。何んとなれば、其れが東京市の實收額であるのであるから、其額が倍にもなつた場合に何等抗爭することなくして東京市は之を支拂ふものと考へられない。否佛蘭西法が暴騰する場合ありとすれば、縱令右の白耳義法に換算の文句なくともEquivalent to £. 4,000,000 の文句丈けでも爭ふであらう。曰く「Equivalent to £ 4,000,000 と云ふことを換算率を示したものではない、其れは一片の形式論であると佛蘭西人側では主張するかも知れない。其れは Frc. 100,880,000 = £ 4,000,000と書いてあれば、其公式の中に換算率は含まれて居る、即ち壹磅は二十五法二十二參であるに相違ない、唯だ印刷した債券面に其率が數字となつて現はれて居らない」と云ふ丈けで、其率がなければ右の等價式は成り立たないのである」と。恐らく然う云ふであらうと思はれる。而して其れは人をして首肯せしむるに足る一つの論據たるは言ふ迄もないと思ふ、然し是れは佛蘭西側の云ひさうな事であつて、東京市が云ひさうな見解でないことは勿論である。何となれば、東京市に取つては右の文句が毒となる解釋しか生み出さないからである。唯だ藥となる解釋は東京市又は東京市の助言者の採つて居る所であるが、其れは如何であるかは知らない。我輩の斷案の趣意は此問題を輕視してはならぬと云ふことを警告するのみで、藥となるべき解釋を玆に述べる必要を見ない、又我輩は今施療施藥をしようと云ふ心持を少しも持つて居る者ではない。

○ 以上我々經濟生活の研究者から云へば、要するに下らぬ三百代言の理窟に過ぎない、どちらに轉んでも敢て意とするに足らない。我輩はもつと高所に登つて觀察せんことを欲するのである。岩田教授の

語を籍りて云へば、時代の要求はよく、、、、、、、、、諧るが是か非かは時代の要求以外の標準から判斷せられねばならぬ。問題は單に何十萬何百萬圓の得喪の問題ではない、世界の表に於ける日本の信義の問題である。此の高き立場から云へば、我輩は東京市が原告の要求に對して直ちに應訴した事その事が大きい誤りであると思ふ。法律上から云へば管轄違ひであるかないかと云ふやうな問題も起るであらうが、そんな事もどちらでも宜しい。東京市、否、日本は佛蘭西に於ける東京市債券の所有者に對して、更に擴めて云へば外國一般に對して、此問題に就て如何なる債務を負ふて居るかを考へて見なければならぬ。日本に東京市と云ふものに依つて當時の手取金額圓價で約四千萬圓丈けの債務を負ふたのであつて是れに對して約束通り元利を支拂ふのは固より當然である。法律の缺陷は兎も角、佛蘭西の國民的災禍とも謂ふべき法貨の大暴落を好機會として、現に負ふて居る債務を其五分の一にも六分の一にも減じて仕舞ふなどゝは、高き信義の立場に立つ者に取つては到底考へ得られない事である。其れと同時に日本の圓も下落して居る、尤も今日は著しく圓の價値も昂まつたけれど、平價に尚ほ若干の開きがある。從つて、當時の實收四百萬磅を償還しようとするには、當時の手取よりは餘計に支拂はなくてはならない。是れは佛蘭西の債權者も熟知の事實であつて彼等しめば我も亦苦しむ場合には互に同情し合ふ可きである。更に附け加へて云へば、日本殊に東京市が大正十二年の大震災に因つて莫大なる損害を被つて居る事も世界周知の事實である。元來が土地狹く人多き國であるのに、近年は又引續き財界不況の影響も受け、隣邦支那に於ける絕えざる戰亂の爲めにも少からぬ打擊を蒙つて、國內の不景氣が彌々深刻となつて苦しみ悶えて居ることも亦誰人も認むる事實である。昔は武士は相見互ひと云つたが、今日は國と國と、國民と國民とが相見互ひでなければならぬ。從つて我輩は此問題は單に裁判所のみで決定しようとすることは重大なる錯誤であり、又日本全體の立場として極めて不利なる解決であると確信する。(以下略す)

(三・二・九)



普選議會に何を求めるか？

山川均

（一）

わが國の政治史の上に初めて現はれた、普選議會に、吾々は何を望むであらうか？　また何を望み得るであらうか？　この問に對する答は、わが國を政治的に支配してゐる舊勢力は、この新議會に何を期待し何を望んでゐるかを明らかにすることによつて、反面から、しかも一そう明確にすることができる。

明治維新は、主として、武士の下層によつて行はれた。そしてこの革命の結果として、直接に政權を握つたものは、主としてこの運動を指導した分子であつた。それにもかゝはらず、明治維新は、封建的・專制主義的舊社會の埒内において、たゞ單に武士階級の上層から武士階級の下層にまで、政權が移動したにすぎないものではなかつた。明治維新は、下層武士の不平よりも、もつと大きな力によつて推進され、下層武士の理想よりも、もつと大きな力によつて導かれてをつた。これは維新の革命が、彼らの意識とはまるきり違がつた方向に發展し、まるきり異つた實を結んだことによつても、知ることができる。明治維新によつて、專制主義の極度の束縛干渉の下に生長した商業資本と商品經濟とは、新たな發展段階への進出を妨げてゐた障害物を一掃した。土地の私有權が確立され、土地そのものが自由な賣買の目的物となり、從つて農産物が自由な商品となり、資本主義的商品經濟の基礎

の上に、都市と農村との交換關係が樹立せられるにいたつた。かように、その運動が何者によつて觸發せられたにもせよ、明治維新は、自分自身の道を歩んでゐたのである。

明治維新における眞實の推進力、封建的・專制主義に對する眞實の勝利者は、舊社會において既にその機能を失つてゐた階級ではなくて、新興のブルジョアジーであつた。けれどもブルジョアジーは、經濟的にもなほ幼弱であつたばかりでなく、政治的には、もとより成熟してゐなかつた。從つて明治維新によつて、政權の舞臺に登つたものはブルジョアジーではなくて、もはや何ら階級としての武士を代表してはゐなくなつたところの、下層武士の一少部分であつた。であるから明治の新政權は、もはや舊軍隊をその支柱としないで、却つて武士階級の武裝を解除し、國民皆兵主義による新軍隊を編制することをもつて根本的に重要な政策の一つとした。また不平士族の反抗を打破することによつて、新政府は、初めてその基礎を鞏固にした。これは明治の政變が、決して武士階級の内部における政權の移動にすぎないものではなかつたこと、この政治的變革に、ブルジョアジーが何ら活動的な要素として現はれなかつたにもかゝはらず、明治維新がどの方向に向つて政權の推移する始まりであつたかを物語つてゐる。

封建的・專制政府のもとに現はれた明治の新政府は、かようにブルジョアジーの政府でなかつたことは無論であつて、いづれの國においても、ブルジョア革命によつて、一擧にブルジョアジーの直接の支配が確立され、完成せられたことはないが、わが國の明治維新においては特にそうだつた。けれどもそれと同時に、明治の新政權は、もはや封建的・專制主義の政府を、そのまゝに復生したものでもあり得なかつた。いづれの階級も決定的に優越した力を持たなかつた形勢の下において、明治の新政權が、專制的な獨裁政治の形を取つたことは怪しむに足りないことであつた。けれどもそれと同時に、明治政府は、少なくとも新政治の原則としては、『廣く會議を興し萬機公論に決す』ことを宣言しなければならなかつたばかりでなく、『博く衆議を諮詢』するための會議所の制度を採用した。

明治維新から最近にいたる五十年間に、この革命によつて舊制度の外殼から解放せられた社會勢力が、さらに生長成熟し、この生長と成熟とに應じて、その力を政治上に反譯し、その政權を確立し、自分自身の支配形態を發展し完成するにいたつた過程であつた。この過程のうちに、維新の革命運動に活動的な役割をした舊武士階級下層は、社會的活動のあらゆる領域において、新興階級によつて押し除けられ、全體としての士族もまた、もはや階級としての存在を失ひ、資本主義社會に固有な階級と社會層とに變化し、またはそのうちに同化され溶

解された。

（二）

ブルジョアジーが政治的に生長し成熟した過程は、すべての國々の場合のように、わが國においても、政權を壟斷し、もしくは政權の壟斷者と結合してゐる上層ブルジョアに對して、より低い、從つてまたより廣大なブルジョア層が民主主義を要求し、その政權の分配に與づかる過程となつて現はれてゐる。維新後の二十年間は、變革によつて直接に政權を握つた指導分子の官僚化した一團による、一種の寡頭政治——いはゆる『有司專制』によつて支配せられたが、この間、民選議院の要求はたへず繰り返へされ、明治七年には、國會の開設を要求する有力な運動が起こり、二十三年にいたつて初めて國會が開かれた。

明治二十三年の最初の國會召集以來、大正十五年、第五十議會が普通選擧法を通過するにいたるまで、選擧權の擴張は、絶へず繰り返へされた要求であつた。即ち第十八回議會には、納稅資格を全廢し、年齡を二十歳以上とする普選案が早くも提出され、第二十三議會には、納稅資格を三圓に引下げる改正案が提出され、第二十四議會から第二十七議會にいたる四議會には、納稅資格撤廢、年齡二十五歳の普選案が連續的に提出され、第二十七議會では、普選案は衆議院を通過したが、貴族院によつて否決された。第四十議會第四十一議會には、納稅資格を二圓ないし五圓に引下げる數種の改正案が提出されたが、納稅資格を三圓とする政府案が兩院を通過した。第一回の總選擧では四十五萬人であつた有權者は、同じ選擧法の下に、この時は百四十萬人に增加してゐたが、納稅資格十圓から三圓への引下げによつて、有權者は三百萬人となつた。

さらに第四十二議會には、二種の普選案が提出せられたが、その討論中に議會は解散された。その結果は、普選を要求する輿論の勃興となり、加藤、山本、清浦の三内閣は、いづれも何らかの形における普選案を議會に提出することが、もはや避け得られぬことを知り、その準備を進めてゐたが、三内閣ともに、これを實行せぬ前に倒壞した。かくて普通選擧法制定の事業は、清浦内閣の倒壞によつて現はれた謂ゆる『護憲内閣』の手に殘された。護憲運動は、衆議院における多數派政黨に基礎をおかない謂ゆる超然内閣、官僚内閣——しかも貴族院の勢力を背景とするところの——の最後のものとしての清浦内閣の倒壞を目的とした運動であつて、謂ゆる護憲内閣は、この運動の勝利によつて生まれた内閣であつた。官僚内閣は、明治維新後の寡頭政治ないしは『有司專制』の政府から、ブルジョアの政權が確立せられるまでの過渡的な政府形態として存してゐたが、ブルジョアジーが政治的

に成熟し、その力を自覺し、自ら支配する自信を得てこれを決意した當年においては、もはや時代錯誤の存在物と見做された。そしてこの戸惑ひのお化を退治することにおいては、ブルジョア二大對立政黨の利害は一致した。そこで政友會、憲政會、革新俱樂部によつて謂ゆる『護憲運動』が起こされ、ブルジョア政黨は『特權打破』『普選斷行』のスローガンによつて、ブルジョア政權の前に立ち塞がらうとする、この舊時代の『殘存物と殘存勢力』とに對して、民衆を動員したのである。かうして、第四十一議會以來、特に普選問題によつて鬪つてゐた二大ブルジョア政黨の協力によつて、普通選擧が遂に實施せられたことは、すこぶる興味がある。

明治初年の參政權運動は、政權から振り落された、、の指導分子の下に、主として、維新の變革によつて舊時代の特權を失つたにすぎない士族と、明治政府の政策にあきたらない地主階級とによつて行はれた。最初の國會には、地主階級が壓倒的に優勢であつた。當時は、商工資本の階級に對して、地主階級の相對的の勢力は、なほ遙るかに大きかつたからである。しかるに後年には、選擧權の擴張を要求する運動の重心は、政治上の特權から除外せられてゐる一般ブルジョア下層中間的な社會層に屬する智識分子などに移つてきた。これはこの運動が、主として都會の運動に變したことによつても知ることができる。

さらに後年になつては、普通選擧は、小ブルジョアと智識分子の要求にとゞまらないで、無產階級の要求をも代表するものとなつた。

(三)

いづれの國においても　たゞ一回の謂ゆるブルジョア革命によつて、全ブルジョアジーの支配が現實せられたことはない。舊專制主義からブルジョアジーの政權の完全な確立を見るまでには、政權は多かれ少なかれ、ブルジョア內部の特權とした、まづその上層部分によつて握られるのが常であつて、ブルジョアジーの生長と成熟とに從つて、この政治上の特權は打破せられ、遂に成熟した全ブルジョアジーの支配が實現せられるものである。『ルイ・フィリップのブルジョア君主制のあとには、たゞブルジョア共和制が現はれるのほかなかつた。即ち、ブルジョアの限られた一部分が、王の名によつて支配してゐたものが、今や全ブルジョアジーが、民衆の名によつて支配しなければならなかつた』(マルクス)。そしてこの『二月革命は、もと〳〵選擧法を改革して、有產階級中の、政治的特權を有するもの〻範圍を擴げようとしたものであつたが、しかし金融貴族の排他的な支配は倒さねばならないものだつた』(マルクス)。かようにブルジョアジーの政權の確立せられる段階にあつては、選擧權の擴張は、ブルジョアジーの階級としての生

長と成熟とに伴ふて、その政權の基礎が、より廣大なブルジョア層の上に擴大され、ブルジョアの一少部分による支配から、全ブルジョアジーの支配が確立され完成せられる過程にほかならぬ。わが國の場合もその通りであつて、第二回の選擧法改正によつて、ブルジョア政黨の基礎は、二倍に擴大した。そしてこの時期が、政黨內閣制がほとんど確立せられんとする時期に一致してゐることは、決して偶然でない。しかるに普通選擧の實施によつて、初めて全ブルジョアジーは、民衆の名によつて支配することができる。

普通選擧の採用は、ブルジョア政黨間の抗爭によつて促進された。ブルジョア政黨は、謂ゆる選擧地盤となつて固定化した勢力の均衡を打破して『局面を展開』し、反對黨を敗つて政權を獲得するためには、いよいよますます廣大な社會層に訴へ、その政爭に、新しい要素を引き込むことが必要であつた。たとへば第四十二議會は、在野黨の提出した普選案の討論中に、普選案を民意に問ふといふ明白な理由をもつて解散された。これがために普選要求の輿論は勃興したにもかゝはらず、總選擧の結果は、却つて政府黨の勝利であつた。そこで在野黨にとつては、現狀を打破するためには、普選を單なるスローガンとするばかりでなく、新しい要素を現實に政爭に引き込むためには、普選を實行することさへも必要であつた。それと同時に、貴族院や樞密院などに殘つてゐる官僚寡頭政治の餘勢に對抗して、ブルジョアジーの政黨政治を確立するためにも、普選の標語によつて、民衆を動員することが必要であつた。

しかしながら支配階級とその政黨をして、普選採用の決意をなさしめたものは、一方においては、自己の支配的實力の自覺と、政權確立の自信であつたと同時に、他方においては、急激に增大した階級對立の威嚇であつた。戰爭中に、飛躍的な發達をしたわが國の資本主義は必然に、階級的利害の對立を激成した。そしてこれは戰後における、勞働運動と農民運動との勃興となつて現はれ、謂ゆる社會思想の勃興となつて現はれ、小ブルジョア層をも含む廣汎にして深刻な社會的不安と動搖となつて現はれた。勞働者と農民の運動は、主として經濟上の階級的利害と階級的意識の範圍內にあるものであつて、當時はなほ政治上の對立にまで發展してはゐなかつた。現に參政權の要求すらも勞働者と農民との、獨立した階級的な運動の形で起こつてはゐなかつた。けれどもこの經濟上の對立と鬪爭とは、當然に、かつ急速に、政治上の對立と鬪爭とに發展するものであつた。

この威嚇は、ブルジョアジーをして、一方においては、その政治勢力の基礎を擴大する必要を感せしめた。他方においては、ブルジョアジーは、新興階級の鬪爭を、合法的な議會主義に導びくことが、最も

安全な水路に導びくものだと考へた。のみならず、普通選擧の採用が、近い將來において、とうてい避くべからざるものだとしたならば、その採用を早やめることは、支配階級にとつて何らの損失をも意味しない。無産大衆の政治意識がなほ幼稚であり、何らの政治上の階級的組織を持たないうちに普選を實施することは、その政治勢力の基礎を全ブルジョア層の上に擴大するばかりでなく、小ブルジョアと無産大衆の最大部分をも、その影響の下に確保し得るからであつた。

ブルジョアジーの支配がその基礎を擴大し、これによつてより強大な政治勢力を結成することは、更らに重要な他の理由によつても、必要缺くべからざることであつた。わが國の資本主義は、歐洲戰爭中に急速な發達をしたばかりでなく、戰時及び戰後の時期を通じて、特に金融資本の勢力に著るしい發達を見た。企業の集中は、今なほ急速に進行してゐるが、少數の中心に集中せられた企業は、いよ〳〵ますます金融資本の支配に歸し、こゝに謂ゆる金融資本主義の時代を現出した。金融資本主義の對外政策は帝國主義であつて、その對內政策は、必然に、被搾取階級に對する極度の反動政治である。わが國の資本主義がなほ上向線上にあることは、今日は何人にも異論のないところであるが、この上向線は、今後における帝國主義的政策の成功の程度によつて、嚴密に制限せられてゐる。かように帝國主義的進出は、戰後におけるわが國資本主義にとつての致命的な必要であつて、かような資本主義的發展とその必要とに照應した政治上の作用は、金融資本の寡頭支配の下に、強大な、反動的帝國主義的ブルジョアジーの政治勢力が結成せられることである。これは一方には、兩勢力とブルジョア政黨の陣容の整理、貴族院、樞密院の完全なブルジョア政黨化などに現はれ、他方には、選擧權の擴大によつて、さらに廣大な基礎を獲得しようと試みてゐる。

かようにブルジョアジーの利害と、その政治勢力の發展といふ見地から見れば、普通選擧の實施は、ブルジョアジーがその政治的指導を擴大し、その政治勢力の基礎を擴大し、一方においては、より廣汎な社會層を支柱としてその上に立ち、他方には、×××な勞働者と農民との勢力を限定し、離隔し、包圍し、孤立せしめることによつて、より安定した、より鞏固な政治勢力の均衡狀態を樹立することを意味してゐる。

支配階級とブルジョア政黨とは、普選による總選擧に對して、まさにかくの如き結果を期待しつゝある。彼らは、三百萬の有權者によつて選出せられたブルジョア議會が、小ブルジョアと無産大衆とを含む一千三百萬の有權者によつて選出せられたブルジョア議會となることによつて、ブルジョアジーの政治勢力は一そう廣大な基礎をもち、一

そう鞏固となり、一そう安定的なものとなることを期待する。それ故に、彼らは、普選の實施とその直接の結果とを指して「昭和維新」と呼び、大衆をして、普選によつて選ばれた新ブルジョア議會を「劃期的」な事實として受け容れしめ、これを民衆の勝利の全收穫物であるかの如く信ぜしめようとするのである。

(四)

けれども普選の意義は、たゞそれだけかと云へば、決してそうでない。普選の實施が、ブルジョアジーにとつて何を意味してをり、どのように利用せられようとも、無產階級にとつては、別個の階級的意義をもつてゐる。わが國の政治史の全頁を通じて、勞働者と農民とすべての被搾取者大衆は、普選による最初の總選擧において、初めて公然の政治勢力として、正式に政治の舞臺に現はれた。わが國の勞働者と農民は、無產政黨の形成によつて、初めて獨立した階級的な政治勢力として結合する一歩を踏み出した。そして普選による最初の總選擧はもはやブルジョア政黨の對立のみによつてゞはなくて、初めて資本主義社會における、二つの主要な階級的勢力の對立によつて行はれた。これはたしかに、劃期的な意義がある。しかしながら、この劃期的な意義は、普選によつて成立する新しい議會に實現され、具體化されるわけではない。それはいま開始せられた政治上の鬪爭の發展と展開とのうちにのみ、實現せられるものである。

普選を成立せしめたものは、ブルジョア政黨自身であつた。大衆の要求と大衆の力とは、その背後に働らいてゐた。ブルジョア政黨が、普選の標語を、大衆動員の手段に利用し得たことが、廣汎な社會層が普選を要求してゐたことを物語つてゐる。しかしながらこの要求は、主としてブルジョア政黨によつて代辯せられてゐた。普選要求の運動は、勞働者と農民と小ブルジョア層との獨立の運動として、ブルジョア政黨に對して組織せられたのではなくて、却つてブルジョア政黨の指導の下に、ブルジョア政黨によつて組織せられた運動であつた。これは爭ふことのできない事實であつて、この事實は、普選の獲得にいたるまでは、そして普選の獲得といふ一點においては、大衆はブルジョア政黨と共に進み得たこと、大衆の政治的要求が、ブルジョア政黨によつても代辯せられ得たことを意味してゐる。そしてこれはまた、政治的發展のこの段階までは、無產大衆の政治的利害とブルジョア政黨の政治的利害とが、充分に分化し盡し、充分に分離し盡してゐなかつたことを意味してゐる。

普選の成立は、この階級的政治的曖昧の終焉であつて、普選による最初の總選擧は、明確な階級的政治的對立にもとづく新たな出發點で

あつた。ブルジョア政黨は、普選獲得の標語によつて、無産大衆を動員することができた。こゝまでは、無産大衆は、ブルジョア政黨の道づれとなることができた。しかしこの不似合ひな道づれは、普選の成立によつて、決定的に終りを告げた。普選の成立によつて、こゝに一千萬人の新たな有權者ができた。この一千萬人によつて表はされてゐる政治勢力の新領域に對しては、ブルジョアジーの政治勢力と無産階級の獨立した政治勢力との間には、たゞ爭奪の戰ひがあるのみである。普選による最初の總選擧は、この戰ひの公然の布告であり、この戰ひの發端であつた。こゝに總選擧の劃期的な意義がある。

これに反してブルジョアジーとその政黨とにとつては、この總選擧によつて成立した新議會――ブルジョアジーの擴大せられた政治勢力と、より安定的な政治上の均衡狀態――そのものが劃期的な事實であり、『昭和維新』の體現なのである。ブルジョアジーは大衆をして、かくの如く信ぜしめようとする。そして大衆をして、この劃期的な事實に滿足してこれを擁護せしめようとするのである。

(五)

しかしながら無産階級にとつては、普選と總選擧との劃期的な意義は、決して最初の普選議會にそのまゝ具體化されるものではない。

普選による最初の總選擧が、新議會における政黨の勢力分野の上に著るしい變化をもたらすものと假定してみても、この變化は、畢竟ブルジョア議會をブルジョア議會たる性質の範圍内において變化するものであつて、この『昭和維新』の成果、『劃期的な事實』が、依然としてブルジョア議會の再現であることは、一點の疑ひがない。

しかるに實際においては、ブルジョア政黨の相對的勢力の上にさへも、果して著しい變化があるかは、すこぶる疑問である。大小四つのブルジョア政黨は、何づれもおの〳〵、自黨の勝利を主張し、より大きくなつて新議會に現はれることを主張してゐるようである。そこでもし、ブルジョア四政黨の期待がいづれも實現せられたなら、日本の下院は定員五百何十名かになるが、ブルジョア政黨の勢力分野には著るしい變化がなく、舊議會をそのまゝ、ただ粗末な擴大鏡で見たのと同じものとなる。

もちろん議員の『顏觸れ』には、相當の變化が豫想せられてゐる。新有權者に訴へる必要は、ブルジョア政黨が候補者を選定する標準の上にも、多少の變化をよぎなくる。かりに普選議會には、これらの『新顏』議員が著るしい多數を占める それはもちろん考へ得られぬが と假定してみても、この新議員によつて、新しい議會が、果してどれだけ新しい性質を帶び來るであらうか。これは甚だ疑はしい。いな反

對に、その影響は極めて微弱であり、或は皆無に近いと見なければならぬ。政黨が、一定の階級的利害を精密に代表するものにまで發達すればするほど、人物本位の色彩を失つて政策本位の團體となり、その統制は鞏固となり、僅かな個人的な差異は、重要を失つてくる。新選出の議員によつて、政友會、民政黨の性質が、著るしい影響を蒙るものとは、もとより考へることはできぬ。現にこれまで、比較的に進歩的な意見を有すると認められた若干の個人が、これらの政黨に加入した結果は、完全にその統制に服從し、その反動主義に同化せられることにほかならぬ。

普選議會に期待することのできる唯一の新しいものは、無産政黨の議員である。從つて、普選議會に何事かを求めるとしたならば、それはたゞ、勞働者と農民によつて選出せられるこれらの議員に對する期待にほかならぬ。

けれども無産政黨が、果して何人の當選者を出し得るかは疑問であつて、無産政黨の現狀と、現行の選擧法とその運用との下においては當選者は勢ひ少數交渉團體の定數に達することさへも、もとより過大な期待とされてゐる。

ブルジョア政黨の獨占する議會に、僅かに十名の無産政黨議員を送ることが出來たにしても、これは大なる成功であり、少なくとも大なる成功への大なる前提であつて、その意義は、決して十名といふ數字によつて代表することはできぬ。けれどもそれと同時に、この少數の勞農議員の議會内における行動に、過大な當面の効果を期待することは過つてゐる。なぜならば、議院において發言の機會を得ることさへも至難であつて、少數の勞農議員にとつては、たゞこの一事でさへも極めて重大な負擔だからである。もし最初の普選議會において、これらの勞農議員が發言の機會をとらへ、そして勞働者と農民と被抑壓大衆の要求——徹底した參政權とこれを行使する完全な自由の要求と、これに對する闘爭の決意の宣言とは、その主もなるものゝ一つである——率直明白な言葉で言ひ表はすことができたなら、勞農議員はその任務を充分に完うしたものとして、吾々はその大なるその努力に感謝すべきである。

（六）

しかしながら議院内における、外觀においては小いさなこの事實は次の如き意味において、極めて重要な意義をもつてゐる。即ち、議院内におけるこの小さな事實は、議院外における大なる事實と繋がつてゐるといふことである。それは議院内において起こつた、孤立した一事實ではなくて、議院外において、全社會の根柢において、進行し

つゝある大なる作用の一端が議院内に現はれたものであり、ブルジョアジーの議院――政治的支配の裝置――内に、その尖端の一つが喰ひ込んだものであるからこそ、極めて重要な意義があり、眞實に劃期的な意義がある。

それ故に、議院外における勞農議員の行動は、議員外に於ける政治鬪爭と緊密に結合され、その有機的な一部分をなす時にのみ、初めて重要な意義を備へてくる。言葉をかへて言へば、議院外における大規模な、活潑有力な大衆的な政治鬪爭の展開によつてのみ、議院内に於ける小なる事實は、初めて大なる意義を持つのである。

この大衆的な政治鬪爭の重要な目標の一つは、徹底した普通選擧の獲得でなければならぬ。この要求は、今日すでに、無産諸政黨の鬪爭目標の一つとなつてはゐるが、この運動は、ブルジョア政黨の與へた普選による最初の總選擧と、最初の普選議會の出現とによつて、さらに新たな出發をしなければならぬ。總選擧の最も重大な意義の一つは謂ゆる普通選擧權の眞性質を、大衆の前に、實物によつて明らかにすることである。それはブルジョアジーとその政黨とが讓歩した政治上の權利と、勞働者と農民と被抑壓大衆の要求する政治上の權利とが、いかに異なるものであるかを、大衆の前に實證する。この活々とした體驗は、直ちに溌剌たる出發點となるべきものである。選擧權は、眞實に選擧權を獲得する大衆的な運動に展開しなければならぬ。

大衆の要求する參政權は、第一に、年齢の低下を要求する。第二には、婦人の政治的權利を剝奪することを許るさない。即ち、婦人の結社の自由と共に、男子と平等な選擧權を要求する。第三には、投票日を、國定の休日とすることを要求する。第四には、供託金の廢止と、無産階級の選擧運動と選擧權の行使とを制限する一切の拘束の撤廢を要求する。第五には、選擧費用を國家が負擔することを要求する。

それと同時に、かような參政權の完全な行使は、たゞに選擧法の改正のみによつて保證せられるものではない。それは言論、出版、集會の自由が保證され、無産者運動を抑壓する一切の法律の撤廢と相俟つて、初めて實現することができる。

かような意味における『徹底普選』獲得の運動によつて、參政權要求の運動は、わが國において、初めて純然たる、勞働者と農民と被抑壓大衆との獨立の運動――ブルジョアジーに對する階級的な運動として現はれる。過去における普選運動は、多かれ少なかれ、ブルジョア政黨によつて組織され指導せられた運動であつた。ブルジョア政黨は普選の標語によつて、無産大衆の利害と要求の一致を示し、その協力の可能を示し、その代辯者たり權利の擁護者たることを示し、これによつて大衆を、自己の利益のために動員すると同時に、普選をもつ

て階級協力の手段にしようとした。無産大衆の普選に對する要求が、かようにブルジョア政黨によつて代辯され、または利用し得られた限りにおいては、大衆は普選獲得のためには、ブルジョア政黨と協力したといふことができる。

しかるに普選の成立は、この協力と、協力の可能との終焉であつて總選擧は、參政權に對する新たな闘爭への出發點であり、それはもはや、ブルジョアジーの一部分によつて獨占せられた政治上の特權が、全ブルジョア層に向つて開放され、ブルジョアジーの一部分による支配が、民衆の名をもつてする全ブルジョアジーの支配に發展し、ブルジョアジーの政治勢力の基礎を擴大し、さらに安定的な基礎の上にこれを置き替へる作用としての參政權の擴張ではなくて、民衆の名による反動的帝國主義ブルジョアジーの支配に對して、無産大衆が政治上の權利を要求する闘爭である。それはもはや、ブルジョアジーの政權の確立と政治的發展の過程のうちに含まれた作用ではなくて、積極的にこれを掘り崩す作用の發端なのである。

學生と選擧運動

新明正道

制限議會は解散によつてその最後の幕を閉ぢ、我等は今や目睫の間に我國最初の普選を迎へやうとしてゐる。一般民衆、殊に今回新たに有權者と成つた一千萬の民衆は、普選に對面して如何なる役割を演ずるものであるか。その態度如何によつて普選の實績が決定されることを考へると、彼等の行動には極めて重大な意義が與へられるのである。かくの如き使命を有する新有權者のなかには、學生も亦た含まれてゐる。從來の規定では官公私立學校の學生や生徒は選擧權を與へられてゐなかつたのであるが、新選擧法では、兵籍に編入せられたものと考へられる特殊な陸海軍直轄の學校、及び高師專門學校の生徒を除くの他、他の條件の具はつてゐる限り、凡ての學生生徒は堂々たる有權者の資格を得るやうに成つたのである。

しかし、學生としての有權者は、選擧法に依つて正當なる公民權を獲得したにも拘らず、その生活の特殊的な狀態に基づいて極めて不利な地位に立たざるを得ない。彼等は、學窓にあつて研究中であるとの理由から、他の一般有權者とは別の取扱ひを受けやうとしてゐる。元來學生の有權者の數は公私立の諸學校を通じて約八千であつて、その數からいへば全有權者に對して格別の意義を有たないものゝやうであるが、彼等の社會群としての有能な働きや更に將來有權者の年齡制限が低められた場合において彼等の獲得すべき勢力を考へて見ると、現在の普選の下における彼等の政治的地位を正當に判定することは頗る重要であり、此れは究極において普選の原理の問題にも接觸するものであると謂はなければならぬ。我等は現在學生の政治的地位について提起せられた諸條件を檢覈して、その正當なる理解を要求する必要が存する。

我等は先づ、學生が單なる有權者として選擧權を行使しやうとする際、既に不利な條件に對面することを指摘せざるを得ないのである。今回の如く投票日が日曜でない場合には、學生がその權利を行使せんがためには學校を缺席せざるを得ない破目に陷いることもあるのである。之に對して、最初、當局は學校を休むことを唯だ正當の理由のある缺席とは認めるが、公休とは認めない態度を採るものゝ如くに傳へられた。しかし、其後の文部省の通牒によると、當局は學生の選擧權行使には努めて便宜を與へる態度を採り、選擧當日投票を妨げるやう

な學校の行事を中止し、試驗日が投票日とかち合ふ場合には一日繰上げるかまたは繰下げることを勸めてゐる。そして投票日（日曜日）は休校となすか、又は有權學生のみに對し投票のため缺席してもそれを出席と見なすか、或ひはその缺席を正當の理由ある缺席と認めるかの取扱ひに關し、文部省では凡て學校當局者に一任することに成つてゐる。缺席の問題は官公立大學においては出缺簿の制度が存在してゐないため、特に考慮すべき餘地は、ないのであるが、高等專門學校程度の學生は、此の條件によつて比較的投票の自由を享有出來ることに成つた。本來投票日は日曜を以て宛てるか、又は當日を休日とすべきであるが、姑息的な今日の如き場合においては、右の如き方針は當然であると謂はなければならぬ。

しかし、此の方針も實際においては約八千の學生有權者に對して十分その權利の行使を保證するものではないのである。我等は茲に學生の住居に關する內務省の解釋を指摘しなければならぬ。二月二日の東京日日新聞に依ると、當局は學生の住居に關して、二つの場合を認めてゐる。一はそれが鄕里に在ると認められる場合であり、一はそれが勉學地に在ると認められる場合である。當局の解釋に依ると、學資の全部又はその半ばを鄕里から受けて休暇に鄕里へ歸省するものは鄕里において投票しなければならない。勉學地において投票なし得る學生は學資の全部を自己の勞働によつて求め休暇には歸省せざるもの、又は學資を鄕里から受けながら妻子と共に同棲するものだけに限られてゐる。しかも、學生が學資を鄕里から受け休暇には歸省するのを常態としてゐる以上、彼等の大多數の住居は鄕里に在るとせられ、勉學地において投票權を行使出來なくなると謂はなければならぬ。勿論、强ひて公民權行使に忠實ならんとせば、勉學地から遙々鄕里へ歸省して投票することは可能である。しかし、これは當局の奬勵しないところである。當局は『歸鄕の上數日間學校を休んで投票する學生に對しては學業に影響せぬやう成るべく見合はしむべく注意する方針である』（一月二十五日、讀賣新聞）と傳へられてゐる。しかし、假令當局が投票のための歸省に對して寬大な態度を採るとしても、結局學生として投票のために態々鄕里へ歸省することは彼等の生活條件から考へて不可能のことに屬する。之に出つて見ると、普選に依つて學生も亦た公民權を獲得したとはいふものゝ、その住居に對して下された解釋は終ひに全く此の權利の實際的な行使を無にして了ふものである。內務省の解釋を以てすると『住居とは從來の選擧資格の條件をなした住所とは異なり居住に必要な設備、卽ちすまゐの場所を持つと解すべきである。學生が大體において父兄の送金によつて生活に必要な設備をなし得てゐるものと認められる場合は原籍地を以てその住居とみなすべきである。』（二月二日、東京日日新聞）住居を以て非現實的なる生活の本據としての住所と區別するのは當然である。現實的な生活の本據、卽ちすまゐの場所は所謂居所である場合が反つて多い。住居とは住所と居所とを一括して出來得る限り國民の公民權享有の可能性を大ならし

めんがために用ひられた言葉であると解釋すべきである。內務省の住居の解釋は之に一致するものの如くであるが、すまゐの場所としての住居の解釋から進んで、學生の住居はそのすまゐに必要な設備が父兄の資源に基づくものであるとして、之を原籍地に移し去らうとするのは、妥當であると謂へやうか。貧困に因らずして公私の救助又は扶助を受ける者には、學生の他、『親戚故舊より體面維持の爲め補助を受くるもの』及び『父兄より扶養を受くる子弟、或は子弟より扶養を受くる父兄其他民法上の家族たると否とを問はず同一世帶內に在る者より扶助を受くる者』等が考へられるのであるが、此等の有權者に就いてその生活の資源を一々究明することは困難であるのみでなく、普選そのものゝ精神において財產の有無が最早何等意義なきものとして排除せられた以上、財產的關係の資格を持ち出すことによつて、有權者の住居を決定せんとするのは矛盾であると謂はなければならぬ。學生の住居は須くその申告に依つて決定すべきものである。彼等が不在投票權を有せざる限り、右の如き措置が最も能くその選擧權を活用せしむる所以であることは明らかである。

學生は既に單なる選擧權者としてかくの如き不利なる地位に置かれてゐるが、その選擧運動に對する關係においては更に甚しい障害を與へられてゐる。新聞紙上に散見する意向を綜合すると、當局では投票は尊重するが、選擧運動は寧ろ禁壓する方針であるやうである。學生の選擧運動は普選實施に依つて頓に熾烈に成るべきことは疑のないことであつて、之に對して當局が禁壓的方針を採らうとするのは、一つは學生が選擧に狂奔するの餘り學業を放擲するにいたるのではないかといふ、一つは左傾候補者の爲めに熱狂的に運動するものが簇出しはしないかといふ憂慮に基づくものであると見ていゝであらう。此等は當局として當然想到すべき事柄ではある。しかし、一般的に選擧法に依つて學生が公然と選被兩權を有する權利者と成つた以上、單に學生なるが故に、その選擧運動を阻止すべきものであらうか。有權者のなかで特殊的な生活條件を有してゐるものは學生のみには限られない。しかも、學生のみにおいて特にその特殊な生活條件を問題とするのは不當である。

學生が、自ら選擧事務長、選擧委員又は選擧事務員と成る場合は勿論、單に第三者として演說又は推薦狀に依る運動をなす場合においても、彼等が運動のために學業の專修をある程度まで放擲するにいたるのは避け難いことである。茲に、學業に從事する學生として、その本務を忘れる者であるといふ非難が投ぜられる。しかし、選擧權を有する國民の大部分が何等かの主要なる本務を有するものであることは當然であつて、彼等が政治的權利を行使する場合に之を閑却せざるを得ないとしても、この故に彼等を咎めることは苛酷である。本務を忘れて政治に奔走するものは全く學生のみではないのである。選擧法に依れば、官吏及び吏員と雖も選被兩權を有してゐる。彼等が其の關係區域外において立候補した場合を考へよ。彼等はその事務官である時に

は當選後辭職しなければならないが、選擧運動には現職のまゝ關係出來るのであつて、當局も亦た之を容認してゐることは、今回の選擧における知事立候補の例に依つて明白である。しかも、此等の官吏及び吏員は國民としては最も重要な本務を有するもの、その彼等が任地を離れ事務を放擲しても差支ないと考へられるならば、學生の如きものに對してのみ特別の拘束を加へるのは偏頗に失するものである。學生の選擧運動が學事を閑却するものとなすのは、從來の選擧法における精神であつて、此の故に『官立公立私立學校の學生生徒』には選被兩權を與へなかつたものである。しかも、現行の規定において此の制限の撤廢されたのは、畢竟學生の選擧運動を一般的に許容したものであるとしか考へられぬ。今日なほ學生の本務と政治との扞格を強調するのは、舊規定の精神を以て新規定のそれを推すことに撞着せざるを得ないものである。更に學生一般の思想を以て矯激であるとしてその選擧運動を抑制しやうとするが如きも、亦た、究極においては、新選擧法の改革的な特長を全く無視するものと謂ふべきではないか。我等は學生の運動が現實において悉く左傾的に流れてゐるといふ事實の認識は別とするも、既に合法的な運動として政治結社が認められ、それが選擧法の規定に準據して運動を成してゐる以上、之に對する取締は既に一般的に確定してゐる筈である。此の取締は既成政黨たると新興政黨たるとを問はず、同等に適用さるべきものであつて、その間に何等の區別を設定すべきものでない。一般有權者はその意志によつて自己の欲するところに從ひ、選擧運動に關係するを得べく、學生も當然その例外たるべきものではない。取締の如きも、學生としてではなく、一般公民としてのみ受くべきものであるとすると、徒らに學生の志向を云々するのは、結局明の場合におけると同樣に、普選の意義を偏見的に解釋する結果に陷いらざるを得ないものであらう。

殊に、我等はかくの如き學生の選擧運動に對する公けの見解が行はれてゐる反面において、實際には學生が盛に、直接運動に關係してゐる事實を目擊する。新選擧法に依つて從來の運動法の随一であつた戸別訪問が禁止され、唯だ第三者の演說又は推薦狀に依る運動のみが許可せられることになつた爲めに、各政黨は勢ひ應援辯士を揃へることに鋭意努力せざるを得なくなつた。一月二十五日の東京朝日新聞によると、政友會では、昨年春から本部と支部が協力して各地に辯士養成の講習會を開いて速成辯士千五百名を各支部に專屬させた。それに本部特派員として約三百名あるが、それでもなほ不足である。結局政友會專屬の辯士は約七千名も必要である。又た民政黨は常備軍として約二百五十名、講習會による速成辯士千七百名を有してゐるが、之を以てしては到底需要に應じ難く、困却してゐるとのことである。かくの如き辯士團の大半が學生から募集されることは謂ふまでもない。早稻田大學學生のみでも三百名、日本大學、明治大學の雄辯會も夫々に應援の申込を受けたといふ有樣である。

此等の學生は恐らく大方選擧權を有つてゐない二十五歲以下の者であると見て大過はない。政治的權利を享有するには餘りに思想の定ま

らない輕擧妄動し易い者とされてゐる二十五歳以下の學生が、選擧の應援演説者として引張り凧であるといふのも奇妙な現象である。候補者が二十五歳以上の年齢制限を必要として肯定しながら、同年齢以下の學生の應援に對して何とも思つてゐないとしたら、滑稽である。しかし、私は今茲で年齢制限の問題に觸れるのが本旨ではない。私は一般に學生の選擧運動に對して取締の意向が當局に存在してゐるにも拘らず、此等の應援辯士の大量的需要の現象が實際において何等制限されてゐないのを不思議と考へるものである。此等の學生が選擧運動に關係するのは毫も政治的な見識や要求に基づいたものではない。某學生は、『旅費とも約十圓から十五圓位で、當選でもすれば祝として百圓から二百圓位くれますが、落選したとなつたらみじめなものです。汽車賃もろく／＼くれないで追拂はれるのですから、政治家つて勝手なものですよ。』と謂つてゐる。此れをその僞らざる告白としてみると、此等の臨時雇ひの學生辯士の運動は、結局生活の必要のための一手段としか考へられぬ。勝手な政治家とは思ひながら、敢へて應援せざるを得ないところに、彼等の悲哀がある。しかし、政治運動の本道から見ると、凡そかくの如き卑劣な、自己の意志と何等の關係のない運動ほど排斥さるべきものはないのである。機械的に口舌を切賣するところに何等政治に對する學生の眞摯な認識も要求も認められないではないか。しかも、かくの如き學生群が今回の選擧においても盛に機械的な活動をし續けてゐるのである。我等はかくの如き盲目的な運動ほど政治に惡影響を及ぼし、又た公權者——彼等が然りとせば——としての學生の本分に背反するものはないと思ふ。彼等は純然たる第三者であるが、その候補者若しくは選擧活動員に對する關係は實際において最も明白に所謂黨派關係に立つてゐるものである。今回の内務省の解釋した演説の取締から見ると、先づ第一に問題と成るのは彼等ではないか。我等は所謂從屬關係に基づく解釋を以て頗る曖昧なる意義を有つものと考へるが、苟くもこの解釋を採らうとしたならば、先づ問題とすべきは此等の學生運動員ではないか。しかも、此等の裏面的に活躍する不純なる學生選擧運動者が問題とされてゐないで、正當な政治的要求と認識に基づいて選擧運動に參加せんとする學生に對して獨り取締が問題とされてゐるのでは、論理的な立場が一貫してゐないと見ざるを得ない。演説商賣的學生の販路が主として既成政黨にある事實を見ると、此の現象が、學生と選擧運動との關係においても、既成政黨のみを特別扱ひする偏見を公示するものであるとみられても仕方がないのである。

要するに、現在の學生と選擧運動との關係についての公的見解には從來の選擧法の根柢をなしてゐた舊解釋がなほ保存されてゐるものである。しかし、此の解釋は根本的に現在の選擧法の眞の意義を減却するものではないか。既に骰子は投げられてゐる。新選擧法が如何なる要求と主張によつて生れ出たかを考へるならば、之を裝ふに舊い解釋を以てしやうとするのは、政治の進化に對する無理解を表はすものであると謂はなければならぬ。學生は修學中の者であるとはいへ、その政治的知識と能力とは決して一般人に劣るものでない。彼等の純眞な行動によつて政治は向上せしめられても、墮落せしめられることはないのである。將來更に選擧權の擴張せらるべき場合を豫想するにつけても、新しく有權者と成つた八千の學生に對して、十分その可能な權利の行使を保證し、又た促進することが必要である。我等は學生の選擧運動に對しては、更に好意的な寛大なる解釋を要求せざるを得ないものである。

無産階級と國際戰線

淡徳三郎

一、國際問題と無産階級の見地

國際問題に關する無産階級の見地は、インタナショナリズムといふ一語を以て要約される。然らばインタナショナリズムとは何を意味し、又それは理論的に如何なる根據の上に立つのであるか？

無産階級が依つて以て立つ所のインタナショナリズムは、美しき空想ではなくて、現實の社會關係の科學的分析の上に基く。マルクスは全國際關係の上より、資本主義的生産關係の發展の傾向を論じて次の如く述べてゐる。

『資本家階級は、あらゆる生産用具（生産手段）の急激なる改良により、限りなく容易にせられた交通により、凡ての國民を、最野蠻の國民を迄、文明の中に引入れてしまふ。

資本家階級の商品の低廉なる價格は、以つて、凡ての『萬里の長城』を粉砕し、以つて、野蠻人の、頑強なる異人嫌惡を征服する所の重砲である。

資本家階級は、凡ての國民をして、彼等が若し滅亡せざらんと欲せば、彼等も亦有産者間の生産様式を採るべく餘儀なくする。

資本家階級は、凡ての國民をして、所謂文明を輸入し即ち自ら資本家となるべく餘儀なくする。一言を以つてせば、資本家階級は、彼自身の形象にかたどつて一の世界を創出する。』

『資本家階級は、世界市場を開拓することによつて、あらゆる國々の生産並に消費をコスモポリタン的に形成してしまつた。』

『諸國民の國民的離隔と對立とは漸次既に、資本家階級の發達と共に、商業自由（自由貿易）、世界市場、大工業的生産の――並にこれに對應する生活關係の――同一性と共に、消滅する。』（Das Kommunistische Manifest）

然し乍らそれにも不拘、實際には、國民的離隔は尚依然として存在を續け、否益々その離隔を鞏固ならしめるかの如くにさへ見える。此の矛盾は何から起り、又如何にして克服され得るか？　此の矛盾は、國民的離隔の物質的根據を消滅せしめつゝあるその同じ資本主義的生産關係の發展に基く。蓋しその發展は必然に獨占の傾向を生み、而して一國に於て支配的地位を占めた資本家階級は、自國の周圍に防壁を

めぐらす事によつて、他國の資本に對してより一層有利に國內無産階級より利潤を搾取する事を得、又その國家權力の背景により後進國に對する誅求を保證されるからである。發展せる資本主義的世界に於ては、自由貿易コスモポリタニズムはもはや諸國の資本家階級の存在と一致し得なくなる。さればこそマルクスは言ふ

『無産者階級の支配は之れら（國民的離隔と對立と）を、なほ一層消滅させるであらう。少くとも文化諸國の協同行動、之れが、無産者階級の解放の第一條件の一である。

一個人の、他個人による掠奪が揚棄せらるゝと同じ程度に、一國民の他國民による掠奪も揚棄せられる。

國民內部に於ける階級對立の沒落と共に、諸國民相互の敵對的地位は沒落する。』（同）

かくて『萬國の勞働者團結せよ！』といふ語を以て表現される無産階級のインタナショナリズムとは、蓋し、資本主義關係それ自身によつてその客觀的基礎を形成せられたる諸國民の融和協力を、現實に齎す所の使命をいふのであり、而してそれは唯無産階級のみが遂行し得べき任務である。何故ならば彼等のみが、その地位の必然により、資本主義社會の胎內に成熟せる新社會の客觀的基礎を、それ自身として發展せしむべき歷史的任務を課せられてゐるからである。而して無産階級は夫々の國に於て、、、、、、、、、、、、、、に上る事によつてこそ、眞實に此の任務を遂行する事が出來るのである。

だが他方に於て、若し無産階級が、國際外交を遂行してゐる支配階級をして、國民的偏見を利用せしめ、一國の勞働者を他國の勞働者に對立せしめて、人民の血を流し、富を破壞せしめる所の行爲を恣にさせるならば、無産階級はその夫々の國に於ける此の歷史的な、、、を果す事は絕對になしえない事となるであらう。

勞働者達は國際的政治のあらゆる秘密を知悉しなければならぬ。彼等は國內政治の狹隘なる範圍に留るべきではない。その政府の外交的行爲を監視しなければならぬ。彼等は必要な場合にはその有するあらゆる力を以て抵抗しなければならぬ。個人の犯した犯罪は處罰するが、國際關係に於ける竊盜、强盜、詐欺は許すといふ樣な狀態は終焉せしめねばならない。かくして無産階級の國內的任務と國際的任務とは密接なる聯關をもつ。國際的任務を無視して國內的任務は果し得ないし、又國內的任務より抽象された單なる國際的協力は遂にキリスト教の人類愛又は人道主義に終らざるを得ない。

インタナショナリズムと國內に於ける、、、、、、、、とは不可分離の觀念である。（註）

（註）社會民衆黨の吉川末次郎氏の『日本無産階級の外交政策の基調』（中央公論昭和二年六月）は此の原理を否定する事にその『基調』をおいてゐられる。氏は言はれる。

『或は言はん、社會主義社會に於ては賃銀制度は無くなり、貨幣制度は亡滅するであらう、と。然し乍ら彼等が現にかくの如き物質的便益を

我等に對して有するに至る、その國民的經濟資源獨占慾の大なる事は依然として打ち續くであらう。』

こゝに於て『國內に於て貧者が富者に反感を抱き、之を倒壞して、富の分配の衡平化されたる社會制度を實現せんとする要求とその行爲化との正當なる事が承認されてあらねばならぬ樣に、その富める國家或は富める共產共同體の經濟的獨占に對する、貧乏國家或は共產共同體の要求とその行爲化、時としては、之を武力鬪爭的形態にもち來す事も、……又等しく正當なる事として承認されてあらねばならぬであらう。』（傍點引用者）

以上の引用によつて明かなるが如く、氏は『彼等』『我等』觀念、換言すれば國民的乃至人種的意識の永久性の理論より出發し、結局に於て、萬國の無產階級の國際的連結を拋棄し、人種的インタナショナリズム（？）に到達されるのである、（曰く『日本の無產政黨は、有力なる世界的大民族、而してそれは日本との合同によつて、世界の何物をも敵となし得るに足る支那國民、並びにその他の全有色人種、全被壓迫民族を糾合して、こゝに眞の國際平和を齎すべき別個の第五インタナショナル組織へ、その陣營を進出せしめなければならないであらう。』）かくて氏に於ては、、、帝國主義に、、する事が問題ではなくて、白色人種を膺懲する事が直接の任務となる。否、その爲には、、帝國主義と協力する事さへ惜しまれない。（この事は氏が問題を取扱ふのに、『、、』といふが如き階級性を抹殺した言葉を使用されるのでも明かだ。）——これは氏の出發點からの必然の道行きではある。だがその出發點（人種的意識永久性の理論）は果して正しかつたか？

否。成程人種的意識が資本家階級に作り出されたものでない事は事實だ。だがそれは資本家階級の成立によつてのみ、『國民的經濟的資本獨占』の基礎とされるに至つたのである事を忘れてはならない。かくて資本家的生產關係の消滅は、同時に又人種的意識が『國民的經濟資源獨占』の基礎たる事を停止する條件を形成せざるを得ない。而して無產階級こそはかゝる任務の現實の遂行者である。あらゆる方法手段によつて、國民的人種的意識が支配階級によつて民衆の頭腦に培養されつゝある現實に於て、此の任務は異常な困難を伴ふ。この困難を克服せんとはせずして、此の困難の前に屈服し、否進んでかゝる偏見を擁護せんとする事——そこにこそ吉川氏等のファシズムへの轉向がある。（第四章第三節註一參照）

二、インタナショナリズムの發展

インタナショナリズムの原則的立場は右によつて明かにされたと思ふが、マルクス主義者は一切の國際問題を右の見地から解剖し、之に理論的實踐的解決を與へる。然し乍らそれは決して原則の機械的適用であつてはならない。マルクス主義者は何よりも現實の具體的分析を重んじる。

さればインタナショナリズムの根本見地は常に同一であるとして

も、その適用は時代と共に異り、又發展せざるを得なかつた。

（一）

先づ此の原則を最初に確立したマルクスの時代に於ては、それは如何様に無產階級の指導原理となつたか？

當時社會主義革命といふ事は未だ現實の問題となつてゐなかつた。西歐社會に於ける當時の中心問題は、封建的遺制の撤去、ブルジョア的國民國家の建設であつた。一八四七——八年全歐洲を席捲した革命の波は實にかゝる目標の下に行はれ、又その後の幾多の戰爭も多くは、被壓迫國民の國民的統一の欲望に起因したのであつた。

所でインタナショナリズムの見地は、之に如何なる態度をとる事を命じたであらうか？これらの革命の徹底的なる支持、被壓迫國民の國民統一運動（波蘭獨立運動、ガルバルジの伊太利獨立運動等）の積極的なる援助こそが、當時のインタナショナリストの、從つて又各國の無產階級の當面の任務とされたのである。國民的障壁を否定する國際主義者が、國民獨立運動を支持するといふのは矛盾ではなからうか？否。蓋し完全なるブルジョア的民主的共和國の中に於てこそ、資本家階級と無產階級との階級鬪爭は最も赤裸々に發現し得るのであり、此の意味に於て民主的共和國は無產階級が、、、、を獲得する爲の、不可避の過渡段階であるからである。（註一）

マルクス主義者は運動の現實を忘れないと共に、しかもその全將來の見透しの上から、その解決を求める。マルクスは一八四八年に次の如く述べてゐる、

『××××者は勞働者階級の直接の目的の達成の爲に、當面の利益の擁護の爲に鬪ふ、然しながら彼等は、現在の運動に於て又此の運動の將來を代表し、之を考慮に入れる。』

『彼等は如何なる瞬間に於ても、勞働者階級の中に、資本家階級と無產者階級との間の敵對的對立の、出來るだけの明確なる認識を注入する事を斷じて中止しない、かくする事によつてドイツの勞働者をして、他の多くの手段と並んで、資本家階級が優越的地位を占めると共に必然的に導入せざるを得ない社會的政治的條件を、資本家階級に向つて逆用せしめ得んが爲であり、又獨逸に於ける反動的諸階級の凋落と共に、資本家階級それ自身に對する鬪爭の開始を可能にせんが爲である。』（das Manifest）

當時マルクスは、萬國の勞働者の團結、協力的活動に、右の如き具體的方向目標を指示した。否、彼はかゝる進歩的意義を有する戰爭をも否定する抽象的な人道主義を強く排斥したのである。かくて一八六五年に成立した第一インタナショナル（國際勞働者協會）の歷史的任務は、第一に、これに加入せる雜多なる革命的分子（無政府主義的、小ブルジョア）と共に、當面の革命的任務の爲の國際的協力の紐帶を形成する事にあつたのであり、かゝる鬪爭の過程を通じてマルクスは、これら雜多なる分子に對立して『勞働者階級の直接の目的の達成の爲』の現在の運動に滿足する事なく、更に『此の運動の全將來』に

對する明確なる見透しを樹立しようとしたのである。（註一）

かくて鬪爭の展開と共にマルクスとプルードン、マルクスとバクーニン、マルクスとラッサルレとの間になされた激烈なる理論鬪爭によつて、無產階級の眞實の變革的理論が次第に明確に樹立されて來た。

（註一）『資本家社會そのものから生ずる鬪爭は、、、、、はれねばならぬ。かゝる、、は說得して片づけられるべきものではない。最善の國家形態とは、社會的矛盾が××によつてのみ解決せられ得る、從つて換言すれば、唯人工的な尤もらしい手段によつて片附けられない形態である。最善の國家形態とは、矛盾が公然たる鬪爭に於て衝突し、かくして解決に到達する所の形態である。』（マルクス、新ライン新聞一八四八年六月二十八日）

（註二）しかし資本主義の勃興期に於ては絕對に正しかつたかゝる戰術を、今日の段階——社會主義的、、、、、——に適用せんとするならば、それは絕對に誤りである。所謂折衷主義者の大衆獲得論はかゝる誤謬に立脚するものと思はれる。

（二）

第一インタナショナルの活動は一八七一年のパリコンミユーンに於て最高潮に達した。就中記憶すべきは、その數ケ月前普佛戰爭の勃發するや（一八七〇年七月十九日）その王朝的性質の故に、（即ちそれはボナパルト家とホーヘンツオルレン家との王朝的野心の衝突であり、何等國民的性質を有してゐない、といふ理由を以て）、各國の戰鬪的勞働者が一齊に之に反對した事である。殊にマルクスを動かしたのは、戰爭の勃發に際して、フランスの勞働者とドイツの勞働者が公然と握手した事であつた。彼はいふ、

『公的フランスと公的ドイツとが兄弟殺しの爭鬪に入つた正しくその時に當つて、フランスの勞働者とドイツの勞働者とが平和と友愛のメッセージを交換したといふ事實、過去の歷史に於て比類なき此の偉大なる事實こそは、よき將來の展望を開くものである。』（第一インタナショナルの宣言——一八七〇年七月二十三日）

だが此の紛亂の中から一八七一年三月パリーに打ち立てられた最初の勞働者國家が、客觀的には經濟的條件が充分に成熟してゐなかつた爲と、主觀的にはその原動力たりし勞働階級の間に、、、、、、が充分に浸透、確立されてゐなかつた爲に（實際そこにはプルードン主義者ブランキスト等が大なる勢力を占めてゐた）、僅に三ケ月にして瓦解するや、次いで到來したものは暗黑の反動時代であつた。かくて公然たる存在としての第一インタナショナルはその後數年にして消滅し、フランスに於てもドイツに於ても、勞働者階級の××的勢力に全く窒息せしめられ、××の波は再び引き退いてしまつた。

それは實際資本主義の『安定』せる時代であつた。此の安定を通して西歐の資本主義は隆々たる發展を遂げていつたのである。だが資本主義的『安定』の進行は同時にその內在的矛盾の發展を意味する。此の內在的矛盾はやがて公然たる矛盾に迄發展せずには居られない。

矛盾は最初勞働組合の急速なる成長となつて發現した。遂に機は成熟し、一八八九年七月十九日バスチーユ占領の百年祭を期して、各國のマルクス主義者の大會がパリーで開かれ、十九ケ國の代表者三百九十九名が出席した。これが即ち第二インタナショナルの誕生となつたのである。

だが我々がこゝで注意しなければならないのは、第一インタナショナルの使命が、成熟せる資本主義が舊政治關係を、、して自らの支配を確立せんとする動亂期に際して、その革命的事業の、、と同時に、眞實の無產階級的任務を確立宣傳する事にあつたとすれば、第二インタナショナルは資本主義の繁榮期に生れたといふ事である。從つてもはやこゝでは諸國の國民的統一運動を促進することはその直接の一般的任務たり得ず、今や社會主義を弘布し、現實に社會主義の勢力を扶殖するといふ事が直接の問題となるに至つた。而して第二インタナショナルは、無政府主義者と完全に分離する事によつて、此の極めて重要且つ有用な仕事を或る程度に於て成就したのである。

だが同時に、それが資本主義の繁榮期に生れたといふ特徴は、これに一つの危險なる道を準備した。それは勞働貴族、勞働官僚の發生であり、之と平和主義的な小ブルジョア的知識階級との結合である。こゝに日和見主義の發生の根據がある。かくて第二インタナショナルの第二の任務は、此の日和見主義に對する果敢なる鬪爭、眞實のマルクス主義を擁護する事でなければならなかつた。而して第二インタナショナルはあらゆる機會を通じて此の任務をも或る程度に於て成し遂げて來たのである。

然し乍ら注意しなければならぬのは、當時これらの活動が、西歐の多くの國に於て、專ら合法的に公然となし得られたといふ事實である。これはこれらの西歐のブルジョア民主的國家に於て資本主義は未だその危機に當面せず、從つて階級對立は尖銳化せず、從つてブルジョアデモクラシーによるブルジョア獨裁が、未だ今日の如く露骨に發現する必要がなかつたといふ事を意味する。此の事は一方に於て、マルクス主義者の活動に對して最も有利なる事情を形成すると共に、他方に於て彼等の間に合法性に對するフェティシズムの思想を培養し、やがて必然に來るべき危機、鬪爭の尖銳化、ブルジョア獨裁の具體的發現、合法性の剝奪の時代に處すへき準備を缺かしめるといふ危險を意味してゐた。第二インタナショナルの中に孕まれてゐた此の危險なる方向が、遂に一九一四年の世界戰爭の勃發と共に、現實となつたのである。

彼等は一八八九年以來一九一二年のバーゼル會議に至る迄約十回に亙る各大會に於て、繰返し〳〵無產階級の正しき國際的任務を決議したにも不拘、一度宣戰が布告され、軍事機關制度が敷かれ、無產階級の國際的任務に關する從來の一切の決議の非合法性が宣告されるや、日和見主義分子は直ちに公然と排外主義に發展し、合法性に對する事物化に陷つた所謂革命的分子は、此危機に對して處すべき任務を理解

せず、空虚なる國際主義の假面の下に、ひたすらに排外主義との妥協を策し、遂にバーゼル大會で宣言せられた正しき國際的任務を裏切り、軍事檢閲に屈服してしまつた。かゝる軍事檢閲こそは、デモクラシーの蔭にかくれたブルジョア獨裁の最も露骨なる表現であるものを。

（三）

第二インタナショナルはかく樣にして崩壞した。

第二インタナショナルの崩壞と共に、理論的にも實踐的にもバーゼル大會の決議を遂行しようとした眞實の左翼は、チンメルワルドに會合し（一九一五年）、次いでキーンタルに會合し（一九一六年）、第二インタナショナルより斷乎として分離し、新インタナショナルを樹立すべきことが決議された。

かくして第二インタナショナルが資本主義の平和的發展期に成長したのに對し、第三インタナショナルは、資本主義の沒落期に面して生れ、こゝにそれは、第一のでもなく、第二のでもない特殊なる具體的任務をもつ。而してそれは一九一九年モスコーに創立された第三インタナショナル第一回大會に於て次の如く規定された。

『新國際勞働者協會（インタナショナル）は、資本主義の××、プロレタリアートの××及び國際ソヴエート共和國の建設、階級の完全なる××、社會主義の實現といふ單純な目的の達成に向つて努力する諸國の勞働者の間の、、、、を組織せんが爲に樹立されたものである。』

嘗て――第二インタナショナルの時代に於て――、資本主義の××といふ事が、それのみが眞實に一切の階級を解放すべき目標としてひろく大衆の間に宣傳弘布せられた。然しそれは未だ現實の問題とはなり得なかつた。然るに今や第三インタナショナルにとつては、これが現實の『行動』の指針となるに至つたのである。

而して資本主義の沒落期に於ける國際的無産階級のかゝる任務の遂行は、唯鐵の意志と訓練とを有する、その目的の爲にすべてを犠牲にし、而して排外主義日和見主義に對して斷乎として鬪爭しうる人々の強固なる組織的結成によつてのみ可能とされるであらう。こゝではもはや共同的鬪爭を通じて段々と白鳥の本體を現してゆくといふ戰術は問題たり得ない。否、論理的には却つてその逆の道行きをさへとらねばならないのである。さればこそレーニンは言ふ。

『インタナショナルは、今日の困難なる時期に於て、、、、によつてその社會主義的國際主義の、、、、、の出來る人々、即ちその、、、ゝして自國の政府及び支配階級に向つて「第二番目に」（ブルジョアジーの挑戰に應じて、といふ意味）××する事の出來る人々の接近――初めは單に精神的の、次いで組織的の接近に至る――に於て成立する。これは樂な仕事ではない。それには充分なる準備と多くの犠牲が必要であり、又屢々失敗をも伴ふ。然し正しくそれが樂な仕事でなければこそ、我々は、なさんと欲する人々のみと之をなすべきであり、社會排外主義者並びにその支持者との完全なる分離に對して躊躇すべき

ではない。」(レーニン『死せる排外主義と生ける社會主義』(一九一四)

(四)

共産黨宣言に於てマルクスが萬國の勞働者に向つて宣言して以來、インタナショナリズムの根本精神は一貫して變らない。然し乍らその具體的任務はその後八十年の間に右の如く變化した。そしてマルクスによつて理論的に見透しとして確立されたものが、今や現實の問題になり來つたのである。

我々は今そういふ時代に當面してゐる。

三、日本無産階級に於ける國際意識の成長

以上に於て私は、無産階級の國際主義(インタナショナリズム)とは何であるか、又それはその國内的任務と如何なる連關をもつものであるかを、並びに特にそれが現在の狀勢の下に於て如何なる具體的形態をとるかを、一般的に略述した。然し乍ら、それが各國の無産階級を把握し、その鬪爭を現實に指導しうる爲には、種々なる内部的、並びに外部的條件を必要とするであらう。

私は次に日本無産階級の國際意識發展の過程を少しく辿つて見たい。

(一)

日本が島國である事、先進資本主義國の虎視眈々たる中に近代的中央集權的資本主義國として成立したといふ事實、國家に關する種々なる、、、、、、、、、、、、、、、、に逆採用されてゐるといふ事——これらの事情が相まつて、日本人の民族意識を特に強度化してゐるといふ事實は、我々が常に忘れてはならない事柄である。此の強固なる民族意識の前に雄々しくも國際的精神の最初の鐘を打ち鳴らしたのは、文獻によれば明治三十四年となつてゐる。即ち同年五月二十日片山、幸徳、木下、河上、西川、安部等によつて創立され、直ちに禁止された社會民主黨の創立宣言の冒頭には、『人種差別の異同に不拘人類は皆同胞なり』といふ主張が掲げられてある。次いで日露の風雲漸く急となるや、内村、幸徳、堺、黒岩等相協力して、萬朝報紙上に各々非戰論を唱へて、當時の民衆を啓蒙した。やがて萬朝報の變節するに及び、堺及び幸徳は平民社を設立し、平民新聞を發刊し、こゝに非戰論の陣を布しく事となつた。

その宣言の一節に曰く、

一、自由、平等、博愛は人生世にある所以の三大要素なり、

一、吾人は人類をして博愛の道を盡さしめんが爲に平和主義を唱導す。故に人種の區別、政體の異同を問はず、世界を擧げて軍備を撤去し、戰爭を禁絶せん事を期す。

かくて打ちつゞく禁止、暴壓の間を屈する事なく勇敢なる啓蒙運動を續けたが、中にも露西亞の社會民主黨との間にメッセージが交換された事、アムステルダムに開かれた第二インタナショナルの第六回大會席上に於てプレハノフと片山潜とが感激の握手を交した事は永久に

忘れる事の出來ぬ事實であらう。

平民新聞より社會民主黨に發せられたメッセージは次の如く述べてゐる。

『(前略)社會主義者の眼中には人種の別なく、地域の別なく、國籍の別なし。諸君と我等とは同志也、兄弟也、姉妹也。斷じて闘ふべきの理あるなし。諸君の敵は、、、に非ず。實に今の所謂、、主義也、、、主義也。我等の敵は、、、に非ず。而して又實に今の所謂、、主義也、、、主義也。然り、、主義と、、主義とは、諸君と我等と共通の敵也。云々』

同紙は約一ヶ年奮闘を續けた後、遂に發行を停止された。

だが右に述べた所によつて明かに察知される如く、當時の國際主義は寧ろ平和主義に近く、勞働者階級の歷史的使命の立場が沒却されてをり、從つてその花々しき國際的運動は、國內的任務と有機的な結合をなしてをらない。然し乍らそれは、當時國內に於ては政府の妨害と相まつて勞働者階級の組織が少しも發展して居らず、他方に於てマルクス主義の理論的把握がなほ極めて幼稚であつた狀勢に於てやむを得なかつた事といはねばならない。それにも不拘、その啓蒙的意義は永久に忘れ難きものであらう。

(二)

次いで幸德事件以來長い反動の時代が到來し、一切の自由なる言論は封鎖された、だが歐洲戰爭以後の駸々たる日本資本主義の發展に伴うて急激に增大した勞働階級は、先進勞働者の思想的影響と、物價騰貴による生活困難の影響の下に、自然發生的に結合し始め、こゝに新しい運動の展開の客觀的基礎が作られていつたのである。

此の間大正四年、五年の兩年に渡り、友愛會の鈴木文治氏二回渡米し、米國の勞働組合の大會に出席し、日本勞働者を代表して挨拶を述べたが、此の事は、反米熱の高かつた當時に於て、日本の勞働者階級を鼓舞し、その國際意識を喚起するに對して、少なからず貢獻する所があつた。それは第一回の渡米後友愛會の會員が、六千五百名より一萬百名に增加し、第二回渡米後更に二萬に增加したのによつても察知せられる。(數字は赤松克麿氏『日本勞働運動發達史』による。)

だが當時の國際意識は、大正三年の世界大戰爭に對しても、大正四年の對支二十一ヶ條要求事件についても、更に大正七年のシベリア出兵に際しても、勞働者階級の立場よりする何ら強力なる運動を起し得なかつた程に低いものであつた。蓋し、未だ客觀的乃至主體的條件が殆ど成熟してゐなかつたのだ。

(三)

日本に於て勞働者階級の間に國際意識を强烈に浸透せしめるに與つて力のあつた最初の重大なる事件は、蓋し大正九年五月二日より始めてメーデー示威運動が行はれる事となつた事であらう。此の日上野公園に參加せる者十五組合五千人、これより以後全國各地に於て、年に增す盛大さを以てメーデーは祝はれ、それは勞働者階級の頭に、國際

的連帶の意識を深く植ゑつける事となつた。

（四）

次いで記憶すべきは、大正十一年のメーデーに於て始めて『勞農ロシア承認』のスローガンが採用せられた事であらう。これより各組合の大會に於て——官業勞働組合に於てすら——、これが議題となるに至つた。又此の頃『前衛社』の發起によつて、『ロシア飢饉救濟』の運動が起され、社會主義諸團體、勞働團體及びブルジョア急進分子の全國的共同戰線によつて非常な成功を收め、更に七月よりは長春に於ける日露交渉を前にして『對露非干涉同盟會』の成立を見た。

十一月にはロシア革命第五週年の記念會が全國各地に催され、雜誌『前衛』『無產階級』及び『勞働新聞』は當日號外を發行した。

これらの事件は相まつて、勞働者の意識に單なる國際的連帶の意識から進んで、國際的解放の任務の自覺を深めるに與つて力があつたと思はれる。

尙啓蒙的文獻としては當時雜誌『前衛』又その後身たる『赤旗』にインタナショナル欄の設けられた事も、注目すべきであらう。

（五）

かく勞働者階級の意識が高まり、殊にロシア革命の成功に刺戟を受けて、未だ當爲的ではあるとはいへ、眞實の意味のインターナショナリズムの目覺ましく滲透されゆくのを見て畏怖した政府は、大正十二年過激法案を提出したのを始め、同年六月所謂共產黨事件を檢擧し、繼いて七月『名古屋共產勞働黨』、十月『群馬青年共產黨』、翌年三月『北野共產黨 L・Y・L團』等の檢擧、震災當時に於×××人並びに社會主義者×××、反動の魔手は至る所に荒れ狂つたのである。

・政府のかゝる狂暴は、意志弱き指導者の一部の意氣を著しく阻喪せしめ、急速にその改良主義的傾向を促進し、又他の一部をして此の極右的傾向との妥協に奔走せしめるに至つた。彼等は先づ妥協して、漸次マルクス主義の『白鳥』の卵を孵化してゆかうといふのであつた。『、、によつて、その社會主義的國際主義の、、、、、、、の出來る人々、即ちその、、、、、して自國の政府及び支配階級に向つて『第二番目に』××する事の出來る人々の精神的、次いでは組織的接近』（レーニン）といふ事は彼等の問題となり得なかつた。世界歷史の新しい時代が決定する此の困難なる（それは日本資本主義の抱合せる封建的政治形態により二重に困難とされてゐる）國際的任務は、彼等日本の『戰闘的』マルクス主義者によつて遂に忘れられてしまつた。

我々はレーニンの言葉をも一度思ひ出そう、

『正しくそれは樂な仕事ではない。それには充分なる準備と多くの犧牲が必要であり、又屢ゝ失敗をも作ふ。然し正しくそれが樂な仕事でなければこそ、我々はなさんと欲する人々のみと之をなすべきである……』

而して大正十三年末頃より果敢に展開された所謂理論的闘爭こそは、此の困難なる任務に對する不可避的の準備の過程である。それは

同じく日本の歷史の必然により强要された協同戰線黨の成立を前にして、又それと同時に行はれねばならなかつたが故に、運動上幾多の混亂を呈したにも不拘、しかも此の準備的事業は着々として成功し、次第にマルクス主義的要素の昂揚展開を見るに至つた。續いて第二回大會以後に於ける勞働農民黨の活動、金融恐慌以來の工代運動、從業員大會、五法案獲得運動を通じて展開されたるマルクス主義的要素の目覺ましき鬪爭は、今や彼等の、單なる精神的接近より進んで組織的接近をも可能とされ得るに到つたのである。

主體的條件のかゝる成熟こそは、今や日本の無產階級が、正しき國際的自覺の上に、「國內政治の狹隘なる範圍にとゞまる事なく、」進んで國際的任務に就き得るに到つた事、單なるインタナショナリズムの啓蒙より、進んでその現實的、、の段階に到り得た事を意味する。

然らば日本の無產階級に、直接に如何なる國際的任務を負擔する事を餘儀なくされてゐるか？

之を論ずる前に私は簡單に、大正十三年以來の此のあわたゞしき方向轉換の過程に、展開された日本無產階級の國際的活動の跡を瞥見しておきたいと思ふ。蓋しすべての運動は過去との連絡なくしてはなし得られないからである。

（六）

大正十三年度に於ては、さして注目すべき事件はなかつた。大正十四年に至つて、支那に於ける勞働者の運動が急速に進展し、遂に上海に於ける南京路事件を機緣として、一大民族的反帝國主義運動を勃發せしめるに至つた事は、日本の無產階級に非常な衝擊を與へた。既にロシアに於て砕けた帝國主義の鎖が今や支那に於て第二の破砕を見るのではあるまいかといふ豫感が本能的に感じられた。

さればこそ當時六月十日東大學生有志の主催になる上海事件批判演說會は警視廳の手で禁止され、更に東大法學部三十番教室に於て支那罷業批判演說會として開かれることゝなつたが、これ亦、、、、が、不穩だ、といふので中止を命ぜられるに至つたが、これは如何に政府が支那勞働者の反抗の國際的意義を、、、、、ゐたかを示すものであらう。

なほ同年五月二十四、五の兩日にわたつて神戶に開かれた評議會創立大會に於て「國際勞働組合提携を提唱するの件」の可決された事も注目に値するであらう。

九月中旬、勞農ロシアの勞働組合代表レプセ氏一行が日本を訪れたが、一行は日本の戰鬪的勞働者階級の熱烈なる歡迎を受け、主要驛には、官憲の禁際をおかして、勞働者が雲集し、日傭勞働者のかたい握手が交された。就中二十七日一行西下の途次、京大社會科學研究會の會員十數名が代表を驛に迎へ、メッセージを手交せんとして、檢束された事、又同じく研究會員鈴木安藏氏が代表の列車にとび入り、大阪迄同行し、京都の勞働者の鬪爭的意志を傳へた事は、未だ世間の記憶に新なる所であらう

なほ本年朝鮮の水害並びに饑饉救濟の一大運動が起された、（尤もこれは單なる同情運動以上に出で得なかつたが）。

續いて日本無產階級運動發展史上の一大記念標たるべき『無產者新聞』が同年九月十五日に發刊されて以來、毎號國際問題に關する啓蒙的記事が掲載されるに至つた事に、無產階級の國際的運動の發展を見る者の忘るべからざる所である。

然しその多くの記事は主として報導的に取扱はれ、日本無產階級運動との具體的聯關は未だ問題となり得なかつたが、就中朝鮮の問題が殆ど取扱はれてゐない事は當時の國際意識がなほ極めて當爲的たりし事を示すものであらう。

大正十五年五月英國に於ける空前の總同盟罷業の勃發は、前年の支那の大罷業と共に、日本の無產階級に再び大なる刺戟を與へ、激勵電報の發送、基金運動などが計畫されたが、當時左右兩翼對立抗爭が激烈を極め、運動方針、運動の分野等安定せず、爲に充分なる運動の展開を見る事が出來なかつた。

（七）

然るに大正十五年末所謂マルクス主義的要素の全線的展開と相まつて、日本無產階級の國際意識も亦目覺ましき進展を遂げるに至つた。

それは直接には、支那國民革命の急速なる進展によつて條件づけられたものである。當時無產者新聞は每號執拗に支那革命の進展を報導し、その意義を啓發し、日本無產階級の任務を明かにした。昭和二年一月より創刊された雑誌『政治批判』第一號には、『支那に注目せよ』（吉川森雄氏）なる論文が掲載され、同誌第二號には『支那國民革命と日本プロレタリアートの戰略』（三田蕭氏）なる論文が發表され、更に雑誌マルクス主義四月號には『支那國民革命と我が無產階級の任務』（阿部俊吉氏）が卷頭を飾つた。又同じく昭和二年二月より雑誌『インタナショナル』が創刊された事は國際意識の發展上極めて重大なる意義をもつてゐる。同誌は殆ど每號支那革命に關する各種の理論的分析を提供し、以て日本無產階級の意識を深めた。

なほ本年支那に於て第二回の會合を開かれる事となつた太平洋勞働會議に對して、日本の勞働組合より代表の派遣されるに至つた事は日本無產階級の最初の具體的な國際過程への進出を意味する。

か樣にして漸く強烈なる國際主義の意識が勞働者階級の間に喚起された狀勢の下に於て、支那革命鎭壓の爲、諸帝國主義列強の軍艦が上海に派遣されたのである。こゝに『支那より手を引け』『對支非干涉』の聲が、勞働大衆それ自身の聲として各地に湧き起つて來た。勞働農民黨と日本勞農黨とは共同して五月六日神田青年會館に對支出兵反對演說會を開き、更にその運動は、中途日勞黨の脫退にも不拘、對支非干涉全國同盟の成立に迄發展した。（五月二十四日）。

（八）

（イ）全國同盟の成立と前後して、田中大將による日本の山東出兵が行はれ、更に六月末より東方會議が開催され、引き續いて第二次出兵が

行はれた。此の間對支非干渉同盟に殆ど寧日なく活動し、數十萬のリーフレット、ニュース、ビラ、ポスターが勞働者農民の間に配布され『日支勞農大衆團結せよ』といふ中心スローガンは工場に農村に、、政府に向つて奮起しつゝあつた勞農大衆の腦裏に強く印刻されるに至つた。以上が對支非干渉同盟の運動の發展の第一段階である。

（ロ）三ヶ月間の强烈なる宣傳運動の結果は、遂に七月二十六日支那視察團派遣運動の提唱となつて結實した。その檄の一節に曰く、

『我々民衆は我々自身の眼と耳で支那の眞相を知らねばならぬと同時に、支那出兵こそは我が國一部支配階級の利益擁護の爲に行はれた全民衆の意志を蹂躪せる行爲なる事を支那民衆に傳へねばならぬ。』

强烈なる宣傳運動の後遂に八月十六日代表選出全國協議會が牛込矢來クラブに開催され、日支勞農大衆の提携を誓つて、勞働者、青年、朝鮮、水平社、俸給生活者、婦人、市民、學生各層より夫々一二名宛の代表者が決定され、これによつて勞働者の國際的關心は異常に喚起されたのであつた。就中注意すべきは次いで八月二十六日の出發を前にして、『支那勞農大衆に訴ふ』『、、、、、、、』等のメッセージが諸處の團體に於て作成され、これが代表に託された事である。前者は主として『對支出兵は日本、、、、の意志ではない』といふ事を強調したものであり、後者は、派遣軍兵士が酷暑と風土の關係から猛烈なる傳染病に苦しめられてゐる事に同情し、、、、、、、、かを反問したものである。出發當日若しくは前日より代表の悉くが檢束、拘留若しくは禁足されたので、渡支の目的は果さなかつたが、その宣傳的意義は永久に沒却されるべきではない。

以上が對支非干渉同盟の運動の發展の第二段階とも稱し得られるであらう。

（ハ）次いで九月二十五日、、侵略反對デーが實行された。十數萬のビラ、ポスターが主要工場に配布されたが、既に滿洲の排日運動が鎭壓されてしまつてゐた爲か、視察團の際程の反響をよび起さなかつた。

此の頃より朝鮮京城に所謂朝鮮共產黨事件公判が開始され（九月十三日）、全市の警官一千名動員され、法院構内、、、、、、、、、、らさると報ぜられ、九月十五日の第二回公判以後は傍聽さへも禁止された。此の事件は全朝鮮の民衆の注意の的となつてゐたが、當局の此の態度は強く朝鮮民衆を刺戟し、日本に於ては關東在住有志の朝鮮人の手で九月十七日『朝鮮總督、、政治反對關東地方同盟』が組織され、以來解散檢束、拘留に屈する事なく、ビラ、演說會等の運動が續けられてゐる。對支非干渉同盟は直ちに之と共同委員會を形成し、暗黑公判公開を叫び、大阪では前記二團體の外、勞農黨、評議會、婦人、青年外數團體の共同委員會が形成され、これを機として從來殆ど存却されてゐた朝鮮問題に關する注意が猛然と喚起された。

九月二十五日には右關東地方同盟主催、勞農黨後援の下に、演說會が開かれ此の時には解散と共に大示威運動が行はれ、續いて、、、、、事件が曝露されるに及び、朝鮮の問題は應現實の問題として、日本

の勞働者の間に問題とされるに至つた。

最近の日本無産階級の國際意識が、支那の問題より發展して、朝鮮の問題をも問題として具體的にとり上げ得る迄に至つた事は、それが抽象的な當爲主義より、數歩前進せる事を意味するものである。

（三）日本無産階級の國際意識は、對支非干渉同盟の不撓不屈の努力により、遂にさるロシア革命十週年記念の運動を機として更に一大飛躍をなしたといふ事が出來る。運動の詳細なる記述は餘り最近の事であるからこゝには省く。詳しくは無産者新聞十月五日より、十一月十五日に至る各號を研究されたい。

此の運動のスローガンは次の如きものであつた。『勞働者と農民の國ロシアを守れ』『支那の民族解放運動を支持せよ』『植民地の、、政治を廢止せよ』『帝國主義戰爭の危機と鬪へ』

此の運動は、支那より朝鮮にと、今や、漸く具體化し來りつゝある日本無産階級の國際的運動に、その世界的任務の明確なる意識を浸透せしめたる點に於て重大なる意義をもつものである。

以上の如き日本無産階級の國際的運動の發展は、マルクス主義的要素の昂揚展開の主體的條件の成熟と相まつて、今や、彼等が、眞實のインタナショナリズムの見地より、その國際的任務を、單なる啓蒙的運動としてゞはなく、一の大衆的運動として、現實に遂行しうるに至つた事を意味するものである。

四、日本無産階級の國際的任務

然らば日本無産階級の國際的任務は何か？

それは既に一般的には、第一章に於て述べた資本主義の現段階に於て國際無産階級に共通に課せられた任務によつて規定されてゐる。然し此の一般的任務それ自身も亦、その根本的立脚地は同じであるとしても、特殊なる世界形勢に面して、特殊なる規定を受けねばならぬ。

世界無産階級の當面の任務は何か？

（一）當面の國際的情勢

今日の國際情勢の主たる特徴は、一方に於ては帝國主義諸列強とサヴエート聯盟との關係が、他方に於ては支那に對する帝國主義の軍事的干渉が、極度に緊張してゐる事にある。

帝國主義とサヴエート聯盟との關係の緊張は何に基くか？それは一方に於て、最近、合衆國、日本に於てのみならず、戰爭によつて弱められた歐羅巴に於ても、資本主義が經濟的にも政治的にも強大になつて來たにも不拘、他方に於ては、サヴエート聯盟に於ける社會主義的建設が益々大なる成功を收め、支那國民革命が益々發展し、植民地民族の反抗が益々激成され、且つ歐羅巴のプロレタリア大衆が著しく左傾化しつゝあるといふ事實に基く。

各國の資本主義の經濟的政治的安定の、並びにサヴエート聯盟の強大化の具體的事實については、本書に於て他の諸家が詳しい記述をさ

れるといふ事であるから、こゝには說かぬ。兎もあれ、帝國主義國にとつて、サヴエート聯盟といふ忌はしき存在が消え失せてしまふ迄は、その安定は決して確固たりといふ事は出來ない。しかもサヴエート聯盟は隆々として成長し、諸國の解放運動に對して強力なる××的影響を及ぼしつゝあるではないか——こゝに最近の對立の特相がある。

又此の點に十月革命後に於ける帝國主義國とサヴエートロシアとの對立の尖鋭化と、今日のそれとの間の本質的相違がある。蓋し當時にあつては、世界戰爭並びにそれに續く諸國の革命の勃發によつて弱められ、荒廢した資本主義が、新たに生れた、同じく、弱々しい、未だ強國となつてゐないプロレタリア國家に對して打擊を與へる事が問題であつたのであり、又その後に於ける對立は主として經濟的競爭の形態をとつてゐたのであつた。

全く性質を異にした、此の二個の安定せる力——その對立は今或る程度に於て均衡關係を示してゐる

帝國主義的戰線の側に於てロカルノ以來種々なる安全保障條約によつて、特には英國のサヴエート包圍政策によつて、帝國主義諸國間に、ルーズではあるが、一種の對露的聯盟が形成され、サヴエート聯盟に對する共通の利害により、相互の間の政治的對立が緩和されてゐるにも不拘、此の安定は何に基くのであるか？それは第一には、各國の勞働者階級の勞農ロシアに對する信賴が益々強まつてゐる事、第二は、各國の並びに植民地國の勤勞大衆の勞農ロシアに對する同情と支持の念が愈々高まりつゝある事、而して第三には、特に西歐の小市民の間に於て、未だ遠からざる世界大戰の苦惱の記憶生々しく、非戰的氣分が濃厚な事、——に基く。

だが此の均衡を破らんとする力は、今日二つの方向に於て働いてゐる。

第一は、沒落の過程にある英帝國の狂氣じみたサヴエート聯盟に對する挑戰である。北京大使館搜索、アルコス・ハウス事件、英露斷交、ポーランド公使暗殺事件、等々に現れた英帝國のあせり氣味を見よ。だが均衡を破らんとする此の努力は、サヴエート聯盟の一貫した平和政策により、見事に失敗してしまつた。しかしそれが完全に失敗してしまつたといふ保證は與へられてゐない。更に英國は數倍の努力を以て此の平和を攪亂せんとする挑戰的活動を開始せんが爲、國內的、國際的準備を進めてゐる。最近に於ける保守黨の全政策の基調はこゝにおかれてゐる。

此の國際政局の均衡關係を破壞すべき第二の力は、支那革命の進展である。支那革命の完全なる成功は、帝國主義諸國の利潤の源泉を奪ひ、更に又その影響を廣汎なる他の被壓迫民族に及ぼす事により、今日の帝國主義的支配の體系を破壞する事によつて、當面の均衡關係をサヴエート聯盟に有利に展開する力である。さればこそこゝに列國の狂暴なる對支軍事干涉、反革命軍閥の買收、露支連絡の遮斷が、露骨

に開始されてゐるのだ。だがそれにも不拘、支那革命は内部的に益々と勞働者並びに貧農大衆の間に確固たる根を張り、やがてそれは公然たる爆發に迄突進せずにはおかないであらう。

以上が今日の國際的情勢の基本的様相である。

（詳しくは、『インタナショナル』十一月號並びに十二月中旬發行される豫定になつてゐる同誌十二月號を參照されたし。）

（二） 世界無産階級の國際的任務

かゝる情勢に面して、サヴエート聯盟擁護の爲に闘ふ事は國際勞働者階級の絶對的な任務である。而してかゝる任務の遂行は、勞働者階級の國内的闘爭の遂行と密接不可離の關係に立つ。

スターリンは言ふ、

『世界の資本家がサヴエート聯盟を粉碎してしまつたらどうなるか？

『暗黒の反動が全資本家國並びに植民地國を襲ふであらう。勞働者階級と植民地民族は粉碎されるであらう。國際マルクス主義の地位はぶち破られるであらう。

『世界のプロレタリアートのサヴエート聯盟に對する支持と同情とが増加し、成長するならば何が起るか？これはサヴエート聯盟に於ける社會主義建設を容易ならしめるであらう。

『サヴエート聯盟に於ける社會主義建設が成就されてゆくならば何が起るか？

『それは各國に於て資本主義と闘爭してゐるプロレタリアの地位を進展せしめるであらう、それはプロレタリアートに對する國際資本主義の地位を弱め……我々の國際的勝利の機會を最高度に増すであらう。』（一九二六年、十二月、E・C・C・Iに於ける演説）

右の如き萬國の無産階級の根本的任務は、直ちにその具體的任務を規定する。即ち均衡破壞の第一の因素である、英帝國を盟主とするサヴエート聯盟に對する挑戰に向つて斷乎として闘爭する事、これ第一の任務である。

均衡破壞の第二の因素である支那革命運動を擁護し、之を妨害するあらゆる試みに對して抵抗する事、これ第二の任務である。

此の二つの任務は、不和といふ點だけから見れば、一見矛盾してゐる様に見える。だが眞實のインタナショナリズムが何であるかを、從つて無産階級が當面する根本的任務が何であるかを知る者は、それが決して矛盾ではなく、國際勞働者階級の歴史的使命の下に統一されてゐる事を知るであらう。

だが均衡關係は何れかの方向に於て、否、恐らくは、先に分析された二つの因素の相互に錯雜せる作用に於て、やがて必然に爆發せずにはおかないであらう——戰爭！帝國主義者のあらゆる欺瞞と虚構にも不拘、それは不可避的な將來である。我々は此の必然性に眼を背けてはならぬ。來るべき戰爭を豫知し、之に對する觀念的、組織的準備をなす事——これ國際勞働者階級に課せられた逼迫せる任務である。

（註）

（註）切迫せる戰爭の危機及び、戰爭に對する準備の具體的な戰術については、左の論文を參照されたい。

『當面の國際情勢』インタナショナル十一月號所載。

『世界戰爭の危機』インタナショナル八月號所載。たほこれは「レーニン主義と戰爭問題」なる單行本の中にも收められてゐる。（共生閣發行）。

『戰爭論』マルクス主義講座第二卷所載（上野書店刊）

（三）日本無產階級の國際的地位並びにその任務

日本無產階級の國際的任務は第一章に於て述べたインタナショナリズムの根本精神に於て、又右に述べた國際無產階級に課せられた當面の任務によつて規定されるのであるが、更にそれが如何なる形態で遂行され得るかは、彼等が占める直接の國際的地位によつて定められねばならぬ。而して後者は又日本帝國主義が全國際的體系に於て占める地位によつて規定せられる。

然らば日本帝國主義の國際的地位は如何？

之を理解する爲に我々は、日本帝國主義の內部的性質そのものについての考察から出發しなければならぬ。之に關して一部の人々によつて日本資本主義の安定が頻りに强調されてゐる。然り、日本の資本主義が經濟的には安定を示し、政治的には封建的遺制と巧妙に結びつく事により、無產階級に對して壓倒的な優勢を示してゐる事は瞭然たる事實である。**然し乍ら問題は此の安定が如何なる性質をもつた安定であるかにある。**勿論論者も資本主義的安定がもつ不可避的た內在的矛盾については**一應語る事は忘れない。**だが彼等にとつては『そんな事はわかり切つた事』なのである。かくて此の『不可避的な』矛盾が特に日本の資本主義に於て如何なる性質をもつてゐるか、**我々は此の矛盾を如何にして公然たる矛盾に迄發展せしめ得るか、は遂に彼等の問題となり得ない。**

日本資本主義の安定に孕まれた矛盾の特殊性を規定する事實は、安定そのものが據つて立つ日本資本主義の基礎が極めて薄弱な事にある。日本の資本主義の根本的弱點をなすものはそれが近代工業たる重工業及び機械工業の基礎を缺いてゐる事にある。ヴアルガはかゝる日本資本主義の特質を規定していふ、

『それは、人工的にこれ迄作りあげて來た所の、そして極めて低廉な勞働力と植民地、、、、、、の上に立つてゐる所の、著しく投機的性質を帶びてゐる資本主義である。そしてこれこそ戰後の日本の資本主義が恐慌に次ぐ恐慌に遭遇する所以である、』と。（ヴアルガ一九二七年第一半期に於ける經濟及び經濟政策）

かくて日本資本主義の安定の據て以て立つ所の基礎は第一に、國內勞働者の勞働力の低廉なる事であり、第二に、植民地、、、、、、、、、、であり、第三に、植民地並びに支那滿蒙の資源及び市場支配である。

かくの如き分析は日本資本主義の所謂安定が如何に不安定な基礎の上にあるものであるかを示すものであり、又それが外部的事情によつて如何に、、し易き地位にあるかを示すものである。

こゝに日本帝國主義の外交政策の根本的立脚地は次の如く規定せられる。

第一、隆々たる社會主義的建設の進行によつて日本の無產階級の成長に異常なる刺戟を與へてゐるサヴエート・ロシアの克服。

第二、既有植民地並びに勢力範圍――滿洲――の無條件的防衞。

第三、支那革命の窒息。

かゝる外交方針の基調は、だが他の帝國主義列強と日本帝國主義との對立を決して妨げるものではない。何故ならば諸帝國主義諸國は反サヴエート政策並びに支那革命の窒息といふ點に於ては共通の利害を有するが、支那の分割といふ點に於ては利害は全く相對立するからである。かくして支那革命窒息政策の成功しえられる限りに於て、又その成功の程度に於て、特に日英米の對立が尖鋭化してくる。こゝに

第四、他の帝國主義的競爭國、特に英國に對抗して、支那の同情をかちえんが爲に、それがブルジョア的範圍に止まる限りに於て、支那國民革命運動を支持するといふ巧妙なる政策が生まれる。、、、、、、、との緊密なる結合は、かゝる外交方針の具體的なる表現である。

第五に、同時に日本は、英米に對して強力なる軍備を準備し、又此の見地に於て國際外交を日本の有利に展開しなければならぬ。

これに對應すべき日本無產階級の國際的任務は次の如くであらう。

第一、日本無產階級は、特に東方に於ける反サヴエート政策反民族運動の支柱たるべき日本政府の對露外交並びに對支外交に嚴重なる監視を行はねばならぬ。

第二、日本無產階級は、、、、、、、、、、、、の勞農大衆と緊密なる結合を結ばねばならぬ。

以上は日本政府の外交方針の第一、第二、第三及び第四、に應ずるものである。（これらの任務について、これ以上の具體的な規定に立ち入り得ざる事を遺憾とする。）

第三、日本無產階級は勿論萬國の無產階級と結合しなければならないが、就中米國の戰鬪的無產階級との堅き結合は、今や意識的にその具體的な實現の爲に努力しなければならない所である。（註）

これは日本政府の外交方針の第五に應ずるものである。

か樣な任務が正しきインタナショナリズムの精神に於て遂行せられる時、日本無產階級は、一方に於て、反サヴエート戰爭並びに帝國主義戰爭の危機と戰ひ得ると共に、戰爭勃發の場合に、之を無產階級の有利に轉化し得るであらうし、他方に於て日本資本主義の安定それ自身の據つて以て立つ基礎を××××××事になるであらう。

（註）日本無產階級とアメリカの無產階級との具體的な結合については從來餘り注意せられなかつた。だが日米の對立が、隱然として尖鋭化し

てゐる事は事實である。かの排日問題の如き、兩者の基本的對立の一側の現象形態であらうと思はれる。支配階級は戰爭の本質を蔽ひ、金融資本の掠奪戰に全民衆を動員せんが爲に、屢ゝ民衆の偏見を利用し得る樣な問題をとらへる。日本の帝國主義者が國民性に關する日本民衆の、、、迷信を利用すると同じく、アメリカの帝國主義者は人種的偏見を利用する。かゝる偏見、かゝる、、は、資本主義組織の續く限り支配階級によつて意識的に存續を强ひられるであらう。無產者階級が支配的地位に上り、資本主義的關係を揚棄する事によつてのみ、かゝる偏見、迷信も亦揚棄されるであらう。（第一章註參照）日本無產階級はアメリカの無產階級と協力して、排日問題によつて民衆の好戰熱をそゝり、民衆の生活破綻の責任を逃れ、或は戰爭の侵略的性質を隱さんとする政府の、、に向つて戰はねばならぬ。

排日問題、移民問題の具體的な分析については、筆者は更に別の機會に詳しく試みたいと思つてゐる。

附記　紙數の制限上、すべての問題が極めて概括的にしか取扱はれ得なかつた事を遺憾とする。なほ、日本に於ける種々なる外交理論の批判、國內に於ける大衆的な國際運動の戰術、（特に無產階級の國際的任務遂行に當りての農民その他の諸層との關係）等は、殘されたる重要な問題である。

追記――本稿は約一ヶ月前に書かれたものであり、その後廣東に於けるサヴエート政權の樹立、露支斷交等の新なる國際的事件の進展があつたが、然しそれらの事件はこゝに展開されたる國際狀勢の一般的方向を益々確證にこそすれ、何らそれを修正すべきものではないと思ふから、暫くそのまゝに發表する事とする。

なほ上に日本資本主義の安定を論ずるに當り、筆者は主として國際的觀點より之を見たので、日本の人口の厖大なる部分を形成してゐる農民大衆が今日なほ封建的土地關係の下に縛られてゐるといふ重要なる事實を書きぬかしてしまつたが、これは右の國際的事情と相まつて日本資本主義の基礎を二重に薄弱ならしめるものである。誤解なからしめんが爲に附加へておく。

（一九二七、一二、三〇校正に際して）

アリストテレースの『流通の正義』＝マルクスの其解釋に關する疑（其三）

附 河上博士等譯資本論中或重要なる不正確又は誤謬について

福田徳三

（十三）

ウエラー及びヒルデンブランドの擧げた兩個の論據の第一は、主として文義解釋に屬するものであるが、其の第二は、單なる文義解釋に屬せず、直ちに、アリストテレース研究の本體に進入するものである。從て、其第一については、極めて、簡單に、而して、其第二については、やゝ立入つて、吟味しなくてはならぬのである。

第一の論據は、グラント氏と相並んで、アリストテレース倫理學註釋家として、權威と認められてゐるバーネットも、其の第三の正義別

在否認論の根據となすところである。即ち、氏は、問題の一句を釋いていふ『これら並にこれにつゞく言葉は、正義には、他に猶ほ一つの種類、即ち、『匡正の正義』があるのみであること、而して、それは、不任意の諸行爲（これを先づ論ずる）に適用せらるゝのみでなく、同時にまた、任意の諸行爲（諸取引）（これについては、一一三一頁三b三十行以下を見よ）にも適用することを、意味してゐる。以下、私の註釋は、如何に、私が、第三の『エイドス』（交換的又は流通的正義）なるものを、認むるを避くるかを、示めすであらう』と。（アリストテレース倫理學註解倫敦一九〇〇年刊第二一三頁。原名前に出づ）

さて、右ウエラー、ヒルデンブランド、グラント並にバーネット四

學者の文義釋解に對向する反對論は、前掲ノイマン氏の論あるに先つてすでに若干の有名なる學者が唱道してゐるところであつて、私は、ノイマン氏の引用を辿つて、其一々について、新たに商量して見た。其先づ第一に來るものは、中世の有力なる法學者、法理哲學者サムエル・プフエンドルフ1)である。プフエンドルフの說を承繼し、更らに自說を樹たものは、自然法學者、哲學史家たるトレンデレンブルヒ2)である。降つては、フェヒナー氏あり、(書名前出) またプラントル氏(書名前出)がある。

私は、今此等先學學者の所論を一々茲に引用する必要を認めぬ。唯だ、其等を一括したノイマン教授の言を、其儘引くを以て足ると信ずる。教授曰く『此の第一の論據に對しては次の如く答ふるを以て足れりとする。(此一句のみに就て見れば、論者の解の通りであるに相違ないけれども)直ちに其れにつゞく句に於いて、アリストテレースは、これと全く意味を異にすることを、明かに言明して居る。而して、(これは、ア氏の書に於いては決して稀ならざるところであつて)殊に彼は、其の所論の取扱材料の分類、配合に於いては、議論の進行に從ひ甚だ屢々訂正や修正を試むるものであることを鑑みるときは、(此の文義解釋論は)敢へて重きを置くに足らぬものである』と。(前掲論文五三四頁)

1) Samuelis Pufendorfii, De Jure Naturae et Gentium. Libri octo cum annotatis Joannis Nicolas Hertii. Editio nova. Francfurti 1706 p. 120 et seq. Lib. I. Cap. VII. § 12 et seq.

2) A. Trendelenburg,

a) Naturrecht auf dem Grunde der Ethik. 2. Ausgeführte Aufl. Leipzig 1868. § 51.—

b) Historische Beiträge zur Philosophie. Bd. III. 1867. p. 408 ff. Die aristotelische Begriffsbestimmung und Eintheilung der Gerechtigkeit.

因に云ふ、前者は商大書館本(II—2—630)があるが、これは故左右田博士が、其最後の大手術を、受けらるゝに際し、此度は必生を期し難ければ、入院記念にもと、他の數十種の愛藏書と共に、商大へ寄附せられたものにかゝると聞く。

b)の一本も、私はこれを、また、博士渡歐後彼地より將齎して未だ解包に及ばなかつた書中に、これを見出した。

私は、兩書とも、別にこれを見るを得たものではあるが、故博士の遺書中に、博士近時の研究に直接には縁遠しと思はるゝ此等兩書とも、これを見出して、博士の鑽の如何に廣汎なものであつたかを

追想して、感慨實に禁ずべからざるを覺ゆるものである。

第二の論據は、右樣に簡單に取扱ふことを許さない。問題は、實に、アリストテレースの狹義の正義論の全體に亘つてゐるのである。從つて、先づ、狹義の正義論の大要を知つての後でなければ、此の論據の支持すべきであるか無いかの吟味を下すことが出來ない。タトヘ、假りに、それを試みるとしても、讀者は、容易に、それを受入れることは出來ないであらう。

高橋教授の論文の、到底常人の理解し得ざる底のものである所以は、狹義の正義論其ものゝ解説の支離滅裂より來るものなるを鑑みなければならぬ。否、氏は、ア氏の正義論其ものを、果して、理解して居らるゝものなりや、否や甚だ疑しいのである。

ソコデ、私は、第二の論據の吟味を、姑く後段に譲ることとして、茲に、極めて、簡單に、アリストテレースの狹義の正義論の大要を紹介しようと思ふのである。

(十四)

其れを爲すに先つて、ア氏の正義論殊に其の狹義の正義論は、如何に有力に、中世より近世に至る歐羅巴の法理哲學、並に其れに立脚する經濟學說殊に經濟價値・價格論に重要なる影響を及ぼしたものであるかを一言して置かねばならぬ、マルクスは決して、前人を飛躍して、アリストテレースを發見したものではない。否、彼は、此等の中世並に近世の先覺諸學者の示唆を得たればこそ、其の發見に到達することを得たものと云はねばならぬ。此は決して、彼の學績を小ならしめる所以ではない。却つて、反對に、彼の尋討の範圍の如何に廣汎であつたかを窺知せしめるに足ることなのである。前段本誌一月號八一―八七頁に、私が、河上博士譯本並に高畠氏譯本から、其全文を引いて置いたマルクスのアリストテレース評論には、此等諸先覺學者の名を擧げず、直ちに、アリストテレースの說のみをあげてあるからとて、マルクスは、單にアリストテレースのみに就いて商量したものなりと速斷するは、謬れるの甚しいものである。

高橋氏は、私が、マルクスから此の長い引用を爲したのを、同氏に對する駁論の爲めと速斷して居られるようである。高橋氏の誤謬を示めす爲めには、其樣な勞を執る必要は、毫もない。右引用は私の此の小さかな論文の中心問題とする所なるが故にこそ。私は、長き引用を敢てしたのである。高橋氏の自尊心の過大なる、私の論文の組み立てかたをさへ諒解せらるゝことを妨げたものと見へる。

(十五)

アリストテレースを、最も深く究めた中世の學者は、中世最大の哲學者であり、中世のアリストテレースの稱を、最も適切に値するトマソ・ダクヰノであることは、言ふまでもな

私は、從來此名を、トマス・ダキノと訓じ來つたが、一昨年の夏親しくアクヰノ村を訪れて、土地の人々が、一樣にアクヰノと發音することを知つた。故に今原發音に從つて、本文の如く改める

いところである。トマソの師アルベルトスは、其出藍の弟子によつて、全く掩はれて仕舞つたと云つても大過はない。（高橋氏は、此關係箇所に於いて、同氏論文三一頁以下）アルベルトスをあげて、トマソには、一言も及んで居らぬ。而も、其アルベルトス說としてあげて居らるゝ一節は、アルベルトス說でも何でもない。其れは、全然ヘリオドロスのパラフラシスを、其儘にアルベルトスが紹介したに過ぎないのである。遼東の豕とは、まさに、此くの如きことを言ふのではあるまいか。）

トマソ・ダクヰノが、アリストテレースの正義論を取扱つたものに、二大雄篇がある、其一は、ア氏のニコマホース倫理學の註釋書であり、其二は、トマソの最大著作たる『神學綜覽』第二部第二篇中に於ける正義論である。

右二書の原名は、左の通りである。

1) In X Libros Ethicorum ad Nicomachum Commentarimm. Liber Quintus. DeJustitia et Injustitia, de Jure et Injuria, ac ipsarum speciebus, de Aequitate, et Aequo. (Doctoris Angelici divi Thomae Aquinatis Opera Omnia. Studio ac Labore Stanislai Eduardi Fretué. Vol. XXV. In Aristotelis Stagiritae Libros Nonnulos Commentaria IV. Parisiis 1875. pp. 430 et seq.)

此書は一二六六年頃の起草にかゝるものであつて、單行本としての刊本は、不幸にして私は見ることが出來ないけれども、トマソの全集版本には何れも收錄されてゐる。即ちローマ版（法王ピウス第五世刊と稱する一五七〇—一五七一年刊行のもの）の第五卷。パルマ版（一八五二—七三年刊）の第二十一卷第一頁以下。ヴイヴエス版（フレッテー編纂一八七一—一八八〇年刊第一版、一八八九—九〇年刊第二版、共に巴里刊行）の第二十五卷第一二三一頁以下に收めてある。トマソ全集の最新にして最完全と認められる法王レオネ版（これを羅馬第二回版と通稱す。一八八二に刊行を始め爾來年を閲する四十五年餘の今日に至るも未だ刊了となつてないのである。）には、未だ收錄の運びとなつてゐない、私が插架のものは、此文起草中入手し得た巴里刊ヴイエス第一版である。仍て其版によつて頁を揭出する。

2) Sancti Thomae Aquinatis Opera Omnia iussu impensaque Leonis XIII P. M. edita Tomus Nonus. Secunda Secundae Summae Theologiae a Quaestione LVII ad Quaestionem CXXII ad Codices Manuscriptos Vaticanos exacta cum Commentarus Thomae de Vio Caietani cura et Studio Fratrum eiusdem ordinis. Romae 1897. pp. 9 et seq.

トマソ一生の最大著述たる此の『神學綜覽』は一二六七年から一二七三年に亘つて起稿せられたもので、此書は諸全集版は勿論、單行本としても、實に無數の刊本が現存通行してゐる。私が插架のもの丈けでも、恐らく十種以上に及んでゐるであらう。而して、佛語譯は、私の

知るところ丈けでも四種あり、今現に續刊中の新譯本もある。英譯はツヒ近年全部刊了し、續いて訂正再版が刊行せられつゝある。ドイツ譯はシュナイダー氏の獨譯本が一種あるのみで、其本は、今日の進步した學問の要求には應じ難く思はれる。

私は、英譯が未だ全然顯はれなかつた（而して佛譯の一本も見るを得なかつた）今から二十餘年前に、ドイツ獨譯本とアシュレー氏の英國經濟史中の叙述と各種の部分的紹介とを賴りとして、此書中の『ユストム・プレチウム』並に『ウズラ』に關する部分について、若干考證して『トマス・ダキノの經濟學說』なる一篇を公けにしたことがあるが、（今「經濟學全集」に收む）當時は、原文を讀みこなす力もなく、見ることを得た關係文獻も、極めて貧弱なものであつて、今日の進步したトマソ研究の立場から回顧するときは、實に隔世の感を禁じ得ないのである。其後高橋誠一郎教授門下の某氏が、主として、トマソの利子論を研究せられた基督教徵利論考とか題する有益の研究が公刊せられたそうであるが、私は不幸にして、其書を見ることを得ない。高橋教授も亦一二の論文を、此問題について公表して居られるようであるが全く未見に屬する。

私が右に揭げたのは、前揭の最新のトマソ全集たる羅馬第二回版（レオネ版）の書名と其頁數とである。

玆に問題となる「神學綜覽」の第二部第二篇は、一二七一年から一二七二年に亘つて起草せられたもので、其れは、右レオネ版以外の全集では、羅馬第一回版の第十一卷、パルマ版の第三卷第一頁、以下、ヴイヴェス版の第三卷第七一頁以下に收められてある。

今巴里ルチエリュー版「神學綜覽」一覽表 Summae Theologicae Synopsis Sumptibus P. Lethielleux Parisiis 1924 によつて、關係部分の要目をあぐれば左の如くである。

神學綜覽　第二部第二篇

人間行爲各論

一、信仰について　（自一問　至十六問）
二、希望について　（自十七問　至二十二問）
三、慈愛について　（自二十三問　至四十六問）
四、節制について　（自四十七問　至五十六問）
五、正義について　（自五十七問　至百二十二問）

（下　略）

而して、五の正義については、左の如く分たれてゐる。

（第一）正義其ものについて　（自五十七問　至六十問）
（第二）正義の部分について　（自六十一問　至百二十問）
（第三）敬神の賜について　（百二十一問）
（第四）正義の敎訓について　（百二十二問）

而して、第一は更らに左の通りに分れる。

(其一)權利について、(第五十七問)

(第二)一般の正義について、特殊の正義について、(第五十八問)

(其三)不正義について、(第五十九問)

(其四)、裁判について、(第六十問)

更らに第二は左の如く分れる。

(其一)正義の種類、即ち、『配分の正義』と『流通の正義』とについて(自六十一問至七十八問)

(其二)正義の准全的部分について(七十九問)

(其三)正義の活動部分、即ち附屬的諸德について(自八十問至百二十問)

私の問題とするところに、最も關係の深いのは、右の中其一である。これは次の如くに分たれてある。

(一)正義の主觀的部分について。此れについて考ふ可き點二あり。

(A)正義の部分其もの。(六十一六十二問)

(B)正義の反對の諸惡。(六十三至七十八問)

(A)は、左の如く分つ。

甲 流通の正義と、配分の正義との區別について。(第六十一問)

乙 流通の正義の行爲として見たるレスチュチオーネ(補償)について。(第六十二問)

(B)は左の如く分つ。

(甲)配分の正義の反對たる諸惡。即ち人格の揀擇について。(第六十三問)

(乙)流通の正義の反對たる諸惡。之れを不任意的・任意的の二に分つ。

(イ)不任意的。

(天)行爲による。(六十四問至六十六問)、

(地)言語による。(六十七問至七十六問)

(ロ)任意的。

(天)賣買に於ける諸々の非行(詐欺)(七十七問)

(地)貸借に於ける ウズラ(不法利得)。(七十八問)

トマソの『神學綜覽』に於ける正義論は、其のア氏倫理學註釋と密接に關聯するものである。後者は一二六六年起草、前者は、其第二部第二篇は、一二七一年から翌七二年にかけて起稿せられたものであつて、云はゞ後者は前者の爲めの準備研究であつたのである。從て、我々は、前者を見て、トマソ其人の正義論を知り得るのみならず、これによりて、アリストテレース解釋に、著しい援助を與へられるものである。トマソの此書を顧みることなくして、アリストテレースを究め

んとするは、抑も徒勞である。

トマソ以後四百年の間は、別に見るべきものは顯はれなかつたが、十七世紀に至つて、少くとも、五人の大學者が、何れも、或は詳に、或は略に、アリストテレースの正義論に立脚して、自家の正義論を披瀝して居る。其五人とは、(一)フランシス・ベーコン(二)ウゴーグロチウス(三)トマス・ホッブス(四)サムエル・プフェンドルフ(五)ゴットフリード・ヴキルヘルム・ライブニッツこれである。其正義論をのせた書の原名は、左の通りである。出來る丈け、私の挿架のものについて、當該箇所の頁數を示して錄く。

(1) Francisci Baronis de Verulamio, De Dignitate et Augmentis Scientiarum. 1623. Liber Octavus: Exemplum Tractatus de Justitia Universali, sive de Fontibus Juris in uno titulo, per Aphorismos.
(The Works of Francis Bacon collected and edited by J. Spedding & D. D. Heath. Vol. I. p. 803 et seq. London 1857.)

(2) Hugonis Grotii, De Jure belli et pacis. Libri tres. 1625. Accompanied by an abridged translation by W. Whewell with the notes of the Author, Barbeyrac, and others. Cambridge Vol. I. p. 6 et seq.

(3) Thomas Hobbes, Leviathan or the matter, forme, & power of a Common-Wealth ecclesiastical & Civill. London. 1651. Chap. 15. p. 75 et seq.

(4) Samuelis Pufendorfii, De Jure naturae et gentium. p. 120. Lib. I. Cap. VII. §12 et seq. (斷輯)

(5) G. W. Leibniz,
Codex juris gentium diplomaticus 1693. (Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz herausg. v. C. I. Gerhardt. 7 Bde. Berlin 1875. Bd. III. p. 386 et seq.)

(十六)

以下、私は、右等諸學者の所論を吟味し、更らに、アリストテレースに溯つて商討したところに基いて、出來るだけ、分り易く、アリストテレースの正義論、殊に、其の狹義の正義論の大要を、紹介して見る。讀者は、此部分を、高橋氏論文の(九)(十)(十一)の三節(三十一頁央から四十三頁央まで)と對照せられんことを希つて置く。—以下、頁は、ベッカーに據り、節別は、ツエルに據つてあげる。—

今、私が問題とするところに關するアリストテレースの論はベッカ

Ｉ頁では、一一二九ａ第一行から、一一三四頁ａ第十六行までにのせてある。而して今日通行の章別であるツエルの分ち方に從へば、其全體は、五章に分たれてゐる。ベッカーに從へば、九章と三行に分たれてゐる。其章の要旨を、題目に略して示めすと、左の如くである。

第五篇

第一章　緒論。正義の德を考察する方法論。正義と不正義との別。（自一一二九ａ至一一三〇ａ第十四行）

第二章　狹義の正義の本體とその諸性質。（自一一三〇ａ第十四行至一一三一ａ第九行）

第三章　分配の正義　（自一一三一ａ第十行至一一三二ａ第二十四行）

第四章　匡正の正義　（自一一三二ａ第二十四行至一一三二ａ第二十行）

第五章　流通の正義　（自一一三二ｂ第二十一行至一一三四ｂ第十六行）

第一章　緒論。

正義とは、諸藝術、諸科學または諸技能のやうに、二つの相對立した行爲を兼備するものではない。藝術や技能に於ては、相對立した二つの行爲が兼ね含まれてゐる。例へば、醫師には善き醫師（名醫）あり惡しき醫師（庸醫）あり、樂師には善き樂師（名手）あり、惡しき樂師（凡手）がある。しかし、其孰れも、均しく醫師であり、樂師であることに於いて異るところなしと認められるのである。正義に於ては然らず、善き正義、惡しき正義の兩者の併存することは許されない。德としての正義は、常に必ず統一した諸の行爲でなければならぬので、其反對を併せ容るゝ餘地はないのである。從つて、正義の反對から、正義其ものを見極め、一の對抗の諸々の種類によつて、他の對抗の諸々の種類を論究することが出來るのである。此の研究方法によつて我々は、正義の諸特徴を限定し、從つて正義の概念は、これを、鮮明に捕捉することが出來る。

ソコデ、アリストテレースは、正義の反對極として、通俗に認められてゐる『不正義』を取り來り、其れを吟味することによつて、正義其ものゝ概念を明かにする出立點を得可しとする。

通俗の世に於いては、同一の語を以つて、種々異なつたものを、兼ね言顯はすことが屢々ある。例へば κλεῖς（クレース）と云ふ語は、『頸骨』の意にも、又た『鍵』の意にも用られてゐる。其と同樣に、『不正義』と云ふ語も、色々異つたことを、併せ稱するに用られてゐる。其中に、二つの大別を下すことが出來る。即ち一は、παράνομος（パラノモス）（法律を踰越する者、違背する者）で、他は、πλεονέκτης（プレオネクテース）（横領する者、不法利得を占むる者）これである。從つて其不正義の反對たる正義とは（一）法律を遵奉する者（二）ἴσος（イソス）（均等、即ち過多にも過少にも、受授せざる者）。

此の『イソス』と云ふ語は、後に、マルクスのアリストテレース解釋を吟味するに方つて重要の關係を有つ語であることを、豫め斷つて置く。而して、河上博士等譯本中の或重要なる不正確又は誤謬は、此語にも、また、關聯を有つ。

の二つを、併せ含む。

乍去、速斷してはならぬ、『プレオネクテス』とはすべての不均等を指して云ふのであつて、單に、より多く取り、並に、より多く與ふることのみを意味するのではない。何となれば、他人に與ふるよりもより少く、自己に損を與ふる者は、それによつて、其のより少く損した諸財丈けは、利益を享けたと同様であるから、其れは、やはり不均等ἄνισος(アニソス)を取てしたものに外ならないから。(此點トレデレンブルヒ及びフエヒナーの訓讀に從ふ。)

(十七)

從つて、プレオネクテス(横領)とアニソス(不均等)とは、全く同一事に歸着するのである。今アリストテレースの意を汲んで、これを分り易く、表示すれば、左の通りとなる。(自一一二九b第六行至同第十一行)

不正義
一、パラノモス(法律蹂越 παράνομος)
二、プレオネクテス(横領) πλεονέκτης 即ち アニソス(不均等) ἄνισος

不均等
一、プレオン。アガソン πλέον ἀγαθῶν μεῖον(過多の利を占む)
二、メイオン。カコン、μεῖον κακῶν(過少の損にて済ます)

(第十一行の『兩者に共通である περιέχει καὶ κοινόν』の解き方、バーネット(二〇七頁)及フエヒナー(二八頁)に從ふ。但し、此點學者間に異論がある)

ソコデ、グラント氏は直ちに、分類を、次ぎの如くに下してゐる。(前掲書一〇〇頁)

正義
一、法律尊奉=廣義の正義
二、イソス(均等)=狹義の正義

不正義
一、法律蹂越=廣義の不正義
二、不均等=狹義の不正義

而して、氏は不正義を分つて、(一)法律蹂越(二)多くを貪る(三)不均等(過少の損)の三となすのは、ア氏の意を正しく解するものでなく、而して其れは、正義を(一)法律尊奉(二)均等の二となすに照應してゐないから、許さるべきでないと主張してゐる。

流通の正義を、第三の正義と認むべきか否かの見解の相違は、抑も、此の劈頭の一條に對する解釋の一定してゐないことに存すると、私は思ふ。而して、私は、前掲の表を次ぎの如く、集約することによつて、アリストテレースの考へ方は、最も正しく言ひ表はされるのではあ

るまいかと考へつゝある。

- 正義 δίκαιον
  - 一、法律遵奉＝廣義の正義 νόμιμον（ノミモン）
  - 二、均等＝狹義の正義 ἴσον（イソン）
    - 一、過多の利を占めず
    - 二、過少の損にて濟まさず
- 不正義 ἄδικον
  - 一、法律踰越＝廣義の不正義 παράνομον（パラノモン）
  - 二、横領即不均等 ἄνισον（アニソン）
    - 一、過多の利を占む
    - 二、過少の損にて濟ます

（ツエラー希臘人の哲學第二の二・第六四一頁註二・同所の引用諸書參照）

ソコデ、廣義の正義を問題外に置き、狹義の正義のみについて云ふときは、ツエラーの示した通り。

正　義　＝　均等
不正義　＝　不均等

δίκαιον（ヂカイオン）＝ ἴσον（イソン）
ἀδίκαιον（アヂカイオン）＝ ἄνισον（アニソン）

と云ふことに歸着する。而してアリストテレースの正義論の要點は、實に茲に存すると思ふ。

彼はいふ。『法律を踰越するものは、不正を行ふものであり、法律を遵奉する者は正義を行ふ者であるから、すべての法律遵守行爲は、或る意味に於ては、正義の行爲である。何となれば、立法によつて規定せられた諸々の行爲は、法律遵守の行爲であつて、其一つ一つは正義の行爲であると云ひ得るから。』

彼は續けていふ。

『法律の規定は、其すべてに於いて、凡そ權力を有つもの、または、それと同種のものゝ一切又は其内の最善なるものゝ、共同の利益を以つて目的とする。從つて、或意味に於ては、我々は、『ポリテイア』（國家、政治團體）の爲めに、幸福と其構成分とを産み出し並びにこれを維持すべき諸行爲を、正義の行爲と呼ぶのである。』（中略）

『此の形ちに於ける正義は、渾一なる德である。しかし、其れは、絶對的ではなく、吾人の隣人との相對關係に於いて、渾一なる德であるのである。從つて正義は、屢々、諸德中其の最大なるものと考へられる。（中略）然り、其れは、其の最も十分なる意味に於いて、渾一なる德であるのである。何となれば、其れは、渾一なる德の現實の執行であるから。其れは、渾一である。何となれば、此れを有つ人は其の德を彼れ自らに於いて行ひ得るのみでなく、（πρὸς αὐτόν）（プロス アウトン）其の隣人に

對しても、また、行ひ得るから（プロス ヘテロン πρὸς ἕτερον）。多くの人は、自分の事柄に於いて德を行ひ得るも、隣人との關係に於いて、これを行ひ得ない。此の故に、『統治は人の本體を現はす』てふビアスの言は眞なりと考へられる。何となれば、統治者は、必然的に他人と關渉せざるを得ず、また一、社會の成員たらざるを得ないから。同じ道理によつて、諸々の德の內、正義のみ獨り、（他人の善（アロトリオン アガトン ἀλλότριον ἀγαθόν）なりと考へられる。何となれば、其は、我が隣人に關渉するもので、一の統治者なり、又は一の仲間たる他人に取つて利あることを爲すものであるから。ソコデ、最惡の人とは其の惡行を、已れ自らに對しても、また他人に對しても、行ふ人の謂であるが、最善の人とは、其の德行を已れに對して爲す人の謂でなく、これを、他人に對して爲す人の謂である。何となれば、其れは、六ケ敷ことであるから。

されば、此意味に於いての正義は、德の一部分ではなく、其の全體である。其反對に、不正義は、惡の一部分ではなく、惡其もの丶全體である。此意味に於ける德と正義との間に於ける區別如何は以上言つたことで、明瞭である。兩者は同じものであるが、其の本體（エイナイ εἶναι）は同じものではない。隣人との關係として見るとき、正義であるものは、限定なき狀態の或る種類としては、（グラント氏解。單に心の一狀態として見るときは）德であるのである。以上、一一二九 b より一一三〇 a 央までを全譯す。譯文は、ロッス氏の英譯を賴りとして、ア氏の原文について、之れを作つた。

（十八）

ブラウン氏は、此最後の一節を解釋して、次の意であると云ふ。『德と廣義の正義とは、實質的には、同じものであるが、其の存在の態容に於いては異るものである。言葉を換へて云へば、同一の慣行は、これを絕對的に考察するときは、德と名けられ、相對的の一義務として考察するときは、廣義の正義と名けられるのである』と。前用書一二〇頁註

グラント氏の解釋に曰く、『玆に用られた論理的形式は、再び、第六篇第八章一節に於いて用られてゐる。卽ち、智慧と政治とは、同一の心の狀態であるが、其の本質は異なつたものと概念せられてゐる。（中略）此の二つの場合に於いて、『兩者は同じものである、唯だ其の『エイナイ』（本質）は異る』と云ふのは、其の結果は同じであるが、其の本體的性質、其の原因、ドイツ語で云へば、グルンド・ベグリッフ（根本概念）は異ると云ふ意味と解せねばならぬ。卽ち、廣義に於ける正義についての第一の觀念は、之れが、一の關係であると云ふことこれてある。德についての第一の觀念は、心の規制といふことである。（中略）

プラトーンは、正義を論ずるに方つて、先づ、ソフキスト的概念を一掃し、而して正義は、人間的制度のみによるものでなく、其れよりも遙かに多く、人間精神の本質によるものなるを證明した。かくて、彼は、正義を以て、心其ものに於ける、正しい均衡なりとの定義を以て、其論を結んだ。アリストテレースの出立點は其れとは異り、高橋氏論文三一—二頁にいふ。『即ち彼（ア氏）は這般の概念をプラトーンより受けて、之れを完成せるなり(cf. Legs. VI 757)』と。私は、氏の無造作にして、餘りに素朴的なるに驚く。恐らく何人かの『獨斷妄價』なる一句を氏は『周到ならざる注意』を以て、其儘に轉寫せられたのではあるまいか？　正義とは、政治的動物としての人間の本質の發展から生じ來るものなりと前提してゐる。また、政治的諸制度には、絶對的であつて假設的でない或るものありと前提してゐる。（第五篇第七章自一至五節）かくて、殘る唯一の問題は、正義其ものの正確な限界は、何であるか、これである。これに對する答は、次ぎの如くである。我々は、正義を最も廣義に解して、他人との關渉に於ける正しき行爲の一切を含むものとすることも出來るし、又は狹義に解して、すべての種類の財産及び利益に關係しての正しい行爲なりとすることも出來る」と。前出書一〇四頁

しかるに、茲に、バーネット氏は、廣義の正義、狹義の正義の別を認むべきでないと主張する。曰く、『正義は、善の一切であり、全一なる善であるが故に、渾一なのである。其れは、獨り善の所有のみでなく、其の使用であるから、渾一なのである。其れは、プロス・エテロン（他人の爲めにする）であるから、渾一なのである』二〇八頁　而して、氏は、他の所に於いて、次ぎの如く斷じてゐる。『我々は、アリストテレースの體系の一部として『廣義及狹義の正義』の區別を設けてはならぬ。アリトテレースは、唯だ、例によつて、言葉の適用を狹めるによつて、論題を鮮明ならしめたにすぎない』と。二〇六頁

私は、多數の學者の通説に反して、バーネット氏が、廣狹兩義正義區別論を斥けて、ア氏は、單に、其の推論の範圍を、漸次に狹めて論點を中心の問題に集中したものにすぎないと主張することの、むしろア氏の眞を得るに近いものではないかと考へざるを得ないものである。何となれば、ア氏は、其の正義論に於いては德の一切と全く一致するてふ意に於ける廣義の正義に關する一切の論究を、問題外に措くことを明言し、所謂狹義の正義のみに就いて論ずることが、主要の考究であると、明瞭に斷言してゐるから。若しも、廣義、狹義の區別が、ア氏の正義論の體系に於いて、本格的のものであるならば、單に、問題外に措くなどとせず、其れについて、立入つて論究すべき筈と思ふ。

然るに、全く其事のないのは、唯だ論題を漸次中心の問題に集中したが爲めと見る方が、無理の少い解釋であらうと思はれる。

乍去、バーネット氏の見解は、多數の學者の執らざるところである。(ツエラー 前掲書六四〇頁以下。殊に六四一頁註二 ノイマン 前掲書五三二頁 ブラウン 前掲書一一九頁以下 グラント 前掲書一〇四頁 フエヒナー 前掲書二九頁以下 等(英譯者ロッス氏もまた其内に算入すべきであらう)) 何れも廣狹兩義の別を認めてゐる。唯其の内フエヒナーは、ニコマホース倫理學の此廣義の正義の概念は、『大倫理學』(一の三三、ベッカー頁一一九三b第十二行)に於ける其れとは、著しく異ることを指摘して、綿密に考證してゐる。(前掲書二九頁以下) 其大意は、ニコマホース倫理の廣義の正義は、『他人の爲めに』(プロス・エテロン)を本質とするに反し、『大倫理學』に於いては、却て『己れに從つて』(カ・サウトン καθ' αὑτόν)を以て本質としてゐて、兩者全く相容れずと云ふにある。從つて、フエヒナーは、ニコマホース倫理と大倫理とは、決して同一人の筆になるものでない一の有力の證據茲に在りと主張してゐるのである(三〇頁)。

(十九)

私は、心窃かに、バーネットの明快な此の斷案に同感を禁じ得ないこと右述ぶるが如くではあるが、殊に難解な此一條(第五篇の全體は、古來難解を以つて知られてゐるが、就中此の第一章の末項については、學者間に、異説が甚だ多いのである)について、多數説を捨て丶、バーネット氏に與する資格も勇氣も有たぬものである。故に、後日はイザ知らず今日に於いては、多數説に從つて、ア氏に廣狹兩義の別あるものとして、吟味を進める外はない。但し、私の當面の問題とするところについては、其孰れの見解に從ふも、何等の差違は起らないことを斷つて置かねばならぬ。

即ち、孰れの説に從ふとするも、ア氏正義論の中心問題は、より狹く限定せられた正義であつて、渾一なる德としてのより廣い意義に於ける正義ではないのである。

ソコデ、問題は、著しく單純化せられる。即ち、私の當面の問題に關する限りに於いては、ア氏の正義とは、前出の表を左の如く、單純化したものを指して云ふのである。

正義(ヂカイオン δίκαιον) ＝ 均等(イソン ἴσον)

不正義(アヂカイオン ἄδικον) ＝ 不均等(アニソン ἄνισον)

即ち、ツエラーの左の留の通りである。

『倫理と政治とは、密接な結合を有つものであるから、政治的團體の維持が直接に其上に立脚する德のことは、特に考察せねばならぬ。乍去、アリストテレースは、(玆では)正義の概念を、廣義に解して、人間共同生活に關する德の全體を指すものとせず(一一二九a第十七行、第二十五行。一一三〇a第八行、同b第十八行)これを、狹義に解して、諸財の分配に關する德、即ち利益と損失との配分に於ける正しき中庸又は正しき比率を守ることとなしてゐるのである』(前揭書六四〇頁)

ツエラーは、更らに、其脚註(六四一頁)に於いていふ、『(此意味に於て)正義は、諸財の所有に於いて過多・過少といふことの起り得るもの丶間にのみ存することである。卽ち人間に於けるは、其れである、(其反對に)諸財の所有について何等の制限を被らざるものたち、例へば、神々の間に於いて、又は、諸財を所有する力なきものたち、例へば、醫すべからざる惡人たち、等の如きについては、正義なるものは、存し得ないのである』(一一三七a第二十六行)

かくて、ア氏の第五篇第一章は、考察の方法を確定し、正義と不正義とを辨別するによつて、正義の本質を究明し、終りに、問題の中心に考察を集中すべく、一切渾一の德としての正義の考察を簡單に試みたる後、人間共同生活に關する德の全體でなく、其一部分たる利益と損失との配分に於ける中庸、卽ち正しき比率の遵守としての正義を以て論題とすることを明かにしてゐるのである。(高橋氏論文(三二頁)には、此一條を極めて無造作に次ぎの如く書き下してある。『普通的正義は善人の念とするすべてのものに關するものにして、特殊的正義は名譽、貨幣、安全等すべて利得より生ずる快樂を動機とするものに關するものなり』と。問題の眞相は其れでは少しも分らぬ。)

(二十)

第二章 狹義の正義の本體とその諸性質

グラント氏は。此章を三つに分つて見る可しと云つてゐる。(前揭書一〇四頁) 卽ち、(一)狹義の不正義の存在を證明し、其れは主として財貨(財産又は金錢)に關するものであることを說き、更らに、これから推論して、其反對なる狹義の正義の存在を明かにす(ツエルの分類の第一節至第六節。一一三〇a第十四行至同b第五行)(二)廣義の正義は、本論に於いて問題とせざることを明かにす(同上第七節至第十一節。一一三〇b第七行至一一三〇b第二十九行)(三)狹義の正義を分つて配分の正義と匡正の正義の二とす(同上、第十二節至第十三節一一三〇b第三十行至一一三一a第九行)これである。

今、グラント氏の分け方に從つて、順次に吟味して見よう。

先づ、ア氏の原文を、出來るだけ、忠實に、左に譯出する。

「然し、兎に角、我々が考察せんとするところは、德の一部分たる正義である。我々は、此くの如き種類の正義の存することを主張する。我々は、また、同時に、同じ樣に狹められた意味に於ける不正義をも考察せんとする。

此くの如きものゝ存することは、次ぎの事實によつて示される。樣々な惡事を行ふ者でも、必ずしも、貪慾の非行を犯すものでないものがある。例へば、怯惰の爲めに、武器を捨てゝ逃去るもの、惡癖の爲めに惡口雜言を吐くもの、吝なる爲め友人を助く可く金錢を與へざるものなどの如きこれである。反對に、また、貪慾な行爲を犯す者にして、此等の非行の何れをも冐さないものもある。(中略)

されば、廣く解した不正義の一部分にしか該當せぬ不正義の一種があるわけであつて、從つて、法律違反てふ廣い意味に解した不正の一部にしか該當せぬ意味で、不正なる語が用られることがあるのである。

更らに、同じく姦通の罪を犯すものでも、其或ものは、利益の爲めに、これを犯し、それによつて、金錢を得、他の或ものは、淫慾に驅られて、これを犯し其爲めに、却つて金錢を失ひ、または、刑罰に處せられるとせよ。後者は、貪慾者と云ふよりも、むしろ、不節制者と考へられるであらうが、前者は不正者であるが、不節制者とは見られないであらう。從つて、前者は、其の淫行によつて、金錢上の利益を得た故を以て、不正者たることは明かである。

更らにまた、すべての他の不正行爲は、例外なく、夫れ〴〵或る特殊の罪惡に歸せられる。例へば、姦通は、不節制の罪惡に、戰爭に於いて、僚友を捨てゝ逃去する者は、卑怯の罪惡に、暴力は憤怒の罪惡に、歸せられるが如き、これである。然るに、金錢上の利益を得るものは、其行爲は、或る特定の罪惡に歸せられず、直ちに不正義其ものに歸せられる。

從つて、廣く解した不正義と區別せらるべき、狹義特定の不正義なるものがあることは明かである。而して、其れは、廣く解した不正義と其名稱並びに性質を同くする。何となれば、其の定義は、同一の種類に屬するから。此の二つとも、其の意義は、自己の隣人に對する關係に於いて存するものである。しかし、一は、名譽、又は、財貨、又は安全──若くは、此れらすべてを含むところのもの(若しこれに對し單一の名稱があれば、其れ)──に關するものであつて、

而して、其の動機は、利益から生じ來るところの快樂にある、他は、其反對に善き人に、關係あるすべての對象に關するものである。』自一一三〇a第十四行至一一三〇b第五行

ソコデ、ア氏は次ぎの如く問題を限定してゐる。『されば、また、正義にも一種類以上あり、而して、渾一の德と區別せらるべき一種の正義あることは、明かである。我々は、其の一般相と特殊相とを捉らへねばならぬ』と。かくて、論は、狹義の正義に集中せられることとなる。

(二十一)

グラント氏は、以上の節を説明して云ふ。前揭書一〇四頁以下『茲にア氏が、狹義の不正義の存在を立證すべく用ゐた論辯は、畢竟するに、單に用語の疏明に隨着する。(一)我々は卑怯者をも ἀδικεῖν（アヂケーン）（惡を爲す者）といふ。其れと同時に我々は、また、己れの正さに受く可き分以上を取る者をも惡を爲す者といふ。此二つの場合に於ける用語は決して同一義を有つものではない。(二)利益を占むるが爲めに犯す罪は、此くの如き動機なくして犯す罪とは、區別された意味で、惡と言はれる (三)他のすべての惡 (ἀδικήματα（アヂケマタ）) は、夫れ／＼何か或る惡しき原則（例へば、卑怯、不節制、など）に歸せられるが、不正利得を獲得する行爲は『不正義』其もの以外、何等特殊の原則に歸せられない。從つて、これは、特別の意味を有つものであり、而して、心に於ける一の特殊の罪惡を指すものであると』。

バーネット氏は、また此節を釋いていふ。前揭書二一〇頁『此節の論旨は次ぎの如くである。狹義の罪惡の場合に於いて、我々は、或人が已れの爲めに、何等の不正なる利益を獲得しないときにも、其人を ἀδικεῖ（アヂケイ） 惡行者といふ。此の意味に於いては、ἀδικία=ἡ κακία πρὸς ἕτερον（アヂキア オレー・カキア・プロス・エテロン） 惡行=他人に對する渾一の惡である。しかるに、他方に於いては、不正なる利得を占むるの故を以て、或人を ἀδικεῖ（アヂケイ） といふことがある。此場合には、其の『アヂキア』は、或る特殊の罪惡と同一でもなく、また渾一の惡（オレー・カキア）とも同一ではない。しかし、其れは、カキア（惡）である（何となれば、我々は、之れを非難するから）而して、それは、『アヂキア』(不正義)である（何となれば、或る意味に於いては、ἄδικος=πλεονέκτης（アヂコス＝プレオネクテース） 不正義＝横領、不當利得、であるから）』と。

此一段は、ア氏の推理に多少の無理がある。或は脫文がある爲めかも知れないが、グラント氏の云ふように、單なる文義解釋に傾きすぎてゐる。而して、此論法を以て推して行くときは、グラント氏が、

く指摘したように、他の何れの罪惡でも、不當利得行爲と同様に、一種別格のものとせられ得る。例へば、不當利得の代りに、怠惰の惡行を以てして見る。然るときは、次ぎの如くに云ひ得るであらう。玆に一人の惰け者がある。彼は、他に何の罪を犯さない。しかし、我々は彼を惡行者と呼び、彼を非難する。しかれば、我等は、此の惡行を以て、廣義の不正義と區別せらるべき一の狹義の不正義であると云ひ得るであらう。（グラント前掲書一〇五頁）

然し、此くの如く解するは、決して、アリストテレースの眞意、を得た所以ではあるまいと思はれる。ア氏の説明の餘りに簡單なる爲め、其意を十分に盡くして居らぬので、彼は、不當利得、横領即ち財貨（金錢、財産）に關する不均等のみを以て、特に、狹義の不正義なりとするもので、同一の論法を以て、他のすべての、若くは、何れかの惡行を、同じく狹義の不正義と爲すことは、決して、これを許さないものであらうと思はれる。即ち、他のすべての非行とは、鮮かに、而して格段に區別せらるべき一特性が、財貨の配分に關する不均等（横領、不當利得）に具つてゐるものと認めるものなることは疑を容るゝ餘地なきように思はれる。唯だ何故に然るかの論據をアリストテレースが明示して呉れてないことは、我々經濟學研究者に取りては、甚だ遺憾なことである。此の論據が明示されてゐたならば、アリストテレースの經濟學説の後世に及ぼした影響は、更らに、更らに、著しく大なるものであつたらうと思はれる。否、後世への影響はさて置き、希臘の經濟思想其ものゝ深刻さは、爲めに、更らに一層を加へたであらうと考へられる。返へすぐ〱も殘念なことである。然るに、多くのアリストテレース經濟學説評論家中、——私の淺學寡聞の聞く限り——今日まで、一人も、此點を指摘した人のないことは、不思議でもあり、また惜むべきことであると思ふ。（高橋氏は、此問題の存在について、暗示をさへもして居らぬ。而して其文に題して『アリストテレース經濟學』と云ふ、大膽むしろ、驚く可きことである）

唯だ、トマソ・ダキノは、ア氏とは、順序を逆にして、諸々の不正義を考察した後『正義の準全的部分について』（二ノ二の七十九問）と題して、此問題を詳しく論じてゐる。但し、其論、經濟的考察には、進入してゐない。

其二。

此部分は、廣義の正義を問題外に置くことを疎明したもので私の當面の問題に、殆んど、何等直接の關係を有たず、而して、錯簡、脱漏、殊に重複の甚だ多く見出さるゝ部分に屬するから、全く、これを紹介せずに置く。原文を一讀せられたい方は、ベッカー頁の一一三〇頁b第十七行から、一一三一頁a第二十九行、ウエルの分け方では第七

節から第十一節まで、また翻譯によらんとする方は、ロッス氏の英譯の當該頁　此本は、ベッカー頁を其儘其本の頁としてゐるから、甚だ便利であり、且つ翻譯は、現存諸國語譯本中の第一位を占むるものである。を見られたい。

(二十二)

其三。狹義の正義を分つて、配分の正義と匡正の正義の二とす。

此一節は、後段の吟味に取つて、重要な關係をもつものであるから原文と逐字譯とを、併せ揭げて置く。

12 τῆς δὲ κατὰ μέρος δικαιοσύνης καὶ τοῦ κατ' αὐτὴν δικαίου 1130 β 30
ἓν μέν ἐστιν εἶδος τὸ ἐν ταῖς διανομαῖς τιμῆς ἢ χρημάτων
ἢ τῶν ἄλλων ὅσα μεριστὰ τοῖς κοινωνοῦσι τῆς πολιτείας (ἐν
τούτοις γὰρ ἔστι καὶ ἄνισον ἔχειν καὶ ἴσον ἕτερον ἑτέρου), ἓν
13 δὲ τὸ ἐν τοῖς συναλλάγμασι διορθωτικόν. τούτου δὲ μέρη 1131 α 1
δύο. τῶν γὰρ συναλλαγμάτων τὰ μὲν ἑκούσιά ἐστι τὰ δ'
ἀκούσια, ἑκούσια μὲν τὰ τοιάδε οἷον πρᾶσις ὠνὴ δανεισμὸς
ἐγγύη χρῆσις παρακαταθήκη μίσθωσις (ἑκούσια δὲ λέγεται,
ὅτι ἡ ἀρχὴ τῶν συναλλαγμάτων τούτων ἑκούσιος), τῶν δ'
ἀκουσίων τὰ μὲν λαθραῖα, οἷον κλοπὴ μοιχεία φαρμα-
κεία προαγωγεία δουλαπατία δολοφονία ψευδομαρτυρία,
τὰ δὲ βίαια, οἷον αἰκία δεσμὸς θάνατος ἁρπαγὴ πήρωσις
κακηγορία προπηλακισμός.

右譯文

『狹く解した意味の正義、並に、其れに照應する正しきことについては、(二つの種類がある)。第一はポリテイアの成員たる人々の間に配分せられる名譽、金錢、または、其他のもの﹅配分に於いて現はる﹅もの。(福田註。卽ち配分の正義) 第二は、人と人との間に於ける諸々の取引に於いて、匡正的役割を演ずるもの。(福田註。卽ち匡正の正義) これである。

此の第二については、更らに、二つの區分がある。卽ち、(人と人との間の)諸々の取引(スナラグマシ・ヂオルソチコン)には、(一)或種のものは、任意的(エクーシア)であり。(二)或種のものは、不任意的(アクーシア)である

任意的取引には、(a)賣買(πρᾶσις ὠνή 拉丁譯文では emtio venditio) (b) 消費貸借(δανεισμός 丁拉譯文では mutuum) 質入 ἐγγύη 拉丁譯文では pignus) 使用貸借 (χρῆσις 拉丁譯文では commodatum) 預入(παρακαταθήκη)拉丁譯文では depositum) 雇傭・請負・賃貸借(μίσθωσι 拉丁譯文では locatio conductio;)

operarum, operis, rei の三者を併、せ含む）などがある。これらを、任意的取引といふのは、其發生原因が、任意的であるから。）

不任意的なものには（a）人の目を忍ぶものと、（b）公然暴力に訴へるものとがある。（a）には、窃盜、姦通、毒害、媒介、奴隸誘拐、暗殺、僞證などがあり（b）には、毆打、監禁、殺人、强盜、傷害、誹毀、侮辱などがある。

高橋氏論文（三二頁）には、『購入、賣却、貸與(!?)質入、借受(!?)寄託、賃貸借(!?)の如き任意的行爲』云々としてある。『消費貸借』を『貸與』、『使用貸借』を『借受』、（而も特に此語のみには、希原語を添へてある。何故?）とするなどとは、現代離れも亦た甚しいのみならず、希文を如何讀んだか、一向解し得られぬ。例の惡口雜言家を喚び來るときは、恐らく、此れを評して、再た『珍妙』の『不可思議』のと言ふであらう。兎に角、此一事を以つても、高橋氏が、果してア氏の原文を解し得たりや否やを、私が疑ふ所以、讀者は、十二分に解し得られたことと思ふ。殊に單に『賃貸借』とあるは、拙き英譯諸書に、hiring 又は lotting などしてあるを、其儘生吞活剝したもので、希語一年生でさへ知つてゐる『ミスソーシス』なる語を、テンデ知らぬ人の所爲としか考へ得られぬ。（强盜の姦通のは、一も誤譯してあらず、却つて肝腎の經濟術語、法律行爲は支離滅裂）。然るにも拘らず高橋氏は、私を難じて、漫然氏の文を卒讀して、直ちに、不當の攻擊を敢てしたものと云はれてゐる。今玆に、兒童の描いた『へへノノモヘジ』に落款を附けた圖畫教員を評して、其は、兒童に對して、不當なる攻擊を加へたものであると云ふ人ありとせよ。世人は、果して其評を是認するであらうか。否か。私は疑なきを得ぬ。

バーネット氏は、先づ『第一は、『ポリテリア』の成員たる人々の間に配分せられる名譽、金錢、又は、其他のもの〻配分』の句を釋いていふ。希臘に於ては、市民とは、第一次に、ポリテイア所有の諸財の分け前に預る權利を有つ者の謂であつて、（今日の國家に於けるが如く）國費の負擔に任ずる義務は、第二義的のものとせられてゐた。即ち市民とは、國家の株主の謂であつて、（今日の國民の如く）納稅者の謂ではなかつたのであると。（前揭書二一二頁。此點ノイマン氏の租稅負擔論に詳論あり。後に言及す）

氏は更らに、『スナラグマシ』及び『チオルソチコン』の二語を釋いていふ。『スナラグマシ』とは、一切の商的取引を含む意味の廣い語であつて、決して、單に『諸契約』συνθῆκαι（スンセーカイ）のみに限られてゐるのではない。而して、其中について、任意的なるものが契約に該當するので

不任意的なるものは（羅馬法の）obligationes ex delicto（不法行爲より生ずる諸債務）に該當するのであると。（二一三頁）

『チオルソチコン』なる語については いふ。『此語を "corrective justice." 『匡正的正義』とする通行の翻譯によつて、多くの混雜が釀されてゐる。此譯語よりも、スコラ哲學者の譯語 iustitia directiva（ユスチチア・チレクチーヴァ）の方が、眞により正確である。何となれば、『チオルソウン』διορθοῦν と云ふ語は、（此語と併せ用らるゝ）エパノルソウン ἐπανορθοῦν（福田註匡正。correction）といふ語よりも遙かに廣い意味を含むものであつて、取引の前たると、後たるとを問はず、『調節する』"to adjust" ことを意味する』（二一三頁）

『エークシア（任意的）について、ジアックソン氏は、これらに該當する正義の形態は、諸々の取引から起る非行の rectification（是正）のみであると主張してゐる。しかし、此解は當らぬ。何となれば、非行が一度生ずるときは、其取引（スナラグマ）は、直ちに、不任意的のものに變化するから。ア氏の與へた例を見ても、其れは、事前に、取引の諸條件を協定することに關してゐて、事後に、發生非行を是正（匡正）することには、關してゐないのであると』。（同上頁）

グラント氏の解說は、少しく趣を異にしてゐる。曰く、ア氏は、玆に至つて、狹義の正義を分つて、配分の正義と匡正の正義の二となす。（中略）彼は、任意的諸取引 τὰ ἑκούσια συναλλάγματα（タア・エクシーア・スナラグマタ）即ち、『賣買、消費貸借、買入、使用貸借、預入、雇傭・請負・賃貸借』は、匡正的正義 corrective justice の目に屬すること、不任意的諸取引と同じであると爲してゐる。彼が此く云ふ意は、此等の諸取引に際して行はれた諸々の不正義行爲の是正（匡正）は、匡正の正義によつて爲さるべきものなりとするにある。（後段）第五節に於いて、我々が見る通り、賣買は、幾何的比例の原則によつて支配されてあり、若しは、支配さるべきものである。從つて、其れは、配分の正義の場合に類してゐるのである。（だから）賣買（の行爲）が匡正の正義の下に持來されるのは、詐僞若くは錯誤が發生した場合にのみ限るのであると。（一〇八頁）

此一條は、私が當面の問題とする『流通の正義』が、ア氏によりて、第三の別在なる正義と認められてゐるか、否かを、決定するに、甚だ重要なる關係を有つところのものである。而して、幾多の先覺學者は、此一條に就いて、様々に、商量推究してゐるのである。其れらは、流通の正義其ものを取扱ふ段に至つて、其一端を示めす方が、讀

者の會得をより容易からしめると思ふから、今は、唯だバーネット、グラント兩氏の對立說をあぐるに止めて置く。

以上を以て、ア氏正義論の第二章狹義の正義の本體とその諸性質の一應の紹介を終つた。それは、私の本題に、直接の關係を有たぬが如くに見へたかも知れない。乍去、ア氏說に對するマルクスの解釋の當否を吟味するについては、私は、出來る丈け、愼重に、而して、また出來る丈け、根本的に考慮すべき義務を有つと信ずる。何となれば、マルクスのア氏評論は、決して、尋常一樣の文獻的、訓詁的、閑葛藤を以て目すべきものではなく、深く、マルクスの學問の根抵を爲すものであると思ふから。此の意味に於いて、以上、ア氏第一・第二章についての吟味は、私が必ず爲さねばならぬ根本的仕事であつたと信ずる。

以下、私は、出來る丈け、簡單に、去乍、愼重に、ア氏の第三—五章の吟味に、進み入る。

（以下嗣出。本誌一月號（次號完結）とあるは誤）

附記。拙文の（其一）（其二）の或部分に對し、高橋誠一郎氏は、三田學會雜誌に一文を揭げて、本論文に全く無關係なる私の十數年前の舊文をまでも取り出して、痛く、私を非難して居られる。乍去、私の本論文を終末まで、氏に於いて、讀過せらるれば、氏の非難は、恐らく當然撤回せらるるものと確信するから、私は、別に答文を起草せぬ。唯だ、補足的に本論文中、間々補註を附加へて、氏の論文の如何に、杜撰、孟浪、散漫にして、而も徒らに、ペダンチックなものであるかを明かにすることを敢てした。學問の前には、師もなく弟もなしとは、私の昔から、信じて渝へざるところ、氏が、私を舊師云々と呼びて、其故を以て特に、難ぜらるゝは、私の斷じて執らざるところである。因に云ふ、ノースについての氏の再三の指摘云々は、不幸にして、私の未だ一も見ざりしところである。乍去、恐らく、私の諸々の舊文には許し難い誤謬や杜撰は多々あるであらう。しかし、私の學問的興味は、今や全くノースなどを遠く遠く離れてゐる。若し、他日再び其れらについて商攷することありとするならば、謹んで氏の再三の高教等に對して、深き謝意を表する機會を見出すであらうと思ふ。

又記。一月廿七、廿八兩日付再度の手狀を以て、畏友細貝正邦氏は露がロシア語の斷尾について認めたところは、恐らく誤謬であらうと、いとも、懇に敎示せられた。此事は、商大の上田辰之助敎授も、其前に、また、私に注意せられて、其れは、empirio-kritisch などの場合と同じと見るべきであらうことを示唆せられた。私は、露ロシア人に尋ねて、極めて覺束ないが、斷尾云々た思付いたのであつて、其點について、何等の自信をも有つては居らぬ。十の八九、細貝氏高示の通り、右の考へ付きは、私の誤謬であらうと思ふ。謹んで玆に、訂正して置く。但し、私の論旨は、此訂正の爲めに、別に改める必要はない。

（三・二・五）

大衆講座

剰餘價値

青野季吉

一

こゝに一人の資本家があるとする。そして彼が一萬圓の資本を持ち出して、一つの事業を營むとする。いつたい彼が、わざ〳〵その虎の子のやうな資本を持ち出し、工場を建てたり、機械を買込んだり、原料を仕入れたり、そんな面倒な手數をかけ、また一方には厄介千萬な勞働者を雇入れて、その事業を營まないではをれないのは、何のためであらうか？かう訊ねたらどんな人でも、返答にまごつきはしまい。そして言下に『それあ儲けたいからさ。』と答へるに相違ない。全くそれに違ひないのである。資本家は何も伊達や慈善で、事業に着手するのではない。

ところでいまその資本家が、九千圓で工場を建てたり機械を買込んだり原料を仕入れたりし、殘りの千圓で勞働者を雇ひ入れて、見込をつけた事業を營むとする。この場合、その工場や機械や原料が、やはり元の九千圓しか資本家の手に返へさず、勞働者がやはり元の千圓しか資本家の手に返へさなかつたら、どうだらう。つまりその工場や機械や原料や勞働者を用ひて拵へ上げた商品が、元の一萬圓だけの價値のものであつたら、どうだらう。その資本家は、全く骨折り損の草臥れ儲けである。こんなことならどだいその資本家は、その事業を營む筈がない。やはり一萬圓の資本を投じたら、尠くとも一萬一千圓の價値のある商品を手にして、そこに一割だけの利潤を懷にしなければならない。

それなら、どんなからくりがそこにあつて、その一割だけの餘計な價値、卽ち剰餘價値が生れるのであるか？これが問題である。

資本家はそこへ口を出してから言ふかも知れない。それは自分がその商品を市場へ持ち出して、一萬一千圓に賣つたから、そこに千圓の利潤があつたのだと。事實、この資本家の主張を反映して、そう説いて澄してゐる經濟學もある。

だが、この主張の間違ひであることはすぐ分る。成る程一人の資本家と他の一人の資本家の場合なら、或は儲けたり損したりするかも知れない。しかし市場の交換は、詐僞や引つ掛け合ひではなく、同じ値のものを交換するのであるから、資本家階級全體として見れば、個々の損得は相殺されてしまふ。つまり一萬圓の價値のものを市場へ出せば、一萬圓の價値のものとしか交換されないのである。この範圍では資本家階級全體は、得もしなければ、損もしない。即ち資本家階級全體の占める剩餘價値は、どうしても商品の流通行程（市場）から出る筈はないのでなる。

そこで剩餘價値は、流通行程から出ないとすれば、前に言つたやうに、工場や機械や原料や勞働力（勞働者の勞働能力）を使つて商品をこしらへた過程、即ち商品生產行程から生れて來なければならない。

二

それなら商品生產行程からどうして剩餘價値が生れるか？そこから有耶無耶に、神話の神様のやうに飛び出す譯はない。そこにはやはり剩餘價値を生む要素がなければならない。

そこでこの商品生產行程に投ぜられた資本が、どう言ふ部分に分けられるかを見ると、一方に工場や機械や原料や燃料やに投ぜられる資本部分があり、他方に勞働者の勞働力に投ぜられる資本部分がある。剩餘價値は、この二つの部分の双方からか、又は一方から生れて來なければならない。

ところで前者は、その持つてゐる價値を少しづつか乃至は一度に、新らしい商品に移轉させはするが、決して新らたな價値を造り出し得るものではない。例へば三千圓かゝつた機械が、三年でダメになるとすれば、一年に千圓、一ケ月に八十三圓餘、一日に二圓七十錢餘づゝを商品へ移轉するに過ぎないし、千圓の原料は一度にそれだけの價値を商品に移轉するに過ぎない。言ひ換へるとこの資本部分は、商品生產行程において、少しもその價値の分量が變らない。だからマルクスはこの部分を、不變資本と名づけた。

ところが勞働者の勞働力に投ぜられた資本部分は、その價値を商品に移轉するばかりでなく、新らしい價値をつくる。こゝに問題の鍵がある。

こゝで一寸立ちどまつて、商品の價値について考へておかう。商品生產社會では、あらゆる商品は、直接に人間の欲望を充す上の使用價値と、他の商品と交換される上の交換價値を持つてゐる。例へば一本の萬年筆は、萬年筆といふ具體物としては、使用價値であるが、同時に他の商品と交換される上の價値、即ち交換價値を持つてゐる。この價

値がなかつたならば、恐らく萬年筆製造業者は日に何千本かの萬年筆を造ることをしないであらう。と言ふのは自分で入用な萬年筆はせいぜい一本か二本に過ぎないから。それを日に何千本とつくるのは、萬年筆に使用價値の外に交換價値があつて、他の商品と交換されるからである。

それならば外の商品と交換される能力、即ち交換價値はどこから生れるか？それは、交換される諸々の商品に共通したものから生れる。たとへば一本の萬年筆は、靴一足とも交換され、机一脚とも交換されるとすれば、この交換の基礎となるものは、一本の萬年筆、靴一足、机一脚に共通したものでなければならない。このすべてに共通したものと言へば、それが萬年筆であり、靴であり、机であると言ふ現物形態ではなくて、そのすべてが一樣に、人間勞働の所産だと言ふことである。即ちそのすべてが何れも、人間勞働の一定量を代表するからこそ、それにしたがつて交換されるのである。ここに交換價値が成り立つ。

それならば一本の萬年筆は、何故靴二足と交換されないで、靴一足と交換されるのであるか？詰り或る商品の交換價値は、何によつて測定されるのであるか？といふ問題が生れる。

この問題にたいしてマルクスは、前人未到の明答を與へた。曰く、それは、その商品を生産するに當つて、社會的に必要な勞働時間によつてであると。いまの例で言へば、一本の萬年筆を生産する上に、社會的に必要な勞働時間と、一足の靴を生産する上に、社會的に必要な勞働時間とが同じであるから、即ちその兩者の交換價値が同じであるから、そこに交換が行はれるのである。

したがつて靴の製造技術が従前通りであるのに、萬年筆の生産技術が特に進んで、いままで一本をつくるに四時間を要したものが、二時間で出來るやうになつたとすれば、その生産上に社會的に必要な勞働時間が二分の一となつたわけであり、したがつてその交換價値が二分の一となり、最早この萬年筆二本を持つて行かなければ、靴一足とは交換されなくなつたのである。

三

こゝで前へ歸る。

資本家は市場で勞働力といふ商品を買ひ取るのに、やはり他の商品を買ひ取るのと、同じ法則によつて買取る。即ちその價値だけに買ふ。すべての商品の交換價値は、たつたいま說明したやうに、それが生産上に社會的に必要な勞働時間によつて決定される。勞働力といふ商品でも、やはり同じことである。

ところで勞働力と言ふからには、そこに生きた勞働者が前提されてゐる。それが生きた勞働者である以上は、一定量の生活資料が要るわけで、勞働力の生産に社會的に必要な勞働時間とは、實際には、その一定量の生活資料の生産に社會的に必要な勞働時間と言ふことになる。

いまその勞働時間が、六時間であるとする。資本家は六時間分の

銀を拂つて、勞働力を購入する。勞働力を購入するとは言ふが、實は勞働力は生きた勞働者の現身を離れて存在するものでないから、生きた勞働者の勞働を購入するのである。

若しこの勞働者が、その勞働力の價値だけを商品に移轉して、つまり六時間だけ働いて、サッサと家へ歸つて行つたとしたら、資本家はやはり骨折損である。先にも言つた通りに工場や機械などの不變資本からは、剩餘價値は生れて來ず、こゝにまた勞働力からも剩餘價値が生れて來ないことになり、結局商品生產行程のどこからも剩餘價値が生れて來ないからである。

ところが勞働力に投ぜられた資本は、商品生產行程中で、その價値が變化する。即ち剩餘價値を造り出す。そこでマルクスはこの部分を可變資本と名づけた。

それはどうしてであるか？資本家は六時間の賃銀を拂つて、勞働力を購入したのであるが、一旦それを購入した以上、その勞働力を具へた勞働者を十一時間勞働させることも、十二時間勞働させることも出來る。恰かも一旦買ひ取つた布地を、一度洋服に仕立てて着古して後に、何に拵へ直して、何度使用しやうと所有者の勝手であるのと同じである。たゞ布地の場合はどんなに使用しても形が變るばかりで、價値を造り出しはしないが、勞働力は一分間でも餘計に之を使用すれば、それだけの價値を造り出すだけの違ひである。

資本家は勞働者に六時間の賃銀を拂つて、十二時間働かせるとする。その場合後の六時間は、不拂勞働であつて、その勞働が生み出す價値は、資本家にとつて明らかに剩餘價値である。

資本家は、この剩餘價値が欲しくて、面倒な手數をかけたり、厄介千萬な勞働者を雇入れたりするのである。

四

いま或る資本家が、三百人の勞働者を雇ふとする。そしてその勞働者一人の一日の勞働力の價値が三圓で、その勞働者が一日の勞働によつて造り出す價値が六圓だとする。その場合、その三百人の勞働者の使用する不變資本が二千圓であらうが、四千圓であらうが、それはこゝでは少しも問題ではない。事實、生產技術が進步しない時には、不變資本は割合に少いが、立派な機械などが發明されて生產技術が大いに進步すると、不變資本はいくらでも大きくなる。しかしそれがどれだけ大きくなつたとしても、その三百人の勞働者が一日の中に產出する生產物の價値は、一千八百圓であつて、その中九百圓が可變資本の價値、殘りの九百圓が剩餘價値である。

そこで、この可變資本と剩餘價値との比率を見ると、900：900即ち十割となる。是がマルクスの名づけて、剩餘價値率と言つたものである。

この剩餘價値率は、一見して明白なやうに、資本が前拂した資本の價値にたいする、その資本家のタダで手にした價値の比率であるから、『資本に依る勞働力搾取の程度、換言すれば、資本家に依る勞働者

搾取の程度を、正確に言ひ現した」（資本論）のである。即ちこの場合では資本家は十割だけ勞働力を搾取してゐることになる。

この剩餘價値率をよく資本家側では、利潤率と混同する。そして搾取の事實を小さく見せようとする。剩餘價値率は、可變資本にたいする剩餘價値の比率、即ちいまの例で言へば 900(可)：900（剩）であるが、利潤率は、資本家の前拂資本の全部にたいする剩餘價値の比率、即ち(不變資本を四千百圓とすれば)、4100（不）+900(可)：900(剩)である。この場合剩餘價値率は、十割であるが、利潤率は一割八分である。資本家は實際において、十割の勞働力を搾取してゐながら、その五分の一にも足らぬ一割八分しか搾取してゐないやうな態を裝ふのである。

こゝで言ひ添えておき度いのは、剩餘價値率は、勞働力の搾取程度を正確に言ひ表すとは言つても、搾取の絶對量を言ひ現すものではないこと、是である。前拂した勞働力の價値が六〇〇で剩餘價値が六〇〇でも十割の搾取率であり、前者が九〇〇で後者が九〇〇でも搾取率はやはり十割であるが、その絶對量から言へば、あとの場合の方が多く搾取されてゐるわけである。

いま私は、可變資本に等しい價値をつくり出す勞働時間を、假りに六時間とした。この六時間の勞働は、勞働者がその生活の維持のために、言ひ換へれば、その勞働力の生産上社會的に必要な勞働時間であつて、マルクスはこれを、必要勞働時間と名づけ、その時間内に支出される勞働量を、必要勞働と名づけた。これは言はゞ勞働者が、自己のために働くものであるが、この外に勞働者は、資本家のために剩餘價値をつくり出すために働く。私はそれを假りに六時間とした。マルクスはこの時間を剩餘勞働時間と名づけ、その時間内に支出される勞働量を、剩餘勞働と名づけた。

即ち、剩餘勞働の必要勞働にたいする比率は、剩餘價値の可變資本にたいする比率に等しいわけになる。剩餘價値率 = $\frac{剩餘價値}{可變資本}$ 又は $\frac{剩餘勞働}{必要勞働}$ と言ふことになる。

五

それならばその剩餘價値は、どうして之を增大させるか？である。初めにも言つた通り、資本家がいろ／＼と手數をかけたり、厄介千萬な勞働者を雇ひ込んだりするのは、剩餘價値をせしめるためであるから、彼は可能限り、その剩餘價値を少しでも大きくしやうとするのは當然である。

その可能な方法が二つある。

第一は、直接に勞働時間を延長する方法である。必要勞働時間はそのまゝとして、剩餘勞働時間を出來る限り延長することである。尤もこれには一定の限度がある。それは人間の心身の勢力から來る限度である。この方法によつて搾取して來る剩餘價値を、マルクスは絶對的剩餘價値と名づけた。

この方法は、ヨーロッパでは資本主義の初期に多く見られた。この時代にはまだ生産技術の進歩が低くかつたので、不變資本が割合に少く、可變資本が比較的多かつた。そこで資本家は、勞働時間を延長することによつて、一層多くの剩餘價値をあげ得ることを發見したのである。實際この時代には、一日、十四時間、十六時間、十八時間などと言ふ致死的の勞働時間が行はれてゐた。勿論資本家のこの方法にたいしては、勞働階級から猛烈な反對が起つた。マルクスは『資本論』の中で、十四世紀から十八世紀にかけての勞働時間を中心としての、雇主と勞働者の鬪爭を詳細に摘き、十九世紀に入つての、それにたいする國家權力の干渉（工場法の制定）を細かく說述してゐる。

この方法は前にも言つたやうに、勞働者の心身の勢力によつて制限されるが、また勞働階級の反抗によつても制限されるのである。

第二は、必要勞働時間を短縮する方法である。即ち勞働者の生活維持のために必要な勞働を、出來るだけ短かい時間内にすませてしまつてヨリ多くの時間を剩餘勞働に制からする方法である。この方法によつて得らるゝ剩餘價値を、マルクスは相對的剩餘價値と名づけた。

いまこの二つの方法を圖解するとかうなる。

第一の方法は A |1 2 3 4 5 6| C |7 8 9 10 11 12| B

A—Cは必要勞働時間（六時間）とする。これをA—Bまで延長することによつて、C—Bの剩餘勞働時間（六時間）を得る。これが絕對的剩餘價値を搾取する仕方である。そこでA—B（十二時間）が、延長し得る限界であるとする。即ち絕對的剩餘價値を搾取し得る限界だとする。こんどは次の方法による外はない。

第二の方法 A |1 2 3 4| C |5 6 7 8 9 10 11 12| B

詰り必要勞働時間を二時間短縮して、四時間とし、それだけ剩餘勞働時間を延長して八時間とすることである。話は至極簡單明瞭である。

この相對的剩餘價値は、生産技術の進歩によつて、達成される。例へば機械の採用である。機械の採用は、勞働の生産力を法外に增大するもので、これまで六時間で出來た商品がそのお蔭で四時間で出來るやうになる。それだけ勞働者の生活維持のために必要な勞働時間が短縮され、剩餘時間が延長されるわけである。マルクスは『資本論』のなかで、相對的剩餘價値の生産を分析して、資本主義の勞働の生産力の向上における三つの歷史的段階を詳細に檢討してゐる。第一は、單純な協業であり、第二は、分業及び工場手工業であり、第三は、機械及び大工業である。これこそ三つの根本的な生産技術の革命であつて、その何れもが、相對的剩餘價値を目指したものに外ならぬのである。

マルクスは更に進んで、この剩餘價値の一部が、資本に轉化される行程、即ち資本の蓄積行程を解剖してゐる。これはマルクスにあつて極めて重要な、獨創的なものであるが、この講話ではそこまで說いておれない。それは『資本蓄積』の興味ある題目の下に取扱はれる時があるであらう。

野田爭議とその教訓

山川均

五ヶ月間にわたる野田の大爭議は、組合側の要求撤回によつて、結末に近づいた。要求の撤回によつて、會社側が果して商議に應ずるか否かは、なほ明らかでない。けれども會社は完全な勝利者としてこの商議に臨み、降服的な媾和條件を命令することのでき得る程度に、すでに充分に罷業勞働者を打ち破つてゐる。會社がこれ以上に頑强な態度をつゞけることは、たゞにその必要がないばかりでなく、明らかに不利である。したがつて會社側は、恐らくこの提議に應ずるものと思はれる。

その結果は、或は急轉直下的な解決を見るだらう。この解決が、果して解決であるか、それとも征服であるか、それは解決を見ずして確言することはできぬ。たゞ會社側が、征服者としてこの商議に臨むことは疑ひがない。

○

野田爭議は、かの先年の濱松樂器爭議以來の大爭議であつた。ことにこの爭議は、會社側が組合を破壞しようとする、意識的な計畫と挑戰とによつて惹き起こされた爭議であつた。大正十二年の爭議に、組合側が勝利を得て以來、會社はその復讐を計畫してをつた。現に問題の第十七工場の如きは、會社側はその戰備の一つとして、從業員に對する株券の分配を行ひ、これを組合の勢力圏外においてゐたのである。

かやうに會社側の意圖は、組合の破壞であつた。しかもそれは數年に亘つて計畫され、準備せられた行動であつた。この事實のうちに、地方的にも極めて重大な影響のあるこの爭議が、五ヶ月間にわたつて官憲によつて傍觀せられてゐた理由を見出だすことができる。地方的な一大勢力たる會社と、地方官憲との間に、完全な××と××との存したことは、この爭議においても、見逃がすことのできない顯著な事實であつた。

それにもかゝはらず、罷業團がよく四ヶ月間の鬪爭を持續し得たことには、もとより色々の理由があつたらう。けれども有力な消費組合の存在したことは、重要な理由のうちの、少なくとも主要な一つであつたにちがひない。この事實は、わが國における罷業運動の歷史のうちに、消費組合が重要な役割をした新しい實例として、注意に値ひするものである。

○

　しかしながら消費組合の實力には、もとより限りがある。資本家の斷乎たる決意と計畫との前には、罷業勞働者が消費組合に依賴し得る程度も、おのづから限られてゐる。それは有力な武器の一つではあるが、いかなる武器も、十全な武器ではない。

　罷業は如何に指導せられたか。罷業の結果は、指導方法の如何によつては、とうてい避くべからざる結果であつたらうか。これは最も重要な問題であつて、ひとりこの罷業に關與した勞働者と組合指導者ばかりでなく、すべての勞働者と組合指導者とによつて、充分に批判され、組合運動はその教訓を、剩すところなく攝取しなければならぬ慘敗に終つた過去の重大な爭議、たとへば先年の共同印刷爭議、濱松樂器爭議の如きも、當事者自らによつても、批判せられたが、なほかつ徹底的に研究され、批判され、その教訓が、剩すところなく汲み盡されたとは云はれない。野田爭議は如何に組織され、如何に指導され、如何なる戰術を用ひたかといふことばかりでなく、この爭議によつて組合員は如何に教育され訓練されたかといふことも、充分に研究し批判されなければならぬ。この研究と批判によつてのみ、敗北の中から勝利を見出だすことができる。

○

　野田爭議について、何人も見落すことのできない著るしい事實は、この長時日に亘る重大な爭議が、他の勞働團體からは、寧ろ冷淡に眺められてゐたことである。爭議の當事者たる組合側でも、他の組合の應援を欲し　かつたとも傳へられてゐる。いづれにせよ、これほどの重大な爭議が、組合運動界に大なるセンセーションを巻き起こすことなしに進行したことは、一個の不思議といはなければならぬ。

　しかしながらこの不思議は、組合運動の戰線における分裂と對立の關係が、いかに深刻なものであるかを考へたなら、必ずしも不思議でない。階級の一部に加へられてゐる暴虐な征服戰に對する無關心と冷淡とは、分裂主義の最惡の結果としてのみ、初めて不思議でないものとなる。

　この爭議の後半期に至つては、組合運動界の注意は、野田爭議に注がれた。對立組合と對立政黨との間からも、野田應援の聲が擧げられた。

　組合運動の戰線の統一は、根本的な理論の一致によつてではなくて當面の鬪爭の必要と、當面の鬪爭目的の一致により、この共同の鬪爭における實際の協力によつてのみ實現することができる。

　野田爭議における今一つの興味ある事實は、いはゆる反動團體の行動であつた。ことにこの行動が、これらの團體の眞性質を最もよく物語つてゐるところに、特別の興味がある。

　野田爭議によつても、爭議調停法なるものが、如何なる意圖をもつて制定せられたかを立證するさらに新しい一例證が附け加へられたと云つてよい。資本家が溺れかゝつた時にのみ、彼らの助け船は漕ぎ出される。

○

　野田爭議は、どのような結末を見るだらう？　この問ひは、會社側が命令する媾和條件が、たゞどの程度に征服的であるかといふこと以外のことを意味しない。組合運動は、新たに加へられたこの敗北のうちから、勝利を見出ださねばならぬ。

最近歐羅巴に於ける反帝國主義運動の進展

在伯林　與謝野讓

×

昨年（一九二七年）十二月九、十、十一日の前後三日間に亘つて、「反帝國主義民族獨立擁護聯盟」はその第二回世界大會をブリユツセルに於いて開催した。此の聯盟は最近、ヨーロツパでは相當に名も知られ、その運動もヨーロツパを中心として、全世界的な組織を持つたことによつて、各國の知識階級及び勞働大衆の中に、根强い勢力を占めるに至つた。本聯盟の運動は、最近ヨーロツパに於ける反帝國主義運動の一環として注目に値ひするものがある。然るにこの重要な運動も、我が日本に於いては未だ充分知られて居ない憾みが尠くない。

本聯盟は昨年二月十日から十五日まで、やはりブリユツセルに於いてその創立大會を開き、その尨大な枝翼を全世界に擴つて反帝國主義運動の奔流の中に泳ぎ出たものである。

此の大會に代表を參加せしめて、聯盟を構成せしめた國名を擧げれば、英、米、佛、獨伊、和、白、日、支、朝鮮、印度、ペルシヤ、インドネジア、比律賓、南アフリカ、メキシコ、西、術等無慮三十數ケ國並に地方の多きにのぼつた。名譽總裁にアンリ・バルビユス、アインスタイン敎授、孫逸仙未亡人等をおき、執行部にはジヨージ・ランズベリー（英國）及びエド・フイメン（和蘭）を入れ、その下に執行委員會、總評議會を組織して各國代表を之れに加へてゐる。

如上の頭部を持ち、その地下莖を全世界の被壓迫人民層の中に滲透せしめた本聯盟は、創立大會以來、同大會に於いて決議された事項の實現に努力を捧げ、或は英國勞働黨幹部の墮落を糺彈し、或は支那國民革命運動に對して未曾有の虐殺を敢行した帝國主義的「白色恐怖」に抗議して全世界の反帝國主義運動の重要な一部門を把握するに至り、再びブリユツセルに第二回大會を開いて陣容の擴充を計るに至つたのである。

創立大會には日本代表としてはモスクワから片山潜氏が出席したのみ。而るに今回は勞働農民黨からは在伯林の杉山憲君、日本勞農黨からは小生が出席することになり、更に片山氏はモスクワから七十の老軀をひつさげて參加し日本代表も三名となつた。

以下、此の第二回大會を通じて、此の聯盟の底を貫流する潮流が如何なるものであるか又此の潮流の進展によつて、此の聯盟の有する意義並に使命が如何に重要性を帶びて居るかを見やう。

×

先づ大會第一日の幕を切つて、會場フ[illegible]ミツシユ・ハウスの四壁にかゝげられた各國[illegible]各地方の鬪爭旗をふるはした司會者エド・フイメン氏（議長）の司會演說に聽かう。

氏は、今日帝國主義的搾取强壓が、帝國主義國は勿論、植民地半植民地の被壓迫人民層の骨髓にまで喰込んで居ること。之れに對して帝國主義國にあつては階級戰として、又植

民地國にあつては國民革命運動は民族解放戰爭として、反抗運動が熾烈に燃上つてきたこと。及び、之等の各國各地方の運動が本聯盟の運動によつて統一的になり出したこと。更に第二インターナショナルの幹部達は本聯盟の伸長を恐れて、之れが妨害中傷に寧日なきこと。我々は如上の彈壓妨害を我等の全世界的統一戰線の力によつて蹴返へして運動を進展せしめねばならぬ事を口を極めて强調した。

氏が述ぶるまでもなく、今日各國の資本主義がその最後の小康期を幾分でも長く生延ばさんがために、兇惡な帝國主義的政策を弄して、自國並に植民地半植民地國の勞働者、農民、小市民——所謂下層被搾取大衆を抑壓してゐることとは火を見るよりも明かな世界的事實である。

之れは決してこの大會が觀念上認識した世界資本主義の現段階の事象では斷じてない。世界の隅々から西歐の小都會ブリュッセル市に參じた各國各地方の代表者が大會三日間を通じて、血涙と共に吐いた言々句々の結晶から示現された世界的事實なのである。

こゝにこの聯盟のもつ强みと重要な意義が殘存する。

ペルシャ代表は壇上から何を獅子吼したか。インド代表は何を訴へたか。南亞聯邦代表は何を摘抉したか。彼等は、英國帝國主義の魔手のためにその國內に於ける、勞働條件が如何に傷けられてゐるか、國民の病死人が如何に多きか。又之れに對する反抗運動は如何に血を以つて彩られてゐるか——血が滲む言葉を各國代表の面前に投げつけたのであつた。

又支那代表は何を叫んだか。彼等は國民革命運動が常に英日米の帝國主義の爲めに、その進展を阻止せられ、且「白色恐怖」——大虐殺の下に如何に多くの同志が冷たく横つたか——舌端に火を吐いて帝國主義の罪過を曝露した。

たゞひとり、ペルシャ、印度、支那のみならず、參集した各地各國の代表は、生々しい事實を以つて現在帝國主義が如何なる迫害をそれぞれの地に强行してゐるかを說いた。更に各代表は、この死線に彷徨しながら各地の被壓迫民衆は如何に執ように、果敢に、此の帝國主義の强壓に抗爭してゐるか、その反抗運動は「反帝國主義」「民族獨立擁護」の名の下に或は階級戰として、或は國民革命運動として如何に苦難の路を辿り乍らも、目覺ましくほうはいと邁出してゐるかを說いた。

卽ち、帝國主義の毒牙が全世界的に擴大されてゐると共に、これに對して「反帝國主義的」運動が之れ亦全世界的に波立つて來たことがこゝに於て明瞭な事實をもつて認められてゐる。

卽ち、我々はこの聯盟の運動の底に、如何に熱烈に反帝國主義の氣勢が渦卷いてゐるかを認め得やう。これこそこの聯盟のもつ根幹であり、基礎構造なのである。

×

更にこの聯盟の運動並に第二回大會を通じて、注目すべきものは、エド・フイメン氏並に各國代表が屢々論難した處の、第二インターナショナル及び各國の階級的裏切者社會民主黨幹部達の排擊である。

英國代表も云つた如く、英國勞働黨の代議士中僅かに十名が本聯盟を支持するのみで、他は全部この運動に對してサボターヂュしてゐる。英國勞働黨幹部は如何に勞働者の組織運動を等閑にしてゐるか。のみならず、最近は失業と飢餓の十字路に彷徨へる英國數百萬の勞働大衆を外に見て、「勞資協調」の幕內に頭をつつこんでゐるのだ。又、支那代表は叫ぶ國民革命軍の進出の前途に裏切者蔣介石は如何なる手を擴げたか。又日本の、、、、、、、、、、、、、、等は昨年五月上海に渡り軍閥

の手を通じて、如何に悪辣な裏切りを蔣介石の掌中に投げたかを痛烈に摘抉しつくした。

更に第二インターナショナルは、自己の勢力の侵蝕を恐れて、この聯盟を目して「モスクワの支部」等々の中傷を擅まにしてゐる。

各國帝國主義の兇暴性を各代表の口から、心に徹するまで聞かされた我々の耳は、更にその同じ口から、第二インターナショナルを始め、各國各地の社會民主々義者社會改良主義の階級的罪悪の數々を聞かねばならなかつた。

此の徒輩が現在の世界資本主義の段階に於いて演ずる役割は、戰線を分裂に導く資本主義の賣店、反動主義のくわいらい以外の何物でも有り得ないこと——之れ又この會期を通じて、各代表のもたらした事實によつて天日の下に曝らされねばならなかつた。

かゝる階級的裏切犯罪の前科者を、階級戰線、民族解放戰線に交ゆることは、盗賊に糧を與へるよりも危險多きことである。この教訓を各國各地の運動は苦い事實から學びとつたのだ。從つてこの聯盟が、これ等階級的裏切者、戰線統一の妨害を徹底的に排撃することはあまりにも理の當然ではないか。これは又この聯盟の中に燃え上つてゐる一條の重要な火焔である。

×

以上大體この聯盟の底に醸された熾烈な二條の氣運が何物であるかを描いた。

然らばこの聯盟は如何なる組織を有つてゐるか。

大會第二から第三日にかけて、各代表によつて熱烈に討論され、その結果、極めて廣汎な組織範圍をとることに決せられた。

「組織に關する決議」中の「組織の基礎」とは、

「帝國主義的支配に反對し、凡ての民族自決のために、凡ての民衆の國民的自由のために、凡ての種族、階級及個人の平等なる權利のために戰ふ處の——凡ての政治結社政黨、勞働組合及個人は、本聯盟に加入し得。」

と云ふ程、廣汎たるものがある。

しかし、この聯盟は決して政黨でも、勞働組合でもない。一個の尨大な黨外大衆團體である。從つて、かゝる組織をとることによつて、より多くの團體及個人をこの聯盟に加入せしめることが出來るのである。

併し、この組織の基礎がかくも廣汎だからと云つて、それは階級的裏切者或はそうした團體までも含んで差支へないと云ふ樣なノンセンスな廣汎性を示すものでは斷じて無いことは之等の一黨に對する排撃が如何に盛んであるかが最も明白に語つてゐる。否寧ろ、如上の指導精神を盛られたこの組織の廣汎性こそは、今日帝國主義の白牙を前にしてゾチアルデモクラットの小細工的裏切りによつて、分裂多岐を極めた全世界の階級戰線、民族解放戰線の中に強固な統一運動を押進めるべくこの聯盟が十字軍を起し得る可能性を十二分に示唆するものであることを確信せしめる。

茲に我々は、この聯盟のもつ意義と其の使命の重要性を明確に認識することが出來る。

全世界の被壓迫民衆府の强力な支持の上に反帝國主義、民族獨立擁護の双翼を擴いて、歐洲の一角に誕生した此の「聯盟」こそは、ひとり歐洲に於ける最近の反帝國主義運動の一環たるに止まらず更に全地球上に燃燒して行く反帝國主義運動の一大主流たるにまで擴大し、各國各地の解放運動に絶大な血と肉とを寄與し、進んで、分裂に陷つてゐる階級戰線の統一てふ重大なる歷史的使命を實現して行く原動にまで發展して行くであらう。

以上、本聯盟を通じて、最近歐洲に起つた反帝國主義運動を思ひついたまゝ記述したまで、論じて及ばざる點は深く讀者に謝する次第である。(一九二七年十二月十八日)

普選議會に向つて第一の要求

先づ團結權の獲得を

安部磯雄

無産政黨が若干の代表者を議會に送つたならば先づ無産階級のために團結權確立を要求すべきである。普選の獲得は政治上から見て無産階級の一大勝利であつた。然し現在の如く團結權が曖昧に取扱はれて居る限り、無産階級は經濟上から見て決して解放されて居るとは言へない。如何に普選が行はれても無産階級が自由に團結することが出來なければ、彼等は單に烏合の徒たるに過ぎないのである。私共の見る所に據れば有産階級は僅に我國人口の五分を占め、無産階級は九割五分を占めて居るに拘はらず、昨年行はれた府縣會議員の選擧に於ける無産政黨の慘敗は實に驚くべきものであつた。憶ふに今回の總選擧に於ても無産政黨は同一の結果を繰返すのではあるまいか。假りに無産階級が全部自己の代表者に投票する程の自覺を有して居るとするならば、一擧にして四百四十名の代議士を選出し得る譯である。然し今回選出される無産黨の代議士が最大限廿五名最小限十名位と豫想されて居るのは、如何に無産階級が無自覺なる烏合の集團であるかを語つて居る。

然し私は決して無産階級の無自覺を責むるものではない。何となれば彼等は團結により て階級意識を得る程の教育を得て居ないからである。勞働組合や農民組合の傘下に集まつて居る者は兎に角意識的に團結した者であるから必ず無産階級の代表者に投票するけれども、組合外の者に對してはこれを望むことが出來ない。故に普選を無産階級のために最も有利ならしむるには無産階級の團結といふことが必要條件となつて來る。普選が過去數年間に於ける私共のスローガンであつた如く、總選擧直後に於ける私共の重要題目は團結權の獲得であらねばならぬ。

有産階級は凡ゆる手段を盡して普選案の通過を阻止した如く、今や勞働組合や農民組合の公認に關する法律案の通過に極力妨害を加へんとしてゐる。勞働組合法案が議會に提出されるまでには資本家側から種々なる修正案が提出されて法案其ものは全く骨抜きとなつ

たのである。團結權は明に憲法の認める所であるに拘はらず、有産階級の支持を受けて居る政黨は鐵面皮にも無産階級の團結權に妨害を加へんとして居る。殊に反動政策を生命として居る政黨は既成の勞働組合さへ撲滅せんと企てて居るではないか。無産階級が有産階級に對抗し得る唯一の手段は團結である。然るに此團結權を無産階級から奪ひ取らんとするのは當に無産階級の生命を奪ふものと言ふて差支はない。普選を斷行したのは恰も無産階級に有産階級と同樣の武器を與へた樣なものであるけれども、團結權が公認されない限り、無産階級は其利器を有効に使用し得ないのである。刀は與へられたけれども其刀を拔くことが出來なければ何の役にも立たない。私は其處に有産階級の計略が潜んで居ることを確信する。故に普選實行の直後に於ける私共の運動はどうしても團結權の獲得を主なる目標としなければならぬ。

要するに經濟運動は本であつて政治運動は末である。農民組合や勞働組合や俸給生活者組合や官吏組合の下に無産階級が團結さへすれば、政治運動の如きは忽にして其効を奏することが出來る。政治運動は一見派手やかであるけれども、それは飽くまでも末であることを考へなければならぬ。政治運動が花であるならば經濟運動は根である。根を培養せずして花の美しきを求めんとするのは無理である。故に無産階級運動者は經濟運動に對して重大なる注意を拂はなければならぬ。從つて團結權の獲得に全力を注ぐ必要がある。

現在の經濟組織は雇傭關係を基礎として居るのであるが、其處に現社會の悩みが潜んで居ることを考へなければならぬ。私共は人類社會が雇傭關係を脱して更にコオペレテイーブ關係に進むことを理想として居るけれども、現在の組織が存在して居る限り、これに對して應急の手段を講ずることも亦必要であると信ずる。言ふまでもなく多數の勤勞者は雇傭關係の下に置かれて居るのだから、何人も一種の壓迫を感ぜざるを得ない。若し雇主が完全無缺の人ならば兎に角、然らざれば必ず傲然として雇人を使用し搾取する。若し彼が個人事業の持主であるとすれば、彼は全く專制君主の如くに振舞ふのである。俸給の増減は彼の意のまゝであつて、時には事業の都合で解雇されることもある。昔の詩人は『人生苦樂依他人』と言ふたが、雇人の苦樂は雇主によつて定まるといふのが今日の實際ではないかと思ふ。而してこれは單に筋肉勞働者のみではなく、精神勞働者にも適用されることである。斯の如く雇主が專制權を有する場合に於て雇人の生活は極度の不安に陷らざるを得ない。これが多數の人々に與へられた運命だと考へたのは封建時代のことで、現在の勤勞階級は決して斯の如き運命論者ではないのである。

彼も人なり我も人なりといふ思想を有する勤勞階級は雇主に對抗する方法として團結權を要求して居る。我國に於ても一時は筋肉勞働者の團結を默認したため、勞働組合や農民組合が各所に起つて、今や大なる勢力となるに至つた。最初に組合の實力を輕視して居た

資本家階級も現在は多少の脅威を感ずるに至つたので、積極的に勞働組合法に妨害を加へるやうになつた。のみならず彼等が根本的に組合を破壞せんとの野心を蔵し居ることは野田の爭議によりてこれを窺ひ知ることが出來る。今後勞働組合法案が幾度議會に提出されても有產階級を代表する政黨は種々の口實を構へてこれを否決するに相違ない。此時に當り無產政黨議員の採るべき態度は二大政黨の間に介在してキャスティングボートを有効に利用することである。若し二大政黨の中何れかが無產階級に滿足を與へるが如き勞働組合法案に贊成するならば、無產黨議員は自黨の主義主張に反せざる範圍に於て其政黨を援助しなければならぬ。これが無產政黨の行くべき途である。

然し團結權を要求する者は單に筋肉勤勞者のみではなくて、凡ゆる俸給者も痛切に其必要を感じて居る。何故に官吏は組合を造ることが出來ないのであるかと言はゞ何人も容易にこれに答へることは出來まい。勞働者や小作農が組合を造りて資本家や地主の橫暴に備へることが正當であるならば、會社員や官吏が組合を造るに何の不思議があらう。官吏や會社員は絕對服從を要求されて居るのであるが、これは全く封建時代の思想を其まゝ繼承して居るものではないかと思ふ。筋肉勞働者が組合を造りて生活の安定を得る必要があるならば、同一理由によりて官吏も會社員も勝手に組合を組織する自由を要求する權利がある。或意味に於て俸給生活者は筋肉勞働者以上に生活の不安を感じて居るのではないかと思ふ。筋肉勞働者は不完全ながらも組合を有して居るに反し俸給生活者はこれを利用する程の位地に達して居ない。今後に於ける俸給生活者は當然組合を組織して自己の利益を擁護すべきである。雇主は强者であり、雇人は弱者であるから、弱者は團結の力を以て强者に對抗しなければならぬ。

雇主と雇人の對抗は社會の秩序を破壞するものであるから甚だ面白くないと難ずる人があるけれども、それは單に權力者の勝手なる意見に過ぎない。若し現在の經濟組織がコオペレティーヴであるならば、雇主と雇人の對抗は全然あるべき筈はないけれども、現に雇主と雇人の關係が存在して居る限り、雇人は當然何等かの方法によりて自己の立場を擁護しなければならぬことになる。若し雇主が悉く正義の精神によりて雇人に對するならば、雇主と雇人の對抗は有り得ないかも知れぬが、此の如きことを現在の雇主に注文することは全く不可能である。會社員も官吏も工場勞働者や小作人と同樣に生活の不安を感じて居るのであるから、團結の力によりて勤務時間、俸給、職業の保障、解雇手當といふが如き問題に對し自己の意見を貫徹するために努力しなければならぬ。

若し有產階級が飽くまでも無產階級の團結權を阻止することになれば、無產階級運動は遂に普選法通過以前の狀態を繰返すことになりはしないかを怖れる。多年普選を希望してこれを獲得することの出來なかつた無產階級は絕望の結果サンディカリズムの思想を奉ず

るに至つた。即ち、、、、、、、、、、、、、、といふ方針に向つて進んだのである。完全に團結權が認められるならば、普選は確に無產階級のため活路を開くものであるけれども、團結權の阻止は即ち無產階級のために進路を塞ぐことになる。此狀態が永く繼續することになれば、普選は何時までも有名無實の制度として無產階級に呪はれるかも知れぬ。斯の如く論じ來れば、普選と團結權とは不可分の關係に在ることが判る。完全なる團結權なくしては普選を徹底せしむることが出來ない。私が普選直後の議會に於て團結權の獲得が先づ無產政黨により叫ばるべき問題であると考へるのはこれがためである。數年前普選運動が國民全體の血を沸した如く、今後數年間に於ける重大問題は團結權の獲得といふことであらねばならぬ。

議會に先端を有する徹底普選の全國的大衆運動

麻生久

一

『當選したならば第一に何を要求し、何をなすか?』

私は今、宇都宮の選擧事務所で、本稿を草してゐるのであるが、福田博士始め多くの同志の應援によつて吾々の運動の氣勢は上つてゐるが、未だ當選の目安はつかない。なぜならば私の叩き落しをねらつてか、政友も民政も協定して、定員數しか立候補してゐないからである。

しかし乍ら、吾々が第一に要求し第一になすべきことは當選しても、しなくても、第一に要求し、またなすべきことである。否、それは吾々が既に日常不斷に鬪ひ來つたことである。當選するならば、その戰線を議會にまで延長するに過ぎない。

私は選擧ポスターに次の如き五項目の中心スローガンをかゝげて、民衆に公約してゐる

二十歲以上の男女に選擧權を與よへ!

働く者に生活を保證せよ!

耕す者に土地を保證せよ!

税金は大金持からとれ!

既成政黨を打破せよ!

この中心スローガンは、吾黨大會の決定した三運動のスローガンであり、そして總選擧は、この三運動の波に乘つて組織し、選擧後に於いても、黨はこの三運動を黨の半恒久的な大衆的日常鬪爭として行ふことによつてゐる、即ち當選者は、黨によつて組織された三運動のための全國的民衆運動の先端としての

企圖を議會に於いて執行すべく、既に大會に於いて命ぜられてゐるのである。

二

謂ふ所の三運動とは何か？

三運動とは徹底普選獲得運動、生活權擁護運動、既成政黨打破（既成議會彈劾）運動——三つの運動を綜合した民衆運動である。これは昨年の九月より繼續的に全國支部を中心として、或は集會、演說會、示威運動、ポスター、ビラ戰、署名請願運動によつて行つて來たものであるが、最も成功的に行はれたものは、群馬に於ける諸車稅廢止の民衆運動、新潟に於ける產米檢查制度改正運動、東京、大阪に於ける借家權運動、婦人解放署名デー、五十四議會彈劾運動、兵庫に於ける諸車稅廢止運動等である。運動は未だ端初的であつて、民衆の基礎的要求なる經濟的要求を捉へて大衆を動員してゐるが、何處に於いても、既成政黨との對立戰となつて民衆を極度にアヂテートしてゐる。黨が議會に小數でもその先端を有するやうになれば、三運動も全國に展開し、今後に於いて恰も英國に於けるチアーチスト運動の如く、無產階級の最大中心運動を形成するやうになるであらう。

三

徹底普選運動とは何か？

本運動は普選法を改正して普選の趣旨を一層徹底せしめて、無產階級の政治的攻擊力を增大せんとする。民政黨は『普選の一票は普選の功勞者なる吾黨へ！』と云つてゐる。普選は一見、既成政黨が賜物として民衆に贈つたが如く見え、またしかく吹聽してゐるが、しかし『普選は無產階級成熟の尺度』（エンゲルス）であつて、無產階級の臺頭に壓倒されてしぶしぶ出したものである。それ故に普選の本旨なる財產制限撤廢に矛盾するが如き、立候補の供託金制度がある。これは無產階級代表者の立候補を致命的に妨害するものである。また性別年齡及び住居の制限がある。これは有權者數を可及的に減少せしめんとする企圖である。產業線に沿ふて勞働力を動員されつゝある勞働者に於いて住居の制限は、殊に誤りである。更らに大衆動員を禁止する小刀細工的禁止條項がある。これ凡ての運動に於いて、黨を唯一の力とする無產者への抵抗に外ならぬ。また既成政黨は普選を恐るる故に三黨首の妥協等の醜劇を演じてまで解放を今日まで引きのばしたのだ。

吾々は次の如き改正意見を持つ。

（イ）滿二十才以上の男女の選擧及び被選擧權。（ロ）言論、出版、集會、結社の自由。（ハ）言論及び文書による運動の自由、（ニ）制限及び干涉の排擊。（ホ）投票日の公休制と給料全額負擔。（ヘ）供託金制度の撤廢。（ト）居住制限の撤廢。（チ）缺格條項の撤廢。（リ）大選擧區比例代表制の採用。（ヌ）買收の嚴罰。（ル）不在投票。（オ）殖民地に於ける普選の卽時實施。民衆は普選を待ち望んだ。こん度の總選擧によつて、民衆の徹底普選の要求は更らにアヂテートさるゝに異いない。吾々は有效にこの民衆の要求を組織し代表するであらう。

更らに投票日の公休制のためには、この選擧中の吾々の一つの鬪爭でもあつた。政府は二月十九日が第三日曜にも拘らず投票日を二月二十日にしたといふことは、如何に普選に對し、新有權者なる無產民衆に對し熱意なきかを物語るものである。彼等が府縣會選擧當時の大なる棄權率を見て、特別立法の必要を云々し、また棄權防止を宣傳するといふも、勞働力を唯一の生活手段とする民衆殊に生活難の中にある今日に、第三日曜の十九日をさけて二十日に決定したのは、如何に辯ずるも、全體としては棄權の獎勵であり、階級的には無產階級の代表者への妨害なりと斷ぜざるを得ない。吾黨は解散卽日政府に向つて、投票日を十九日にすべしとの要求をなし、二十日に決定さるゝや、政府に對しては、(一)投票日の公休。(二)投票日に於ける一切の雇傭有權者の解放。(三)投票所の增設を要求し、同時に同樣の要求を勞働組合及び黨支部を通じて各工場、會社に要求した。後者は大體に於いて成功した。

『滿二十歲以上の男女に選擧權を與へよ!』のスローガンはこの徹底普選を示す。

四

生活權擁護運動とは何か!

この運動は社會に有用なる機能を營みつゝある全民衆に、その當然なるべき生存權を社會的に保證せんとするの運動である。社會を構成し、社會的機能を營みつゝあるにも拘らず、民衆は生存權を脅威され、剝奪されてゐる。これはかの金融恐慌以來、その甚だしきを加へて來た。金融恐慌によつて、全民衆は、、、、、、、、への奉仕のために九億七千萬圓の重税を課せられたばかりでなく、勞働者には產業の合理化の名の下に、工場閉鎖、時間延長、賃銀の引下、解雇——失業が、農民には立入禁止と立毛差押、小賣人には重税と破產、俸給生活者には事業縮少と馘首が襲つた。しかもそれに反抗せんとするものの上には、、、、、、、、、。今こそ民衆にとつて『稀有困難』の秋である。

生活權擁護運動は、かゝる民衆の要求を代表し、殘されたる最後一線——生命の權利を防衞し、生存權と勞働權を獲得せんとするもので、最小限要求として、次の如き十法案を立法化されんとするものである。

(一)勞働組合法(團結權、罷工權、團體協約權)、(二)生活賃金法、失業保險法(勞働權)、(三)健康保險法改正、(四)休銀預金者救濟法、(五)家屋税、諸車税の廢止、(六)借地借家法の改正と全國的實施(借地借家權)(七)完全小作法(立入禁止、立毛差押反對——耕作權)、(八)貧窮者救濟法、(九)入營者家族扶助法、(十)小賣商人の免税法。

『働くものに生活を保證せよ!』、『耕すものに土地を保證せよ!』は以上の十法案要求の具體的スローガンであつて、以上の十法によつて必要なる財源、或は代り財源は財產税——資本課税等。所得税、相續税の高度の累進賦課、庭園税、利權税——水利税等の新設或は增率である。これ税金は大金持より出させるのである。

五

以上の凡ての要求のためには既成政黨と闘爭することによつてのみなされる。『既成政黨打破』は吾等の直接的闘爭であり、また綜合的闘爭でもある。既成勢力——地主と資本家——の前衛なる既成政黨と闘爭してのみ、民衆の意識は高められ、無産階級の政治勢力は擴大してゆくのである。

六

以上の三運動が吾黨が、從つて吾々黨員が協力して闘爭し來たものであり、將來も闘爭しゆくものである。吾々は當落を問はず、この運動のために渾身の勇を鼓さねばならぬ。若しも當選するならば、議會に於ける民衆の前衛として、この運動のために除名を賭して闘ふのみである。

山岡警保局長は無産政黨候補に就いて、『田淵豐吉のやうな奴をもう二三人出してやつてもいゝではないか』と語つたと傳へられてゐる。[illegible]民衆の利益と一[illegible]資本家[illegible]黨とは全く相對立してゐるからである。此の對立を[illegible]る。政府の役人や既成政黨の人々は、無産黨の議員を目して『紙まぐれ者』位に考へてゐるらしい。

しかし無産黨議員の背後には組織されたる大衆があり、それを核心とする民衆群がある。無産黨議員は單なる人氣の代表者でなく、直接のこの大衆の代表者であり、その先端であり、部分である。小數であらうにちがひない無産派議員は、その要求を、その小數者の院内の掛引きによつてのみ通さうとはしない。、、、、、、、、、、によつてのみ通すのである。議會に先端を有する全國的大衆運動によつてのみ獲得するのである。議會と街頭を貫く既成政黨と無産黨の對立——地主及び資本階級と無産階級の對立との强烈なる對立闘爭を通じてのみ吾々の陣營は擴大するであらう。

吾々は過去に於いて幾度か民衆運動を起した。例へば惡法反對運動、對露非干渉運動等しかしその民衆運動は多くの場合、その先端を議會に有しなかつたために、單なる警官隊との小ぜり合に終り勝ちであつた。無産黨議員の當選は、かゝる大衆運動の戰線の議會内への延長に外ならぬ。

若しも私が當選するならば、黨の既定の方針に從つて、先づ第一に徹底普選運動のための大衆運動の先端として力闘したいと考へる

(三、二、三、宇都宮にて)

帝國主義戰爭防止のために

藤森成吉

私は先づ次の事を斷言したい。

私が『若し當選したら、』私は『國民』の爲に闘爭しないであらう、否、私は國民の九割五分を占める勞働者農民無産市民大衆の爲た[illegible]選[illegible]した。

[illegible]選して[illegible]

けに闘爭するであらう。何故ならばこれら無產民衆の利益と一握りの資本家及び地主の利益とは全く相對立してゐるからである。

此の對立を無視して『國利民福』を標榜するは、無智に非ずんば欺瞞である。

言葉に於て判斷せずして、、に於て判斷せよ。

國利民福論者政友會——その過去及び現在の全行動は、大資本家及び大地主の擁護であり、無產民衆の抑壓である。普選の通過を最後迄妨害したものは政友會であり、對支出兵を決行し、川崎造船所勞働者の解雇に、、、、、させたのは政友會である。

國利民福論者民政黨——歪み曲つた普選法の交換に、治安維持法を發布し、、、、、、、を制定し、三頭首の妥協を行ひ、政友會の資本家救濟七億圓國庫負擔に全員一致を以て賛成したのは、實に此の政黨である。

國利民福論者實業同志會革新黨——これ亦產銀救濟、日銀補償の問題に於て、完全に政友會、民政黨と行動を共にし、國利民福が如何に無力な、空虛なるものであるかをマザマザ證明した。

繰返していふ、私は議會に於て『國民』の爲に闘爭するに非ずして無產民衆の爲に闘爭するであらう。

所で無產民衆が、即ち勞働者が、農民が、及び小商工業者、俸給生活者、自由職業者等の大部分が、今日即時實現を求めてゐるものは餘りに多い。何故ならば彼等はすべてを與へ、而してすべてを奪はれてゐるのだから。勞働農民黨の諸政策と雖も恐らくその一部分に過ぎまい。勿論無產民衆諸君より派遣された私は、全身を犧牲にしてその貫徹の爲に戰はんとするものである。

然し乍ら勞働農民黨の諸政策の中に集中的に表現されてゐる民衆の要求や主張、八時間法にせよ、最低賃銀法にせよ、耕作權の確立にせよ——それらのものが、今數名の代表が無產民衆から議會に派遣されたからといつて、資本家地主の代表との『紳士的』協議によりて、即時實現出來るかの如き幻想を、讀君にふり撒く事は、もとより私のせざる所である。之を實徹せしめる者は實に私といふ個人ではなくて、又議會に於ける協議ではなくて、實に民衆の大衆的、、、、である。曾て大正二年官僚的桂內閣を瓦解せしめた者は誰でもない議會外に於ける數萬の民衆の數回にわたる、、、、、であつた、既成政黨をしていや〱ながら普選を施行せしめたのは、勞働組合、農民組合の急速なる勃興を通じて現れた民衆の擡頭であつた。

若し日本に於て十八歲以上の男女が、現役兵士たりと雖も悉く選擧權を所有し、住居制限供託金が撤廢され、八時間勞働制が確立され、働く農民に土地が保證せられるに至るならば、それは無產黨代議士の力ではなくして實に勞働組合農民組合、工場代表者會議、村民縣民乃至國民、、、、、、、、による大衆的、、によるものであらう。

問題は如何にして大衆的、を强大にしてゆくかにある。問題は莫大なる金力によつてすべてを獨占してゐる資本家地主と軍閥の外央

ふべき何をも有せざる被支配階級の、力と力との消長にある。

されば支配階級は、治安維持法、治安警察法、暴力行爲取締法、警察犯處罰令、出版法、新聞紙法等を武器として、民衆の言論出版集會結社の自由を徹底的に彈壓するのである。私は勞農黨の代議士として、議會外の、、、、、、、、、へて、大衆諸君より發せられたる一肉彈として、諸君の要求を、諸君の主張を、議會内に於て、彼等の代表の面前に於て高らかに叫ぶであらう。彼等の秘密、彼等の欺瞞、彼等の壓迫を公衆の面前に於て殘りなく曝露するであらう。

私はそれこそが無産黨代議士がなさねばならぬ最も重大な任務であると考へる。それこそは秘密と四疊半とを好む彼等を、、、せしめ、議會外の大衆團結、、、、、、を愈々活潑ならしむべき道であらう。然して反對に後者は、議會内に派遣せられた肉彈をして愈々活潑に、愈々有力ならしめるであらう。

要言すれば、政治的自由の獲得——大衆的行動、言論出版集會結社の完全なる自由、團結權罷業權の獲得、『若し私が當選したならば、』私は一身を賭してその爲に戰はんとするものである。

第二に我が議會に於て、牢獄と、、、、の下にも、飽く迄戰はんと覺悟してゐる任務は、帝國主義戰爭に對する鬪爭である。民衆の生活が今日か程に迄破綻してゐる重大なる原因が、負ひ切れぬ重税にある事は誰でも知つてゐる。しかもその苛れん誅求の重なる根據は、一方に於ては六十億圓に近い公債の償還、他方に於ては年々五億に近い軍事費にある。

サヴエート聯邦を除き世界各國に於ける軍事費の異常なる膨脹、市場競爭の激烈化の現狀は、かの歐洲大戰直前よりも數倍も深刻となつてゐる。人は屢戰爭勃發の刹那迄戰爭の必然を信じない。だが危機は今や著しく切迫してゐるのだ。

來年、さ來年と軍事費の負擔豫定は益々激增してゐる。憲政會内閣の時にきまつた六億七千萬圓の補助艦建造費だけでも、なほあと四億圓以上殘してゐる。更に一度び火ぶたの切られんか、民衆の財貨人命の損失は、測り知る事は出來ない。しかもこれらの犧牲はすべて、銀行家と重工業資本家の祭壇に捧げられるのである。

『祖國擁護』の、、をあばき、民衆をその毒牙より解放する爲に、全努力を盡す事は、支配階級の利害を徹底的に對立する、無産民衆の代表者が當面議會に於て果さねばならぬ第二の根本的任務であらう。

之を要するに、資本家及び地主の地位を維持し發展せしめる爲の一切の政策に反對し、彼等の犧牲に於て、全無産民衆の生活の向上の爲に鬪ふ事——こゝに私の全立脚地がある。

そんな事をすれば社會が混亂しはしないかと危惧する者に對しては答へん、資本家や地主の助けを借りなくても、社會が充分に發展してゆける事、否、益々よりよく發展してゆ

く事の出來るといふ事は、今日もはや世界的事實に於て證明濟みである、と。
すべての負擔は資本家と地主に！

人間本位の政治樹立

杉山元治郎

瓦木村の家を擧げて選擧事務所に參つて居るので御手紙を只今拜見致しました、政戰に忙しくゆつくりと意見を書いてお送りする時間はありませんが、簡單に御答へ致しましやう。

私の立候補した所以のものは、今までの既成政黨は一部有產階級のみの利益を計つて、多數の民衆を無視し犧牲に供してゐるから之を奪還し、立憲政治の本義に引戻しやうと云ふことです、言葉を代へて云へば金力本位の政治から人間本位の政治に立直さうと云ふことであります。

其で若し當選の榮を得るならば第一に議會

勞働者に仕事と食を與へよ！
働く農民に土地を與へよ！
すべての人民に自由を與へよ！

に提出すべき問題は眞に働く農民階級を保護し、安心して仕事に從事することの出來る樣な耕作權を基調とした小作法であります、或は又生糸繭の問題にしても今の樣な單なる製絲業者の保護救濟を排して之を生產する農民自身を保護救濟する樣な案を提出したいと思ひます、其には現今の樣な農工兩省を通じて七千萬圓餘りの少額では駄目です、其で所謂產業振興費の增額をすることです、其がために陸海軍費の如き膨大なるものを剗減するが良い、軍縮も良い、在營年限短縮も可なりであります、或は土地增加税、相續税の累進加重等によつても充分に補ひ得ると信じます。

働く者を保護するためには[illegible]制定も必要であります、健康保險の國庫負擔も大切であります、殊に兵役は我等多數無產階級の者の負擔されてゐる義務であります、活動の中心、生活の本體を失ふのみならず猶ほ多少の小使錢すらも仕送らねばならぬのであります、此のために如何に苦しんで居るでしやう、故に在營家族の補助金を給與することも是非議會に提出せねばならぬ問題である、例へ一人當り二十圓を給與するとしても現在の十七師團で七千萬圓餘に過ぎない、一部金融資本家を救濟するために七億の補償をなしたことを思はゞ約其の金利で出來るのであります、若し出來ないと云ふならば誠意がないのであつてなさないのであります。

私は斯る實際生活に觸れた、お互無產階級の緊急問題を捕へて提出し働いて見たいと思ふて居ります、色々申上げたいことは澤山ありますが演說會に行く時間が來ましたから之れで擱筆します、以上でも大體御察し頂くことが出來ると存じます。

生産者本位の小作法の制定のために

高橋龜吉

一

普選第一回の議會に於て無産政黨の主張すべき問題は幾つかある。否、實を云へば、從來の政治のすべてに對して、その根本的改革を要求せねばならないのである。だが、無産政黨の一員として、當面の議會に於て、此際私の主張を集中さして見たいと思ふ第一の焦點は生産者本位の小作法の制度についてゞある。併し、この問題に私がその主張の焦點を第一に集中さして見たいと云ふわけには、此の問題が、單にいま當面の大問題になつてゐると云ふことのみからでは決してなく、それ以上之を通じて、有ゆる政策の決定につき、われ等はその善惡取捨の判斷を如何なる立場から定めるか、と云ふその思想的根據を社會の民衆に披瀝し、斯くすることに由つて、已成政黨の立場とわれ等の立場が如何に異るかを明かにし得ると考へるからである。

二

われ等は「公平なる小作法の制定」と云はずに、ワザと、「無産者本位の小作法の制定」と謂ふ。その譯は、公平なる小作法と云ふ場合には、小作人と地主とを對等に見てモノを考へてゐて、あく迄も、今日のまゝの地主が永續すべきことを含意してゐる。之れに對し生産者本位の小作法と云ふ場合には、農業そのものゝ進歩繁榮のために、若し地主の存在が邪魔をしてゐるとせば、その場合には農業發展のために必要な犠牲を地主に荷はすことは、社會の進歩發達のために却つて望ましきことであると考へてゐるからである。

一體、イツ、如何なる世の中に於ても、社會のため有用な働きをなしてゐる者の利益が優先せられ、さうでない者の利益がそれだけ犠牲にせられると云ふことは、これは、社會秩序の最も進歩した整理方法として、常に利用せられてゐることである。現に、資本家自身、その事業の衰微を挽回する必要に迫られた場合には、遠慮なく、その中の優秀なる社員を殘して、日常余り有用な働きをしない社員を馘首する。社會に於てもさうだ。いま、我國は、その農村の疲弊を救治するため、農村經濟に一大整理を必要としてゐる。而してその整理の方法は、云ふ迄もなく農村經濟の進歩發達を阻む「無用の長物」を先づ、、することであらねばならない。今日の我が「地主」は正に、その除去せねばならないもので

ある。

彼等はいま、農業經濟の上何等の働きをしてゐない。その證據には、いま我が地主が一朝にして假りに潰滅したとしても、我が農業はそのため露程の打撃は蒙らない事情にある。否、若し「地主」が無くなれば、我が農業はそれだけ地代の負擔から免かれ、これ迄耕作しても（地代のため）引合になかつた土地まで優に引合ふことになり、斯くて我が農業は益々繁榮するに至る筈である。

にも拘らず、斯様に何等世の中に働きのない「地主」が、依然農村經濟に君臨して、高い小作料を取立てる「力」を持つてゐるわけは何故か。要するに、我が法律が「地主」を不當に保護してゐるからである。われ等は斯様に、何等世の中に有用な働きをしてゐない「地主」なるものを、國家が法律を以て斯く保護すべき必要を認めない。恰かも明治維新當時の凡俗無用の家老の如く、之を社會から、、、とか、寧ろ、我が經濟今日の行詰を打開するために必要な、進歩的方法であると信ずる。之れ、われ等が地主と小作人とを對等視する小作法に反對して生産者本位の小作法の制定を極力主張する所以である。而して、此の生産者本位の小作法制定の主張の中に流れてゐる理論は又、他のあらゆる政策の方針を決定するわれ等の羅針盤である。

大衆的政治行動の尖端として

加藤勘十

一

今、選擧戰の其最中にあつて、「若し議會に出たら」と云ふことを前提として議論を進めることは、何んとなくオコガマシサを感じます。さりとて、吾々の議會政治に對する態度に自ら一貫したるものがあり、又、無産階級解放運動の一兵卒として議會に臨む場合には「何を爲すべきか」「何を爲さねばならぬか」と云ふことは、無産階級解放運動それ自身が必然的に決定してゐる處であります。其の決定された「何を爲すべきか」「何を爲されはならぬか」を述べることは、選擧戰の最中と否とを問はず問はれる儘に何時でも答へ得られる處であるが故に、其の點を此處で述べることゝします。

我が日本勞農黨は一、徹底普選の獲得、二、生活權の擁護、三、既成政黨打破の三目標を當面の重要なる闘爭目標として闘爭を終始してゐます。この三目標を闘ひ抜くことは日本勞農黨の使命であります。從つて、議會の内と外とを問はずこの闘爭目標を忠實に勇敢に大膽に闘ひ取ることこそ、吾等の全政治的態度であります。この故に、議會内に於ける一切の行動の準則は大衆の政治的行動の基礎の上に立つものであります。即ち日本勞農黨員

の議會内の行動は、大衆の政治的行動の尖端としての行動に制約されてゐます。これ日本勞農黨が單なる代議士の集團黨でなく、日常不斷に街頭に勇敢なる政治行動を行ふ大衆黨である所以であります。が、今茲での問題は『若し議會に出たら』に限局されてゐますから、そのつもりで述べることにします。

等しく徹底普選の獲得と云つても、又、生活權の擁護、既成政黨の打破と云つても、議會の内と外とでは自ら其の具體的方法が異らねばなりません。然らば、議會に於いて如何なる具體的戰術が用ひ得られるであらうか、問題は正に其處にあります。

二

吾々は吾々の日常政治鬪爭の尖端としての現はれである議會に於ける仲間の行動を決定する前に、先づ今日の議會の機構を解剖することを忘れてはならない。私は此處で今の議會の機構を解剖してゐるだけの餘裕をもたないから、唯、それを念頭において議會してゐるものであることを諒解して頂きたい。

『若し議會に出たら』……何事を爲し得るであらう。私はそれを三段に分けて見ることができます。一、何を爲さねばならぬか。二、何を爲すべきか。三、何を爲し得るかであります。

一の『何を爲さねばならぬか』は無產階級の歴史的使命を遂行する上に、必至的に爲さねばならぬ殆んど絶對的の事柄であります。若しこれのみが全部であると考へるならば、吾々は議會に對して殆んど何等の働きかけをせないと同樣の結果をしか期待することができないであらう。けれども、これは當然に二の『何を爲すべきか』に關連して考へ得られると思ふ。『何を爲すべきか』及び『何を爲し得るか』は共に戰術上の問題であります。『何を爲すべきか』とは、常に何事をか爲し得る機械を敏速に摑む必要があり、絶へず客觀的條件の微細なる變化に對しても最善の注意を怠ることなくして、『何を爲さねばならぬか』の無產階級意識を基調としての能動的行動を指します。三の『何を爲し得るか』は當然に二の『何を爲すべきか』に關連してゐるので、この言葉は『何をなすべきか』の常識的表現であると思ひます。從つて問題は唯『何を爲すべきか』の一點に集中されるのであります。

しかしながら、斯の如き抽象論を進めることは意味をなしませんから、この脚地に立つての具體的條件を觀ることとします。

吾々の視野には第一に政友會、民政黨を中心勢力とせるブルジョア勢力の集團が立ち入つて來ます。政友會、民政黨其他の群小黨派のブルジョア勢力が、多年、議會に蟠居して限りなき專横を恣にして來た事實、國民の名を僣稱して民衆の自由を挫ひ民衆の利益を蹂躙して來た彼等の、、、これに對して吾々は抑へ難き憤激を感じながらも、被壓迫階級としてより以外の何ものでもなく、彼等の犯せる儘に任すのみであつた。今、辛うじて貧弱なる選擧權を獲得したからとて、吾々の被壓迫階級としての立場が一寸でも解放されたのではありません。さればこそ、吾々が失はれた

る民衆の自由の奪還のために徹底普選の獲得を叫び、蹂躙せられた民衆の利益の伸張のために生活權の擁護を叫び而して是等の、、を犯せる膺懲として既成政黨の打破を叫び闘ふ所以も玆にある譯であります。唯、從來は彼等が國民の名を僭稱して民衆の自由を奪ひ民衆の利益を、蹂躙して來たのに對し、吾々は僅かに外部から、これを論難し攻撃し得るに過ぎなかつたのでありますが、今度の選擧を轉期として、彼等の、、の内部に喰入つて内部から彼等の、、を指摘し、攻撃し、而して幾分でも彼等の、、を牽制し得る道が開けた譯であります。されば、吾々が強力なる攻撃力、強力なる牽制力を有ち、民衆の自由獲得のために、民衆の利益擁護のために闘はんとなれば、吾々は議會の内部に強力なる尖端を有たねばなりません。議會内部に於ける吾々の尖端力の強弱は必然に吾々の議會に於いての『何を爲すべきか』を決定するのであります。

三

今日の階級對立の尖鋭化した生活態様は、吾々をして議會に進出するの道、ブルジョア階級の政治的、、を牽制する道が開かれたからとて、それが吾々の生活態様に何等の變化をも與へないことは云ふまでもないことであります。或は、今日より以上に大規模に深刻に彼等をして國民の名を僭稱せしめることになるであらうことは容易に豫測し得られることであります。彼等の階級的結果が、より深刻に、より擴大され、彼等の階級的支配力かより強大となることは、彼等の勝利の謂ひにあらずして、彼等の敗滅を約束する先行條件でありまして、歷史的必然の順路に過ぎないのであります。が、一時は確かに鋭い力となつて支配慾を滿たさうとするに違ひありません。議會は、國民の名において、法律——強權——の名において、彼等の支配慾を滿たさせるに好箇の舞臺であります。

この舞臺こそ、支配階級と被支配階級、搾取階級と被搾取階級、自由を滿喫せる者と自由を渇望せる者との闘爭の舞臺でなければなりません。其處に「議會で何を爲すべきか」の内容が決定せられる譯であります。

我が日本勞農黨は黨の綱領三の「吾等は無産階級の利害を代表し、特權階級の壟斷する議會の徹底的改造を期す」が示す如く議會を民衆の自由の府たらしめんとするものであります。而して三十有餘の具體的政策をA徹底普選の獲得。B生活權の擁護の二項に包括して全民衆に公約すると共に、絶へざる日常の闘爭を展開してゐます。議會に於いての行動も當然にこの闘爭の延長であります。

四

吾等をして全民衆と公約せる闘爭目標を高らかに掲げて勇敢に議會に猛進せしめよ。私は議會に於いての行動を制約せる今度の選擧に臨むに當りまして、飽くまでもこの態度を持して居るものであります。只、私のくれ〴〵も遺憾を禁じ得なかつたことは、色々の

理屈もあるであらうが、結果において支配階級の分割支配に合流するが如き行動を實際において取られたことであります。若し其者が階級的に見て是非とも立候補せられなければならない理由があつたならば、なぜ選擧協定協議會の席上において述べられなかつたであらうか、私は其の理由を聴いて已み難きものであるならば、階級的立場から喜んで立候補を中止するものであつたのであります。然るに其の席上においては、某黨の代表者は理由として其者は此處（、、、）以外には立候補する場所がないと述べられ、第二回の會合に於いては愼重に審議するため、自ら休憩を要求されて約一時間以上に亘る自黨内部の協議の結果、已に公表されてゐる如く立派に聲明されながら後に至つて自ら其の聲明を破棄し、對立立候補されたのである。私は若し自分一箇の立場であつたならば潔く某君に讓つたであらう。けれども私の運動資金は多數の勞働組合員諸君の膏汗の結晶から醵出されたものであつて、私自身ではどうにもならない關係上已むなく對立候補として選擧に臨んだのでありますが、私の階級的良心は淸朗に澄んでゐます。この機會にこれだけつけ加へて一般世間の人々に對して諒解を求めておきます。

農村金融の合理化

澤田　謙

政戰の陣中に筆を執る。なにしろ、徒手空拳、既成政黨の金城鐵壁に肉迫しやうといふのだから、言論戰より他に途はない。一日六回七回の演說會といへばそれまでだが、殆んど寸暇の休まる時はない。殊に、何の緣故もない土地に飛びこんで、たゞ一意上州男兒の意氣に訴へ、既成政黨の打破、國民政府樹立の烽火を擧げたもんだから、政友會は民政黨を闘るを忘れ、民政黨は政友會に對抗するの遑なく、悉くが小生、輸入候補・中立候補に對する包圍攻擊だ

が、その間において、私の感激に堪えないのに、青年諸君の精進である。私はこの既成政黨包圍攻擊のなかにあつて、勇躍して戰ひうるのは、同志諸君の熱烈なる活動と、この青年諸君の奮闘とである。それにつけても、普選初頭の議會に要求したいのは

普選年齢の低下　である。一たい普選年齢を二十五歳にしたことほど、不合理千萬なことはない。二十五歳といつても、九月十五日までに滿二十五歳だから、數へ年にすれば二十七八歳だ。兵役適齢を滿二十歳にして、選擧適齢を滿二十五歳にするなんぞ、人を馬鹿にしてゐる。政治だつてやはり國家の大事だ政治に參與することのできないほどの無能者なら、始めつから國家の干城の方も御免を蒙

つて、滿二十五歳にした方がいゝ。私の實驗にみても、年の若いものほど政治思想が發達してゐる。箸にも棒にもかゝらぬのは、頭の固りきつた御老人だ。滿二十歳以上にして、あまり有權者の數が多くなりすぎるといふのなら、御老體の方に御遠慮願ふ方が、よつぽど合理的だ。尤も、いまの既成政黨が、いまだに餘命を保つてゐるのは、この年齡制限のためである。だから普選制度の議會で、すぐにこの選擧年齡二十歳案が、可決されることは難かしいかも知れないが、それだとて放つておくわけにはゆかぬ。政治革新のため、まづ第一に私はこれを叫ぶ。次に、

勞働法と小作法　との至急制定を要求する。私は何も階級闘爭理論の上から、これを唱へるのではない。階級闘爭學說のなかには多くの無用な空論癖を認める。しかしながら資本家（雇傭者）と勞働者、地主と小作人との關係は、是非とも明瞭にしておかなければ無用な爭議のもととなる。殊に自作農創定を餌にして、小作法の制定を延ばすのは、まつたくいはれなき無法である。日本に一人の小作人も、急になくなるのなら別だが、いやしくも小作人が農作するかぎり、小作法の必要はいふまでもない。田畑の小作權と、物品の賃貸借權とを一緒にして、いつまで平氣でゐる氣なのか。明治二十年時代と昭和時代とでは、社會は激變してゐる。法律があまりに社會と離れすぎては、天下不安の基である。勞働法と小作法、この點については、無產諸政黨の間に、或る程度の協同が成立しうれば、便宜であると思ふ。

農村金融と預金部　との關係は、言ふだけ野暮であらう。元來預金部十五億の金のうち半分は農村からでた郵便貯金である。農村の金融が逼迫して、つひに事茲に至れる今日、政府預金部の金を運用して、農村金融機關をつくるといふことほど、この世に合理的なことはないであらう。預金部資金運用委員會ができたつて、その委員を任命するのが大藏大臣であつてみれば、どれだけ信頼ができるか。一たい何故、預金部資金運用の狀況を、あのやうに絕對祕密にしておくんだらう。まさか國民の前に公表できないやうな。後暗いことでもあるといふのか。いやしくも國民の金を何等の担保なしに預つてゐる以上、その運用はあくまで公正、且つ公開的でなければならぬ筈である。祕密の影にはいつでも疑惑が伴ふ。

恩給法の改正　官吏軍人およびその遺族のために、いま一億二千の恩給扶助を費してゐる。われらの收める國稅の一割四分に當る。これだけ拂つて、果してかゝる國家に御奉公を終へた人々の老後や、その遺族の生活を保障するに足るだけの支給ができてゐるか。日露戰爭に勇名を天下に馳せた山岡愛讃中佐の遺族が、僅か三十八圓の扶助料で糊口する有様では、斷じて然らずといふ他あるまい。然るに一方、大邸宅を構へ自動車を備へ、大會社の重役をしてゐる人が、恩給を貰つてゐるやうな事實もある。一たい文官平均三十五歳、陸軍武官三十三歳で、もう恩給年齡に達するなどは、おかしな話だ。三十三や五は男の働き盛

り。ピン〱して働ける人に、何も恩給をやる必要はない。そんな金があるなら、それを傾倒に恩給や扶助料で衣食せねばならぬ人に分けてやる、それを倍額にでもするのが當り前である。或は一般國民のためにも、一種の恩給保険制かできれば、更に結構であるが、これは長くなるから省く。(二月六日草)

勤勞無産者の生活安定を

鈴木文治

現今の政治が全く一部有産、特權階級によつて壟斷され、國民の大多數を占める勤勞無産階級の要望が殆んど悉く蹂躙し去られてゐる結果、我々としては寧ろ來るべき新議會に要求すべきことのあまりに多いのを嘆じたい位である。これを一々擧げるならば恐らくは紙數幾百枚を費すも尚ほ足りないであらうと思ふ。しかく現今の政治は欠陥だらけである

勿論、我々の究極目標は、この資本主義、官僚主義を基礎とする政治、經濟、社會を根本的に改造することに在るのだが、それの完成には今後幾星霜の耐忍を要する大事業であつて、到底早急に實現し得べきことではない。我々の爲し得べく、また爲すべきことは、この究極目標を根本の基調とした現存制度の漸次的改革以外にない。この意味からして殆んど理想的とも言ふべきわが社會民衆黨の政綱政策を、次の三綱目に大別して、私は連日の政見發表演說會其他に強調してゐる。

一、社會政策の徹底

二、財政及び税制の根本的改革

三、人權の伸張、自由の獲得並に生活の解放

これの詳細な項目については社會民衆黨の政綱政策に譲つておかう。

しからばこれらの漸次的改革の目標のうち、何が最も焦眉の急を要する問題であるかと云へば、恐らくは先づ第一に我々勤勞無産者の當面の生活を安定させることであらう。資本主義社會に特有な、大多數無産者を襲ふてゐるこの生活不安の暗雲こそ眞つ先に取り拂はなければならないものである。この生活安定の要求を我々は大體二つの方面より見ることが出來る。卽ち、第一は、直接に勤勞無産階級の生活に覆ひかゝつてゐる過重な負擔を除去することであり、第二は、勤勞無産階級が生活解放の自衞手段として行ふところの合理的な社會運動を保障することである。兩々相俟つて初めて我々の生活は前途に光明を認めることが出來よう。この意味に於て我々は次の諸項目を擧げることができる。

一、普選の徹底

現在の選擧法は名は普選であるが、實に於て普選の名を恥しめる點が多い。年齢制限に於て、居住制限に於て、取締法規に於て甚だしく不當である。新議會に於ては何よりも先づこの普選法の改正を要求する必要があると思ふ。改正の要點は、年齢低下(二十歳)婦人參政權、居住制限撤廢、保證金制度撤廢、投票時間の公休、不在投票權確認等であらう。

二、勞働立法の完成

勞働組合運動は勞働者の生活解放の要求に基いてゐるのは無論だが、國家産業の將來にも重要な意義を持つてゐる。團結權、罷業權は勞働者が資本家に對抗する當然の自衞手段であり、しかも世界各國に於て既に認められてゐることであるから、これの確認を要求する勞働組合法の提出は言ふ迄もなからう。次に國際勞働條約の實施である。八時間勞働制、最低賃銀法、社會保險法の制定等のことは既に國際勞働會議に提出、若くは條約となつてゐるのであつて、これが實施に當然の義務でなければならない、その他健康保險法、工場法の改正等も逸すべからざるものである。

三、農民政策の徹底

我が國農村の疲弊は昨日や今日のことでない。眞の農村救濟こそ當面の急務と言はざるを得ない。既成政黨の地主擁護策に對抗すべく、小作、自作の生活權確立を高唱しなければならぬ。先づ農民の自主的運動たる農民組合を公認し、團結權、罷業權を確立することは言ふ迄もなく、完全なる小作法を制定して、耕作權の確立、耕地不當明渡しの禁止、立毛差押への禁止、最高小作料の設定等を要望する。農村金融の充實もまた缺くべからざることであつて、農業保險、肥料農具の國營は素より産業組合、農會、農業倉庫等を耕作者本位に改革することが必要である。

四、俸給生活者保護法の制定

下級官公吏、會社員は云ふ迄もなく、大商店の店員、小僧等の俸給生活者は、勞働者農民の如く集團的運動を許されないために、不當の取扱を受けて來たものであつて、その生活を安定せしむるために俸給生活者保護法を制定することはまた當面の急務である。八時間勞働制、不當解雇の禁止、退職手當の公定、公休制の確定等を要望する。

五、失業對策の徹底

失業の浪は資本主義の犧牲であり、資本主義社會が當然責任を負ふべき罪科である、また社會問題としてこれほど重大なものはない。我々は、失業保險法、失業救濟のための公營事業等を要求する。

以上の外、生活手段及び生活必需品に課せられてゐる稅金の撤廢、居住權の確立、教育の機會均等など重要なことが多いが紙數が盡きたから省くこととする。最後は我が國官僚主義的外交に對する糾弾、民衆外交の確立もまた絶叫さるべき重大事であらう。

新議會へ

田子一民

新議會に對して予は何を最も緊急切實なものとして要求するか。風雲に戰つて論陣を張りつゝある予は、この問に對して何を答ふべきか。予の當落は有權者の掌中にあり。予の要求は予を除きたる他の議員にのみ望むことゝなるか、予も亦その議員の一員に加つて予の要求に對して、予もその責任の一端を分つべきか。運命は神のみ之を知る。予はたゞ、漠然たる地位に於て新議會に要求するものである。

第一、新議會の議員の言論と態度に對する要求は最も切實なものである。議會の言論はやゝもすれば個人的憎惡、政黨的反感がわだかまり、敵本主義に陷し勝ちである。言論を飽まで公明であり正大であり、些の個人的偏見政黨的見解を許さないものと信ずる。而して選擧者に對する議員の言動も國士らしく、紳士らしくありたい。此の要求は餘りに平凡な要求であるが、議會に於ける言論は一般風教は勿論、府縣、市、町村會その他の會議に影響すること甚大であるから先づ第一にこれが改善を要求する。議會否認の聲のある端をこゝにも發して居る。

第二、會議の形式について特に煩雜を極めて居る現狀を打破したい。議事のかけ引きの爲め、無用の發言を試み議事の進行を妨害し、徒らに議事の形式などを爭つて終に、重要事をよそにして騷擾するの風がある。實に議會の神聖を汚すものである。予は議長の統率の公正と議員の宏量とを要求するものである。

第三、新議會に表はれ來るべき法案として勞働組合法、失業保險法、母子扶助法、兒童保護法、貧困兒就學奬勵法、補習教育強制法、國庫負擔を多くして二十五歲未滿禁酒法の如き當然表はれ來るものと思ふ。

予は議會は、平和であり着實であり、雄大であり、少しの感情も情實も混せず、國民的に愉快な一家庭の樣にしたいと思ふ。（岩手縣二戸郡荒澤村新町佐藤方にて）

私の最も感銘した書物

ヘンリ・フォード

奥村伊之助

H商業學校のX號室では、今や百に近い目玉が、教壇に起つた總主任兼修身受持のY先生に集中してゐる まつたくこの先生の口から、今日は教科書をよして話をしてやらう」と聞く事は意外な事でした。小説？詩？生徒の好奇心は、先生の言葉をまつばかりでした。

『この本を讀んだ人が有りますか？』先生の右手にあげた本の表紙には明かに「フォード」の黒い四字が浮いてゐます。

『序文には獨逸の一新聞紙上に「工業家、商人及び技師達の會話において、苟しくもヘンリ・フォードの本に言及し得ざる者は、以て經濟問題に發言するの權利なし」と書かれたとあります。私はアメリカ人を最もきらふ獨逸の新聞に、なほこの語の有るのを知つて、異常な感激をおぼえたのであります。私もかなり本を讀みましたが、この樣な本は、まつたく近頃の最も良い本として、皆さんに私がすゝめ得るのであります』

まづこれによつて私達の心は、先生の一言一句にと次第にひきつけられて行つたのであります。一時間余にわたつた先生の話は、すべて熱であります。そしてこの熱は、私達の胸をば眞ッ赤にもえたゝせました。

『今まで私が話したのは、ほんのこの本の初めの方だけであります。だから私は、皆さんが一人でも余計にこの本を讀まれん事を希望するのであります。この本を讀んで、フォードに成れるか否かは保證できません。しかし、この偉大なるフォード主義は、いかなる小規模の商店といへども、實行する事が出來るのであります』と最後に先生は結ばれた。

『おい買つたぞ！讀んだら貸してやらう』

『僕も買つた』

翌日廊下でAとBとはかうといひました。Bの手には成程四六判のそれらしい本が抱かれてゐます。しかしこんな問答は、到る所で幾回も繰返へされたのであります。

「働いて取れ！」それは今更の樣に私達をかりたてました。例の「不可能なる事なし、唯なさゞるのみ」のフォードの金言は、眞先に暗誦されました。これは單なる資本家のバイブルでありませうか。我がY先生は進んでこれを學生達に紹介して下さいました。わづか一圓の本、しかし、これを求めて遂に得なかつた者の多數あつた事實は、いかに「ヘンリ・フォード」が多方面にわたつて要求されてゐるかを證明してゐるのであります。私はY先生を心から信頼してゐます。と同樣に、「ヘンリ・フォード・人及び其の事業」が、昨年度出版圖書中の白眉である事をも確信してゐるのであります。

大は一國の政治から、小は商店の經營に至るまで、現代の經濟學上の諸主義に立脚して、これを行ひあるひはこれを行はんとしつゝある現象は、まつたく指を屈するに手の足らぬ程廣範にわたつて居ります。しかし、そのいづれもが主義なり理想なりと實際との間に、食ひ違ひを生じてゐることは同樣であります。即ち、最も顯著な例として、私達は彼のロシアをあげる事が出來ます。しかるにその中にあつてたゞ一つフォード王國は別としなければなりません。彼フォードを、ヘンリ・フォードを、私達が尊敬する理由は、彼が資本の集中と、能率の增進と、浪費の節約とを主義として、それを着々彼の王國に實現しつゝある點、しかも大成功を收め得た事にあるのであります。

『先生ッ』

經濟の時間が始まるや否や、早速Oが叫びをあげて席を起ちました。級の視線はこの早々の質問に耳をかたむけて集りました。やがてOの口が開いたのであります。

『先生はヘンリー・フォードを讀みましたか！フォードを！』

しかし、私達はこのOの叫びを學窓からもう一歩出て、廣い世間へ聞かす事の出來なかつたのを、殘念に思つたのでありました。

ルイズ・フィスシャー著
荒畑寒村譯

石油帝國主義

（四六判上製）
定價壹圓五拾錢
送料拾八錢

最新刊

最近十年間の世界經濟の進展は歐亞兩洲に跨がる夥しき石油資源と此れを圍繞する帝國主義諸列強間の石油爭奪を外にしては理解し得られない。暗澹たる經濟的無政府と血腥き政治的紛亂とを國際政局の上にはらみつつ頭のテッペンより足の尖端まで武裝せる帝國主義諸國家間の石油奪爭戰は世界再分割の國際的伏魔殿たる、かのゼノア、デュネーブ其他無數の外交的紛亂の眞因であつた。世界經濟は今や資本主義凋落の深淵に戰慄した。本書は此等石油帝國主義戰裡に於ける世界經濟進展の活舞臺、國際政治的外交問題の眞因を闡明して餘す處なく譯文の平明は內容の深奥と相俟つて、現下かまびすしき帝國主義諸問題解決の寳典として一讀巻を措く能はざらしむるものなる事を疑はない。

發兌
芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番
改造社

猪谷善一著

（菊判上製天金）

定價貳圓五拾錢　送料貳拾四錢

明治維新經濟史

最新刊

維新史に關しては世既に幾多の著書はある。併しながら、最近學界に於いて澎湃として興れる日本研究の資料として見るべき新時代的科學的研究の維新史は甚だ稀である。著者は新進の學者、維新史の研究に沒頭し、既に發表した幾多の研究は學界の注意を惹いた。今回研究の結果を纏めて本書をなし、添ふるに幾多得易からざる資料目録を以てした。國史の徹底的研究、我が國社會運動に深き關心を持つ學徒の必讀書である。

〔內容〕第一章、序論──第二章、西洋帝國主義の東漸──第三章、幕末に於ける社會階級と其の鬪爭──第四章──開鎖の論爭と其思想的背景──第五章、幕末に於ける國家論の發達──第六章、明治維新政府の經濟政策──第七章、自由主義の衰滅と國家主義の全盛──附錄、（一、我國大學教育の發達と其社會的意義。二、明治維新と國民革命。三、日本に於ける貨幣經濟の發達。四、明治廿五年の勞働問題論）──明治維新經濟史文獻──明治維新經濟史年表。──索引

發兌　芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

文學博士 佐佐木信綱著 ―最新刊―

萬葉漫筆

四六判極美装

定價弐圓

送料二十錢

日本否世界の文化史上に於て千古不磨の光を發するものわが「萬葉」である。吾々は過去の歴史にこの偉大なる藝術を有することに驚嘆し、且限りなき喜びと誇りとを感ずる。本書は萬葉學研究の權威佐佐木信綱博士が多年研究の集積たる隨筆的考證にして、この人、この好題目を捉へて麗筆は如何なる光彩を發するか。萬葉名歌の鑑賞、難解な歌の解釋、萬葉學史の研鑽、萬葉古寫本の話、萬葉派歌人の傳記逸話を初め、萬葉にまつわるくさ〴〵の物語は、珍寶たる挿繪十六葉と相俟つて、讀者をして興味深く讀み行くうちに、萬葉に關する深い智識と、豐かなる趣味を體得せしめ、かの難解無比なる天上の萬葉をして、何人にも親しみ易き地上の萬葉たらしめてゐる。愛する同好の士よ―來りてこの詩の泉に汲め。

内容一斑

萬葉集と天平時代・萬葉集は二十卷なりや・萬葉の影法師・萬葉集と畫題・萬葉研究と婦人・萬葉ここかしこ・桂萬葉に關する一發見・萬葉集の嫁入本・萬葉集の外國語譯本・萬葉と大和・權律師仙覺・源實朝・小泉八雲氏・新選萬葉百首・萬葉珍本談・萬葉遺憾物語・萬葉集笑話・外二百餘。（挿入書畫十六葉）

發兌 芝區愛宕下町 振替東京八四〇二一番 改造社

拾年間に貳千五百圓の貯金通帳を煙にして仕舞ふも同然だと云ふ煙草を、何か簡易方法で禁煙出來ぬものでせうか？

共れにはこんな面白い事實もあります……

實業之日本社代理部と榮川堂主

先年十月十三日煙草きらひ液と煙草代用品カロット味發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から右一組の御注文がありました。店員が此事を主人に報告しますと「明日私自身で代理部へ上つて右の煙草きらひ液とカロット味の效果を御說明申さう」と云つて翌十五日午前十時右の一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました。丁度社員の各位は熱心に執務の最中でありましたが快く私を迎へて見れました。其處で榮川堂主は自身來社せる誠意を述べて右發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました。さうして先づ社員の煙草好きな方に御試を願ひました。すると其社員の方は早速右の煙草きらひ液を取上げてお試しになりました。暫くして其方は此の煙草きらひ液で口を御洗ひになつてから、今度は從來の煙草をお吸ひになりましたが社員の方「やつ！之は驚いた。之は煙草が不味くて吸へない。煙草がいやになりました。到底煙草等吸へないですね！」驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ樣に全社員の方が總立になつて右の煙草きらひ液を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草が吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讚下さいました。其處で更に店主は口を開いて弊堂の煙草きらひ液を御用ひになれば殆んど努力を要せずして煙草はまづくなつて知らず〳〵のうちに煙草きらひになると云ふ事と、幸ひに近來弊堂の「煙草きらひ液並にカロット味」が多くの人々に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました。歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御獎勵の言葉を述べて下さいました。

禁煙有効

ホントに貴下が煙草を御廢めになりたい御希望ならば、何うか弊堂發賣の左の兩品一組を御使用下さい

一組

一、煙草きらひ液、（一日に二三回此の液の小量で口を御洗ぎ下さい。すると煙草がまづくなりますから短期中に煙草に對する嗜好心や愛着心が無くなります。）

一、カロット味、（煙草が不味くなつて吸はれないと云ふ事だけでは何となく手持無沙汰のものですから、此のカロット味をパイプに詰めて煙草の代用品として御愛用下さい。カロット味は溫雅なる香氣と忘れ難い清涼なる甘味を有して居りますから、之を口にする時は輕い刺戟と快感とを口中に殘しまして遂には煙草に對する永き嗜好も打忘られませう。殊に朝起きの時又は每食後口中に「ねばり」を生ずる時等、又は散步等には無二の伴侶です。）

◎カロット味・煙草きらひ液　甲號　サック入象牙製パイプ付　金參圓五拾錢

◎カロット味・煙草きらひ液　乙號　ベークライト製パイプ付　金貳圓五拾錢

送料（内地十八錢　臺、朝、樺四十五錢）

代金引換送料（内地三十錢　臺、朝、樺五十五錢）

御注文は振替利用を便とすれども御都合により御申越次第引換小包にて送品可仕候

◎代金引換は御便利の郵便局を御申越願ひます。

發賣元　東京府大森不入斗八二八　振替東京五二九壹番　榮川堂

代理店　東京市京橋區瀧山町十三　振替東京七〇六八番　天下堂

死生雑記（遺稿）

大正六年三月—仝七年十一月

徳富蘆花

大正六年

三月十八日

山路愛山が三月十五日午后十時。五十四で死んだ。痃癖の結果だ。二日寝たきりらしい。昨日の新聞で知つて一驚を喫した。

十六日が角田浩々歌客の一周忌だ。

連りに死ぬる、民友社の残黨が。

愛山は余にとり兄の一人と云ひ得可き男だ。彼は夙に余の文章を推稱した。

「グラッドストーン傳、吾れ間然する所なし……若し具はることを君子に求めしめば云々」と云ふたは彼だ。

「何邊も書き直したンだらう」とけちをつけた竹越三叉に對し、家庭雑誌初號の「ガリバルヂーの妻」をほめたも彼だ。

同じ家庭雑誌の「横井つせ子」を二度讀んで泣いたのも彼だ。同時に「柳の家」の女主人を確有と斷じ、國民之友雑錄のハムフリー、ワアドを其著を讀まずして評いたと斷じたも、彼の眼だ。

文章に於ては早くから認む。人物については晩年漸く敬を見出した。

愛山館で曰く、死を恐れざるは難からず、木の枝でもよし、よく／＼見つめて居れば、それで死を恐れず。

×

三月十九日

愛山の葬式日だ。春雨瀟々と降りくらす。僕はソファアに寝て、Mの三味を聞きながらうと／＼とする。彼一時、此一時だ。夜與謝野晶子の出産に關する夢を細君の讀むを聞く。鐵幹が「君が解剖の時……」と云ふ一語で夢がきれて居る。淋しい。

聞き終へて奥のW・Cに往く。何だか氣味が惡い。W・Cの西の硝子障子がすつと開いて、あの大きな愛山の顏がぬうと出たら、など思ふ。他は愛山に對し、敬愛あつて憎惡がないから、何も恐いことはない、と思ひ直す。

然し死は矢張恐い。

×

三月廿四日

愛山靜岡茶話集の第二編を出して見る。死後初七日である。源氏物語を讀むこの條下に、

世の諺にも「人生僅か五十年」と云ふ通り、限りの有るものである。歴史の材料は限りは無い。其限りの無い材料を短い僅か五十年の生涯で、どうして悉く消化することが出來ませう。……我々はどうしても、茲に於て或制限を自分の用ゐる材料に附けなければなりませぬ。

とあるが、惻々として人を動かす。愛山も日暮道遠の感があつたらう。彼は死を豫知して居たかも知れぬ。

彼の殘りの壽を余が貰ひ受けるのだ。

「死んだら如何なるか」と云ふ書を出し見る。母胎の十ケ月を全醒時代、地上生活を半醒半睡時代、死後を全醒時代と分けて居る。Mの曰ふ如く、西洋思想だ。こちとらは、死後は覺醒自在の時と觀じたい。而して母胎の十ケ月も面白いが、精虫が父の腰に居た時から溯つて考へると、其處にまだまだ面白いものが伏して居さうだ。

誕生は嬰兒にとりて一の死、死は成人にとりて一の靈的の誕生、――それは異論なし。だから人の死せんとするや悲しみ、子供の生るゝやおぎやあと啼く、と云ひ笑ふ。

×

三月廿六日

昨朝頭上を東京方面に飛んで行く飛行機の爆音が著しく耳に響いたが、今日の新聞で見ると、二機の其一が歸途墜落して、乘手が死んだ。名は杉野中尉、眼が惡くて銀縁眼鏡をかけて居たさうだ。

あの爆音は死の羽風だつた。

×

四月一日

大江保吉が話に、愛山は死ぬる前日までも、「世界の過去、現在、未來」の速記を訂正し、机の上に載せてあり、電話で速記者の名を聞きつけ「大江にやる原稿は出來て居る」と云ふたさうだ。それから死ぬる一時間程前に家族を呼び、各々それが絶筆だ。

此婆婆はとても死なれぬ世なれとも
　生れぬ先きへ生れ行かなん

と辭世を書いた。

それから、男の子三人を二度も呼び、「おとうさんが死んだらエラクなるぞ」と云ふたさうだ。

基督教世界を見ると、青山が愛山の臨終に、「死ぬに邪魔だから君は彼方に往つてくれ」と云ふた、とある。

愛山の死樣は漱石の死と共に洗錬された江戸ッ子氣象を發揮して居る、と夫婦して語り合ふ。

「死の蔭に」の成本を愛山は見なかつた。然し廣告は見たのだ。自慢をしてはならぬと前置きして、大江に大江が嘗て「生、死」の本を書いてくれ云々と云ふたことをリマインドする愛山は死に、余は生きて、二人の著書が同時同所に廣告されて、大江書房の二本柱となるも面白い、と云ふ話を余は大江にした。

×

四月十二日

愛山は「死ぬに邪魔だから彼方へ往つてくれたまへ」と云ふて死んださうだ。、、青山、愛山の修養が其處に達してるとは知らなかつた、と今頃驚いて居る。、、けだ。、、だからさ。

俺なんか齧つ齒にしがみついても死なぬ。漱石程の偉さもないし、愛山程の勉強もして居ないから、死なうたつて死なれぬ。

Mは、余は神の愛子だから、病氣も死にもせぬ、安心して居れ、との暗示を得たと云ふ。

×

五月廿一日

伊香保仁泉亭から榛名上りをする。細君が[illegible]を容器ごと持參しやうとするので、不吉な感がして、少しばかり持つて往かせた。歸途、余等の其處を過ぐる少し前に、蓬萊館の番頭が猿澤橋の少し上で、近道を通り、滑つて脚の骨を碎いた、ことを聞き、異な感にうたれた。

×

五月二十四日

湯中子稲荷山墓地に須田おさきさんの墓參した「あなたが居ないから淋しい」と細君が頻に云ふ。

×

五月二十六日

父の滿三周忌。去年は「洪水老人三周忌」の茶の罐を隣の名儀で送つて來て余所に腸を煮やしたが、今年は伊香保山上に何事もなく過す

ぎて淋しい。

×

五月二十九日

林お品叔母危篤の電報。面倒だから默過。

×

六月一日

昨夜お品叔母死去の電報。

昨夏伊香保に上るとて新宿停車場で別れたが會面の終りだ。伊香保に往くとて別れ、伊香保から歸るとすれば、最後の別れだ、細君日く、叔母も伊香保に來たかつたのです、一昨年思ふた事を魂は果して、いよ／＼今歸り去つたのです。

八月一日九十九里から歸つて、猫の「玉」の死體發見。

×

八月四日

此一日に九十九里から歸つた

今朝新聞を見ると、去二日の午後銚子の君ヶ濱で、早稻田出の青年詩人三富朽葉、今井白楊の二人が游泳中行衛不明となつた。土用波に浚はれたのである。

何たか逃げて歸つた鷄の難から、若者のかはりに若い斯二人を餌にとつた感がある。名代の死の感がある。

それにしても、朽葉、白楊――脆い死をさながら豫想して自ら命じた樣な雅號だ。

×

八月十日

不圖中央公論の廣告頁を見る。早稻田文學の八月號に三富朽葉の文がある。

八月號の早稻田文學はうつかり看過したのだ。急ぎ取つて見る。「微笑に就ての反省」メーテルリンク張りの述懐感想文だ。然し死に近い美しい魂の告別の辭だ。恐ろしい程靈は自ら知つて居る。

佛蘭西行はもつと遠い、より好き所に往つたのだ。陸が銚子の海に行く前に、魂は其故郷を望み、光明に希望に喜悦に滿されて居たのだ。三富朽葉瞑す可し。

×

八月十五日

倉本總太郎が昨朝死んで、今日は葬式があつた。

十六の女と、七十一の父を殘して、彼は四十で逝いた。細君さんの日く、代りたいやうです、人さまが皆「惜しい」と云ふて下さいます、四十で死んでもナマケて居る人の幾倍かゝる仕事を爲て死れた…

……と。

ナマケて居る余の耳が少し痛かつた。

×

八月廿二日

水瓜あたりか、九十九里から歸つて後、腹工合が思はしくない。今日は下痢四回、少し悲觀する。Mも四回W・Cに通ふたさうで、熊太郎叔の様に夫婦で死んでしまつたらなど思ふ。余は熊太郎叔の再生と思ふことがある。それは小笠原當本が千代三の再生であつたやうに。熊太郎叔は松枝姉を遺して死んだ。余等は何も遺さない。與川夜人が昨夕五十八で死んだ、これも腸胃さうな。男僧になつてから十日もたゝぬ。

そんなこんなで大に氣がめいる。

然し園藝園から種物が來たので、播種して白菜に種を蒔く。而して弓を射て元氣になつた。余Mに曰く、外に出ると元氣が出る、自然の子なのだ、室内では滅入るが、出ると元氣になる、土を踏むと力が湧く、「ドウセ鄕も俺と同化するのだが、そんなに急ぐことはない、ゆるゆるやつて來い」と土が曰ふ。

土は本當に「力」である、「財寶」である「慰藉」である。

三千坪の土を與へられたことをしみじみ感謝する。

×

十月五日

十月一日未明の暴風は東京附近に大分死人を作つた。

夫婦は死んで、子供だけ埓生に抱かれて、助かつたのがある。三千七百圓の簞笥の傍を離れ得ずに死んだ女がある。羽田の穴守の寫眞屋は、海嘯で夫妻ののつた戸板が覆へり、夫は溺死し、妻は松の木に流れつき、二日夫の死骸が上つて、臨終に泥がついた短刀をのせてあつたら、妻が短刀をもつて月光の照る水に入つて了ふたと云ふ。最初の小海嘯で逃げて、もう大丈夫と歸つて來て二度目の大海嘯で死んだ者もある。一番好いのは、水難救濟會の月島見張所の看守岡本桐美と云ふ六十二の爺さん、日清海戰に軍艦の司厨として勳八等をもつて居る人、其夜が當番で、夜の九時に「今夜は唯では濟みますまい」と云ふ最終の電話を會長吉井伯にかけたを最後のたよりとして、ポッケットには救濟會圖用の蠟燭を入れて溺死して居たと云ふのだ。

死は恐ろしいが、然しあるものには端的に寧ろ邪魔物の形を打破つてくれた嬉しい力だ。好いもの、生命あるもの、頗なる善なる美なるもの、死ぬ事の出來ぬものには、死は透明なミヂアムで、恐怖でも何でもない。琥珀の如く一瞬間に美しいライフを其まゝに保存してくれる結晶作用だ。

ふるいふるい自然が永久に新しい自然だ――畢竟良く生きるが生だ、「死は生命に呑まれる」のだ。

×

十月六日

人は自己の意志によつて生れない。だから自己の手で死んではならぬのだ。

×

十月十一日

八月十四日に死んだ倉本徳太郎のひとり娘が死んで、十三日が葬式と云ふことだ。棺を弔儀にやつたら九月廿九日にチフテリヤで死んだのだつた。廿五日に天神祭に往つて、それから少し悪く、それでも寝たのは最後の一日位だつた。裁縫も綿入が縫へるまでにしたに、と爺さん婆さん大弱りださうだ。

彼女は十六、八月の父の葬式に白装束の姿がまだ眼に残つて居る。

×

十月十二日

咽喉が悪かつたり、直ぐ癒くなつたり、心臓の鼓動が烈しくなつたり、それから非常に氣短になつたり、――其様な事から死の恐怖があると見え、昨夜は寿命が今日で盡きるてふ夢を見た。

[illegible]

矢張り死の覚期がつかぬと生活の腰が据わらぬ。俺はいつでも出来ると思ふて居たが、矢張り真面目でないのだ。真面目とは不快活でない本當の快活だ。

「まあ待て、まあ待つてくれ」で毎日延ばし延ばしして居ては駄目。

九十九里の漸隠者、二階堂とくよ、あんな若い連中でも決死の機會に遭ふて居る。

×

十月十三日

我等が死んだら此邸宅は如何ならう？と云ふ話を、朝乳の序でに夫婦する。

遺言状を正月元日毎に書く西洋人の習慣は好い。然し遺言状なぞ書くのはいやだ、死にくさいから。

けれども此様な話をしたり、考へたりするを見れば、いやでも五十になつた證據たるは爭はれぬ。

今の處では、我等の邸宅は此人に――！と思ふ様な人はない。

倉本の孫女の葬式を避け、夫婦で多摩川畔の玉翠園に一日遊びくらした。淋しく退屈な一日だつた。然し静かな、しんみりした一日でもあつた。

細君は、「今、生涯の何處に居る、とお思ひなさいます？」と云ふ問を、多摩川を眺めつゝ發した。

俺は其様な事を考へるのがいやだつた。

俺は Many more days and nights を期待して居るから。

父は九十三まで生きた。

俺は百までは生きたい。

百まで生きるとすれば丁度半分だ。

───

昨日は柏木義圓が湯淺次郎と來て、門から追ひかへされた。

今日は留守に落葉が來た。

蓋し墓參人の日が追々迫るのだらう。

安全にして行け、──だ。

×

十月廿五日

中瀨古六郎の夫人病死の報。

井上善吉の父堀水牛介翁の追悼文を書いて居たので、同志社關係のこゝにも偶然ならぬ結合があるやうで面白い。

妻の死、恐い、恐い。

×

十一月十三日

はなれの物置を片づけ、櫃を物置大形に上せたら、蝙蝠を呑んだ蛇の死骸が出て來た。五尺餘の青大將、可なり干からび、尻から二尺ばかりのところから蝙蝠がはみ出て居る、吐くに吐かれず、下すに下りず、苦しみ死に死んだのであらう。

猫の玉に、此青大將、今年は此はなれで二つの死が、酷しくわが眼を射た。

蛇でも死は寂しい、殊に苦しみ死にの死はいたましい。

×

十一月九日

今日は夏目漱石の一周忌だ。全集の卷は出はじめ、伊太利式とかの立派な墓が出來た。夏目はもう死んだ。

俺は生きて居る。長く永く現身に生きやうと思ふ。

「則天去私」とは夏目の標語。

俺はこれからます／＼我を立つるのだ。私を張るのだ。我も私も追々大きく強く幾多の生命を織りませ織りませたものであるべきは無論である。

日露戰の主將の明治大帝の裁決ではないが、

「戰ふ、俺は」

×

十一月十二日

依田喜三郎が約の如く三年後に再命を求めて來て……また三年延ばされたムシャクシャを昨日は手紙で云ふてよこした。其中に浩々歌客の死後一年半ばかりの間に、先輩知人が九人まで死んで居る。一寸先は闇だ、だから明日に吃度[illegible]るとは申されぬ、とある。先生も死ぬかも知れぬ、と脅したのだ。或は呪咀でないとも云へぬ。

Many thanks! But I will disappoint you, my dear fellow, living many many years longer than you yourself.

×

十一月十三日

馬鹿喜三郎の呪咀のたゝり目に、風邪をひき込んで、鼻水が出る、咽喉が痛い、手足がだるい。大分悲觀する。大に奮起一番を要する。

×

十二月十三日

吉岡商蔵が來て、「濱殤」のおひろ、實は日階落お春の死を告げる。四五ヶ月咯血とかで東京から麻布在の實家に歸つて居り、昨日死んだので、今日組合葬にするさうだ。五十四だつたさうだ。

すべてのものには終がある。聖者も死ぬれば、淫婦も死ぬる。然しすべてのものが跡を遺す。お釜が二十歳になつて、色男なんぞ拵へて盛に活躍するさうだ。お[illegible]で[illegible]が可[illegible]。

風邪で氣食がひどく惡いので苦しい。

これで萬一死んだら、風邪が肺炎になつて、死ぬるのは一足飛びだ——など思ふ。

Mが「大丈夫ですよ、直りますよ」など云ふのは、あまり仰山だ、片腹痛く、いつそ厭世の氣がしてならぬ。獨逸の亡びぬ如く、俺も死なぬ。

余、細君に曰ふ、我儕が生に對するひつかゝりはホンの少々の所だ。少し油斷すると、直ぐ切れて了ふ、面倒臭くなつて了ふ。ところで、今の處、自分の生を希ふ者は誰か。本屋位のもの、近くに出版の望をもつ福永一朗位のものだ。……色々に生の興味を喚起さなければならぬ。世界の色々のものを見、色々のものを食ふ興味も其一つだ。

Mは讀書が面倒だ、と云ふ、然し少しづゝでも勉強しなければいかぬ、と余云ふ。

豪傑醫者の青山胤通が死にかゝつて、苺を欲しがり、東京中を探して大隈さんの温室から三粒獲て喜んで口にしたと云ふ話。俺はマアレツさんから花つき、小さな實つきの苺二十一株をもらふて一昨日フレームに植ゑた。生つたらやりもしたく思ふ位。

×

十二月十四日

此頃の霜枯の庭がひどく好い。好い屋敷になつた。それで門前の雜木林も此方のものになると、立派なものだ。余曰く誰に讓らうか。(心には鶴子にと謂ふ) M曰く、人に住まるゝのはいやです、墓を立てゝ、あとは荒れ放題に荒らして置きたい。

×

十二月十五日

墓地に午後往つて見る。靜かな師走の午後の日が落ちて居る。吉岡の墓地に新しい土饅頭は、あはずれお春の新墳だ。紙旗の碗の水には、木の葉が二つ三つ漬つて居る。位牌には、「新聞寂慈眼惠光信女」とある。皮肉のやうで、本當だ。慈眼から見れば可憐兒だ。惠光に浴すれば、彼女も漏れぬ。

姦犬の米は死んだ。
姦婦のお春も死んだ。

第何代目かの姦犬の吉左衞門も遠からず死ぬるだらう。罪よ死せよ。惡よ、亡びよ。肉よ、朽ちよ。而して唯光と愛のみ永久に生きよ。

×

十二月廿三日

トルストイの額に、半分朝日が射して、背面の半面輝やき、生けるやうだ。余、妻を呼んで曰く、御覽、光が射して、トルストイが生きてるやうぢやないの。妻曰く、本當に、ねエ。Tolstoy's Sayings を見たら、十二月廿三日の條に

"I have lately begun to feel this——that when I die I shall not really die, but live in all the rest."

×

十二月廿四日

青山胤通さんが到頭昨日死んだ。今日は十四日だ一と傍人に聞いた日から約十日目だ。死ぬるにも中々容易でない。

×

十二月廿六日

牝鷄の一羽が死んだ。此二三日時々頓興な叫聲を出したりして居たのだ。嗉つまりでないかとちらと思ひつゝ其まゝにして置いた。主人

の愛不足の爲に死なして了ふた。御免よ。

×

十二月廿九日

庭の西隅を歩いて居ると大きな殿樣蛙が蹲つて居る。木の枝でつついて見る、動かぬ。よく見ると死んで居る。此頃の寒さで凍死したのだ。大きな蛙だけに、可愛想でならぬ。

×

十二月三十日

昨日縁側を這いて居た足長蜂が今日は死んで居る。此も凍死なんめり。弱いものも死ぬ。強いものも死ぬ。

×

大正七年正月十日

柳川春葉が昨日死んだ。好人物で、江戸ッ子で（東京生れを意味する、父は筑後の柳川者だ）淺い意味での成功者――ねばりが足らなかつた。然し氣の毒に思ふ。

俺も不如歸の脚本で、面識があるから殊に。中西忠吉の手紙によれば、九十九里の引田久次郎は前臘大晦日の聖路加病院で死んださうだ。意外である。昨秋の對面が彼の終だ。よくドオデエのあの本にも書いてやつた。よく町村會にも出てやつた。然し本當の話が十分に出來なかつた。そこに心がかりがある。

彼も細君に負けた。俺はあの細君が嫌ひだつた。諦めて居たからだ。引田も滿足して居なかつた。然し細君の腹には子が居るさうだ。引田も子に生きて、寂と戰ふだらう。

ドウも江戸ッ兒はねばりがなくていけぬ。男でも女でも強くならねばならぬ。憎まれ子世にはびこるで、あまり好人物で、あまり持てたり、あまりやさしかつたりすると長つゞきがせぬ。俺なんかも、角田浩々に呪はれたり嚇かされたりして、却て元氣を出すので好いのだ。

皆脆い。脆くてはいけぬ。釋迦も孔子も長生して居る。

細君の曰く、當代で長生するには、足を地につけることが肝腎です、大隈さんでも植物のお蔭でドンナに長生するのかも知れませぬ。俺も千歳村のお蔭で持てるのだ。

乃木め、那須でなぜ死ぬまで百姓しなかつたか。

×

一月廿日

昨午後遊龍生が來た。同父異母の姉もと子が肺病で去三日に死んださうだ。俺は過日新聞廣告に、野村友子の訃を見て、游龍の姉？と一寸思ふた。矢張り死んで居たのだ。

丹澤はがき。「白」が十二月晦日から發病、去十四日の夜半に死んださうだ。享年滿十一歲。丹澤のになつてから九年と七ヶ月だ。山の家の裏、梅の下に埋めたさうだ。村人からクヤミを云はれ、四五才の子が線香をあげたさうだ。「白は人となれり」と丹澤は書いてよこした。村の者が「白」の人格を認めたことにもとれるし、「白」は死んでもお時の腹に生れた女兒に「白」が化つた、とも解される。鶴は千歲を去り、靜枝は死に、白は死に、色々の段落がつく。

能登の人笹川良一なる男が、三十で死んだ兄の遺文一章をよこした。死顏が快活だつたさうで、其遺文も悟つて居る、然し哀しい。文に曰く、

「生れんと欲して生れしにあらず、生まんと欲して生み出さるべきものにもあらず。是れ皆大方廣の宇宙の主宰者のなせる業のみ。病死を厭はんと欲して厭ふに非ず、悲まんと欲して悲しむに非ず、之れ又宇宙の主宰者が宇宙の圓滿なる進步發展をはからんが爲めの御心と見るの外なし。半獸主義、神秘主義、自然主義、ローマン主義、何れか神の一面を語らざる。矛盾衝突は嚴に激する怒濤の花よりも美し。

我三十、今病みて家族、家庭、社會を見る時、噫如何に悲慘なる努力の衢よ。されど更に深く眼をそゝぐ時、戀にもだえて啼く鵂の音か、種族保存の爲め妍を競ふ百花か、賑はしい最後世の姿、生生たる哉、戰や酬、病みて心地死ぬべく思ふ時、黒闇々たる我の世界の一面を透して、人生は如何に美しきローマンスよ。食欲絶え、涅槃は將に來らんとす。可愛ゆい哉、我が敵よ。我と相容れざりし人の意見よ、長く我意見と相砥礪して世の進行に伴ひ世を作れ。

一本の銹釘にこもる電子の力にも宇宙を動かす力ありとか、我一片の骨肉千變豈徒らに見るべきものならんや。

一粒の砂に宇宙を見し詩人を今漸く解したる科學者も又美しき努力を見せたるものなり。幾代の高僧が面壁したる涅槃を偉大なりと知らしめし力も亦美しからずや。

我身肉の血よ、燃えよ、凝れよ、刹那を永遠とせよ、永遠を刹那とせよ。我肉の中に巣くふバチルスよ、狂へよ、躍れよ、我と戰へよ。世の醫術をつくりたる汝こそ文明の一大貢獻者たれ。瘦める皮膚は骨に纏はれ、髀も脚も、すべて肉の貯蓄なければ骸骨として起つも眩暈を感じたり。借りたるものは大方返報したるなり。今骨と皮とを燒かば借金は悉くすむわけ。生れぬ先の世に歸るなり。其先の世と云ふも此世の事に相違なきも、變化好きなる人間は生よ死よと喚く、又面白からずとせず。泣くもよし、笑ふもよし。

漸く蛙の聲を聞きながらねむれる時が來た。田螺は唄はぬと云ふ

が、あのころ／＼ころ／＼云ふのを聞くと、如何にも川蜷が呑氣に歌ふ様で、我も知らず知らず、ころ／＼とねころび、くら／＼とねむる。」

石川縣能登國鹿島郡鳥屋村字末阪
笹川嘉吉
大正四年五月十五日病死

×

一月卅一日

俺の二枚折の繪屏風の主の鈴木松年が死んだ。大を喜ぶ上品な男で、俺に近い。

素木しづが二十四で死んだ。片足切斷した女。俺はまだ彼女の作を讀まない。

「私しは寂しい」と云ふのが終に近い作ださうだ。三十三で死んだ花屋の主が呼んだのではないか。

松年は米僊より餘程上品。儒者の子の松年、町人の米僊、素は争はれぬ。

×

二月十三日

午後四時六分、十七才で死んだ、脚氣衝心で死んだ、弟の[illegible]

[illegible]

し來る。余に見せてくれとの遺書也。

去一月廿日送り來りし能登の笹川良一の兄の遺書と好一對。

先日は弟、兄の遺書を送り、今日は兄、弟の遺書を齎らす。兄弟の「我」死せよと神の、父の宣ふ也。

今日は母、兄、余に對する神の父の宣告を聞き、復讐の念燃ゆ。夕方夫婦書齋にあり、死の陰の眞黒くさし蔽ふを感じ、余悩む。今暫くものをあのまゝ出さば、余は殺されん。昨日から痛感する也。悩んだ後、到頭戰鬪的基督より、藝術的基督になることにす。書いたものは小説の料に蔵し、「春信」は純粹なる福音とするに決する。今死んでは、新アダム、新イヴになれぬ爲から也。

×

二月×日

製鋼所長官押川則吉縊死。

廣水一朗の日く、先日先生の自殺談を聞き、それから直ぐあの事があつて、ゾツトしました。

×

二月廿日

布哇の大瀬某は赤熊雌熊の觀物だ。余が死去の事を新聞から聞いた云々。昔なら縁起を恐がるところ、今はそれを歡迎する。余(?)の解は一

遍死んだのだもの。

×

三月一日

午前大江「死の隊に」二十九版の印税を持參し、午后は福一「新春」の第一校正を持參。生死踊を拔す、大修理。

×

三月十九日

昨日午前十時には吉岡の婆が死んだ。今日夕方弔問に往き、婆さんに告別する。九十ださうだ。末期は悪くない顔をして居る。お春死に、婆死ぬ。喜三公可哀想だ。「お春、斷るがいゝ」と啖呵をきつたが、もう二人とも居ない。

×

三月廿六日

昨夜風雨の中に、最初猫の聲をきき、後雞の騒ぐやうな聲を聞いた。風雨の中に出ると面倒で其まゝにして置いた。朝あきが來て雞が咽喉を食はれて、死んで居るといふ。あとで男をやつたら一羽ならず二羽まで死んだ。やはり昨夜の騒ぎがそれだつたのだ。一羽は縁の下へ引き込んであつたさうだ。鼬の所爲だ。先日雞舎のたゝきの大修繕を見て、あれは修繕せねば鼬や蛇が侵入すると謂ひながら、仕事が終へたら終へたらと延はして、所謂「惰不來」の結果は覿面だ。もう一二日の處で忽ちやられた。此は主人が雞に不親切、卽ち無慈と云ふ事に歸着する。根氣不足、愛不足、力不足だ。

雞よ。濟まなかつた。犧牲になつてくれて濟まなかつた。Next time I will do better おまへ達の死を無駄にはせぬ。

昨日は卵が四個出來た、と喜んだに。

×

四月十二日記す

先日新聞の死亡廣告に澤田純一の名がある。純一かと思ふたら浮文の二男のあの「大器晩成」たのだ。伏見で會ふて居るから、他人ならぬ感がある。弔狀を書かうと思ふ。葬送は南禪寺の天授庵と云ふのも、異な心地がする。純一兄、純一に眠れ。

×

四月十五日

杉本久三郎の祖母の葬式に往く。隅田喜三郎に聞くと、過日葬式があつたのは、秋山喜左衛門の長子某が死んだのであつた。通知[illegible]からの通知漏れで知らなかつたのだ。海軍に往つて歸つて脚氣になり、而して死んだのだ。俺は喜左の[illegible]を聞いたりして、彼を少し憫つて居たが、彼はもう死んだのだ。肺病中も一二度來た事もあつた。肺病で死ぬるなら、見舞してやつたものを。隣のお安の葬式の時如巳彼、今度もまた。隣が遠くて困る。

一月足らずの間に齢四つもとつたと喜左の述懐を聞いて、氣の毒になる。これも喜左の我を折る機會なのだ。

×

六月廿五日

赤倉から玉島かけて遊湯の留守に、發電所や浴室の修繕をすべく、島山の留大工を呼ぶ。午後來たのは若いのだ。親方は？　昨年十月死んだ、と云ふ。

胃腸が惡く、一旦禁酒してよくなつたに、また酒をはじめて再發したのさうな。

鬪に一籌を喫した。

昨年は年始に來た。mは今年も來たと云ふ。今年は十八になる其子が來たのだ。

ずるくても、酒のみでも、我儘無禮でも、死んでしまへば氣の毒があるばかりだ。

まだ五十になつて居なかつたさうだ。

弟子の高橋富藏語る。

×

十一月七日

島村抱月が一昨早曉死んだ。四十八。

「死にさう、死にさう」と二度云ふて、死んださうだ。須磨子も稽古に芝居に往つて、淋しい臨終であつた。

抱月は何だか勝利を余に思はせる。

須磨子に彼は失望したとしか思はれぬ。

愛すれば生かす。抱月は愛したであろ。須磨子は抱月を吸ひ殺したとしか受取れぬ。

細君も氣の毒、子供も可哀想だ。

才人可惜。

×

十一月十日

秋山紋の父富穀が八十八で死んだので、今日會葬、以前は大分困窮したらしいが、紋が稼いで、借家ながら立派な家を建て、其處から葬式を出したのは、爺さん嘸嬉しかつたろ。自然な滿足な死は好いものだ。

服部抑居の弟中村政之助が數日前に死んだ。基督教世界にある竹本菊代とは、今治の伊勢さんのあの「きいさん」であらう。

×

十一月二十七日

從弟西川季雄が肥後玉名で去二十三日病死した。大江義塾で共に居た以來、同志社でも遠く、それから多分顔を合はせず、手紙の交換もしなかつた。本家分家、ハデジミの相違で、故意に遠かつたのであろ。

淋しい男、淋しい生涯であつた。

むつつりと死んで往いたる男かな

フォード工場の實際

フォード工場の實際

――管理上より見たる――

武庫山松太郎

一、自動車市に入りて

北米の春未だ淺き三月上旬私は漸くのことで憧れのデトロイト市に入つた。パークプレースの高樓に登つて滿都の風物を雙眸に聚め、雄心抑へ難き新興都市の伸び行く姿を想望しては多感の遊子一片の感慨胸に迫るを覺えざるを得ない。

げに自動車の町デトロイト市！　フォード、ダッヂ、キャデラック、チャーマー、リンカーン、おのがじゝ技を競ひ新を追うて宛然に群雄競ひ起れるが如くである。

全米否全世界を壓倒する大自動車工場から日々吐き出される幾百千の自動車が鐵道に由りて各地に搬出される外に新車自らニユメキシコ、賣府、デイトン、キヤンサス等到着地の標旗をかざしてシヤシーのまゝ刻々東西南北に走り出す壯觀は世の活動を擧げて此一市に集中したるかの觀がある。

僅々十年の歳月の間に人口倍加して百萬となり一躍米國第四位の大都會となり各戸一臺の自動車を有する割合となつた。自動車市の目覺ましい發展と潑溂たる生氣とはげに米國人の理想を實現したる趣がある。

私はこの青春の町に入つたのだ。そして早速にも彼の名たゝるフォード自動車工場に半年の工場生活を遂行せんとして居ることを思ふと心自らときめくを覺ゆる。然し一月大西洋の狂瀾を超えて初めて北米の土を踏み今又知り人一人もない此の町に入つて而して生來始めての勞働の體驗を爲さんとするのであると思ふと稍々心細い樣な潜在意識が動き出さうとする。が何だ！　人間到處悉く友人だと思ふと又悠揚帆迫たる心持に自ら微笑む。

面を壓する幾千の高塔機關も私には何等の感興を添へるものでない。地を走る蜿蜒百足の如き自動車列も亦敢て驚心の沙汰でもない。

私の此町に來たる所以は然腺の材料を集めんが爲めでもない。世人

に誇示せんとする現麗な文章の種取りでもない。一つには工業都市の眞面目な中流家庭に入つてピューリタンの氣魄を存せるクリスチャンライフに觸れんが爲めと、一つにはフォード自動車工場に入つて少くも半年自ら職工として所謂フォード、アイデアを身體を以て讀破せん爲めとであつた。百萬市民中私は只々二人への紹介狀を持つて居た。一人は牧師のブラッドフヰールド氏で今一人はフォード自動車工場の教育部長マークヰス博士である。一つは中流家庭に入る爲めと一つはフォード工場に入る爲めである。此の二枚の紹介狀を資本にして私は半歳のデトロイト市生活――顧みて心往くばかり清く樂しく印象深かりし充實した生活を始めんとしてゐるのである。

牧師ブ氏に會はんが爲めに市西迷々の町を辿つていつしか着いたフオーレスト、アヴェニューのエルムの並樹を行けば初音ゆかしきロビンが人馴れて飛び交ふ様いたくも心を引く。遲々たる鐘の音の漂ひ來るフオーレスト、チヤーチにブ氏を訪うたのは午後の日斜に尖塔に流れる頃であつた。

ブ氏は壯齡正に三十五六、鷹風眞摯なる牧師として多くの信仰を一身に聚めた人である。此の町に居た間私の魂を如何ばかり慰め且つ導いて呉れたことであつたらう。同氏の世話で私は數日後此等のトレジュラーであり熱心な信者である市技師R氏の家庭に入ることになつた。R氏は夫婦暮らしで子供のない所から私を弟の如く時には子供の如く傾愛でなくして呉れたのであつた。私はR氏の家に入りし爲めに而して牧師B氏の懇切なる導きによりて且又それからそれと信者に知り合が出來て屢々に往來するに從つて私が此町に來た目的の一ッは自分の希望に近く達せられた。殊に工業都市でありながら市俄古の如き慌たゞしい雜沓も無く日曜日は全市シーンと靜まつて町々の寺から或は高く或は低く鐘の音が流れて如何にも其の昔の面影を存してゐるかの如き此町は信仰的情操を豐かに恵んで呉れる。老後はデトロイト市で送りたいと願ふ米人が多いと云ふ譯も無理からぬ事だと思つた。

二、マークヰス博士に會ふ

書冊堆裡のB氏に對座してる一人の先客があつた。ダグラス君と云ふ。巨軀六尺五寸眼光炯々として恰も仁王の如く握手の掌は清正の手に似て居る。此人數年前迄はフォードの教育部にマークヰス博士の下に働いて居たが戰爭勃發とともに交戰の野に立ち一躍少佐に昇進し今はY、M、C、A、産業部に働いて居るそうな。

私が明日ハイランド、パークのフォード工場にマークヰス博士を訪ふ積りだと聞いてダグラス君は直ぐ話を横取りして

「明日だなんて云はずに今直ぐ出かけやう。マークヰス博士は僕が知つて居るから一緒に行つて紹介してあげる。ブラッドフヰールド君、君のカーは戸口にあつたつけね。」

氣の早い男もあつたものだ。早速私の後に廻つて外套を引かけて呉れた。やがて私はブラッドフヰールド牧師に別れて車上の人となつた

勇敢なるダ少佐がショファとなつたので車は縱横に無人の境を行く如く疾驅した。車上熟ら〳〵謂へらくフォード工場に六ケ月も居ると云ふ願は並大抵のことではないので果して何の程度迄許容して呉れるか疑問であるからマ博士に自分一人で會つて緩つくりと希望を話して十分諒解を得ねばならぬのに、ダグラス君が無雜作にやつて退けて却つてその爲めに斷られたら今迄の苦心も水泡に歸するがと不安の氣もした。然しダグラス君委細頓着なく獨り吞込みで萬事胸中と云つた風に振舞ふので儘よ當つて碎けろと高を括つた。

乘つてるフォードは走ると云ふよりもジャンプしながら間も無くハイランド、パークに着いた。と見る白色の四階樓が三百エーカーの地面に所せまきまでに立ち並び樓閣直ちに幾ブロックかの通りを貫いて町を成して建つて居る。之れがフォード工場かなあと仰ぎ見つゝ玄關に入ると之亦六尺豐かな白髯温顏の案内係の老人が握手する。傍らのエルに乘つて四階に上るとダグラス君案内もなくいきなり右手の突當りの室の戸をノックした。

「カム、イン」

内から重みのある聲がした。戸を排して入ると正面の大きな机に五十五六才かと見える頭髮の白い血色の好い何處となく威あつて而も温容掬すべき紳士が居る。ダグラス君は何にか今少し曲もありさうなものと思ふのに、極めて簡單明瞭に來意を告げた。そして此の人がマ博士であると私に紹介して呉れた。マ博士はニコ〳〵しながらやをら椅子を離れてつか〳〵數步進んで私と握手した。立つて見ると小柄な人である。五尺二三寸だがかつしりした體格だ。

私は紐育のラッセル、セージ、ファウンデーションの長をしてるグレン博士の紹介狀を示した。

「貴君のことは已に紐育から紹介して來たので承知して居ます。だが研究の目的は主に何ですか」

博士は聰明な眼で私を凝視めた。

「私はヘンリ、フォード氏の理想を實行に依つて示されて居る貴工場に就いて人事管理其他の實際を見、我國の工場生活の參考にしたいと思つて參りました。」

私は主たる見學の眼目を述べた。

「夫れでは技術の方でなくフォード、アイデアの研究ですね―

「然り、フォード、アイデアの研究です。然し單に話を聞いて工場を一巡して足れりとするのではなく六ケ月間滯在して研究したいのです。」

私は率直に自分の考を話した所が博士は眼を見張つた。そして困難の色を面に表して言つた。

「私はグレン博士に返事した樣に一二週間なら十分と思ふ。大抵の人は一日か二日で十分見學して歸つて行きますよ。過日英國から來た人達も四五日で濟ませましたから貴君も一二週間で濟むと信じます。」

私は形勢も面白くないと思つたから私はこゝぞと許り所信を披瀝した。

「私は知識を得る爲めならば數日の見學で十分です。然し私はフォード、アイデアを自ら努働を通して體得したいのです。それには一二週間では十分である、貴下の御注意も御尤ですが私の考は私にとつてはカテゴリカル、イムペラテイーヴでどうしても六ケ月は滯在しなくては所期の目的に添はないのです。是非とも御承知が願ひたいものです。」

思ひ切つて言つた。哲人カントの句迄も口に出て了つた。

話してゐる中に博士の温顏に微笑が浮んで來た。そして凛然として言つた。

「友よ、汝の熱心と純情とは私は十分アップレシエートします。私は一二週間の積りで居たので即時返事は出來兼ねるが何れ後刻各課長とも打合せてアレンジして見るから明後日來て呉れ給へ。」

話は案外滑かに進展した。私は更に自分で作つた六ケ月間實習のスケデュールを示した所が博士は預つて呉れた。

二三の來客が詰めかけて來てゐるので私達は別れを告げた。

幸先の好い交渉であつた。私はマ博士に言ひ知れぬ懷しさと引力とを感じつゝ室を出た。半時間の會見、而して之が私をマ博士に永久に緊く契緣とはなつた。

二日の後私の願ひは全部採用された。そして教育部次長のミュロック氏に紹介され、それから各課長に紹介された。職工課長のヘンケル氏、安全課長のショー氏、學校長のサール氏、醫長ミード氏ジェネラル、スーパーインテンデントのマルチン氏、その外各部課長やら工場方面の重立た人々に紹介された。

翌日愈々職工として採用されることゝなつた。數百の職工志願者と同じ様に採用口に立つて一切の手續を濟ませ、とても徹底した健康診斷を受けて、昨日歸りに買ひ調へた青いオーヴアオールズの胸に番號入りのバッヂを着けて愈々フォードメンの一人になつた。

職工課長ヘンケル君は肩を叩いて冷かして曰く「見事な職工振りだよ。ハ、、、」

三、雇入の方針

職を獲ることは自主獨立の生活を送り得る根本條件である。何ものでも人に與へることは概ねに爲し易い。然しこゝに若し人に與へて差支なく、且つ又與へることが善いものがあるとすれば、それは自主獨立の途たるべき職業である。職業なきものは浮浪の徒である。勤勞せずして生活し得るものはよし富貴の人たりとも恥づべき生き方である。之れ實にフォード氏が金錢衣食を惠與することを好まずして「職」を與ふることを欲する所以である。而も之は彼の衷心の願希にして萬難を排しても之を實行して居る所である。これこそ人に對する名譽ある贈物とも云ふべきものであると思ふ。

かくして、來るものは何人でも拒まずに採用して居る。國籍を問はず前科を咎めず老幼を論ぜず宗教の如何を質さず聾者啞者跛者一切衆生を採用して居る。現今流行して居る採用の方針は[illegible]檢査である。

能率增進の上から適者のみを採用する。選に洩れたる人々は他所に拒まれ乙地に棄てられ或ものは遂に市に收容されたり或は日傭人夫となつたりして漸次敗殘者の群に落ちて行く。フォード工場は之に對して極端なる例外の方針を執つて居る。來る者は何人でも之を拒まぬのである。五十八ヶ國の國籍を異にしたる者が一工場に働いて居る。日本人も二十人程居る。宗教上から云へば當時の統計（一九二〇年）ではローマンカソリックが一番多くて一八、九四六人、新教之に次ぎ一七、〇六四人、第三はヒンヅー教で、二、三〇九人、第四はヘブリー教で一、四三三人、其他佛教は四人、無宗教は五三人等々。

こゝに二千人の不具者が働いて居て皆夫れ〲一人前の仕事をして居る。適材適所を十分に行つた結果と思ふ。例へばコムミュテーター部では腰掛け作業が出來るし細い材料の撰分けをしたりするので足の惡い人、盲者、聾者、唖者等が澤山居る。

免囚にフレッシュ、スタートを與へよと云ふので前科者も一切構ひなしで採用される。

後日市俄古のインターナショナル、ハーヴェスター會社の人事部長として令名あるアーサー、ヤング氏に此の話をしたらヤング氏笑つて曰く「僕は三度續けて採用されたよ」と云ふ。其の譯を問ふたら「三日續けて名前を變へて採用口に立つたら三日とも無事關門通過さ」と答へた。如何に無差別自由に採用してるかゞ分る。

ミュロック氏の話だが或時盲目で跛足の人が來た相な、山本勘介以上の豐かならぬ天分を恵まれて來た。職工課長ヘンケル君も一寸困つたので教育部に電話をかけた。

「ミュロック君今盲目で且ッ跛足の人が來た。どつちか片方が滿足なら好いが跛足はうんとひどいんだ。教育部の方針に反するかも知れぬが已に廢兵千三百人を收容してるし、ヘンケル一寸使ひ途に困つた。此一人は何とかして呉れないか」

ミュロック氏も色々考へたが更に假採用して貰ふことにした。そして適當な義足を給して市のチャリテイ、ボールドに仕事を教へる樣に頼んだ相な。ところが幾月かの後には立派に手先の仕事が出來る樣に訓練され、今では一人前の腕になつて立派な職工になつた上に毎週土曜日にはダンスにも出かけると云ふ話。おかしい樣な感心な話である。

或朝用事があつてヘンケル君の所に行くと一列に就職希望者が受附の所に並んで居る。その中に十八九才の支那人に似た少年が居た。年齢を聞かれて滿十七才何ヶ月と答へたが十八才以上でないと職工に採用せぬとの事で非常に悄氣て居た。私は同じ黄色人種のことで懐しくなつたから傍に行つて「君は一人か兩親と來たのか」と英語で聞くと先方も英語で「ロスアンゼルスから父に別れて此處まで來た」と頼り度い樣な面持をして云ふ。試みに「君は支那人か」と聞くと「否、日本人だ」と云ふ。それから神國丸出しの上手な日本語でお互に愉快に語つた。そしてヘンケル君に頼んでこの少年をフォードの徒弟學校に

入れた。數ヶ月後に徒弟學校を了つて工場に出た時は相當訓練もされて腕も出來たと見えて六弗七十仙取つて働いた私より收入が上になつた。彼は今日内地に歸つてフォードの代理店を營み立派に暮して居る。

こんな風に誰でも採用しては定めし工場は物騒だらうと思ふけれども盗難等は絶無と云つて宜しく守衛即ちウヲッチは居るけれども決して退場の際に身體検査等はしない。ロシア人が流轉の旅を續けて來てフォードに採用され、その當時に撮したうらぶれた漂泊者の持つ一種沈痛憔悴な面持をした姿と鐵山の長屋式の住居の寫眞が澤山ある。此の採用當初の寫眞と兩三年後の寫眞とが對照してあるが前者と後者とは似ても似つかぬ變化である。住居の改良はさることながらその態度も凛く顏面相に春一脈の温みと典雅な文化の光とをさし添へて來て大層立派な米國紳士となり了せるには誰しも一驚を喫する。心の持方で人の容貌までが著しく變化するものである。又生活の改善で心の持方も變り得るものである。而してその生活の改善も生活を安定させる一定の職業と、愉快なる作業と、且つは生存でなく一歩進めて生活の向上を十分に保障する賃金とに依つて達成されることであるを思ふ時、最低六弗の賃銀を誰にでも支拂つて居るフォード工場に偉いなる事を認しつゝあるものかなと三歎するを禁じ得ぬものである。

四、作業場

工場の人的管理の第一着手は何と云つても仕事を愉快に爲し得ることである。職工生活をしたもの、誰もが感ずることは今日も亦煤の中で材料に觸れながら組長に怒鳴られるのかなあと云ふ不愉快な思ひである。近代工場の門は朝は地獄門で、歸りは極樂門と呼ばれる。だから人事管理の第一着手には作業場を出來るだけ快適にすることに心がけねばならない。

身體の隨まで通る寒さに作業服の上に着た外套の襟を立てながら三十人位乗れる昇降機で三階の作業場に上る。アルファベットで區切つて數字で更に細別された職場のS4の前に行き小さなタイムリコーダーで出勤をリング、アツプして側の外套掛けに外套を引かけて機械の前に立つとやがて本館の時間係の示指がボタンに觸れたと見えて午前六時半を報ずるベルがけたゝましく各職場に鳴り響く。と同時に稍や青味を帶びた綠光でない背光の電燈が一時にパット室内を照らす。ベルトが廻轉を初め機械が音を立て、運搬夫が材料を運び出し各職工が直ちに受持の場所に就き組長が忙がしく職場を廻り職長が製造指圖書を持つて各職場の組長に渡して歩く。かくして今日の平和の戰は火蓋を切られるのである。

春とは云へ北の方湖沼地方より雪を孕んで吹き來る朔風が幾日となく續いて外は肌を裂く様な寒さだけれども、職場にはスチームヒーターがあつて何時も華氏の六十度位に保たれて居る。窓外に展開する荒寥の疎林を眺めた索漠たる光景の眺めも殺風景があるなどゝ何氣な感

も時々する。濕度六十度位が作業には暑からず寒からず誠にモデレートな温かさである。之が爲めに怪我が少なく且つ能率を增すと云ふことである。

作業場の設備は仲々至れり盡せりである。電燈太陽の如く、濕度春の如く、而も咽が乾けば一寸螺をひねると淨水道を更に工場で今一度フイルターした水が出るし（此れは夏は氷で冷却して供給される）通風を欲すれば總ガラスのサイドウオールの一部を開けば、新鮮な空氣は徐々に入つて來る仕掛になつて居る。暗いジメジメした非衛生的な作業場では自ら不平も出るし陰口も利きたくなる。人性の陰氣な方面の活動をそゝることになるのは自然である。災害の防止上又能率增進の上からも、更に協調精神の鼓吹の上からも、工場の採光通風濕度等はよくよく考へなければならぬと思つた。

然しフオード工場だつて斷片に見るが如き完全無缺のものではない。正しく觀察する爲に例外的に不良なる箇所も一二あげて見ることにする。

晝食時になつたので食堂に出かけるのかと思ふと之程の工場に食堂の設備は一つもないのである。五萬五千人では食堂の建設も並大抵ではないかも知れぬが作業場で機械の間で蹲踞つてモクモクやるのは感心出來ない。それから手洗場はあるけれども浴場もシヤワーもない。外の職場なら未だしも私が後で働いた鑄物場なんか煙と塵埃との中に八時間働いて身體の汗や埃を洗ふ設備が一つもないのである。夏は實に堪へ切れぬ氣がする。鑄物の仕事の中でもあまり汗臭いのや、埃だらけになつて婦女の間に顧客を張るのはあまり堂々たるものではない。

話の序だが鑄物工場の砂型場は二階にあるが砂埃が濛々と立つ中に働いて居ると階下の鑄型に鐵の湯を流し込む所からコークスの瓦斯や鑄物の臭氣やら何とも知れぬ臭氣が騰つて來る。同僚の一人のネグロ君が「ツー、マッチ、スモーク」と云ひながら顔を顰めて前屈みになつて胸を押へて「[illegible]」と云つて胸の邊を擦つてる。下の連中は鼻はエライよと同情してる、二週間交替だ相な。誰でも此の苦痛を訴へるのである。塵埃は作業場と二階の鑄型部が殊の外甚しい。全體を通じて此の鑄物場は例外的に設備が悪い。

それから此鑄物場は冬でも偏に暑いのである。暑いのではない熱いのだ。通風器はあるが不十分である。昨夏マ博士が來て見てこれはひどいと云ふので新たに十馬力の通風機を備へて呉れたのだが、夫れでも熱い熱いのである。此の改良についてはフオード工場も大分頭を痛めてゐるらしい。私が十月に再び工場に來た時には漸次改良の緒に就いて居た樣であつた。此の鑄物部には純米國人は極めて少いのには驚いた。殆んどネグロや波蘭土人や露西亞人の如き外國人が多數である。従つてフオード工場の組長は大抵は純米國人なのに此部分は外國人が多い。純米國人はこんな苦しい所には働かないのか知ら？

私は此部に働いて五日目には足の裏や趾の間が一面に白くなつて水分を含んで來た。熱氣の爲めに皮膚が腐つて來たのである。白い粉を

餘つて自分の部下を穿いて毎日治療所で治療して貰つたが約一ケ月苦しんだ。終には歩行が出來なくなつて數日休んだ。

其他フオード工場の勞働そのものは決して樂ではない。能く通り一遍の旅客が土産話に云ふコンヴエヤー、システムの所謂一日勞働者に寸暇がなくて苦しい様だが之等は未だ樂な方で他は大抵の勞働ではない。私はリベツト部に働いた時初日にあまり勞働が激しかつたのと音が高かつた爲めか、機械の轟々たる響が家に歸つても耳の中で未だ聞えて頭の中はギシ〳〵音がする様に感じた。二日目は更に甚しくなつた。三日目は土曜日なので半日だと思つて喜んで行つたら矢張り終日働くのであつた。四日目には遂に歸途の電車の中で過勞の結果か鼻血が流れ出て前に座つて居た婦人がハンケチを出して扶けて呉れた。私も多少は工場生活をして居たけれどもフオード工場のリベツト部や鑄造部などは勞働が隨分激しいと思つた。後日フオードに働いてる日本人の諸君と會して此話をしたらどの日本人も皆同じ様に苦んだ相で、或人の如きは遂に病氣になつて退社して了つた相な。日本人は多く仕上工等のデリケートな仕事に廻つてるのも此爲めだ相な。

其後私が一年程前に彼の有名な大ストライキをやつた沙市でA・F・L勞働組合の領袖ダンカン君に會つた時同君曰く

「フオード氏は實に偉い、八時間制を世に先んじて斷行したり所謂利益配當をしたり請負制を採らずに定賃制を實行してるのは思ひ切つた處置であつて雙手を擧げて賛成する。然し工場があまりに機械化されて機械が人間を使役する様な結果となりその爲め過勞になるのは惜しいことだ」と語つた。

之はフオード工場の一考すべきことだと思ふ。後日一紳士に私の此意見を提出して參考に供した。

五、セーフテイ ムーヴメント

職場の快適に次いで考慮されたることは負傷疾病等の豫防防止と云ふことである。我國の工場の中には或は公園を作り娯樂場を設け又は食堂を壯麗にし病院を宏壯にしてわれ人稱して模範工場と云ふ。然るに目に見耳に聞く結構を壯麗にするを知つて、耳目に觸れぬ内部の保健安全の施設には細心の注意を拂ふものが少い。肺結核、肋膜炎等の諸病が猛威を振つたり負傷の數が多かつたりする原因は食堂や病院の輪奐の美では絶滅し得るものではないのである。

私は職工生活を終つてから暫く安全課に籍を置いて課長ショウ君の指導を受けた。

私が第一に感じた事は、安全課の存立の明確で活動自由にして徹底してることである。凡そ此安全運動は現場の作業そのものゝ中に立入つて行くのでなか〳〵活動が思ふ様に行き兼ねる節があるものだが此の工場の安全課は此點に鑑みる所あり課の職能が明かに指示されあつて、組織が整然として居て、其の活動が理想的に流れぬ様に注意され處置が實際的である。其の係の人々は皆現場に多年の經驗を積んだ玄

人であるから施設が行屆いて居るばかりでなく日々時々になす諸般の行動が適切で迅速であることは讃嘆に値する。

此課は一九一四年彼の大改革の時に創設されたもので此課の活動の効果は著しく現れて一九一六年の負傷の指數を一〇〇とすれば三年後には僅かに二〇に下つて了つた。夫れ丈け不幸を減じ冗費を節約すると共に生產力を增大した結果となつた。業務上の死亡者も前は年々十名内外はあつたものが五萬五千人中僅かに一人か二人に減じた。

安全課の中に百人會(Committee of Hundreds)と呼ぶ會合があつて、全工場を百の區畫に分ち各部から一名の委員を選出し此委員を以て此會を組織して居る。此委員は多くはフオアマンであるがその約四分の一は平職工が出て居る。毎月一回集合して安全に關する諸般の協議を爲して居る。

執務時間は午前八時から午後四時半迄で晝食時間三十分を設けてある。

こゝに來てからは朝薄暗い頃に出勤しないでも朝日に輝く影を浴びながら表玄關から入ることになつた。

八時のベルが鳴ると一同室の中央に集合する、そこに課長のショウ君又は代理のガイスレル君が現れて前日の安全事務の結果を報告し之に關連して特殊の注意を與へ且つ一般に種々サゼスチョンを與へて呉れる。それがすむと七名のインスペクター及び五名のスペシアル、インスペクターは八方に散じて工場內部の機械器具の點檢から通路、運搬方法、地下、屋上、の通路建設物の危險等一切安全關係の檢査をして歩く。私も彼等の一人に跟いて工場を廻つた、實に詳細に調べて歩くのには驚いた。成る程專門家を集めてる丈けあるなあと思つた。所々で安全委員が報告する。危險な所には遠慮會釋もなく危險札を貼り附けて使用を中止させる。危險を一分間でも放任しない樣に努めるのである。

一巡濟ませて室に歸ると早や十一時だ。彼の机の上には「IN」と「OUT」の二種の箱が置いてあつて夜中の出來事は朝來た時此の「IN」の箱に入つて居たが先刻小使が後始末に片附けて「OUT」の箱に入れた。それが今は夫れぐ傳達されたと見えて一枚もない。その代り「IN」の箱の中に組長から來た報告が早や五六通入つて居る。夫れを片附けたのでこゝで一休みするのかと思ふと又現場にインスペクトに出かけて行くのである。實に活動的にフォード工場の職長が出來上つて居る。私は再び彼と共に地の下のパイプ通路やら屋根の上に上つてやつとの事で横着となつたので三十分間休み得た。かくの如く彼は終日現場を巡つて仔細に點檢して災害の惹起を防止してるのである。

次には此課の中の教育係に就いて調査して見た。此係の仕事は大別二つある。一つは印刷物の配布で他の一つは活動寫眞の映寫である。こゝで感心したのは之が實際を基礎にしてることである。

印刷物に二種あつて定期と臨時とがある。定期のものは原則として工場に起つた實際上の出來事を寫眞に撮影して、その災害の原因を究

字で説明し且つ防止方法を指示したもので大小數種ある。臨時のものは例之流行性感冒が猖獗を極むる際等に出す注意である。之等の印刷物は工場内のブレッチン、ボールドに每土曜日の午後掲示して月曜日の朝誰もが注意する樣にしてある。

活動寫眞は職工が入社した當日午後三時必ず北西隅に建つてゐるオーヂトリアムに赴いて安全第一のフイルムを約三四十分間觀覽することになつて居る。此際現場のフオアマンが説明の任に當るのも面白い。凡て組長は色々な方面に立働いて職工の指導誘掖をして居る。外國人に英語を教へる英語學校も教師は多く此の組長である。

此外衛生係や百人會の活動は省略する。

六、人の取扱

暫く現場に沒頭して本館の方に御無沙汰してるとマークキス博士が會ひ度いから時々顏を見せよと云つて來た。歸りに立寄つて見るとマ博士は私に色々と感想を聞く。私は率直に感じたことを長短ともに話した。

其時私は同僚のロイ、チエムバーと云ふ男が「此工場は絶對に自由だ。ヘンリー（フオード氏のこと）は俺達にフエースフルだ」と云つた言葉を思ひ出して其ことを云ふと博士は

「Square deal and steady job だよ」と云ふ。うまいことを云ふなあと思つた。更に話を次いで云ふには

「何ものも其自然に從つて取扱ふ方針である。それから職工に對しては相互の信頼が大切だが先方に忠實を求むる前に自ら先づ忠實を先方に示さねばいけぬ。」

我が國の諺に寢て居て人を起すなど云ふことがあるが多くの工場主の中には此種の人がありはしまいか。有難がつて目を開けてる樣な職工もまた一方にはあるものだ。

職工の直接上に立つのは組長であるが此組長の卓出して居ることは實に感服に堪へない。私は之れ以來組長の訓育の大切なることを感じした。蓋し工場生活を左右する力を有つてるのは組長であり、その組長の善惡は直ちに全工場の職工の善惡の主因となり、工場生活の快不快も紛議の多少も、能率の大小も之に起因することが多いのである、と思ふ時世の工場經營家は特に組長訓育に深く思を致して欲しいものである。

フオード工場も嘗て組長が惡かつたことがある。その當時は一年の移動率三百七十パーセントに上つた、即ち五萬人の職工を常時維持せんとするにはどうしても一年十八萬五千人の人を雇入れねけたらぬのである。米國のアレキサンダー氏の計算に依れば一人の移動の爲に何でも五十弗乃至百弗の失費があると云つた。之は新米が一人前の職工となる迄の賃金、材料消耗機械器具の毀損等の諸失費を計算したものである。そこで組長の改善に留意すると共に彼等から解雇の權能を取り上げて雇傭課に移した。

戰時中米國全土を通じて組長の改善を痛感した。それは戰爭と共に戰線に立てる三百萬人の軍需品を作る丈けでも一通りでなかつたし英國其他の國々からの注文も大したものだつたので生産の増加と一方には爭議の防止とが非常に必要になつた。當時或人の計算に依れば爭議の六十パーセント迄は組長の仕打に起因してると迄極言した。

その樣な組長が今日は此の工場でも實に模範的組長に改造され所謂命令と威壓とで臨んだボスの境涯から蟬脫し、今やリーダーとしてスーパーインテンデンツ、オフイスと製造作業との中間に立つて謂はゞ頭と手との間に在つて既定計畫を行動に移し、一方經費の節約等經理の頭を働かせ同時に部下職工の訓練指導監督に當る重要な役目を演じて居る。而してその役者たるに相應しい素質を養成されたのである。

私は我國の組長にして知らざるを知らずとせずに無理をする爲めに如何に多くの損失があるかを恐れて居る。又工場主も當路の人々も能率だ、節約だ、關稅だ、と騷ぐと同時に此點の實際を御留意になる必要があると切に思つて居る。

我國では増給は普通年一回とか二回とかにあるのでフオードでも定期にあるのかと思つて居た。コムミユテーターの部のミリングに居た時對手の男に何年働いてるかと聞いた所が丸五年居ると云ふ。賃金は何程かと聞くと六弗だと答へたので、何故もつと昇給しなかつたかと聞いて見ると、それは本人の腕に依ると平然として答へる。増給は組長が個人々々を見て其必要ありとする時に上申して増給するのだ相な。定期に總花式に上げてやることはないのである。入職以來何年しても上らぬものがあるが一向に組長の公平を信頼して不平は一切言はぬのである。中には増給すべくしてせぬと言ふ自信のあるものは遠慮なく組長に掛合ふものもある。その時はよく調べて増給に値するとせば増給するのである。こゝらが感情に捉はれ易い國民とは大分違ふ所である。

七、獨立自尊の生活

"Help them to help themselves."

此の簡單な一句の中にフオード氏は千萬無量の思を潛めて居る。人と生れて誰か獨立を願はんや誰か自尊の念なからんや。而も世に出づる三十年、壯心雄志おぞくも碎けて膝を屈し首を垂れて隷屬自屈の生活に陷るものが滔々相踵いで居る。或は命に服し或は上司に阿附し或は自己の節操を賣切つて恬然たるものがある。フオード氏は最も之を憎み悲しんだのである。

何人も大臣宰相たることは難い。然し何人も自己を建設して獨立自尊の紳士たることは出來る。此の紳士こそ國の力となり社會の柱石となり入りては家庭に父として出ては世の奉仕者として強い人生を全うするものである。よしや無名の職工として終らんとするも人類の恩人として神の記錄の上に特筆大書される人々である。

"Clean and constructive life" 之れが有名な利益分配の條件の最大な

ものであつた。賭博をせず、飲酒に耽らず妻子を遺棄せず進んで貯蓄を爲し子女に十分の教育をなし市民として社會に應分の奉仕を爲し以て"independent and selfreliant"な生活をなすことが非凡なる人は別としてなべての人として望ましきことである。

フォード工場の目的は自動車の製造と共にかゝる人間の建設であり、その爲めに私生活に干渉はせぬ、只達成の爲めにヘルプするのである。

實に好い考でこれこそ人事管理の要諦であり眞髄である。茲に於てフォード工場は生存賃金(existence wage)でなくて生活賃金(living wage)を拂ひ以て生存費と教養費と向上の爲めの貯蓄と相當の慰安費を含んだものを最低の賃金としたのである。

自己の休養と向上の爲め他面に家庭の團欒と子女の教養の爲め餘暇利用を尊重して純八時間制を斷行したのである。

作業場を快適にして工場生活を愉快にし、安全施設を十分にして災厄不幸を除き、私生活にはこれを完成する資料を給して他は自力に依る自己の建設を助成するに止めてオーヴァガイダンスに墮せぬ樣にして居る。

當時家拂底で家賃が頗る高かつた。私は何故フォード氏は家を造つて與へぬかと聞いた所がミュロック氏の云ふにはそれはフォード氏がランドロードとなつて私生活に主從の如き關係を作るを好まぬからだと答へた。家が欲しければ相談部Legal Dept.に行つて土地又は家屋の買入方を頼めば出來るだけ有利に交渉して呉れるのである。毎日二百人位諸種の相談に行つて居たが主に土地家屋の賃貸又買入の相談及手續の依頼であつた。只々目に附いたことは家屋だけの賣買は一割位で他は必ず土地の取引で家屋は之に附屬して居るのである。

此の自主獨立の生活をさせて人間の建設を爲すことがフォードの人的管理の大眼目である。之れが爲めに年々二千萬弗からの利益配當も斷行したのである。而して之が事業遂行の中心は即ちマークヰス博士を統帥とする教育部(Educational Dept.)の事業である。

此の教育部のことは敷衍を以て之をサム、アップすることの困難を思ひ茲に詳述することを見合せる。只々一言しておきたい事は十四年の改革當初二百人のインスペクターが各戸を訪問した時家庭の事情を調べて詳細なる個人記録を殘して之をファイルして置く。之れによつて家庭をpoor fair poorの三種に分けておいた。十四年の頃はプアな部門に屬するものが六割もあつたが三年後の十七年の一月調によれば

Good	Home	Condition	36.111
Fair	Home	Condition	4.297
Poor	Home	Condition	0.475

となり一九一九年一月にはプアなものが絕無に近くなつたので利益配當に全部預り得ることになつたから利益配當を全廢して之れを本給に繰り入れたのであつた。

然し職工としてあまり家庭の事情を調べられるのを好まぬので少々

不平も聞えて來たのも事實である。

利益配當の本給繰入れと共に二百名のインスペクターを六十名に減じて了つた。そして名稱を改めてアドヴアイザーとした。

此の教育部が取扱ふ人事は家庭生活の改善や諸種の煩悶とか工場の不平とか何でも個人に關する一切のことを相談に應じて居るのである。アンドリユス氏の所には五十弗から百弗迄の金の相談に來るものが毎日十人は下らない。この金は特殊な事情の人に貸してやるのである。返さないからとて慈善的に惠與して了ふのではなく返金の催促をせぬまでである相な。

八、ヘンリー　フオード氏の片影

ヘンリー、フオード氏の事は群書百様に其の人物性行事業を書き出さんとして居る。私は茲には只々私の見、聞き且つ感じたことを二三書き綴ることにする。

入職の翌日四月三日であつた。市俄古市の鐵道のスヰッチ、メンに依つて點火されて忽ち全米に燎原の勢を以て擴大した鐵道大ストライキは、デトロイト市の幾多の大工場を休業又は縮短の已むなきに至らしめた。フオード工場も亦多大の影響を被つた。

即ち石炭、鋼其他の材料の輸送が杜絶してさしもの大工場も大部分作業休止の有様とはなつた。職工が手を束ね組長が材料集めに奔走してる職場が日を逐うて多くなつた。月半ば頃から遂に職場によつては作業停止を言渡した。此の部の職工は他の作業し得らるゝ職場の職工と三日とか一週間とかの交替で作ることになつた。そして lay out の間は賃金は一仙も支拂はぬのである。我國では差し詰め休業手當を要求する所だらう。がフオードでは各人皆非常貯蓄があるべきだといふ道理で當然支拂ふ可きでないものとして居る。

作業を續けた部分も亦段々に休止して來た。一城一廓が陥落して行く様で心細いこと限りがない。全工場丸で火の消えた様になつた。

その時である、何でも二十三日は土曜日だつたと思ふが此日ヘンリーフオード氏がデイヤ、ボーンの邸から久しぶりで自動車を飛はして來た。

そして三階の南の端の室——そこは彼の令息エドセル、フオードが毎日執務してる所である——にヘンリー、フオードは姿を現した。そして重役のクリンゲン、スミス氏、工場長のマルチン氏を呼び小フオードと四人で密議した。教育部のラウンツ氏が一緒に來いと云ふので其室の前を通つて見たが硝子越に一寸見ると皆緊張な顔をして對策を協議する様は感興深い光景であつた。

後で聞いたのであるが、その時はフオード氏は詳細に作業の状況を聞いて、それから左の様な問答があつた相な

フオード氏問、材料の來ないのは何故であるか、

答、鐵道罷業の爲め輸送杜絶したるに由る、

問、材料は絶對に手に入らざるか、

答、材料は求め得ざるに非ず只々非常なる高價を拂はざるべからず、

問、職工をレーアウトすることは如何にも忍び難き所なり。高價を拂うても速かに材料を得て作業を繼くべし。購買課此方針に依つて材料を集むべし。

材料を集めて工場に十分に配給することは購買材料運搬課にて努力すべし。目下材料の高價なるは材料そのものか運賃か。

答、運賃なり。

茲に於てフォード氏は勵聲一番して曰く

『フォードトラクターを總動員せよ而して即刻運搬を開始すべし。尚ほ本日中に各工場に通達して二十五日の月曜日よりは全部の職工に出勤する樣通ずべし』

げにや鶴の一聲である。二十五日の月曜日からは兎にも角にも材料は工場に搬入され全市の工場が銷沈し幾萬の職工が徒食してる時に獨りフォード工場のみは勇しくも活動を始めたのであつた。

これが近因となつてフォード氏が翌五月には早速南ケンタッキーに炭山を買ひ求め鐵道を布設して自家の工場は自家の石炭を以て動かすに至つたのである。

更に今一つエピソードを記したい。

私が九月半ば米國のフオドマン生活を終つてから暫く別れを告げ、月餘の旅に幾千哩の山川都邑を跋渉した工場や鑛山等各所を見學して再びデトロイトに歸らんとしてバッファローに着いた日新聞を見るとフォード自動車大値下げの廣告が新聞紙一頁大に出て居る。諸物價暴騰に暴騰し生活難の聲高き時値下げとは又思ひ切つた逆の行き方だと思つた。

デトロイトに歸つて早速フォード工場を訪ふとミユロック氏が擲かん許りに私の手を握つて『非常な變化だよ、フォードは第二の改革に入つた』といふ。その記事の要點は左の如くである。

値下げ斷行の少し前のことである。或日フォード氏からマークキス博士に電話が掛つて何日の朝何時某所に來れ。共に半日の舟遊をしようと云ふのである。博士は其日の定刻に示された湖畔に行つたら已にフォード氏は來て待つて居た。マ博士は驚いた、只々二人で舟遊なのだ、而もモーターボートはフォード氏自ら操り快艇は宛も輕く漣を碎いて湖心遠く浮んだ。二人の外は大空湖上何人も知らぬ又何人も居らぬ。此時フォード氏モーターを止めて舟を中流に委し徐ろに博士に對座したのであつた。此の有様は三國誌の曹操の故事でも讀む樣な氣がする。詞中有詩兩心知と云つた樣な劇的光景である。此時フォード氏は

『マ博士よ。今や諸物價暴騰して工場の經營は幾多の難局に直面して居る。如何にして此經營難を切り拔く可きか名案あらば示されよ』

と云つた。マ博士は之に對して答ふる所があつた。

世間普通の考から云へばカーの値上げをして賃銀を上げるか又は職工を解雇する外はないのである。又世間の大工場皆々として此方針

を取つた。

フォード氏は沈思之を久しうしたがやがて徐ろに口を開いて曰く

「博士よ、私は賃金を値上げする爲にカーの値上げをすることや又は職工の馘首は行ふ事を欲しない。カーの値段を上げることは更に此上物價騰貴の素因を作ることゝなる。さればとて解雇の如きことは如何にしても私には出來ない。」

フォード氏は斯う云つて更に沈思するが如く兩人は暫く靜寂な四圍の風光の中に融つた。

遂にフォード氏は沈默を破つて言つた。

「私は今日の苦境は獨りフォード工場のみでなく全國的であつて其の主たる原因は物價の高いことである。故に私は寧ろ思ひ切つて物價引下げの急先鋒となりカーの値下げを斷行して了はうかと思ふ。そして製鐵業者の如き不當なる高價を維持せんとする者に對して宣戰しやうと思ふ。貴下も必ずや私に贊成さることゝ信ずる」。

マ博士はフォード氏の此の奇想天外式な而も透徹したる天禀の直感の正しく且つ堂々として常軌を遙く逸脱してることにいつもながら敬服した。博士も亦こゝ迄徹底したか否かは知らぬが極めて同感であつたらしい。

フォード氏は常にマ博士の人格と聰明とを敬重して居た。博士も亦知遇に感激して居た。

兩雄は靜かに手を握つて値下げの斷行と製鐵業者への宣戰とそれから工場内部の大改革を行つて戰ひのランチを濟ます期を實に着けた。僅かに數時間の相談が此大斷行の事を決した。

誰も知らぬ中に大決心は確立されそして一日突如としてフォード自動車値下げ斷行の廣告となつたのである。六百五十弗のカーを五百十弗に値下げして一時百四十弗をカットダウンした。

全米を擧げてその意想外の果斷に驚いた。

更に矛鋒を製鐵業者に向けて値下げ談判を始めた。一方内部の組織を極端に單純化して冗員を生産部に廻した。從來原價計算部には今迄四百名居たのを百名にし項目六百を三十に減じた。斯樣にして販賣部に居た二千人のクラーク中から約半數近くの人を剩したのである。

私はミュロック氏の話を聞いてマ博士に會つた時マ博士は余剩の人達を少數宛集めて作業場に就いて働く樣に云ひ渡してる所であつた。此の仕事はたかゞ容易ではないとマ博士は私に語つた。

マ博士は此の大役を濟せてしまつた時極度に疲勞して倒れた。そしてまだ竣工しないフォード病院に入院した。私は晩秋の小春日和に日の本の香床しき大輪の菊花黄白取り交ぜた花束を持つて彼をその病床に見舞つた。昨日迄は滿身元氣横溢して第一線に活躍したる彼も今日は白布に掩はれて只一人ベッドの中に横臥して居られる。私が靜かにドアを開き彼の病室に入ると博士は仰臥したまゝ讀書して居られた。その本は Leitch の名著 "man to man" であつた。博士は固くも私の手を握つて幾度か菊花をそのやつれたる頬に當てた。彼はヘンリ

ー、フォード氏の果敢なる値下の話から一轉して數百の事務員を現場の作業に轉勤させる時の心勞をしみ〴〵と語られた。感激に滿ちた幾刻かは過ぎて胸迫るを覺えながら私は博士と秦胡の別れを告げた。數日の後住み馴れた市俄の市に別れて萬里の旅に出る私の前途を博士は眞心籠めて祝福して下さつた。私が再び米國に來ない限りこれは再び會ふことのない永遠の別れとなるかも知れない。見ず知らずの黄色人種の私を半年の間何等の秘密もなく全工場を開放して實習させて呉れて其上事務所に入つて事務の大要迄机を並べて教へて下さつた恩人に對して私は感謝の辭を知らなかつた。

人間逢遭悉く友であり知己であり恩人である。

人種の色の相違を超越して。

北院の林樹よ東城の白水よ。斯の地に別れを告げ斯の人と袂を分ち孤影孑然として大西洋に浮ばんとして居る。私は神かけて博士の健康の回復を祈りつゝ又彼を通して五萬のフォードメンの福利をこひ希ひつゝ而して又私の敬愛措く能はざるヘンリー、フォード氏の人道の爲めの健鬪を祈りつゝ前庭に出づればエルムの疎葉の彼方落日哲人の思を傳へてハイランド、パークの滑り白雲搖曳して居る。私はロビンの鳴かざる初秋の並木道に出で大地を踏み占めて元氣好く一歩を大路に歩き出した。（終り）

漱石の思ひ出（六）

夏目鏡子述
松岡讓筆錄

二十五 『猫』の家

こんな工合に惡かつた頭も、三十七年の春から夏へかけて大分よくなりまして、無鐵砲の癇癪を起こして氣狂じみたことをするやうなことも少くなりました。それにつれて自分でも大分勉強が出來るやうな樣子で、本をよんだり物を書いたり、殊に講義のノオトなどもいゝ案配に進むらしいので、勿論合間合間に怒るやうなことはあつても、それも一時のことになつて、段々重くるしい霧が晴れて來るやうな有樣でした。

ところで面白いことに思ひますのは、頭の調子がよくなつて來るに連れて、大學の講義のノオトの字が目立つて小くなつて行くことです。尤もこれは小く書いた方が紙の枚數を使はずにすむので便利なせいだつたのかも知れませんが、翌々年の末西片町へ越した頃のノオトの字の小ささつたら、まるで蟲目鏡で見なければ讀めないやうな字を書いたものです。自分でも『道草』か何かの中に、このノオトの字を形容して蠅の頭のやうな字と申して居る位ですが、今宅に殘つてゐますのも當時の『文學論』の講義のノオトを見ますと、最初は中判の洋罫紙に、罫からはみ出しさうな大きな字で樂樂に書いて居るのが、終ひ頃になると、振り假名活字のやうな小い字になつて居ります。それでも、若い時にトラホームを病んで、それから慢性の結膜炎をやつて時々目藥をさしたりはしてましたが、元來目性がよかつたと見えて、晩年になつて老眼鏡をかける迄、目鏡といふものはかけたことが御座いませんでした。ずつと後のこと、人相を見る人から、眼が三白眼でどうだとか言はれて自慢してゐたことがありましたが、瞳と白味のところが少しぼかされて濁つてゐたさうでした。

この六七月、夏の始め頃かと憶えて居ります。どこからともなく生まれていくらもたゝない小猫が家の中に入つて來ました。猫嫌ひのわたくしはすぐに外へつまみ出すのですが、いくらつまみ出しても、いつかしらん又家の中に上がつて來て居ります。そこで夜雨戸を閉める時などは、見つけると内證につかまへては外へ出したものです。しか

し毎朝雨戸を繰るが早いか、にやんといつては入つて來ます。それが又それ程嫌はれてゐるとも知らず、歩いてゐると後から足にじやれついたり、子供たちが寢てゐると、蚊帳の外から手足をひつかけたりします。其度何に又猫かといつた案配で幾度殘酷につまみ出されたり、放り出されたりしたか知れません。が何としても圖々しいと言はうか、無神經と言はうか、いつの間にやら入り込んで、第一番に喰はないのは御飯の御櫃の上にちやんと上がるのです。腹が立つやら根氣まけがするやらで、私もとう〳〵誰かに賴んで遠くへ捨てゝ來て貰はうと思つてゐると、或朝のこと、例のとほり泥足のまゝ上り込んで來て、いゝおはちの上にいゝ工合に蹲まつてゐました。そこへ夏目が出て參りました。

「此猫はどうしたんだい。」

と、何處かで貰つてでも來たのかと思つたものと見えて尋ねます。どう致しまして、此方は何とか打放らかして了ひたいのだけれど附き纏はれてゐる始末なので、

「何だか知らないけれども家へ入つて來て仕方がないから、誰かに賴んで捨てゝ來て貰はうと思つてるのですよ。」

と申しますと、

「そんなに入つて來るんなら置いてやつたらいゝぢやないか。」

といふ同情のある言葉です。ともかく主人のお聲がゝりなので、それならといふわけで捨てるとは見合せました。それから猫は大威張り。で相變らずおはちの上にのぼつたり、腹這ひになつて夏目が朝新聞をよんでゐると、のそ〳〵歩るいて行つては丁度背中の眞中に乘つてすまして居ります。しかし惡戲がなほつたわけではなし、それどころか一層ふざけ散らして、子供をひつかいたりそんなことをして仕方がないので、時々物尺でどやされたりして居りました。

ところが或る時、よく家に來るいつものお婆さんの按摩が參りました。膝に來る猫を抱き上げて仔細にしらべ上げて居りましたが、突然

「奧樣、此猫は全身足の爪迄黑うございますが、これは珍らしい福猫でございますよ。飼つてお置きになるときつとお家が繁昌致します。」

と申します。この小猫の毛並といふのが、全身黑ずんだ灰色の中に虎斑がありまして、一見黑猫に見えるのですが、そんなことも知りませんので、爪の尖や足の裏迄はしらべたこともありませんでした。然う言はれて見れば全くそのとほりで、殊に福猫が飛び込んで來たと言はれて見れば何となく嬉しくもあるので、折角來たのを捨てゝはとそこは現金なもので、其日から前のやうに虐待もしなくなり、惡戲が過ぎると御飯もやらないなんかと因業なことをしたのが、今度はあべこべに私が自分から進んで、女中のやつた御飯の上におかゝをかけてやつたりして、大分待遇が違つて參りました。猫の方では益々いゝ氣になつて子供の寢床に入り込んだりして、其度に癇持ちの二女の恒子なんかは夜中でも、

「猫が入つた、猫が入つた。」

と火事でも出たやうにキュー〳〵聲を立てます。すると夏目が物尺を

もつて追つかけ歩るいたりして、時ならぬ活劇を演じたこともよくありました。

これが有名な初代の猫の少年時代です。

こゝで千駄木五十七番地の家の模様を一寸お話ししておきませう。私たちはこゝで二度泥棒に入られましたのですから、余程泥棒の入り易い家と見えます。ですからこゝであんまり詳しく家の間取なんかを書くと、泥棒の手引をするやうなもので、現にお住みになつてる家主の斎藤博士の御迷惑になるかも知れませんから、これからのお話に必要な程度に止めて、ざつとお話しすることにして置きませう。いつぞや斎藤さんは『猫』をよむには家の模様がわからんといかんとか仰言つてられたさうですから、或はお叱りを受けるやうなことはないかも知れません。

先づ千駄木の道に門があつて、門を入つてじきに玄関。玄関の間が二疊か三疊敷。玄関は東に面して居ります。玄関の間を出ると南をうけた縁側があつて、取突きが長細い六疊位の廣さの部屋。そこは物置き同然に本をつめて置きました。お隣が八疊の座敷。こゝで夏目が例よく猫を背中にのせたまゝ寢そべつて新聞をよんでゐました。次が六疊で私の居間。こゝに私たちは寢みます。この三つの部屋が南向きで、その背中合せに、私の居間の後ろが六疊の子供部屋。座敷の後ろが茶の間で八疊。その隣が三疊の女中部屋で、それに向つて台所と湯殿があります。夏目の書斎は玄関脇の六疊で、間は袖になつてゐるのですけれども、そこへ大きな本棚をおいて、わざ／＼一たん廊下に出て、そこから三尺の戸を開いて入るやうになつて居ります。その書斎の東側の窓が、夏目があたまの惡い時、毎朝、道を隔てゝ向ひ側にある下宿屋の書生に、オイ、探偵君と呼びかけた記念の窓です。南に小い間窓があり、あとは開いて縁側になつてゐます。大きな机を南に向けて据えて居りました。間窓の前の空地には古井戸が捨てゝあります。

まづ大體これだけの家ですが、書斎のわきに木戸があつて、それから又もう一つ木戸がすぐ外側に曲の手にたつてついてゐて、そこから畑に出られます。畑の西の外側が郁文館中學の運動場、南側の、丁度書斎の正面に喧嘩ばかりしてゐる俥屋がありました。畑と庭との間に垣根がありまして、北側の茶の間の方の垣根の外には、二絃琴の御師匠がいつも二絃琴をならして居りました。

畑も大分廣いので、それが家についてゐるのを幸ひ、女中でそんなことの出來るのがあつて、茄子や胡瓜を作つたり、南京豆を植えたりしたものです。よく垣の下を鼬がちよこ／＼走つたり、蛇がによろ／＼這つたりしました。畑のところへ行つて、上の娘などは郁文館中學の運動會を見たりして居りました。

ざつとこんな間取の住居でした。九月の新學期のころだつた學校が始ますが、前にも一寸申しましたロンドンで御一緒だつたといふ大塚武夫さんの紹介で大學に入るについての保證人を頼みに、小宮豊隆さ

んが始めて見えました。この新大學生さん、大分一高で剛健の風をおぼえてゐられたのでせう、初對面なのに胡坐をかいたとかで、後で始めて來てあぐらをかいた客はないといつて夏目が話して居りました。

鈴木三重吉さんが手紙をよこし始められたのも此頃からであつたと思ひます。この鈴木さんの手紙では大變な笑ひ話があるのです。

今お話したこの大塚さんが、やはり此頃の夜來ておいでになつて、散々座敷で話していざお歸りにならうといふことになつて、玄關に出て御覽になると、帽子と外套とが見當りません。たしかにこゝにおいたのだがといろ〳〵家中でさがすのですが、やつぱりありません。外套はともかくとして、どうも帽子なしではといふので、ともかく一時凌ぎに夏目ののをかぶつてお歸りを願ふことに致しました。多分こそ泥にやられたのだらうといふことになり、段々様子を考へて見ますと、客と主人とが八疊の座敷で話してゐるところをこれ幸と、畑の方の木戸から入つて、何時か書齋に入り、それから一旦廊下へ出て、玄關の部屋にまはつて外套と帽子とを失敬したらしいのです。書齋の中は洋書ばかりなので手をつけませんでしたが、たつた一つ机の上にのせてあつたニツケルの懷中時計が見えなくなつて居りました。この時計は夏目が學生の頃七圓五十錢で買つて、それから隨分洋行迄お供をしたといふ大古の代物です。

ところが偶然よくしらべて見ると、こゝに不思議なことが發見されたのです、といふのは、[illegible]鈴木三重吉さんの、それは〳〵熱い情の籠もつた手紙が、机の上に置いてあつたのですが、それの一端が机の上に垂れて障子の外へ洩れ出てゐるといふ騒ぎ。それを傳はつて行くと、すぐ前の木戸をぬけ、やがてその又次の木戸をぬけて、畑の中迄つながつてゐるのだから並大抵の長さぢやありません。さうして畑の中で終るところに大きな大便がたんまり垂れてあつて、その手紙の一番先でちよんと拭いてあるのですから、泥棒の度胸と言ひ用意と言ひ、それの御役に立つ爲めに机の上からずる〳〵に連れて行かれた手紙の長さと言ひ、みんな揃つて申分がありませんでした。まさか泥棒に尻を拭かせやうが爲めに書かれた手紙ではあるまいし、とんだ手紙の滑稽な受難といふものです。流石に私たちも可笑しくなりましたが、夏目は夏目で、「こんな趣味のある手紙でお尻なんか拭いちやバチが當る。本當に中味を讀んだら、中々尻なんか拭けるもんぢやないのに。」と申して居りました。

二十六　創作熱――『猫』のモデル

此年の暮頃から物を書き始めました。『ホトトギス』の正月號に『吾輩は猫である』の第一回、『帝國文學』の正月號に『倫敦塔』、『學燈』に『カーライル博物館』といつた工合に續け樣に書きました。

創作方面のことは私にはよくわかりませんが、別に[illegible]に小説を書くといふ考へもなかつたところへ、[illegible]

のをこらへてゐた形だつたので、書き出せば殆んど一氣呵成に續く樣に書いたやうです。これから翌年にかけて『猫』の續きを書き、『幻影の盾』だとか、『一夜』だとか、『薤露行』だとか、其の翌年にも、『猫』の續きの外に、『坊ちやん』や『草枕』などを書きまして、殆んど毎月どこかの雜誌に何か發表しないことはなかつた位でしたが、書いてゐるのを見てゐるといかにも樂さうで、夜なんぞも一番おそくて十二時一時頃で、大概は學校からかへつて來て、夕食前後十時頃迄に苦もなく書いて了ふ有樣でした。何が幾日かゝつたか、今そんなことをはつきりは覺えて居りませんが、『坊ちやん』『草枕』などゝいふものも、大概二晩三晩だつたやうに思ひます。多くは一晩で書いたかと覺えて居りますが、自分ではどんな苦心やら用意やらを前々からしてゐたものか知りませんが、ペンを執つて原稿紙に向へば直ちに小説が出來るといつた工合に張り切つて居りました。だから油が乘つてゐたところの段ちやありません。それですから書き損じなどゝいふものは、全くといつてい丶程なかつたものです。それが晩年になりますと、書けなくなつたのか、書きづらひものを書いたせいか、或は妙にこり出したのか、とにかく私にはよくその邊のことはわかりませんが、山のやうに書きそこねの原稿紙を出して、後でそれに手習なんかをして居りました。さうして書く量も晩年には一日の新聞一回分ときめて居たやうですが、此頃から見ると隨分違つたものです。殊に徹夜なんかしたり、傍で見る目も痛々しい程苦しんでゐる樣子がとんとありませんので、よく外の文學者の方がそんな苦心談をされるのが、そんなものかしらないと私には全く腑に落ちない位のものでした。だからこんな片手間に樂なことをして、それで書く當人は面白く、私たちの生活がいくらか樂になるのだから、こんなうまいことはない位に思つたものです。

此頃はまだ萬年筆を使はない前で、ロンドンから持つて來たのですが、細身の螺貝のペン軸を使つてしきりに物を書いて居りましたが、後で萬年筆を使ふやうになつてから、それを子供にやりました。丁度指のあたるところがすれて、いゝ工合に丸味を帶びてへこんでゐたのですが、後で子供たちのお友達が、本箱の戸をこぢあける時に使つて折つて了つたのは惜しいことをしたものです。

三十七年はこんな工合に暮れました。御正月の三日に私が臺所へ出て見ると、猫が子供の食べ殘しの御雜煮の餠をたべて、しきりに前足でもがきながら踊をおどつて居ります。女中たちとそれを見て、あんまりいやしん坊をするからと笑つて居りますと、ちやんとそれを聞いてゐて、『猫』の中に書いて了ゐました。『猫』の中にはそんな工合に、子供一人が、お嫁に行くなら招魂社へ行かう、しかし九段は水道橋を渡つて行かなければならないから嫌いわなどゝ話してゐるのも書いてありますし、その時代の私共一家の生活の實際が隨分書いてありますので、中には全く空想で、小説的に都合のいゝやうに書いたところも多いやうですが、事件や人物は大概根據があつてのが多いやうで

す。

その頃よく宅にいらした方々は、寺田寅彦さん、野間眞綱さん、高濱虛子さん、坂本四方太さん、それから野村傳四さんたちでした。「猫」の中に書かれてゐる生活材料の方は大體私が詳しい積りですが、文章のとは高濱さんなどの方が、ずつと詳しく御存知の筈です、第一「吾輩は猫である」などゝいふ題からしてが、書き出しの一句を取つて、高濱さんがこれがよからうといつておつけになつたのだとか伺つて居ります。

大體「猫」は最初からあんな長篇にする積りは自分にはなかつたのでせう。ホトトギスに發表して見ると、みんなが面白いといつてほめそやすし、自分でもあんなものならいくらでも書けるといふわけで、後が見たいといふ讀者の注文と、虛子さんあたりにすゝめられて、二年もつゞけてあんな風に書いたのでありませう。その頃のさういふとは虛子さんが一番よく御存知の筈です。「猫」で最初に貰つた原稿料は、しめて十二三圓位のものだつたと覺えて居ります。

其頃久保より枝さんがよくお見えになりました。まだ結婚されて間のない頃で、お年も二十二三才位だつたでありませう。折ふし御主人の今の猪之吉博士が洋行中なので、醫科大學長の大澤博士の御宅のとかに同居して居られましたが、文學好きの、當時の[illegible]新らしい女ともいふべきハイカラな方でした。いつも宅にいらつしやる時には袴をはいて、よく自轉車にのつておいでになりました。度々いらつしやるうちには、夏目が[illegible]居る時もあり、又例のとほり機嫌の惡い時もあつたりで、段々私とも近しくなられて、一緒に買物に出たり、時には子供たちなんかをどつかへ連れて行つて頂いて、隨分御世話になつたものです。

或る時、訪ねておいでになりはなつたが、生憎夏目の機嫌が惡い。こそ〳〵私のところへいらして、自分が度々來るので不機嫌なのでせうかしらと、大變心配顔に仰言るので、私の方では久保さんの見た不機嫌位にはなれつこのとですから、又例のゝが出たのですよとすまして居ります。久保さんの方ではさうでせうからと、平常をよく御存知ないので半信半疑でいらつしやいます。さうかと思へば機嫌のいゝ時などは、私の部屋に久保さんがいらつしやるのにわざ〳〵書齋から出て來て冗談口を叩いたりするともあるのです。

「貴女は何故いつも袴ばかりはいていらつしやるのです。」

袴が氣になると見えて、こんな質問をして居ります。すると久保さんも心得たもので、

「帶が無いから胡麻化して居ります。」

といふお答なので、夏目も感心して、

「あゝ、さうですか。それぢや帶の代りですね。」

といつた調子です。

矢張り此の積りだつたと思つて居りますが、教科書の出版をしてゐる開成館から、英語の本を編纂したから見てくれないかと申して參りまして、それに筆を入れてやりました。お禮に四十圓かお錢を貰ひましたので、それを私に下さいませんかといつて、私が横取りをして了ゐました。といふのは長女の筆子が七つになつたのに、これ迄苦しい一方で晴衣一枚作つてやらなかつたのが氣になつてゐたので、早速その金で紋付を染めてやらうと思つたのです。そこで日頃の願ひがかなつたので、喜び勇んですぐに三越へかけつけて、紋付を注文いたしました。

ところが或る日寺田さんがいらつしやいますと、いきなり、

「おれは此間四十圓開成館から英語の本を見てやつたお禮に貰つたが、貰ふが早いか取られてしまつたよ。」

といふ話に、寺田さんもびつくりして、

「何處でとられました。」

と泥棒かすりにでもあつたのかと尋ねられます。

「いや、家の奴にとられたんだ。」

でナーンの事だと笑ひ話になつたのですが、貰らつた錢はこんな風にして使つた後へ、本が出來て參りました。見るとそれには、ただなほして〱れと言つて來たからなほしてやつたのに、れい〱しく夏目金之助著とか何とか名前が出てゐます。今も昔もかうした商人にぬかりはないもので、怒つて見たけれども、もう本は出して了つたのだから仕方がありません。やう〱のことで謝罪に來て、訂正文を入れて、編輯に於いては夏目が校閲したやうなことになつて了ゐました。たしか English Supplementary Reader とかいふ、中學五年生か四年生程度の補習讀本で、英語の面白い物語を集めたものとか申します。それを勝手に編纂しておいて、間違ゐをなほして〱れろと持ち込んで、編者にして出したのです。その本は三四冊出た筈です。その訂正文は今でも家にある筈です。

この寺田さん、よく宅へ見へては、超然と申しますか、漂然と申しますか、そんな風な話をしてらつしやいます。例へば

「昨日は女房を連れて上野へ行きました。」

さういふのは寺田さんです。すると夏目が、

「君はよく細君を連れて行くんだね。」

と出かけます。

「連れて行つては惡いんですか。」

超然と寺田さんが逆襲されると、夏目も仕方なしに、

「別に惡くもないさ。」

といつたわけで、話は自然別の方へそれて、

「俺は昨日友達と二人で神田の方を歩るいて、晝時になつたから牛肉屋へ入ると、隣りの客が噂しあつてるのが、おれの知つてる奴の話

だ聞いてゐると如何にもウンデレでね。」

と夏目が話します。そこで寺田さんが、

「人間ウンデレに限りますよ、何でも細君のいふことをウン／＼と聞いてやつてデレ／＼してゐれば結構ぢやありませんか。ウンデレでなけりや夫婦喧嘩の絶え間がないわけでせう。」

で、夏目もそれはさうだなといつた工合にいや／＼賛成してゐるといつたものでした。

この三月頃から、文章會といふものが、毎月一回位づゝ宅で開かれました。いらつしやる方は、時に多少の異同はありましたが、大體高濱虚子、坂本四方太、寺田寅彥、皆川正禧、野間眞綱、野村傳四、中川芳太郎などゝいふ方々で、その日は何はなくとも晝から私も臺所に出て、いろ／＼晩餐の御馳走を作りました。文章會といふのは、大體ホトトギスの寫生文中心に、皆さんが文章をもちよつて讀みくらをして、互に批評し合ふものでした。「猫」などもしば／＼この席上で讀まれて、しかも讀み手は夏目は下手だとあつて、虚子さんがお讀みになり、それを聞いてゐて自分のものなのに、夏目迄一緒になつて笑ひこけてゐる事などもありました。お持ちにならない方もあつたやうでしたが、皆さん可成り御熱心の様子でありました。

此頃、「猫」の中に寒月が椎茸をたべて前歯をかくとか書いてありましたが、丁度此頃に寺田さんが何か召し食つて前歯を折つてゐられた上に、「猫」が出てから寒月は寺田さんだといふ事が一般に言はれてゐたらしいので、寺田さんも苦にやまれたのか、この文章會の時に、

「先生は人の前歯のかけたのを書いちやいけませんね。」

と抗議を申し込まれたものです。すると夏目は、

「何も君だとわかつてゐるわけぢやないからいゝぢやないか」

と申すのですが、寺田さんは寺田さんで、

「だつて誰かとがめて仕様がないから、出來ることなら書かないで貰ひたいものですね。」

とひどく氣にしてらしたことがあります。

此頃よく坂本四方太さんや野間眞綱さんが、よそから貰つたとかいつては、やれ蒲鉾だの蟹の足だのといつて持つて來て下さいます。それを見ながら夏目が寺田さんに申します。

「寺田はよく家へ來るには來るが、一向何も持つて來てくれないぢやないか。四方太は蟹を持つて來た、野間は蒲鉾をもつて來た。」

誰は何をくれたと冗談半分申しますと、寺田さんも負けては居ず、

「先生は餘程貰ふことが好きなやうだ。そんなら僕は現ナマでも持つて來ませうか。」

などゝ笑つてられたことがありましたが、「猫」の中で寒月さんが土佐へかへつて、土産に鰹節を三本土産に持つて來て懐から出すところがありますが、或はそんな話から思ひついて、私は忘れて居りますが、鰹節を下すつたことがあつたのかもわかりません。寺田さんの生國はたしか土佐の筈です。

『猫』に出て來る人物のモデルが誰だ彼だと詮議されて、多々羅三平だと言はれてゐる股野義郎さんが、いつだつたかあんなに書かれちや困る、法學士にもなつて會社に勤めてゐるのに、あゝいふ風に取扱はれたんでは同僚にはひやかされるしとこぼすので、夏目の方では面白がつて、何も君と斷はりもしやしまいし、そんなに困るんなら新聞にれいれいしく出して取消してやらうかなどゝ揶揄つて閉口させてゐたことがありました。

あの中に出て來る重要な人物では、迷亭などゝいふ人物は誰をモデルにしたものか私には見當はつきませんが、あののべつにへらず口をたたいて、うまく人と調子を合はせて行くところなどは、前に私が初めて九州へ渡つた時に熊本に居た叔父そつくりです。この叔父とは私の叔父の中、夏目が一番親しくつきあつて、お前の叔父はオッチョコチョイだなど申し申ししたものですが、迷亭の話振りを讀むと、私はいつもこの叔父を思ひ出します。此叔父も可哀さうに、去年蒲田にもつてる工場の職工の爲めに、六郷川迄誘き出されて虐殺されました。虐殺する日、職工は工場で刀を研いでゐたさうですが、怨も何もないのにたゞ血を見たさの餘りやつた兇行らしく、職工もつかまつて一週間目位に獄中で自殺して了ゐました。

二十七　有難い泥棒

漸く少しづゝ原稿料が入つて參るやうになりましたので、今迄苦しい苦しいで隨分倹約に倹約を重ねて來て居りましたので何もありません。そこでそろそろ入り用のものを買ひ調へて、客に出す座蒲團をこしらへるやら、洋服をこしらへるやら致しました。實際小綺麗な普段着さへない始末に、原稿料を貰らつたのを幸ひ、縞の銘仙の普段着を自分で買つて來て、羽織と對の綿入れを作らせました。

丁度四月のまだうそ寒い頃のことでありました。私は明け方近くなつて、抱いてゐて添乳をしてゐた赤ちやんが目をさまして乳を吞むので、私も目がさめました。何となく樣子が變なのでぢろぢろ四邊を見廻はしますと、たしかに寢る時きちんとしておいた子供部屋の簞笥の抽斗があいて、中から子供の着物の赤いのがふしだらにこぼれて居ります。おやと思つて見ると、座敷との間が四五尺開いてゐます。これも寢る時たしかに閉めておいた筈です。愈々變です。そこで隣に眠てゐる夏目をゆり起しまして、泥棒が入つたやうよと申しましたので、夏目もびつくりして目をさまします。起き上がつてさて夜着の尻にかけておいた例の一張羅の銘仙を引つかけやうとすると、それがないではありませんか。おやといつて驚いてなほも見れば、シヤツもない、ズボン下もない、帶もない。夏目のものは一切合財ない始末です。それから私の普段着もきれいに姿を見せません。簞笥をしらべれば子供の着物があら方ないといふ騷動です。

家中を見て歩くと、玄關があいてゐる、臺所口があいてゐる、どこから入つてどこから逃げたものか知りませんが、何しろ綺麗にやら

れました。廊下の障子に舌でなめてあけたものと見えて、人さし穴があいて居りましたが、まだ逃げて間もなかつたものと見えて、そこがぬれて居りました。

何しろ家族の着替を根こそぎやられたのだから困つて了ひました。少し寒かつた頃で夏目には袷を出して着せ、私は仕方なしにたつた一枚しかない外出着をきるわけですが、それとて一張羅の縮緬の紋付をきてゐるわけにも行かず、あとは大概家計不如意で、時節時節で質屋の御藏を拝借して出し入れしてゐる始末なので、丁度手頃なのがありません。お派手な長襦袢一枚で居るわけには行かず、どうやら何かを見計らつて着ましたものゝ、おひきずりで居ることもならず、その上に女中から借りた木綿羽織をつかけました。

夜が明けてから出て見ると、郁文館中學の隣の畑の中に、ズボン下の兩方の足にいやといふ程子供の着物をつめて荷ごしらへをしたのが、丁度蛙をのんだ蛇のやうな恰好をして捨てゝありました。それで子供の分は助かりましたが、私のものなんかはみじめにも滑稽なものであつたでありませう。

交番に屆けますと、盗難にあつた品書きを書いて出せとあつて、安物ばかりですけれど品數が多いので大變です。それに一々値段を書けといふのだから厄介です。

一週間ばかり致しますと、警察の方で犯人の泥棒がつかまつたから、明日の晩淺草の日本堤警察署へ出頭しろといふわけです。いかめし、何か命令するやうにさう言ふ儀には、若いいやにやさ男が、禮儀もなく懐手をして立つてゐます。夏目も私も玄關に出て行つて、多分そのやさ男を刑事だらうと考へたので、丁寧にお時宜を致しました。

それから巡査が盗難品の品書きを出して、盗まれた品はかうかうだらうといふやうなことをいふと、その若い男が品書きをのぞき込みます。すると巡査が貴様はだまつてゐろと恐ろしい見幕で叱りつけます。妙だと思ひましたら、それが當の泥棒君だつたには呆れて了ひました。唐棧の着物か何かで、色の生白い、どう見ても泥棒らしくない御人格なので、つひお見それしたわけです。よくよく考へて見れば懐手をしてゐるのも道理で、縛られてゐる手が出やう筈はないのですから、私達も泥棒に入られるだけあつて、迂闊千萬な話です。

翌朝早く何時迄出頭といふので、夏目は日本堤の警察署へ行きました。贓品は一旦質屋に入れてあつたのを、うけ出して、それを古着屋に賣つたところから足がついたのださうで、歸へつて來て聞いたとには、何もかも一週間ばかりのうちにきれいになつてゐるとでした。夏目の一張羅の綿入れが、さう手をお通しなさいといはんばかりにちやんと對の袷に縫ひなほされて居ります。私の普段着なんかはこれ又御丁寧に洗ひ張りがしてあつて、すぐに縫へるやうになつてゐるのですから、願る調法です。殊に有難かつたのは私の曰く附きの古コオトがなほつてゐることでした。曰く附きと申しますのは、裾のやぶけた仕樣のないコオトを、要らないといふので、勝手になりふり構はず内儀へ

折りかへして亂暴に縫ひつけて、ともかく、おかざりの下がるのをふせいでおいたのですが、それを雨の日着て白木屋へ買ひ物に行つたものです。すると入口のところで番頭がコオトをお預り致しませうと申します。私はぬがされてはとんだ恥晒らしなので、いゝえ、よござんすよと斷はります。先方ではそれでもそんならそのまゝどうぞとは言つてくれません。言葉は丁寧ですが、つまりどうしても脫いでくれろといふわけです。ふと氣がついたのは、コオトなどを着てゐると萬引に都合がいゝので、一切入口でお預りするといふ事でした。今更仕方がありません。萬引女としてつけられるよりはましですから脫いであづけはしたものゝ、それを丁寧にたゝんでくれたりするので、愈々もつてそのえらい代物に赤面したことがあります。

その曰く附きのコオトが、これ又至極手際よく綻ほしが出來て、すぐ樣どこへでも着て出られるやうになつてゐるのだから有難がらざるを得ません。こんな調法な泥棒なら申分がないので、どうか一年に一ぺん位づゝ入つてくれると有難いなどゝ語り合つたものです。

ともかく着物の類は殆んどみんな出て參りました。

小說を書き始める迄は、從來夏目の癖として、夜寢床の中に入る時に、うんとこさ讀みもしない本を枕元へ持ち込むのが毎夜のことでした。分厚な洋書を一冊切りならまだしも、二冊三冊と持ち込むことは珍らしいことではなく、時にはその上にスタンダードやウェブスターやら大字引迄持つて來るのです。おや讀むのかと思へば別段讀む樣子もなく、感心に今夜はいつまでも本を開いてゐるなと思つて薄目をあけて見てますと、いつまでたつても頁をめくる音がしません。何の事、一頁も讀まないうちにもう眠つてゐるのです。讀みもしない本を御苦勞に持ち込まなくてもと申すのですが、手持無沙汰なのかともかく何かしらん持つて來ては枕元につみ重ねておくのです。

其頃私共はまだ石油ランプを使つて居りましたので、忘れてそのまゝ寢て了ふと困るし、又蚊帳を吊つてる時などは危くて仕方がないのです。ところが小說を書き始めてからといふものは、疲れるのですか、何かひとりで考へてる方が面白いのか、ふつつり讀みもしない本を寢床に持ち込む癖がなくなりました。

一體平常はよくねむる方で、午睡などは元からよくして居りましたが、夜も物を書く人としては早い方でしたでせうし、朝も學校があつたせいもあるでせうが、寢坊な私なんかよりはいつも早く目をさまして居りました。とにかくさういふ日常生活に對しては、これといふ無理もなくて規則立つて居たかと思ひます。

二十八 『猫』の出版

少額ではあるがちよいちよい原稿料が入ります。それだけでも其頃の私たちには大變有難かつたのですが、丁度夏になつて帽子が欲しいといつてるところへ、たしか『猫』の稿料が十五圓か入りました。早速

帽子屋へ行つて十五圓のパナマ帽を買つて來て大分得意でかぶつて居りますと、原口次郎、撰ばれて北京の學校に招かれ、香取壽さんが夏休みで歸つて來られて訪ねて下さいました。見ると自分の御自慢のパナマより大分上等なのをかぶつて居られる。それを見て教師の僕ら一級上等の帽を戴いてゐたんぢや仕方がないなんかと痛感して居たことがありました。

明治の秋、始めて話があつて、「吾輩は猫である」の上編が出版されました。出版者は大倉書店の番頭をしてゐた服部といふ人が出したいとあつて、大倉の方からも是非頼むといふので、服部の手で出版されました。たしか翌年になつて、その服部といふ人の店が立ち行かなくなつて、書籍の手に移るやうになつたかと憶えて居ります。出版されて見ますとよく賣れます。外の本の賣れ行きはよくは知りませんが、ともかく當時評判で下働つゝ極まつて増刷を探して居りました。今日でも漱石の作品のうちでも一番よく出るのが「猫」で、世間でも漱石と言へばすぐ猫を思ふといつた工合に廣く讀まれて居るやうです。

此頃の印税といふのがたしか一割五分だつたやうですが、印税を持つて來ると早速握つて取つて置きます。元々ずぼらといふのではありませんが、金には殆んど縁の少かつた人のことですから、此種ではいくら金が入つて來るのだか知りません。それでもたしかに相當「猫」が賣れて金が入つて來てゐるのに、あれは一體どうしてゐるのだらう、と僕に聞つ [illegible]

たことでせう。或日

「お前あの印税が入つたらうが、どうする積りなんだ。又困ることがあるだらうから、入つた時にまとまつた貯金でもしておくといゝわ」

といふ話です。そこで私も、

「少し質屋のお藏に入つてゐるから、ともかくあれを出すことにしました」

と、始めてこれ迄の苦しかつた生活のやりくりをしてゐたことを夫に話しました。金のない無いといふ事は自分でもよく知つて居り、子供は殖えるしかゝりはかゝるし、もつとどうにかしなければならないなどゝ口には言つても、果してどれ程になつてゐるのか、根が御大名ですから、買ふ本は買ひ、たべるものだつて私たちは何を食べて居ようと、ともかく頭を使ふ人にはと、それ程まづいものを食べさしてゐるわけではないので、そんなに家計が窮迫してゐたのだとは其時迄氣付かずに居たのです。今の話を聞いて、

「さうか。」

とひどくびつくりして、二の句がつげなかつたさうでした。が、いゝ家運に、按摩の言つた願望のせいか、それからといふものは、以前のやうな家計の不如意にはまづ／＼會はなかつたといつていゝでありませう。

此頃から方々の雜誌や新聞から原稿の依頼が出來ました。雜誌ではホトトギスはいふ迄もなく、新小説中央公論などを始め、いろ／＼な雜誌の

方が見えました。本屋では服部書店を始め春陽堂だの金尾文淵堂だの其他澤山あつたやうですが、段々訪問者が多くなつて弱つて居たことも度々でした。雑誌にのせた原稿料などの記憶は殆んど確かなものがありませんが『カーライル博物館』が全部で八圓だつたのを覺えて居ります。それからホトトギスが始めは多くて一枚五十錢位だつたのが、後では一圓に上がりました。新小説がやはり一圓位、中央公論が一圓二三十錢見當だつたかと覺えて居ります。

こんな雑誌の編輯者や出版者の方々の外に、此頃になつて前の文章會の外に新らしくちよい〳〵おいでになつた方に、厨川白村さんだとか、安藤さんだとか、瀧田樗蔭さんだとか、森田草平さんだとかいふ人達がありました。其頃よく手紙をよこす人に森田草平さん鈴木三重吉さんなどがありまして、又大概長い手紙でした。殊に鈴木さんは、其頃神經衰弱だとかで、一年大學を休んで瀬戸内海の方に居られて、そこから手紙をよこされるのですが、こんな長い手紙が書けるやうなら、學校なんぞ休む必要はないから出て來給へなどゝ、夏目が言つてやつたことがあつたやうです。

此の鈴木さんについては、いつも〳〵長い手紙でお馴染みになつてゐたのですが、まだお會ひしたことがない。ところが遥々京都から寫眞を贈つて來られたものです。その寫眞が丁度大理石の胸像のやうな工合に撮つたもので、頗るつきのしやれたものです。そこで寫眞でさへこれ位だから本物はどんなに美しい方かと思つて、御友達の中川芳太郎さんに、

『鈴木三重吉さんていゝ男なのですか。』

と伺ひますと、

「えゝ、いゝ男ですよ。」

と、聞くだけ野暮だといつたお返事です。ところがしばらく後のこと、或る日玄關に訪ねて來た人があります。丁度女中が居ないかで私が取次に出ますと、僕鈴木どすと輪廓だけは寫眞で見覺えのある顔が申します。おや〳〵と思つて、色が大理石とは大分違ふのにとあての外れたことがありました。

二十九　生と死

文章會はいつおやめになつたか、其年のうちに立ち消えになつたかと思つて居りますが、その止めた原因の一つは、私が病氣になつて、折角集まられても、前のやうに御馳走も出來なくなつたので、お斷りしたのがもとのやうでした。そこで外でやらうかなどゝいふ話もあつたやうですが、おやりになつたかどうか私にはわかりません。其後訪問客もめつきりふえたので木曜日を面會日にきめまして、これは死ぬまで續きました。其頃集まられた方々は、文章會の方々の外に、鈴木、森田、小宮、阪根などゝいふ方、それから野上豐一郎さんや、松根東洋城さんなどが見えたやうです

十二月が臨月ですが、私はいつもお産が重い方なので、十四日の夜の三時頃に、しきりに陣痛が起こつて、いたみ出すのですが、今から始まつて、いつもだと明日の正午頃でなければ生れまいと高をくゝつて居ますので、まあ〳〵此時刻に人騒がせをするでもなからうと我慢してますのですが、四時頃になつてはどうにも我慢が出來ません。そこで夏目に起きて貰ひ、女中をお隣者さんのところへ走らせて、いつもかゝりつけの牛込の産婆へ電話をかけさせました。が段々痛みは烈しくなる一方で、これではならないといふので、誰でも構はん、附近の産婆を起こして連れて來てくれといふわけで、又女中が走り出します。五時にもなるとどうやら生れさうな氣勢ですから、さあ困りました。もう殆ど生まれさうですといふわけで、夏目の手につかまつてうん〳〵いつてるうちに、とう〳〵産まれつちまひました。さあ、大變だと狼狽するのですが、私は當の産婦で動きも出來ず、夏目も取り上げ婆さんは始めてのことだから、どうしたらいゝのかさつぱりわからない。ともかく悪い水が顔にかゝるといけないといふを私は聞かされてゐたことがあつたので、ともかく脱脂綿で赤ん坊の顔をおさへておいて下さいといふわけ。よし來たとばかりに一封の脱脂綿で夏目が上からおさへてゐるのですが、それが海鼠のやうに一向つかまへどころがなく、ぷり〳〵動くやうな動かないやうな、觸る要領を得ない氣持ちの悪いたらない。そこへ牛込の産婆が飛び込んで來て、第一番に産湯を沸かしもしなければならないといふので、[illegible]をかへさせてれかせるやら、それ産湯をわかせといふわけで、えらい騒ぎで、やつとのことで夜を明け渡したのですが、これには夏目も度膽をぬかれたやうでした。

これが四女の愛子で、女ばかりこれで四人です。此の子が六つ七つになつた頃、つく〴〵顔を眺めては、どう見ても我子ながら不器量だなどゝ申しまして、

「愛子さんはお父さんの子ぢやない。お父さんが[illegible]大樹の下で拾つて來たのだ」

などゝ揶揄ひますと、愛子も敗けては居ず、

「あらいやだ。わたしが生まれた時に、自分ちや脱脂綿でわたしをおさへてゐた癖に」

とあべこべに喰つてかゝります。

「こいつつまらないことをいつの間に聞いてゐるんだい。」

などゝ笑つてゐたことがよくありました

三十九年は前年に敗けない程[illegible]書いたやうです。前年に書いた短篇が此年の五月頃漾虚集といふ本になつて出ました。自分の書齋を漾虚碧堂と言つて、さういふ額をはらしたりしてゐましたから、そんなところから出たのかも知れません。猫は續いてホトトギスにのり、秋になつてその中篇が出版されました。坊ちやんがホトトギスに出たのがこの四月、草枕が[illegible]に出たのが[illegible]と[illegible]ます。[illegible]

に出ました。十日號の中央公論に「二百十日」を出て、その十一月に纏めて十二月「鶉籠」といふ本になつて、春陽堂から出しました。この三十八九年の兩年が、夏目にとつて一番創作熱の旺な年だつたと思ひます。

この年の八月の末に、三女の榮子がお腹を惡くしまして、始めは大したことでもないと思つてゐるうち、どうも樣子と言ひ便の色と言ひ變なので、醫者に診て貰ふと、赤痢の疑ひがあるといふことになつて、すぐ[illegible]大學病院の隔離室に移されました。私がついて行つてやりたいのですが、何しろ乳吞み兒のあるときだから、女中をつけてやつて、時々行つて見ることにして居りました。あとは熱を上げるやら大消毒で大變な騷動でした。

上の二人は幼稚園に行くので手がかゝりませんが、厄介なのは赤ちやんです。そろ／＼はい／＼が出來るので、私が病院へ行つてる留守の間には、女中が女中部屋につれて行つてねかせておきますから仕事をしてゐるのですが、するとくるりと起き上がつて、いつの間にやら台所へはひ出して行つて、猫の御飯を覗くのだからやり切れません。さうかと思へば緣側へはひ出して行つて落つこちさうにのり出してゐるのをやつととめたとやら、中々手がかゝります。

さうしてゐる間に入院してゐる子供も次第によくなりましてこれで安心といつてるところへ、病院へ急な使が里から迎へに參りました。父が惡いといふのです。それから[illegible]に參りまして、一週間ばかりとまり切りで看護を致しましたが、とう／＼九月十六日に五十六才かで亡くなりました。

前にも申しましたとほり晩年非常に不遇でありまして、[illegible]にも窮乏して居りましたので、さて亡くなつたが葬式を出すお金もないといふ始末。それでもいゝ按配に、其頃安田の保險會社に出てゐたりしたので、其方からもいくらかのお金を貰ひ、それから親しかつたお友達から前につとめてゐたところから何かと心配をうけて、どうやらそれでも葬式を出すことが出來ました。私たちも姉婿でも少しづゝ分擔するといふわけでした。

ところが前に、葬式中におこつたことには一寸不義理をするといふ夏目と私との間に固い約束が出來てゐるので、金も出しては默れましたし、新聞の死亡廣告にも名前を列ねましたが、どうしても本人自身は參りません。私がなんでもかんでも傍に連れるとは申しません。結局顏出しをしませんでしたが、其時新聞にあてて[illegible]の手紙を出しました。それが大變いい手紙だつたと弟なども申して居りますが、大事に保存しておいたのを、其後親族達にやられたりした騷ぎのうちに紛失したのでせう。今殘つて居ないのは殘念です。

そこで葬式には行かず、しかも死亡廣告には名前が出て[illegible]に行かないからといつて、それでは學校へのこ／＼[illegible]たとあつて、其時は學校を休んで、家に謹慎して居りました。こんな

ところはいかにもあの人らしい感じが致します。

この年の春頃であつたと思ひますが、『猫』で夏目の文名が急にあがりましたので、昔戀しくなつたものと見えまして、前に子供の頃養子にやられて、其後手の切れた筈の鹽原の老人が、人を介して元どほり鹽原の養子にかへつてくれないかと申して參りました。今頃になつててんでお話にも何にもならない相談なので、夏目も餘り相手にならず、ともかく昔の義父子の關係もあることですから、今手が切れたといつても、御希望とならばおつきあひは致しませう。又家へ出入りして貰らつては困るとか何とかいふわけではないから、おいでになりたかつたらおいでになつても差支はない。しかし自分は今非常に忙しい體だから、いらつしやる度におあいそをしてゐるわけには行かないかも知れない。それさへおわかりになつて歸ればといふ話で、其後ずつとたつてから、仲へ入つたその人が、鹽原の老人を連れて來ていろいろ昔話なんぞをしてかへつたことがありました。

切支丹懺悔錄（二）

吉野作造

三番のマンダミエンドに就て（一）

今伴天連樣御說法の趣りでござれば、ドミンゴ（Domingo 主日即ち日曜日）祝日に御彌撒を拜む丁目がござらいで、是非に及ばぬ事なれども、二三度は時雇ひ乍ら略綴で拜みまらせなんでござつた。また一度は、伴天連のござる所を知つて、途で何んでもない事に關係つて、着いた時はモウ（彌撒を）仕始めさせられた所で、四分一ほど缺かせまらした。

其上御彌撒を拜む時分に大方不信心で、要らぬ事に念を散らいて拜みまらしたが、故意とさう致しまらせぬ。たゞ平生色々の事に耽つて居る所で、御彌撒の中にも念が彼方散り此方散りすれば、迷惑致しまらする。其中二三度はかり辨へながら、御彌撒を拜みに參つて始めから末まで其の所に罷り居つたれども、それに念をかけまらせなんだによつて、拜まぬと同じ事でござると思ひまらする。

また忙がしい事があつて、ドミンゴ祝日に、何れも働き、内の者共三人にも仕事をさせまらした。一度は一時の間、二度は日一日の事でござつた。さりながら、一度の仕事をせずんば大事なる損に遭はうずるに極まつておりやつたによつて、差し延ぶる事も得いで仕まつゝたさかいに、あまり氣にかゝりまらせぬ。

註。（一）三番のマンダミエントは「ドミニカ（ドミンゴ）祝日を勤め守るべし。」

四番の御掟に就て（一）

私が（は）女房も子供も親も持ちまらした者でおりやる。さうでござれば、姑とおよそ仲違うてゐまらする。其の仔細は、其れ（姑）が意地が惡うて、（私が）子供か女房にか或は意見或は折檻を加ゆる

時に（姑は）あれへ堪へられいで泣き叫び狂はれまらするに依つてでござる。また女房、夫婦の契に贬忘せらるゝ時も、定つてぬしが母か姑（姑を指す）の所爲であらうと推量して、それでも（姑を）一向叱りまらする。また身が一子の息子をば善悪（是非とも）ぬし（姑）の宿に泊めうとせらるゝに就て、吾が言ひつくる仕事を暇が無うてせぬ時は、さるとては聞えぬ事ぢやと申して、父に從はぬ不孝な事も叱り、また餘り存らゆるあの年寄が早う死ねかし！と時々心底より存じまらした。五六度も其れと諍うて、面に悪口を吐き、蔭でも二三度譏り、其のこと散々に沙汰取りなしまらして、遂にそれから二月三月の間に其れと一言も交はしまらせなんでござつた。また好者ものと七八度無理に腹を立てゝ、一二度は面を擲ち、ま一度は杖で叩き、二度も蹴倒し、足で押し踏んで、懐姙の者なれば子をおろさせまらした。其上また老體の相談に對して、無禮に、其れの氣に懸つた返事を戻しまらした。また、活きてござること身に難しう存じて、ついでにも其の財寳を譲るために死なうと望みまらしたが、一度ばかり頭痛からでござつたに、殘りは口ばかりでござつた。時々も若輩者と寄り合うて、宿老、貧人、不足なる者を罵詈誹謗し、其れに施び加へらずる慈悲の代りに、たゞ譏り嘲りばかり懸けまらした。

また身が舎兄と大事ない事に就て二三度諍うて、少しの間に其れと叱り、何か氣遣怪我災難に遭はれかし！と望みまらしたが二度でござつた。一度は心根から何なりともこゝろざしがあつて、ま一度はさのみ深うござらなんだ。たゞざんざと通りまらした。 30

また四度、或る伴天連様の行儀を身が仲間の者共に譏らるゝを聞いて、それを咎めぬのみならず、結句同心して、吾れも其の御面目に當る事をば相譏りまらした。更而その寄合の人數は皆それをよう知られたれども、デウスの御名代（伴天連を指す）の悪行も取扱うて雑談の題目と爲いたが、悪いと存じたから致いた事は身が誤ちや。

そのほか、隙間も無うて（不仲でも無いにの意）身が夫婦の上に悋氣た心を起いて、相手を誰れとも邪推して、二人ながら憎い奴と思ひ、ならば毒でなりとも殺さうと存じまらした事が、二度ござつた。

また女房子供の養ひに就て才覚心懸もしかく／＼ござらいで、其の進退行儀、切利支丹の善い行儀なんどまで構はいでは（ならぬを添へて判ずべし）の事なれども、今まで随分致しまらせいで、身が科でござる。

註。(一)四番の御掟は「親どもに孝行すべし。」但し此の誡は、單に親ばかりでなく、一切の長上祿者、聖職者、上役人などに對する不倫非禮までも誡む。

(二)ヘンキ（fengi）は羅甸文には renuit とあり、即ち「拒んだ」の意。パセスの辭書にも「嫌ひ斥く」などの意に解してあり、如何なる對字を宛つべきか判然せねが、意味をとつて假りに□□と

しておく。

(三)ザンザト(Zanzato)は羅甸 leviter, 即ち lightly, easily の意。

五番のマンダミエント(二)に就て

それがし、邪の道を見識らぬ幼い者に手づからの淫樂を語り、仕樣までも教へ勸めて、その惡を犯させまらした。

また嫌がる者に惡い意見を加へて、モルタル科をせらるゝ基きになりまらしてござる。

そのほかまた、身が知る人、獨りに(で)惡い事を勸めに行く事成り叶はいで、吾れ存じながら作も致し、其れに合力も添へまらした。

これは五度でござつた。

また私しが(は)、女房を持つた息子がある。その女(誰人か此處には不明)身が嫁と再々口論して(私が其女に)遺恨を含み、死れかし、打死に遭はれがな！　見にくいと存じて、何んとも吾れが眼に懸けられぬやうに致さうずるにはと思ひまらした事は、十度ほどでござつた。

其上器量な(強いの意)男と喧嘩して、彼方から身を一刺し殺さうとせられたれども、吾れは兵法の上手でござれば、とかく相手に夥しい二つ三つの傷をつけまらした。またその負傷者の兄弟と親類、その返報として有に無に吾れを鐵炮でなりとも何んでなりとも打ち殺さうと云はれたと聞き及うだ時は、憤氣た心を以て、あの彼奴が、皆討ち果さう、と口でも吐き、心でも存じまらしてござる間は、三月ほどでござつた。さりながら、彼れは快氣せられて後仲直り致しまらして、今近頃知音でござる。其の藥、醫者なんどの雜作は大いことと承つたれども、相手から其の喧嘩をしかけられた所で、身は心安う、その失費に何もやりまらせいでござる。(四)

また或人わたくしが事惡う沙汰せられたと聞き得たによつて、行き向うても禮をし(せずの誤か)、二月の間に一語も申し入れまらせなんでござる上は、此中あの人赦しを請ひに寄られたれども、遺恨また過ぎまらせいで、つひに赦さなんでござる。

其上、させらぬ事に就て人とおく〳〵とした喧嘩口論雜言、腹を立てて惡口雜言を云ひつけた事等は、繁うござつた。後は仲直りをし、赦しも互ひに乞ひまらする。

答。また吾が夫は意地の惡い者なれば、自らを(私を)打つつ叩い[illegible]せらるゝによつて、其の子を儲けぬために、身持になつてから腹を捩つて其子をおろしまらした。

答。其ほか、吾等夫人倹極でござれば、子六人を持ちまらした(か[illegible]それを育つる樣もござらいで、懷胎になるまいために縮締も致しまらする。一度も、懷姙になつてから、藥を用ゐて六月の子をおろ

し、一度また産の時分に子を踏み殺いて、胎中から死んで生れたと申しまらしてござる。——

註。（一）五番のマンダミエントは「人を殺すべからず。」同時に此處には自殺をも誡め、又他人の愆へを犯かす事も誡む。
（二）知音は友人知己の意。當時慣用。
（三）シツイ xit(çi)は羅何文に sumptus 即ち expensa、またパゼスの辭書に「ウシナヒツイヤス」と解あり。依つて失費を宛てる。
（四）此の一段、告白者が武士らしく見ゆるに注意すべし。
（五）最後の二段は特に女の告白を舉げたること、また注意すべし。

六番の御掟に就て

飜字者曰。此の節は風俗を害する恐れあるを以て全部削除した。削除部分は原本三十六頁より四十四頁まで、其内奇數頁は羅甸對譯文なる故、即ち五頁分である。

六番の御掟とは「邪婬を犯すべからず」で、夫婦以外の交り、自涜、欲念などを悉く禁じてある。此の段は、その邪淫戒に觸れた男女の告白を有りのまゝに錄したものである。告白者の眞劍卒直な態度は實に驚くべきもので、所謂も聞くと云ふ事は隱さず飾らず悉く神の前にさらけ出したと云ふ事、自涜、和姦、姦通、強姦、はては獸姦に至るまで男女とも全く微細に赤裸々に己が淫行を懺悔してゐる。如何に面當「デウスの御名代」として歸依し服した伴天連の前でも、恥を忍んでよくこれだけの事が告白出來たと思はれる程で、到底現代の人間には想像も出來かねる。また一面、當時切利支丹教會が如何に邪淫を特に嚴戒したかを窺ひ知る事も出來る。文獻として一面的には此細なものだが、當時の風俗習慣、信仰狀態などを、裏面から端的に窺知し得る無二の珍資料である。

七番のマンダミエント（一）に就て

私が（は）盜みは仕らねども、地上に二十匁の金袋を見付けて取つておきまらした。とかく主があるまいと存じて、吾れは貧人で、その金をば身に取つて使はうと存じてゐた所は（が）、其後頃主誰れと能う知りながら、未だ其金を還りまらせぬ。とかく、有らば還らうとの定め（決心の意）は度々でござつた。還るまいとも、一度も二度も存じまらした。さりながら最早沒しまらせうず。

また田畑を作るために貸取を雇うたればい（るに）、その二日の賃を留めてまだ濟しまらせいでござつて、其れは貧人でござれば、速速乞はれたれども應はいで、二月の間に濟さいで居つても、濟しまらせうず。

答。わたくしが此の商物を買うたればい（るに）、珍しい物を買ひに附合

うた人數が多うて、賣る人それに取り紛れて其の價を忘れられた所で、身は何も云はずに其儘錢を濟さいで立ち去りまらした。それは六匁ばかりでござつた。さりながら、見知らぬ客ぢや所で、其れに得戻さいで、貧人になりともか、御彌撒を行はせてなりともか、施いて、とかく御意次第に致しまらせうず。

また或時、人の内の者が物を賣りに身が所へ來たれば、盗んだ物と存じたから、其の價は淺う云はれたによつて卽ち買ひまらしてござつた。二匁ばかりの物でござつた。わたくし商人（又は、商人（卽ち、商ひする者卽ち賣買する者でござる。さうござれば、儲けは（を）重ぬるために細間なう僞を云ひ、賣物の瑕瑾を申し現はさいで結局それを褒め上げて、樣々に人を欺つた事は、度々でござつた。少しづゝの事であつたれども、積つては二百匁ばかりでござらう。とかく取つた物は多うござりしかも、人數（一も見知らぬ所で貧人に施いてよからうと思ひまらする。

また吾れが（は）將棊の甚い上手でおぢやるに、人がそれを爲りに來て、とかく吾れは其れを騙すために初心の者ぢやと云ひ、初めの上手にも故意と負けてあつたれば、それで彼人身が金の取りたさに引かれて、つひに負けられて（身が其の金を悉皆取り盡しまらした。都合は五十とまた三十三匁、八十三匁でござつた。さりながら、それがし勝つた事は騙いてござり、其上彼者貧人で、俄勝を爲ふ樣が無いを知つたによつて、身が知識を持らで其金をば隱れて返しまらしてござる。

そのほか、身が借錢は甚い事でござれば、貸いた人も借用共も濟せと請はるれども、一度に皆を濟すことも得ず、叫うた分も濟しまらせなんでござる。さり乍ら、今コンヒサンの[illegible]のために、其の借の金を皆調へてござるによつて、今日中に濟しまらせうず。

さてまた吾等、渡海せらるゝ際に、其の商ひの儲と利潤にも金を貸しまらする。然れば損をせぬために、先づ其の樂より其の代金の値を取り預けておいて、其上利をも取りまらする。例へば百匁を貸す時は、歸朝して百に十か二十五か三十か取りまらする。それもまた金にか、商事にかけてか、とかく身が次第に取らうとの互ひの約束ぢや。五穀を蒔く時分にも、或は何或に其の種を貸すは、とかく存申した如く、刈る時分に二三十ほど利潤に取る（ぢ）流行る分らやに、吾れもこの六年の間さう取りまらした。尤もコンシエンシヤ（Conciencia、良心）に懸つたれども、流行る所で人並に致しまらした。

わたくし或る大名の代官として其の御知行を見物致しまらする。さうござれば、其の役に就ての嘆きは多し、總係（利益の意）は甚うざるによつて、吾が係屬を育つるために、主の許無う過分に取りまらした。幾度かは覺えまらせぬ、大略七八度でござる。

また内の者共の價が時々餘り低いと存じて、其れに（内の者共に）知らぬ顔して（主の）物を少しづゝ取らせまらする。其上また二三度身が粗忽油斷で大事な怪我あつて、主はそれで甚い損を得られて

ござる。

また時によつては、叶はぬ内外ともにも、それ〳〵に當る年貢を、餘り責めつけて濟させまらする。(四)

註。(一)七番のマンダミエントは「偸盗すべからず。」もとより盗みばかりでなく、一切の不正利得を禁ずる。

(二)ワキモノ(vaqi mono)はアキモノの訛か誤ならむ。意味は商物に相違なし。

(三)キチョー(qicho)は羅何支には reditum 卽ち reditus とあり、パゼスの辭書には先づ「祖國へ歸る事」と解あり、更に註して、支那や「呂宋」に行つた者が日本に歸る事と說明あれば、歸朝なる事疑ひなし。當時既に此の文字を通俗に用ゐたるものの如し。

(四)この最後の告白者は「大名の代官」とあり、身分ある吉利支丹なる事、注意に價す。

八番の御掟に就て(一)

先づ私が(は)、いゝ隣の面目を失はする(の)心當(目的の意)を以て、身が罪科を(に)在樣にして人に顯つて散らしまらした。其の隣は生得の儀の善い人でおぢやるによつて、聞いた衆は多分信事に受けられいで、卽ち其の聞え外聞は他人と(に對しての意)少し損ぜられまらした。

また人に會はぬ者の惡い事を聞き及ぶ時は、必ず其分ぢやと存じ、口でも申しまらする。

其他私が慾に受けた施物の、外聞に當る惡い批判をば、一度人に知らせまらした。一度は惡い心當で、また一度は身が知音と緣邊の約束を止むる爲でござつた。

また、させらぬ咄緣に踏みかゝつて、大事なる人の事に就て罪科の心が起つて、定めて其分であらうと存じ、人にも申し入れまらして、其人も許れと同心せられてござつた。

其他わたくし意地と生れのすき(生れ付きの意)の惡い者なれば、諸人の事を誹り、譏るを聞く時もそれを咎めずに、結句言葉を添へて相譏りまらした。また知音の仲を違はするために片一方の事を惡う云ひなしまらした。

また身が或る親しい人と密縫仕らうと存じて、其の事を譏つて、身を聞かれた人から其の耳に寄り入つたれば、其儘私と仲違うて、今も其分にゐまらする。

またたゞの物語雜談のうちに、然に當たらぬ、人の仇にならぬ事を申した事は、飾り繕うて數限りござるまい。

右のマンダミエント(一)に就て、申し現はいたしたよりほかは、覺えまら

せぬ。たゞ他人の夫婦財物を望みまらすれども、其れを盗まうと(は)思ひもよらぬことでござる。たゞ我れかの様のものを持つたらうには！　とばかり存じまらした所で、さのみ深い科であるまいと思ひまらする。さり作ら、天然その望みが起る時、貪欲邪淫嫉みなんどの科になる程の欲が(を)、身は見分けずして取り混へた罪もあらう程に、デウスの御前に在る如くに現しまらする。

傲。七つのモルタル科の上の誤を申し現しまらするゝに、先づ一番に對して、わたくし、人より、氣が強く、力の較べも無い者と思はるゝ儀に、その憎まれたさで二度公界に作手柄を語りまらした。一度のは作事ばかり、少しの地盤も無い事であつたに、二度のは例へば四分一ほど實事でござつたれども、殘る所は、生得成りそもない事なれば様々の企みを添へつけて、身方から、聞かるゝ樂(か)隨分價事に受けらるゝやうに才覺致しまらした。二度ながらの障目は深い科でござつた。

ま一度は、叶うた男(不字削除)と見佩らるゝために、念を懸けた女ごとを犯いたと、また一夜に××××××××と身が強さを誉め揚げて、四人の前で謂りまらした。

また何につけても私は第一、身に較べて見れば皆の衆は何んでも無い、役に立たぬと、心底にも思ひ、口でも折々申しまらする。

身に在る善い事も、名聞の心で威程(出來るだけの意)誉め揚げて、人より有様の上に(實際より以上にの意)なほ見るゝやうに種々の武略(駈引の意)を致しまらした。

また勝れた誉人と思はるゝ儀に、人の眼にかゝるやうに種々の善行を勤めまらする。

註。

(一)八番の御掟は「人に讒言を掛けるべからず。」

(二)イチモツ(ichi mot)は羅甸文 rem magni momenti (a thing of great moment)で、パゼスにも「スグレタモノ」とあり、よつて逸物を宛つ。

(三)イチトウマレノスキノワルイは羅甸文 ego sum malignantis naturae et inclinationis (I am of malignant nature and inclination.)

(四)下のマンダミエントは、第九誡「他人の妻を戀すべからず」と第十誡「他人の財を妄に望むべからず」とを云ひしものの如く、但し第九誡は第六誡邪淫誡に包含され得るを以て、こゝでは特に第十誡を主としたやうに見える。併し其の第十誡も第七誡「偸盗すべからず」に入り得るから、「申し現いたよりほかは[illegible]えまらせぬ」と謂つてゐる。

(五)「他人の夫婦」を望むとは奇なる云ひ方だが、「男ならば人妻を女ならば人の夫を」と云ふ二重の意味を含ませたのであらう。

(六)七つのモルタル科は、我慢、貪慾、嫉妬、邪淫、饕餮、瞋恚、不精で、これを以て諸罪諸惡の大源となす。

(七)クガイ(公界)は羅甸文には [illegible]、パゼスにも同様の解説あり。俗界と區別して、公界を採る。

五番(一)に就て

わたくしが(は)公界の者なれば、数多の知る人を持ちまらした。さうでござれば、或は其の方に馳走を受け、或は身より宿に其れを呼び寄せ、若しは日本形儀に盃の酒儀は、平常の事なれば、酒を‖御酒を食ぶる仕合せが繁うござつた。其内に一二度呑み過いて、酒に酔ひ過つて、何も覚えぬほど本性を乾度失ひまらした。ま一度は左のみ深うは食べねども、頭が痛い、酒も戻し、氣までも少し損せられまらした。

或時も大事なる客に二三人身が方へおおやつて、二日の間其れを抑留致いた所で、少し存かあつて斎もし、また其の客をば是非ともと強ひて、とかく四人ながら二日酔致しまらした。

また四旬節(Quaresima)(三)に一度、四季の精進にも一度、ゼンチョの方に居りまらすれば、其の亭主を相伴して肉食を致しまらした。其上二三度、憚ひ乍らサンクタ・イゲレシヤ(Sancta Igreja 聖なる教會、聖會)(四)の一食精進(五)と申すを破りまらした。

また飲食打眠の中間を保ちまらせいで、それにつけて稍々少しづゝ過しまらした。—

註、(一)「五番」とは十誡の五番ではなく、こさんた・えけれじやの御掟」の五番「聖會の定め給ふ時日に大齋を致すべし」を云ふのであらう。

(三)カレスマ(Quaresima)は復活祭前四十日の齋戒精進の期間。セジユン又はゼゼン(Jejum)は Jejum 卽お齋食の事 四季のゼジユンとは、春夏秋冬各季節の始めの水曜日にデウスに感謝の意味で勤める齋食。

(四)Sancta Igreja は、葡語から採つてサンタエケレジヤと借用す。

(五)一食精進は一日一食の齋戒。

嫉妬そねみ(一)に就て

吾等しきの者の、風がよう―譲り(吾等と同程度の人間が運がよく―相續を受けの意)かれこれ俄かに福人になられたを見て、さては身が事の上はかりに風が悪いが出ないと存じて、氣が詰つて遠う悲しみ、他の財をば妬みまらした。

其他或人の公事に就て、身は其の贔屓して勝つほど合力致さうと約束したれば、隨分それに念を入れ、成程(出來るだけ)働いたれども、其の公事をし紕す間に、過分の賄賂(又は)贈物を取りまらした。

註●(一)七つのモルタル科の一つ。

(二)マイト(maito)は賄賂と同義語なることは明かなれど、如何なる漢字を宛つべきか判然しない。姑く賄賂を代用す。

慈悲の所作(一)に對して

わたくし鐵砲薬を作る者でござれば、阿彌陀のヘレジエス（なる）海賊人に其の薬を賣り、其上、兵糧、鐵砲、其外、征矢、海賊の道具をも、拵へ出し、其の爲に（海賊人の爲に）買ひまらしてござる。とかく彼等は輕宗切利支丹と海賊の者たれば、定めて左様に申した條を貸りつゞする（貸り續くる？）が（は）御戒めでござらうと推察いたしながら、四年の間にし續きまらした。

また今の流行る切利支丹の障礙（迫害の意）に就て、身が邊りへ伴行が來て、隨分（隨分の意）切利支丹衆に、伴天連様に宿を貸し其れに會はれまいとの判を据ゑ、また之を締ふ定むる爲に誓文の約束をさせらるゝ所に、吾れも其の約束をし、隣りの者にも同前の意見を加へまらした。

これは二度でござつたに、一度は、神佛にかけて斯う致すまいと誓文立てと云ひつけられたさかいに、身は、神佛は徒に立たず（役に立たぬの意）頭の誓文の題目でない所で、ついでに遂げいでも大事あるまいと存じて、ゼンチヨの作行を顯る隙ばかりに立てまらした。一度は、さて頭のデウスにかけて以下の誓文も立てたれども、身が存分には、伴天連様に宿を貸し御身を召し使はるゝこと尤も御意見の内でござれども、御掟の御内でござない所で、命を助かるために其の誓文を立てゝも、せめて科はコンシエンシヤに觸るまいと思つて仕つてござる。一度もまた村の乙名（村長の意）、伴天連の代に（代理として）なりさせられたによつて、不調法、浮とした秘蹟ばかり、表向の判を据ゑさせられまらしたれば、（既に）吾れが申した如く、二度とかに致し（た條にたり）、すれば何ぼでも深い科でござるまいと他人にひしと申しまらしたが、今まで此分に仕つたが、自今以後は御意次第致しまらせうず。

そのほか吾れは大惡人でござるに依つて、定めて、見知らぬ、身に覺えぬ科多うござらうずれども、覺えた分は申し現いたまででござる。此等身が深い誤でござつたところで、デウスの御名代（よ）、その科の赦ひ、御赦し、以後の爲の御教化を賴んで頼み奉る。

師。仰せある如く、尤も科の數も深さも甚い事たれども、心底より其れを一々後悔し、再び犯すまいと思ひ斷つて、皆一つも殘さず現はしあつたのう？

答。なかく。何かデウスの御代に誤を隱しまらせうぞ？

師。さらば其様なる數々の深い科の御赦し（も）、デウスの無量廣大無邊の御慈悲のためにはいと易い事ぢや所で、其分心得あれ。さり乍ら少しづゝの心得が要る。先づ、息子殿の思ひの時分に二度山伏を呼び寄せ、法華經をさせ、札守をかけさせたに就て、たとえ一度に、神佛を頼もしう存じてさう致いた事でござる。それは後悔と、また再び致すまいとの懺悔の上に、見知られた者の前で仕直さいでは。

またゼンチヨ轉に行つて誦恐した事の上に、あの所へ戻りあらう時は、彼の切利支丹でござる。あのゼンチヨより見知らるゝために、其れ(の)寺へ往かれうずらうと(ゐ)もせず、また神佛の事を敬ひあられう時も前はぬのみならず、却て、切利支丹の彼のデウスの御教ばかり一勝れた宗でござると、そのゼンチヨの前で申し解らしあらいでは。

其上、他人切利支丹の事を譏り、デウスに對し、(九)悪口雜言を吐く者に遭ひあらうずる時は、其の御方(デウスを指す)の御與の恨みに燃え立つて、ゼンチヨの邪法をさけふんで(さけすんでの誤か)、ただデウスの御法の事を讃め揚げられいでは。そのほか構いて、善い鑑を見せらるゝ衆の事をば相譏りあるた。結局それらの明鏡を學び、デウスの御内證に合ひ奉らるゝやうに精を入れ、御精りをたのみ奉つてようござらうぞ。

二番の御掟に就て。其方も立て、人にもさせあつた虚誓文で他人受けられた損仇をば、つひに直さいで叶はぬ。仔細は、それをせいで科がの御赦し無てござるまい。

また姑御と仲直りして、互に前の詫を請ひ、ま一度左樣なる障が無いやうにしてこそよからうずれ。

また呪しを乞ひに行られた人と仲を直し、其れ(其人)と言葉を交はし、前の氣懸りが止むるやうにめされよ。

夫のある女、別して故意と子をおろし、踏み殺す等は、憐ない慈悲も身細らぬ心の微しかや所で、今より後何時ひに犯せて、たとひえても再ひさう致すまいと思ひ定めあれ。

女房に取らうと云うて不犯の女を落しあつた事の科は、其の約束を遂げずして赦されまいと心得あれ。但し様子變りがあつて、さうならぬに於ては、せめて其の償りに似合の事をば其の女子に行られいでは。同じく種々の約束でたばかつた不犯の女子に、其の約束に從つて勤めをなされよ。

在にたから、盜うだ物を安い値に引かれて買ひ取る事は、ならぬに依つて、其事か其値程の事か、主に返さいで叶はぬ。

非道の利倍を取り求むるは御戒めでござるによつて、元金と、其金で儲ひすれば必ず儲けてあらうずる利をも取つて、殘りをはされく主に戻さいで(は)、科の御赦が無いと、サンクト・オグスチニヨ(San to Augustinho)の御言葉でござる。

裁判めさるゝ大名の(に?)隠れて取つた物を返し、また其の内の者に取らせた物も其の主に取り返させいで叶はぬ。とかく人に償いた仇をば有に無に直さいでならぬと心得て、何んとなりとも其分めされよ。

また人の上を邪推し其の事をば惡う沙汰取りなすを以て其人面目に遭はれた損怪我なんどを、譲つた衆の前で云ひ戻さぬ心がある間に、その科の御赦しはよもござるまいと心得あれ。

また、人の互ひの仲を違はせた事、天狗の役に似た仕業、深い科でお

ちやつた所で、今より後さうせいで、前の仲違ひをば力の及び才覚して直さるゝやうにさせられよ。

人の最屓めされたに依て賄賂に（を）受けたこと、また何につけても賄賂幣物と云ふ所は即ち非道に取らるゝ所で、たゞ其の働きに相叶うた分を取つて、残るをば取らせた者に（呉れた者に）返さいではの御意でござる。

伴天連に宿を貸すまいと身様の誓文に就て。先づ神佛は何んでも無い事なれども、ゼンチヨども、本行殿、御所様までも、皆の思はるゝ様は、定めて、例へば、愛宕八幡、阿彌陀なんどにかけて訴訟坊主に宿を貸すまいと誓文した者どもは、もはや切利支丹でない、せめて弱い切利支丹で、おのづから早う前の如くにならうと、見限つて云はるゝ筈でござる所で、あぶない誓文と存じまらする。

二番のはデウスにかけてゞござつたと。さりながら、伴天連の宿を貸し其用を叶ゆる事は、惣別御意見の所作の内ばかりでござれども、他合せによつては御掟の限りに入りまらする。例はゞ、吾が後生か他人の後生を助かるためか、伴天連を呼び寄せ其れに會はいではの時分に、命を失うても、あらは（居らばの意）伴天連を呼ばいで叶はぬとの御掟ちや所で、何の用があつても押し並べて伴天連に宿を貸すまいとの誓文の題目は、たりそもない事と存じまらする。

三番の約束に就ても大略同じことゝ思ひまらする。とかく身が分別は（を）聞いたまでゞござる。——

註。

（一）慈悲の所作は十四箇目あり、始めの七つは色身に當り、後の七つはアニマに當る。この一段は、慈悲の所作に反した罪の告白である。

（二）ヘレジエスは heregia 即ち異教徒。但しこゝでは異端者の意なる如し。

（三）サマタゲは、羅何文 persecutionem だから迫害の意である。

（四）ガイブンは、パゼスの辭にズイブンと解し、avec attention et zèle と説明あり。即ち涯分を盡つ。

（五）ニニタタズば、羅何文 nullius esse valoris 即ち not being valorous. またパゼスにはニニモタヌの語を擧げ、二は荷と解してゐる。

（六）イゲはパゼスに et cetera とあり、以下を充つべきは疑ひなし。

（七）ジゴンニゴは原文 jingo nigo, 自今以後の轉訛なること必定。

（八）寺へ行かれうずらうのズラウは、原文 zu ro だが、ro は ro の誤植であらう。

（九）對しては、原文 xaixite 即ちシアイシテだが、羅何文には contra Deus とあり、タイシテなること疑なし。

（完）

青空

吉植庄亮

仰ぎゐるこの冬空のふかみどりあなさやけくも眼にはかぎろふ

み冬空けふもさやけく晴れにけり萱の穂絮の光りつつゆく

出津の野の萱の穂絮のをりふしは光りつつ来て袖にとまるも

まひなたにあそべる鶲相つれて鳴き立ちければそのいきの見ゆ

米にしていまだものこる日のほてりわが跌にあたたかくして

歳末二首

年の瀬をこもりわが居りはしためが鍋尻かける音のみぞある

しづかなる大晦日の夕づく日いささかはまだ錢ののこれる

ある折に

起きぬけを金の談にこじれたるわが下心一日なげかふ

正しくしわれは行くべしうつし世のさかしら人はさもあらばあれ

美稲を食らふ小鳥に網張りて殺生戒はけふも守らず

時雨

芭蕉葉のひろ葉はぬれて音もなし時雨の雨に一日こもるも

霜

道芝の青さはいまだおとろへず霜のしづくの玉にむすべる

ハァデイの思想と文藝

日高只一

英國否世界近代の文豪トマス・ハアデイは去る一月十一日八十八歳の高齢で逝つた。

英國は彼の偉大な文勲をたゝへて、彼の遺骸を古今の大偉人を葬るエストミンスタ寺院の詩人席（ポーエツト・コーナ）に葬つた。ショウを初め文壇の大家、首相を初め天下の名士が會葬した。

英國皇太子殿下は一九二三年即同殿下が日本訪問の翌年ハアデイの居を訪はれた。其當日即七月十二日の「ロンドン・タイムズ」は二段にわたつて、ハアデイの文勲を讃し、而も其冒頭に於て「この靜かな會見で、此皇太子と此詩人とが互に名譽を與へるであらう」と書いた。普通ならば今を時めく一國の皇太子に訪れられたのだから訪問を受けた方のみが非常な名譽を與へられたと云ふべきであるのに、ハアデイが稀代の文豪である爲に、翁に會見した皇太子も亦名譽を與へられる事となつたのである。

此様にハアデイは上下國を擧げて尊敬した否尊敬してゐる。其れは單に英國に於てのみではない、實に世界各國に於てゞある。フェルプス教授が云つてゐるが如く「吾人は哲學の方面でショーペンハエルに感謝するべきと同様に文學的方面ではハアデイに感謝しなくてはならない。」

ハロルド・チャイルドは其著「トマス・ハアデイ」の劈頭で、斯う云つてゐる――「ハアディは年代の上からは現代に屬さないが、作の性質上からは現代に屬する」

實に彼は、キツプリングよりは二十五歳年長、ショウよりは十六歳、最早故人となつたスチーヴンスンよりは十歳の年上、佛國のゾラとは同年生れであつた。だから年代の上から云へばヴイクトリア朝に屬すべきである。であるにもかゝはらず、彼の現代若しくは更に新しい時代に屬するのは畢竟人生若しくは宇宙を觀察する見地なり、態度なりに依るのである。蓋し前時代に於ては善惡二元の範疇で人生を見、宇宙を見て、之を現はし、之を歌つた。バイロンや、セリイの様な反逆の詩人と云はれた者すら、善となし惡となす對象こそ異なれ、依然として善惡の範疇を脱し得なかつた。所がハアデイは此範疇を捨て、宇宙や人生を深く觀察し、其處に「一意志」の存在と發現とを觀、彼の一元的の態度と見地とを得た。即ち彼は宇宙の實體は善でもなく、惡でもなく、然諾同でもなく、惡意的でもなく、何等の計劃、目的を有しない、盲目的な意志である。これが發現して宇宙となり人間となつてゐるのである、と觀たのである。

此點實に近代哲學の偉人ショーペンハエルの哲學と類似する點で、やがて東洋思想殊に佛教思想と共通する點である。

此共通點から又ハアデイの運命觀、厭世觀は同じ共通點をショーペンハエル及東洋思想殊に佛教思想に見出だすのである。殊に彼の運命觀は佛教の宿命説、其東洋思想の影響を受けたエマスン、更にエマスンの影響を受けたマーテルリンクなどの思想とも共通點を有するのである。

併し、ハアデイは佛教の如く人間の罪業を認めず、基督教の如く原罪（オリヂナル・シン）を説かず、否人間を決して罪の子と思はないで、寧ろ人間は同情すべきもの、讃賞に價する者と思ふの

である。人の悲劇に苦しむのは其人に罪がある譯ではない。全く運命の作り出だす環境の罪である、と思ふのである。

此處に於てか、彼は人間に善惡、貴賤、上下の區別を認めず、一元的見地に立つて、一視同仁、運命に苦しむ人類に向つて満看の涙を注ぐのである。これ實に深い人類愛であつて彼の作を通じて流れる熱と涙とは畢竟其影である。否、彼をして哲人よりも詩人たらしめたのも亦此點にあるのである。

此點又ハアデイの異教主義者(ペイガニズム)を唱へられる所以でもある。

ハアデイは前述の如く一元的の見地の態度で、人生に面し、宇宙に面した。更に藝術に面した此點がやがて、善惡美醜、表裏、上下の差別を絶して、凡てを平等に見、有りのまゝに見、有りの儘に描かんとするリアリズムやナチラリズムの特徴をハアデイの文藝に見出だす所以である。此處に既成文化の中に生れた宗教、道德、習慣、制度、教育等に對する人類の惱みや、苦しみを見出だし、其れを何等假借することなく、顧慮することなく、厳粛な、而も涙の筆に現はすのである。此れ亦彼の文藝が現代的であり、新時代的である所以である。

但し彼の文藝が自然主義的であり、寫實主義的であるのは、只觀察と表現の態度だけであつて、其觀察、表現の對象ではない。

「ゾラは人の中に人獸を見た、彼は其有らゆる畸形を現じてゐる野獸を見た、併し彼の見たのは單に野獸だけである、彼は公平に人生を見なかつた。人生をさながらに見なかつた。彼のリアリズムは一個の偏狹な理想主義である。」

これは文藝批評家にして、詩人であるアーサア・サイモンズのゾラに對する批評であるが、やがて、其流を汲んでゐる自然主義若しくは寫實主義文藝の批評である。實際、文藝史上に現はれた自然主義或は寫實主義文藝の多くが其觀察、描寫の對象としたのは物質的肉慾的方面であつた。宇宙、人生の表面、「人の心の表皮」だけであつた。

ハアデイはこれに滿足しなかつた。自然主義若しくは寫實主義の教える態度を以て、更に其教える宇宙、人生の物質的、表皮的現象を通して、深く其底に入り、其奥に徹して、宇宙、人生の神秘、幽玄を洞察し、眞の姿を觀た、更にこれを描寫した。

彼は個を通じて、全を觀、全を通じて、個を觀た。個全一如の人生觀、宇宙觀、藝術觀は其處に生れ、新ロマンチシズムの光をも翁の作に認めるのである。

ハアデイの東洋的であるのは宇宙實體觀や運命觀や、厭世觀のみではない。彼の藝術觀に於ても亦其れを見出だすのである。私が翁を英國はドウチスタの近郊、翁終焉の邸、マックス・ゲイトに訪れたのは足かけ六年の昔であつた。其時、贈物として墨繪の屏面と浮世繪の版畫とを翁に呈したが、翁は其れが、殊に屏面の墨繪が非常に氣に入り――

「此繪の調子は非常に落着いてゐていゝ、少しも浮ついてゐない。シムプルの中に含蓄がある。」

と云はれた。實に此墨繪の美はやがて日本特有の能樂が持つ美でもある。靜寂! 幽玄! 簡素! 含蓄! は實に東洋美の特色である。翁は此東洋美を好んだ、否此美が翁の故郷の自然美でもあり、翁の肉や與を持つ人間美でもあり、更に彼の七篇々作の持つ表現美でもある。

嗚呼、翁は逝いた。けれども翁の思想と藝術とは永く後世に生きるであらう。

地下鐵道見参記

藤島久

たとへば土中に埋めた鐵管の中にゐるのが地下鐵道で、大震災の時これがあつたなら、死亡者の何分の一かは完全に助つてゐたさうだ。——さう安心しながら、簡素な舞臺裝置に似たあどけない「うへの」驛入口を降りて行く。船腹のやうに板を張つたトンネルに昔の電燈が並んでゐる。地下二丈四尺の溫氣がむつと來る。

十錢白銅を入れると、マグネチックな力がはたらいて、ターンスタイルが一廻轉する。これは、うちから押せばいくらでも廻轉するといふ代物だ。面白がつて押し廻しながら皆が通過する。面倒臭い切符なしですむのは有難い。回數券を持つ人の爲めにはパッシメーターがある。

黃に塗りつぶしたカアだ。間接照明の光りが車內に柔い。珍しまぎれに乘り込んだ大勢の乘客は、車の內外を見廻してゐる。子供は口にくはへた指の間から「地下鐵」を繰り返へしてゐる。一九二八年の三歲の子供は、四十二歲の母親と同じ最初の「地下鐵」の經驗をしてゐるのだ。

毎日汲み出すといふレエルの間の溝に澱んだ水を眺めてゐると、向ふからカアがやつて來た。それが停ると、こちらのカアが警笛を鳴らして、無愛想なセメントの壁の中を走り出した。隧道の天井の灯がこぼれるやうに車窓の上部から掠めて過ぎる。

驛々には藥やキネマや醬油などの廣告が、生々しいセメントの匂ひにすさんだ薄闇の地下道に色彩的な享樂を與へてゐる。商業主義の廣告でさへ、ここだけではたつた一つの藝術品だ「いなりちよう」「たはらまち」「あさくさ」と突進して行く先き先きで、それらは快い色調を發散する。

我々の頭上の大地では、軍隊が行進してゐるかも知れない。積み過ぎた貨物自動車が挽つて走つてゐるかも知れない。どんな素晴しい出來事がいつ起るかも知れない。けれども、そんなことには白痴の如く無關心な世界がこゝにある。全線一哩三分、ゆつくり走つて五分時の間は、少くとも我々は現實世界から遊離して、ソロモンの壺にでも封じ込まれてゐるやうな妖精じみた感觸を全身に感じながら、はるかに知らぬ世界を旅行してゐるのだ。

換氣裝置を二つ數へたら、もう「あさくさ」だ。自動式ドアは完全に停車しなくちや開いて呉れない。早や着いたのかと思ふ張り合ひ拔けのした氣持で、朱塗の間の階段を昇る。そこでもターンスタイルが玩具のやうに廻轉してゐる。もう一つ階段を昇ると、蒼空がくつきりと額入りに見える。新聞賣りの鈴が聞える。そして、とう／＼汚れた市內電車が一腹仔の乘客を滿載して走つてゐるのが見えた。吾妻橋と雷門の間だ。

これは盛り場の淺草と、杖を曳く人の群る上野間の遊覽電車だ。貨物運搬の經濟的活動はないが、一日三萬の乘客が吞吐されてゐる。

地上の文明に西歐を追つてゐた日本が、これから地下の文明を追はふといふのだ。これをしも最も新しい交通機關だと云へば西洋人は笑ふかも知れないが、仕方がない、日本では一番新しいんだから……。萬世橋までの第二期工事が品川まで通じ、新橋から池上の方まで通じる曉には、我々の生活は地下にまで擴大される。そして幾千萬年の後、地上の生活に疲れた人間が、この地下鐵道の廢墟に蜘蛛のやうに巢食つてゐるところを想像するのも面白い。更に隅田川の底を潜つて江東を渡る頃には、我々はあの大川の美しい濁り水と泥のずつとずつと下の方で、ふとした拍子にギイギイといふ櫓の音を錯覺的に聞くやうになるであらう。(一月六日)

大刀會の正體

長野朗

今南滿で勢を振ひ日支官憲を困らして居る大刀會は、或は匪賊と云はれ或は農民暴動と云はれて居るが、實は純支那色を帶びた農民運動である。大刀會は紅槍會等と同じやうに明末に起つた白蓮教の一派で、之の外にも天門會、白纓會、小刀會等種々の分派はあるが、大體に似たものである。紅槍會は赤い纓の附いた槍を有つて居るし、大刀會は大刀を揮つて居る。彼等には皆教祖があつて、會員は數週間或は數ケ月間そこで齋戒沐浴して修行をする。修行といふのは多く咒文を唱へ或は拳法を習ふのである。一定の期間修業すれば刀で切つても切れず、彈丸で擊つても中らなくなる。それには試驗をする。修業終つた者をずらりと並べて置いて、頭に板や竹を戴せ片つ端から斷つて行くが、斷り手は教會專屬の幾十年もそれをやつて居る擊劍の達人だから竹や板は切れるが頭は切れないやうにする。又鐵砲の方は火藥を大部分拔き取つてあるから大丈夫である。かうして彼等は彈丸雨飛の間を槍を提げ咒文を唱へて突進する。

紅槍會や大刀會は今まで種々な仕事をして來た。明末には朝廷を助けて淸に當つたが、淸朝時代には概ね淸廷に反抗したので酷く壓迫された。それが淸朝末期義和團といふ排外的な一派を生じたが、民國になつて土匪の跳梁が甚だしくなると、やがて土匪に對する自衞團となつた。民國七八年頃土匪の害に惱まされた山東、河南一帶では、各村に自衞團が出來たが、兇暴なる土匪の大集團に對して敵し得べくもないので、彼等は人力以外の或るものを求めた結果、こゝに紅槍會や大刀會に投ずるものが多くなつた。所が最近二三年軍隊の橫暴誅求が甚だしくなると、此度は官憲や軍隊の壓迫誅求に對する反抗運動を始めたのが現在の紅槍會や大刀會である。今や彼等の勢力は河南、山東全省から直隷山西の南部、安徽江蘇の北部一帶に亘り約百萬を有するだらう。それが山東人の多く移住して居る滿洲に傳はつたのである。最近に於ける彼等の特長としては、匪防禦の時代よりも、强力な軍隊に對抗するため其會の組織が大きくなつたことである。事が起れば大鼓を叩く、それが音波のやうに村から村へと傳はり、一日の中に一萬位の會員は集る。彼等は其目的が上からの壓迫誅求の手を拂ひ除けるにあるから、奉天軍でも國民軍でも共產軍でもお構ひなしに官憲と軍隊には敵意を有ち之に反抗する。

今日彼等の勢力は大であるが、彼等は各教派每に立分して統一集結が出來ない。それに彼等の目的は消極的で、たゞ自分達の上に振りかゝつて來た壓迫の手を除くだけであるから自ら革命等は出來ない。其行動は局部的一時的で、其他の時は勤勉な農民である。今紅槍會大刀會を利用しやうとして居るのは共產黨であるが、これは困難である。彼等は共產黨と異つて農民全階級の官憲軍隊に對する反抗であり目的も異つて居るから一時的の利用の外は行はれ難いことではなからうか。

觀戰記

四條畷の戰

賀川豐彦

何しろ、河内の國全部と、攝津の半分位入つてゐる廣汎な地域なんでせう。南北三十八里、東西、廣い處で十里位もある所なものですから、走り廻るつたつて、ちよつとやそつとのことぢやいかないんです。何しろ金剛山の麓から、多田滿仲の墓のある能勢の妙見さんの下まで戰線が廣まつてゐるので、杉山君の地盤は樂な地盤ぢやないのです。其處では今迄、縣會議員の選擧戰に、二度許り破れてゐるのです。去年の秋の九月には、四條畷の戰に、私が參加するのが遲かつたといふので、二百票の差で落選したのです。ですけれども北河内は、私達が農民運動を始めた最初の時からの地盤で、票數も三千足らずあるのです。それに中河内には日本農民組合時代の有權者が尠くも千五百以上ある筈なのです。南河内は、全く地盤の無い處で、其處には強敵岩崎幸治郎君が陣取つてゐるのです。四條畷には、相島勘次郎君が陣取つてゐるし、北河内には地主黨の大親分作田莊七君か、根城を持つてゐるのです。南河内の富田林には、政界の古強者田中萬逸君が居城を守つてゐるのです。北河内の枚方には縣會議員戰に勝つた中村虎次郎君が戰線を張つてゐるし、普選で働いた高松正道君は、三邊あたりに出沒して、可成の戰鬪力を持つて居り、勝田永吉君は、陸軍を根據として奮戰してゐるといふ有樣なのです。其處へ、無產黨の杉山君が乘り出すものですから、戰爭は必ずしも生易しいものではありません。瀨戸内海に面した處は暖かくはあるけれども、少しく北攝津の山の中に這入ると、雪が一尺以上もあるのです。

金があれば自働車も自由に動かせるでせうが、同志から集めた僅かの金で、自動車を動かすことは勿論出來ません。幸にも電車と鐵道の線が七本あるものですから、それを利用してその他は自轉車に乘つたり、て〳〵つたり、仕方のない所は、ボロ自動車を頼むのです。

先づ杉山君は、一月の廿五日頃に西の宮の家を畳んで、大阪城の東北の隅つこにある京橋北詰の小さい月廿五圓の事務所に引越しました。其處は炊事場が無いものですから、杉山夫人は野天で人參を切つたり、飯を炊いたりして居られるのです。電話を引かうにも金が無いので、半丁位先きの勞働組合總同盟の電話を借りて、その都度電話口まで走るのです。

然し、安藤國松君は、選擧事務長として、これ迄、又と得られない、

經驗を持つて居られる爲に、僅かの金を持たして、五人の同志を各地に走らせたのでした。堺市には大阪の勞働界の闘士、溝淵中佐、一名勞働中佐の聞えある金子忠吉君が、堺市の自宅を選擧事務所に提供してくれ、自らその主任になつてくれられたのです。北河内には熱烈な初田君が枚方に事務所を開いてくれ、中河内には農民運動の古強者寺島君が、僅か二人の同志と潜入して行つてくれ、岩崎章次郎君の本陣である布施町に、事務所を作つたのです。奈良の農民運動者、伏爾君が和歌山縣の山中君と二人で、盛んな行動をとつて、告知のあつた翌日に、田中萬逸君の居城の眞中に事務所を開いちやつたんです。これはさすがに敵を驚ろかしたと見えて、家主も警察も吃驚したさうです。三島郡の方はこの方面の農民組合長を永く勤められた吉岡八十一君が主任になつてくれました。府川はそれで決りました。これからいよ〳〵白兵戰です。私は鈴木文治君も應援しなければならぬし、今井嘉幸君も應援しなければならないし、西尾末廣君、河上丈太郎君、吉田賢一君、もつと後れて立つた岩崎勳亮君も應援したければならないのです。然し、北河内の農民組合はそれを許してくれません。この前總選擧で、二回も惨敗してゐるこの戰蹟に鑑みて、今度は、絕對的に私が出て來なければ、みんな手を引くといふものですから、私は一週に三日宛、合計十五日を杉山元治郎君の爲に、まづ取つてしまひました。それから吉田賢一君の爲に五日間、後の五日を他の候補者に分けようといふのですが、どうも巧いことはできません。其處で妻に頼んで私の代りに西尾末廣君や、河上丈太郎君を専ら應援して貰ふことにしました。

阪本勝三郎君からも應援の依頼が來ました。ところが困つたことには、鈴木文治君と勞農黨の大橋君と、正義團の酒井榮藏君と、四人が鉢合せになつてゐるのでせう。普選諸派の演說會に行く爲に、尾崎行雄氏の伴をして、朝日の高原操君と名古屋行の列車に乘ると、其處に酒井榮藏君が居るぢやありませんか。酒井君は、鈴木文治君に應援するなら僕にも應援してくれ、僕を應援したければ、鈴木君の應援を止めてくれ」とせがまれたのです。

酒井君が男なら私も男です。とう〳〵フエアプレーに任せることにして、私は殘念ながら鈴木文治君を應援しないことにしました。

何しろ田舍道でせう。暗がりの中を、曲りくねつた細路を行かねばならず、自動車は通はず、自轉車は間に合はず、徒歩で行かねばならないやうな處が隨分澤山あるものですから、最初の晩などは弱りました。それに大抵少くて一日に三回、多くて六回やらせられるものですから、咽喉は全く駄目になつてしまふし、身體もくた〳〵になるのです。だけれども殆ど部落を外にして、一般政治教育に走り廻つてゐると思つて、出來るだけ實のある話をしてゐます。

演說にしても大阪あたりのサラリーマンなどに對してならば非常にやり易いのですが、村の人達は存外不愛想ですから、感じた處で拍手も

してくれないし、解つてゐるのやら、解つてゐないのやら、さつぱり見當が付かないものですから、頼りないやうにも思ひます。けれどもこんなにして置けば、いつかは解つて來ると思つて、努力してゐるのです。

杉山君は、日本製のオートバイを月賦拂ひで買ひ込んで、バタ〳〵云はせてゐますが、途中で故障が起つて、八百人から集まつてゐる聽集を二ヶ所まで逃がしてしまひました。さうかと思ふと辯士が足らんものですから、杉山君と私が交替に二ヶ所持つと、一方の方が一時間も空いて、私が來るまで待つてゐてくれるのです。餘り酷いので、杉山君が、顏を出せない推薦演說を澤山やつてゐます。これからは村々に、獨立した推薦演說會をやれば非常によいと思つてゐます。これから見れば市部の選擧戰は實に易しいものだと思ひます。私は選擧が濟むまで恐らくは、百回以上演說をすることになるでせうが、こん度こそはと思つて、うんと熱を上げてゐるのです。(二月五日)

三士を向に廻して戰ひ進む大山委員長

細迫兼光

始め、委員長と私とは立候補しない方針を内々持つて居たのだが、議會に送るわれ等の代表は、階級意識の明確な把持者でなければならない事は勿論だが、その上に猛烈なアジテーターでなければならないと考へ及ぶに至つて、絕好のアジテーターたる大山氏を逸する事は出來なくなつた。

われ等の代表はほんとに命がけだ、だが委員長は、あの早稻田の軍事研究團の事件以來の命は儲けものだと覺悟してゐる。「實際あの時は私の學校へ行く道筋は――汝の首に白刃の降るを――といつた調子の貼り札で一杯だつたのですからネー」と述懷して居られた。

でも奧さんは大心配だ。こんどこそほんとうに白刃が降らぬとも限らぬと、眞綿のチョツキに針をしきりに運んで居られた。

◇

香川はわが黨の絕對的地盤である。だが相手は大物の三士と來て居るので苦戰は免れない。然し御本人は大元氣で「三士より下位で當選したんでは勝つたとは云はれない」と頑張つてゐるんだから、黨員の意氣込みと來たら又スバラしい物で、次の演說會場へみんなでワツシヨ〳〵かついで突破する始末だ。

◇

地元もゆるかせには出來ないが、選擧區にだけコビリ付いてる事は氏の良心が許さないし、又本部としても全國的に活動する事を必要と認めて居るので此の月も一日京都、二日東京、三日東京朝日の立會演

説、七日大衡新聞の立會演説へと出掛けた。

だが全國の黨員は氣が氣でない。「委員長を香川から引き出すな」と大阪や兵庫や九州やからヤイ〳〵云つて來る。そして香川に向つては「委員長を落したら腹を切らせる」といつた調子の電報が各地から舞ひ込むので香川の黨員も並大抵の苦勞ぢやない。

◇

香川では我黨の縣會議員が四人出て居て無産民衆の爲めに理智に活動してゐる。例へば水平社の大會に縣會の名を以て祝電を打たうといふ提案をして政友、民政をして大混亂に陷らしめた。彼等は平素口では水平社同人に同情した樣な事をいつては居たが、この動議が出るや周章狼狽爲す處を知らず、直ちに休憩してゴツタ返した擧句、議事規則にないからといふ理由で終に否決し去つて了つた。此の事實は、然し、水平社大衆に既成政黨は口と腹と違ふんだ。勞働農民黨は云つた事は必ず實行するものだといふ信頼を如實に植え付けたものだから、水平社大衆の支持も大したものだ。

◇

彈壓の激しい事は全國的の事だが、とりわけて三土の御膝下だけにその辛辣さもお話しにならぬ。第二區からの上村氏も演説の中止命令に抗議したからといつて未だに拘留して出さないといつた調子だ。大山氏の演説も滿足にゆれたのはタツタ三回だけだと憤慨してゐた。だが大山氏は恐ろしく鬪爭的で、敵の面前に熱を帶びさせんとせば宜敷陰に廻つて野次を飛ばすべし、といふ理屈がある程だから、彈壓をかうむる毎に勇氣は百倍するのである。彼のゼスチヤーは益々その規模を擴大して兩の手は水車の如く廻り出すのである。

◇

困つたのは金で、香川に出かけた時は懷中わづかに四十圓であつたが、氏の後援者は氣が氣でなく、三宅正一氏や櫛田民藏氏等を筆頭に續々と寄附金の申出でがあり最近大いに活氣を呈して來た。だがそれでもと地元の農民や水平社同人も貧しい財布の底をはたいて持ち寄つてゐる。お手のものの米が事務所に山と積れた事は云ふまでもない。

◇

一般の此の大景氣に政友會は狼狽し出した。「大山なんか眼中にない」と口ではうそぶいた三土も内心恐れを懷いてゐる事は云ふまでもなく、政友の候補を一人とう〳〵詰め腹切らせ、又手を廻して日勞黨あたりの人を立てやうと裏面の策動に日も是れ足らぬ有樣とあるから或は誰か政友會の御手先を勤める者が現はれるかも知れぬ。然しそうなつたらわが黨の戰意は益々烈しく燃え立つであらう。

◇

伏石事件で入獄してゐる前川正一君は此の十八日に出る事になつてゐるが、たとへ一日でも二日でもわれ等の委員長の爲めに應援演説をやらねばおかぬと、永の牢獄生活に腰の小さくなつてる事を氣にしながら、しきりに力こぶを入れてるとは聞くだに涙ぐましい話である。

選擧措門錄

選擧情景

木村 毅

申譯のない話だが、非常に我儘な黨員である私は、一月一ぱいどうしても手の離されぬ仕事があるので、黨から呼出しが來ても出頭する譯に行かない。その代り二月の全時間を黨のために割くと申出ておいた。

一月二十日、解散の號外の鈴の音のけたたましさ！ だが私は机に噛りついたまゝ、書類を動かうともしなかつた。

一月三十日、初めて自分の仕事から解放されて、黨本部へ出て見た。

『選擧中はなるべく三度食事を取り、衛生に注意すること』——これは壁への貼出しだ。なる程、昔から腹が減つては戰が出來ないと言つてゐる。

應援辯士の編成で、私は遊擊隊に加へられてゐる。そこで、私も一票の行使權を有する東京府下第五區（荏原、豐多摩、八丈、小笠原島）の我が日勞黨候補加藤勘十君の應援を皮切りに、栃木の麻生久君、群馬の須永好君の方へ廻り、間に一度長野の勞農黨候補藤森成吉君の所へ寄つて、それから大阪へ下り杉山元治郎氏を應援し、最後に投票間際の二三日を又加藤君の應援に歸つて來たい意嚮を述べて、日程を組んで貰ふ。

それから『前衛』の佐々木孝丸君から使の人が來て、藤森成吉君後援會の發起人に日勞黨の方から麻生久君と僕とに名前を貸して貰ひたいとの申入れがあつた事を報告する。僕は印刷物を急ぐ都合上、麻生君の選擧地區まで紹介して返事を待つてゐる餘裕がない、そこで事後承諾と云ふ事にして、麻生君の方の全責任は僕に持つて貰いたいと申出であつたから、僕は承諾して了つたと言つて、列席諸君の諒解を求めた。

實は東京府第五區に秋和君が立つて『模範的協定』の破れた直後なので、黨の意嚮はどうかと懸念した。が、『それは結構だ。あの人なら一向差支へはない。勞農黨では協定を破つても、こちらはなるべくそれを守りたい方針だし、それに藤森君の選擧區にはこちらの對立候補もないのだから、麻生君も故障は云ふまい。もし言つたとしても僕等も共同責任を頒つ』と、三輪壽壯君や平野學君が言つてくれたので安心した。

× × × × ×

私は二月二日夜、大井町活動寫眞館を皮切りにして、連夜、二回乃至三回宛、壇上に立つ。

それにしても加藤勘十君の、何と云ふ熱烈痛切なる雄辯よ！　それには『吾等が大統領、加藤勘十君よ、もう一遍君の雄辯を聞かして呉れえ』との覺束ない字の無名の投書が舞ひこんだ位だ。（選擧事務長河野密君の談）私達は毎夜二回宛位は必ず加藤君の演説を聞くので、今では暗誦たつて出來る位なのだが、それでゐながらつい吾知らず引きこまれて了ふ。二月二日には同じ大井で民政黨候補鈴木富士彌の演説會があり、若槻禮次郎も壇上に立つと言ふのに、吾等無産者側の人氣は、この前首相、前參與官を壓倒して、聽衆の數の多いこと、遙かに彼等の演説會を凌駕した。昨夜は東中野で政友會の公認三上某の演説會とぶつ衝かつたので、通りすがりに會場をのぞいてみたら、何ぞその寥々たる！——、、、、されないやうにせい〳〵健鬪し給へ。

五反田の或る會場の如きは聽衆實に千六百を越え、校長さんが『昨夜の鈴木さんのより二百人ばかり多いやうです』と保證してくれた。

二月六日は朝からの大雪が、夕方になつてしよぼ〳〵雨と變つて、道がぐしやく〳〵して歩けたものではない。

第一會場は柏木の府立第五高等女學校だ。

『今日、こんな天氣なのに入りが百人あつたら、屹度加藤君は當選するよ』と菊川君が控室で言ふ。

誰れか物好きに數へてみたら既に百四十人餘り！　萬歲、これでは當選疑ひなしだ。

臨檢の警官は、吾々の演説に時々中止を食はせる。殊に吾等一度例の三百萬圓事件に觸れやうものなら『中止！』と來ること請合ひだ。一度はわざと白ばつくれて『注意ですか、中止ですか』と聞き直したら、『中止だ、中止だ、中止だッ！』と、地團太を踏んでどなりつけられた。

選擧をやつてゐると新聞記事には非常に敏感になる。些細な六號のゴシップ一つにも好意と惡意とは明白に讀み分けられる。

朝日は加藤君に最も多くの好意を示してくれるやうに思へる。日日、報知、都など之に續く、時事新報は度々惡罵するやうな筆意を示す。府下第五區では鈴木、高木が絕對安全で、加藤君は斯波などと肩を並べ有望だと諸紙に見える。も一息の努力だ。

選擧斷片

河　野　　密

普通選擧！　と言ふかけ聲はともかく『更始一新』のかけ聲だ。少くとも將來の政治につきまとわれてゐる暗いかげの拂いのけられて行く『新政』の首途でなければならない。然し選擧運動の當事者になつて深く感ずるのは、表面上機械的に區られた所謂『普選氣分』の探檢

に冷い一脈の凝氣が漂つてゐるのを感ぜずにゐられないことである。

× × ×

普通選擧法の小面倒な規定は民衆のものであるべき選擧を民衆から離れた親しみ惜いものとしてゐる。何か腫物にでも障るやうに、民衆はなるべく選擧から離れて、第三者として遠くから眺めやうとしてゐる形がある。民衆のものであるべき『普通選擧法に依る最初の總選擧』として決して名譽なことではない。これは選擧法の不備もあることながら直接取締の局に當つてゐる政府の取締方にも依ることである。法律の不備は取締の寛嚴に依つてどうにでも救濟出來ることである。然るに現政府の取締がこの點に於て意識的『失敗』を重ねてゐることは世人の知る通りである。

例へば私の東京第五區の例を言ふと、最初提灯をつかふことや、ポスター三枚以上を一所に貼ることが禁止された。所が(名前は預るが)政友會の候補者が提灯をつけると提灯をつかつても好いと言ふおふれが改めて出、政友會の候補者がベタ〳〵とポスターを貼りまくるとそれをやつても好いと云ふお許しが改めて出ると云ふ始末である。無産政黨の候補者が先鞭をつけてはいかぬが、政友會の候補者がやつたことを後からやるなら好いと云ふのである。鈴木内務大臣に言はせるならば『親の心子知らず』と言ふかも知れぬが、あまり賞めたやり方ではない。

× × ×

普通選擧法の規定を普通選擧法の趣旨から解するのでなしに、在來の法律の頭で解し、殊更に小難しくしようとする努力が隨分無駄な勢力を浪費させてゐるやうに思はれる。これは取締の局に當るものにとつても賢明でないし、取締られる側から言へばやり切れないと言ふことになる。普通選擧の主眼とする所は言論と文書に依る運動にあるのだし、無産政黨の目標とする所もこれ以外ないのだから、杓子定規な言論及び文書に依る運動に對する干渉は甚だ感服出來ないことである。無産政黨の最大の武器である言論戰が屢々中止の厄に遭つて思ふことの言へないなどは斷じて聖代の名譽ではない。

× × ×

然し無産政黨の演說會がどこの演說會と言はず大入滿員であるのは頼もしい。我々の加藤勘十君の政見發表演說會の如きは平均約五百名を下ることはない、先日の大雪の日ですら二百五十名から五百名の聽衆を集めることの出來たのは時代の趨向を目のあたり見るやうた感激を覺えた。民衆は目覺めてゐる！と云ふ感じを我々は日々に強くすることが出來る。浮薄な選擧氣分でなしに、一つ〳〵的をうがつて行くといふ感じは、選擧の勝敗を度外にしても、我々にとつて愉快なことでなければならない。殊に選擧協定支持の名の下に文藝戰線の葉山、金子、里村、小堀、鶴田の諸君が寧日のない鬪爭を續けて與れるのは感謝だ。

× × ×

我々素人のやる選擧運動だ、萬事手違いだらけである。それでも民衆の支持を思ふと心がおどる。單なる選擧熱と思はれない手紙が日々に舞ひ込む。中には選擧運動のうら表を懇切に教へて呉れるのがある、ポスター貼りの道筋を細かに書いて呉れるのがある。中で目立つたのを二三御披露しやう。

我々の大統領

加藤勘十殿

熱烈なる貴殿の雄辯をもう一度きかして貰いたい、是非頼む。扨て來るべき二月二十日の光榮の日を待つ。　敬白

これは大崎桐ケ谷の一青年といふ人から來た手紙である。筆跡から見て工場の勞働者らしく思はれる。

我々の一票は貴下の當選を待てり願くは我等無產階級の爲め益々努力奮鬪最後の榮冠を得ん事を　無產有權者

これは恐らく俸給生活者からの手紙であると思はれる。

リッコウホヨシ　ユクシ　トウセンヲイノル」（ヘビゲイシヤ」テッコ

これは秋田縣の一藝妓から來た加藤勘十君に對する聲援である。要するにあらゆる階層からの支持が、これ等の手紙に依つて一端を窺ふことが出來るであらう。

或は卵と牛乳とを贈つて呉れた人がある。或は一日の日給だと言つて一圓寄附して呉れた勞働者がある。我々は壓迫の中で戰ひながら、かゝる同情の下に必勝を期してゐるのである。

加藤勘十選擧事務所の雜沓の中にあつて　二月八日

無產政黨の對立候補問題について（特に東京第五區について）

佐野學

荏原豐多摩兩郡を含む東京第五區には多數の勞働者が住んでゐる。同區全有權者の一割にも及ぶであらう。だから此區から一人の無產黨代表者を議會に送り得ることは確實であらう。同區には最初、日勞黨の加藤勘十君が立候補した。同君は在來勞働運動のために勇敢に戰つてきた人で、この區には最初、無產黨間の對立候補がなく、同君の當選は確實でもあり、又大に希望すべきことであつた。しかるに後になつて勞農黨の秋和松五郎君が立候補して、こゝにも對立候補の問題が生ずるに至つた。勞農黨は日勞黨との友誼を重んじて最初、秋和君の立候補を承認しなかつたそうであるが、秋和君を擁立する市電從業員諸君は秋和を立候補せしめない位なら勞農黨を脫退するといふ意氣込

であつたそうで、勞農黨はそれに引きずられてしまつたのである。秋和君はその經歷から見ても人物から見ても吾國に於ける最も優秀な戰鬪的勞働者の一人であつて、この人の當選も非常に望ましいことである。しかしこの地區から二人の無產黨代表者を送り得るかどうかは疑問である。

この區における對立候補は決して正しくない。根本的に言へば、各無產黨が殆んどすべての地方に對立候補を續出させてゐること自體が正しくない。總選擧直後に各無產黨の選擧協定の會合が行はれたが、それは單に地盤協定の精神からなされたもので、全體的階級的見地に立つて敵の資本家及び地主の黨と戰ふといふ精神の下でなされた選擧協定ではなかつた。今日では地盤協定は殆んど完全に破れてゐる。たとへば大山氏と鐵相三土との對抗は頗る階級的な意味があるが、最近に從つてそこにも他の無產黨から候補者が出るといふ噂がある。私は東京第五區の對立候補問題が頗る不利な對立であることを特に强く感ずるが、根本的に見れば、これはこゝばかりに偶然に現れたことでなくて、各無產黨が嚴格な階級的立場を執らずに各地に對立候補を續出させてゐる一般的事實の一つの現れだ。

勞働者や農民は今日の總選擧に當つて頗る緊張し興奮してゐるが、それは勿論ブルジョア議會に絕對的信賴を持つてゐるからでなく、生活の不安に脅される勞働者、土地に饑うる農民が議會に自己の代理人を送り、それを通じて資本家及び地主と戰ひたいからである。各無產黨の間の選擧協定が實質的に破れてしまつた今日、大衆自身が選擧協定の實を行つて、最もすぐれた代表を共同で選び出すより外はない。實際問題としてこれは甚だ困難である。しかし運動をこの方向に向けることが指導者の任務であらう。

對立候補のある地區では各無產黨が特に有力な同盟を結んでブルジョア政黨に當ることは絕對に必要であらう。敵が資本家及び地主であることを忘れない以上、この同盟は絕對必要だ。

更に一大勇斷を以て遣つて貰ひたいことは同一選擧區で無產黨の候補者が二人以上出てゐるところで、どうしても一人しか勝味がないと思はれる場所にあつては、そのうちの一人だけを殘して、それに支持を集中し、他の立候補者が自ら勇退することである。このことは現實問題としては非常に困難であるに相違ないが、かういふ非常の手段をとらなければ對立候補の續出のために自縄自縛の狀態に陷りかけた現勢を有利に打開することが難かしくなつてきてゐるのである。

大衆的無產政黨の分裂殊に勞農日勞兩黨の對立がいかに不利であるか、諸黨の合同がいかに必要であるかは、今度の總選擧戰が何よりも雄辯に說明した。議會における無產黨代議士の行動の一致といふような點から考へても、今日の分裂狀態は一時も早く終結せしめねばならないことであらう。

選擧應援の感想

吉野作造

赤松克麿君が私の郷里の宮城縣第一區で立候補した。二月一日に舌戰を開始する、始めての門出を華々しくやりたいから私にも出ろと云ふので、一月の三十一日東京を發つた。赤松君の方では應援演說の一辯士として私を招いたのだが、私は實は少しく別の意味をも加へてその誘に應じたのであつた。

是より先き議會の解散になつて間もないこと突然仙臺の舊友がやつて來た。所謂無產政黨の同情者を以て任ずる一團の靑年が是非私に起つて呉れと云ふので代表の資格で勸誘に來たのだと云ふ。色々の理由を以てそれは固辭した。すると其次ぎにまたやつて來て、然らば私の代りに赤松君を起たしたいと云ふ。赤松の名が多少靑年の間に知られても居るし、それに私との緣故が投票を集めるに便宜でもある、努力次第では必しも絕望であるまいからと云ふのである。親戚としての私情にひかされるのではないが、赤松君の代議士として耻しからぬ人才なるは私も認める。併し彼れを起たしむるに就て多少でも私の側面的援助を期待されては斷る、私は一體選擧の應援はあまりやらぬことにして居る、又現に昔からさうやつても居ない。今度は無產黨を標榜する人に限り少しばかりお助けしたいとは思つて居るが、何分忙しいのでそれも思ふに任せぬ始末だ。碌な援助の出來そうにないのみか、何よりも大事な金の方はまた見らるゝ通り赤松君同樣素寒貧と來て居る。之を豫め承知なら一應本人に當つて見給へと答へた。すると實は赤松君をば今朝まで掛つて到頭口說き落したと云ふ。それぢや今更引き留める譯にも行くまい、まアやつて見給へとて一應の承認を與へたのであつた。

赤松君に何の成算あつて起立を承諾したかは未だよく聞いて居ない。豈夫必勝の算のある譯もなからうから、一つには勸誘に來た某君の熱誠に動かされたのと又一つには折角築きかけられつゝある無產黨の地盤擁護の犧牲たらんと決心した爲めでもあらうか。それからの數日を彼れは供託金の調達に費した樣だ。その外に千圓足らずの喜捨も集め得たらしい。斯くしていよ〳〵二月一日を期し舌戰開始の運びとなつたのである。

赤松君の舌戰開始に私の參加することは、私の口から云ふのもをこがましいが、確に同君の爲め有利なるに相違ない。從て私の參加は同君援助の爲めなるは勿論だが、併し私には當初私に起てと勸めた人達に對つて一應の挨拶をする義務がある。是れまでの樣に斷りッ放しでも構はぬ樣なものの、身代りに赤松君の立つことを承認したと傳はつてしまつた以上、其邊の事情を釋明しなくては鄕黨の諒知に濟まない。

それに平常あまりに郷里には無沙汰勝になつても居る。恰度いゝ機會だと思つて誘はるるまゝ前記の如く一月晦日に上野驛を發つたわけである。

× × × × ×

仙臺に着いた晩早速親戚知人數名の來訪に接した。之等の人達と話して驚いたことは、赤松と云ふ名の一向まだ知られて居らぬことである。偶々名を聞いても彼れは一體何者だと怪む者が多いと云ふ。赤松君の立候補のことは東京の大新聞の地方版にも書いてある――、地方新聞などは分けても多大の同情を寄せて毎日の樣に兎や角と書き立てて與れた。彼れの何者であるか又何の緣故で此處で立候補するに至つたかは、一ト通り新聞に目を通す程の者にはいやでも應でも分つて居るべき筈だ。それが一向分つて居ないらしいのである。そこで私は悲觀した。之ではとても駄目だ、供託金まで沒收されては嘸困るだらうにと、親戚だけに氣の毒にも思つた。從つてまた明日の演說會では一つ大に馬力を掛けずばなるまいなどとも考へたのであつた。

それからモ一つ意外に思つたことは、田舍とはいへ、あれだけの都會であり乍ら、無產黨と聞いて怖れを爲す者の案外に多いと云ふ事實である。私の來る前某君は、私の親戚とか舊友とかの緣故を辿り、事務所を貸して與れとか立看板を置かして與れの、ビラを張らして與れのと賴んで見たが、嫌とも言はぬが內心大に困つたと云ふ風で、とても氣の毒で無理に賴み切れぬ場合が多かつたと云ふ話だ。警察のそれとなき干涉のあつたのではないかと一應は疑つても見たが、それは全然ないらしい。總じて宮城縣下では、警察の態度は民政黨側に酷にして無產黨には割合寬大の方針らしいといふ噂であつた。警察側の暗示もなくて斯うまで忌避されると云ふ事實は無產黨候補者に取つて由々しき大事である。私は益々悲觀せざるを得なかつた。

併し私は固より始めから成功を夢想して居たのではない。赤松君は足いまだ一步も宮城縣下に踏み込んだことのない男だ。而も立候補の名乘りはまた頗る突然ではないか。恃む所は一部青年の熱心なる運動と私との多少の緣故とのみである。成程私は少しく郷黨に名を知られて居る。それも良い名か惡い名か分らない。私は元來あまり郷國と云ふ事に興味を有たず、滅多に國に歸つたこともなく東京に居ても郷國の會合などには先づ出席せぬのを原則として居る方だ。その私と緣は繫がると云ふことは抑も赤松君に取て何の得になる。彼れの立候補は考へて見れば實は頗る無謀な仕事であつた。私の一親友は、赤松君の出戰が物質的にも精神的にも多大の負擔を私に負はすものと察してか、わざ／＼私の處へ來て切に中止を勸告して與れた。意味は違ふが、その時私が無理に赤松君の心を引き留めた方が或は親切であつたのかも知れない。併し今となつては退かすわけにも行かぬ。已むなくんば成敗を眼中におかず政治敎育のつもりで一つ堂々とやつて見ようと痩我慢を張つて見た。果ては落選の上はあらためて二三の友人を語らひ、本式の政治敎育の目的で落選組全縣講演會といふものを各地で開

いて見ようかたどと、空想を描いたりした。

仙臺に着いて當夜の私の氣持を赤裸々にさらけ出して見ると、先づざツと右の様なものであつた。

翌日の朝始めて赤松君を支持する二三の初見の青年に遭つた。遭つてまた私の驚いたのは、彼等の意外に眞劍であり且つ闘志に燃えて骨身を惜まず奔走斡旋してゐることである。彼等は口々に云ふ、何としても我が赤松を出さずば承知しないと。而して彼等はまた皆有權者である。そこで私の心は少しく躍つた、之なら滿更絕望でもないと。よしや當選の榮冠を摑み得ぬまでも、之れ程眞劍なる支持者を多くの青年間に有つと云ふ事それ自身が、既に我黨の一大勝利ではないか。成敗はどうでもいゝ、之等の青年の熱誠に協動して玆處に正しい無産階級運動を釀成させるだけでも、我等に取つて一つの大きな仕事である。

斯くて私はわざ／＼こゝまで來たことの空しからざるを喜び、この新に踏出した目途に一種の貴い使命を感じつゝ、赤松君の爲にはめでたきこの第一日の政戰に勇ましく踏み出すことが出來たのである。

午後一時からは私の生れ故鄕の古川と云ふ町で政見發表の演說會がある。それに間に合ふ様に仙台を發つた。其間に起つた種々の事は關係がないから一切略する。只一言して置きたいのは、この町は小ブルジヨアの優勢なところで、その一部は政友會に大部分は既に内ヶ崎作三郎氏に附いて居ることである。外の人なら兎に角、學識德望並び高き内ヶ崎君からは町民の故なく急に離るべき道理もない。假令私の生れ故郷だからとて、こゝに赤松君の侵し入るべき餘地は實は殆んどないのである。只私としては何を差措いても此處で一言の釋明をする必要があつたので、つまり私の爲に第一聲を此町で揚げることになつた様な譯である。

此町に着いたのは十一時頃であつた。會場の前を通うつたら、午後一時の開會といふのにもう早や續々と入場者がある。大體盛況なるべきに安心し、徐ろに晝食をしたゝめて、さて會場に入つて見ると、眞に言葉通り滿場立錐の餘地なき盛況であつた。併し私は考へた、是は實は赤松君の聽衆でなくして私の聽衆であらうと。自惚れではあるが實は斯く信ずべき理由もある。演說會は極めて靜肅の裡に終つた。歸りは一般聽衆に交つて入口を出たが、圖らず前を歩行く一團の人の私語が耳に入つた。「偉い方ですなア」「先生がかい」「イヤ候補者がよ」、先生とは私のこと、候補者と云ふのは赤松君を意味するは云ふまでもない。之に依て私は、赤松君の價値の郷黨人士にも亦少しく認められたるを識つて大に意を強うした。後で聞いたのであるが、聽衆のうちには町内の商賈よりも近在の農民が多かつたと云ふ。近く相當大規模の小作爭議などもあつた爲めか、無産黨候補と云ふことに俄かに特殊の興味を有つた者も少くはないらしいと云ふ。果して然らばこの點また赤松君に取つては多少の有望を期待せしむる一理由になる。

演說が濟んでから直に仙臺に引返した。午後七時から政見發表の演說會をこの市で催すことになつて居たからである。

仙臺での演說會も馬鹿に盛況であつた。會場が狹い爲めでもあつたが、這入れずに空しく歸つた者が非常に多かつた。辯士も聽衆も一樣に多大の滿足を以て閉會したことは疑ない。都會だけに私との緣故を離れ一個の赤松として彼れに共鳴の意を表するものも可なりあつたと云ふ事だ。

その夜私は直に東京に歸つた。話は之で終るのだが、短い滯在中聞いたり見たりした事のうち、獨り赤松君の場合に限らず、一般無產階級運動に多少の參考になると思ふ點を更に次に二つ三つ書いておく。

× × × × ×

第一に無產黨は確に演說に於て他を壓して居る。新聞にも見える通り、各候補者は一般に應援辯士に缺乏して居ると云ふ。田舍などでは遠い處を一日に二箇所も三箇所も掛けるので、候補者の來るまでの繫ぎが大變だ。何とか彼とか御茶を濁すだけでも大仕事である。それに金權候補にはわけても口で用を足す仲間が少く、あつても別に政治上他人に聞かす程の意見を持ち合はしてもゐないので、數ばかり集めても一向に役に立たぬ。某候補者の演說會では四人で一時間が持ち切れず、穴が開いて主催者が出て詫びたと云ふ話を聞いた。應援を賴まれた某老人は人に書いて貰つた原稿を棒讀みして居る中電燈が消えて見苦しい立往生したとか云ふ話も聞いた。成る程之に較べれば、無產派の演說會は誰も立てば內容もあり、就中最も聽衆の魂に訴へる熱がある。他の平凡なる演說會に比して燦然として異彩を放つも無理はない。故に仙臺に限つたことではないが、無產派は到る處で推すな〱の盛況を見てゐると云ふ。

只問題はこれ程盛んな演說の效果が實際の投票の上にどう現れるかの點である。演說會の盛況ばかり當にならぬものはないとは能く言ひ古されたことであるが、普選施行以前は成る程聽衆の多數が有權者でないと云ふ事に說明はついたものの、併し今日は事情が丸で變つて居る。見た所聽衆の中には案外老成人も多い樣だが、孰れにしても大部分が有權者だとすれば、萬一演說の效果が格別投票の上に影響して居ないとしたら、我々はまた大に考へ直さなくてはなるまいと思ふ。

第二に輸入候補と云ふことがさ程邪魔にならぬといふことを發見した。無論土地の人たるに越したことはない。併し土地の人であるのがいゝと云ふのは、名を知られてゐるから好都合だと云ふ丈けで、輸入候補であると云ふことは名を知られるに骨が折れると云ふ以外格別の故障にはならぬ樣である。何を以て斯く云ふかと云ふに、私は汽車の中で百姓らしい數名の人から次の樣な會話を聞いたからである。この人達は矢張り誰かの政權發表演說會を聽いての歸りらしい。

輸入候補は土地の狀況に通ぜず爲に地方の利益を圖るに適しないと云ふも、地方の利益とは一體何であるか。地主物持ちの利益をはかることではないか。普選になつた今日まで、我々は地主物持ちの利益を考へることを地方の利益だなどと妄信してはいけない。之れからは有志家だの顏役だのに強要されて所謂地方問題に一肌脫ぐと云ふ樣な

政治家に格別警戒することが肝腎だ。之れからは却て地方の事情に疎いと云ふ輸入候補の方がいゝかも分らぬ。斯んな人こそ小作爭議でもあつた時には直に飛んで來て我々の味方となつて呉れるのではあるまいか。

以上は會話の大要である。この一事を以て一般を推すことは固より危險だが、ともかく一人でも二人も斯んな考への人が田舍にもあると云ふは賴もしい話ではないか。一葉落ちて天下の秋を知るとやら。殊に斯うした考へほど非常にひろがり易いことを思ふと、私は益々無產派の前途を祝福し、同時にその責任の重大なるを痛感せずには居れないのである。

第三に選擧費用の分擔につき田舍の人達にも相當の理解あるに驚嘆した。選擧は本來候補者から賴み廻つてやるべき事柄ではない、從つて選擧費用なども選擧民の負擔するのが本筋だ。之は私の多年の持論であるが、併し事實は一片の空論に過ぎず、その幾部分ですらが當節に行はるることあるべしとは始めから考へて居らぬ。歎しいことではあるが、無產派もこの點ではこゝ暫くの間既成政黨と同じ行き方をする外はあるまいと諦めて居た。既成政黨のやり方とは、一切の費用を黨の補助のもとに各候補者が自分で調達し、地方の人達には運動員にも有權者にも全然迷惑を掛けぬを云ふ。地方民の中には之に乘じてひそかに私腹を肥やすもあるさうだが、さうと知つても事を荒立てず要求さるる儘に財布の口を開くのが從來のやり方なのである。併し斯の行き方で赤松君等の到底やり切れぬことは始めから分つて居る。そこで私は當初同君並に二三地方の同志に注意した。金はない、やり出せば誰か出すだらうなどと當にされては困る、中央部の費用は極度に儉約し、各町村の演說會はそれぞれの町村の同志の人達に負擔させよと。所が彼等も固よりその積りで居るのだと云ふ。半信半疑で居つたのであるが、實際往つて見ると、この用意が割合によく勵行されて居るのに驚いた。一つには無產を標榜することの有り難味かも知れぬが、多少金を出してもこの種變りの候補者を呼んで見ようと云ふ興味は一體どこから出るのであらうか。是も亦頗る吾人の注目を惹く現象でなければならぬ。

× × × × ×

以上述ぶる所を要約するに、無產黨候補としての赤松君は、普選以前の有權者からは槪して顧みられない、少くともその上層階級からはてんで問題にされて居ない。この階級の人達の間では、氣の毒だが供託金も助かるまいと云ふのが定論だ。故に先づ舊有權者の投票は殆んど集らぬものと觀ていゝ。所が轉じて新有權者と見らるべき仲間の說をきくと、無論最高點の當選ときめて居る。定員五人の所へ候補者は倍數にも達して居るが、他の候補者などは丸で問題にして居らぬ。之れ丈けを聞くと頗る有望の樣だが、併し斯うした積極的態度を執る人は新有權者全數中果して幾人あるだらうか。無產派候補者の當落の鍵は實に此處に握られて居るものと私は思ふ。

今私の何となく感ずる所を有りの儘に云へば、右に述べた樣な積極的態度を執る者は新有權者中の多くて二三割の所だらうと思ふ。其外種種の因緣で始めから官權金權の驅使のまゝに行動するにきまつた者も同じく二三割位はあらう。すると他の六七割が矢張り今なほ風馬牛相關せずと嘯く連中と云ふわけになる。果して然らば、この無關心帶に惰眠を貪る六七割の人達が實に無產派の成否を決する地位に居るものと謂はなければならぬ。今や之等の人達に向つては既成政黨も無產派も一樣に呼び掛けては居る。併し本來の地位からいつても又その持つ政見から云つても、之等階級に對する呼び掛けの效力に至ては、有產者は到底無產者に及ぶものではない。故にこの階級に對する爭奪戰に於て私は無產派の結局壓倒さるることあるべしとは決して思はないが、只財政的準備に事缺く無產派に乘じて十分手落なく運動の手を伸ばし得るやは甚だ懸念に堪へない。若し棄權率を減少するに成功せば、投票の多數は無論無產派に集るだらうが、選擧に方りて僅かに運動したのではこの邊十分に徹底すべきや否や疑はしい。私は寧ろ之を覺束なしと觀るのが正當であらうと考へる。從て私は相當に努力した跡を眺め乍らも容易に成功の豫想に陶醉することは出來ずに居る。

故に私は赤松君が成功しなかつたとしても別に之を不思議とせぬ。寧ろ私がたつた一日の經驗に依て將來に於ける政治教育運動の好望を思はしめられたことに十分の滿足を覺へる。萬一當選したとしたら、私は今更ながら民間に於ける無產派的良心の醒覺著しきに驚かざるを得ぬ。いづれにしても無產派の潜勢力は今日もはや之を蔑視することは出來ない。この潜勢力がいつ如何にして表面に現れて來るだらうか、今度の選擧の結果が更に大に私共を教へるのであらう。（昭和三年二月九日記）

東京府下を舞台として

三輪壽壯

解散の翌々日選擧公布の日逸早く立候補の屆出をした東京府第六區松谷與二郎君から選擧事務長の委囑を受けた。宜しいとお引受して事務所から選擧委員まで一通り屆出を濟し、早手廻しに學校の借入に先鞭をつけ二十六日南葛飾郡砂町藤倉館に言論戰の火蓋を切つた。昨日（二月八日）まで三十五回約二萬の聽衆を集めた。どの演說會も殆ど滿員の盛況で、就中二月三日南千住の第二瑞光小學校では二千を突破する會衆は熱狂して嵐の如き拍手を送り萬歲を叫び全會場はどよめき渡りました。

演說會の景氣だけでは當落の豫想はつかない。然し少くとも無產政黨は言論より外に訴ふる道はない。ポスターも金が嵩んでさう〱たべたと貼れぬし、挨拶狀を無料郵便で出すにも二千圓からの費用がかゝ

つて一度でせいぜいである。無償で朝から晩まで飛びまはつてくれる選擧委員、選擧法の窮屈な解釋から當局の目を光らせる中に個人とか勞務者とかの名目で然し辨當代にしか當らぬ僅かばかりの報酬で働いてくれる人々、それ等の人々を以て組織さるゝポスター張や、ビラ撒班が懸命の努力をしても既成政黨の金を惜まず人手惜まずやるのには敵しない。第一にポスターの數が不足である。そんな風で勢ひ言論戰に主力を集中せざるを得ないことになるのだが、兎も角も演説會は既成政黨のそれとは比較にならぬ反響共鳴をよび起して居る。殆んど悪意の聽衆を見出さない。聽衆は熱心に始から終りまで耳を傾けて居る。演説會の度毎に警官や役場の雇員や又土地の有志に聞いて見ると聽衆の種が無産政黨と既成政黨とは大體違ふといふ人が多い。少くとも私どもの今まで開催した演説會ではひやかし半分の聽衆は見出せなかつた。一度彌次が一人出て聽衆からつまみ出され檢束されたことがあつた位である。

×　×　×

雪の降つた六日の晩でさへも高田町第三小學校では二百の聽衆で會場は滿員になつた。應援辯士の一人と候補者の演説は中止を命ぜられた。此不當な中止に斷然抗議し場合によつては官憲の選擧妨害として告發する旨を主催者が述べたとき聽衆は憤激の中に口々にその横暴を罵つた。勿論私共は即刻嚴重なる抗議を高田警察署に申出でた。言論の干渉はもとより一兩にとゞまらない。議の川で出る辯士も出る辯士も發言を封じられたとき、私も候補者も壇上から不當なる當局の態度を痛詰したが、聽衆中の民政黨の一員とやらは控室に來て語つた「昨夜も民政黨の演説會を脅迫したのですが今日は諸君にやりこめられて胸がすいた」と。天下の第一黨たるもの言論の抑壓に對し無産黨程にも抗爭し得ないでは威信地に落ちるじやありませんか。床次[illegible]が二月三日朝日講堂でやつた樣子や廻りくどい微溫的な言論壓迫の抗議では民衆は承知しません。隨つてゆきません。天下はとれません。齒の拔けたライオンや金魚のさしみでは仕方がないが民政黨は民衆に媚びる前に政府と與黨に猛然と挑戰することが天下取の早道だといふことを御存じないと見える。

×　×　×

演説會では何といつても婦人辯士の受けがよい。全國婦人同盟の岩内とみゑ女史を始め小林たね、大瀧やすなどといふ人が出て女ながらに滿丈の氣焔をあげる。警所と政治の關係とか現在の女子人身賣買に對する抗議から消費税を新設せよなどと說き來り說き去つて有髯の男子をして顏色なからしめ働く人々の胸深く喰ひ入るものがある樣である。全國婦人同盟の政治運動はもとより在來の女權擴張論のやうな或はあり來りの婦人參政權運動の樣な皮相なものではない。それはもとより無産婦人の解放を叫ぶが、無産者の解放と共に婦人を解放せよと叫ぶ。生活の中から婦人の政治的要求を語る。それが聽衆に感銘を與へるのであると信ずる。それでも岩内女史はいふ「男性の惡口は除り

いはないことにして居ます。でないと演説會の受けが惡くなるさうですから、女性の立場から男性に對する不平を率直に述べるのでは聽衆がきゝ過ぎて有權者たる男性を尻込みさせるものらしい。

×　×　×

演説會場に小學校が解放される樣になつたのは無産黨にとつては隨分助かることである。もとより郡部のことであつて町村によつて區分取扱が違ふ。氣持よく世話をしてくれるところと頭で指圖するところとある。偏見かも知れないが既成政黨の手が廻つてゐるのだなと感じさせられることが屢々ある。尤も役場の吏員なども辯士控室に來てしつかりやつてくれと激勵してくれる向もある。また學校が選擧に解放さるゝ餘波かも知れぬが、南千住の或小學校の教員が小學校の兒童に松谷はいけない男で、、さん（、、、、、）はえらい人だといふことを吹き込んで居るといふ話だが事實なりとすれば看過出來ない。

×　×　×

演説會の度數を多くやりたいのは山々だが、二月一日文の樣な失策をやつたから爾後回數を多くすることを見合せた。それは一晩四回、而も南と北にかけ離れた處で演説會を開いた。候補者は順を追ふて二つは濟して來たが第三、第四の會場は意地の惡い中止なんかゞあつて、候補者の來る迄辯士がつゞかなくて會を閉づるの已むなきに至つて、聽衆は口々に不平を漏らして歸るのを聞いた。候補者が來ないでは困るといふ聽衆の候補者に接したい欲求は、そして候補者の政見をよく聞いて是非を判斷し樣といふ考へは普選になつて始めて見出し得る特徴であるが、そこに言論戰一本槍で行く者の强味があると思ふにつけ失敗はしたものゝ氣强く感ずる。

聽衆が多く集れば氣勢はあがるが、はつきり聽く人の胸を摑むことがむづかしい。少數であれば氣勢を添へる點では物足らなくはあるが、集つた人の心を捉へることが出來る。大きな會場で氣勢をあげ、小さな會場では聽衆場外にあふるゝ位で而も會衆にはしんみり徹底する樣な話をする。これを了まで組合せて行くのが言論戰としての上策であらうと思ふ。

×　×　×

兎角七面倒な選擧法にしばられてやれビラがいけないポスターを多く張つたそれは氣勢を張る行爲だとかやかましい干渉を受けたり、或は一錢五厘のハガキ一枚買ふにも選擧事務員自ら支出するか承諾簿に印をつくとか繁雜な事務をとつて居ります私としては、演説會で、、呼はりしない程度で既成政黨のこき卸しをやる位がせめてもの慰安でありますが、それすらも際が流れて終までつゞくかどうかを疑つて居ます。殘すところ十日選擧戰は白熱化しました。雪どけの中を足ゴム靴でビラ撒きポスター張りと寸時も休まず働く無産政黨の選擧運動の人々を決してお祭騒ぎだなどと批評させたくはない。私はそれを眞摯な未來の建設への偉い努力であると考へます。無産黨の選擧戰は唯一つ意氣である。それで勝敗が決る。その意氣を唯一の賴みに決勝點まで眞つしぐらに驅けつゞける迄です。（二月九日）

流刑から流刑のトロツキー

荒川實藏

昨年末聯邦共産黨から除名された反幹部派の指導者數十名は今度更らにヨーロッパ・ロシア及びシベリアの片田舎に送られた。その流刑者中には、勿論、トロツキーが含まれてをり、彼は一月十六日までにモスクヴアを去つて支那國境に近き露領トルキスタン地方に赴くことゝなり、その道中において卒倒したとの報がある。

その後の確實な報道はハッキリ知られてゐないが、ジノヴイエフ、カメネフ一派は屈服したけれども、反幹部運動の元祖たるトロツキー氏等少數の一派は頑として膝を屈せず依然として反幹部運動を續けてゐた。私は今茲にトロツキー等の反幹部運動の近況や、その將來について述べやうとするのではなく、彼等の誤謬を究明しやうと欲するものでもない。それはスターリン、ブハーリン其他の現幹部派によつて詳細に曝露され、それらはまた我國にも紹介されてゐるから、讀者はそれによつてロシア共産黨内の論爭の眞相を知ることができやう。

私はトロツキー一派の主張と、彼等の執つてゐる態度には、斷乎として反對し、毫も共鳴點を見出し得ない。けれども資本主義の最後の段階たる帝國主義時代に於いて所謂血みどろの鬪爭場裡で極めて勇敢に鬪ひ、永年ツアーの迫害の下に苦しんできた勞農の巨頭トロツキーが、今支那國境近くの片田舎に流刑されるに至つたとの報には我々の心を強く打ちそぞろに暗い境地さへ現出せしめる。

我々は、勿論、英雄崇拜者であつてはならない。また我々は歴史の流れに於ける、一個人の演ずる役割を盲目的に過大評價すべきではない。だが、私をしてかの廣大なるロシア領土に於いて、更にその本國を脱れて、轉々として他國を放浪し、同じくそれの諸國の支配階級の迫害と彈壓とに屈せず、常に自由のために、被壓迫大衆解放戰の先頭に立つて戰つてきた精力絶倫の鬪士トロツキーの面影をこの際スケッチせしめよ。流刑から流刑へと彼の嘗めてきた革命家としての多大の苦難は、他の多くの革命家のそれと同じく、ロシア革命を飾るものであらう。

トロツキーは一八七九年の九月二十六日に南露なるヘールソン縣の一寒村ヤノフカに生れた。彼の家族は、その地に開墾のため移住した農家であつた。九歳に至るまで生家に居住してゐたが、その後オデッサの實業學校に入學したが、七學年に進級する際、ニコラエフ市に轉校した。そしてこの市に於いて始めて革命思想に染まるに至つた。學校を終るや彼は同市の勞働者の仲間に投じ、且南露勞働者同盟にも加入した。

その頃ロシアに於ける勞働者運動は大衆的となり、擴大化されてきたので、ツアー政府の彈壓の魔の手が殆んどあらゆる團體にふりかゝつてきた。そしてトロツキーも一八九八

年一月二十八日に逮捕され、牢獄の苦しみを始めて味つたのであつた。最初は、ニコラエフ監獄に繋がれ、次にヘルソン監獄に移され更に約二ケ年間オデッサ監獄に幽閉された。裁判確定後、モスクヴア、イルクツク、アレクサンドロフらの諸監獄に轉送され、最後に流刑に處せられたのであつた。流刑地は東部シベリアのウステイ・クーツ村であつた。

だが、トロツキーは一九〇二年の初めに流刑地に到着するや否や、彼は直ちに逃走したのであつた。讀者諸君、二十六年前に血氣横溢せる二十三四の若き革命家トロツキーが、寒風肌を劈き、咫尺も辨ぜぬ大吹雪に襲はれつゝ、幾百哩も、幾千哩も擴がる人跡絶無の原野を逃走せる彼の風姿を想起し給へ。しかして心の奧底には絶對專制政治に對する心からの憎惡と前途に對する希望に燃えながら、官憲の追及に心を配つてゐる時の彼の心持を併せて考へて見給へ。

流刑地を逃れた彼は、ロシア國外に落延びた。彼の活動舞臺はこゝに於いて一變した。彼はウインナに於いてヴイクトール・アドラー及びその令息フリードリッヒ・アドラーとも接近し、またロシアの革命運動上に重大な役割を果した「イスクラ」紙にも筆を執つてゐた。それ以外に、彼はロシアの學生並に勞働者の居住地で講演しながら、ヨーロッパの諸都市を巡り回つたのである。

彼がヨーロッパの諸都市を驅け廻つてゐるうちにロシア本國の情勢は急轉した。一九〇四年に火蓋を切られた日露戰爭は、遂にロシアの第一革命を誘起せしめる原因となつた。一九一七年十一月のプロレタリア革命の序曲たる一九〇五年の第一革命に於いて彼トロツキーは、レーニングラード勞働者代表ソヴエットの執行委員であり、十一月二十六日にソヴエット委員長フルスタレフ・ノサリが官憲によつて逮捕された後に於いて、トロツキーがソヴエット委員長に選擧され、不屈不撓の鬪爭を續けた。その當時政府の反動的彈壓はいよ〳〵峻烈となつてきたので、ペトログラード・勞働者ソヴエットは十二月二日にかの有名なる「財政宣言」を發表して、より猛烈に政府に抗爭するに至つた。

しかして、該宣言發表の翌日、即ち、十二月三日にトロツキーはその全執行委員等と共に逮捕されたのであつた。トロツキーの名著「一九〇五年」は、この革命の經驗を蒐集せるものであつて、該書中にこの革命に關する豐富な資料を發見し得る。

さて、逮捕されたトロツキーはペトログラード監獄に一ケ年程過したが、裁判の結果、終身流刑に處せられ、一九〇七年一月三日にシベリアのオブドルスクに送られた。この流刑地は最初のシベリア流刑と同じく、寒暖計が零下數十度を上下してゐるシベリアの奧でありしかも眞冬だつたのだ。その途上ではトロツキー及びその一行を監視するために、一少佐の指揮の下に十人の衛兵が同行してゐたため、警戒嚴を極め、途中での通信は禁じられて居たにも拘らず、到る處の停車場で、彼等は勞働者たちから歡迎されたのであつた。彼は當時の日誌に斯う述べて居る。「シベリアに於ける總てのものが以前のまゝに存在してゐる。少くとも數年前と少しも變つて居ない。同時にまた總てのものが變つたやうにも思はれる。シベリアの兵士たちは全く變つて了つた。單に兵士たちだけではない。農夫も同じことだ。彼等は政治問題を論ずる。兵

」と。

シベリヤの列車は遲々としか進まない。殊に酷寒の冬のことだ。それでも列車がシベリアの奥深く進行して行くにつれて、日一日と、寒氣と寂寞とが增しく行く。トロツキーは水も漏さぬ嚴重な警戒裡にあつて、再び逃亡のプランをたてつゝあつたのだ。

そして、トロツキーは護送の途中にベリョゾフから逃走したのである。彼は追跡の危險を慮り、わざと橇の通ずる街道を避けて、數百哩の荒野を馴鹿の引張る橇で疾走したのであつた。第二の逃走にも成功した。だが、それは並大抵のことではなかつた。彼の心は幾度か緊張したり、絕望の淵をさまよふのであつた。あるときは吹きまくる雪になやまされ、あるときは茂つた長い森の中を辷り走つたりしたのである。だが、樺の木や、樅の木や、巨大な落葉松が立ち並んでゐる靜寂な森林の間を流れてゐる河は、彼の眼を樂しましたであらう。單調な森の中にも、無限の變化が味はれたであらう。首尾よく逃げ延びた彼は、一九〇七年の春の頃、漸やくロシアの國境を越えて海外に走り、ロンドンで開催された黨大會に出席せんがために、當地へやつてきた。

其後彼はオーストリヤのウインナに居を定め、ドイツ社會民主黨の左翼と絕えず協力して、世界大戰開始前までも、彼は轉々として、ヨーロッパ諸國を驅けめぐり、諸所に開かれた無產者の國際大會に出席し、その間に從來よりも更に徹底した國際主義者になつてゐた。

一九一四年八月に歐洲大戰は勃發した。そこで彼は猛烈に帝國主義戰爭反對の宣傳をなしたが、これがためにオーストリア及び獨逸から逃亡せざるを得なくなつた。殊にドイツの裁判所はトロツキーに對して召喚狀を發したが、彼はそれに應じなかつたので、缺席裁判で禁錮を宣渡された。

其後トロツキーはロシアの亡命者によつて巴里で發行されてゐた社會主義新聞「我々の言葉」を支持し、これがために、巴里に居を移すに至つた。そして當時世界の耳目を聳動せしめた、かのチンメルワルト及びキンタールの兩會議に出席して、大いに活躍したのである。

一九一六年九月の末に、フランス政府は遂にトロツキーに國外退去を命じたのである。當時フランス政府内には、ゲード其他の社會黨員が入閣してゐたので、トロツキーは、ゲードに宛てゝ抗議の書を送つた。その最後の一句に次のやうに述べてゐる。『……私は貴下によつて追放されるに當つて、我々の勝利の確信を抱いてフランスを去るものである……』と。

トロツキーはスペインに渡つた。だがマドリッドに着くや否や、不逞煽動家として逮捕され、暫らく監獄に拘禁せられた後、同年末にアメリカに送られたのである。

私は今當時に於けるトロツキーの日誌を摘記しやう。『一九一七年一月一日、船客は皆お互に新年お目出度うの挨拶を交はし、誰も彼もが大洋彼方にある新らしい世界を考へて默想に耽つてゐる……』『一九一七年一月一三日日曜、紐育に到着す。午前三時に目が醒む。直ぐ起きる。暗黑だ。寒い。風あり、雨さへ交つてゐる。……煤色の海水と灰色の空。船は再び動く。岸には霧が立ちこめてゐる。冬の木立と港の建物。一切のものが巨大に見えるが、それらは何れも霧深き朧ぼらけのうちに

覆はれてゐる』

三月革命の勃發まで彼は紐育で働いてゐた。若しトロツキーが片山氏と紐育で逢つたとするなら、恐らくこの頃のことであらう。三月革命勃發するや、彼は急いで歸國の途に就いたが、英國の官憲のためにカナダで逮捕されたのである。一ケ月間の抑留は、當時の彼の心をいかに焦立たしたであらう。だがペトログラード勞兵代表ソヴエットの要求があつたので、英國官憲の手から釋放され、ロンドン及びストックホルムを經由して、五月十七日にペトログラードに到着したのである。

いよ〳〵トロツキーの活動舞臺は開かれた。七月事件の後にケレンスキー政府によつて、逮捕されたが、ペトログラードの勞働者達の示威運動が效を奏して、約二週間後に釋放され、十一月革命には、文字通りに寢食を忘れて活動した。

世界史上に於いて特筆すべき十一月革命の成就された日の、ペトログラード・ソヴエット大會の開會の辭に、彼はかう述べた『軍事革命委員會の名の下に臨時政府は最早存在せぬことを宣言する。各大臣は捕縛された云々』と。

ソヴエット政權樹立されて、既に十年、その基礎いよ〳〵鞏固となり、勞農大衆の壓倒的多數が歡呼の聲で十周年記念祭を祝つてゐるとき、黨より除名され、今また遠く支那國境への流刑を傳へられてゐる。もとより、今度の反幹部派指導者らの流刑は、ツアー政府の下に於けるが如き流刑ではなく、彼等が自己の過失を認めて、正しいボルシエヴイキ的訓練に屈服させんがための流刑であらう。

だがトロツキーは果して自己の過失を認めるだらうか？　本年一月の中旬に彼が流刑地指してモスコーを出發したとき、彼を見送るトロツキー一派の學生及び勞働者達に向つて彼は尙ほこの一トロツキーが何だ、我々は我々の勝利を信ずるものだと激勵したとの記事さへ、ある英字新聞に掲載されてゐる。

トロツキーは、勿論、項羽やナポレオンの如き古代の又はブルジョア革命の英雄豪傑でなく、自分自身もさうは思つては居ないだらうが、自己の力を過信する英雄主義的態度がないでもない。それは兎もあれ、流刑から流刑へと變轉極まりない生活を伴めてきた彼の過去は、一種の悲壯味を帶びてゐる。

無産婦人團體概觀

野坂龍子

『無產者の解放なくしては婦人の解放なく、無產者の勝利なくしては、また婦人の勝利もない。』又、『大衆を獲得するには婦人を獲得しなければならぬ。なぜならば、資本主義の下においては人類の半分は、二重に壓伏されてゐるからである。』と、婦人解放の父レーニンは云つてゐる。

我國に於ける婦人の政治的自由獲得のための鬪爭も、亦無產階級解放運動の一部としてのみ意義があり、又可能である。この見方、この立場こそ我等無產階級婦人運動に志すものの、常に忘れてはならない點であり、又、ブルジョア婦人の婦人參政權獲得運動、卽ち女權獲得運動と根本的に相違するところである。

左に、最近婦選獲得同盟、並に、有名なるブルジョア婦人達によつて、作られた『普選達成婦人委員會』なるものの決議を採錄して、彼等のそれと、我等のそれとが如何に相違せるかをはつきりとさせたいと思ふ。

『日本國民は、今や總選擧のくわ中にあるが我等婦人は、この劃時代的第一次普選に加はることが出來ない。この事は實に遺憾の極であるが、國民の一人として婦人が今次の選擧に對して最善をつくし、婦選の實現を速かならしむべきは言をまたない。ここに我等同志相計り、有權者に對しては、棄權買收その他の不正行爲に左右さるゝことなく、眞の國民の代表たるべき人物に、その淸き一票を投ぜしむべく、左の如き實行運動を行ひもつて目的の貫徹を期す。

一、全國婦人團體の協力を求め、各地にて決議の主旨の實行に努むること。

二、棄權防止、その他の注意事項を印刷したるビラを全國の婦人團體に送附すると共に東京市內に於いては街頭において配布す。

三、同主旨のポスター配布。

四、場合によつては婦選達成デーを催し、街頭宣傳をなすこと。

○

最近數年間に於ける我國の無產階級運動は著しき發展をとげ、その大勢は、遂に、まがりなりとも普選法の制定となり、幾多の困難曲折の後に、やうやくにして、勞働者農民の共同戰線政黨として、勞働農民黨が結成された。間もなく、この共同戰線黨は、勞働總同盟其他幹部の脫退により、更に社會民衆黨、中間派的日本勞農黨、右翼農民主義的日本農民黨の三無產政黨の創立を見るに至つた。かくして、とにもかくにも、大衆の大なる要求を擔つて無產政黨は成立したが、我國の法律は社會的にも經濟的にも重要なる地位を占めてゐる婦人、殊に勞働婦人農村婦人に對して、選擧權被選擧權は勿論、政治的結社への加入をすら禁じてゐる。ここにおいて、婦人の政治的自由獲得のための戰に、その先頭となつて鬪爭を續けてゐる勞農諸政黨への、勞働者農民婦人大衆の動員機關としての組織は絕對必要なるものとなる。この目的のために、昭和二年七月三日先づ關東婦人同盟所謂勞農黨系（全國的組織の一過程として）の創立を見、同十月二日には全國婦人同盟（日勞黨系）の成立となる、十二月には社會婦人同盟（社民黨系）の創立が計劃された。

これらの三つの婦人同盟は、ほぼその目的任務を同じうするものであるにかゝはらず現在の無產階級政治戰線の分裂が、同時にこの無產婦

人團體の分立となつたのである。以下、これらの各團體の宣言綱領政策（主張）等によりてその概觀をみよう。

○

關東婦人同盟は、日本勞働組合評議會、關東俸給生活者組合、自治會等の婦人組合員、並に日本農民組合會婦人部員等を中心となし、それに青大衆教育同盟の婦人部員その他の左翼的知識階級婦人達によつて構成されてをり、主として勞働農民黨の指導下に成立したものであつた。その創立宣言は婦人を壓迫し、搾取し、隷屬せしめるところのものは、勞働者農民をも壓迫搾取してゐるおなじ專制支配勢力である、その戰では、無產階級共同の敵に對して、一切の壓迫されてゐる階級の政治的自由獲得のために勇敢に鬪爭する政黨の旗の下に進められるべきであるを云ひ、その當面の要求は參政權の獲得、政黨加入の自由、勞働婦人保護法の制定、寄宿舍制度の撤廢、同一勞働に對する同一賃銀制の獲得等にありと。

この宣言にもとづき、創立以來、勞働婦人保護法の獲得のために、或は婦人勞働者に對する差別的待遇撤廢のために、爭議、不當解雇、工場閉鎖等に對しては勿論あらゆる機會を捉へて鬪爭をつゞけてゐる。又、昨秋の府縣會議員選擧に際しても、無產政黨候補者の應援と同時にこの機會を利用して、その演壇から、或は茶話會懇談會等を開いて、婦人大衆を政治的自由獲得への戰に動員し、參加させるために大いなる努力がなされた。その結果、各地に於ける婦人大衆の政治的自覺を刺戟し、殆ど全國に亘つて（一道三府二十餘縣）各地方婦人同盟準備會が作られ、同年十二月十四日には、婦人同盟全國組織準備委員會が開かれるに至つた。

元來、關東婦人同盟は、絕えざる官憲の壓に抗しつゝ、婦人大衆の要求貫徹のために勞農黨の指導の下に勇敢なる鬪爭をつゞけ來つたにもかゝはらず、充分勞働婦人、農村婦人の大衆を動員し、その鬪爭に參加させることが出來なかつた。この苦い經驗に基き、この全國組織準備委員會が決議した宣言は、確かにこの同盟のために、正しい一步の進出であることは疑ひない。卽ち

『……いやしくも、政治的自由を要求する婦人團體との共同戰線を張り、更らに勞働組合、農民組合婦人部との密接なる連絡の下に、婦人の政治的、社會的、經濟的隷屬よりの解放のために徹底的に戰ふ。

『彈壓の砲火よ來れ、われらは堅く信ず。婦人の參加なくして民衆の政治的解放はありえず、また政治的自由の獲得なくして婦人の解放はありえざることを』と述べてゐる。この宣言の主旨は、更に最近、日本勞働組合評議會常任委員會において決定された『勞働婦人に對する活動方針』中婦人同盟と組合との關係の項にあらはされた、左記の如き評議會の新しい戰術と相俟つて、更に力づよい無產婦人運動の發展を來すものを信ずる。卽ち

『婦人勞働者の政治的差別待遇に對する鬪爭は、全然組合の關係すべき問題でなく、一切これは婦人同盟に委かしておけばよいといふ考へが、組合の幹部、活動的な婦人組合員中にもある。更に甚だしきに至つては、經濟的要求に基く鬪爭すら「婦人の問題だから」との理由で、婦人同盟がやればよいといつた調子で、組合が積極的にかゝる鬪爭を激發し、指導しやうとせぬ傾向すらある。（中略）男子に比較して婦人が政治的に差別されてゐることは、婦人勞働者が男子とおなじように、階級鬪爭に、參加することを妨げてゐることが明白なる事實である以上、組合は當然かゝる鬪爭に無關心であるわけにはゆかぬ。組合は婦人勞働者大衆を、愈々多く政治的鬪爭に動員し、參加させるためにも（卽ち婦人同盟の鬪爭をより力づよく展開させるためにも）組

濟闘爭により多くの婦人勞働者を參加せしむるべく努力することが必要であり、又、組合に組織することが多ければ多いほど、政治的闘爭も亦力強く戰はれるのである。』と。

又、この全國組織準備委員會に於いて、全被壓迫大衆の强き要望である政治戰線の統一即ち無産政黨合同に關する決議がなされ、その合同實現のために、積極的努力をなすことを誓つた。

又、今次の總選擧（最初の普選―その實は從來の制限選擧と何等變りなき）に對しては、左の如く聲明し、その目的のために休みなき闘爭を續けてゐる。

『（前略）しかし、私達婦人には、依然として政治への參與の權利は阻まれてゐる。議員として、國會に出ることはおろか、婦人の眞の利益を代表してくれる勞農政黨の候補者を國會へ送り出すための選擧權さへ與へられてゐないのである。婦人の政治的自覺をとゞめ、奴隷として、いつまでもその階級利益のために貪らうとする支配階級の意圖がはつきりと表はれてゐるではないか。

『婦人の政治的社會的、經濟的隷屬よりの解放のために常に婦人大衆の先頭に立つて、戰つて來た我が婦人同盟は、この時婦人の敵である專制支配に對して、我同盟の政治的自由獲得の戰を更に强力に戰はなければならない。

『そのため、婦人の地位の向上、解放のために戰つてゐるあらゆる婦人團體と協力して戰ひ、又、婦人大衆の利益を代表して戰ひぬいてくれる勞農政黨を積極的に支持應援して選擧戰を充分に戰はれる樣努力するものである。婦人同盟全國組織準備委員會』

しかして中心的なスローガンとしては、

一、滿十八才以上の婦人に選擧權を與へよ！
一、滿十八才以上の婦人に被選擧權を與へよ！
一、婦人に政黨加入の自由を與へよ！
一、婦人に政治的自由を與へよ！

の四つを揭げてゐる。

○

次に、全國婦人同盟は、日本勞働農民黨指導の下に、日本勞働組合同盟等に所屬する婦人組合員を中心とし、職業婦人、女教員、看護婦並に無産階級家庭婦人等をもつて構成されてゐる。その宣言（草案）に

『親愛なる全國の同志姉妹よ！

今や我等は深き眠りより覺めなければならぬ。我等が過去數千年の歴史は、如何に慘苦と忍從とに充てるかをみよ！幾多の姉妹は炊事と雜巾がけとのために尊き人生を消耗した。幾多の姉妹は工場の塵埃の中に又、鑛山の地底に、自ら生命を削りつゝある。（中略）

『往時の女性は如何に榮えある勵に輝き尊敬をうけてゐたか。しかもをやみなき歴史の展開は、女性の享受せるこれらの一切の權利を奪ひ、かくて女性の苦難ははじめられた』と說き、更に一轉して、

『だが姉妹よ！歴史は再び我等に春を約束した。見よ滔々たる資本主義文明は、我等女性をもせまき家庭よりひき立てゝ、工場に鑛山に、會社に銀行に、重要なる職務を果しつゝあり、今や文明は婦人なくして成立しない。』と婦人の重要なる役割を强調し、しかも、現在の如き屈辱は、吾等の一刻も耐えざるところであつて、吾等は吾等より奪はれたる凡ての自由を奪ひ返さなければならない。と說き、最後に

『親愛なる全國の同志姉妹よ！自由は決して與へらるべきものではない。それは奪返すべきものである。われ等力弱しといへども然團結の自由がある。しつかりと手を握らうではないか。そして共に進み闘はう再び輝くわれらの日のために。』と。

その主張（要求）とするところの項目は、大體、前に述べた關東婦人同盟と大差なく、たゞ

その方法、手段においては、綱領に明記されてゐる如く、『我等の國情に卽し、婦人の特殊なる地位に應じて、且つ適實なる手段によつて』目的を遂行せんとする。勿論、日本勞農黨の指導精神によつて、またその動員機關として運動を展開しつゝあるのであるが、過日起された婦人參政權獲得、深夜業、坑內勞働禁止等のための要求請願運動に、參加の誘を受けた婦人團體中、關東婦人同盟では、心からなる協同を申入れたのに對して、參加團體が他になかつたとの、單なるその理由によつて、關東婦人同盟の應援を拒絕されたことは、我等無產婦人のために、遺憾に思ふところである。

又、目下の總選擧に際しても、この機會に婦人大衆の政治的意識をたかめ、政治的自由獲得のため、その不幸、不滿を激發し、それを鬪爭へ導くことこそ、まづ婦人同盟としてなされなければならないことであるにかゝはらず、ある幹部の遊說に上る門出に發せる言葉の中に『よい機會があれば、婦人參政權の問題にも觸れたいと思つてゐる。』（東京朝日新聞）といふ意味が述べられてゐるのは（或は、新聞の誤傳かもしれないが）この婦人同盟の指導者の考へが、單に、日本勞農黨候補者の單なる選擧應援にあるのではないかと、亦同婦人同盟のために惜しむ所以である。

○

社會婦人同盟は、昨年十二月に創立されるべく計劃されたのみで、未だ完成されたものでなく、詳細にその內容性質を知ることが出來ないが、前二者と同じく、無產政黨の一つである社會民衆黨の指導のもとにあり、主として知識階級婦人達によつて、指導されてゐる。

その宣言（草案）は、

吾等女性の生活が、從來の誤れる一切の不合理なる制度のために、その多くのものを奪はれてゐたことの事實をのべ、家庭も亦勞資鬪爭の縮圖たることを認め『六十萬民衆の半ばを占むる女性に不備なる政治法律經濟敎育道德の缺陷を正し、眞の男女平等の社會を建設せんがために、玆に同志を糾合して蒙昧なる世の男性（傍點筆者）並に資本家とに敢て戰を宣する所以である』と結んでゐる。その極めて鬪爭的なるその目標が資本家と並べて、世の蒙昧なる男性へとむけられたる點は、一種の女權擴張運動に陷する危險を多分に有するものと考へらる。その政策として揭げるものは、殆ど前二者と等しく、最後に禁酒法の制定を加へ、又、事業項目中に職業結婚の紹介、家庭改身の上、產兒制限の相談、授產場、母子收容所、託兒所等の經營職業講習會の開催等を擧げた點は、この婦人同盟の性質が、前二者とは傾向を異にして、無產階級婦人の政治鬪爭への動員機關といふよりは、小ブルジョア的社會事業團體に近いものであると云ひ得る。

この社會婦人同盟は、未だ形成過程にあり從つて、具體的運動の展開はみることができないが、今次の選擧戰に對しては、社會民衆黨の候補者のために婦人の應援辯士を送り、極力その支持に努めてゐる。

○

以上によつて、現在存在する三無產婦人團體の概略を見ることができたと思ふ。現在、勞農大衆は、同一陣營內における政治戰線の統一を要求し、又、各地においては協力なる選擧協定すら行はれてをり、勞農政黨間の、戰線統一の客觀的狀勢が作られつゝある。かくて、これらの無產政黨の直接間接の指導下に、別々に生れ出でた婦人團體においても、その目的とするところは、同一なる婦人の政治的自由の獲得にある以上、これらの共通の目的によつて三團體の間に、共同戰線をもち來すことが、絕對に必要であり、又、可能の條件が備りつゝある。これはまた無產階級政治戰線の統一のための一助ともなるであらうことを切記してこの稿を擱く。」

無産階級陣營に於ける左翼の二對立
——『マルクス主義』＝『無産者新聞』と『勞農』——

小峰直一

一　左翼の二對立

無産政黨結成以來の無産階級の陣營は文字通りの四分五裂と混亂であつた。政黨は勞働農民黨、日本勞農黨、社會民衆黨、日本農民黨の所謂る左翼、中間、右翼、右翼農民の四全國政黨及び數多の地方政黨に分立對峙し、勞働組合及び農民組合等の經濟團體も、此の政黨の對立に相應した對立團體に分裂した。そして此等の諸團體は、有ゆる問題に、有ゆる戰線に於いて對立鬪爭を續けてゐた。

而してこの對立鬪爭を、最も組織的に、大規模に、且つ成功的に組織したものは、最左翼なる勞働農民黨であつた。他の諸黨は受動的に防禦的に對抗してゐた。その理由は、勞働農民黨及び同系統の諸經濟團體には、日本の社會運動の優秀な指導者を雲集せしめてゐたが故に、その攻擊力が他黨を壓してゐたばかりでなく、日本の左翼指導勢力——即ち諸國の共產黨に比すべき前衞勢力——が、勞働農民黨及び同系統諸團體の指導部を形成し、それ等の内部に全國的組織網を持つて、勞働農民黨の全組織活動を指揮してゐたからである。他の諸黨は黨としてのルーズな組織を有するのみで、勞農黨の如き、中心指導組織を有しなかつたが故に、有ゆる對立鬪爭に受動的たらざるを得なかつた。

この勞働農民黨及び同系統の經濟團體なる評議會、日本農民組合の公然と組織した對立鬪爭に、一つの理論と目標と計劃とを與へてアジテートしたものが、この左翼指導勢力の展開した、かの理論鬪爭である。過去一年有半に亘る雜誌『マルクス主義』『無産者新聞』『勞働者』『農民運動』『インタナショナル』『政治批判』を中心とし『勞働農民新聞』『勞働新聞』『土地と自由』等の團體機關紙を動員して組織された理論鬪爭の尖鋭にして旺盛なる煽動力と攻擊力の前には、如何なるこの指導勢力圈外の左翼理論家も、他團體の指導者も立ちつづけることが出來ぬかに見えた。それに對抗すべき有力なる言論機關を有せぬそれ

等の人々及び團體は、只管、防禦につとめ、時折り力弱く投げ返へすか、或は努めて對立を回避することを餘儀なくされたかの如くであつた。

けれども、金融恐慌後の支配階級の攻勢は無產階級を有ゆる戰線に於いて重壓した。勞働戰線に於いては產業の合理化の名による賃銀の引下げと時間の延長、工場閉鎖と解雇。農民戰線に於いては立入禁止と立毛差押。しかもこれに反抗せんとする勞農大衆の上に暴壓の鐵槌を打ちをろす田中反動內閣。か丶る狀態は漸次に大衆をして、戰線の統一を想はしめた。戰線統一の叫びは、單にか丶る戰を有効に闘ふべく組織勞農大衆によつて叫ばれたのみでなく、過ぐる府縣會選擧戰に於ける對立闘爭による無產諸黨の既成政黨に對する慘敗によつて、普選を翹望しつ丶ある未組織一般大衆によつて、更らに無條件的に理論を拔きにして要求された。かくて戰線統一の聲は無產大衆の一つの與論となつた。かくて昨年末には勞農黨の合同提唱、日勞黨の統一提議、各黨大會に於ける合同決議案の討議、更らに日本勞農黨と日本農民黨との合同公約、四地方政黨と日勞黨との合同公約となつた。

折しも、左翼指導勢力は、第三インタナショナルより、對立闘爭の全理論——所謂福本イズム——を批判され、戰線統一をなすべきとの新テーゼを受取つた。一方には以上の如き吾國の情勢により、他方に於いてはこの新テーゼにより、左翼指導勢力は、如何なる犧牲を拂つても、從來の方針を一大轉換せねばならなくなつた。その轉換は殆ど百八十度に近い。卽ち對立闘爭より共同闘爭へ、分離運動より合同運動へ。しかしこの指導勢力は過去一年有半の對立闘爭を有力に、成功的に、計劃的に組織し指導して來ただけに、今や瞬時にして急角度を描いて方向轉換を行はんとせんとするとき、多くの弱點を露出し、また『マルクス主義』『無產者新聞』は他より攻擊さるべき多くの理論的言質を有せざるを得ない。

か丶る形勢に面するや日本勞農黨は勞働農民黨幹部に對し、舊來の守勢を攻勢に轉じて『宗派的分裂主義——福本主義の打倒』の旗印をか丶げて進出を開始した。しかしこれは舊來の對立闘爭の一發展である。

しかしこ丶に擡頭せる重要なる一勢力は勞働農民黨內部に於ける中心指導勢力に對する反對要素の結合である。卽ち勞働農民黨內部には『マルクス主義』『無產者新聞』を中心とする指導勢力に對立して、雜誌『大衆』を中心とする一勢力があり、更らに外部より勞働農民黨を支持しつ丶あつた堺氏山川氏の影響下にあつた一勢力があつた。この三つの指導勢力が全體としての勞働農民黨の指導勢力を形成してゐたが、第二、第三のものは全く組織を缺除してゐたので、過去一年有半は、『マルクス主義——無產者新聞』の指導勢力と、さ丶やかな理論的對立を有しつ丶も、努めて實踐的の對立をさけつ丶、むしろ前者に追隨しつ丶、勞働農民黨の活動に協力し、以つて他團體に對立してゐた。しかるに今や『マルクス主義——無產者新聞』の指導勢力が、急

轉換を行はんとして、しかも敢行し得ざる弱點を暴露したとき、『大衆』及び山川、堺氏の指導勢力は、猪俣氏等の有力者を加へて、雜誌『勞農』に結合した。この『勞農』を中心とする勢力は、『マルクス主義——無産者新聞』の指導勢力の如く、勞農黨及び同系統諸團體内部の結社的組織網を有しないが、ルーズなフラクション組織を以つて勞農黨、評議會、日本農民組合の所謂反福本主義要素を糾合して勞農黨内部に舊來の中心指導勢力に對して一大指導勢力を形成しつゝある。

そして同時にこの勢力は、今や福本主義に攻撃を集中して進出しつゝある日勞黨の大衆を間接的支援力として有してゐる。

勞働農民黨に於けるこの二大指導勢力の對立——『マルクス主義＝無産者新聞』と『勞農』の對立＝名乘りをあげてる人で云へば、福本和夫、佐野文夫、是枝恭二、淺野晃、佐野學、徳田球一、志賀義雄、村山藤四郎、長尾有、渡邊政之輔、鍋山貞親、杉浦啓一、水野成夫、中野尚夫、難波英夫、岡崎一夫等の諸氏と、堺利彦、山川均、猪俣津南雄、荒畑寒村、鈴木茂三郎、大森義太郎、根津友次郎、鄕田要助、本田彌夫、米村貞次郎、中村新作、北浦千太郎、青野季吉、福島一郎、中澤鑑の諸氏との對立。

この左翼の二對立點の對立的理論鬪爭は、『勞農』が僅かに二號を出したのみであるが頁に火花を散らしてゐる。理論鬪爭の中心は現段階の分析と戰略と戰術の問題、指導勢力の問題、所謂福本主義の清算の問題、戰線統一の問題を中心としてである。『勞農』の攻勢に對し『マルクス主義＝無産者新聞』より未だ明確なる對立答辯を聞いてゐないが、同派も既往の指導原理なる福本主義に對しては、その誤謬を認めてゐるが、たゞ勞働農民黨の一切の組織を活動せしめてゐる原動力なる組織點の故に、その清算と轉換に甚だしく苦心してゐるが如くである。

はしがきが餘り長くなつたが、本稿の目的はこの『無産階級陣營に於ける左翼の二對立』の歴史的發展と、その對立理論の要點を紹介するにある。筆者は無産政黨の一ランク・エンド・ファイルではあるが、この對立の圏外にある第三者であり、且つ本誌の編輯者から『絶對に批判をさけた興味深い讀物』といふ依命通告に從つて、凡てを平面的に記述して見る。日本の勞働運動の發展とその指導勢力の變轉と理論鬪爭の展開を鳥瞰的に記述してゆく中に、この左翼の二對立——勞農黨内の指導勢力の二對立が、自ら描き出されるであらう。

二　社會主義同盟より勞働農民黨の結成まで

左翼指導勢力の變遷と發達の歴史を描くためには、筆を大正九年の日本社會主義同盟の結成まで遡らせねばならぬ。

明治三十年代より起つた平民社を中心とする無産者運動は、未だ無産階級が階級的成熟を遂げてゐなかつたので、大衆を背後に有せぬ先驅者の、勇ましき犧牲に富んだ志士的運動であつた。故に明治四十一年の大逆事件以後の、、によつて全くその後を斷つが如く窒息させら

れて了つた。今日の勞働運動の直接の起原は大正年代である。大正の時代に入るに從つて日本の資本主義も成熟し、それに相應して無產階級として、成熟して來た。大正元年には總同盟の前身なる友愛會が組織された。大正六、七、八年の歐洲戰爭に入るとともに、日本の資本主義は飛躍的發展を遂げ、同時にプロレタリアートが大量的に形成されて來て、勞資の階級戰は强烈な色彩を帶びつゝ展開されて來た。大正八年に總同盟は三萬の會員を數へ、その他無數の勞働組合が組織された。それ等の指導精神は大衆の自然發生的思想なる溫和な組合主義たることは勿論である。これ等の勞働組合の外に無產階級の陣營には、一方に平民社以來の堺、山川、大杉、荒畑等の諸氏の社會主義勢力があり、他方には、階級戰の接迫と共に人生觀に一大變革を起し、自己の階級を脫して、本來の主人なるべきプロレタリアートの陣營に投じた、資本家的智識階級出の學生の社會主義團體（帝大の新人會、早大の建設者同盟及び曉民會等）があつた。この兩者は大衆の自然發生的思想なる組合主義の最極端なるアナキスト的サンヂカリズムの中にあつた。これ等の三つの勢力は、各數多の團體に分立してゐたが、これを一つの大同團結的勢力に結合したものが大正九年の日本社會主義同盟であつた。社會主義同盟は、極めてルーズな結合であつてその內部に一切の反資本主義的要素と傾向を包擁してゐた。しかし見のがされないのは、この社會主義同盟を契機として社會主義團及び學生思想團體が勞働組合と接合し、知識分子が大衆と結合したことである。今日の凡ての左翼勢力は直接にこの社會主義同盟のプールから、出發したのであつた。

ロシヤのボリセビキ革命の影響をうけて、社會主義同盟の指導分子の間に共產主義的思想が擡頭し、これと在來のアナキスト的サンジカリズムを固執せんとする者との間に對立を生じて來た。指導分子間の對立は漸次に大衆の間の對立となつて來た。卽ち堺、山川、荒畑の諸氏を中心とし、一切の學生思想團體の指導（新人會の赤松氏、建設者同盟の和田氏、曉民會の高津氏）と總同盟を一方とし、大杉氏を中心とし機械聯合（今日の總聯合關東聯合會）及び印刷工聯合會を他とする對立がそれである。社會主義同盟はこの『ボル』と『アナ』の對立鬪爭の中に、解散を命ぜられて了つた。

社會主義同盟解散後、ボル派は『社會主義研究』『前衞』を機關とし、アナ派は『勞働運動』を機關として兩者は熾烈なる理論鬪爭を展開して、各々陣營の大衆をアジテートした。この兩派の大衆衝突は大正十一年、大阪に於ける全國總聯合會議の決裂であつて、此れ以後、全くボル派が日本の全勞働運動の指導權を獲得した。

當時のボル派は全體として、アナ派に對立してはゐたが、その內部には何等の統一的主體を有しなかつた。大森の山川氏を中心に水曜會あり、麴町の堺氏を中心にエル・エム會あり、帝大には新人會、早大系に建設者同盟、曉民會あり、總同盟には赤松、野坂の兩氏を中心とした一團あり、代々木には佐野文夫、青野季吉、市川正一等の新聞記

者を中心とした無產階級社ありと、云つた風であつた。これ等の小指導團體を綜合し、全ボル派の主體的指導勢力として形成されたのが、例の秘密結社日本共產黨であつた。この結社は、前記の諸團體の中心的人物を媒介として結集されて行つた。その加盟者は大正十二年六月に檢擧投獄された二十數名の人々のみでなく、總同盟の、、は勿論その他現在は評議會、組合同盟、日本農民組合、全日本農民組合の指導者なる多數の人々が入つてゐたと云はれてゐる。その結社は個人を中心とした組織過程の故に、かなりその構成要素の中にあつたかに見える。けれども、この結社は大正十一年から十二年の震災に亙る二ヶ年の中に、雜誌『階級戰』による、、、、、、、、過激法案反對運動、對露非干渉運動等の組織による大衆のアジテートの上に大なる功績を有したものである。この結社の指導精神は云ふまでもなく、、、、ではあるが、しかし依然としてサンジカリズムの傾向が强く、今日から見れば實に笑止なことではあるが、大衆的政治運動及び公然の政黨の結成に就しては、熱意がないばかりでなく、むしろ反對の態度をとつてゐた。内部にあつて政治行動（政治運動と云はず政治行動と云つてゐた）を理論的に主張してゐたのは、米國歸りの猪俣氏位のもので、佐野學氏は『普選有害論』を抱いてゐた。「ロシア遊歷」から歸つた人には、その歸朝の當時は『普選運動』や『政黨組織』を主張してゐたが、幾日ならずして『棄權論者』『普選撤廢論者』となつてゐた。これは内部の意見ばかりでなく、その綱領の變革にてはあつたが、指導下にあつた多くの組合大衆の意見でもあつた。このときに山川均氏が有名な『方向轉換論』を宣言したのであつた。それは當時の情勢上、當時の指導者と大衆に受入れられる最大限の政治的轉向を意味するものゝ如くである。

『吾々の第一歩は無產階級の最後の目標を見極めることであつた。吾々はこれを見極めた。吾々は思想的に徹底し純化した。……そこで吾々の第二歩に於いては、この目標と思想との上に立ちつゝ大衆を動かすことを學ばねばならぬ。そして大衆を動かす唯だ唯一の道は吾々の當面の運動が大衆の要求に觸れてゐることである。……これが爲めには、吾々はあれもつまらぬ之もつまらぬといふ消極的、回避的、懷疑的態度を棄てゝ積極的、戰鬪的、實際的とならねばならぬ。』

『資本家階級の政治的權力が、經濟上の支配を凝集し綜合したものであるやうに、勞働者と農民の解放の鬪ひは、部分部分として見れば、經濟上の鬪爭であるが、これを綜合したものは政治的の鬪爭である。勞働者が賃銀一錢の增加のために鬪ひ、農民が小作料二割の輕減を要求して鬪ふのは經濟上の鬪爭である。けれども此の經濟的鬪爭の最後の目的——搾取制度の撤廢——は政治的の目的である。無產階級の解放運動は、これを部分々々として見れば、經濟的の鬪爭であつて、これを綜合して見れば政治的の鬪爭に外ならぬ（大正十一年八月、前衞）』

この時期に經濟鬪爭より政治鬪爭への轉換を見る意味に於いて

は十分に含んでゐたが、しかし直接には當時の指導者の思想傾向的な觀念的な氣分革命主義と政治行動否定とに對して運動の大衆化を以つて闘爭を宣したものであつた。この方向轉換論は、結社の内部は勿論、當時の左翼諸組合の大衆間の約半歳に亘る激烈な討論を呼び起こしたが、その過程に於いてサンジカリズムの殘存的傾向は甚だしく克服され、大正十二年の春に於いては、合法的大衆政黨組織の準備かこの結社を中心にして、企圖されつゝあつた。しかしこの企圖も同年六月の『共産狩り』によつて實現することが出來なくなつて了つた。『曉の手入れ』のために多くの人々が奪はれたのみでなく、この事件によつて總同盟等の諸組合を動かすことが六かしくなつたからであつた。

同年九月には大震災があり、凡ての無産階級の活動はこの天災とそれに附隨して起こされた流言と彈壓の中に癱瘓して了つた。

震災後に、結社の殘黨は山本内閣の普選案提出の聲明と共に一般大衆の政治運動への轉向の傾向を利用し、促進し、政治研究會の組織準備に迄成功した。同年十二月結社の入獄者は、保釋になつたが、疲勞と混亂は遂にこの結社を解體に導いた。其後しばらくの間、主體なき左翼運動がつゞけらるゝに到つた。十三年の春に左翼の指導下にあつた機械工組合、時計工組合、南葛合同勞働組合、出版從業員組合等の小組合が總同盟に加入し、總同盟内の左翼分子と結合して、總同盟幹部によつて蹴散らされた、組合内の左翼運動を開始した。十三年の總同盟の大會は、かの現實主義の宣言を決定し議會運動に乘り出すの決意を示して來た。

主體のない運動ではあつたが、佐野文夫、青野、徳田、野坂、渡邊、杉浦、北浦、田所等の諸氏が、堺氏や山川氏を相談相手にして、、、、、一般論の說教にとび廻つてゐた。この勢力は組織でも何んでもなく、雜誌『マルクス主義』をとりまく一グループに過ぎなかつた。從つて『見透し』もなければ、戰略、戰術もなく、ナイーヴで、右翼の幹部に煽らるゝがまゝに對立闘爭を激してゐた。同年秋の總同盟關東同盟大會に於いて左翼組合の代議員の退場問題を引起し、このために渡邊、杉浦等の諸氏が除名されて、總同盟内に別に關東地方評議會を組織するに到つた。これは勿論、十三年度大會の現實主義宣言について、現實の名の下に階級協調に赴かんとする總同盟幹部派と、現實的闘爭によつて大衆を高度の意識に引上げんとする左派との對立の表現ではある、が、退場問題を引起すが如きは、ナイーヴの左翼の陷り易い戰術的過失――極左的對立主義であつた。この問題は更らに、十四年度の總同盟大會に持越され、こゝでついに全國的の左右の對立となり、遂に分裂を見て、評議會が左翼組合として形成された。

評議會の形成と共に、左翼の全勢力は、評議會に集中された。即ち評議會の指導分子を以つて左翼の指導勢力が漸次に形成されつゝあつた。唯右翼團體よりの分離と脱退に反對し、右翼團體の内部に左翼の指導勢力を形成すべきであると主張する田所氏等はこの指導部の圏

外に去つたが、それでも凡てがルーズであるので、全體が評議會の活動に協力してゐた。

かゝる中に亡命中の荒畑、佐野の兩氏が歸國し、左翼指導勢力形成の問題が擡頭して來たが、有力なものは形成されなかつた。唯震災後、學校內の運動に沒頭してゐた學生社會科學聯合會が、この頃になつて漸く巷に出で、評議會の活動に參加し、左翼に一勢力を加へて來た。かくて左翼運動は、佐野、野坂、德田、荒畑、北浦の諸氏及び評議會の杉浦、渡邊、鍋山の諸氏を中心とし、その他在來の人々及び學生思想家はその援護部隊とし、また『無產者新聞』を言論機關とし、評議會を大衆組織として組織されてゐた。堺山川の諸氏は援助者であり、有力なる猪俣氏は『日本資本主義の研究』のために、野坂氏の主宰する『產業勞働調査所』に立籠つてゐた。

左翼の陣營がかゝる小規模な組織にあるとき、無產政黨組織運動は形成せられたのである。卽ち十四年六月に日本農民組合は政黨組織準備協議會組織の提唱が行はれ、八月協議會が成立した。九月に綱領規約審査委員會が開かれたが、評議會代表渡邊氏及び政治研究會代表と、總同盟代表との間に、原則上の問題について討論が行はれ決裂を思はしめたが、評議會は代表を中村氏に更へ讓步をなして成立したが、十二月の結黨前日に於いて總同盟は、當時の神奈川縣川崎の爭議に於ける、評議會の對立鬪爭を口實として脫退した。よつて評議會も脫退を餘儀なくされ、黨は農民勞働黨として結黨されたが、三時間にして解散された。

この解散後、左翼陣營に於いてはこの政黨組織過程の批判が盛んに行はれた。その一つの現れは、田所氏の十五年一月の雜誌『無產階級』に於ける『統一主義と分裂主義の鬪爭』なる論文である。同論文の要點は、左翼の右翼に對する對立鬪爭に反對し、『內からの攻擊』なる特殊文字を用ゐて、喰ひ下り、喰ひ込み、戰術的退却を主張してゐた。これに對し北浦氏は『マルクス主義』に於いて『日和見主義』の立札を立てたが、論爭は田所氏の下獄によつてそのまゝとなつた。しかし對立鬪爭を事とし勝ちなナイーヴな左翼指導勢力も、理論的には少くとも對立鬪爭を合理化せず、第一次政黨組織過程に就いても、『技術上の錯誤』として承認し、第二次政黨組織に到るまで、常に『退却的姿勢』をとつてゐた。

第二次政黨組織運動は十五年の一月から始められ、三月に勞働農民黨が結黨された。評議會、大衆敎育同盟（政治研究會の後身）靑年同盟の三團體は構成から除外され、その加入の可否の決定は第二回中央執行委員會迄持越された。

左翼諸團體が、かくの如く黨の構成から除外されたけれども、日本農民組合の山梨聯合會その他が、總同盟幹部の煽動によつて、脫退し、全日本農民組合同盟を組織するに及んで、日本農民組合內部に反總同盟の傾向が擡頭し、この傾向は日本農民組合をして著しく評議會に近かしめた。この機會に於いて、左翼指導勢力は、學生運動から

生産されたインテリゲンチュアの多數を日本農民組合内に展開せしめ、且つ週刊無産者新聞の感化力は、評議會と日本農民組合の多數とを、左翼勢力に持ち來つた。

三　勞働農民黨の分裂

以上に述べたやうに、勞働農民黨結黨當初に於ける左翼指導勢力は荒畑、佐野、德田、北浦の諸氏、評議會の指導者、學生運動出身の多數のインテリゲンチュアによつて構成され評議會と日本農民組合をその影響下にをいてゐた。

こゝに福本和夫なる人物が現はれてくる。

福本和夫氏は大正八年の東京帝大出身で松江高等學校の教授であつたが後獨逸に留學した。彼が獨逸にあるとき恰も獨逸共産黨はルカチ、コルシュ等の理論的指導者の方法論全盛時代であつた。この感化を多分に受けられたであらう所の福本氏は、十三年に歸朝し、早速、福田博士、河上博士等のマルクス學説を批判して『吾國マルクス主義者の有產者的立場の止揚』なる長大論を書きあげ、これを某書店に持込んだが、その書店主人の斡旋でその論文が『マルクス主義』に連載し始められた。その獨逸語の直譯的な論法と、新造語に滿ちた文章とは最初は唯々怪奇の目で眺めらるゝのみであつたが、しかし吾國の在來の社會主義的理論に全々缺除してゐた哲學的要素――唯物辯證法と方法論を高唱してゆく後は天馬行空の慨があつた。これは眞先に學生思想分子を捕へた。從つて左翼指導勢力の内部にも影響されて來た。

福田、河上、高田の諸博士を切り伏せた福本氏は、題目を組織問題に說き及ぼして來た。十四年十月の『マルクス主義』に於いて、氏は『無產者結合に關するマルクス的原理』として、今日問題になつてゐる『結合の前の分離の法則』の理論を政黨結成問題を扱ひつゝ、展開してゐる。曰く――

『マルクス主義の理論と經驗は答へていふ――一旦自らを強く結晶するためには「結合する前に先づきれいに分離せねばならぬ」。

『人は「結合」といふ當面の必要に全注意を奪はれて、「分離」の必要を忘却しがちであるのみならず、二者の連關に關するマルクス的原理を容易に理解しえないから。

『當面の一大結合形成の前に、しからば、いかなる道行を經へ、いかなる程度に於いて、今マルクス的黨の、マルクス的勞働團體の核心。マルクス主義は結成せられてゐるか。また結成せらるべきか。』

こゝで、氏は社會主義同盟より共產黨事件を經て全國單一政黨に到る道行、總同盟の分裂による評議會の成立を經て全國的總聯合に到る道行、及び『マルクス主義』の旗の下に戰はれつゝある理論鬪爭の三つの點をあげてそれぞれの分裂の必然と對立鬪爭を說いてつゞける。――

『私達は以上考察し來つて、吾が無產者運動を通して一脈の力――マルクス的政黨の、勞働團體の、核心、マルクス主義――が脈うつてゐ

るを豫見した

『吾々は全國的一大結合の中にあつて、この力をいかに、いかし、滲め、滲透せしめ、展開せしめるかの道を知らねばならぬ。

『そしてその道とは、所謂結合に關するマルクス的原理に外ならぬ。

『單なる意見の相違——同一傾向內の——と見えたところのものを組織問題にまで、從つて單に精神的鬪爭に止まりしものを政治的戰術的鬪爭にまで展開しなければならぬ。

『第一に吾々は先づマルクス的要素を分離し、結晶しなければならぬ。第二に、この原則を戰ひとるための鬪爭は當分理論鬪爭の範圍內に制限せられざるを得ぬ。

『我が無產階級はその發展の必然により、今や所謂方向轉換期にある。『方向轉換道程は組織過程中の一過程より他の一過程への過渡である』(十四年十月マルクス主義)

この福本氏の所謂『結合の前の分離の法則』は、即ち來るべき政黨組織過程に於いて、マルクス主義要素は、一度分離して對立鬪爭によつて自らを強く結晶し、大衆の意識をマルクス主義にまで高め、しかる後に展開滲透することを豫圖し、その手段はしばらくの間、意識鬪爭——理論鬪爭の限界に限るといふのである。この豫圖の中に、出現すべき左翼政黨(勞働農民黨)にマルクス政黨即ち前衞黨(諸國の共產黨)を解消するの意圖と、組織的對立鬪爭の展開の『必然』を豫想してゐる。何よりも氏の闊大な將來の展開の見透しを持つ意見と、過**去の凡ての分裂を『必然』であるとの論證は、當時のナイーヴな左翼**指導勢力の人々を把えた。またインテリゲンチュアに對する氏の意見は『何を爲すべきか』を引用して勞働者は工場といふ經濟過程にせばまれてその見解が部分的であるが、インテリゲンチュアはその生活條件の結果、視野が全面的である。このことは痛くインテリゲンチュアを刺戟し、同分子を多數に含む指導勢力に影響した。十五年春、荒畑、佐野、德田、渡邊の諸氏が下獄と共に、福本氏は先づ『無產者新聞主筆』として迎へられた。福本氏は山口高商の敎職を投げうつて東上したが、主筆とはならなかつたやうであるが、今や左翼指導勢力の中心指導者となつた。『無產者新聞——マルクス主義』の全誌は『發展は對立の鬪爭である』といふスローガンの下に、明確果敢な理論的對立鬪爭を開始した。

赤松克麿、河野密の兩氏の「組合主義」との鬪爭で火蓋が切られたが、これは總同盟の分裂によつて組織的對立鬪爭が展開されてゐるといふので、餘り主力を用ゐられなかつたやうである。最も主力を用ゐて全指導勢力があげてぶつかつたのは、山川氏の『方向轉換論』の止揚であつた。山川氏の意見を折衷主義と呼び、これとの理論的對立鬪爭によつてのみ、左翼大衆が、眞實のマルクス主義的意識にまで高めらるゝのであるといふのであつた。即ち福本氏は『マルクス主義』の二月號に『山川氏の方向轉換の轉換より始めざるべからず』との論文を發表して以來約一年は、山川氏の凡ての言說を批判の對象として、

淺野晃、水野成夫、志賀義雄、中野尚夫の諸氏が轡をそろへて肉迫した。山川氏は全々これ等に答へず、進んで自己の意見のみを主張してゐた。この論客にもあるまじき山川氏の態度は、一世の不可思議とした所であるが、山川氏は、福本氏の主張が最早や個人の主張でなく、一つの左翼指導勢力の指導的意見であるとき、これに對抗するためには、一つの組織を有せねばならず、取つて代るべき階級的義務がある。然るに後者を缺くが故に、應戰して、徒らに陣營を混亂せしめずといふのであつた相である。この山川氏の態度に對し指導勢力は『理論鬪爭の回避と無關心』を痛擊した。

その方向轉換の論旨は大要次の如くである。

『我が無產階級はその發展の必然により、今やその運動の「方向を轉換」しつゝある。即ち簡單に云ふならば、所謂經濟鬪爭（組合主義的鬪爭――組合主義的政治行動をもふくめて）――から政治鬪爭（社會主義的政治鬪爭）への發展過程――轉換過程にある』（福本氏）

何故に社會主義的政治鬪爭への轉換か？　こゝに左翼指導勢力の現段階論と鬪爭の目標がある――

『この歷史的發展段階に於いて、吾が無產階級は、いかなる社會的地位――狀勢の下にあるか。簡單にいへば次の如くである。（一）日本のブルジョアジーは未だ所謂絕對的、專制的勢力を打破し切つてゐない。（二）しかも我が資本主義は今や世界資本主義と共に現實に沒落の過程にある。「資本主義の最後の段階としての帝國主義」は、今や吾國にだいても亦強烈に沒落の過程を辿りつゝある。（三）我が無產階級はかゝる形勢の下に、而かも始めて政治的鬪爭の舞臺に上り來つたのである。』（福本氏）

よつて山川氏の轉換論を次の如く批判する――

『山川氏は今日共產主義的見地に立つてゐることは固より疑はない。だが氏の認識論的方法論的根本見地は必ずしも唯物辯證法的――マルクス主義的――ではない。否、俗學主義とマルクス主義との混合であり折衷である。從つて實行的、政治的方面に於ける氏の所論も亦必然に混合物であり、折衷物である。かくて氏の提唱せる所の方向轉換も亦、私の見る所によれば、眞當に我が無產階級の戰ひとらんとする所の方向轉換でなくして、かゝる轉換と組合主義者の希求する所の轉換との混合であり折衷である。……山川氏は政治鬪爭を以つて經濟的鬪爭の延長乃至は綜合と考へてゐる。山川氏は經濟鬪爭、組合主義的政治行動、社會主義的政治行動の間の關係を十分に認識せられない。凡てをズルズルベッタリに考へられてゐる。故に混合であり折衷である』（福本氏）

一方勞働農民黨四月の第二回中央委員會には左翼三團體に門戶を開放したが、第三回中央委員會は門戶閉鎖を行つた。

この間にあつて十五年の一月から發行されてゐた雜誌『大衆』に於いては、鈴木茂三郎、大森義太郎、黑田壽夫、中村義明、淺沼稻次郎の諸氏がこの左翼の指導勢力に對して批判的態度をとつてゐたが門

戸閉鎖と右翼結成に當面して、左翼の活動を有効にするために、自治會、日本農民組合、機械聯合等の中間派の左翼結成を提唱した。これに對し指導勢力は、雜誌『マルクス主義』十月を以つて『「大衆」批判號』となし『戰線の統一と整理』の前に對立闘爭によつて略取するのみと宣し、また山川氏も中間派左翼結成は左翼に對立物を造る故に、大左翼結成をなすべしと主張した。この論爭は大して發展はしなかつた。

勞農黨の門戸閉鎖について、左翼指導勢力の指揮下に評議會、日本農民組合は進出を開始した。これに對し、山川氏は『左翼の全線的進出』と云つたが、指導勢力は『組合主義及び折衷主義との理論的對立闘爭によつて、自らを全無産階級的政治行動意識にまで、マルクス主義にまで高めた左翼は、今や全線的に展開するのだ』とむくいた。

かくて十月二十四日の勞農黨中央委員會に於いて勞働農民黨は分裂して了つた。その結果、さきに日本農民組合を脱退した山梨聯合會を中心にする全日本農民組合同盟は日本農民黨を、更らに總同盟は小ブルジョア分子と共に社會民衆黨を組織した。この社會民衆黨に反對する總同盟左翼と、左翼指導勢力に服せざる日本農民組合の右翼分子とは互に脫して組合同盟と全日本農民組合を作り、これに中間諸團體を入れて日本勞農黨を結成した。勞働農民黨は評議會と日本農民組合によつて構成され、左翼指導勢力下にある完全な活動機關となり、『マルクス主義』『無産者新聞』は僅に勞働農民黨を防衞して、他黨と對立闘爭を專任する機關となつた。

四　『勞農』の結成

かくして左翼指導勢力は、勞働農民黨及び同系統の勞農組合の內に沈潛し、これをその對立諸團體との對立闘爭を行つて、マルクス主義黨を結晶せしめるの企圖の實行に入る。從つて實際の合同には戰術上反對せざるを得ない。十五年の暮に日本勞農黨が結黨したとき、山川氏は『即時合同』を主張したが、指導勢力は折衷主義合同論として反對し、對立闘爭によつて大衆をとるべしと主張し、『日勞黨の指導精神の變更されざる限り合同に反對す』と大會をして決定せしめた。指導勢力中の北浦氏は、勞農、日勞の無條件合同を主張したことによつて反對され、指導勢力を去つて、『改造』誌上で『福本イズム』を攻擊し始めた。この頃共產黨被告は續々出獄して來た。德田、渡邊、杉浦氏等の左翼指導者は、過去の分裂の合理化の故にこの指導勢力に贊し、田所氏は一本調子の故に『それでは反對黨に入つて對立主義を克服してやらう』とドン・キホーテ式に日勞黨に入つた。荒畑氏は『分裂主義に反對なり』として協働を拒絕した。佐野學氏は宙ブラリンをきめた。一時は九州にかへつて考慮し、また或時は堺氏と共同して福本主義の淸算に努力せんとしたが、人のいゝ性か、ズルズルベッタリに福本氏の意見に追隨して今日に到つた。その態度の不明確なだけ便宜を得たのか、今や第一線に立つて『福本主義の淸算』に努力してゐる。

左翼指導勢力は、かくて勞農黨を對立闘爭によつて前衛黨にまで高めんとし、諸黨に對しては『幹部を排して大衆を奪取する』といふ對立闘爭的協同戰線を持ちかけ、日本の資本主義の現段階は『强烈なる沒落過程にある』。經濟は國家資本主義トラストの獨占にあり、政治は『金融資本家と絶對專制主義の抱合』にある。故に勞農黨は闘爭目標を絶對專制主義にをき、『凡ての人民に自由を與へよ』をスローガンとして『ブルジョア民主主義の獲得』のために闘爭せねばと規定した。この理論上の簡單明瞭の故に左翼大衆の心の奥にグングン喰ひ込んで行つた。評議會、日本農民組合の大會においても『發展は對立の闘爭である』として、一切の分裂の必然を高唱し他團體の排撃を決議し、凡てのストライキにおいても、政治的意識の昂揚を目的とし、對團體の對立闘爭を主眼として行はれて、殊にこの對立闘爭の顯著な例は府縣會選擧においてであつた。左翼指導勢力は勞働農民黨をマルクス主義黨と規定するが故に、當然に日勞黨を組合主義政黨、社民黨及び日農黨をファシスト的小ブルジョア黨と規定せざるを得ぬ。よつて革新黨とは協力するも、社民、日農は絶對に排撃し、日勞黨には對立候補を立てゝ大衆を奪取するといふ選擧協定を以つて行つた。かくして對立闘爭の繼續の中に昭和二年の暮に近いた。

一方、所謂折衷主義者側に於いては、昭和二年の五月に堺利彦氏が『勞農、日勞の無條件合同』を提唱したが指導勢力からは『その無力を暴露することによつて、完全に大衆の支持を失つた公式社會主義者僭稱家は、かくて今や群小黨の最惡のデマゴクとして現はれた』と罵倒され終つた。七月には『大衆』が自己批判を行つて中間左翼論を撤回して山川氏の大左翼結成を受入れた。八月の改造社の『社會科學』には河野、田所、阪本、北浦、山川、荒畑の所謂折衷派の諸氏が、筆をそろへて、福本氏の意見に攻勢を張つた。殊に山川氏が、この時始めて一年有半の攻撃に對して答辯を試みてゐる――『大正十一年の方向轉換が、經濟闘爭の「揚棄」と純粹單純な「全無産階級的政治闘爭意識」を「戰ひとる」運動でなかつたことを見て、そのマルクス主義的性質を疑ふ人々がある。これは時間を超越した生物、したがつてまた無産階級運動をその發展の過程に於いて「把握する」機能を備えぬ人人にとつては全く無理からぬ疑問である』(理論闘爭號)

この時長き日本資本主義の研究ををはり、現段階の分析に一先づ成功した猪俣津南雄氏は、在來ともに『全政黨の統一』を『世界』その他で主張しながらも、努めて指導勢力との對立をさけてゐたが、遂に『太陽』十一月號に於いて指導勢力に對して宣戰した。即ち日本の資本主義の現段階は『强烈な沒落の過程』でなく『安定』にある。資本主義は上向してゐる。經濟は國家資本主義的トラスト化への過程にある。政治は『金融資本家と絶對專制主義の抱合』にあらずして、絶對專制主義は金融資本家によつて克服され終り、今はイデオロギーとしてのみ殘存する。從つて政治闘爭の目標は絶對專制勢力でなくて、帝國主義ブルジョアジーそのものである。凡ての政黨は無條件で合同せ

よ——これが氏の論文の大要である。卽ちそれは左翼指導勢力の意見——福本氏の意見と鋭く對立する。この猪俣氏の意見は、『大衆』及び山川氏等にも受けられ、今や『勞農』の指導意見となつてゐる。

かくの如く『合同論』が、理論として有力になるばかりでなく、府縣會選擧後の大衆の要求ともなつたが、左翼指導勢力は、この合同論に對立すべく『マルクス主義』十月號を『無條件合同批判號』として、合同反對論を高唱したけれども、こゝに突如として第三インタナショナルの左翼指導勢力に對する批判が、しかも折衷派の機關『大衆』及び『文藝戰線』に於いて公表された。これまた凡ての點に於いて福本氏の意見と對立するものである。

『日本資本主義の發達は、アメリカのそれと著しく相異した歷史的條件がある。だが日本はアメリカと同樣に第一流の帝國主義的强國である。日本はアメリカと同樣に更らに昇騰しつゝある資本主義强國である』(現段階論に)

『日本に於けるブルジョアー民主的××は日本のブルジョアーに對抗することによつてのみ成功するであらう。支那と同一視することは誤りである。』(絕對專制主義論に)

『その一つは勞働運動に於ける×××の××的役割を過少評價に導き、勞働者、農民の組織體の中に×××を融合する傾向で、左翼勞働組合と勞働農民黨を以つて×××黨に置き換へんとする』(前衛黨と大衆黨の問題)

『特に×××××は大衆から分離し、しかもその首腦に尖端のインテリゲンチュアをもつてゐる危險である。この斜面の主なる罪過は、黨の宗派的教理を說くにある。卽ち黨は『マルクス思想同人の實現』であるといふ教理を、『統一か分離か』の理論を說く。(この理論によれば黨の建設のためには多數の無產黨の分裂が必要だ)。これは實踐上では統一戰線の拒否となり、現在の勞働者の組織より遊離することを示してゐる』(結合の前の分離論に)

これを手にした日本勞農黨の機關紙は『宗派的分裂主義の打倒』を全面にかゝげて肉迫し、その中にはこんなジアーナリスト的な記事さへある——『インタナショナルは早くもこの小兒病的指導精神の存在を知つて代表者をモスコーに招致し、これをやつつけ、インタナショルは福本主義に反對なることを日本の大衆に告げるためにこの決議を發表した』しかも日勞黨はこの攻擊の絕頂に於いて『宗派的分裂主義の排除』の單一絕對條件として、全政黨に合同を申込み、遂に勞農黨をして合同拒絕を餘儀なくせしめ、農民黨と合同を約するに到つた。殊にインタナショナルのテーゼに及びそれに關する日勞黨の攻擊に對しては『マルクス主義』『無產者新聞』は完全に沈默を守つてゐた。

雜誌『勞農』は猪俣氏の意見、このテーゼの精神に從ひ次の如きスローガンをかゝげて左翼指導勢力に『宗派分裂主義の淸算』を迫つてゐる——正しき左翼意識の確立へ！　正しき左翼戰術の展開へ！　政治的統一戰線の形成へ！　組合運動の全國的統一へ！　宗派的分裂主義との鬪

爭へ！」

左翼指導勢力の內部は大混亂を呈したかの如くである。勞働農民黨大會は、自己精算を行はずに押し切り、その後先づ無產者新聞が『前衛黨と大衆黨と錯誤』と『對立鬪爭を排して合同に向ふ』との自己清算を始め、且つ新聞を勞農黨擁護から全階級の機關たらしめると宣言し、一方『マルクス主義』には、比較的福本氏の意見を高唱しなかつた佐野學氏や、論文を發表しなかつた渡邊政之輔氏、鍋山貞親氏等の言說を掲げて、以つて所謂福本主義の淸算を始めた。しかし淸算するにも『勞農』といふ攻擊力があるので、思ひのまゝにいかぬらしく、反擊をつゞけてゐる。そして勞働者を出した所に、『勞農』と『マルクス主義』の對立を、インテリゲンチュアと勞働者の對立とし、或は『マルクス主義』には大衆がついてゐることを表示せんとするが如く、仲々巧妙なる退却戰法ではある。

しかして左翼指導勢力は內部を整理して、凡てを一新し、殊に宗派分裂主義——對立分離主義の恥名を、この總選擧の實踐を通じて一掃しやうとして、日勞黨主唱の選擧協定にも極めて謙譲的に參加したが、しかし過去一年に亘つて大衆によつて戰ひとられた『對立鬪爭』の意識は容易に拔けず、大衆の反抗により、自ら結んだ協定を自ら破壞せねばならなくなり、一層に『勞農』や日勞黨から攻擊を加へられつゝある。

この機會に於いて、『勞農』は全國的に展開せんとしてゐる。未だ書くべきこと多々あるも頁數が豫定を遙かに超えたので『高等ジアーナリズム』の筆をこゝにをく。(二月四日)



再顯

ラフアエル・サバティニ作

牧逸馬譯

1

『さうですな。困りましたな。しかし、皆さんがさう仰言るんでしたら——。』

から迷惑さうにいひながら、主人のジェイムス卿は客の私たちの顔を見渡した。

『御婦人方まで一しよになつてそんなにお聞きになりたいのなら仕方がありません。私もあきらめましたよ。諦めてお話しますがね、前もつて申上げておかなければならないことは、これは決して愉快な物語ではないといふ一事です。』

そこはジェイムス卿邸の宏大な書齋だつた。卿の言葉がちよつと途切れると、みんなが大型暖爐のまはりにぐるりと椅子をすゝめる音がその間隙を滿たしてさわがしく聞えた。戸外はまだ紺灰色の薄明の空から飛沫のやうな雪が渦をなして降りしきつてゐるのが、高い窓ごしに見られた。悲鳴に似た風の音が廣い邸をゆすぶつて過ぎた。が、それら外部の蕭條たる景色は、爐に燃えさかる丸太をかこんだこの暖い室内の小さな集りの上に、一層の愉快さを增すばかりだつた。

ジェイムス卿は、きれいに剃つた赫ら顏と銀色の頭髮に、ちらちらと火の影を躍らせて、何から何う話し出さうかといふやうに、暫くその四角い顋をうづめて考へ込んでゐたが、やがて一同がまはりから急き立てると、おもむろにマアガット小男爵家に傳はる古い因緣ばなしの口を切つたのだつた。

『さうですね。では一つ簡單にお話しませう——一七四五年の降誕祭週のことでした。當時この家には、私の祖母にあたるエヴァンジェリン・マアガット夫人が一人で住んでゐました。それは彼女の良人、つまり私から言へば祖父ですが、その人はずつと前に死んでしまつて、二人の息子もその時はちようどこゝにゐなかつたのです。

もう三日でクリスマスだといふ日に、どこからともなくひとりの男が玄關に立つて、祖母のエヴアンジエリン・マアガツトに强つて面會を申し込みました。そこで祖母が出て見ますと、その男といふのはジヤコビン黨の亡命客で、じつさいその三箇月間ジヨウヂ王の軍隊に狩りたてられて、ひそかにイングランドに潛入して來てゐたものでした。かれも相當の家の出で、若かつた頃にエヴアンジエリン夫人とは相識のあひだでもあり、しかも一時は婚約までした仲だつたさうです。それがさうなつたいま、急に昔の戀人のエヴアンジエリンのことを思ひ出して、プレストンまでは逃げおほせたのですが、何しろ捜査が嚴重で逮捕の危險が身邊に迫つたものですから、彼はエヴアンジエリンの同情ひとつに運命をまかせて、窮鳥となつて其のふところに飛び込んで來たわけでした。

ジヤコビン黨といふのはご存じのとほりスチユワアト王家沒落を支へやうとした志士の一味で、歷史的に正確に言へば、一七一五年と一七四五年とに蹶起して、事實上王家を助けた一黨であります。ですから、ジヤコビン黨に對する政府の壓迫が當時いかに猛烈であつたかは、有名な史學上の事實ですから、皆さんもとくに御承知のことゝ存じます。

反逆者をかばふとなれば、事情はさておき、危險この上もないことです。しかし、涙つぽい感情が動機となつて刺激された場合、女ほど外見に似ず果敢になり得る者もありますまい。祖母は乞はれるがまゝにその亡命者を家に入れて、從兄が泊りに來てゐることにして召使達の前をつくろつておきました。けれども、かういふことはすぐ露見するものです。ことにその男の足跡はすつかり洗はれて、追手の者が踵を踏んでゐたのだからたまりません。ちようど逃げ込んで來た次の日でしたが、エヴアンジエリン夫人と昔の戀人のジヤコビン黨員とが今や晩餐の食卓につかうとしてゐるところへ、赤服を着た兵士の一隊が乘り込んで來て、その場にジヤコビン黨員を押へてしまひました。彼はその夜のうちにプレストンの監獄に送られて幽閉されたのです。

祖母としては、縋られたから助けたまでのことだつたのでせうが、そのジヤコビン黨員は立場が立場だけに、さうはとらなかつたものと見えます。とにかくその男は、以前の戀人のエヴアンジエリンが裏切つてひそかに訴へ出たとでも思つたのか、それとも何かほかに懼れなき理由があつたのか、これは私どもの解釋次第で、もう永久に眞相の判明するときはありませんが、つまり、クリスマスの前の晩に起つた出來ごとといふのはかうです——彼は捕はれた其の晩に看守たちが酒につぱらつて騒いでゐるすきをうかゞつて、プレストンの監獄を脱出したのでした。さうして、夜つぴて山みちを驅け戻つて、曉の光りとともに、エヴアンジエリンの部屋の窓下に立つたのです。そこは外

のすぐ上ですが、彼はこつそり邸内に忍び込んで、じつに残忍にエヴアンジエリン夫人を殺してしまひました。

クリスマスの次の日に、男はランキヤスタアへ引いて往かれて、間もなく絞殺の刑にあひました。話といふのはこれだけです。』

ジエイムス卿が口をつぐむと、聞手の私たちのあひだに一しきりざわめきが渡つた。私はこの話しの結末が、いさゝか期待に反してゐたので、すくなからず抗議を申込むやうなこゝろもちで椅子から乘り出した。

『しかし、後日物語――とでも申しませうか、ジエイムス卿、例の幽靈ばなしですな、その言ひ傳へといふのは一體何うなんですか。』

『デニスンさん、』と卿は私へ向きなほつて、『因縁ばなし――とでも言ひませうか。それはかうなんです。毎年クリスマスの前夜、といふと祖母の殺された晩ですが、ジヤコビン黨の男が、何時からともなく「壁かけの部屋」と呼ばれてゐるエヴアンジエリン夫人の昔の寢室へ窓から忍び込むところが見えるといふのです。そして、室内へ這入つた彼は、昔の慘劇をもう一度そのまゝ繰り返すと言はれてゐます。亡命者の幽靈が祖母の幽靈をむごたらしく殺すところ――それがそつくり再演されるといふ、これはまあ單なる傳說でせうが――。』

私たちが突如恐怖に包まれて黙り込んでゐると、エッヂウォウスがをかしくてたまらないやうにおほつぴらに笑ひ出した。彼だけはこの話にすこしも脅かされてゐなかつた。しかし考へてみるとこれは當然さうあるべきで、一八一〇年に大尉としてリスボンへ上陸し、たつた五年のうちにウオウタロウの大戰後大佐になつて英吉利へ歸つて來るくらゐのエッヂウォウスだから、この勇猛な愛蘭人は大がいのことに驚かないに相違ない。

『もちろんジエイムス卿自身はそんな馬鹿げた昔話に何らの信をおいてゐないことゝ思ひますね。』

大佐エッヂウォウスはかう冷然と言ひ放つて一座を睥睨した。

爐の光りがぼんやりした影を投げて、小男爵ジエイムス卿の顏は、彼じしんこの幽靈ばなしをうけ容れてゐるのかどうか、そこに多分の疑ひを見せてゐた。

『さあ、私にはわかりません。』卿は靜かに言ふ『私はあたまから否定もしなければ、またそのまゝ信じもしません。かういふと甚だ曖昧で無意味に聞えますが、じつさい早く言へば私は何ら證據を摑んでゐないんですから――。』

さうして卿は自分の言葉を幾分和らげるやうにつけ足した。

『證據――といふのはつまり私の眼で見この耳で聞いた現實の現象のことですが、それがない以上、私には嘘とも眞實とも斷定出來ませ

ん。』

『ですけれど、ほかにはその幽靈を見た人も聞いた人もあるんです。』からこのとき口を出したのはジエイムス卿の甥であり嗣子であるフイリップだつた。

2

エッヂウオウス大佐がふたゝび公然と嘲弄をふくんで笑ふと、それに對してジエイムス卿はちよつと不愉快さうに眉をひそめたやうだつたが、すぐに消えた。卿が大佐の輕蔑的な懷疑を喜ばない心もちは眼に見えてゐた。けれど、どつちかといふと私も大佐の說に傾いてゐた。一たいジエイムス卿は何によらず家の誇りといふものを高く持してゐる人で、マアガット家に關することには、よかれあしかれ指一本さされまいとするところがあつた。で、この幽靈も卿の家に絕大な關係がある以上、ほかの人の場合における宗敎的信仰と同じに、假りに同意出來ないまでも卿のまへだけでは相當の敬意をもつて取扱ふべきものだつたかも知れない。『じつは、』と、卿はふたゝび口をひらいて、『三度ほどこんなことがありましたよ。それがいつもクリスマスの早朝でしたが、召使たちが顏色を變へて私を起していふには、「壁かけの部屋」と呼ばれてゐる例のエヴアンジエリン夫人の寢室に、たゞならぬ物音がしたといふ――。』

『たぶん鼠のクリスマス宴會！』

エッヂウオウスが待つてゐたやうにこんな揶揄を飛ばした。が、誰も一しよになつて笑ふものもなく、ジエイムス卿の家政を處理してゐるハンプスン夫人といふ卿の姉にあたる人が穩かに大佐を窘めにかゝつた。

『いゝえ、大佐、そんなことは御座いません。「壁かけの部屋」にはあなたのお考へになるやうに鼠なんかゞ出てさわぐはづはないので御座います。エヴアンジエリンが殺されたのは十八世紀でございますけれど、いまでも何一つ動かさずに昔のまんまに、まるで人が住んでゐるやうにしてあるんでございますもの。』

この時戶が開いて、執事が二人の下男に洋燈と蠟燭を持たして這入つて來た。灯の光りに一座の三人の女たちは救はれたやうに溜息をついた。暗くなりかけた部屋にこの話題がもたらした無氣味な空氣を一掃すべく、燈火と人のすがたが機會的にこの上なく歡迎されたのだつた。

窓のカアテンを引いてそとの荒天を完全に遮斷すると、二人の召使ひたちは來た時と同じやうに音もなく引き取つて行つた。

『でも、ちとどうもへんですね。妙だ。僕にはわからない。』私がはなしを引き戻した。『そんならなぜジェイムス卿は御自分でその僧侶を調査なさらうつていふ氣にならなかつたんでせう？』

卿の赤ら顔に笑ひがひろがつて行つた。

『それはですね――からなんですよ。』と彼は考へ深かさうに『この家の者にとつてはそのジヤコビン黨の幽靈は凶事のさきぶれだと言はれてゐるんです。警告とでも言ひませうか、つまりまあ死期が近いといふ知らせですな。誰でも私の家の者が例の幽靈を見たが最後、そいつはおつつけ死ぬと言はれてゐる。からなると私も考へざるを得ませんよ。私だつて皆さんも知つての通り、まだまだ生きてゐてうんと好きな狩獵でもしてみたいし、とにかくこれでも今死んぢまつちやあ可哀さうですから――。』

卿はちよつといたづらさうに微笑んで顎を撫でた。その樣子が場合に似ず飄輕だつたので、二三の人は押へ切れない笑ひを洩らした。

『それは何とも殘念ですな。』

私が感じたとほり正直に言ふと、卿は不思議さうに私を見返つて、

『殘念――とはまたなぜです？』

『あなたのお話は普通の怪談とはちがふと思つて、私はさつきから內心敬意を表してゐたんですが、それぢやあまるで有りふれた幽靈ばなしと同じぢやありませんか。そんな幽靈なら私も前によくはうばうで聞かされたことがありますよ・一家のうちに幽靈が出て、家族のうちでそれを見たものは、死の近づきつゝあることを知らなければならない――こいつは古い。じつに古いですよ。ジェイムス卿。そこで私は殘念だと言つたんですが、じつさい後日物語がよくない陳腐だ。せつかくながら私はそのジヤコビン黨に何らの信用ももてなくなりました。』この私の言葉は豫期した以上に卿を失望させて、私はいさゝかじぶんのあけすけな言ひ方を後悔しなければならなかつた。すると、エッチウオウス大佐がまた無遠慮に笑ひ出したので、ジェイムス卿は、こんどはすつかり腐り切つてしまつた。婦人たちはそれに同情したものか、一せいに叱りつけるやうな眼つきをして私と大佐を見つめてゐた。

『だつてデニスンさん、ジェイムス卿は何言るのを忘れていらつしやるやうですけれど、』とフイリップの若い妻が話を挾んで、『卿のお父さんはお亡くなりになる前の日に、そのジヤコビン黨の幽靈をごらんになりましたのよ。』

『それは何でもありません。プシイギウルといふ心理學者の說を御覽になると、その間のことは說明できます。簡單にいへば、ジェイムス卿のお父さんは、誰でも家人は死ぬ前にジヤコビン黨の幽靈を見るの

だと堅く信じてゐたので、そこでその通りに見て、そしてそのとほりに死んだまでのことなんです。』

『まあ言はゞ幻影だね。自己催眠的な。』

エッヂウオウス大佐の陽に燒けた顏が私を振り向いた。

『さうなんです。』

と答へながら、私にすばらしい考へが浮び出た。『とにかく、この事實の眞僞をたしかめる機會はまたと來ますまい。考へて見ると今夜はちやうどクリスマスの前夜で、その慘劇の何週年かにあたるわけです。いかゞでせう、私を今夜ひと晩「壁掛けの部屋」へおいてみて下さいませんか。あなたにさへ許して頂ければ――。』

『いゝえ。とんでもないデニスンさん、そんな、そんな馬鹿な!』

卿の姉の家政婦が急に興奮して叫んだ。

『しかし、何故いけませんかね。ハンプスン夫人はなぜそんなに反對なさるんでせう。』私はかう強情に言ひ張つて首をひねつた。『私が進んで見とゞけやうつていふ以上、いゝぢやないですか。私は家族の一員ぢやないから、たとへ幽靈を見たつて死ぬわけはなし、第一、僕は幽靈なんかちつともこわくはない。』

するとジエイムス卿が嚴かに言ひ出した。

『いや、じつにいゝ機會です。こつちからお願ひしても一つ眞僞をみきわめて頂きたいくらゐなんですが、それがその暴露ることには、私は家に傳はる古い話しをそんなふうに解剖したくない。この心もちはあなたにもおわかり下さることゝ思ふが、私にとつてこの幽靈はあくまでも物語の幽靈であり、そしてまた實存の幽靈で、そんなやうな研究の目的物にするには家に對する私の良心が許しません。どうぞそればかりは――。』

言ひかけて卿がちよつと言葉につまると、その機會をつかまへてエッヂウオウスが割り込んできた。

『馬鹿な!』と、彼はほとんど呶鳴るやうに、『ジエイムス卿の仰言りたいことはかうなんでせう。あなたはこの浪漫的な泡をぽつかりと壞してしまひたくない。ね?かういふんでせう?』

エッヂウオウスを見たジエイムス卿の視線には隱出憤りの色が動いた。と、卿はにはかに微笑んで私へ眼をかへした。

『よろしい、デニスンさん。』とゆつくりうなづいて、『が、しかしおひとりではいけません。だれかお仲間がなくちやあ――あ!さうだ、エッヂウオウス君がいゝ。この人は人も惡魔も何ものも恐れない。幽靈といふ言葉を聞いただけで莫迦にして笑ふんですから――。』

『面白い!やりませう。』エッヂウオウスはいきほひこんだ。『ねえデニスン君、ふたりでこの幽靈を狩り出さうぢやあないか。逃らう、やら

う。きつと取つちめて見せる！」

3

女たちとフイリツプはみんな一しよにたつて反對したけれど、ジエイムス卿はエッヂウオウスが自分の家の幽靈を信じないで、やゝもすれば輕蔑しやうとする態度に憤慨して、大佐が私と一しよに問題の部屋に籠ることをしきりにすゝめた。

私たちはおそくまで晩餐の食卓についてゐた。卿の近所の人が二人ほど食事に加はつて、婦人たちが卓子を去つたのち、男ばかりでかなりさかづきの數を重ねた。何と言つても一ばんの左きゝはエッヂウオウスだつた。よく飲みよく馬に乘り、よく喧嘩をするのがエッヂウオウス大佐なのだ。

今夜これから私たちが一しよに手がけやうとしてゐる一大冒險を思ひ出して、私はしきりに大佐に注意したが、彼はいまどき英吉利にゐてこんないゝ酒が飲めるのも誰のおかげだと思ふ、みんな我輩が産地のデユウロ河で英吉利のために大勝を博したためぢやあないか。たとへどんなことがあらうとも我輩がこの酒を飲んではならぬといふ法はない——から言つて威張りつゞけてゐた。

そのうちにわれわれも食堂を出て、寢に就く前に別室に雜談してゐた婦人達に加はつた。そして、かれこれ十一時半だつたが、ジエイムス卿自身が先に立つて私たちを二階の「壁かけの部屋」へ案内した。なが年閉め切りだつたエバンジエリン夫人の寢室に急に私たちのためにあたゝかい支度が出來てゐた。爐には火がかんかん燃えて、丸い桃心木の卓子と二つの肘掛椅子が、這入つたすぐのところに置いてあつた。卓子の上には四つの蠟燭の立つた燭臺と歌留多が一組のせてあつて、私たちがもし徹夜をすることがあつても退屈しないやうにといふ心づくしが見られた。壁にそつたもう一つ卓子に飾瓶と酒とグラスの盆がおいてあるのがこのさい何よりもありがたかつた。

こんなふうに出來るだけ部屋を愉快に作つてあつたにかゝはらず、私はその天井の低い細ながい部屋へ一歩踏みこむと同時に、ぞつと戰慄が走るのを感じた。燃えさかる火と四つの蠟燭の光とが大きな天蓋のついた胡桃材の寢臺に重々しく幽暗な影を投げて壁のはめ板と古い壁掛とがことさらに陰氣な空氣を漂はせてゐた。八十年ほど前の夜に、殺人者が忍び込んだといふ高い窓は、何か色の褪せたカーテンにかくれてゐて、私は部屋へ這入つた瞬間から何者かゞたしかにそのかげに潛んでゐるやうな氣がしてならなかつた。寢臺の枕もとに立つて、ジエイムス卿は巧みに壁にかくされてゐる扉を開けて見せた。か

うして數へられなければそんなところに戸があらうとは私もエッチウオウスも氣がつかなかつたに相違ない。戸の向ふは小さな控室で、この陰慘な寢室に比較して氣もちのいゝ對照をなしてゐた。

白い地へ赤い薔薇の花がとんでゐる壁紙、長椅子と古風な安樂椅子、それに卓子が一つ——それがすつかり小ぎれいな更紗に蔽はれて、小さな火床の火が磨き上げた灰止めに愉快に反射してゐる。卓子の上の洋燈が全體を照らし出して、新鮮を感じ、ラヴエンダアの花のやうなこまやかな香がこの小さな部屋に溢れてゐた。

『こつちのほうがいゝ部屋ですから。』とジエイムス卿はなかを覗きながら、『姉が、もしあなた方がこつちにいらつしやりたいやうならと思つて、同じに用意しておいたさうです。』

『この部屋も何か殺人に關係があるんですか。』

私が訊いた。

『えゝ、ないこともないんです。』卿は微笑んで、『エヴエンジエリンづきの女中といふのが、その時こゝに眠つてゐましてね。主人の叫び聲で目がさめて、寢室のほうへ這入つて來やうとしたんですが、どうしても戸が開かなかつたさうです。』

『しかし、この戸には鍵がないぢやありませんか。』

エッチウオウスが誤謬を指摘するやうな口調で言つた。ジエイムス卿はしづかに、

『えゝ。でも當時はあつたのかも知れません。或ひはまた夫人が戸にもたれて死んでゐたので、いくら押しても開かなかつたのでせう。』

このいやな話しを聞かされても私はこつちの寢室よりは增しだと思つた。

が、エッチウオウスは私とは全然べつに感じてゐるらしく、私と向き合つて寢室の大きな肘掛椅子にどつかと腰を下ろすと、ぴつちりしたづぼんに包まれた足を伸ばして樂々と欠伸した。

『馬鹿馬鹿しいことになつたもんだ。幽靈を見とゞけるなんて、何時までかうして眼をさましてゐられるかわかりやしない。ジエイムス卿の葡萄酒、あいつは猛烈にあたまへ來るよ。』

と自分の眠氣を辯解してゐるうちに、彼はだんだんお國訛りを出して來た。

『例のジヤコビン黨員の幽靈さ。あんまり待たせずに早くでゝ來るといゝなあ。』

そして大聲に笑つた。

その笑ひ聲が天井の窪みに反響して、私はちよつとびくつとした。

エッチウオウスは退屈しのぎに一つエカルテをやらうと言ひ出して俄に骨牌を切り出した。

しかし、私の注意はすこしもカアドの上になかつた。何といふことなしに部屋に一種の氣になる空氣が漂つてゐることは疑ふ餘地のない事實だつた。私は二三度部屋ぢうを見まはしただけで、つとめて恐怖を外部へあらはさないやうにしてゐた。それにもかゝはらず四隅に濃い影がわだかまつてゐて、しきりに動くやうな氣がしたり、さうかと思ふと窓のカアテンの影に何かゞ隱れてゐるやうな强迫觀念から脫し切れないのだ。眼のまへに垂れ下つてゐるカアテンのひだのぐあひが、私の這入つて來た時とちがふやうに思はれてならなかつた。

『もつと明るくすればいゝのに氣がきかないなあ。』私の聲は神經質に響いた。『べつに臆病ぢやあないけれど、あの因緣ばなしを思ひ出すとあんまりいゝ氣もちはしないね。』

　エッチウオウスはしんから可笑しさうにげらげら笑ひ出した。

『そんなら思ひ出さなけりやあいゝぢやないか。僕は君をもつとしつかりした男と思つてゐたが、これで見ると君もあの爺さん連中の馬鹿話しをまんざら眞にうけてゐないこともないんだね。』

　私はだまつて持札を取り上げたが、この部屋とその空氣が私のうへに追々無氣味に働きかけてゐたことは爭はれなかつた。私は上の空でエッチウオウスの相手をして、いたづらにエカルテにかけては自慢のエッチウオウスを苦もなく勝たしたに過ぎなかつた。もう歌留多はよさうと私が言ふと、エッチウオウス大佐は欠伸をして椅子の背に反りかへつた。

『おやおや、こいつはどうも時間の不確かな幽靈だな。』エッチウオウスは吐き出すやうに、『一たい何時まで待たせるんだらう。出るものなら早く出たらいゝぢやあないか。』

4

　ところが！　不思議にもこの言葉に對する反響はすぐにあつた。大佐がかう言ひ終るか終らないに、カアテンの向うに、はつきり三つ窓を叩く音がしたのだ。

　はつと息を吞んで私たちは顏を見合つた。微かな警戒がエッチウオウスの表情を歪めて、私はわたしでからだぢうの皮膚が冷く粟立つた。

『何だい、いまのは？』

とさゝやきながら、私はじぶんの聲を恐しいものに聞いた。

大佐は突つ立つた。いかにも軍人らしい背の高い體格――彼はもう平常にかへつてゐる。

『誰か馬鹿なやつが惡戯をしてるに相違ない――ようし！』

窓棚へ歩み寄つた大佐は、さつきこゝへ來たときそつと載せておいた拳銃を取り上げるが早いか、大股に窓のほうへ進まうとした。その時！　前にもまして大きな物音が一つ、はつきりと窓を鳴らした。

さすがの大佐もどきりとした様子——ちよつと相談的な視線を私へ向けて立ち止つた。そとには激しい風の音が荒れ狂つて、それが渦をまいて吹き込むためであらう、煙突が呻つてゐる。エッヂウォウスは思ひ切つて部屋を突つ切ると、さつと窓のカアテンを開いた。心臓が咽喉へ飛び上つてくるやうな氣がして私は彼について行つた。

大佐の手で窓扉が引かれたかと思ふと、外部の鎧戸があらはれて、素早くその掛金を外しにかゝつた。と、三度、調子の高い音が、今度は焦るやうにつゞけさまにそとから響きわたつた。

急に不安を感じた私は、大佐の腕をつかまへて止めやうとしたが、彼は私を振り切つて蹴るやうに鎧戸を突きあけた。戸はそのまゝ兩側の壁にぶつかつて、そこの押へに引つ掛る。が、何もなかつた。戸外はまつ暗なまゝ——その深い闇をとほしてもうろうと落ちる雪片の影が躍つてゐるばかり、誰かゞ忍んで來ていたづらをしたなどといふ想像はこの際問題にならない。これは大佐も認めたとほり、そんな形跡はすこしもないのだ。立樹はすべて家の周圍から五十呎も離れてゐるので、木の枝が窓にあたつてあんな音を立てたのだとも考へられない。

鎧戸が開いたとき、氷のやうな冷い突風に蠟燭の火は横に靡き、[illegible]の蓋ひが激しく揺れた。そして私はそのあけつ放した窓に、ノックに答へて何か眼に見えない一つの存在があるといふ恐ろしい實感を否定し得なかつた。

いそいで窓を閉めて私を振り返つたエッヂウォウスの顏は幾分蒼ざめてゐた。

『妙だね。うん、實に妙だ。』

と、答へを待つたが、私がだまつてゐるので彼はつゞけて、

『君、何う思ふ？』

『どう思うつて、さあ、わからないね。』

びくびくものであちこち見ながら、私はゆつくり椅子へかへつた。

『あの音——むかしのジャコビン黨員が來たのかも知れない、としか僕には說明出來ないね。』

急に何か冷いものが顏にかゝつて、私はわれを失つて恐怖の叫びを上げた。死人の指が額から顎まで一しよに摑んだやうな氣がしたのだ。

『何だ、どうしたんだ君。』

エッヂウォウスが呶鳴つた。

『何だか——頰を撫でたよ。』

するとエッチウオオウスはぢつと私を見つめてゐたが、たちまち笑ひを捲り上げた。

『雪――君の頭に雪がのつかつて、見給へ、溶けてるぢやないか。馬鹿だな君は。』

から常識的に說明し去つたが、私はまだ何となく安心出來なかつた。そんな物質的な言ひぐさでは解決のつかない何物かゞある。私が椅子へかへつて不安のうちに腰を下ろした刹那、掛金がしつかりかゝつてゐなかつたものとみえて、ぱつと窓が開いたかと思ふと、あつといふ間に蠟燭が消えた。

正直に白狀するが、私はわれながら馬鹿げた大聲を上げた。エッチウオウスは舌打ちをして、爐の光りに描き出された部屋を橫切つて窓を閉めた。そして私が肩息で椅子に蹲踞まつてゐるあひだに、彼は暖爐の火をうつして、一つ一つ蠟燭の火をつけたが、その手はかすかに顫へて、顏もこゝろもち蒼かつた。

『何だ、何だ、デニスン君。しつかりし給へ。君みたいな臆病者に幽靈狩りが出來るもんか。』

その幽靈狩といふのに私は微笑まされた。

『まあ、さう言ふもんぢやあない。』

『だつてそのとほりぢやあないか。要するに何が起つたね？ え？何も起りやあしない。たゞ僕が窓をよく閉めなかつたもんだから、風で開いて蠟燭が消えただけぢやあないか。』と、彼はまた形而下的な說明を下して得々としてゐる。しかし私は依然として彼の態度に不服だつた。成程さうには違ひないが、私はそれよりも何かしら超自然的な力が自然な常識的な中間物を動かして、眼に見えない出現をしてゐるやうに思はれてならなかつた。同時に私は、さつきまでゐなかつたものが、この部屋に存在してゐるやうな氣がして、その考へが根強く植ゑついてゆくのを何うすることも出來なかつた。なぜならあの窓を叩いた音については、なんとも合理的な說明がつかないところへ、あゝして窓を開けてからは、もう二度と外戶から窓を鳴らす者がなくなつた一事だ。何者かゞ私たちに戶を開けさして、ちやんと這入つて來てゐるやうな感じがひしひしと迫つてしやうがない。

私がかう言ふと、大佐はほとんど怒り出さんばかりに、頭から叱りつけた。

『說明が常識的であらうと、そんなことはどうでもいゝ。要するにただ事實はこれだけさ。』

拳銃をもとの爐棚へかへすと、大佐はしやがんで火を突ついた。

『寒い。ばかに寒い。』

『あつちの部屋へ行かうぢやないか。あひだの戶を開けておけばい

い。向うのほうが愉快だよきつと。』

大佐の黒い眼が、からかふやうに私を見た。

『行きたけりや君だけ行くがいゝさ。俺はひと晩こゝで明すことになつてゐるんだから、斷じてこゝにゐる。たとへ全ジヤコビン黨の幽靈がクリスマスのお祝ひに出て來たつて、僕はちつとも驚きはしないんだ。』

さう言はれてみると、何だか私は一層こわくなるのだつた。いひ知れない凶の氣分が彼の口を藉りてこんなことを言はせてゐるやうに思はれる。私はもう堪らなかつた。いつそ、もしこの時、さつきのやうに窓のところで音でもしたら、私はまだその何ものかゞ外部にゐること、思つて、いくぶん安心出來たかも知れない。しかし、かう二度とあの音がしなくなつては、私は今まであんなにしきりに窓を叩いてゐたものが、すつかりこの部屋に這入り込んでゐるといふ空想に理論的根據をみとめざるを得ない。

私は足を踏みしめて立ち上つた。

『僕はあつちの部屋へ行くよ、とにかく。』そして大佐の言葉を待たずに、壁に切られた戸へ進んで、私は救はれたやうに明るい別室へ飛び込んだ。うしろでエッチウオウスの笑ひ聲が嘲弄してゐた。

5

爐の前の大椅子に腰を下ろすと、暫くはほつとした氣もちだつた。すると間もなく、開け放した寢室の戸から誰かゞ覗いてゐるやうで首すぢが寒くなつて來た。

『エッチウオウス！』私は大聲に、『こつちのほうがよつぽどいゝ。カアドを持つて來給へ。』

返事のかはりにエッチウオウスは欠伸をした。

『もう眠い。カアドなんかいやだ。それに俺はこゝのほうがいゝんだ。寒いからそこを閉めて貰はう。』

私のやうな神經の所有主に超自然的な現象を探險する資格なんかないかも知れないが、とにかく間の戸をとざすのは私こそ望んでゐたので、立つて行つて勢ひよく戸を閉めた。これで向ふの寢室から見つめられてゐる氣もちから脱することが出來たわけで、私は多少平靜を取戻して椅子にかへつたが、するとすぐに自分とじぶんの意氣地なさが恥かしくなつて來た。間もなくエッチウオウスがさかひの戸口から顏を出して、飾瓶とワイン・グラスを兩手に聲をかけた。

『いゝいゝ、びくびくせずにブランデイでも飲み給へ。君はどうかしてゐる。何か眼をあけて夢を見てゐるんだらう？』

『夢つていふけど、君、さつきの窓の音は、ありや夢だつたかね？』

『悪魔はときどき窓を鳴らすものさ。』

エッヂウオウス大佐は笑ひながら、私にブランデイのグラスをつきつけた。

『もう一杯？』と飾瓶をさし上げて、『こいつに限る。どうだね、もう一つ？』

私は酒はいらないが、一しよにゐてくれと頼むやうにいふと、彼は思ひ切りよく拒絶して、

『じつはね、デニスン、僕は自分でもこわいんだ。こわくて堪らない。いや、ほんとだよ。こんな氣もちは生れてはじめてだ。だから意地にかゝつても向うの寝室へ歸らざるを得ない。いゝかい、こわくて逃げ出したとあつちや、僕じしん自分の臆病なのが癪にさはるからね。僕はこわいからこそあの部屋にゐるんだ――何だ、精神と肉體の離れたジヤコビン黨員なんか――。』

言ひながら大佐は廻れ右をして『鏡掛の部屋』へ這入ると、うしろ手に力づよく戸をしめてしまつた。

それから寝室へ近づく足音がして、椅子が軋んだのは腰をかけたらしかつた。彼は恐ろしいが故に残り、私は恐ろしいがゆえに逃げ出したのだから私は臆病者に相違ない。しかし、何と言はれても、決してとなりの寝室へは這入つて行くまい――私はさう思つて、ひとりぢつと大椅子のなかに膝を抱いてゐた。

そのうちに爐の暖かみとブランデイが作用して、私はいゝ氣もちに眠くなつてきた。それでも暫くは我慢してゐたが、たうとう椅子のうしろへ頭をもたせかけて、やがてどれだけ眠つたことだらう。はつとして眼が覺めたときは、私は理由の知れない驚きにあらゆる神經をとがらせて、心臓は事件的な波を打つてゐた。耳をすます。何か大きな瞬間に音のするのを知つてゐて、それをひそかに待つてゐるといつたやうに――。

二三時間は眠つたらしい。爐の火は白く消えて、部屋は冷えきつてゐる。

恐ふに無意識に期待してゐたものが來た。『鏡掛けの部屋』の壁を通して、エッヂウオウスが恐怖に窒息する聲を絞つて私を呼んでゐるのが聞えた。

『デニスン！　デニスン！』

何か大きな力に抱き上げられて冷水へ擲り込まれたやうに感じて、私は瞬間身動きが出來なかつた。恐怖が私をその場へ縫ひつけたのだ。

と、と[illegible]り――人[illegible]の[illegible]れる物音、しかもこれがさかひの扉のす

ぐ向ふ側、八十何年か前のこの夜、エヴァンジエリン・マアガット夫人が倒れたのと同じ場所ではないか。

笞の鳴るやうな音。つゞいて何か引きずる響き。うめき聲。さうして最後に、最も戰慄すべきかすかな笑ひ聲――それは殺笑とも言ふべき血みどろの忍び笑ひ――。

ほんの一瞬ではあつたが、私は狂せんばかりに眼を見開いて、閉ざされた戸を凝視したまゝ棒立ちに立つてゐた。いまにも何ものかゞ戸を開けて現はれるであらうと！――ところが、戸はそのまゝ默しつゞけて、壓搾的な靜寂があたりを占めるばかり、私は思ひ切つて戸へ近づくと、ハンドルに手をかけて押してみた。が、開かない。何か重いものが向ふ側にもたれかゝつてゐて扉をふさいでゐるのだ。

その時だつた。ジエイムス卿の恐ろしい言葉が私の胸へよみがへつたのは！

「ちようどエヴアンジエリン夫人づきの女中が、この部屋に寝てゐましてね、夫人の叫び聲で眼が覺めて、すぐに寝室へ驅けつけやうとしましたけれど、戸が開かなかつたのです――夫人の死骸が向ふ側にもたれかゝつて戸を塞いでゐました。」

恐怖に頭髪が逆立つといふことがあるとすれば、その時の私がそれだつた。手が戰慄に痺れてハンドルを離れた。私は心中にこんな餘計な思ひつきを鑑得したエッヂウオウスと私を呪ひながら、よろよろと二三歩、あとへすさつた。

この夜、むかしの惨劇が終始そのまゝに再演されるといふ、私は新しい怖れに危く聲を上げやうとした。何か戸の下から出て來てゐるのだ――黒く光つた、そして小刀の刃のやうに細いもの。ぎよつとして見守つてゐると、それは擴がりながら進んで來る。やがて、その黒いものが戸の下の床をいつぱい埋めるやうになつて、私は始めてそれが何であるか氣がついた。液體なのだ。しかも黒ではない、赤！さうだ、深い赤――血！人血ではないか。

すぐに私の頭を掠めたことは、八十何年前のこの夜ふけ、かうしてエヴアンジエリン夫人の鮮血が、この扉の下から別室に流れ込んで、私と同じやうに戸が開かずに立つてゐた女中を、最初は不審がらせ、つぎにどんなに驚かしたであらうといふ運命的な一致だつた。

あのジエイムス卿の物語は、そつくり事實だつたのだ。昔の殺人が、幽靈の加害者と幽靈の被害者によつて、今や驚くべく細かい點にまで再現されてゐるのだ。繰りかへされてゐるのだ。とすれば、エッヂウオウスは何うなつたらう？「エッヂウオウス！」私はもう氣ちがひだつた。「エッヂウオウス！」

返事はおろか、何の物音もない。目睫に危險を感じ出した私は、急

に勇氣をふるつて力まかせにドアを開け放した。

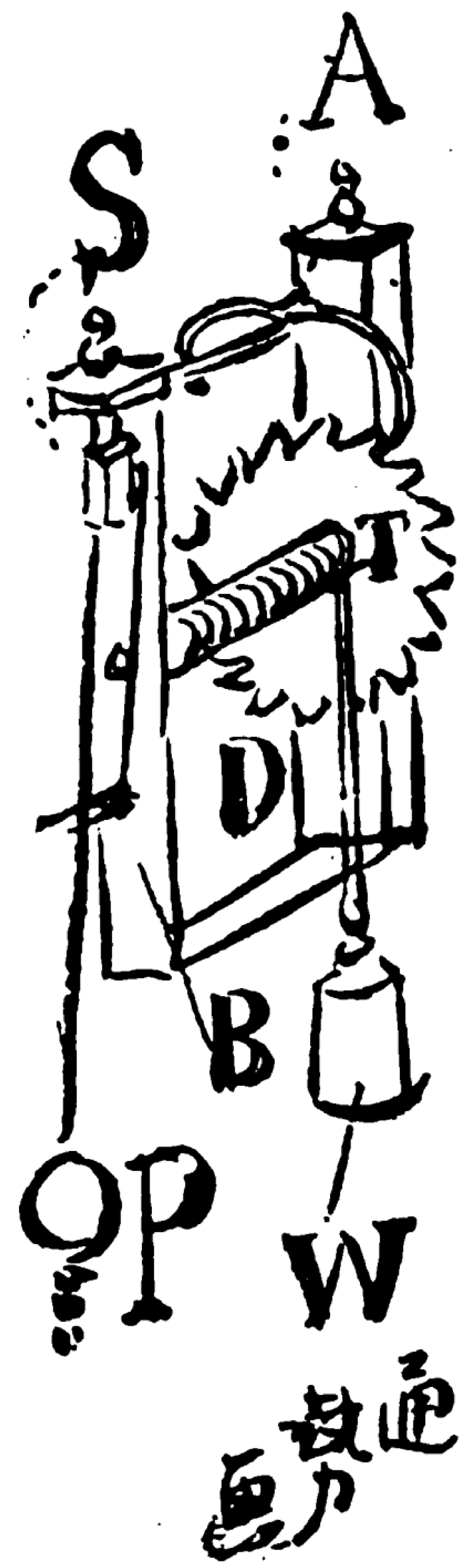
戸口から洋燈をかざして見ると、はじめ私の眼に映つたのは、狼藉をきはめた部屋の樣子だつた。まつくらななかに卓子がひつくり返つて、床にはカアドと蠟燭が散亂し、壁の戸に近く、足を扉にかけてエッチヴォオウスが倒れてゐる。右の手が長く伸びて、頭は横にねぢれて肩にかゝつてゐた。

かれが死んでゐるらしいことは、私にもひと目でわかつたが、そのうへ、まはりに流れてゐる赤い液體が、池のやうにおどんで靜止してゐるところから見ると、どこにしろ傷口からは、もうすつかり血が出きつてしまつたやうに觀察された。それらをちらと見て、私は廊下へ飛び出すと同時に、頭のてつぺんから大聲を張り上げて、召使たちの部屋のほうへ駈けて行つた。

五分間後、私は執事ともうひとりの下僕をつれて、「壁掛けの部屋」へ引つ返してゐた。二人は暫く尻込みしたが、執事が死骸に近づいて行つて、私の揭げる洋燈の光りで覗き込んだ。かれはしばらく默つてエッチヴォオウスのそばに蹲踞んでゐたが、やがてその兩肩が細かく顫へ出して、矢庭に私を振り仰いだ顏は奇體に引つ吊つてゐた。私ははじめそれを恐怖の表情と讀んだのだつたが、よく見ると執事は一生懸命に笑ひを堪へてゐるのだ。事實、彼は微かに聲を立てゝ笑ひ出した。私は不思議な氣がしたが、つぎにぼんやりと何かゞわかりかけて來て、その時、執事が拾ひ上げたものに落ち着いて眼をそゝいだ。それは壞れたバアガンデイの瓶だつた——これで床の血と思つたのが、血の色をした葡萄酒に過ぎなかつたこともうなづける。

あとの說明はすべて蛇足であらう。恐怖をまぎらすために一人でさかんに飲んでゐたエッチヴォオウスは、その上バアガンデイの葡萄酒瓶に手をかけたとき、醉つてゐるあまり卓子につまづいて一しよに倒れたのだつた。その音で私が眼をさまして、同時に彼が呼ぶのを聞いたものらしい。そしてエッチヴォオウスは暗いなかで隣室のさかひの戸まで辿つて來て、そこですつかり酒に意識を失つたに相違ない。再び轉ぶとたんに葡萄酒の壜を割つたのだが、そのためにどこも怪我をしなかつたのは不思議だつた。

これがその夜、マアガット館の「壁掛けの部屋」に起つた事件の全部だつた。これは事件とは言へないほど馬鹿馬鹿しい話しかも知れない。しかし、いまでもときどき思ひ出すことに、私は何だかこの常識的な形而下的な說明に飽き足らないのだ。なんとも言へないあの夜の無氣味さを覺えてゐるので、私はやはり超自然的な力が、あゝした自然な物質的な形をとつて、ごく平凡らしく現はれたのではないかと思つてゐる。偶然と見なすには、あまりにも如實なそして精緻な「再演」だつたからだ。



百萬磅(ポンド)紙幣

マーク・トウエーン作
佐々木邦譯

二十七の時、私はサンフランシスコの或鑛業仲買人の手代で、株式取引の一切にかけては一廉の巧者であつた。私は眞正の一人ぼつち、自分の才覺と信用の外には何一つ賴みにするものもなかつたが、しかしこの持つて生れた資本の有難さで、私の足は先づ〳〵成功の路筋に向いてゐたから、私は前途を樂んで滿足してゐた。

午後の立合が濟めば、土曜日は自由の身體だつたから、私は小いボートに帆を張つて灣内を走り廻るのが習慣であつた。ところが、或日のこと、少し調子に乘り過ぎて、私は沖合へ流されてしまつた。丁度日は暮れかゝり、もう希望の綱が切れやうとする時、私はロンドン行の小い帆前船に拾ひ上げられた。先方まではいやはや長い荒い海上生活で、私は船賃を拂ふ代りに、普通の水夫として働かして貰つた。で、ロンドンの土を踏んだ時には、私は乞食のやうな風體で、懷中には僅一弗あつたばかり、この金で兎に角一晝夜の飢渴と雨露を凌いだが、さて次の一晝夜は全く路頭に迷つたのである。

翌朝の十時頃、私は飢えて疲れて覺束なくもポートランド・プレースを歩いてゐると、乳母車に乘つて通りかゝつた子が一口嚙んだばかりの甘さうな大きな梨を溝の中に投込んだ。私は無論立止つて、その泥だらけの寶玉に穴の明く程見入つた。私の口はその爲めに涎を催し、私の胃の腑はその爲めに鳴動した。私の全身はその梨が欲しかつた。が、私がそれを拾はうとしてその方へ關係をつける度毎に、通行人が私の意のあるところを看破る。無論その際は身體を眞直にして平然と構へ、梨のことなんか念頭にないやうに裝つた。こんなことが幾度も起つて、私は梨を手に入れることが出來なかつた。竟に私が恥辱も外聞も一擲して、決然それを鷲掴みに爲兼ねないまで自棄になつた時、後方の窓が明いて、そこから一紳士がかう言葉をかけた。

「もし何うぞ此方へ。」

私は恐く立派な取次に案内されて、贅澤づくめの一室へ通つた。そこには年齢の紳士が二人坐つてゐた。彼等は下僕を退して、私を席に着かした。見れば丁度朝食が濟んだところで、その狼藉たる殘肴は殆んど私を壓倒し去つた。さうした食物を目の前に控へて、正氣でゐられるか否か疑問だつたけれど、お毒見を仰せつからないから、私は餓い腹へ出來るだけ力を入れてゐるより外なかつた。

さて、これに先だつてこの家には一事件があつたのである。尤もそれに就いては私はずつと後迄何も知らずにゐたが、話の順序として、今こゝで諸君のお耳に入れやう。といふのは數日前この老兄弟の間に一場の議論があつた。年寄の剛情で、お互に眞赤になつて爭つたが果しがつかず、では賭をして黑白を定めやうといふことになつた――これが英國流の物の定め方なのだ。

諸君は御記憶であらう、英蘭銀行は嘗つて一外國との公の取引に關聯して特別の用途に充てる爲め百萬磅の銀行紙幣を二枚發行した。何ういふ理由であつたかその中の一枚だけは使用濟の棒引となつたが、もう一枚の方は未だに銀行の金庫に納めてあつた。ところでこの兄弟は無駄話をしてゐる中、暇人だけに、極めて餘計なことが氣にかかり始めた。――それは品性にも分別にも申分のない一外國人が一人の友達もないこのロンドンに漂流したと假定して、件の百萬磅の紙幣の外に一文の持合せもなく、且つその所有權を證明する道がなかつたら、その男の運命はどうなるだらうといふことで、兄貴は彼は餓死ぬだらうと言ひ、舍弟は否、死なぬと言つた。兄貴はそれこそ贓の拐騙りで、彼は即座に捕縛される虞があるから、銀行は固よりその他何處へも呈示することが出來ないと言つた。そこで議論に花が咲いて、遂に舍弟はその男が兎に角その百萬磅で一箇月間の露命を繋ぎ、且つ牢へは入らないといふ主張で、二萬磅の賭けをしやうと申し出ると、兄貴も承知で、舍弟は忽ち銀行へ出懸けて、件の紙幣を買つて來た。何處までも英國人である。骨の髓まで負け嫌ひだ。それから彼の口授によつて、書記の一人が一通の書面を認めた。かくして兄貴と舍弟はそれを受く可き適任者が通りさうなものだと、終日窓の傍に坐つてゐたのである。

正直さうな顏は幾個も通つたが、皆分別を缺いてゐた。又分別ありさうなのは正直さうでなかつた。兩方兼備のものも、少くなかつたが、任に堪へ得る程貧乏でなかつた。又申分なく貧乏なのも多かつたけれども、外國人でなかつた。それで私がやつて來る迄は何時も何處かに缺點があつた。私なら全く誂へ向きだといふことに一決して、彼等は雙方異議なく私を選んだのである。私は何の用で呼込まれたのかを知りたくてその答に燃へてゐた。彼等は私の身の上に關して質問

に質問を始め、間もなく私の一部始終を承知して、竟に私なら間に合ふだらうと言つた。私はお役に立てば實に結構だが、一體何事かと尋ねた。すると、一人が私に封筒を渡して、説明はその中にあると言ふから、私は早速封を切らうとすると、いや、いけない、宿へ持つて行つて、氣をつけて讀みなされ、慌てなさるな、と押し止めた。私は困つた。さうしてもう少しこの問題について論じたかつたが、彼等は應じない。私は見たところ茶番狂言か何ぞの道具にされるのを好い面の皮と心外に思ひながらも、この際富める人强き人の無禮を憤るやうな境遇にゐないので、成らぬ堪忍の胸を撫るより外なかつた。

私はかの梨を拾つて列强環視の裡にも喫し去つたのであらうに、惜しいかな、既に影も形も見えない。何の事はない、私はこの碌でもない仕事の爲めに大切の梨を失つた勘定である。と思ふとこの人々に對する忌々しさは益々込み上げて來た。私はその家が見えなくなるや否や、封筒を開いて中に紙幣の入つてゐるのに氣がついた！　そこでこの人々に對する私の意見が變つて來た。現金だつて？　さうかも知れぬ。私は一分の猶豫もなく、手紙と紙幣をポケットに押込み、最寄の安飲食店へ飛込んだ。さうして食つたの食はないのつて！　竟にもう入らぬといふ段になつて、私は例の紙幣を取出し、折目を伸ばして、一目見ると危く卒倒するところであつた。五百萬弗！　私は眩暈を催した。

私は正氣に返る前に一分間といふものはその場に坐つたまゝ紙幣に向つて目をシヨボ〳〵させてゐたに相違ない。それから私が先づ氣がついたのはその店の亭主で、彼は眼を紙幣の上に落したまゝ石化してゐた。彼は全身全靈を以て禮拜してゐたが、手足が全く利かぬやうに見えた。然う氣がつくと私は得たり賢しとその際爲さねばならなかつた極めて理性的の行動に出た。即ち紙幣を差出して、無雜作にから言つたのである。

『御亭主、これでお剩錢を。』

するど亭主は始めて本性に返つた。さうして兩替の叶はぬ旨を百方言譯したが、私が何う勸めても紙幣に手を觸れない。而も矢張り偉いものは見たいもので、何時まで目の正月をしてゐても渇を醫すことが出來ぬやうに見えた。さりとて、これを手に取つて見るのは名もなき土塊の人間にあつては、矢張り勿體ないやうな心持がするかして逡巡した。

『厄介で氣の毒だけれど、是非どうかして貰ひたい。くづせまいか？

俺は小いのは少しもない。』

しかし亭主は些つとも構はぬと言つた。何かのことだからこの次一緒に勘いて苦しくないといふので、私は當分再びこの邊へ來るやうな

ことがないかも知れぬと言ふと、彼はそれは大事ない、何時までも待つ、のみならず何でも御入用の品は時を撰ばず御用立てる、さうして勘定は何時まで引張つても構はぬ、俺だつて二つある目は節穴ぢやない、貴下のやうな金持を信用するに躊躇しない積りだ。一體貴下は些と粹狂が過ぎる、そんな風體をして世の中を欺くからお人が悪いと言つた。既にこの時には他の客が入つて來たので亭主は例の物を匿すやうにと私に目くばせをした。さうして私を拜むやうにして戸口まで送つて來た。警察が私を狩出して手傳ひをしてくれない中に、自ら過失を改めたいと思つて、私はその足で例の家へ向つた。私は全く度膽を抜かれて、實際少なからずびく〳〵ものであつた。尤も悪事を働いた覺えは毛頭ない。しかも一磅の積りで百萬磅といふ大金を風來者にやつたと氣がついたら、彼等はお互の近視眼を責めて然る可きだのに、それはせず、狂亂的に私を呪つてゐるだらう、とそれくらゐのことは推察のつくほど私は十分世故に通じてゐた。私は家に近づくと胸騒ぎが鎭まり始めた。といふのは四邊が全く寂然としてゐたので、さては一件が未だ破れないわいと思つたのである。私は玄關の鈴を鳴らした。先刻の取次が出て來た。私は先刻の紳士に面會を求めた。

『最早お立ちになりました。』

とそれも彼等社會特有の高ぶつた冷かな口調で言ふ。

『お立ちに？ 何處へ？』

『旅に。』

『何處へですか？』

『大陸、でせう。』

『大陸？』

『然樣。』

『何處から？ 何の航路で？』

『存じません。』

『何時お歸りでせう？』

『一箇月して、と仰有いましたが。』

『一箇月！ どうも驚く。何うかして言傳をする法はありませんか？ 大切の用事なのですが。』

『どうも。何處にお在になるか一向手がかりがありません。』

『では何人かお家族の方にお目にかゝりたいのですが。』

『いや、そのお家族の方もお不在で、洋行なすつてから最早五六箇月になります――埃及だの印度だのへ、へい。』

『實は飛んでもない行違ひが出來してゐますから、晩方までにはお歸りになるだらうと存じます。何卒私がお邪魔に上つたことを申上げて下さい。尚ほこのことが全く落着するまで私は絶えず參る積りですか

ら、必ず御心配なさらぬやうにお傳へ下さいませ。』

『若しお歸りになつたら然う申上げませうが、お歸りはありますまいよ。何でも一時間ばかりすると貴下が何か問合せにいらつしやるだらうつて仰有つてゐましたが、正直の話、何も行違ひなんか無いのですから、主人達は矢張り豫定通りにお歸りになつて、貴下をお待ち受け致すのでございませう。』

そこで私は諦めて引返すより外なかつた。私は狐につまゝれたやうで、殆んど途方に暮れてしまつた。彼等は豫定通りに歸ると言ふ。一體何ういふ意味だらう？ あゝ、手紙を見れば分ると言つた。或は分るかも知れぬ。私は手紙の方は全く忘れてゐたのである。それで、取出して讀むとかうであつた。

拜啓、お見受け申すところ、貴下は悧巧で正直の人に御座候。小生等は貴下を貧乏人且つ外國人と認め申候。金子若干封入致候。これは無利息にて向ふ一箇月間御用立申上候間、期限參り候節、拙宅まで御一報被下度候。小生は貴下の身の上につきて賭を致居り、若し小生の勝利と相成らば小生微力の及ぶ範圍に於て何なりと貴下御熟練御堪能の可然地位御周旋申上度心組に有之候。早々頓首。

署名も番地も日附もない。

吉か凶か、兎に角ここに私が足を突込むべき係蹄がある。讀者諸君はこれに先だつての出來事を既に御承知だけれど、當時私は何の手掛りもなかつたので、萬事悉く暗中模索の體であつた。何ういふわけか、又私を害しやうといふのか、それとも親切心のあつてすることか、毛頭見越しがつかず、私は公園へ入り込んで、さて、何うしてくれやうか、全體この乃公を何うしやうといふのだらう、と思案投首をベンチの上の胴の上に据ゑた。

一時間の後、私の自問自答はかういふ判決に結晶してゐた。

この人々は或は私に善意を持つてゐるのかも知れぬ。或は惡意を持つてゐるのかも知れぬ。何方と判斷して可いか何うしても分らぬ——全く分らぬとして置いて、彼等は目下或種の冗談事だか計畫だか實驗だかをやつてゐる。その何事たるかはとんと見當がつかぬ——それも棄てゝ置く。尚ほ彼等は私の身體で賭奕をしてゐるといふか、全體何といふ勝負事だらうか、これも全く知るに由なしで、打捨つて置くより外ない。これで分らない部分だけは片付いた。殘餘は目に見えた話である。若し私が英蘭銀行へ出かけてこの紙幣を持主の貸方につけ込んでくれと頼むなら、彼等は宜しいと引受けるだらう。何となれば

私は知らないが、銀行員は持主を知つてゐる。けれども同時に彼等は何うして私がこの紙幣を手に入れたかを尋ねるだらう。さうして若し眞實を答へれば、私は精神病院へ送られ、嘘を吐けば早速監獄ものである。又若し私がこの紙幣を何處かの銀行へ預入れるか、或は質に置くかしても、矢張り同じ結果が隨つて起る。よつて、この人々の歸るまで私は厭でも應でもこの巨大い荷物を擔がねばならぬ。これは私に取つては一掴みの灰と同樣無用のものである。しかも私はこれを大切にし、保管せねばならぬ。私は手放さうとしても手放すことが出來ぬ。といふのは正直な市民は無論追剝でもこれを受取ること乃至これに關係を持つことを辭退するに定つてゐる。この故にこの兄弟は安心なものである。若し私がこの紙幣を失しても燃しても彼等は矢張り安全である。何となれば彼等は支拂ひを止めることが出來る。さうして銀行は彼等に損をかけない。しかし私は給金を貰はず利益も取らずに、差當り一箇月の苦勞を引受けてしまつた——何の賭けかそれに勝つ手傳ひが出來て約束の地位に有つけぬ限りは全然只奉公である。私はその地位が欲しい。あれくらゐの彼輩になると、その勢力範圍に買ひ甲斐のある地位を澤山持つてゐるものだ。

私はその地位について種々と考へ始めた。私の野心は動き出した。さういふ地位なら給料は無論莫大なからう。一箇月すると始まるのだな。始まれば後は最早大丈夫金の脇差、等と私は間もなく三國一の機嫌で、既にこの時には再び往來を歩いてゐた。ちらりと仕立屋の店が目につくと、私は忽ちこの襤褸を振り落してもう一遍人並の風體をしたいといふ熱烈な慾望に囚へられた。けれどそんなことが出來やうか？　出來ない。私は百萬磅の外この人の世に鐚一文も持つてゐない。しかし誘惑の追擊はなかなか烈しくて、私はこの男らしい奮鬪中、店の前を六度行きつ戻りつした後、竟に負けてしまつた。いや、負けざるを得なかつた。私は何か注文外れの出來合はなからうかと尋ねた。私が言葉を掛けた奴は隣の奴を顎で指して、私には何等の返辭もしない。私は指された奴の方へ行つた。すると此奴も亦他の奴を顎で指して、一言もいはない。私は又指された奴の方へ行つた。奴は曰く、

「お待ちなさいよ。」

私は彼の出かけた仕事の片付くまで神妙に待つた。それから彼は私を奧手の一室へ伴つて、山のやうに積んだ不合格の服を掻廻した揚句、飛切の安服を私の爲めに選定してくれた。私は早速着て見た。能く合はぬ。のみならず一向體裁えがしない。しかし兎に角新しいから私は買ひたくて堪らなかつた。で、私は缺點を探さずに、實際、少々困つて、から言つた。

『どうでせう、勘定を當分待つて戴けると大變好都合なのですが。私は小さいのは少しも持合せがない。』

すると野郎は世にも嘲弄的な面がまちを建立してから吐かした。

『持合せがありませんか？　成程、無論小さいのは　お持合せがございますまいて。旦那のやうなお方は得て大いのばかりお持合せでございますからな。』

私はムツとした。

『番頭さん、さう何時も服裝ばかりで人の身上の判斷はして貰ふまいよ。いくら貧乏したつて、俺はこの服一揃ぐらゐの拂ひには事を缺かさない積りだ。俺は唯大い紙幣を兩替させて面倒かけちや氣の毒と思つて言つたことだ。』

すると奴さんは少々態度を改めて、未だ乙う樣子をしてゐたが、かう辯解した。

『何もそんな積りで申したのぢやありませんが、お咎めがございますから一言申上げます。私共では御覽の通りかうして歴乎と營業をして居りますのに旦那のお持合せがくづせなからうなんては、些つと立入り過ぎたお話ぢあなからうかと存じます。御心配は御無用。私共では立派に兩替が叶ひます。』

即ち私は番頭に紙幣を突付けて、

『いや、それは好都合だ。悪いことを言つたね。』

『どうした？　どうしたんだ？　どうかしたのか？』

と忽ち店の主人が、番頭を目がけて駈付けた。私はいと物靜かに、

『何うもありませんよ。私はお剩錢を待つてゐるのです。』

『これ〳〵、早くこの人にお剩錢を上げろ。トツド、早くお剩錢を。』

紙幣を手にしたまゝ凝結して彫像のやうに立つてゐたトツドは、俄かにかう答へた。

『お剩錢を上げろ！　口でさう仰有るのは譯がありませんや。まあ、この紙幣を御自分で御覽なさいませ。』

店主は一目見ると、低いながらも力の籠つてゐる口笛を吹いた。それから山なす出來合服の中へ逆潜りをして、憤つてゐるやうに絶えず口小言を言ひながら、一つ一つ撥ね退け始めた。

『大金持を捉へてこんな二束三文を押付けるなつて、トツドは馬鹿だ。生來の馬鹿だから仕方がない。何時でもこんな拙策ばかりして、店から金持を追拂つてしまふ。金持ちと宿無しの辨別がない。何時もさうだ。あゝ此品此品、此處にゐたか。さあ、旦那樣、何うぞそれはお脱ぎになつて、火にでもくべて下さい。それから御願ひでございますから、この襯衣をお召しになつて、これをお試し下さいませ。これこそ誂へ向きの品で、色合にも地質にも申分なく、地味で高尚で、

はい、ある外國の親王樣の──御承知でございませう、それ、ハリファックスのホスポダー殿下の御注文で仕立てましたが、お母君樣がお歿りになりさうだとかで、これはその儘にして喪服をお拵へにならなければならないやうなことになりました。ところが、そのお母君樣といふのがその後御本復になつてしまひましたので……。尤も手前共では決してそれを兎や角存じては居りませぬ。どうせこの世の中といふ奴はさう〳〵手前共の思はく通りに參るものでは……御覽なさいませ、ズボンは上等でございます。宛然切つて嵌めたやうで。さあ、チヨツキでございます。あゝ、これもきつちりです。今度は上衣をお召し下さい。まあ、御覽なさいませ、どうでせう、完全──無缺とはかういふことでございませうか？　手前もこの商賣を始めてから最早長いことになりますが、こんな成功は今日が初會でございます」

私は滿足の意を表した。

『旦那樣、上等でございます。全く上等でございますよ。當座のお間に合せには十分でございます。けれども旦那樣、御寸法を伺つてお仕立申上げたらどんなものが出來ませうか、どうぞお待ち下さいませ。これ、トッド、手帳とペンだよ。書きつけておくれ。おヅボンのお長さが三十二だよ。』

等といふ譯で、私が一語も挾み得ぬ中に、彼は寸法を諮つてしまひ、フロック、燕尾服、モーニング、シアーツ、何から何まで誂へてゐた。私は漸く口をきく機會を捉へて、

『けれども何ですよ。私はそんな注文は出來ないのですよ。この紙幣をくづして戴くか、無期限に待つて戴かなくちや。』

『無期限に！　無期限ぢや未だ意味が弱うございます。永遠にと申しませう。これ、トッド、早くお買上の品々を揃へて、時を移さずお屋敷までお屆け申上げろ。外のお客樣には待つて戴け。お屋敷の番地を書留めて……』

『いや、俺は宿替を思立つてゐるので、今度又通り掛つた時新しい番地をお知らせすることとしやう。』

『宜しうございますとも、まあ、お待ち下さい。お見送り申上げませう。いや、どう仕りまして、左樣ならば、お靜かに。へい〳〵。』

さて、これから何んなことが起るかは諸君も想像がつくであらう。自然私は何でも欲しい物を買つて、これでお剩錢をといふやうなことにならざるを得なかつた。それで私はそれから一週間の中に欲しいと思ふ必要贅澤の品を有り餘る程調へ、本城をハノバー町の上等ホテルに構へた。夕食はそこで認めるが、朝食には相變らずハリスの安飲食店へ行く──此處は例の百萬磅で最初の腹拵へをした家なので、謂はば私はハリス出身、ハリス製である。チヨッキのポッケットに百萬磅

入れてる外國の一氣紛れ者があの店の守本尊だといふ事實は彼方此方へ擴がつた。これで十分である。その日ぐらしのやつとこさから、見る〳〵彼の店は大評判になつて、毎日お客が押合ふといふ繁昌。ハリスは無論恩を忘れず、私に貸金を强ひる。私も拒み兼ねるといふ譯で、事實は一文なしでありながら、手頭金に不自由なく、貴族か金持のやうな生活をしてゐた。どうせ間もなく身の破滅が來ると思つたが、今は乘りかけた船だ、兎に角對岸まで漕ぎつけないと流されてしまふ。事態は全くの茶番狂言であつたが、それには考へて見ると、悠りしてはゐられないやうな、何となく恐ろしいやうな、更に言へば悲劇のやうな半面があつた。日が暮れて暗くなると、その悲劇的半面が何時も目の前に現れて來る。お前は危いぞと戒める、大變だぞと脅かす。それで、輾轉反側、安眠も難かつたのである。しかし日の光と共にこの悲劇的要素は消失せてしまふ。すると又陽氣なもので、私は空中を歩いてゐるやうだ。酒に醉つたやうに、目の廻る程世の中が面白い。

　それも當然のことだ。期せずしてこの世界の大都の一名物となつてしまつて、私の面くらひ加減てつたら尋常一樣ぢやない。手に取つて見る新聞といふ新聞――英蘇愛三國語の――には必ず『札チョツキの紳士』に關する記事並びにその最近の言行が載つてゐる。それも最初は個人欄の本行を汚すに過ぎなかつたが、次には爵士の上、次には從男爵の上、次には男爵の上と、虛名の揚がると共にそれからそれと順順に追越して、竟に私は梯子の頂上に達し、其處で王宮の公爵と總督長を除いては、總ての貴族や僧官の上席を占めることとなつた。しかしながらこれ迄のところは眞正の名譽ぢやない。單に虛名、否、寧ろ醜名を博したに過ぎない。ところへ最後に仕上げの一刷毛が來て、私の虛名を最早動かし難い名聲に化してくれた。即ち雜誌『パンチ』が私のポンチ繪を描いたのである！　最早私は價値の定つた人間だ。私の地位は確かなものだ。世間は尙ほ私に譃ふかも知れぬ。しかし譃ふにしても禮は缺かさずに、愼んで譃ふ。私に向つて微笑むことは出來るが、嘲笑ふことは出來ない。そんな時期は最早疾うに過ぎてしまつたのである。『パンチ』は私がボロ着物の羽ばたきをしながら、ロンドン塔を何程で賣るかと談判してゐる所を描いた。考へても見たまへ。今迄在るか無いかも分らなかつた一青年が、一朝にしてその口から出れる言葉は到るところで繰り返される。一寸外へ出ても、『や、彼處へ行く、彼だ〳〵』と世間を騷がせる。朝飯を喰べるにも見物人に取卷かれる。劇場の席に坐れば、四方八方から雙眼鏡で狙はれる。實際私は終日光榮の中を泳ぎ廻つてゐたのである。

　御承知の通り私は尙ほ例のボロ着物を仕舞つて置いた。さうして時々時それを着て出かけた。これは小買物をして一赤恥を掻かされて、次

に百萬磅で無禮者を射殺すといふ昔の面白味が忘れ兼ねたからである。然るに今はこの道樂を續けることも叶はなくなつた。新入新聞は競つて私の裝束を紹介してゐるから、ボロを着て出歩くと直ぐに分る、人立がする、それがぞろ〳〵跟いて來る。さうして買物をしやうとすると、私が百萬磅をつきつけぬ中に先方から、店全體を明渡しませうと下から出る。

名を成してから十日目頃と記憶する。私は米國公使を訪問して故國の爲に義務を果す爲め公使館へ出頭した。公使は私の現況相當の熱情を以て私を迎へてくれた。何故もつと早く來て呉れなかつた。横着な男だ。いや、どうしても堪忍相成らぬ。但し拙者の堪忍を乞ふには唯一の方法があるから御傳授申上やう。それは今晩の夜會に幸ひ病氣で出席出來ぬ者が一人あるから貴下に於てその空席を塞いでくれることであると言つた。私は承知の旨を答へ、引續いて談話を始めた。ところが惡いことは出來ないもので、公使は私の父とは竹馬の友、長じてはエール大學での同窓、その後父の死ぬ時まで親密の交を續けたといふことが分つた。さういふ譯で公使は閑の時にはなるべく拙者の宅へ來てくれるやうにと言つた。無論私は承知した。事實私は承知どころか大喜びであつた。破滅が來る時彼は何とかして私を全滅から救つてくれるだらう。何うして救つてくれるか知らないが、或は何とか方法を案じてくれるかも知れぬ。しかし私はロンドンに於ける私の恐ろしい行動の初期に於てならば打明けるに躊躇しなかつた事實を、今となつては打明ける勇氣がなかつた。然り、この期に及んでは到底打明ける勇氣はない。私は餘りこだはつてしまつた。私はかうして新しい友達に身上談をするには餘り深みに入り込んでゐる。尤も私の見たところでは丈が立たないといふ程の深みぢやない、何となれば御承知の通り私は借金をしてゐるが、私は念を入れて收入以内で——即ち給料の額を越さずに事を辨じてゐた。勿論その給料といふのが何程になるのだか分らないが、推量して見るだけの土臺は十分あつた。即ち若し私が賭て勝てばあの老紳士の勢力範圍で地位の選擇が出來る筈、それも熟練堪能といふ條件だつたが、この點に於て私は手腕懸念がなかつた。尚ほ賭といふことに就いても、私は一向心配しなかつた。私は平常圖運が強い。さて、私の豫想は一年六百磅から千磅であつた。假に初年を六百磅として、それからは實力で年々鰻上りに竟に千といふ額に達する。現在では私は唯初年の給料だけ負債してゐる。世人は皆私に金を用立てやうといつて爭つたが、私は種々口實を構へて殆んど悉く斥けるのに大骨を折つた。それで負債は三百磅、これが純借金で、尚ほ三百磅、この方は雁持錢と賭物だから未だ生きてゐるやうなものだ。二年目の給料へ手をつければ後の半月は無

事に過せる。この點は大に氣をつけてやる積りだ。一箇月が終つて私の傭主が旅から歸つて來れば私は最早大丈夫だ。私は直ぐに二年分の給料を債權者の間に割當てゝ、早速正業に從事する。

夜會は出席者十四人、樂しい會合であつた。ショアデッチ公爵、同令夫人、同令孃、ニウゲイト伯爵、同令夫人、チープサイド子爵、ブラサーカイト卿、同令夫人、尚ほ爵位のないのが男女數名、それに公使夫妻と娘、娘の逗留客ポーシヤ・ランガム。これは當年二十二才の英國婦人で私は二分間にして彼女に思ひを寄せ、彼女も私を憎からず思ひ込んだ――これは眼鏡を掛けずとも明白に認め得る事實であつた。外に尚ほ一人客があつた。これはアメリカ人で――いや話が一足飛びをした。一同應接室に寛と席を占めて、晩餐を甘く喰べる爲めに食慾を研ぎつゝ、後れ馳せの人に冷かな眼を注いでゐると、下僕がかう取次いだ。

「ロイド・ヘスチンヂス氏でございます。」

常套の辭儀が終つた刹那、ヘスチングスは私の顏を見て、かう懇ろに手を伸ばした儘一直線にやつて來た。それから握手をする所を急に思止つて、困つた顏付で、

「失禮でございますが、私は貴下に見覺えがあるやうに思はれます。」

「やあ、君か、見覺えがあるもないものだ。」

「いや、君があの――あの？」

「札チョッキの怪物か？　さうだ、さうだよ。綽名を使つても構はない。最早慣れつこになつて平氣なものだ。」

「さうか。さうだつたか、どうも驚く。君の名前があの綽名と一緒に出てゐるのを二三度見かけたことがあつたけれど、まさか君があのヘンリー・アダムスだらうとは夢にも思はなかつた。桑港でブレーク・ホプキンスの番頭をしてゐて、それ、小遣取だといつて、毎晩晩くまで例の鑛山の擴張の書類や統計を手傳に來てくれたのは、かうつと、六箇月前になるね。その君にこのロンドンで偶然出會さうとは全く思ひも掛けない。それも一寸の間にさうした途轍もない大金持になつてさ、大評判でさ、まるでアラビアン・ナイトだ。おい君、僕はてんから信用出來ん。狐に摘まれたやうだ待ち給へ、僕は眩暈がして來た。」

「うまく言ふが、ロイド君、君だつて僕に劣らない果報らしいぜ。僕こそ合點が行かない。」

「いや、僕こそ何が何だか分らない。考へても見給へ。唯三月前のことだぜ。君と一緒に組合の料理店へ行つて……」

「いゝや、極樂亭だつたよ。」

「さう〳〵、極樂亭、極樂亭。あすこへ夜の二時頃に行つてさ、六時間も打通しに擴張の書類を整理した後で、チョップを食べコーヒを飲

んでから、僕が一緒にロンドンへ來たまへといつて君を勸誘した。君の暇を買ふ方も萬端の費用も僕が請合つて、尚ほ擱出鑛山が思ひ通りに賣れた曉には、その上のお禮をするといふ條件だつたが、君は僕の言ふことを聽かなかつた。成功の見込がないと言つた。それから折角のところで店の方の手を明ける譯に行かない、それに歸つてから又新規蒔直しで忙しい思ひをするのが厭だと言つた。さうして置いて、君はちやんと此處に來てゐる。をかしいぢやないか？　どうして此方へ來るやうになつたのだい？　何が當つてそんなお伽噺のやうな成功をしたのだい？』

『全く偶然だ。話は長くなる、小說だね、謂はゞ、悉皆話して聞かせたいが、今はいけない』

『何時？』

『月末まで待ち給へ。』

『ちや未だ二週間からある。そんなに氣を長く待てるものか。一週間にしたまへ。』

『駄目だ。駄目な譯はその中に分る。ところで君の方は一體何うだい？　商賣は？』

すると今まで元氣好かつたロイドは急に悄げ返へつて、溜息を吐きながら、

『君は眞正に豫言者だよ。僕は來なければよかつたと後悔してゐる。僕は舊はこのことは話したくないのだ。』

『まあ話したまへ。此處が濟んでから今夜は僕のところへ來て泊り給へ。さうして一部始終を聞かうぢやないか。』

『行つてもいゝのかい？　擔ぐんぢやなからうね。』

と彼の眼には涙が浮んだ。

『いゝとも、僕は始めから終まで聞きたい。』

『有難い！　この期に及んで僕なり僕の事業なりに同情してくれる者があらうとは、今が今まで思ひがけなかつた。僕はこの膝を八重に折つてお禮をいひたいくらゐだ。』

とロイドは私の手を堅く握つて雀躍した。それから食堂の開くのを待つ間、彼は全然變つた快活な男になつた。

食堂は開かなかつた。否、開いたけれど、厄介な英國流儀の下に版で捺したやうに起る常套陳腐のことに惱まされた。即ち何人が先に立つて入るかを定めることが出來ない。隨つて食堂は開かないのも同樣である。押し並べて英國人は晩餐に招かれる前に家で晩餐を認める人これは先方へ行つてからどんなことかも知れぬと心得てゐるからである。しかしこんなことを警戒してくれる人もないので、外國人は安職として この保險に罹る。尤も今度の場合は何人も迷惑を蒙らなかつ

た。といふのはヘスチングスを除いては皆々その道の黒人であるから、既にちやんと食事を濟ましてから出頭してゐる。しかしてこのヘスチングスと雖も、招待を受ける際に英國流で食事の支度はしてないからといふことを公使から懇々言含められてゐたのであつた。それはさうと席次は兎に角融通をつけて、各々一貴婦人を伴ひ、食堂に進みは進んだが、こゝに又再び爭ひが起つた。ショアデッチ公爵は、アメリカ公使は單に一國民を代表するばかりで國王を代表してゐないから他の方が當然上席だといつて、食卓の一番上席を占めにかゝつた。しかし今度は私が不服で、私も私の權利を主張して、いつかな讓らない。御承知の通り新聞の個人欄では私は公爵連中と肩を並べてゐる。私はその旨を述べて、この度は上席を要求した。無論それでは問題が落着せず、公爵もナカ〳〵負けぬ男で、竟に名門とか先祖とかいふ文字を稱に取つて蒐つて來た。彼が國祖ウイリアム征服王の名を喋々してアメリカを若いといへば、拙者はアダムでござる、名の示す通り拙者はアダムから連綿と血を引いたもの、然るにウイリアムは何うぢや？　アダムの分家ではござらぬか？　近くノルマン時代に源を發してゐるから、謂はゞ成上りの三等平民に外ならぬと遣り返す。そこで我々は又々客間へ行列を引返し、そこで鰯の皿と苺の立食をした。此處では席次の宗教は前と異つて簡單を極め、一番身分の上の者が二人、銀貨を指先で彈いて、それが落ちた時に裏か上か表か上かと當てた人から先に食ふ。それから次の二人が彈く、食ふ、又次の二人が彈くといふ順序である。食後食卓が持ち搬ばれ、その上で一勝負六ペンス賭けのトランプが始まつた。英國人は如何なる勝負事も決して唯ではやらない。何か得るところか失ふところか——何方でも敢て構はぬが——それがなくては彼等は勝負事を絶體的にしない。

我々は樂しかつた。少くとも私達二人——ランガム孃と私は確かに樂しかつた。私は自分の手にある札の勘定が出來ない程彼女に見惚れてゐた。彼女とても同樣の狀態で、二人は負け續けに負けた。私は彼女に對しては迷信的に忠實で正直で、少しの腹藏もなかつた。私はこの世に例の評判の百萬磅の外は一文の所持金もなく、その百萬磅も實は自分のものではないことを打明け、それから聲を一段低くして、出發以來の一部始終を語つて聞かせると、彼女は笑ふや笑はぬでなかつた。一體何がさうをかしいのか私には分らなかつたが、兎に角戀人は笑ひ轉げた。私は相手に呼吸つぎをさせる爲めに時々談話を休めざるを得なかつた。それにしても何故彼女はかう笑ふのだらう。私には少しも笑ひ事ぢやない。事實私はこんな情けない話は他に例がないと思つてゐる。短言すれば、心痛と煩悶と恐怖の實歷に外ならない。しかるにそれが今述べたやうな意外の結果を傾げざるを得なかつた。それ

で彼女は面白くもないことをかく面白がることの出來る女だと思つた時、何も惚氣を言ふ譯ではないが、私はいや増して彼女が慕はしくなつた。といふのは昨今の形勢によつて察するに、私も早晩妻を娶る身、同じ娶るならば何うかかうした快活な女が欲しい。無論私は私の月給に追付くまでここ二年の間待つて貰はねばならぬと彼女に話した。しかし彼女はそんなことは毛頭意に介せず、唯々心して出來る丈け金費ひを内輪にし、三年目の月給に借金を持込まぬやうにしてくれと頼んだ。それから彼女は少しく不安の色を現はし、或は私達は勘違ひをして、第一年の月給を餘り高く見積つてゐるのではなからうかと言つた。これは眞に能く氣のついた注意で、私も幾分か確信を動かされたが、同時に私の商人氣質を發揮するの端となつて、私は無遠慮にかう訊いて見た。

「ポーシャさん、私が例の老人達にお目にかかる日に貴嬢の御同行は叶ひませんか知ら？」

彼女は稍ためらつたが、かう答へた。

「さうですねえ……若し私のお供が貴郎の好都合だと仰有るなら。ですけれど、一體私がお供をして差支ないものでせうか？」

「さあ、どうでせうか、少し工合が悪いかとも思ひますが、御一緒と御一緒でないとは老人の方の都合に大影響して來ます。」

「では善かれ悪しかれ、兎に角お供を申上げることと致しませう。」

と心から言放つて、

「まあ嬉しい！　少しでも貴郎のお役に立つかと思ふと！」

「少しどころぢやございません。貴嬢のやうなお美しい方の後楯がありますと、私はこの老人方が降參するまで月給の方の談合を手厳しくすることが出來ます。さうして貴嬢が澄まし返つて目の前に控へて居て御覧なさい。先方でも二の矢を繼ぐのにナカ〳〵骨が折れますからな。」

忽ち彼女の頰に若い温い血が上つて、彼女の眼は樂しさうに輝いた。

「うまいことばかり仰有つて！　私をお欺きなさる積りで種々のことを仰有るのは私ちやんと知つてゐます。けれども私お供してよ。好いお樂になりますわ。他の人は私の様にさう甘々と欺かれませんわ。」

私の彼等に對する疑念が解けたか？　彼等に對する信用が又戻つて來たか？　それは私が心窃かにその場で私の初年の月給を二千磅に上げてしまつたといふ事實で察して貰ひたい。しかし私は彼女には何う話さず、後日驚かしてやる積りで心の中に納めて置いた。

家に歸る途すがら、私は天にも昇る思ひだつた。ヘスチングスは頻りと喋つたが、私は一言も聞きしない。二人して私の事務所の部屋に入つた

時、彼が私の生活を大袈裟だの贅澤だのといつて頻りに嘆賞してゐたので、私は不圖我に返つた。

「まあ暫く此處に立たして飽きるまで見させてくれ給へ。まるで王侯の生活ぢやないか。宮殿その儘だ。石炭が好い色に燃えてゐる。夜食の支度が見事に出來てゐる。何でも欲しいものづくめだ。ヘンリー君、これは啻に君の成功を察しさせるばかりじやない。君の富を察しさせるばかりぢやない。僕は君の生活を見て切實に僕の貧乏さを感じる。僕は失敗したんだ！　蹴躓られたんだ。零落したんだ！」

　これは舍して貰ひたかつた。そんなことを言はれると私は慄然として來る。戀の醉も忽ち醒めてしまつて、私は噴火口を下に一分板の上に立つてゐるやうな危い心持になつて來た。たつた今まで夢とは知らずに夢を見てゐた――少くとも一分前までは自分の現狀を全く忘れて好い心持でゐたのに、やれ〳〵又ござつたか！　借金は首つたけ、しかも貯蓄は天にも地にも一文なし。尙ほその上のことには行末長い美しい娘の幸福を一身に引受けて、しかも空賴みの月給の外何も前途にない。私こそ取返しもつかぬ零落だ！　取返しのつかぬ……

「ヘンリー君、君の每日の收入の……」

「何？　僕の收入！　まあ此處に坐つて一杯やり給へ。さあ一杯。いや、君は腹が空つてゐるんだつけな、ぢや腹拵へから先に、さあ坐つたく！」

「いや、何も喉へは通らぬ。それどころぢやない。この二三日僕は何も喰べない。唯酒だけは倒れるまで飲む。さあ、一杯受けやう。」

「何時でもだ。お相伴する。さあ、ロイド君、いゝか？　僕がかうして酒番をする間に君は一部始終を話し給へ。」

「話せつて？　又か？」

「又かつて？　そりや何ういふ意味か？」

「何ういふ意味かつて、もう一遍僕の話を聞きたいつて言ふことか？」

「もう一遍聞きたいかつて？　一遍にも二遍にも君は未だ一向話しちやゐないぢやないか？」

「馬鹿あ言つちや困る。今此處へ來る途々一部始終を話して聞かせたぢやないか。どうも物覺えの惡いのに驚いてしまふ。唯今話したばかりだ！」

「君がか？」

「僕がさ。」

「さうだつたか？　何うも失敬した！　僕は一言も聞かなかつた。」

「ヘンリー君、これは聞捨てにならんね。非道い男だ、一體君は今夜公使館で何をして來たか、さあキリ〳〵此處で白狀したまへ！」

そこで私はさてこそと思ひ當つて、男らしく萬事彼に告白した。

「僕は美しい娘を生擒にして來た。」

すると彼は矢庭に私に摺り寄り、私達は手の痛くなる程握手をした。思ひ合はして見ると彼の談話は途すがら三哩も續いてゐる。それを一言も聞かなかつた私を敢て咎めもせず、何處までも好く出來た男で、彼は診察を受ける患者のやうに几帳面に其處に坐つて、失敗談を今一度繰り返した。それは掻い摘んでいふとかういふことに歸する。彼は一大好機と思つたものを掲げて英國に渡つた。彼はゴールド・アンド・カーリー擴張鑛山をその選定人の爲めに賣りたいが、如何か百萬弗に騰るまでは手放さぬといふ兩立を持つてゐた。彼は一生懸命に運動した、知つてゐる手蔓は悉く引張つて見た。有りとあらゆる正當の手段を用ひ盡した。財産を殆んど全部この取引に注込んでしまつた。しかも一人の資本家にも出會さず、彼の兩立の期間は憐れ月末に切れるといふ破目になつてゐた。一言すれば彼は破滅したのである。語り終つて彼は涙を流しながら、

「ヘンリー君、助けてくれ、君なら助けることが出來る。今の場合僕を助ける力のあるのはこの廣い世界に君ばかりだ。助けてくれるか？　おい、君、助けてくれられないか？」

「何うして助けるのか、まあ言つて見給へ。」

「兩立を百萬弗で買つて、歸りの旅費を借してくれ給へ、お願ひだ！」

私は一種の烈しい苦悶を感じた。私は危くから叫び出す所だつた。

「ロイド君、助けるの助けないのと言つて、僕自らが貧賤人だ。一文なしで動きのとれぬほど借金を背負つてゐる。」

しかし白熱のやうな觀念が私の腦裡に閃めいて、私は堅く齒を噛み締め、遂に私が資本家のやうに冷靜になるまで持ち耐へた。それから私は實務的の泰然たる態度でかう言つた。

「ロイド君助けて上げる。」

「有難い！　もう助かつたと同樣だ。何とも御禮の言ひやうがない！　若し將來……」

「まあ僕に言はせ給へ、ロイド君、助けるには助けるが、君の言ふ條件で助けるのぢやない。一生懸命働いて、さんざ苦勞をした揚句に、そんな眞似をしたんぢや君の損になる。それに僕が鑛山を買つても仕方がない。そんなものを買はずとも、このロンドンといふ商業の中心には資本の運轉法は幾何もある。無論僕はその鑛山のことはよく承知してゐる。その價値の測り難いことも先刻心得てゐる。若し必要があるなら何人の前へ出てもさう誓ふことが出來る。ところで、ロイド君、いゝか、君は僕の名をいくらでも利用して、その鑛山をこの二週

間の中に三百萬弗で賣るのだ。いや、僕が必ず賣らせる、さうして利益は半々に分けることとしよう。』

見よ、ロイド、ヘスチングスは狂喜の餘りに天手古を舞ひ出し、若し私が取捉へて縛らなかつたら、彼は室の中の品物を悉く壞してしまうところであつた。

それから彼はから言ひながら大滿足の體で少時その場に寢轉んでゐた。

『君の名が利用出來る！　君の名——まあ考へて見給へ、金のあるロンドン人が雲のやうに集つて來るぜ。何にも言はずに飛び付くぜ、僕は最早成功したものだ。永久に成功した。僕は生きてゐる限り君の御好意を忘れることが出來ない。』

二十四時間たたぬ中にロンドン中が騷ぎ出した。私は毎日家に坐つて、來訪者に唯かういふ外、何の仕事もなかつた。

『それに相違ありませんです。私を證據人にして差支ないと私はあの男に申して置きましたです。私はあの男もあの男の鑛山も兼々承知なのです。あの男の品性には一點の批難す可きところがないのです。さうしてあの鑛山はあの男の言値どころのものぢやありませんのです。』

兎角する中、私は毎晩公使の家へ行つてポーシヤと時を共にした。私は鑛山の件に就いては一言も彼女に告げず、これは後から喫驚させてやる爲めに取留とした。私達は唯月給の談話をした。月給と戀愛の外は何事も話さなかつた。或時は戀愛、或時は月給、或時は戀愛と月給を一緒に論じた。公使夫人及令孃は私達の小事件に好意を表し、なるべく私達の邪魔をせぬやう、又公使が私達の關係を嗅ぎつけぬやうに、陰になり陽になつて庇つてくれた——その恩義は今も深く感銘するところである。

竟にその月が終つた時に、私の名はロンドン地方銀行の帳簿の貸方に百萬弗といふ數字と共に記入され、ヘスチングスの名も同樣同額に書き込まれた。私は上等の平常着に出立ち、ポートランドプレースの例の屋敷の前を馬車で通り、その邊の形勢によつて、最早私の鳥の歸つてゐることを確め、直ぐに公使の家に馳けつけて戀人を拉し、私達は又一生懸命に月給の談話をしながら引返した。興奮と心配とは彼女の容貌を得も言へず美しくした。私はその頰に一寸指を當てゝ、

『ねえ、こんなに美しいのだもの、これは年に二千磅を一ペニー缺けても邪魔だ。きり〳〵結着のところで三千磅と談判しませう。』

『ヘンリーさん、ヘンリーさん、あなたはそんなことばかり仰有つて、お相談を悉皆壞してしまひますわ。』

『いいや、大丈夫、御心配御無用、あなたは唯その通りのお顏をなすつて、いゝですか、萬事私にお委せなさい、皆此方の思惑通りに參り

ます。」

それで私は途すがら彼女の事情を話さねばならなかつた。彼女は又彼女で獨りにかういふ考へを繰返してゐた。

『嚴正にお氣をつけ下さいよ。餘り大袈裟な御要求をなさると、却つて給料は一ペニーも出さない筈といふことになりますからね？　すれば私達は何うなるでせうね？　何も生活の道がないのですから。」

私達は前と同一の下僕に取次がれ、例の二老紳士は果して在宅であつた。彼等が私が女伴を作つて來たつたのに言ふまでもなく一驚を喫したが、私はから言つた。

『何も御心配はございません。これは私の未來の妻でございます。』

さうして私は彼女を彼等に紹介し、且つ彼等の名を呼んだ。しかし彼等は私に紳士錄を調べるぐらゐの智慧はあると解してか、一向に驚いた樣子も見せなかつた。次いで彼等は私達に席を與へ、私に向つて丁寧に、又彼女に對してはその當惑の有樣をくつろがせる爲め、恭ら慇懃に勸めた。それから私が言つた。

『お二方、私は御報告に罷り出ました。』

『よくお出下すつた。實は待つて居たところです。』

と私に亂暴の方の老人が言つた。

『御蔭で私は、弟のアベルとの賭を直ぐに決めることが出來る。若しもあなたが私の思ふ事になるやうに賭けを勝つやうにして下すつたたら、私はあなたに私の力の及ぶ範圍で何なりと都合の好い地位を周旋して差上げる。何うですか、例の紙幣は持つて居ますか？」

『この通り無事で此處にございます。」

と私は百萬磅を彼に手渡しした。

『さあ、俺が勝つた！』

と彼は絶叫して、アベルの背中を叩き、

『これ、アベル、どうぢや、どうぢや？』

『一言もない。大將この通り無事息災でゐる。俺は二萬磅棒に振つてしまつた。がまさかかうなるとは思ひがけなかつた。』

『私は未だその上の御報告がございます。』

と私が割入つて、

『長い〳〵御報告がございますから、又その中に出直しまして、一箇月の經歴を一部始終ゆる〳〵とお聞きに入れませう。まるで小說です。どうも種々のことに出合ひました。唯今のところはこれを御一覽下さいませ。』

『何ですか？　これは二十萬磅の預金證書。あなたのですか？』

『はい、私ので。御拜借のお金を三十日間都合よく運用した結果でございます。尤も運用と申しましても、小切手を發しまして、これでお

新紙をと例の紙幣を見せつけるだけのことで。」

「何うも驚く。俺は眉毛へ唾をつけにやならぬて。」

「いや、何でもないことで。私が證明をして差上げませう。すべて證據つきでなければ、私の言葉は一切お取上げになりますな。」

しかし今度はポーシャが畢竟一番する順番で、彼女はさなきだに大きな眼を廣く睜つて、から言つた。

「まあ、ヘンリーさん、それは眞正にあなたのお金？　それならあなたは私を瞞してゐなすつたのね？」

「實はまあそんな譯合のものだが、まあいゝさ、堪忍するさ、私も少考へがあつてしたことだ。」

彼女は口を尖らせて、又言つた。

「さう獨り合點ばかりなさるものぢやなくつてよ。今の今まで私を瞞して置くなんて、眞正にお人の惡い！」

「まあいゝさ、まあいゝさ。勘忍して置くさ、眞の冗談づくでしたことだ、さあ、談話の續きをさせなさい。」

「しかしお待ちなさいよ。地位の方は何うしますか？　約束の地位は？　私は地位を探して上げにや義理が立たぬ。」

と私の贔屓が言つた。

「いや、有難うございますが、そのお志だけお受け致して、地位の方は實は欲しうもございません。」

「ですが、私のお世話の屆く中で一番上等のをお選り取りが叶ひますか。」

「御好意は千萬有難うございますが、それも欲しうはございませんから、最早その御心配は御無用に願ひませう。」

「ヘンリーさん、あなたには眞正に困るわねえ。少しはこのお方の御親切も酌み取つてお上げなさらなけりや。何なら私が代りにその地位の選擇をして上げて宜しうございますが？」

「宜しいとも——後で持餘すやうなことはないとさへお言ひなら。まあ、やつて御覧なさい。」

彼女は私の庇護者の方へ歩み寄つて、その膝に乘り上り、その頸に腕を捲め、眞正面からその唇に接吻した。すると兩紳士は大聲を立てゝ笑つたが、私は餘りのことに度膽を拔かれ、石化したやうに立すくんでゐた。ポーシャの言ふやう、

「お父さん、あの方はお父さんの御周旋には欲しい程の地位がないと仰有いました。私、何だか馬鹿にされたやうな氣がして……」

「おや〱、それではこれがあなたのお父さまで？」

「さうですよ。私のお父さんです。天にも地にも掛替へのない大切のお父さんです。今こそお分りでせうね？　この間私が公使館であんな

に笑つた譯か。でも私共の關係を少しも御存じなしに、お父さんと叔父さんのお惡戯の爲めに酷い目に遭つていらつしやるお話をなさるものですから。』

無論私は最早容とぼけの假面を脱いで、事實有りの儘を告白し、直ちに談話の要點に立入つた。

『では甚だ勝手でございますが、私は先刻からお斷り申上げたことを取消し度うございます。あなたに於きましては私が心の底から望む地位が一つございます。』

『何ですか言つて御覽なさい。』

『御養子の地位でございます。』

『宜いとも〳〵。したがあなたは今までさうした地位には經驗がなからうから——無論あられては堪らないが——隨つて契約條件を滿足させるやうな履歷證明を持つて來ることも叶ふまい。して見ると困つたものだ。それで……』

『まあ何うか使つて見て、お試めし下さい。唯三四十年で宜うございますから何うか使つて見て下さい。さうして若し……』

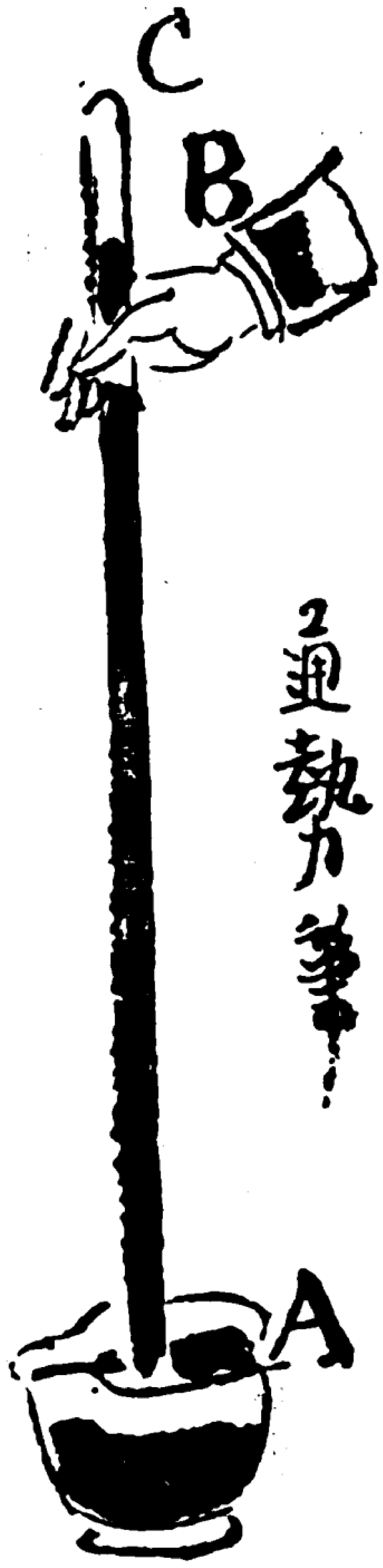
『はつは……宜し〳〵、安心するか宜い。お易い御用ぢや。娘を連れて行つて構はない。』

私達は欣躍して婚約の成立を祝した。私達の喜びは簡短な言葉ではナカナカ盡し切れぬ。それから二三日してロンドンの市民が私の紙幣を背負ひ込んでの一箇月の冒險及びその結果を聞知つた時、頗るところその評判で持切つた。

ポーシヤの父は例の百萬磅紙幣を蘭英銀行へ持つて行つて現金に兩替した。すると銀行はその紙幣に棒を引いて、紀念の爲めに彼への贈物とした。彼は又結婚式の時、それを私共新夫婦に與へ、それから今日に到るまで、この紙幣は額緣に收められて、私達の床の間の飾りになつてゐる。この紙幣こそ私にポーシヤを授けたものである。若しこの紙幣なかりせば、私はロンドンに滯留することも出來ず、公使館へも出頭せず、隨つて彼女に會はないでしまつたに相違ない。それで私は何時も口癖のやうにかう言ふ。

『御覽の通りこれは百萬磅の紙幣である。しかしこの紙幣は、その一生に唯一度しか買物をしない。それもその額面の約十分の一の品物を買つたに過ぎない。』

（をはり）



生ける留針

ジョセフ・ルノオ作
保篠龍緒譯

「一」

「まあ！ 厭だわ！ 此の留針はまるで生きてゐるやうよ」

吐き出すやうに斯ういつた、テローブ教授の愛孃、今はシュリチイ伯爵夫人アリスは、人人の手から手へ持ち廻つて觀賞されてゐた青銅製鰐の浮彫をした珍奇な留針を窓枠の上へ投げ出した。

ファラヲの時代、さる派手者の髪飾の爲めに彫られた此の留針の柄飾は蛇神セヴエリを現はしたもので、微細な、丹念な彫刀の妙は物凄い鰐魚を躍らせ、それが幾世紀を經て暗綠色の艶を浮べてゐる。まこと、此の留針が投げ出されて窓枠に衝突かつた時に、並みゐる客達は、吾等の紀元前十一世紀時代の石棺の間から取り出された杯や、首飾などの間で、蛇神がキラリと物凄い眼を光らしたやうに思つた。が然し、青銅の鰐は唯窓枠の上に横はつて、それらしい様子もない。

「ねえ、父様、これだけはお父様の蒐集した中で一番いやらしいものよ」

と愛孃伯爵夫人は恐ろしい遺物におびへて夫シユヂイ大尉の肩にその恐ろしさからの保護を求めてゐた。フランス高等學校考古學教授テローブ氏に招かれて、邸宅といふよりは博物館見たやうな同氏宅に集つた人々は別段それ程の恐怖も感じてゐなかつた。青白い電燈の下に浮き出してゐる大廣間には蒙昧な時代の文化の跡をまざ〳〵と物語る幾多珍奇な、怪奇な姿や品物が、あの幾千年の墓場の中から星霜幾世紀をさらされた石棺の中から、人を喰ふ土人の棲む森の奥から運び出されて、茫然たる古色と幾千幾世紀の恨みや悲しみを包んでそゝり立つてゐた。

巨大な姿をしたスフインクスの上からは、獅子頭の女神が怒りの顔物凄く輝かしてゐる。壁は黒く、電燈の光は薄青い神秘の色を流し

て、いひ知れぬ時代の臭ひが、當時の香料そのまゝに室中にたゞよつてゐた。

斯うした裝飾の中にあつては、如何に神經の强い人でも、傳說の在りし昔の雰圍氣の中につゝまれて仕舞ふ。

招かれた男女は大抵大學關係の人々で、文藝、想像の世界に生きる人はまれであつた。然し彼等の瞳は期せずして、生ある如き此の留針を離れる事が出來なかつた。

有名な小說家ヲスカー・ヘツケイが窓枠に近づいて靜かに留針を拾ひ上げた。一座は水を打つたやうに靜まりかへつた。集つた教授達も、教授夫人達も、彼ヘツケイの文才と惡評とをのみ知つてゐた。とかく惡評のある男は斯した學者達からは一種の目を以て見られ勝ちである。

彼の小說はその鋭い筆勢と、明確な描寫で、所謂交際社會のゴシツプを遺憾なく剔抉して、多くの人々から惡まれしも、恨まれもし、決鬪も申込まれ、訴訟さへされた。人々は彼のいまはしい陰口をきく。彼は尊敬されるといふよりも敬遠され、恐れられてゐた。

彼は指輪がキラ〱光つて爪の延びた手で上品に留針を取り上げ、染めたかとも見へる黑いぱさ〱した髮の毛の下に光る片眼鏡をかしげて、色つやの惡いひからびたやうな顏へ近づけて眺めた。

『ねえ、テロープさん。此の留針は實に嫌な奴で、貴下の蒐集品の中にふさわしくないですなあ。無智蒙昧の野蠻人なんてものは動物を崇拜したり太陽を拜んだり、馬鹿々々しい話で、理屈をいへば歷史的にも、人間心理の上にも夫々說明は出來るが、その遺物を後生大切と崇拜しているなざあ、研究といふ事を除くと、いさゝか彼等蠻人と同じ心理かも知れませんね、……まあ、僕が貴下だつたら、こんな代物は誰へでも叩き込んちまいますな。アハハ……』

人々の眼はテロープ教授にそゝがれた。頑丈な體格の彼もいさゝかムツとしたらしく、常よりもやゝ赤顏の色を作したが、然し、短い頰髯を生した彼の顏は、發掘地の風雨にさらされてやゝ日にやけた「探險家」の顏は和やかに微笑した。

『おい、氣をつけ給へ。ヘツケ!!……私が君だつたら、そんなにまでエヂプトの神樣をこきおろさないね!……時は時代から時代へ、神聖な動物として遁つて來た。斯うした長い間の禮拜讃美、その結果、其處にいひ知れぬ神秘の力、恐ろしい力が生れて來てゐないとは、誰れが斷言出來やうか?……私が此の青銅の留針を發見したのは、あのエジプト學者の殆どすべてが恐ろしがる蛇神聖地として有名なマクテベでした……忘れもしない、あの時は吾々一行は土人を加へて、殆ど全裸に近い姿、頭には白い布を卷き、手には赤々と燃へる炬火を點し、壁に映る黑い影は丁度、當時の土人その儘の姿でした。然し其の話は少

しも違しない地下の洞穴の中、私は、三千年の昔に還つたやうな氣がしました……其處に巨大な蛇神の眼のみが爛々と輝いて私を見詰めてゐました、私が生命を捧げてゐる古代エジプト大文明の供物のやうに……だから私は私の死後、この青銅の神體は彼の地へ送り返して、古代エジプトの神にふさわしいその發祥の地に奉安し度いと思つてゐる位です。』

話を聞いてゐる内にヲスカー・ヘツケーの口元は嘲笑の爲めにゆがんで來た。

『僕は、どうしても此の留針に、留針のかざりに對して好感は持てないね。……僕は鰐は大嫌ひだ……尤もそれには悲しい思ひ出もあるんだが……今から二十年前、僕が印度へ無二の親友と二人で見物に出かけた時……或晩、恐ろしい沼の邊の細い小徑を通つて森の中のテントへ戻らうとした事がある、……右を見ても、左を見ても山と谷、……闇の中に、何處からとなく鼻をついてにほつて來る腐つた植物の甘酸ぱい匂ひ、然もそれに混つて鰐のゐるとも思へる生臭い匂ひ、沼の匂ひ……その中を先頭に立つてさぐり／＼進んで行つた親友が……突然、バタリッと泣つたやうな音を立てた、と瞬間、アッといふ悲鳴、重くるしい水の音……ハッと思ふと私は頭から泥を浴びせられて立ちすくんでしまつた……それつきりです……私は森の中に唯つた一人取り殘されました……爾來、僕は鰐を呪ふ、鰐に對して僕は恐ろしい憎と呪ひを捧げるやうになつたのです』

『そうですか、それも御尤もですな』とテロープ教授がいつた『君の親友を呑んだアリゲーターと、此の留針の蛇神クロコダイルとは、又其處に違ふ所がある。……科學の力と又今日の科學を以てしては解釋の出來ない或る神秘の力とのある事は既に科學者の間でも信じられてゐる、……古代エジプトに偉大なる神秘の力、私はそれを信仰する……有り得べからざる事、それが有り得る宇宙間の驚異的力の前には人間は弱いものである、其處から信仰が生れ、崇拜が起り、超自然の超科學の奇蹟が生れる事があります。……例へば最近に起つた英國博物館の事件……あれなどは誠に科學の力を以てして何ほ不可解に屬するものではありませんか……エヂプトの高僧アーメン・ラーのミイラを包む聖體から迸り出た恐ろしい呪の力、それが此の聖體に關係したすべての人々の上に魔の手をひろげた……聖體を發見した探檢家、地上に運び出した印度人達、箱につめた職人、船へ引き上げた船夫、博物館の一階へ運び上げた小使、等、等、等、それが皆呪の犠牲となりました……聖體が來てから、死んだもの、火難に遭つたもの、盗難に襲はれたもの、病氣に罹つたもの相續いて倒れた……爾來看守さへ恐れを爲して此のミイラには近づかなくなるし、……新聞でも不吉な事件を書き

立てる……といつたやうな事で、博物館長も持てあまして、之れを米國の富豪に高價で譲渡しました……處が、船に積んだ人夫は足を折つた！……そうして呪の聖體を運んだ船はどれだと思召す？……あの有名なるタイタニック號、その船でした。タイタニックが大洋上の一大悲劇、それで呪のミイラの終結をつけてしまつたのです？……それ等の事件を、唯だたんに遇合として片付けるには餘りに遇合すぎます！其處に何かしら非科學的のあるものがひそんでゐはしないか？今一例を科學的なものから擧げれば、メキシコにある特殊の植物です、その植物に觸れたものは、完全に方角の意識を失つてしまひます……或は河をさけやうとして却つて河中に陷つたり、或は谷を渡らうとして、却つて谷の中へ飛び込んだり、……醒めてゐ乍ら然も魔酔状態に陷つてしまふといふ……その同種の植物がエジプトにありはしないか？若し此の種の植物が博物館のミイラの中に入つてゐたのではあるまいか……古代エジプトに殘る不思議の數々、其處には信ずべからざる理の奇蹟が絶へず生れて來、絶えず行はれてゐます……』

怪奇な教授の話しに一座はシンとして沈默に陷りつゝ、默つて室内に滿ちてゐる黑い石の神體や、ミイラや土像などを見詰めてゐた。

そして人々の視線が靜かに萬古文士ヲスカー・ヘッケイに向けられた時、彼はスックと立ち上つて叫んだ。

『成る程。面白いです。では僕はその不可解な力の試驗台にならう！……僕は古代エジプトに對して極度の白眼を送る！……そうして此の不快な留針に對して僕は極度の嫌惡を表明します！ 僕はこの留針を惡む！……惡罵する！ そして若し此の留針にして靈あらば、僕に復讐するがいゝ、恐らくこれは不可思議な、意想外な、怪奇な事實でせう……滿場の淑女、紳士諸君、諸君は證人になつて下さい！ 僕は幾時代を經て蒼く錆びた此の鰐の浮彫を冒瀆してやる、糞でも食へ！ と。……でテロープさん、その結果はどうなりませう？…果して僕は惡罰を受けるでせうか？……熱病になりますか？……頓死しますか？……發狂しますか？……何ともない！……結局僕はこの通り平氣で丈夫で、ピン〱してゐます！ アッハ、、、、、』

笑つて彼は留針を掴み上げると、いきなり、それを窓を目がけて發止と投げつけた。針はキラリと光つて窓に當つた……。

「二」

愉快な打ちとけた宴會につゞいて餘興の幕が開いた。主人の好みにちなんで、古代エジプト、ダンス。きらびやかな、そして又怪奇な神話をとり入れたダンスに人々は限りない興をやつた。東洋風を加味してゐるエジプト音樂も、スヒンクスや女神やミイラの室をすつかり飾

でしまつてゐた。

その中でも今夜のプログラムの呼物はヲデオン座の人氣花形悲劇女優として知られたジャニー・スーヴラン孃の獨唱であつたが、當のスーヴランは、嘗て例の毒針を振つてひどい目に會はされたヲスカー・ヘッケイのゐる前では絶對に出場しないといひ出した。

黒いスフインクスの像の影で、アリス・ド・シュリジイは極力スーヴラン孃を慰めて、出演をすゝめたが、ヲデオンのスターは唯だ悲しげにその頭を振つてゐた。

『ほんとうに申譯がないので御座いますが、こればつかりは、どうしても嫌なので御座いますの……えゝ、あいつが今夜來ると知つてゐましたならば、テロープ先生に御約束はしなかつたのですのに……私ね、死んでも、あいつの前へ出るのは出來難いんですわ……あいつは私の職業をこはし、私の生命までをきづゝけたのですわ……私に會つた事もないくせに、何一つ私があいつにした事もないくせに、……私の事を、無實無根の私の悪口を雜誌に書き立てたんですのよ……あの記事さへなかつたならば、私はコメデイ・フランセイズ座へ出演られてゐるんですのに……私口惜しくて〱……』

彼女のいふのは尤であつた。ヘッケイが嘗て面白半分のゴシップに、スーヴラン孃の私的生活を槍玉に擧げて、猛烈に手きびしく書き立てた事がある。然もそれが根も葉もない捏造であつたのだから、當の本人としては恨み骨髓に徹するのも無理からぬ事であつた。

『あいつの前では、聲が喉から出て來ないんです……そればかしではなく、あいつの顔を見ると、カッとして飛びかゝつて……殺してやつたら、いゝ氣持になると思ひますわ……』

彼女は如何しても出演するのをきき入れなかつた。

然し餘興は靜かに進行して行つた。餘興場内はヒンヅー人とエジプチアンとの混血兒であるラムーが一切の世話をして廻つてゐた。そして故郷の唄に浮かれながら、ラムーは靜かに余興場を出て會場の方へ出て行つた。

それから間もない事であつた。暫く前から會場を離れてゐたヲスカー・ヘッケイが會場休憩室に入つて來て、其處にゐた。テロープ氏に向ひ、

『テロープさん、僕は昨年來腎臓炎の結果、ついモヒ中毒になつてしまひましてね……實は晩のモルヒネ注射の時間になつたんです……實につらいです……で申兼ねますがどこか靜かな室を貸して頂けませんか、數分間靜養したいんですが……』

『えゝよう御座いますとも……』

テロープ氏は靜かに立ち上ると、客の間を通つて少し離れた一室へ

案内した。其處は現在のシユリヂイ夫人がその娘時代アリス・テロープといつた頃の勉强室になつてゐた室である。

ヲスカイ・ヘツケイは中に入り、ニツコリふり返つて微笑した。そして自分で扉を閉めた。

ヘツケイが令孃の書齋へ案内された時は、丁度音樂が靜かな調子を奏してゐた處であつたので、他の客達が皆知つてゐた。

エジプトの歌劇が終ると若い詩人が何にかみ乍らもエジプトの神秘を禮讃する自作の詩を朗讀した。朗讀につゞいてヲペラ座のローズ・プルム孃が唄ふ事になつた。ローズはジヤンヌ・スーヴラン孃とは反對にヲスカー・ヘツケイの面前で是非とも二章だけは唄はなければならない章句があるといひ出した。樂譜をぐる〳〵と卷いて膝の上に乘せたまゝヘツケイの來るのをぢツと待つてゐた。

斯うなると客も文士ヘツケイが入つた室の扉口を見詰めながら彼の出て來るのを靜かに待つた。

『中々出て來ないではありませんか?』とプロール氏がシユリジー夫人にいつた。『彼の男は、時々こんな風にすつぽ抜かして歸つて仕舞ふ癖があります……』

『いや、決して歸る筈はありません!…あの室には此のホールの方に向いた扉口より他に扉口がないのです。若しスーヴランさんの寢室を通にかけて逃げ出さうとしても、我々の見てゐる扉口から出なければ、他に出口がないのでして、窓には鐵格子がはめてありますし、暖爐もない室ですからなあ!』

人々は尙待つてゐた。

『氣分でも急に惡くなつたのではないでせうか、少し心配になり出しました』とテロープ氏が嚴肅にいつた。

間もなく扉口の近くにゐたヴアンチエ夫人と他に二三の夫人が、何かしら勉强室の中で唸き聲のやうなのが二度ばかり聞へたやうだといひ出した。

待ち兼ねたテロープ教授が靜かに扉を叩いた。返事がない。二度目に强く叩いた。

何の返事もない。

『ヘツケイ君!……』と彼は叫んで『ヘツケイ君!……』。

不相變、返事がない。……どうも怪しい。

人々は扉を開けやうとした。が中から門をかけてあつた。

ヘツケイの近しい友人の話によると彼は自宅でも乃至は友人の家でも、時々靜かな、離れた室でモルヒネの注射をする事がある。その時には必と今日のやうに室の中から鍵をかける習慣になつてゐるけれども、大抵七八分後には元氣な顏をして部屋を出て來た。

人々は立ち上つた。椅子がガタ〳〵と鳴つた。婦人達は怖へたやうに顔を見合せた。

人々は扉口へ一とかたまりになつた。中でもシュリチイ大尉が、ステッキでコツ〳〵と扉を叩いた。

三度、四度、コツ〳〵と叩く音の後で、人々は耳を澄まして中からの返事に聴耳を立てた。ステッキで扉を打つ音が消へると四邊は森閑として、深い沈默があるばかり、東洋風の面怪な像に蒼白い電氣の光が點々として投げられてゐた。「扉をこわして見たらどうです」とアンリ・ガリノ氏がいつた。「ヘッケイ君は中で急病になつて、返事をする事も扉をあける事も出來なくなつたのではないでせうか？」

テロープ教授が斧を持つて來た。

力をこめて發止と扉を打つた、重くるしい音、板のこわれる響……鏡板がまづ壞れた……閂がはずれた、扉がさつとあけられた。

小さな室内は眞闇だつた、ドツと人々が室内へ入つた。

パッと電燈が點くや否や、アツ！　といふ恐怖の叫びが起つた、ヲスカー、ヘッケイは顔をうつ伏せにパッタリ床の上に倒れ、兩手を胸に組んで、指先を引きつらしてゐた。……

のみならず、見よ、彼の頸を！　エヂプトの留針、彼が悪魔の限りを盡したエヂプトの留針の浮彫をした留針が、喰ひ入るやうに彼の頸に突き刺さつてゐる……カラーを生々しい鮮血に染めて……

ハッとしたシュリチイ大尉はガリノやテロープ教授やプロール氏などが、ドヤ〳〵と室内へ入つて來た人々を室外に押し戻して、扉口へ立ちふさがり乍ら、

「何んでもありません……諸君、何んでもないです……一寸急病らしいだけですから……御心配なく……」

然し、デイヤール博士の診斷の結果留針は不可解な正確さを以て頸静脈に突刺さり、それが致命傷になつてゐると斷言した。

それにしても？　ヘッケイが此の小さい室内へ入る時には、此の室内に誰れもゐなかつた事は、來客がすべて目のあたり見てゐた事である。……決して間違ひはない。室のあたりがホールよりも明かるかつた關係上、明かにヘッケイの室に入る姿を見る事が出來た。……

室内の家具といへば、椅子三脚、敷物、木製抽出なしの卓子一脚、それから窓掛もなく、煖爐もなく、窓には鐵格子、壁も、天井も、床も、秘密の出入口は一つもない……

ヲスカー・ヘッケイは全くの獨り、明瞭に單獨で此の室内に入つたのが、今、總計數分間に、見るも無慘な死に方を、自殺とは思へぬ死方を如何したらうか？……のみならず、指輪へヘッケイが投げつけ

た儘に窓枠の上に横はつてゐたエヂプトの留針が如何して今ヘツケイの頭に突刺つてゐるのであらうか?……

「三」

すべてが謎である。急を聞いて驅けつけた警察、檢事局、直ちに詳細な調査と捜査に從事したが、何等得る所がなかつた。

翌日も、又その翌日も、敏腕な刑事の努力も、有名な文士ヘツケイが怪死は依然として五里霧中の謎として、そこに光明の片影すらも認める事は出來なかつた。

ヘツケイの死は決して自殺ではない。留針を斯程まで正確に自らの手を以て頸動脈に突刺す事は不可能である。然も一面には招待された人々は皆一樣に、ヲスカー・ヘツケイが室へ入つた後に於て、留針が猶依然として窓枠の上に横はつてゐた事を認めてゐる。從つて彼が留針を持つて室へ入らなかつた事は爭はれない事實である。然も、彼が死の原因は、此の窓枠に棄てられてあつた留針の刺傷に依るものである。

然らば彼が入室後、何時まで、留針は窓枠の上に置かれてあつたか? 留針が窓枠上にあつた最後の時間を正確に知る事は非常に困難であつた。二、三分間だと中學校のバルザール教諭がいふ。いや五六分だつたとアンリ・ガリノ氏が證言した。

ソルボン大學教師のルーデツト氏は人々がヘツケイの身の上が不安になつた頃、不圖窓を見た時にはまだ留針が横はつてゐたといつた。

ヴアンチエ夫人、化學者ブロー夫人、小學校長ドンヴイル夫人其他二三の夫人がヘツケーの唸り聲を聞いたといふ時間から綜合すれば、ヘツケイは入室後十三四分で、何か恐ろしいものを見て恐怖の聲を擧げ、テローブ教授が斧で扉を破壞する五分前に最後の唸り聲を發したに相違ない。

ヘツケイの致命傷は確實に刺殺であつて、注射に使用したモルヒネの容積を調べて見ると、モルヒネの量は〇、〇二、決して致死の原因にはなり得ない。

壁、天井、床、何等怪しむべき箇所も見出されず、物を投げる隙間さへも無い事が明瞭になつた

窓の鐵格子は非常に細かくて廿日鼠ですら通る事は出來ない。そして又窓はアリスが結婚後は嚴重に閉めて仕舞つてあり、然もカザン街にのぞんで二階にある。

無論室内に隱れてゐるやうな場所もなく、平素から、アリスの結婚後は扉を閉ぢて使用しなかつた部屋だ。

謎である。秘密である。不可解の死である。

がたゞ一人、教授の召使である印度人ラムーだけはエヂプトの蛇神の御罰が當つて、神様から復讐されたのだと信じてゐた。

斯うした全く迷宮裡の捜査の間に一日二日と經つて行つた。……

「四」

……蛇神の留針、生ける留針が生み出した最初の怪事件は斯うして永久の謎となつたが、その後にヘッケイの自宅にも留針が恐ろしい復讐をして行つたり、怪奇な事件がつぎ〳〵に起つたりした。然し警察も名探偵も殆ど手の下しやうがなく怖れた生ける留針の秘密はたつた一人、犯罪心理學研究學會の會員クリストフ・ローゼ教授だけが知つてゐた。そしてローゼ教授の親友で、此の事件の關係者であるアンリ・ガリノが「死後燒棄すべし」と書いた封書の中に最初の謎文士ヘッケイの死を明かにしたローゼの行動を書いておいてあつた秘密の手記の一部分を公開しておく……

クリストフ・ローゼが犯罪心理研究の立場から此の事件の研究に關係することになつてからの彼はテローブ教授を訪ねてヲスカー、ヘッケイが死の部屋を見せて貰つたり、警察にラリーヴ探偵を訪ねてヘッケイの遺留品を調べたりしてから數日後、私は――アンリー・ガリノ氏――は突然ローゼから手紙を受取つた。

「本日午後三時半、是非小生宅まで御出かけ下さい。生ける留針の件につき證人として御立會を御願ひに致し度い事が御座います。」

私は好奇心に心を躍らせながらローゼの家へ出かけた。

「私は調査を終了出來たよ」と教授がいつた「で、テローブ教授にも來て頂いてその結果を御話ししておき度いと思ふんで。」

話すまもなくテローブ教授がやつて來た。

「テローブさん。突然御招きして甚だ失禮ですが、實は重大なことで是非御意を得たいと存じましてね……」

「重大な事？」

「えゝ……まあ、御聞き下さい……私は漸くヲスカーヘッケイの死をめぐる秘密を知る事が出來ましたので……」

「エッ、、……すると、あなたは誰れが……」

「誰れがヘッケイを殺したかを知つてゐます。私は誰れの手で彼の頸へ生ける留針を突き込んだかゞ解りました……えゝ、人間の手です……エジプトの神の復讐、蛇神の呪ひ、千年の秘密につゝまれた生ける留針、それは皆巧みに掲げられた人工の被でした！……迷信と神秘、人人はたゞそれに迷はされて、考へるといふ事を忘れてゐました。したがつて犯人の誰れであるべきかを考へなかつたのです……」

「で、その犯人といふのは？……誰れで？……」

とテローブ氏がせき込んだ。

『あなたです、テローブ教授です！』

ローゼの聲は澄み渡つて力強く室内に響いた。

ハツと思ふ瞬間、ローゼの手はサツと延びて何かしら怪しげな武器を出さうとする老教授の右腕を摑むと等しく壁際へグイ〳〵押しつけ乍ら、片手をポケツトへ入れて武器をさがしてゐるらしかつたが、その冷靜かに、摑んだ手を離して相手の顏をぢつと見詰めた。

力盡きては老教授の眼からは玉のやうな涙が止め途もなく流れた。

『まあ。落ついて、椅子におかけなさい』とローゼはおだやかにいつた。

『テローブさん。考へて見ると實に巧みな殺人でした！　然し、如何に巧妙な犯罪でも。其處に必ず一寸した手落ちのあるものである……とは犯罪心理の通則になつてゐます。……私が犯罪を發見した經路を今御話し致しませう。……』

クリストフローゼは靜かに語り出した。

『私が、ヘツケイの死んだ室を見せて頂いた時、私の頭には、「此の殺人は人間の手でなされた」といふだけの考へしか浮びませんでした……それでいゝのです……それから私が警視廳へ行つてヘツケイの遺留品を調べるまでは、實の所、私にも何等の光明も、當てもなかつたのです。然しヘツケイの遺留品―殊に、彼が生前最後に使用したモルヒネの小瓶、彼のポケツトに入つてゐたといふのを見せて貰つた時に、私は一切が解つた……

モルヒネの小瓶……それを手にとつてぢつと見ると、瓶のレツテル其他には少しも異状がないが、然し、瓶の厚さ、そしてその苦味がつた度合、それが極く少しではあるが、薄くて、苦味が足りない……その瓶の相違などは、ラボラトリーで手なれてゐればこそ解るが、到底素人や生仲の專門家では仲々氣の付くものではありません。

段々ヘツケイの使用したモルヒネの瓶が他のモルヒネの瓶と多少なりとも相違してゐる以上、彼の使用した藥品も亦多少共相違してゐなければなりません。……この解釋の元に推理して行く……それは無論極めて薄弱な解釋だが、一方から見れば極めて有力な解釋であらねばなりません。……そこで。私は犯行のシナリオを次のやうに立てゝ見ました。

一。誰れかゞ私の實驗場に集つてゐる隙をうかゞつてヲスカー・ヘツケイの外套をさぐつて、モルヒネの瓶を取り出し、それと外見全く同一に見へる他の强烈な魔醉藥を入れた瓶をすりかへる。

二、それから間もなく、ヲスカー・ヘツケイは平素の通り、豫想通りに注射をする時間になる。

三、ヘッケイは小さな室に入つて注射をする。そして暫くは安靜にしてゐやうとするが、既に麻醉の量に於て相違があるから、その儘意識を失つて倒れてしまふ。

そこへやがて人々が扉を叩くが、それは返事のないのが當然です。

四、そこで最後に殺人の段取りです。人々が、内部から返事がないので立ち騷ぎ、ステツキで扉を叩いてゐる間に、隙を見て、窓枠の上にあつた留針をそつと取つてしまひ、扉を打ち破つて、眞先きに室内へ飛び込む。室内は眞闇だ。人々が眞闇なのに驚いて手さぐりで進んでゐる間に、彼は素早くヘッケイのゐるべき處へ進んで行つて、その頸へ留針を突きさし、その儘そつと床の上へ辷らして倒してしまつた。……そうしておいてサッと身をすさるとその儘スヰッチを入れて、室内を明るくしました。と見る、ヘッケイは床の上に倒れて絶命してゐる。その間十五分とはかゝつてゐない……完全にアリバイが出來て、完全に目的は達せられました……

手取り早くいへば、大體こんなやうな譯ですが、もつと計劃的である證據には室内の椅子には、たつた一つ、スウイッチの近くにある椅子の外は書籍や器物が置いてあつて腰がかけられない狀態でありました。從つて彼は指定された場所に倒れるより外に途がなく、又殺人を計劃した犯人はヘッケイの倒れてゐる場所へ闇中眞一文字に進む事が出來たのです……」

え、唸り聲ですか？　唸り聲は偶然でした。あれは、あの室の隣りにデュカス氏がゐました。氣分を惡くして休んでゐた際に思はず唸つたのが、薄い壁を通してヘッケイの室から洩れたやうに夫人達に聞へたまでです。—

何しろ、古代エジプトの神秘、傳說が却つて人々の感情を錯亂させて、此の秘密を生み出したのでした……」

犯罪心理學者ロドゼは靜かに談り終つて蒼白なテロープ教授の肩を叩きながら……

「どうです？　大體そんな筋書ではなかつたですか？　……」

テロトプ老教授はグッタリとして椅子にくづれた……

——J・J・ルノオ「ラ・ヴイヴイア ント・エ パングル」——

抄譯——

藝術の社會的地位について

（遊歐雜記の序）

阿部次郎

33

久しい中絶の後に私は又この稿を續ける。上來の考察によつて、私はほゞ徳川時代に於ける平民藝術の文化史的思想史的背景を明かにした。私は特に「平民藝術の一といふ。當代に行はれたあらゆる藝術―能樂、和歌、雅文、漢詩、漢文、狩野派光琳派四條圓山派文人畫派等の諸方面に渡つて考察の戰線を擴げることは、私の力のよくするところでないのみではなく、此等の藝術は、或ひは樣によりて胡蘆を描けるものとして、或ひは單純な教養の戲れから生れた作者の根本體驗の衝動を缺くものとして、或ひは作者の體驗に強ひて習得せる形式を纏はしめたに過ぎぬものとして、或ひは、最良の場合に於いても、執念深くぬきさしならず流れ行く當代歴史の本流から遊離したために、深く時代精神の上に根を卸して連續せる發展を形成するには至らなかつた「世外人」の藝術として、當代の平民藝術とは別樣の取扱ひを受けることを至當とするからである。そのうち、和歌の一部分、光琳派、文人畫派等は、大體インテリゲンチアの創造として特別な尊敬と考察の對象とするに價ひする。但しこの場合吾々は最初の發問を離れずに、問題を平民藝術のみに限らなければならぬ。あのやうな文化史的思想史的背景の上に浮び出たものとして、徳川時代の藝術はどんな形態と内容とを持ち、どんな文化史的役目を演じなければならなかつたか。

皮相に考へればこの新しい發問はたゞ後來の考察の反覆を誘ひ出すに過ぎぬやうに見えるでもあらう。藝術は社會の反映である。既に藝術の文化史的思想史的背景を明かにした以上、このやうな社會に於いて藝術のとるべき形態や内容や役目は自明である。況して私は此等の

背景を考へるに當つて、既に演劇や浮世草子や心中物や笑話等を材料として使用して來たではないか。その上更に藝術そのものの形態と內容と役目とを問題とすることによつて、私は果して如何なる新局面を開き得るであらうか。

併し藝術は、嚴密に云へば、社會の反映のみではない。藝術は政治經濟その他の社會現象に追隨してあとからこれを反映して行く鏡ではなくて、それは積極的創造的に社會に働きかけてその進展の一力素となることを得べき、獨立せる──もつと詳しく云へば他と聯關したがら而も獨立せる──一つの文化である。若し鏡を譬喩にとることを繼續するならば、それは平面反射鏡ではなくて、凸面レンズである。人生のもろもろの散らばれる光は、このレンズを通過することによつて像を結び、集中されることによつて燃燒に達するのである。像を結びつゝ燃燒することは、社會にとつて一つの新しい現象である。さうしてこの新しい現象は、將來の進展を規定する一力素として、自ら燃え續いて行くのみならず又他の文化の上に燃え廣がつて行くのである。藝術そのものゝ問題は、特にこの凸面レンズの構造の問題である。此處に藝術史の比較的獨立の權利が基礎づけられる。同時に藝術の人生や社會に對する役目の問題も亦此處に根據を得て來なければならぬ。像を結びつゝ燃燒するものを再び廣い漠然たる人生の散らばれる光に還元することによつて、藝術の理解を完くし得ると考へるのは新しい迷信である。德川時代の平民藝術は當時の社會と人生とを如何に結晶させたか、この結晶された光が如何に當時の社會に燃え廣がつて行つたか──それは從來の問題の單純な繰返しではない、それは少くとも從來の考察を此處に集中して來るといふ意味に於いて新しい問題である。

私は從來手繰つて來た思索の緒を繼承して戀愛の問題を考へ續ける。德川時代の平民藝術は──就中平民文學は戀愛をどう取扱つたか、それは戀愛文化の向上に如何に貢獻し、戀愛文化の發展に如何に影響したか。この問題を考へるために、私は再び西鶴の好色物をとりあげなければならぬ。他の關係に於いては知らず、問題を特に戀愛に限るとき、彼の浮世草子は、本當に眞劍な考察に價ひする殆んど最初の平民文學であるからである。

普通西鶴は構成的空想の力を缺く寫實家、鋭利な觀察の力によつて當時の世相をあるがまゝに描寫した浮世文學者と考へられてゐるやうであるが、寫實が藝術的寫實として通用するためには、瑣末な職人的な眼と手とによる蒐集以外に、その中から本質的なものを選擇し、散漫な材料を壓縮し集中させて、一つの全き生活、一つの全き世界を構成して來る頭を必要とすることは、文藝の上に於ける常識として今更

繰返すまでもないであらう。西鶴を寫實家と名ける言葉は、強ひて異を樹てるにも及ばぬことであるが、それは決して、西鶴といふ特殊のレンズが彼の作品の世界を力強く支配してゐることを否定する意味であつてはならない。私はこの間の消息を明かにするために、彼の處女小說「好色一代男」について、そのモデルらしい二三の遊女の評判記と彼が作品の中に描寫した彼女達の姿とを比較して見ようと思ふ（猶「一代男」のことについては、昭和二年五月發行「思想」日本文化研究のうち、拙稿「好色一代男おぼえがき」參照）。彼が「二代男」の首節に述べてゐる制作の態度は、大體に於いて「一代男」にも亦當嵌ると信ずるからである。――「扨こそ古猥の、くにといふ遣手の開山、……引留め、遊にし事を、語らすに、聞くに、ようも〳〵、諸國の諸分覺えて、永き日の西の山に入るまで、閑話して、世傳が二代男、近年の色人殘らず、それに加筆せし、されども變名にして、あらはに記し難し、此道にたよる人は合點なるべし、其男其女郞に、氣を着けて見給ふべし、時代前後もあるべし、紅葉見て櫻なほ棄て難し、折節の移り替る水の月の、影も形も無き事にはあらず、見及び聞傳へしは、松の葉の塵なれば、祇園都の跡までも、心の奇麗なる事ばかり顯じ、よし無き事は捨棄つるものに、京の大臣、陰間、末社おろせの額までも、これは見る人の好に、ならばなるべし」――折節の移り替る水の月の、影も形もなきことにはあらず、恰に私達は田毎の月の田毎の影を較べて、それ〴〵の水の特性を考へ定めることが出來るのである。これは皮相に考へれば極めて瑣末な、笑ふべき穿鑿である。併しその影響するところから云へば、決して無用の仕事でないことは、後に來るべき歸結によつて判明するであらう。

「一代男」の中で作中の人物とモデルとの相關を最も明瞭に示すものは、云ふまでもなく吉野、夕霧、吾妻である。そのうち吉野のことは既に世間周知のことであり、西鶴の描ける吉野（卷の五、第一）も殆んど傳說そのまゝで特に彼の特質を見出せるほどのものを認め難いから此處には云はない。夕霧と吾妻とも亦大阪古今の名妓として衆口一致の稱美を受けてゐるもので、掃き棄てられたよしなし事を採り出す手段を缺いてゐるが故に、「祇園都の跡までも、心の奇麗なる事ばかり顯はす」といふ彼の理想化の痕跡を發見することは却て困難であるが、併し此處には既に、彼の尋常一樣の評判記若くは見聞記々者と相異する點が輝き出してゐるのである。

「みをつくし」（寶曆七年板）は大阪新町の古事由來その他を詳いたものであるが、この書に記すところに從へば、夕霧は島原の扇屋四郎兵衞の抱遊女で、寛文十二年その主人の移轉に從つて大阪に下り、其處で全盛並びなかつたが、延寶六年その[illegible]阿波屋某の手に[illegible]世を

を受けながら病死した女である。彼女が當時如何に盛名があつたかは、彼女の死（正月六日）の翌月、坂田藤十郎がすぐに「夕霧名殘の正月」といふ狂言を出して大當りをとつたのでも明かである。而も彼女と傳奇的逸話を共にする藤屋伊左衛門といふ男の存在が記錄によつて何の證明をも得難く、彼女の死はこれにまつはる悲劇的説話によらずに直接に死そのものによつてこれほどの印象を殘したものとすれば、彼女が當代の名妓であつたことは愈々明瞭であると云はなければならぬ。併し彼女が凡そどんな女であつたかは、「みをつくし」によつては何の觀念をも得ることが出來ない。それはたゞ「夕霧は聞しに勝りて美艶なる事誠に美容の露を含むがごとしと其比もてはやしける、其上萬藝に達し行儀發明言語にのべがたしと或書記に見へ侍る」といひ、彼女の死を傳へては、「延寶五年の秋の頃より病氣にて醫療手をつくすといへども甲斐なく、貴僧高僧を請じ大法秘法を盡せども露しるしなく、諸所の佛神に祈をこめけれども、天命の限りにや翌延寶六年年正月六日といへるに病床に死す、時の人おしむ事松を隔るゝ蔦かづらのごとし」と云つてゐるのみである。これに較べれば前に引用した（第二十五節）西鶴の描寫はどんなに細かに具體的に彼女を活躍させてゐることであらう。此處で夕霧のために費されてゐる字數は「みをつくし」と殆んど大差がないのに、彼にあつては空しい形容詞の與に影よりもうすく平べつたく見えたに過ぎぬものが、此處では鮮かな姿を持つて私達の前に浮び出る。而も彼女は主として第三者の口を通じて間接に語り出されるのみで、たゞ最後の七八行が彼女を直接に讀者の前に動かして見せるに過ぎないのである。併し西鶴は先づ、生玉の御池の蓮葉刈る日、「秋の寢覺に獨柔餅、酒など持たせて」、粋の木蔭は時雨の雨が、濡れかゝるかゝると流行唄同じ口拍子に」、東南の島崎に居流れて浮世話をしてゐる五人の通人を持ち來つて話の種を定める、さうして彼等の口を通して、夕霧の地顔、素足、肉づき、詰眼光、肌の色から、彼女の伎藝利根應對まで事細かに、而も簡潔に彼女を描き出したあとで、その浮かれた人達の頭の中が夕霧の姿で一杯になつて「始めの程は高聲せしが、何時となく靜になつて何か泪を滴さぬはなし」といふところまで導いて行くのである。その話から世之介の熱中が導き出され、章の最後に一つの短い劇的動作が附加されることによつて、夕霧の姿は完成する。さうしてこれを近松の「夕霧阿波鳴渡」に比較すれば、この二人の人の藝術化の樣式の相違が更に明かになるであらう。西鶴は五人の通人の話しぶりによつて、夕霧の死に對する作者の哀悼を暗示するに止つてゐるが、近松は彼女の死に對する感激を中心として其處に一篇の劇を構成する、縦令その劇の結末はめでたしめでたしに終つてゐるにせよ、その感激の中心は彼女の死——

彼女の病にある。而も彼はこの病ひに一つの悲劇的傳奇を空想によつて附加することによつて、「みをつくし」記者の所謂「時の人おしむ事却をはなるゝ蔦かづらのごとし」といふ感情を具體化するのである。

かくて今日に於いても私達が猶（文學としても音樂としても）愛誦して措かぬ夕霧のくどき——「たまさかに逢ふて此方樣に甘ようと思ふ心を逆樣な、こりや慘らしいどうぞいの、妾が心變つたら、踏んでばかり置かんすか、摸いてばかり置んすか」云々といふ、女心を曲盡せる名文句も亦この空想の結晶の中から生れて來るのである。このやうに西鶴と近松との間には、夕霧といふ月影を受取るのに、それぞれに極めて特異なるレンズがある。併し兎に角夕霧はこの二人の藝術を通じて、始めて「神代このかた類なき御傾城の鏡」といふ資格を得て來たのである。さうして此處に緣を結ぶことによつて始めて後世の戀を知る者の心に燃え廣がつて行つたのである。その數限りなき反響のうち、「みをつくし」の記事の如きはたゞ極めて小さき一部分を形成するに止る。此處に創造的藝術と漠然として微弱なる人生記錄との間の、爭ふべからざる相違がある。

（註）。馬琴の「著作堂一夕話」卷下に「箕山が大鑑に、夕霧は尤麗容澤なれども、目は瞎目なりしとしるせり」とあるが、私の矚目することを得た傳本には夕霧に關することとは見當らない。併し大鑑の序文が延寶六年冬の撰となつてゐる以上、同書の何處かに同年正月に死去した夕霧の記事があつたことは極めて自然である。若し夕霧が果して瞎目であつたとすれば、これは西鶴が「掃き捨てた」部類に屬するものであらう。西鶴の文章、從へば彼女の眼は「眼光ぬからず」である。女性美の鑑賞者が時として些少の斜視に特殊の牽引力を感ずるやうに、西鶴も亦夕霧の瞎目を眼光ぬからずと却つて美しく見たのかも知れない。西鶴が元祿六年に五十二で死んだといふ普通の說に從へば、夕霧の死んだ延寶六年は、彼の三十七歲に相當する。西鶴が眼のあたり夕霧を見たことがあることは全然疑を容れないと云つてよからう。

藤屋（富士屋）の吾妻の事蹟も私達は結局「みをつくし」の記事に從ふより外に道がないであらう。彼女はたゞ寛文中富士屋こと佐渡島勘右衞門の抱であつたとのみ記されて、その落籍の年も死去の年も明かにされてゐないが、一代男の中に「延寶五年あやめ八日の曙に空しくなりぬ」と明記してあるところを見れば、これは「影も形もなき事にはあらず」を最も言葉通りにとつて、この小說によつて史實を補ふことが出來るかも知れない。彼女の最も膾炙する逸話は金三百兩を以て請出されたことである。吾妻は「越中夕霧にもならぶほどの全盛にてありし、器量すぐれ天性位高く、其上絲竹一通はいふに及ばず諸藝に通じ、諸國の閑客我一とこみゆる事を爭ふ、其中に攝州山本場に

坂上與次右衞門といへる有德人あり」て、彼は當時異例に屬する大金を擲つて遂に彼女を落籍させたのである。これは再び近松も亦取扱へる題材であるが、近松は當時の傳說のまゝに彼女の眞正の戀人を直ちに彼女を落籍せしめた大盡とした。然るに西鶴は延寶五年を去ること僅か五年後の天和二年に、根據の有無は知らず、彼女の眞實の心を世之介にあるものとしたのである。「何時か此首尾待兼の山本近く一里に迎へ」られて「活計歡樂の暮し、之を嬉く思はず」もだし難き恩義にからまれて、「只名の立ためぬ死極め、かく思附くこそ夢の春、花の萎るゝ如く、湯水も絕つて」彼女は一種の自殺を敢てした。西鶴がこの構想を事實から得たか空想によつて案出したかは、今日の私達には最早闡明すべきよすがを絕する。吾妻の作と稱せらるゝ「身は浪花心は都名は吾妻のぼりつめたる山本の里」といふ拙い歌が假令眞實であるにしても、それは「心はみやこ」の意味によつて兩樣の解釋を下すことが許されるであらう。故にこの不明な問題を不明のまゝに拋棄して、これをもつて西鶴の空想的構成力を例證せむとする誘惑を斷念するにしても、其處に「志深く、物和かに、行儀ほんとし」たる遊女の性格が深く賞味せられ、この愼み深き遊女の思ひかけぬ戀と、其の夜の忍び逢ひの危くも滑稽な情景が劇的効果を以て描寫せられてゐることは、如何にしても抹殺し去るわけに行かない。西鶴の人間知の確かさと、機智を帶びて明るいしめやかさとは、この挿話を結晶せしむるレンズとして、鮮かに讀者の心に印象される。それは固より男同士の意地と義理と、町人の道と武士の道と、男と男との情理を盡せる感激と、一人の男を共有する妻妾の嫉妬と互讓と――かういふ樣々の挿話と心のいきさつを一つに纏めて來る近松の「壽門松」とは、甚だ樣式を異にする作品であるが、兎に角、事實の有無と、作者にこの材料を提供した說話者の有無とを問題外にして、それが西鶴の頭を通じて像を結んだ藝術品であることだけは動かすことが出來ない。この短篇（卷之七、第六）は一の性格と境遇とを表現する小說である。それは一つの戀愛小說として、當代並びに次代の戀愛文化の發展に參加する。

34

吉野や夕霧や吾妻のやうな傳說化せる名妓を離れるに從つて、作品とモデルとの關係は曖昧の度を加へる。併し西鶴の理想化は此等の領域に踏込むに從つて却つて鮮明の度を加へて來るのである。

中に就いて最もモデルを發見し易いものは卷之六、第一に描かれてゐる大阪屋の奴三笠である。當時の他の文獻に徵するとき、彼女はどんな性質の女であつたか。私はそのために二つの書物を引用する。一

つは笑山の色道大鑑、一つは明暦元年の評判記「桃源集」。笑山が彼女の特徴をなす奴風について説くところは次の如くである——

「近代は傾城の中に奴風といふあり、………女郎の奴だていさゝかいぶかしき事なれども、つくづく愚案をめぐらするに、時うつり品かはりて、人の心直ならず、多くは野人のもてあそびものとなりて、きやしやなる事はこのまず、はづみたる事計りをすく世にしあれば、かゝる風情もなくてやはあるべき、しかりといへども、太夫職の用ゆべき風儀にあらず、天職より以下の業なるべし、うちくもりたる處なくて心勇む物なれば、是をあしとにはあらず、此風によくはまりたる傾城は、よのつねの女郎よりをとこのすく事莫大也、もしこの風儀をたてむとおもふ女郎あらばしめすべし、いかに人のおもしろがればとて、傾城の格をはづすは狂人に似たり、かはるところとかはらぬ處と有べし、つよきはつよきにたてて、卑劣なるふるまひをせず、氣推は氣推にたてて、またなくむさからぬ識を心に持べし、この心得なからむ傾城は、奴をまなぶといふにはあらで、本性あらはさむは口惜かりぬべし、つよみがちなるうちも、心にうけえたる人にあひ、ひし／＼となりてもろくたはるゝ所ありなば、男のまよふ事たなごころをさすがごとくなるべし、近世まのあたり見およびたる奴には、江戸の勝山、京には三笠藏人、大阪にては八千代御階大阪等也」。（寛文式下）

これに對して「桃源集」の評はかういふのである——

「様子よし、左門が流れなり。ひたひせばく色わろし、付たけ歯なみわろし。お床は初對面にても望み次第、百服にこも立る由、ひたつきこ笑止千萬なり

三硯亦將行　一交百婿生

金持鈍太者　笠内見傾城

誰も見れ三笠とはなせ××のその下露は雨にさされり」

これは前掲の三笠と同一の三笠であるか。一見すればそれは全然別人でなければならぬやうにも思はれる。併し明暦と寛文とは中に萬治の三年を挟んで、初年と初年との間僅かに六七年に過ぎぬ、寛文式に「近世まのあたり見たる奴」のうちに擧げられた三笠を、明暦元年の評判記に記された同名の太夫と同視することは極めて自然である。若しこの推定が許されるならば、桃源集の著者が半可通らしく卑しい方面のみを強調して、恐らく多少の惡意を含んで見た同じ人を、大鑑の作者はもつと廣く公平に觀察したものとして、兩說の調和をはかることも出來るであらう。彼女は奴風が似合ふほどはづんだ「うち曇りたる處なくて心勇む」一面を持つてゐると共に、又「鄭味勝なるうちにも、心にうけえたる人にあひ、ひし／＼となりて脆くたはるゝ所」を

も持つてゐたのであらう。この後の一面が、淺く彼女を見る者に、多淫なべたつき女といふ印象を與へることは可能である。さうして彼女の強味勝な方面が彼の反感を煽るとき、この印象は愈々際立つたものになるであらう。これに、彼女に近づき兼ねたものの卑しい惡意を加味すれば、桃源集の著者のやうな批評が、西鶴の描いた好色三笠の背後で呟かれたことは必ずしも不思議ではないのである。故に兩者を綜合して一人の女性の性格を想像すれば、桃源集に較べて大鏡の著者の方が、遙かに人間を見る眼の成熟を示してゐると云はなければならぬ。

さうして西鶴も亦この點に於いて兼山と見を等しくする。西鶴に從へば彼女は「情あつて大氣に生れつき、風俗太夫職に備つて、衣裳好く着こなし、道中大底に踏り、少しすあに見えて、幅のなき男は畏れて逢ふ事稀なり、取入りては好き事多き人にして、座配賑かに、床しめやかに、名殘思を殘させ、別るゝよりは早重ねて會ふまでの日を、何れの敵にも待兼させ、召連の者、禿籠までも、嵐吹く夜は慰とならぬ首尾にしかけて、差捨の盃、御志は是で持つた、太鼓女郎にも大方なる譯は見ゆるし、宿の男などとの事は、末の名の立つを密に示し、鑓手が欲ばかりの算用も聞かず、賤しき物は手に持たず、禿が睡るをも叱らず、夜更過ぐるまで用の事ありて彼理と、萬よしなに申しなしては喜ばせ、太夫様の事ならばと皆々思はせて置き、賢しき仔細ありける」。桃源集の著者によつてあゝいふ卑しい評語を下されるその同じ人を、かういふ具合に描き出す西鶴の見方は注目に價ひする。一見突拍な比較であるが、人間をあるがまゝに見るといふよりも寧ろあるべきが如くに見て、あるべきが如くに見るが故に却つて人間の本質を洞察する點に於いて、彼の見方はヰルヘルム・マイスターと類似點を持つてゐるといふことが出來るであらう。而も一面に彼は、長所を見てこれを愛しながらもこれに惑溺せずに、對象を俯瞰する高處に自ら立つてゐる。「賢しき仔細ありける」といふやうな評語は、彼が人間を見る眼の老熟を示すものと云ふべきである。

併し彼が此處で描かうとするものは、このやうな性格の概論ではない。彼はこの大氣な、賑かな、賢しき太夫を、その明るさとは反對な悲痛の中に投ずる。彼女は折しも微して流浪の中にある世之介と「始の程は面白く、中程は可笑く、後は氣毒重なり」といふやうな戀の深みに陷ることになるのである。「又いつもの時分とて、太夫忍び出で、今宵は中立賣の竹屋の七様の一座に、紀州の人きちじよに始めて出會ひ、面白からず世様のことをあらため、是非に見切れしとは愁し、是が見限らるゝものかと、左の袖口より手をさし入れ、脇腹いたくは抓らず、淚まじりの空五月雨の頃忘れては、盛かと見し齋相一つ、我口癖へし跡ながら、手から手に渡して、方様は覺えてか、過にし秋安

が黒髪を拔かせ、猿などして遊びし夜は、誰忍ぶともなく騒ぎて、按摩取の休齋が二階より落ちてと、早口に語る中に、太夫様はと聲々に尋ねけるこそ、身にこたへて悲しく、明夜は人面見ゆるも苦しからずと泣別れし」夜も重つた。折檻されても、酷く當られても、果ては庭に下ろして、「味噌漉を持たせ、豆腐より出でし細かなるものを買ひに遣は」されても、浮世之介のことを思ひきらず、遂に其年の雪見月の初雪の日、赤裸にして廣庭の柳に縛附けて責めさいなまるゝやうな恥かしい目に逢つてさへもまだ志を枉げずに、「白綸子の二布引裂き、右の小指を喰切り、心のまゝに書附けて……今日を限りに舌咬切る」絶對絶命の場合になつて、始めて世之介のものになることを彼女は許されるのである。――この一章は全卷のうちでも最も著しい戀愛のグローリフイケーションの一つに屬する。さうして境遇に對抗する戀の力の、このやうなグローリフイケーションは、固より後世の文藝に有力な刺戟を提供せずにはゐない。私達が例へば浦里の雪責に於いて發見するやうな殘酷の美化と享樂とは、西鶴のこの邊に淵源を發すると見ることが出來るであらう。假令その以前にこのやうな説話の幾つかを發見することが出來るにしても、それは説話であつて文學ではない。文學の力はそれが具體的に突込んで表現されることによつて始めて發生するのである。

私達は、三筋の場合とは異る遊里的戀愛のグローリフイケーションを、前に引用した（第二十五節）野秋の話に於いて發見する。野秋とは如何なる女であるか。西鶴は此處で「まさり草」に證據を求めてゐるが、今その書をあけて見ても、私は彼女の名を發見することが出來ない。其處に頭字に野といふ名を持つてゐる者は、上官の部のあたらし屋の野關と、中官の部の淸春の野風のみである。そのうち野風は何處から見ても西鶴の野秋に相當し得べき女ではない――「扨も〳〵いや成女なり。色白く尋常成やうたれども、かほかたち幼稚にして力なく、まつうねふりめにて、いつもねおきの顏のやう也。笑ひても人のかなしむ程に見ゆ。艶めきたる事、綺麗の跡のしにやを見る様也。氣だてぐしやりとしてさえきらず、いかにもうつとうしく、とりなりびしや〳〵として初心めき、いつも山だしの新造のやう也。第一大利休也。此人太夫の時も有しを思へば、空をそろしく侍る」。この批評はあまりに辛辣に過ぎて、この類の書には最も紛れ込み易い私怨の存在を思はせぬでもないやうな書き振である。併しあの成熟しきつた、一種の深みを持つ西鶴の野秋は、如何なる敵によつてもこのやうな批評を下されるやうな女ではない。然らば殘る一人の野關について、まさり草の著者色道大祖慶光菴實月居士は如何なる評言を書き記してゐるか――

「かたちおほかたよし、風體のしきりておほぐれやかに、自ら太夫めきたり、姿飾よし。くるは第一の利發もの、され共餘りかしこ過ぎて、分別いりまがり、さきぐりにて、人の公事一わうにて心にうけず、しぶときかたぎ也。又すましたるとみゆる所多し、なべての人打ち解け難く、心をかれて、人のよりつきすくなし。位づめにしてあぢを遣らんとする内に、男はや退屈してのくかたぎ也。しかし功者たるによりて面白き所も有、×××えも云はぬ感情有、一儀御好物、お茶初むかし。

勘公、島原の左門に對して、みるべき者これ也」

これも亦西鶴の野秋ではないやうに見える。併し「×××えも云はぬ感情有」といふ言葉が先づ私達の眼を捉へる。「くるは第一の利發もの」と言葉も亦私達の注意を喚起する。かういふ風にして兩者を比較しながらまさり草の文章を眺めてゐるに從つて、私達は西鶴と色道大鑑との意見の相違は、結局胡桃の殼を割り得てその實を味つた者と、「退屈してのいた」男との相違に歸着することを發見するであらう。心から兩夫を愛するやうな「名譽のしなし」をなし得た彼女、而も淚ながらにその眞實を告白し得た彼女は、恐らく容易に內心をのぞくことを許さぬ殼を持つてゐたであらう。「分別いりまがり」「しぶとく」「すました事と見ゆる所多く」「心置かれて人の寄り付少し」と見えたであらう。故に一見矛盾するやうな兩者の評語が、却つて野秋が野秋であることを證明してゐるやうに私には思はれる。若しも果してさうであるとすれば、世之介と共に、開き難き彼女の內心の扉を押し開いて、愛を以てその奧にある不思議な美しさを捉へおほせたのは、確かに西鶴の「名譽の仕なし」と云はなければならぬ。女性の複數戀愛の心理、その眞實とその悲痛——かういふやうな體驗は、普通の女性にあつても、彼女達の境遇が自由の度を增すにつれて徐々可能になつて來るであらう。併しこの現代的複數戀愛は本來自由から生れたものなるが故に又遊戲的に輕く發散し得る。これに反して遊里といふやうな不自然な組織の中にあつては、複數的接觸が——從つて又複數戀愛の假裝が、その存在の根本條件である。此處に身を沈めた女達にとつての不可抗の束縛である。さうしてこの淵に沈んでも猶死にきれぬ人間の魂は、一つの戀に縋つて苦界の外に自由を求めるが、複數の戀を玩寵にすることを學んで此里の中に自在郷を創造するかするのでなければ、到底生き行くべき途もなかつたであらう。これは魂の深みを持續けてゐる遊女にとつては生死をかけた大問題である。それは不可抗の運命の下に置かれてゐるが故にモダーン・ガールのそれとは異る眞摯悲痛なる悟道である。かくて不自然な遊里に、不自然なるが故に特別の發達を豫約されてゐる複數戀愛の心境——かういふ特別な靈魂の

世界を、西山聲子浮かさずに、豊かな愛と明るい佛性とを以て表現することを得たのは、藝術家として讃歎に價ひする西鶴の功績である。

私は前にこれを「得難き一つのヒユーマン・ドキユメントである」と云つたが、併しそれは單に人生記録として得難いのみではない。今私は又安心して、これに「得難い藝術品である」と附加することを許されるであらう。これも亦西鶴が當代並びに次代の藝術家に與へた一つの先蹤である。併し私の知る限り、この點に於いて西鶴の傳統を繼承し得た者が、藝術的實行に於いて絶無なるのみならずテーマの捕捉に於いてさへ極めて稀少なのは何故であるか。此處に西鶴が、徳川時代の文藝を通じて、來者を絶して孤立してゐるのは何故であるか。其後の滔々たる大小の文藝を通じて、複數戀愛は男性の輕易な特權とせられ、女性は一様に「兩夫に見えざること」を金科玉條として、この鐵則に背反せる者が、事情に應じて寬容の程度に多少はあつても、結局憎まれる若くは蔑まれることに決定してしまつたのは何故であるか。

この問題は藝術家の人生の見方に關する問題なるが故に、當然に彼等並びに彼等の屬する社會の人生に對する考へ方の問題と――換言すれば倫理思想の問題と聯關する。賣笑を公認した當時の社會は何故に遊女の側に於ける複數戀愛の權利を（複數接觸ではなくて複數戀愛の權利を）否認するに吝かであつたか、凡そ男性の複數戀愛を當然の權利とする思想は何故に女性のそれをも是認する思想にまで一歩を進めなかつたか、社會は一方に於いて複數結婚を實行しながら何故にその道を最後まで行き盡さなかつたか、行き盡すことによつて新しい道を發見するまでに到り得なかつたか――この問題に對する解答は自明といへば自明である。女性の立場から提出されることを要するかういふ問題は、徳川時代のやうな專制的な男子中心主義の時代にあつては、凡そ發言することを許されなかつたであらうし、假令發言の自由は許されると假定しても、女性自身がその内心に於いてこの問題を重要視する氣にはなれなかつたであらう。凡そ男性に反抗する武器としてでなしに自分自身の必要から、女性が（普通の境遇にゐる女性が）複數戀愛の權利を眞劍に要求する内的衝動を感ずるかどうかは孰れの世にも疑問である。故に徳川時代の倫理思想が全體として何故に女性の複數戀愛を是認するやうに流れて行かなかつたといふ疑問は、問題にならないと云へば確かに問題にならないのである。

併し藝術に聯關する倫理問題として見れば事情が違つて來る。この場合の問題は、藝術家がその倫理感と矛盾することなしに、愛と戀とを以て何處し得る範圍にあるからである。女性自身には發言の自由なく、發言を求める思想がない場合に於いても、これを必要とする一番の女性があり、これに相當する特殊の生活事實がある限り、其處には

常に藝術家にとつて——彼の愛にとつて、問題がなければならぬ。其處に問題を見るのは藝術家の義務である。西鶴は女性の側に於ける複數戀愛の生活事實に問題を發見した。然るに彼に續く者は何故にこれを見ることが出來なかつたか。これには人知の理解を絶する個性出生の問題——天才出現の問題も確かにからんで來る。併し一般的に答へ得る範圍のうちで、大摑みにこれに答へることを許されるならば、西鶴の提出した問題をとりあげて更にこれを徹底させるためには、徳川時代の意識に、必要な深さが缺けてゐたのである。特に當時の文藝が最初から娛樂としての役目に禍ひされて、一向きに人間愛の深みに突込む方向から益々離れて行つたからである。

併しそれだけに、私は愈々藝術品として西鶴の野秋の取扱ひ方を珍重する。彼は男性に認めた複數戀愛の權利を女性にまで擴張する。彼は利害の打算を越えて二人の男に心を打込んだ彼女を、藝術家の愛とフモールとを以て自分の胸に温める。さうして彼女の行爲を淺く解してこれを「勤のため」と誹る人達を嘲笑する——「是は淺瀬を渡る人、此里の戀の淵を知らず、水心覺えて、せめては一度引舟に取附き給へかし。」かくて「此里の戀の淵」が西鶴のやうなレンズを發見して、これを通して像を結んだことは、日本文藝史の一つの幸福である。固より生活事實が過ぎ行くに從つて、これを投影せる像も——藝術品も亦再び繰返されることは出來ない。併しこの意味に於いて過去のものとなることが、藝術にとつて何の病ひぞ。寧ろ再び繰返し得ぬところに藝術の特殊の尊さはあるのである。

(註)。茲に私が差當り作中の人物と實際の遊女との同一をほゞ推想することが出來るものは、卷之六、第五の初音である。彼女は「桃源集」に「何と上手に仕立られたるか、死の折とは見たがへ侍るまでよくなられたり。そのわけがまだわろし」と評せられてゐる西洞院の初音、「大鏡」の扶桑列女傳に、「承應三年甲午春三月而補天職…周子性利根英本而麗在二愛敬一、毎レ合レ客不レ擇二美醜一、下レ情無二深淺一小歌名人而天下之人寄レ焉、且粹二三線一也、故鳴二於都鄙一、因レ玆萬治元年戊戌冬十月補二太夫職一、自レ是益レ威、光輝二於世一、德山高二於地一、寛文三年癸卯十二月四日年廿四而退二曲郭一矣」と傳へられてゐる宮島家の初音と恐らくは同一人であらう。この女についても、その手管の描寫に西鶴といふレンズの特色を見ることが出來る。併し今は繁を恐れてこれを細說することを控へよう。嘗て「好色一代男おぼえがき」に「彼女を桃源集に當時の大夫として評せられてゐる初音(扶桑列女傳の杉山家初音)と同視しようとしたのは私の過であつた。

押韻小曲集（試作卅五章）

與謝野晶子

小序、詩を作り終りて常に感ずることは、我國の詩に押韻の體なきために、句の獨立性の確實に對する不安なり。散文の横書にあらずやと云ふ非難は、放縱なる自由詩の何れにも伴ふが如し。この缺點を救ひて押韻の新體を試みる風の起らんこと、我が年久しき願ひなり。みづから興に觸れて折々に試みたる拙きものより、次に其一部を抄せんとす。押韻の法は唐以前の古詩、または歐洲の詩を參照し、主として內心の自律的發展に本づきながら、多少の推敲を加へたり。コンソナンツを避けざるは佛蘭西近代の詩に同じ。同語を繰返して韻に押すは漢土の古詩に例多し。

×

砂を掘つたら血が噴いて、
入れた泥鰌が龍になる。
ここで轉く絕句して、
序文に凝つて夜が明けて、
覺めた夢から針が降る。

×

時に先だち歌ふ人、
しひたげられて光る人、
脈に黃金をくれる人、
にがい笑を隱す人、
いつも一人で歸る人。

×

赤い櫻をそそのかし、
風の鄕なるしのび足、

ひとりで聞けば[illegible]らし。
雨はもとより春の絲、
窓の柳も春の絲。

×

見る夢ならば大きかれ、
美くしけれど遠い夢、
險しけれども近い夢。
我れは前をば撰びたれ、
わかい仲間は後の夢。

×

すべてが消える、武藏野の
砂を吹きまく風の中、
人も荷馬車も風の中。
すべてが消える、金の輪の
太陽までが風の中。

×

花を抱きつつをののきぬ、
花はこころに被さりぬ。
論じたまふな、善き、惡しき、
何か此世に分つべき。
花と我とはかがやきぬ。

×

凡骨さんの大事がる
薄い細身の鐵の鑿。
鑿に觸れても刄の缺ける
もろい鑿ゆゑ大事がる。
わたしも同じもろい鑿。

×

林檎が腐る、香を放つ、
冷たい香ゆゑ堪へられぬ。
林檎が腐る、人は死ぬ、
最後の文が人を打つ、
わたしは君を悲まぬ。

×

いつもわたしのむらごころ、
眞紅の薔薇を摘むこころ、
荊を素足で踏むこころ、
青い沖をば行くこころ、
切れた絃をばつぐこころ。

×

韻がひびかぬ、死んでゐる、
それで頻りに書いてゐる。
皆さんの愚痴、おのが無智、
誰れが覗いた垣の中、
戸は立てられぬ人の口。

×

泥の郊外雨が降る、
濡れた径に木がいぶる、
踏切番が旗を振る、
ぼうぼうとした草の中、
屑屋も買はぬ人の古。

×

指のさはりのやはらかな
青い煙の匂やかな、
好きな細巻、名はDIANA。
命の闇に火をつけて
光る刹那の夢の華。

×

青い空から鳥がくる、
野辺のけしきは既に春、
細い枝にも花がある。
遠い高嶺と我がこころ
すこしの雪がまだ殘る。

×

槌を上げる手、鋲打つ手、
扇を持つ手、筆とる手、
炭をつかむ手、兒を抱く手、
かげに隱れて唯だひとつ

見えぬは天をゆびさす手。

×

高い木末に葉が落ちて
あらはに見える、小鳥の巣。
鳥は飛び去り、冬が來て、
風が吹きまく砂つぶて。
ひろい野中の小鳥の巣。

×

人は黒々ぬり消せど
すかして見える底の金。
時の言葉は隔つれど
冴ゆるは獄の金の韻。
まゝよ、暫く闇に居ん。

×

いつか大きくなるままに
子らは寢に來ず、母の側。
母はまだまだ云ひたきに、
金のお日樣、晝の驢馬、
おとぎ噺が云ひたきに。

×

ふくろふがなく、街になく、
山の法師がつれてなく。
わたしは泣かない氣であれど、
からりと晴れた今朝の窓
あまりに青い空に泣く。

×

おち葉した木が空を打ち、
枝も小枝も腕を張る。
ほんにどの木も冬に勝ち、
しかと大地に立つてゐる。
女ごころはいぢけがち。
玉葱の香を嗅がせても
青い蛙はむかんかく。
開けた心を目にしても

廿世紀は横を向く、
太陽までがすまし行く。

×

詩は春の雪の沙汰、
しろい孔雀のそだてかた、
巴里の夢をもたらした
秋野綾子の袴の唄、
我子がつくる薔薇の畑。

×

誰れも彼方へ行きたがる、
明るい道へ目を見張る、
おそらく其處に春がある。
なぜか行くほどその道が
今日のわたしに遠ざかる。

×

蒼い小鳥のひかる翅、
わかい小鳥の躍る脚、

遠い海なほ渡りかね、
泣いてゐるとは誰れが知ろ、
まだ薄雪の消えぬ峰。

×

つらちで象をつうくつた、
大きな象が目に立つた、
象の祭がさあかえた、
象が俄かに吼えだした、
吼えたら象がこおれた。

×

まぜ合はすのは目ぶんりやう、
その振るときのたのしさう、
かつくてえるのことでない、
わたしの知つたことでない、
若い手で振る無産黨。

×

鳥を追ふとて安[illegible]、

母に逢ひたや、ほおやらほ。
わたしも逢ひたや、獨ひと目、
乘せて歸らぬ遠い夢、
どこにゐるやら、眞赤な帆。

×

鳥屋が百舌を飼はぬこと、
そのひと聲に百舌が
おそれて嘘に變ること、
それに加へて、あの人が
なぜか折々だまること。

×

試しに植ゑた戯れに
あかい芽をふく杖がある。
指を觸れたか觸れぬ間に
花から蝶が舞ひあがる。
寢てゐた豹の目が光る。

×

われにつれなき今日の唄、
花を摘み摘み行き去りぬ。
唯たやさしきは明日の唄、
われに着せんと、光る衣、
千とせをかけて手に編みぬ。

×

がらすを通し雪が積む、
こころの桜に雪が積む、
透いて見えるは枯れすゝき、
うすい紅椿、やぶつばき、
青いかなしい雪が積む。

×

はやりを追へば切りがない、
合の帯をばけいべつせい。
よくも揃うた赤インキ、
ろしあまがひの花咲き。
先づは二十日あたらしい。

×

飛べ、けはしきを、風の空、
吹け、はげしきを、火の喇叭、
摘め、かをれるを、赤い薔薇、
漕げ、渦巻くを、千波萬波、
君が愛、音樂、詩の力。

×

うぐひす、そなたも笹の中、
うぐひす、そなたも悲しいか。
春の寒さに音が細る、
こころ餘れど身が凍る。
うぐひす、そなたも笹の中。

×

あまりに明るい、奥までも
開けはなちたるがらんだう、
つばめの出入によけれども
ないしよに逢ふになんとせう、
闇夜も風の身に沁まう。

×

摘め、摘め、誰れも春の薔薇、
今日の盛りの紅い薔薇、
今日に倦いたら明日の薔薇、
とがるつぼみの青い薔薇、
摘め、摘め、誰れも春の薔薇。

維新回天史の一面（其の三）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　德富猪一郎

（第十）皇室の御生活

今孝明天皇が、安政元年四月六日、內裏の御炎上より、安政二年十一月二十三日、新に營み給へる內裏に、御還幸あらせらる迄の──即ち桂宮を假皇居となし給へる間の──事に就き、少しく語る必要がある。それを語るに就いては、先づ前提として陛下の御手許が如何に御窮迫にて在らせられ給うたかと云ふことを知る必要がある。

元來皇室御料は、三萬石にして內膳司一年の費用を、銀七百四十五貫目と定めたのは、七八十年も以前の事だ。爾來年と共に物價は騰貴し、しかも御收入は固定して、幕府は更にこれを增加することを爲さず。然れば只だ陛下の御手許を引き縮むるの外はなかつた

×　×　×

其の一例を云へば、陛下は酒の御嗜みがあつたが、その酒は甚に惡酒にて、一日所司代酒井忠義の臣三浦七兵衞が頂戴したる

に如何にも不味きものにて、到底口にする能はず。此によつて彼は、其の現品を添へ、其の旨を御用度掛りの内藤豊後守正縄に左の如く申し送つた。

乍恐以書取奉申上候。益御機嫌克被遊御座恐悦至極奉存候。然者過日一寸奉申上置候御膳酒為御風味極内々に申下し候に付、乍恐為拝奉指上候。私共にも被下兼候位之御風味に而、誠に恐入候御事に奉存候。乍併御定直段の割には、調進方格外骨折相納候儀にも可有御座哉と奉存候。其余都而御膳遊右に准じ候御模様哉に相伺申候。尚乍恐御賢慮被為在候様奉存候。此段奉申上候事。

五月七日（安政六年）　三浦七兵衛

猶これに對する内藤豊後守正縄の返事は左の通りである。

口上

昨日者御膳酒御差越辱早速拝味致候處以之外成味、七分水三分酒と申位之事に候。総而之義右に准じ候旨承知致候。此節取調中に候。其内否可申入候。且器返却に付有合麁酒差入申候。草々不備。

五月八日　豊後守

七兵衛殿　御返事

×　×　×

尚又た近衛家の采邑地が、酒の名所伊丹であつたから、その酒を取寄せ、これを陛下に差上げられたるに、陛下は世の中に斯も美味き酒ある歟と御讃め給うたといふ話もある。

又た或日、所司代酒井忠義に御膳を賜つたが、その肴が腐敗してとても箸を下すことが出來なかつたといふことで、それを見て岩倉具視卿が、酒井に向つて、如何に幕府が皇室に對して、その道を盡さなかつたかといふことを論じ、酒井も爲に顏に汗して退いたといふことである。

又御手許の品とても、大概ね御不足勝にて、御製を御書き遊される短册にさへも事足らせ給はず。又いつか御好にて、或る古硯を購はんとし給うたが、所司代がこれを止め參せて遂に購ひ給ふ事が出來なかつたといふ話もある。

又た或時には公卿の一人が、鯉鮒を奉りたるに、内侍は其の一切を燒きてこれをすゝめ參らせたるに、御膳を下げさせ給ふ

時に、猶一切殘つてゐた。陛下はその殘りたる一切を、晩酌の肴となすべければ捨て去る事勿れと仰せられたといふことだ。

又御臺所よりすゝめ參らする御膳の外、內侍は時々魚類や、野菜類を混ぜて、所謂よせ鍋の如きものをすゝめ奉りたるに、その一半を晝の御膳に供へ、他を晩餐に供へしめ給うたといふ事にて、御酒には只だいつも御膳部の副食物にて、別に下物といふべきものは、一品たりとも召し給ふことが出來なかつた。

× × ×

又宮中には昔から雉酒といふものがあつて、雉の肉に酒を注ぎて參らするものであるが。當時は雉の肉を得給ふこと能はず、新年を祝し給ふ雉酒も燒豆腐に酒を注いで、それを代用あらせられたといふ。

陛下が尙皇太子にて在したる時に關白鷹司政通は、或日御倉の中に御案內申上げ、種々美しき器具を取出し、「これは昔德川三代將軍家光上洛の砌に用ひたる品に候」と申上げたれば、陛下は政通に向ひ給ひ、「朕が一生の中に、將軍の上洛を見るを得べきや」と仰せられたとて、政通も覺えず淚を流し、御返事をも申上げ得なかつたといふことである。

（第十一）假皇居の御生活

以上の事實に徵すれば、安政二年十一月新しき內裏に御移りあつて以來にも、御不自由には、その以前と殆ど變りはなかつたやうである。斯る次第であれば、その假皇居に在したる事の、如何に御不自由にてあらせられたかといふことは、察するに難くない。

× × ×

假皇居椎宮は、近衞邸と相接近し、呼べば應へんとする距離にある。而して陛下は近衞忠熈及三條實萬、當時の所謂座主の宮即朝彥親王等と、常に國事に就いても、又は遊樂に就いても相與に偕にし給うた。當時の御模樣は幸に天皇から近衞忠熈に賜うたる宸翰が、保存されてゐるからそれにて知り得らるゝされば今此處にその若干を、恭しく奉掲する事とする。

但しこの宸翰を拜讀するに就いて、我等は到底昭和時代の眼を以てしては、諒解する事が出來ない。我等は須らく身を嘉永安政の頃に置かねばならぬ。如何に當時の皇室が、畏れ乍ら御不自由の位置に立ち給うてゐたかは、論より證據、此の宸翰が

遂一謀擬立てゝゐる。

孝明天皇紀を按ずるに、「安政元年閏七月二日、これより前、右大臣藤原（近衛）忠凞の寝殿をもつて紫宸殿代となす。此日微行して喧然を避け給ふ」とある。これは表向の事であるが、陛下は近衛家とは殆ど我等が想像の出來ない程度まで、親しくなし給うてゐた。以下屢々御宸翰に就て之を見よ。

× × ×

右大臣殿江

内々

統仁

甚不順の氣候御用心候樣存候事、御存之通之愚筆の處急候間別して大亂筆御わかり兼と存候事、文句にも不行届の處可レ有レ之御直願存候事

梅雨中にてしみ〴〵敷候然今日は宜濕に御座候、彌右府公御安康令レ賀候、且先日以來每々品々被レ送下一大慶無レ限候宜御禮申入候。其上申候も何共無氣申兼候得共右別紙品々書付入二御覽一候。右者只今御せがみ申候には無レ之、右品兼而望之品に候間兼而申入置候間又々何ぞ好候樣との事に候得者、右書付之內之品御貰申候事なれば重疊都合能無二此上一存候間

兼而申入置候事

呉々も每度々々數々御貰申候上又々加樣之事申候も實に々々大欲心深に申兼候へ共、兼而申入置候カツテン〳〵只今御貰申樣御せがみ申のにては無レ之、自今御貰物好候樣の時加樣の品に候と宜間一寸申入候

呉々も每度々々御無心申候段實事にも恥入候得共實は楊弓之具なども大分持居候處、無二壹茂一燒失候間（安政元年四月六日炎上の際ならん）一寸右書付御目に掛申候、必々只今御貰樣御せがみ申にては無レ之候間、此段あしからず宜御取なし願入候事

且右御返事の處委細く御一封にて被レ下兩頭名前御返事の處はたゞ私一封承候と斗にて宜候。每々關白へ私所筆文進候も如レ此候間其段一寸申入置候事よろしく

五月廿四日

右大臣殿へ

内々

統仁

× × ×

これは四月十五日桂御所に御移りになつて以來、やう〳〵一

ケ月餘の事である。其の文句を捧讀すれば、空に涙が出る程である。如何にも御心配御遠慮の御模樣が拜察せらるゝ。

尙ほその目錄は左の通りである。

楊弓箱
　紫檀木地
　　蒔繪　柳櫻鞠　見返同歌
　梅木地
　　蒔繪　梅鶯　見返靑梅
　黑檀木地
　　蒔繪　松竹梅折枝　見返水甕
　　蒔繪　嵐山渡月橋之景　見返同
　黑塗
　紅花櫚木地
　　蒔繪　花紅葉折枝
　　裏黑塗見返小鳥
　弓箭クロヽ添レ之
小刀作何成共（島津家へ波平及び風集へ小刀御誂近衞家より傳獻したること島津家史に記す）
　右若々貫樣之時は猶形　細巾　入候事

風爐釜
　以下薄茶具
廿一代集　雁菱か薄茶か小本
小鼓
小箪笥　木地何成共
卷物
總書物類
右

×　×　×

更に上文に引續き同じく六月八日附にて左の宸翰がある。

進上　極内々　　藏（御花押）
　追々暑之時分御堅固に御用心有レ之候樣存候事
　誠に々々大々亂筆偏に御免希入候事
追々向暑氣候に成宜濕に候事、彌尊公御安泰令賀候。
然者過日御面會申候節御噂有レ之候品々書試入賢覽候
一包之書物、甚澤山に而何共御氣毒に存候得共、先書試候間入ニ
賢覽候が決して達而御無心申候に而者無レ之實慮次第與存候

事、且撰子是又甚不都合之繪圖（御繪圖別冊に記す）乍二惡筆一候、是入二貴覽一候甚之書形故御分兼可存候間若々御分兼候得者幾度に而も御尋被レ下候様存候事。亦今一包は楊弓箱納圖是又同上乍入二貴覽一候か是は實々決不二急申一置に此節御貫候共致候場所も無レ之候事故造營後歸殿之上（新營御所還御）若し々被レ送候事なれは正當之御厚意に存候事。且右同包之書物猶更遠而御無心申に而無之候間是者以何様に而も宜候事餘り々々毎度数々御貫申候上加様之事申候茂實々申兼候儀に候得共先日茂餘り厚御言葉にあまい候而加様之大俗心之事重々申偏御免希入候事此分宜御頼存候事。且先達而書付進候時若く々小皺而な事書入候半ずや甚心配存右書留不レ置候間不レ覺申二候得若々書入候半ずや若々書入候事なれば是又烏渡申入置候小皺事者不レ及二御貫一候間烏渡此段申入置候事

且右木被レ下候共決して本撰子など不二入申一進文匣に而も被二入下一候得ば共に而とつと宜候事與々茂此段申入置候事

安政元年丙辰

水無月八日　此花

右大臣殿江　藏

參

而して右の宸翰には左の副紙がある。

× × ×

廿一代集　薄葉小本

類題和歌集

右先達而御貫申候而此節日々用深存候又々下今一組御無心申候

古今和歌集遠鏡　薄葉小本

和歌名所嘗覽

拾玉集

明日香井集

鈴屋集

和歌詞之抄

正木のかつら

和歌八重垣　薄葉小本

異類分類抄

百家類葉

増補和歌題林集

獨學和歌集
和歌大部抄同七部抄
古語深秘抄　大家集類題
和訓栞
貞觀政要諺解
假名貞觀政要
經典餘師
丹鶴叢書
和論語
四聲字訓大成
正字玉篇大全　薄葉小本
　右字引類
謠典拾葉抄
謠訓蒙圖彙
唐訓蒙圖彙
謠曲大意抄　右はどうでもよろしく候
合類書類目錄大全
職原抄

以上

× × ×

此にて陛下が當時如何なるものを御讀み遊ばされた事かといふことがわかる。

猶六月十日附にては、陛下が近衛家に向つて、茶な御無心遊ばされて居らるゝ。それは左の通りである。

右大臣殿　　　　此花（御自筆）

机下へ

兎角不揃之氣候御大節に御用心之程深存候事

大亂筆御免候事

御安泰令恐賀候。候梅雨中降續氣候。抑過日者菓子進候處早速御領掌之程歡心候。然此節御噂之膳州より扇子繪形書試進入候。委細者別紙に候間、宜御取斗賴入存候。若々御分兼なれば幾度に而茂御請問相違候事目誠に申兼候得共御手製茶菓極先達而御無心申御貴申候處未一度も不入候而焼失（炎上の際）候每度に而重々申兼候得共久々御無心申候間、何卒寒梅頼々存候事然決而不急申候間宜頼存候事

安政元年甲寅

六月十日

右大臣殿

机下江　　此花

×　×　×

而していよく\〃暑を近衞邸に避け給ふまでには、種々のゆきさつがあつた事は、左に掲ぐる翰にてわかる。

陽明殿　　此花

御机下江

猶委細者文に而茂難申盡候間、誠御面働乍其内御勝手次第御入來候はゞ御面會申委細者御相談申度存候事。然し關白（鷹司政通）茂又一兩日之内に參之様子故其節如何か乍何卒暑氣之時分御苦勞千萬候得共御勝手次第御面會被賴置候事

猶暑氣之時分御用心と深存候事

土用中之印大暑之候先々地動止（六月十五日五畿内地震）天象茂穩候猶段々靜謐之様希入候彌貴公御安康令慶賀候。然者御面働乍一封入二貴覽一候今日執權（關白鷹司政通）久々に而参上令面右之一件尤申繁之處賢亭江（近衞邸陛幸の御假住）來用來之事者譯無レ之所司代（内藤紀伊守）茂暑之時分御察申彼是工有レ之由に候何とて鷲尾家（隆聚）河鰭家（公述）抔に成右之所江御出之事を何か無被レ申入一候。然共者御度難レ申候間宜御取扱賴存候。貴公に茂何茂御近邊處にて面會致共上庭向且そこら爲レ見居間迄茂通行候處備よく庭江職人入込申にて殊之外繁者に候間於二關白茂一暑かり之様子に候得共右賢亭參一件之事者未噂無レ之候間又私より申掛候而茂如何や先不申候例之私之不行屆と御存候左れ共今日何茂向より噂無之所にて私より申掛候而者是迄謀計露顯候を深配慮致過不レ申候間此段宜御取成偏賴存候事

只今關白面會濟候早々此一件御目掛申候不二相替一大亂筆御免賴存候

右府公江　　此花

御密使

×　×　×

而して當時如何に座主の宮が陛下に近しく在した乎といふことは、餘左の數翰によつてわかる。

尤内府（鷹司輔熙）招候積且一條（齊敬）亞相之處八十五日御譚申入候
只今關白（鷹司政通）面會濟速執筆不二相分一亂書御免賴上候
暑氣御用心存入候事
何も荒々

嚴敷暑氣候
益御安康令レ賀候誠雨昨日者御入來に而當座樂等有レ之滿足不レ過レ之候然御歸及二遲刻一御容腹且暑天之比萬々御氣毒に恐懼候何之御障り無レ之御安僻之御事耳聞致度如レ斯候
然者昨夜御約束致置候十四日御入來之事甚申兼候得共少々差支有之候間何共自由之義申兼候得共尊公無二御差支一者十五日之方御入來願度候座主宮も兼日約束致置候間何も十五日入來と心得候猶又當座樂等如レ例候哉昨日位之刻限御來臨賴置候事且又申入今日關白え又入來候而萬々譚之便十七日之比申試候得者志賴之機嫌且諸司代も（內藤紀伊守 內藤豐後守）中居候連日に而も被レ爲レ成候樣申居候然關白も存候者炎氣之比は連日何とか候へ共者氣之頃者無○○者名日に候間宜樂被二申居一候是は譚に候間仲々筆無言葉に連日參與申樣な事に而は無レ之候得共、共位之事故尊亭（近衛邸）へ參候事も安心にて存候事仍早々より御樣ケせ御氣毒乍十七日辰刻早々推參致候間宜賴入候就而は兼々の存意申述べ候必々御備物無レ之樣先日茂推參節茂めいくに送物何共御禮申盡難候每度參候に加樣之事何共恐入候偏に此後は御備物無レ之樣兼賴置候事且又當座茂不二相替一催候此茂猶十五日御面會之節委細申置候事
用事事何茂荒々
安政元年六月十二日　此花
右大臣殿え

（第十二）近衛邸臨御

而して陛下が始めて近衛邸に御赴かせられたのは、六月中であつたに相違ない。左の宸翰によつてこれを知る事が出來る。

右府公
御机下　純仁

先達而は御參始而拜見致拔々御奇麗御弘日廻も有深々辱入候。

何卒又々参殿（近衛邸）事と偏存候。然色々と御隨中、其段何共御免希入候。仍御返事迄荒々誠に々々大亂筆、偏御免賴入候事

統仁謹認

貴翰得與拜見候。兎角難レ晴天象地動難レ止、心配致居候事、併尊公に茂益御安康令二恭賀一候。然者從二先日一以二座主宮二（青蓮院宮）毎々御相談申、深御面倒と存候事、然深安心無レ限、慶心存候。只今又々御細御心切之御文被レ下、得と熟覽候處、志極御尤と存候、何茂委細承候。間御安心可レ被レ成候。早速今日召二議奏一申渡候。心得之處折悪く加勢武傳も退出後故、不都合候間、今日は不レ申渡候。明日は法樂に而朝早く候間、朝之内都合次第可レ申渡、心得に候。然萬一時移り關白（鷹司政通）出仕候事なれば、又々後日に可二見合一哉、且一向何々無レ予心配之趣申述、關白へ私心得斗に而可レ申試哉、然先日之様子に而は今度之地震格別無頓着様子故、申加氣候。而程能参候へば宜乍、又々惡成候而も甚心配候間、若明日之事なれば、明後日に而も招二議奏一、又三條（實萬）可二熟談一哉と、兩樣可レ有、以何や私案候は、議奏へ申候而、兩役勘考程克取斗關白へ申入候而、都合能参候はゞ志極宜候へ共、若々私申候之様子に申候事にては關白へ信直々不レ申、議奏へ申除之手廻之様萬一關白被レ思候而は始終處誠に々々都合悪く、甚以心配に存候。間右兩樣之處、以何可レ然、然如二御文一候ほど三條も委細承知に候事なれは、其は決してもらす樣之事無レ之と存候。間左樣なればとんと無二心配一候。然、明日關白参上之處無二覺束一候。間若参なれば如レ始以何候や此偏も毎度々々御面倒乍御懇之御文にあまへ候て又々わからぬ事認御目掛申候。宜御取扱賴存候、呉々も御懇切之段深々喜存候事

泉殿之事も安心候様被二仰聞一、是又深く喜存候事

仍此段一應御相談申入候事

卽答

便申候。此後も何か無二遠慮一申入候間、右府公よりも無二遠慮一被二仰聞一候、様始終之處何か又々御譚相手と深く喜存候間、決して無二遠慮一何事も打明し、御互に師弟之處無レ隔被二仰下一候樣兼申願置候事

安政元年甲寅
六月

卽答

右府公

御机下　　　統

師弟云々の御言葉は、近衛忠凞が、陛下御幼時書道御指南申上たからである

× × ×

宸翰にもある如く『先達而は御亭に而拝見致し扨々御奇麗御弘目慰も有深々幸入候御序又々参度事と偏存候』との御言にて、これ等の事からして、遂に表向に閏七月には紫宸殿代に近衛家の寝殿をなさせ給ふ事となつたのであらう。

尚左の御宸翰によつて、陛下と親王と近衛、三條との間に、種々の御相談事があつた事がわかる

右府公　　天淵(御自称)

御机下江

朝夕者何與無凉氣に候得共日中者兎角難レ絶暑氣御用心被レ成候様存候　事猶又近々御入候はゞ数々御譚申入候半と御待申居候

統仁謹呈

兎角殘暑候得共先々今朝より快晴清暑候　益御安康令レ賀候。昨日御入来に而数々御譚申幸青門(青蓮院宮)茂来合に而志極都合に候

先刻三條大納言(實萬)一人招候而昨日之趣委細譚致し候得共私心に者今少兎分に茂無レ之存候得者御前御年内々島渡申入置候間共御心得願置候　近日に茂三條大納言御亭江参り定め而譚茂有レ之候與者存候得共萬一日数経其事茂無レ之節は島渡御招に而御公思召に而一應御譚有レ之候得者志極都合可レ宜哉與存候間島渡御書牛中入候間宜御察希入候事

追而申入候今日之譚之趣中入度候得共こて々々と難ニ書取一候間不レ認候間委細三條江御譚希入候事

安政元年

七月十七日

右府公　　天淵

御机下江

右の宸翰の事は、近衛忠房公日記に『安政元年七月十六日忠凞公御参内』とあり、又『廿日に三條殿来らる』とあれば、恰も御宸翰の意味と符合してゐる。

これは如何なる事の御相談事であつた乎、これを揣摩する事は出來ぬが。公私種々の事に就いての事であつた事は、固より疑を入れない。

(第十三) 刀劍に關する震翰

陛下は明治天皇と同じく、刀劍には少からざる御趣味があらせられた樣である。然るに其の刀劍を御求めになるに就いて、御手許が甚だ御不自由であり、此處に於て、近衛家に向けて、種種御内情を御打開けあらせられた。これ等は極めて、當時の至尊の御生活の御模樣が明かであるから、今こゝに揭ぐる事とする。

右大臣殿
　御机下江
　　　　　　　　　　統仁
　　　　　　　　　申試
　　　　　　　　謹呈

内々
追而申入候 實々無㆓心置㆒之所過分に存之儀申入甚恐入候 仍尊公よりも無㆓御遠慮㆒之段偏希入候 事實に々々本願寺（東の字脫字下にもあり）へ内々御申合有ㇾ之承知に而献上に成候はゞ誠に々々深畏入候然し々々過分之事共申其段偏に々々御免申入置候 何分とても尊公御思召次第與代而存候事何も荒々
　　　　　　　　　　統仁呈

何卒近々者尊亭（近衛邸）へ参候事與樂存候事 雖ㇾ揃 時候御堅固に御用心可ㇾ被ㇾ成存候事 鬱々敷天氣に候 然し白露後の印追々冷氣候 益尊公御安康大慶に存候 昨夕者御入來御面會申數々御譚申 喜存候 然し色々打明しむさといたし候 事共申中には失禮茂候 可御免可ㇾ被ㇾ下候。然者鳥渡申翰進 誠に々々々々申兼候得共鳥渡々々内々御相談申 試候 實々 願置者於㆓尊公㆒茂少しに而も否哉に被㆓思召㆒候はゞ實々無㆓御遠慮㆒承度候 事別之義に而も無ㇾ之候が此比少々加樣之短刀好寄集候心積に候間誠御氣毒に存乍先達而尊公へ御無心申候處御吟味被ㇾ爲ㇾ在候御事に而昨日は内々被㆓見下㆒誠に々々有難く々々樂御待申候事に候 依ㇾ之同樣女房之内一人江申含置候處昨日右に振見候 太分宜候而何卒手に入度存候得共少々とて付候事有ㇾ之候 而少々手に入兼申候儀之識に々々申兼候義に候得共先此刀御目掛申

候間何卒東本願寺へ内々御噂にても有レ之候事に而東本願寺より貫候事は成間敷や誠に々々重々不正之事無レ憚申何共尊公に對し候而も赤面至極に候得共烏渡申試候。右之事尊公より何卒程克御噂有レ之候而本願寺も承知致獻上與申樣な事に候はゞ誠に々々何共々々深々畏存候。左候者待二試御目に掛け候へ共於二尊公一茂共は以何と思召候御事なれば實に少しも無二御遠慮一否哉之御返事承候事なれは誠に々々無二此上一大慶に存候何分此段偏御返答承度存候事。仍而先内々御相談申試候事宜敷々々御沙汰希入候事

追而申入候右刀先方甚急之由候處暫返答待可二申置一候事故甚々申兼候へ共今暮迄御返答御取斗希入候事

六ケ數事なれば實に無二御遠慮一伺度候事

安政元年甲寅

後七月廿一日　統仁

右府公江

極々内々

× × ×

更に此問題は同日引續き、左の如く進んでゐる。

右府殿江　統仁

再文極内々　呈

酉刻〆

誠に々々厚御沙汰深々畏入候仍荒々御返事申入候何分とも大御乳（御内場の金錢管理の職）之方へは無二御沙汰一私へ御渡之段希入候誠に々々急大々亂筆實に御分兼御免之段希入候事

統仁謹呈

早速の御返書令二拜見一

今日者誠に過分之申言申進候處御心易承知之段誠に々々々々御恩難レ申盡一深々畏存候然尊公より被レ下與之御事誠に々々不レ存寄一驚入候。實に日外より過分に數々御貰候上又々私所望に而不顧押掛何か數多御貰申實々禮難レ申盡一實々御氣毒與心中誠に々々恐懼致居候事に候あなたよりは無遠慮に何々被二仰聞一候段何共々々畏入候なれ共一本ならす二振迄貰たといあなたより被レ下與被二仰候共私之身にて數々御貰申候事餘り々々御氣毒恐入候間何共御勘考偏願存候。然共上被レ下與之達而御趣意なれば何共恐

入御上段御請申候事に候。右に付代金之處大御乳へ封中にて被レ為與之御沙汰恐極日當に而は候得共そこには少々繁多之分柄御座候而右之一件不レ存候間誠に々々々々加様之事もおかしく候得共御面倒作又此返事に今日之所は八兩も被レ下候は御序に私へ内々直文にて其文箱へでも入被レ下候與私より先々へ渡候へば志極都合不レ斜此上之御事と存候間誠に申候へ共八兩之處は此御返事か又は明日に而も私へ内々御直文にて御文箱へ御文與一所に被レ入餘之處も近日同様之様希入候只今大御乳へ御封中被レ遣候にも一細不レ寄候事故前後不レ分爾存候間何卒々々私へ極内々にて被レ下候様願入候又飾作之處は本願寺よりけん上之御沙汰重々有難御配慮申盡難宜御禮申入候仍如レ始右一振御返申候間猶御勘考御申合之上作立拜領與存候只今御文にて委細承知致候間右短刀一振文函共返上候事

何も宜敷御沙汰願入候事

安政元年後七月二十一日

即刻

實に々々大亂筆

御宛之事

右大臣殿へ　　　　統仁

再文極内々く　　　謹呈

× × ×

略して更に又左の如き宸翰がある。

右府公　　　　統仁

御机下上　内々　　呈

實に何度御面倒之義恐入候何分にも今日は快晴に成杯兌時候と存候何も昨候御用心存候事

統仁謹呈

今日者快晴に成少々暑に候然御安康之御儀令二恐察一候。誠に昨日者むさと致候事共御無心申候處急に御領承之上早速代品被二送下一誠に々々何共難二申盡一深喜候然處猶々御面倒之義申恐擢候得共鳥渡亦々申入候。昨日之短刀一振之内安吉之方者宜早速今朝先方江送り候事に候處因次之方は彼是申事も承知候間何共御面倒作ら御勘定被二成下一彌無二相違一宜刀に候へは御買候か又若々贋物に候事なれは直に致二先方江返一

候間一應御勘定希入候、仍先十五之方先序御返申候間彌
宜候而御貰申候事なれは、其節又々申出度候。何明日
には代申出度申候間止に成候へば短刀を返亦御貰
申事なれば代品遣候間火急之申條恐入候得共今日中御
返答承度候間毎度烏渡御尋申候宜御沙汰希入候
事。若々御分難之儀に候へば御面働乍近々御入來御話申入候最
早文通に而御分なれば共に而とつと宜候間此處も一應御
尋申入置候事。格別懇敷之に而無之者矢張御貰申候共段
宜御取斗願入候事
俗心乍二振なれば猶更に候間大概のなれば如レ元候事
安政元來甲寅
後文月廿二日
右大臣殿　　統仁
御机下へ　内々　　呈
×　×　×
而して翌八月に至りて又左の如き宸翰がある。
右大臣殿　此花
御机下へ

葉月八日封
今日遙々小御所代より千返樂（近衞家鎭守祭の雅樂）聽聞而
白事に候然亜分には不レ聞候事只今の刀の事違而申候
と申にも無レ之何分にも貴公御勘考之上御沙汰御打明承
度存候事何荒々
連々快晴に而昨今者亦々餘程殘暑に候益
御安康之御儀令二恐察一候誠鬧昨日者御鎭守正遷宮無レ異被レ遊
濟候事珍重存候今日千反樂追々珍重存候拔者先達
之時斗早速被二返下一深畏存候其時は一向能相打候然本
願寺より之方は如レ仰少々進候得共少し宛おしらへ候へば隨分
能相申候深畏存候又々一昨日之御一封何も承候
御亭江（近衞邸）私參之事延引之段源大納言（久我建通）江
御噂被レ爲レ有候へば畏之由何も承候兎角々人々口穩
與存候事然し少々存付も有レ之候へば猶明日にても御入來之節
御相談申候前菅大納言（東坊城聽長）之一件何も承候
承知は致居候得共御心切之御沙汰猶又深心得申候事且又出
鑑の本之事如レ仰昨日二條（齊敬）より貸候先日貴公御見爲之與
悉皆同樣に候間烏渡此儀申入置候　扨又何々

御面倒之御儀恐入候得共烏渡申入候。今朝加樣之品外より爲レ見來候。國吉者書付之通餘程宜出に候へ共餘程大金に候乎以何可レ有レ之や本門主より貰候事は成間敷や私存候は作之處は其儘に而貰又々私勝手宜節爲レ致候積故右刀丈貰候事者成間敷哉。跡三本も宜候へ共書付之通りに候國吉格別六ケ敷樣之事なれば跡二本にても作同じくなれば國吉方志極與存候然先達而御約束尊公より御貰申候は以何成銘にて候や若や國吉にては無レ之や不レ覺申候。同銘なれば今二本之內に致候しかと不レ覺申內々御尋申入候。國光かとも存候謎銘なれば志極宜候。每々加樣之事申入深々恐懼候へ共御心安き餘り過分の申條御宥被レ下候。何分にも烏渡申試候間以何樣成共尊公御沙汰次第無二御遠慮一承度候先々尊公迄內々御相談申試候然又々御勘定之邊も承度候。甚先方急十日には返與之程申居候間甚火急之儀申兼候へ共明日若々御入來之御義なれば其節不苦哉承度存候每々色々申入御面倒乍宜御沙汰希入候

明日御入來之由一昨日御文狀に有レ之候深樂御待申候

何分其節色々御談合申入候事

安政元年

葉月八日　　　此花

右府殿江

密々

×

而して引續き尙左の書翰がある。

×

右大臣殿江

內々　　　統仁

誠に不揃之時候御堅固に御用心と存候事

統仁

謹上

私江之御返事は御打明し之義希入候事　又々あちらへ返答の邊宜御敎希入事

逐日晴乍亦々餘程殘暑覺候益御安康之御儀令二恐賀一候然者每度御面倒乍烏渡御相談申入候。先達之國吉之劍之事其後又々中山(忠能)之方に而代り之處爲二掛合一候處委細承之通に候間烏渡又々御相談申候私存候者少

し心組御座候而國吉は止に致元重十六兩之力に致度候へ共共は最早先方以遣如書付之候間矢張國吉之方に致候半哉内々今一席御尋申入候事若御不分明なれば幾度也共御尋希入候事。且便に申候共申兼候事乍先達而御入來の節御噂に者どうか絵刈田二組御出躰之由承畏入候甚申兼候義に候へ共今明日之内御貫申候事成間敷や打明し候はゞ實は今晩より神事入に候明晩よりは潔齋に候間餘り他之事は不二出來一候間先刈田など致候間甚打明し候義何共申兼候へ共就レ右之儀三組御揃無レ之而茂とつと無二子細一候間今明日之間御貫申候はゞ重疊之御恩悲深畏入候然御落支之儀被レ爲レ有候へば無二御遠慮一御沙汰希入候事。私よりも打明し候事共申過甚恐入候間御伏藏無レ之御打明之御返書拜見希入候事誠に一昨日者御領山之生松茸拜領深畏入候早速申付拜食候處至極宜味深畏入候宜御禮申入候事陽門迫々全快之由深安心喜存候事何も荒々

猶又近々御勝手次第

御來臨希入候事

安政元年

八月十三日

右大臣殿

御机下江

統仁

是にて拜見すれば、生松茸なども、容易に御膳に上ることが出來なかつたものと思はる。

× × ×

以下安政二年の御宸翰だ。

右大臣殿

御机下江

統仁

謹上

兎角々々不揃之時候御堅固に御用心と存候事又々御入來希入候日々御待申居候事。猶又昨日も御話申入候事御勘考頼入候事、然し甚流逆の存望扨々大笑敷候事尤々是限御笑艸之種と存候事

何も荒々亂書御免

連日春雨に而鬱氣候益尊公御安康之儀令賀候誠に昨日者久々に而御入來御面會申色々御話申深喜入候其節者日外御約束之短刀飾出來之由に而被下深畏入候厚御禮申入候事、且又其節申置

候　懐紙差進候得々覧得ば何共昨日御治定之力も以苦敷候間今二枚認ニ（原註）昨日之一所差進候間御師御日利御定希入候事且又同御約束之時斗度に而甚中出兼候ば任レ仰是又送進候間御修復頼入候事
且又昨日爲ニ御見一被レ成候劍令ニ返却一候
内々御亭申入候が右之劍之價いか程に候哉内々承度候事
以上
安政二年
正月廿五日　　統仁
右大臣殿
御机下江　　謹進

×　×　×

今宸翰にある通り『右之劍の價いか程に候哉、内々承度候事』の御一句を拝讀すれば、如何に陛下が刀劍に御執着遊された乎が、畏ながら想像せらるゝ。而して又た如何に御手許が御不如意であつたかゞ想像せらるゝ。

（第十四）孝明天皇と近衛家

孝明天皇が桂宮の假皇居より、時々近衛家へ御出掛けになりたる事は、前にも掲げたが、尚今茲に久我建通卿の日記を按ずるに、七月二十九日の項に左の記事がある。

『廿九日三條大納言（實萬）召ニ于御前一内々承レ之處當時異船渡來之儀に付陽明家御之節迚々御當座甚御心配之儀也御尤之次第也、且又鞠弁樂等も可レ有レ之歟之樣子抜々困入候儀と承り甚恐入候事也、午後予召ニ于御前一右同上之事御咄種々心中言上候。又々異船（イギリス）來候旨御聞に付如何哉御尋予承居之分申上』

尚又東坊城聰長卿の日記によれば、八月二日の項に左の如くある。

『八月二日同役召ニ御前一、近衛家女房往來之事追々涼氣にも相成候事故先々御見合可レ被レ遊旨也予申云少にても御氣づまりに思召候節は何時にても可レ被レ爲レ成之旨發て示談其旨も被ニ申上。』

斯の如く當時の近衛家は、至尊にとつては、全く御遊樂といはんよりも平生樣々の事に思ひ惱ませ給ふ御心を、轉換遊ばさる一種の精神御保養の場所であつたであらう。

今近衛忠熙公記、十月二十九日の項をみるに

『未刻(午後二時頃)より座主宮(朝彦親王)内府(鷹司輔熙)等被レ參座無レ程御當座被レ召ニ小半院ニ各參る……暮過に予、座主宮、内府、忠房(忠熙の子)等被レ召ニ御前ニ種々御談話、酒肴等種々頂戴、天盃天酌度々頂戴、女房も御前にて賜也、御入與御賑々數御事也、亥半刻(午後十一時頃)許に及一統暫時退く、無レ程還幸』

これは只其の日の記事に止まるが、いつの御臨幸毎にもその通りで、若くはより以上であつたらしく思はるゝ。

尚ほ陛下には、外船が來た爲に安政元年正月の御歌會さへも、御止めあらせられた程にて、外國の事には、頗る御心配あらせられた。即ち安政元年九月二十三日、ロシヤの船が大阪近海に來るとの報があつて、陛下には常膳を減じ給ひ、七社七寺に仰せ給ひて、國安を祈らせ給うた。

× × ×

かゝる次第にて、常時陛下の御心を慰め參らするものは、恐らくは、只近衛家に御出掛け遊ばし、内輪の慰を遊ばさるゝ丈であつたらう。

(第十五) 以鐘代砲の勅諚

尚ほ安政元年十二月二十三日には、勅して諸國寺院の梵鐘を以て砲銃を造らせ給うた。これは幕府よりも同樣御願ひ申し出でたることであつた。

その證據には、東坊城聰長記に斯の如くある。

『廿三日巳刻過同役同伴向ニ所司代ニ如レ例淡路守(脇坂)申云先達被ニ仰進ニ候以ニ梵鐘ニ鑄ニ造兵器ニ之事、於ニ關東ニも兼々思召候御事に候、何も可レ爲ニ御内慮之通ニ被ニ仰出ニ候由、則一紙差出如レ左

近來夷國船度々渡來深被レ惱ニ宸襟ニ候依レ之海岸爲ニ防禦ニ御書付之通被ニ仰出ニ度御内慮之趣關東へ宜申上旨先達被ニ仰聞ニ尤右之通被ニ仰出ニ候上は、消息宣下可レ被レ行旨是又被ニ仰聞ニ候趣則關東へ相達有之趣及ニ言上ニ候處御時節柄格別厚叡慮之趣深御感悅被レ遊候於ニ關東ニも兼々御内存も被レ爲レ在候儀御同意の御事候間御内慮之趣早速被ニ仰出ニ候樣被ニ思召ニ候且消息宣下可レ被レ行旨御尤之

儀是又可レ爲二思食之通一候右之趣御兩卿へ御達可レ申旨年寄共より申越候事

十二月

此度御内慮被二仰進一候海岸爲二防禦一諸國寺院之鐘大砲に鑄換等之儀追て宣下相濟候はゞ其段早々關東へ申越有レ之候段於二關東一被二仰出一且勅命之趣諸國寺院へ申渡等之儀は都て於二關東一取扱候心得に候宮門跡方へは於二關東一被二仰出一候儀私より其筋へ相達候振合にも候哉又は關東其筋より相達可レ然哉尤御所向よりも御沙汰可レ有レ之哉右等之趣御兩卿へも御示談之上委細申越候樣且又宣命等關東へ被二差越一候儀に可レ有レ之哉左樣候はゞ被二差越一方之儀も取調可二申越一候旨年寄共より申越候間及二御示談一候事

右猶可レ及二言上一同役被申述。

廿三日以二諸國寺院梵鐘一鑄二造大砲小銃一之事被二宣下一(消息)

上卿權大納言辨長顯奉行光愛朝臣官符近日兩人可二持參一二條之旨殿下被レ命

× × ×

かくて太政官符を以て、諸國寺院の梵鐘を以て、大砲小銃を鑄造すべしとの勅語の中には、

『勅す、夫れ外寇之事情は、固より深く宸襟を惱ませ給ふ所也、況や錮紊に於ても何ぞ差異あらん。頃年墨夷再相模海岸に來入る。今秋魯夷、畿内近海に渡來す。國家の急務は只海防に在り。因て諸國寺院之梵鐘を以て、大砲小銃を鑄造せんと欲す、海國樞要之地に置きて備二不虞一速に諸國寺院をして、各時務を存じ、本寺之外、古來名器及報時之鐘を除き、其他は悉く大砲に鑄換へ、皇國擁護之器となす可し。』

云々との事であつた。

これ等を見れば、朝廷より幕府を、御叱戒遊ばさるゝのみならす。當時の幕府は亦た朝廷を恐れながら、寧ろ利用し奉つて、國防の準備に資せんと欲したのであらう。

(第十六) 朝廷と大名

尙ほ當時の朝廷と大名との關係について語るべき事がある。その一は薩摩であり、他の一は水戸である。薩摩の島津齊彬は、近衞家との從來の關係あり、爲に近衞家を通してこれ〳〵御

所にも種々御附届をしてゐたのである。されば安政元年四月皇居炎上の際には、竊に近衛家を通して金五千兩を献じてゐる。斯て安政二年正月十八日、陛下には左の如き御製を竊に賜はつた。

詠寄國祝

武士もこゝろあはして秋つすの
國も動かすともに治めん

× × ×

尚ほ齊彬がその友人尾張國主徳川慶恕に與へたる安政元年四月十二日附書翰の一節に左の如くある。

『先比伏見通行近衛殿へ參殿も仕候事に而、彼地に而承知仕候へ者、五ケ年御節倹被仰出候に付而者、於御所も、嚴敷御倹約に而、年々兩三度之亂舞迄も御止めに相成、其外別而御不自由之様にも相伺候、右者全く關東御存之儀にも不被爲在全く御附之面々御奉公振に嚴重に仕候哉と專ら傳承仕候』

これにて見るも、當時朝廷の御不自由にてあらせられたことがわかる。

されば陛下が島津氏の忠勤を擱んでた事に對し、かゝる御製を賜つた事も、決して不思議ではあるまい。

尚ほ安政二年二月十四日、近衛邸に渡御あらせられ、觀櫻あらせられたる時に、近衛家に賜りたる御製がある。これは少しく長文ではあるが、當時の御模様が最もよくわかるもの故、今ここに掲ぐる事とする。

安政二年きさらぎなかの四日、かねて約しおきたる近衛の亭に行むかひ名にしおふ糸ざくらを見て、

昔より名にはきけとも今日みれは
むへめかれせぬ糸さくらかな

見れとあらぬ風をすかたの糸櫻
花の色香は長々し日も

おのつからこゝろも花に伸ふまて
いとに櫻そ咲つゝく比

青柳の千す地のいとに香をこめて
さくかとおもふ花のいく木

伊とさくらいと長き日數くり返し
風のまにまになびく花房

午の時ころよりときどき雨ふりければ
是もまたあらぬなかめとなりて見けり

さくらはいとにかゝる春さめ
いと櫻いとは理かけてふる雨に
はなの色香もそふこゝろせり

またまた雨は晴て日影氣もはなの上に照そへは

はなの光をみかきそめつゝ
村さめの晴ゆくあとに春の日や

春さめの晴ゆく朝の伊とさくら
可壽そふ花や露のしら玉

黄鳥小蝶など花にたはむるゝも又興ありて

花の香をめするこゝろかいと櫻
いとのとかにもあそふ小蝶は

糸さくら枝つたひする綠鳥の
をのか羽色は若葉とも見ゆ

咲つゝく花の色香をしたひてや
いとにみたるゝ春のうくひす

夕影にも成ぬれば酒のたぐひとりかはし、今日はめづらしく男方を代哥花の宴催さす、ときに春のおほい臣より數々儲物ありければ喜のあまりかく所有ける

花のともあふてふさへも嬉しさを
こゝろつくしの人のなさけは

高坏に菓子肴物など數あり、その取合松藤の作もの有けるを見て

氣ふこゝに千世を重ねてたつ松に
ちきりてめくれ春のさかつき

松ふちのたてるすかたを柄として
こと葉の花も咲きさかふらん

夕影にもなりて稍更ゆくもとく歸り日數もうつろひし氣色又たくひなければ

花の上に夕日のかけのうつろひて
さらに色ます庭の面かな

日のかけはおさまる此の半なの上を
さらに照していつる月哉

色にみえぬたそかれ時の花の上に
ほのめきわたる氣ふの月影

追々ににぎ〳〵志く盃もへだてなくめくりて

やはらくる人の心も花ゆゑと
猶よをかけてめくるさかつき

とく暮れ月も光そひさやかにはなをてらす景色又たぐひなくおぼえつゝ

けたれけむ春のよなからかすまぬは
月もさくらの花の色かに

誠に雪月花ひとつの氣色のおもしろさに

雪とのみ梢に花のさく色も
みかきそへたる月のかけかな

其より庭へ下た地木の本に打つどひて

この木に打つとひつゝなかめても
こゝろの花の色は匂はす

月のかけ花の光もいやまして
はるとは見えぬ庭の面かな

おもしろやさすさかつきに影見えて
月もかすまぬはなの下かけ

何ことも思ひ忘れて月のかけ
はなの色香を更にめてつゝ

暮かともみゆる斗に咲みちて
にはに色そふ花の上の月

又もとの所へかへりつゝ盃のめぐる、餘り、人々手折し花を冠にかざす、我にも君のおほひ臣のかざして

さかつきのめくれるまゝに庭さくら
手折りし花を我もかさしつ

たもとにも匂ひとゞめん手折つゝ
　花をかさしてうたふ宮人

何かとながき酒宴になりぬるほどに

かへるへき家路わすれていつ迄も
　はなにめくらす春のさかつき

程なく警固も揃ぬれば名殘をしくもかへらんとて

いつまても何わするへきこの殿の
　花さくら木の今日のなかめは

名殘あれはあらぬ心を木の本に
　花にとゞめてかへる夜の空

安政二乙卯年仲春仲四日
於陽明家感花宴面白
慶悦之餘詠之
　　　　　百二十二代孫　統仁

×　×　×

帝この御宴については、餘程叡慮に叶うたものとみえて、左の如き宸翰を賜うてゐる。

「右丞相殿江　　此花
　御机下江

呉々も可笑品共上行之次第もしどろにて文字書續相違候得共熟々御慰之爲、御笑艸に御目掛申候、御覽之後は偏く
々々々御火中賴存候事兎角不揃の氣候專御用心と存
候事何も荒々
猶又近々御入來と御待申候事
先々晴候得共兎角不揃之氣候風立又々餘寒に候
益
右府公にも御安康之御儀令慶賀候誠に先日は兼御約束之御亭(近衞邸)之絲櫻拜見其上數々御儲物御取成厚御儀深々、恭存候。餘之慶之餘不覺長座及深更御氣毒に存候。
併格別めづらしく賑々敷酒宴深々恭至今日中申出喜悅御禮宜申入候事且右之品者誠に々々可笑物に而仲々可入賢覽物に而も無之候得共餘り々々先日之宴亭之櫻感心且恭之餘其日參候より歸宅迄之即詠且又存出之愚歌先認試御笑艸之積迄に御目掛申候。御賢覽之後は御火中に成候樣申

置候事

質に々々過日之酒宴不容に熱和面白事に御座候先は御禮之爲可笑物午御目掛申候。何も荒々

安政二年乙卯

二月十九日　　此花

右丞相殿江

× × ×

尙ほ近衞家の背後には、恒に島津氏の在ることを記憶せねばならぬ。

これから尙ほ水戸のことをいふが、水戸は光圀以來、朝廷とは特別の關係があり、安政元年十一月、水戸齊昭は炎上後、御心中を慰め奉るべく、華櫚の材を以て、琵琶一面を手製し、關白政通によつて、これを献じた。それが安政二年正月十一日京都に達し、十五日これを天覽に供へた。

扨その琵琶の銘には、斯の如きことが書いてある。

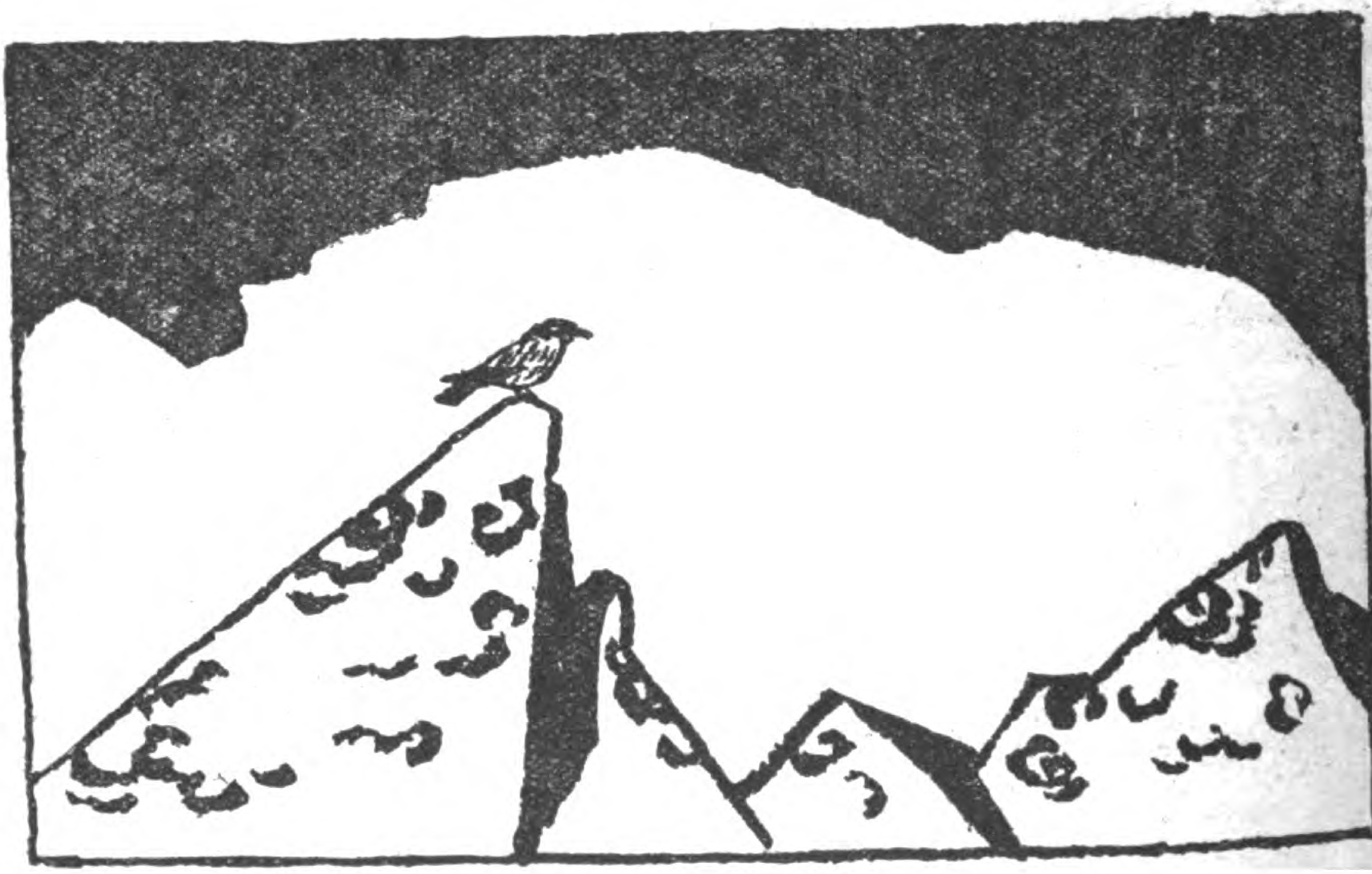
『今茲に甲寅の夏、皇居災に罹り駕を外に駐む、ゆくもなく鄂虜海に航し、攝之浪華浦に泊す。淹留自餘、畿内騒然たり。臣齊昭仰いで行宮狹隘にして宸衷を慰むるものなきを想ひ、伏して醜虜猖獗、未だ能く皇威を伸べ能はざるを慨く。屢陳ニ鄙見於征夷府一而才疎論、未レ容ニ田舍如何一也齊昭頃、華櫚材二尺許を獲、手づから琵琶一面を製す。竊に謂ニ皇宮之災一、雅樂の寶器烏有に屬するなきをえんや。乃ち關白政通に因つて之を献ず。行宮豈敢て寶器之闕を補ふを望まん乎、萬機之暇或は侍臣に命じ還城之樂歌を彈じ、太平萬歲を頌へ洋々乎として耳に盈つ。則ち内以つて宸憂を紓べ、外以て妖邪を鎭む。此器與有レ榮焉、臣竊に天下の爲之を祝す。

嘉永七年冬十一月之吉

權中納言源朝臣齊昭謹識』

× × ×

或者は此の琵琶の銘の文句を以て、水戸齊昭が京都に手入れをしたる事の證據物件となせども、京都に手入をしたるものは島津でもなく、水戸でもなく、いはゞ幕府自らである。この文句が意味あるにせよ、ないにせよ、問題にすべきものではない。たゞ大名の中で、薩摩と水戸とは、率先して朝廷と親近を計つた丈の事實を、今こゝにあげて措く。而して此れが他日容易ならぬ問題を惹起した。



社會喜劇

鬼ケ島から來た男

（二世ドンキホーテ）

中村吉藏

第一場

場所　宿屋の二階

人物　棒太郎
元村六郎
高利貸の老爺
年老つた女
その娘
宿屋の番頭
主人
女中

時　現代

バラック建築の宿屋の二階、前廊下は勾欄附、奥に床の間、一方は障子、中は唐紙で仕切つた、同じ形の部屋が二つ列んでゐる、下手奥のトタン屋根の上には物干臺、アンテナ・ポール等青空に向つて突立つてゐる。

〇

二十歳前後の、いてう返し、色白の丸ポチャの女中に案内されて、恰好の附いてないたるんだ詰襟に、だぶ／＼したズボンをはいた山高帽の椿太郎が、色の剝げかゝつた黑皮の古風なカバン、蒲草で編んだ大きな手提を兩手にぶら下げて下手の部屋へ入つて來る、長い髮毛はちゞれ上り、顏は日やけ、潮やけがして、赤銅色に光つてゐる、後から元村六郎が萎えかゝつた黃染の袷を、毛深い胸元あらはに着て、頭の上に荷包みを載せ、柳行李を橫抱きにして入つて來る、赤ちやけた髮もしやく／＼と生え延び、色は太郎よりもつと黎黑い、肉太の頑丈な手足は漆を塗つたやうに見える、腰には大きな煙草入をぶら下げてゐる。

女中は持運ばれた荷物を片附けにかゝる、カバンや行李は重くて持上らない、

女中。（赤くなつて）とても、私なんぞの力では動きもしませんわ。

六郎。（ニヤ／＼笑つて太い聲で）汝にや無理だべあ、島のあんこたなら頭へさゝげて五町でも、十町でも軒々持つて行くだが……。

（女中、言葉を聞分かねて、眼をぱちつかせる）

太郎（やはりニヤ／＼笑つて、女中を眺め）この唐人の言葉は、姉さんには通じまいな、……六郎、もつと氣を附けて、ゆつくり分るやうに口を利くんだ、あんな大聲を出さんでも善い、傍がびつくりすらア、こゝは東京だよ……東京のまン中へ來たんだよ。

六郎（不平さうに）己ら、潮風の荒い島で育つたゞから大きい聲は持前だ、何さうても、汝のやうな學者でねえだもの、舌ッこがいふ事を聞かねえだよ。

太郎。（苦笑）ハヽヽ、學者、學者て云ふない、こゝは小つこい島たア違はアな……だが内地のあんこはやつぱりきれいだよ。お化粧が上手だし、着物の着方もずんと氣が利いてら、椿の花をさして、長い黒髪を地べたへ引づらせた島のあんこの生地が美しいのとは又違はア、……姉さん、そこは私等が片附けるから、まア こつちへ向いて見な。

女中。エ…何か御用ですか？

太郎。（相不變ニタ／＼笑うて）善い物を見せて上げやう？（荷物の中から大きな海龜の甲を引き出して）……さア、これが瑇瑁だよ、磨いて光澤を出しゃ櫛、簪になるんだ。

女中。エッ……氣味が惡いわ。

太郎。ア、……島の土產を上げやう、椿油があつた……（琥珀色に光る罎を持出し）……さア、手を出して見た。

女中。ほんとうに？……有難う。

（さし出す手首を、太郎は衝動的にくいと握つて、打ふりながらニツと白い齒を見せる、女中はアッと叫んで、振り切つて、驅け下りる）

六郎。汝の女好きも惡い病だ、チとたしなまつしやれ……こゝは東京だよ……東京のまン中へ來たんだよ。

太郎。（苦笑）何しろ内地のあんこ温皮が剝けてるから、こつちの手がひとりでに出やがるんだよ……船の道中が長かつたし、黑土と女とにさわれなかつたでな……。

六郎。（煙管で煙草を燻らせながら）、汝の家は代々の名主だつたし、汝は又情深うて六ッかしい理窟の分る學者だいふので島中でも評判だが、他屋へ通うてあんこ狩りする方も名人だつて皆が云つてら、内地へ來ちやあの方はチと氣を付けたが善かべあ。

太郎。あの道は別だよ、汝だつて、あんこ狩りにかけちや己には負けめへが、……蛤貝が榮螺殼笑ふでもあるめへハ、、、、。

番頭（顏を出す）、何度おヒイキに預りまして……只今は女中が行屆きませんで、何か失禮な事でも……。

太郎。イヤ〱女中さんに粗忽はない、實はな、……己ら、五六年目に東京へ出て來たんで、見るもの、聞くものが珍らしいんだ、内地の若い女子衆の、肌目の細かな、白い手と來ちや、目の玉が吸込まれさうになつてな、一寸ちよつかいを出して見たんだ。ハ、、、、、、。

六郎。島内ちや……男も女も皆一腹の兄弟のやうにしてるで、別け隔てねえもんだからなハ、、、、。

番頭、（苦笑）ハ、、、左樣でございましたか？　エ、旦那方は、何方から入らつしやつたのでございますか？（宿泊用紙を出す）

太郎。（笑顏で）鬼ケ島から來たんですよ。

番頭。へ、、、御じよう談を……。

六郎。南の黑潮の中を蒸汽船で搖られ搖られしてやつて來ましただ、己ら東京へは始めてだが、地べたの上で、黑潮よりやもつと恐しい、渦がくるくる卷いて目の廻るやうな處だべあ、海坊主が阜へ攫り上げられたら、こうだらな。

番頭。へ、、、、何卒これを願ひます。

太郎。住所姓名を書くんだね、よし、よし……。

六郎。番頭さん、己らと違うて、この人は東京へ二度も三度も來てるだ、島中の學者でな、なかなかえらい事を知つてゝちや。

太郎。（用紙へ筆を走らせながら）、そんな吹聴はせんでも善いぞ。

六郎。吹聴ぢやない、いゝい、ほんとうの事だ、…なア、番頭さん、この人は何時も米の飯ばかり食へる身分ぢやが、情け深うて、我慾が嫌ひで、島の者に米ばかり食はせちやすまんつて、その米を皆に分けてやらしやる、それが正義人道つて云ふんださうだ、天道様は直なもんでこん度は、東京のまん中に、先祖が寳を埋めておかれた事が知れたんで、それを掘出しに己らも連れられて來ただ、宿の衆にも御力を借らざアなるまいで、何分よろしう頼みますべあ。

番頭。ヘエー……（屆を取上げて見て）青ヶ島つていふところでございますか？

太郎。昔は鬼ヶ島と云つたもんだ、八丈ヶ島のつい傍の方だよ。

番頭。ヘエー……左様でございますか？

太郎。昔はな、古い話をするやうだが己らの先祖は徳川幕府の十代、家治將軍の時に、勤王論の魁けをやつたといふので、捕まつて島流しにされたあの竹内式部の一味のものださうだ、己らはその何代目かの血すじに當るんだ。

番頭。オヤまア……左様でございますか？

太郎。ところが、その先祖の書き遺した秘密の書類が、ついこの頃、納屋の天井裏の隅から見附かつたんだ、何んでも今の銀座の邊りに、家屋敷があつたものと見えてな、その屋敷の土の底に、大甕か何個かに納れて、金銀を埋めて置かれたのだ。

番頭。ヘエー……まアそんなお手附が？

太郎。一萬兩か……十萬兩か、そこのところは分らんが、何んでも軍用金のたしにでもするつもりだつたろうから、大分の高らしい。

六郎。今時の金に直しや、大したもんだべあ。

番頭。（妙に狂かれたやうな表情）……そりや大したものでございますとも、慶長小判一萬兩なら、時價百萬圓もしませうか？

太郎。己ら、自分で金が欲しいんぢやない、慾ッ氣はないが、そんな死金があるなら、土の底に埋めておいては罰が當る、早速堀出して正義人道の爲めに活きた使ひ方をしたいんだよ、近頃は小い島でもさうぢやから、賑い内地では猶更さうぢやろうが、世間に……社會に忌な病氣がダン／＼殖つて來て、惡い事をする仲間も殖えりや、氣の毒な、憐れな境涯に落ちるものも日に増し多いやうだ、これはタダの藥ぢや治らんが、金の力でなら治る病氣ぢやろ、口癖に云ふやうぢやが、正義人道も金の力で實行が出來る。

番頭。左様でございますとも……金と女が仇でさアね。へゝゝゝ。

六郎。汝もたか／＼呑者だべア。

番頭。へゝゝ御じよう談を……

太郎。(熱心に)ところで、先祖がその金を埋めた場所も、地圖まで附けてあるから見當は附くんだ、明日からでも掘出したいと思ふんだが、その手續や何や彼や、いろ〳〵面倒を見てもらひたいんだ。

番頭。へイ〳〵、それは主人ともよく相談いたしまして、如何やうにも取計らひませう。

太郎。(カバンから黄八丈の布に卷いたものを取出し)斯うしてこゝに、その秘密書類がちやんと纏めてあるんだ……煤けた地圖まで附いてな。

番頭。(空返事)へエ〳〵……いづれ主人にも申しまして……一寸と御免蒙ります。(起ちかゝる)

六郎。ア、あのあんこにこの椿油やつてもらふべあ、島の者は嘘云はねへでな。

太郎。オヽ、それ〳〵……忘れてた。

(番頭は椿油の罎を押附けられ、呆れ顔で匆々に引下る)

六郎。内地の人は皆金持と見えるだな、汝の話に少ともオッ魂げねえでねえか?

太郎。イヤ、内地の人は、腹ン中をそのまゝ口へは出さないもんだ、でも、イヤに眼をパチクラさせて、そは〳〵して引き下つたぢやないか?

六郎。さうかなア……さうかも知れんな……ドラ、己も東京を一つ見べえか……ア、あそこに高い塔がある……(物干臺へ出て、あちこち見廻はしてゐる)

(太郎もそこらを片附けて、そこへ出る)

六郎。あつちにも、こつちにも空へ向けて竹が突つ立つてあるだ、釣竿でもあんめえが?

太郎。これがラヂオのアンテナつていふんだよ、宿の上り口の部屋へ行つて見ろ、器械が口を利いてるから。

六郎。器械が口を利くて……化物ぢやあるめえへし……馬鹿にしなさんな。

太郎。内地の文明開化つてのは、鬼ヶ島から來た者には、まあ化物だよ、鬼ヶ島から來た者が、内地の者の眼には化物に見えべあ。ハ、、、。

六郎。あの、高い……高い、鐵の梯子を組み上げたやうなのは、ありゃ何んだら?

太郎。ありやボウちい家を建てゝるんだ。

六郎。フーン、鮪ッ子見たいに人間ばかりウヨ〳〵して、土地狹いで途方もねえボウちい家を建てやがるんだな、ぢやいつそ空の上へでも引越したら善かべあ。

太郎。そーらあそこの小高い石塀の上を人とかげがつゝ走つてるやうなのが見えやうがな……あれは己らたちが今、乘つて來た電車だ。

六郎。さうかい…そこの地上は大きいこがね蟲がぶん〳〵唸つて、あつちからも、こつちから飛んで來てるやうだ、あぶねえ事つたな。

太郎。ウム、自動車が恐ろしく殖えたもんだよ、人を轢殺ろす程の、忙しい用事があるのかなア？

六郎。街を歩く人間は、今に皆殺しになるべあ。

太郎。それでも人種は盡きんもんだ。

六郎。ア……恐ろしい材料だ……？

太郎。飛行機だよ…人間が器械で宙を飛ぶんだ。

六郎。器械が口を利いたり、器械で人間が宙を飛んだり……己ら恐ろしくしたらア、頭がガン〳〵鳴る…目まひがしさうだよ、（飛んで室へ入る）

太郎。慣れたら何んでもないぞ……ア、何さばきでもしやう。（室へ入る）

○

隣室へ、五十才ばかりの年老つた女と二十才位の若い娘とを追つ立てるやうにして、帽子を冠つたまゝ、折カバンを抱へ込んだ、人相の悪い六十老爺が、氣色ばんで入つて來る。

老爺。見付かつたのは天罰だ、……人の借錢をふみ倒して、夜逃げするやうな横着者に御天道様はお利益は下さらんぞ……まア出なされ……出なさいッ。

年老つた女。イヤ、夜逃げなんて人聞の悪い事を仰つちや困りますわ、こちらの親類の者へ、金策に出かけて來たのでございますから。

老爺。默んなさい……一つ事をつべこべと辯解はいらん、女の口でゴマかさうたつて、ゴマかされる己ぢやアない。

年老つた女。決してゴマかすのぢやございません、ほんとうの事を云つてるのです。

老爺。ぢやアこれから出る處へ出て、白黒を附けてもらはふか？　金を借りておいて、行衛をくらますなんて、質の悪いかたりだ、

年老つた女。（口惜しさうに）さういふ惡氣はみぢんも持つてないんです、ていふに……。

老爺。期限が來て、金の工面が附かなけや始めの約束通りにするのが當前だ、何も取つて喰はうたア云やアしない。

年老つた女。だつてこの娘がイヤといふのをさう無體な事も出來ないぢやアありませんか？

老爺。いかにとぼけた事を云つちやダメだよ、契約をくひ詰めて流れ散つて

來た仕立屋風情に、無抵當で三百圓つて大金を融通してやつたんぢやアないか？ 借りる時には口先で足の裏まで嘗めるやうなうまい事を云つておいて、いざとなりや頭を蹴飛ばしにかゝるなんて、田舍老爺だつて、さう馬鹿にされてばかりはゐませんぜ。

年老つた女。さう取つて下すつちや困ります。この娘にもいろ〳〵云つて聞かせたのですが、それぢやいつそ他所へ身賣りでもして、その金でかたを附けてくれつて云ひ出しますので、可哀さうでもあるし、私も迷つて了ひまして……。

娘。私の我儘から、母にも心配かけてすみませんし、お借りしたものは返さねばなりませんから、こちらへ來て、口入所をさがし歩いてたのでございます。

老爺。(調子を和らげ)、口入所なんぞへ行つたら何んな惡者の手にかゝるか知れやアしないんだ、何、氣を附けて私の面倒を見てくれさへすりやア借金は借金として、少々の支度金位は出してやる、平氣で約束を違へるやうな人間は、一生うだつが上らないよ。

年老つた女。約束と申しましても、云はゞ貴方の方で勝手に定めてかかつたやうなもんですし、それに私共も、このまゝぢや居られません、行末何か口過の出來る見込のある商賣にでも取ッ付きたいので少々の資本も欲しいし……。

老爺。(威高い調子)蟲のいゝ事を云ひなさんな、さういふ了見だから、親子ぐるになつて大金をかたり取るやうな圖々しい事を平氣でやるんだ。

年老つた女。(激した調子)こつちに弱味があるからて、あんまりな云分です、大金大金つて云つたところが、手數料とか何んとかサツ引かれて、私の手には半分も入つてないんです。

老爺。こつちは商賣にやつてるんだ、道樂に金借はやらん、返金が出來なけや抵當は取つて行つても文句はあるまい……(娘の肩を摑んで)さア、これから一しよに田舍へ行くからさう思へッ。

娘。お金の工面をしてる處ですから何卒待つて下さい。

老爺。イヤなら、二人とも、出る處へ出ろ。

年老つた女。(棄鉢な調子)ヱ、ヱ、ヱ、何も後暗いところはないんだから、斯うなりや何處へでも行きますよ。

娘。(はら〳〵して)お母さん、やけを起しちやいけませんわ、私仕方がないから、一しよに田舍へ行きますわ(泣じやくる)

年老つた女。親一人、子一人ぢやアないか？ 私に義理を立てんでも好い……いつそ二人で死んぢまはふよ。

娘。ヱ、、生きて、恥な思をするより、死んだがましだわ(泣入る)

老爺。ヘン、そんな脅かしに乘るもんか、たつて死たけりや、己が[illegible]

分にした上で、勝手に死なせてやらア。

太郎。(隣室に聞耳を立てゝゐたが、堪らぬやうに、前廊下から入つて來る)……何んだ？　見りや老年の癖に、僅かの金を餌で、若い娘を釣上げやうなんて、酷い奴だ、己が相手になつてやるッ。

老爺。(驚いた表情)…汝何んだ？　斷りなしに他人の室へ入りやがつて……一たい何處の國の人間だ？

太郎。己ら、鬼ヶ島から來た男子だ、……内地の奴は、大きな顏して弱い女いぢめて、善いのか知らんが、己のとこの鬼ヶ島ぢや、女は皆大切にする、絹は織つてくれるだし、畑ア打つてくれるだし、子供は産んでくれるだし、こんな寶物はねえだ、金で買へるもんぢやないぞ。

六郎。(傍から)さうぢやとも、さうぢやとも、生乾の蛸見たいな皺ッ面アしやがつて、この若い、きれいな娘ッ子を弄さみ物にせうなんて、太い老爺だ、恥を知れやいッ。

老爺。何んだ？　何處かの見世物小屋からぬけ出して來た印度人かと思やア、日本人らしい口を利いてゐるから不思議だ、汝等の知つた事ぢやない、スッ込んでゐなさいッ。

太郎。この二人の女を欺してやるまではスッ込みなんかするもんか？　汝のやうな强慾な老爺は、己らの島ぢや皆で寄つて、集つて實際にして海ン底へ投げ込んで了ふんだ。

六郎。そこらの泥溝ン中へ打込んでやるべあ？

老爺。亂暴な眞似をすると承知せんぞ……コリヤキ印かな…。

年老つた女。誰方か存じませんが有難うございます、僅かの金を借りて、とんだ災難にかゝつたのでございます。お恥かしい事で…。

老爺。金を返しや何も文句を云やアしないんだ。

太郎。よし、おやアその金は己れが返してやる……二百や三百なら今、直ぐにでも、出してやるが、汝は高利貸つていふんだろう、利子が欲しいけりや十日待て、十倍にして返してやる。

六郎、ウム、十日もすりや、金が地の底から湧いて出らア。

老爺。(恐怖の表情)……コリヤ、頭のゼンマイが狂うてるらしい……怖かないぞ……(ベルを鳴らす)

(年老つた女も、娘もモヂ〳〵尻込する)

宿の主人。イヤ。これは何うなさつたので？

老爺。部屋をかへてくれいッ……汝さんたちもこゝにゐらやどんな目に逢ふかも知れんぞ恐ろしい惡巧をやる手合だろう……、さア、とにかくあちらへ行つて、ゆつくり話をしやう。

六郎。また女をいぢめるなら、己らの鰹節見せてやるべあ。

太郎。(女に向ひ)汝さんたち、こゝにゐなさるが善い、己らが保護し

に上げる。

(女等も恐怖の表情で、室を出かける、主人は老爺を案内して行く)

六郎。己らたちが助けてやらうていふのに、あの女等は何うして、又、あの強慾老爺について行つたんだらう？

太郎。こつちは隣で聞いてゐて、堪らないから助けに飛び込んだのだ、内地の者は疑り深いんだらう、己れ等のやうに眞正直でないんだ。

主人。(歸つて來て)イヤ、何うも御手數をかけまして……あちらの室では、至極、穩かにお話をなさつてるやうでございます。

太郎。さうか……でもあの老爺に娘を連れて行かせるのは可哀さうだ、何處までも助けてやりたい。

主人。イヤこちらでは、見ず知らずの者が、あまり差し出て親切に仕向けると、恐がられますから損でございますよ……番頭から旦那方のお話を聞きましたが、あれは本氣でございますか？

太郎。ア、……金を掘出すつて事か？　本氣も何もない、書類か見附かつたから、ワザ／＼やつて來たんだ、萬事よろしく頼みますよ。

主人。ヘエ……おやア眞面目なお話ですな？

太郎。内地の人はやつぱり疑り深いな。

六郎。何うも根性が曲つてるな。

(主人、唖然として二人の顔を見くらべてゐる)　暗轉

第二場

場所　道路の一角

人物　椿太郎
　　　元村六郎
　　　附添　小山
　　　請負師
　　　袴をはいた女
　　　世話人
　　　長髪の男
　　　醉つた男
　　　乞食等
　　　巡査、刑事
　　　通行人大勢

上手には丹塗の小い門、修繕した土塀の一角が立つてゐる、それに隣して、假圍ひの板塀が下手までつゞき、そこに出入口が開

けてある、前の道路には、土や砂が處々に積み上げられ、サイド・ウォーク丈が、綺麗に片附いてゐる、プラタナス青々とした葉をひろげかけてゐる。ラオ屋が小釜の汽笛を鳴らして通る。

( )

請負師らしい洋服着の五十男と、椿太郎と、宿から附添の小山といふ小才子風の背廣服の男と、三人連れが松林の出入口をくゞつて出て來る。

太郎。おや何分よろしく賴みましたぜ、この邊は、昔は海の底だつたろふから、土が柔かだ、五日か、一週間も掘りつゞけたら、キッとぶッかるに違ひない、御禮はいくらでもしますよ、百年餘りも、黑い土の下に埋まつてゐたんぢやア、金銀も石瓦と同じ事だ、日の目が拜まれて、人間の手で使つてもらやア、生のないものでも嬉しいに違ひないんだでな。

請負師。御請負したからには、確かに埋めてあるものならキッと掘當てゝ見せますよ……何しろ年代がチと古過ぎるから、そこが懸念で、何んとも云へませんが……。

小山。(氣輕な調子で)イヤ、大丈夫でせう、あゝした立派な古證文も出てゐますし、昔の人間は當世の人間よりはズッと正直で、律義でしたろうからマサカいゝ加減に、土や石をかついで、地の下で笑つてやろうなんて惡ふざけた了見は微塵も持合せてゐなかつた筈です、キッと穴に土の下の大甕から、慶長小判か何かゞ沸き上つて、こぼれ出して來るに違ひありませんよ。

太郎。(頷いて)そりやさうだ、己らの先祖が、嘘の書附を殘すやうな人間だつたら、島流しになりつこはないよ。

請負師。何にしろ、一たんお請負ひしたからには、掘れる丈は掘つて見ます、地主さんへのかけ合ひはあれで善いとして、人夫の手間賃丈は、いくらか先渡しして戴かなけや仕事にかゝれませんから、それは御承知願ひます。

太郎。手附五百圓つていふんだつたね、今こゝで渡しませうか？

請負師。イヤ、契約書と引かへに、明日でも結構でございます。

小山。これが今、道路になつてるとか、公園だとか、建物の下に當る土地だつたら、手續も面倒だし、急に手も附きかねたんだが、震災後、そのまゝ空地になつてたのは何より好都合ですよ。

請負師。全くだ。

(鈴が鳴る。丹塗の門に、參詣人の出入が頻繁になる)

太郎。これも先祖のお助けだらう……えらう賑かだが、何かあるのかね？

請負師。こゝの不動の縁日で、明るい中からお參りがあるんで

すよ。
太郎。はア、島のお祭禮、人が出る……さう云やア迷ひ子にでもなつたのぢやないかな、つひそこの横町で、洋服の古着屋を見附けたから、チョッと行つて見るつて、一人で駈け出しやがつたが……。
小山。やつぱり、あちらと違つて、東京では、猫も杓子も洋服でなけや幅が利きませんでな。
太郎。(自身を顧みて)何うも島の素人、職人に仕立させたんで、ズボンがぶく／＼して、大船が濱をうろついてるやうな恰好だらうと思ふが、可笑しくはないかな？
請負師。(ニヤ／＼笑つて)イヤ、近頃は、洋服にもいろんなスタイルがあるやうです、斷髮のお孃さん方は短い裾からソーセージの招牌のやうな兩足をつき出して、牝豚が餌箱を嗅ぐやうな恰好で、銀座を跳ね歩くのが流行ですし、姿、形になんか構ふもんですか？…
……。
小山。(向を指さし)ア……あの方ぢやありませんか？
六郎。(色の褪せに古洋服を着、ハンチングを冠つて、手に布呂敷包を抱へて、歩いて來る)ヤ、……何うも手間が取れましたよ……恰好の善いのが見附からんもんでな。
太郎。ひやアー……これは善いスタイルだ。
小山。(笑を噛しめて)スッカリ紳士ですな……だが、ネクタイがなけやいけませんな。
六郎。ア、ネクタイ……手拭でも善かべあ。
請負師。そこらのデパートへ行つたら、賣つてゐますよ。
太郎。イヤ、近頃はいろんな恰好のがあるさうだから、それでも善かべあ。
小山。親方もお忙しからうから、これで失禮しませう。
太郎。何うもいろ／＼御世話をかけました、何卒よろしく……。
請負師。ハイ、やれる、丈やつて見ます……ぢやアこれで御免蒙ります(板圍の中へ入る)
六郎。何時頃までに金を掘出すつて、請負ふたかな？
太郎。ウム、まあ五日か、一週間つていふんだ。
六郎。ぢやそれまではあちら、こちら遊べるんだな。
太郎。折々、こゝへ來て、見ねえといけまい。
小山。イヤ、あの人に任せて置いたら大丈夫です、あなた方は、その間に方々御見物なすつてりや善いんですよ。
六郎。そこのお寺さんが賑かだ、行つて見べあ。
太郎。何處へ行つても人間がウヨ／＼してる、……まるで鯰の子が泳いでるやうだなア。

六郎。違ひねえ……己らア、人間に食たいしさうだ……

○

門の中から、世話人らしい男が口を尖らして罵りながら、黑の筒袖に紫の袴をはいて、赤い細帶に白く文字を浮出させたのを斜にかけ、肩先にバッグを下げ銀ぶち眼鏡の若い女を力づくで追出して來る、彌次馬がワイ／＼云つて、取卷く。

袴をはいた女。(興奮した調子)手荒な眞似をしなくつても、口で云やア分る……境内で宣傳するのが邪魔なら、門の外でやります、……國家の爲めです、社會の爲めです、人類の爲めです、このまゝでは、今に日本も食糧問題で行詰るのは分り切つてゐます、皆が共倒れになるんです……餓死するんです。……

世話人。氣狂ひ女め、人間に子供を産むなつて云聞かせるより、水に流れるな、火に燃ゆるなつて、教へる方がよつ程氣が利いてらア、こゝは子育地藏樣だぞ、馬鹿な口説は他所へ行つてやれッ。

袴をはいた女。こゝは門外です、汝さんたちに彼此云ふ權利はない。

世話人。(憎惡の表情)今に警官に引ツくゝられるぞ、氣狂ひ女めッ(罵つて入る)

袴をはいた女。(群集に向ひ)皆さん、私は協會本部から派遣されまして、産兒制限の極めて必要であつて、又急迫せる問題である事を社會に宣傳する爲めに、態々街頭に立つたのでございます、……昔は東洋でも西洋でも、人間が地上に生れるといふ事はこの上もない目出度い、喜ばしい事として、皆これを祝福しないものはありませんでした、…しかし今や時勢は變りました、第十九世紀の後半になつて、人智の開發、教育の普及の結果、これまで限り無く廣いと思ふて安心してゐた世界が、…地球が俄かに狹く感ぜられて來ました上に、蒸汽船や汽車や、電車や、自動車、更に飛行機などの發明に依つて、交通機關が一足飛びに大發達を遂げましてから、萬國は皆隣合せ同樣になつて了ひました、これまでは暗黑大陸として、打ちやられゐた所謂野蠻國までも、探檢せられ盡し、占領せられ盡し、又分割せられ盡しまして、最早地球上には開拓すべき寸尺の土地もない有樣であります……然るに一方を顧みれば何れの國に於きましても國内の人口は、今までに見ない程急激に増加しつゝあります、ところが、それを養ふべき食糧の増加は、遲々たるものでありまして、人口増加率が幾何級數で進んで行つてゐるのに、かんじんの食糧の増加率は算術級數でしか行つてゐません、……地球上の面積には限りがあるのに、人口の増加には限りがないといふ、この極めて單純な事實は、我々の眼で太陽を仰ぎ見るやうに明々白々でありますから、食糧問題がいつか一度は行詰まつて、世界の人類が、そ

の食物の缺乏の爲めに、苦み悶く日の近づいてゐる事は隱蔽しても間違ひはありません…。

（群衆に交つてゐた山伏姿の男が、女の耳元近く、急に法螺貝を吹立てる）

袴をはいた女。（ヒステリカルな調子で）何んです？ 人の演説を妨害するんですか？

長髪の男。（太い聲で）非國民……サンガーの弟子、止せツ〳〵。

醉つた男。（子供を産むなつていふのはけしからんぞ、……大和民族を根絶しにする氣か？ 相手の見附からん老嬢だらう。

太郎。（女の傍に立つて）、大の男子が束になつて、この一人の女をいぢめるていふ法があるか？ 己らの島でも、元は僅か十五六人づゝ子供を持つてたもんだがこの頃は人間の頭數許り殖やしても、食糧が足らんから、子供を減らす算段をしてる、この女のいふ事はほんとうだ。

六郎。さうぢや〳〵。この東京だつて人間はかりウヨ〳〵してるでねえか？ あんこ、先をやるべあ。

太郎。姉さん先をやつた、邪魔する奴は己らが張り飛ばしてくれる

（腕め捲す）

醉つた男。何んだ？ へんな用心棒が附いてやがるんだな。

長髪の男。君等は産兒制限が、自然の意志に背いてゐる事を知らないのか？ 蟲でも獣でも、みな自分の子を生んで繁殖させる爲めにあらゆる努力をしてるぢやアないか？ 自分の生命さへ捨てゝ悔ゐないんだ、それ丈の覺悟があれば我々人類が食糧問題なんか解決出來んで堪るもんか、フランスを見ろ、産兒制限は亡國だぞ。

太郎。（耳を傾けて）ウム、己らだつて、島中で子供を、、いたり、、したりするのが善いと思つちやゐない、生める丈、生ませるに越した事はない、

六郎。それはさうぢやとも……。

醉つた男。おやア、この女のおしやべりは止めさせろ

長髪の男。しかし、意見を闘はせるのは悪い事ではない、まだ言分があるのか？

袴をはいた女。ありますとも……言論は自由です。男子の服制なんかに服從なんかしますもんか？

太郎。さうだ、男子の服制はいけない……やり給へ〳〵……皆默つて聞けツ。

袴をはいた女。……つきましては、産兒制限、――子供を産む事にも、或る制限を附けなければならない時代になつて來てゐるんです、勿論、劣等な子供、優れた素質の子供を産む事は奬勵せなけ

ればなりませんが、白痴、低能、不具な子供は絶對に作らないやうに、又種族淘汰は嚴にこれを謹む事を努めるのが人類の義務責任であります、又教育を授ける資力のないものが、産み放題に子供を産みッ放しにして、それ等の憐れな子供は無教育のまゝ、所謂、貧金奴隷に賣られねばならぬといふやうな事はこの社會を……この人類をいよ〳〵悲劇のドン底に陷れるものであります。

(山伏の姿の男、又立現れて法螺貝を吹立てる)

太郎。この野郎ッ(飛びかゝる、一方は周章てゝ逃げ出す)

(彌次馬がワイ〳〵騒立て、袴をはいた女は取倒されかゝる、長髪の男が助けに行くと六郎は格鬪を始める)

巡査(驅け附け、群集を制し)許可も受けないで、大道演説をやつてはいけない……一寸來いッ……。

袴をはいた女。(モヂ〳〵して)境内でやつて居ましたが、追ッ立てられましたので……。

巡査。一寸とお出でなさいッ。

太郎。この姉さんの云ふ事は理窟が通つてゐます、産兒制限は、私賛成ではありませんが、島では、害しまぎれに、それをぼつ〳〵行つてゐます、日本は廣いやうでも、やはり一つの島ですから今から何んとか考へなけやいけますまい。

巡査。(微笑)この女はヘンな藥を賣り附ける香具師の廻し者だよ、何處か姿をかくしたあの長髪の男は情夫關係らしい、ぐるなんだ……さア行けッ(と引立てる)

小山。宣傳演説をすませたら、後で貴方方も高い藥を買はされたんですよ、油斷はなりませんハヽヽ。

太郎。(後を見送つて)でもたか〳〵度胸の善い女だ……演説の調子が氣に入つた。

小山。さア、まア、ちよいと、この地獄寮の境内へ入つて見ませう。

(乞食の群、そこらに列んでねだつてゐる)

女乞食。旦那さん、亭主の土方が、普請場の高い足場からおッ落ちて、死んぢまひまして、たつた一人殘された憐れな孕み女でございます、何卒恵んでやつて下さい、助かります。

男乞食の一。工場で働いてる中に、器械に兩手をもぎ取られた、不仕合せな勞働者上りでございます、何卒お情をかけてやつて下さい。

男乞食の二。トラックに轢かれまして、兩膝から下を切り取られた不運な不具者に恵んでやつて下さい、功德になります。

太郎。(財布から銀貨を取出して、それ〴〵投げ與へる)……ヤ、氣の毒だ、内地にも、落ぶれた人が多いのだなア。

六郎。やつぱり人間が多過ぎるだべあ。

太郎。自分が惡りて乞食になるのおやアない、世間が惡いんだよ、己らの島內にや乞食なんか一人もゐない。

小山。……さう聞けば、さうですた。

六郎。島ちや食物がありや皆で分けて食ふだ、內地ちや惡狡い奴が樂をして、バカ正直がこんな目に逢ふだべあ。

小山。(苦笑)、それもさうですた。

(三人は境內へ入る、電燈が點る、參詣の人や通行人が往來する、乞食の群はしきりに哀願の聲をくり返す)

(そこへ巡査や、脊廣服の刑事がゾロゾロと現れる)

巡査。又集つて來やがつた。性懲りもない奴等だ。

刑事の一。あちらから追つ拂ふとこちらへたかつて來る、まるで蠅見たいだ。

刑事の二。一應、署へ引ッ張つて行つて、油を取つて置かうよ。

(つかつかと進み寄る、乞食等は狼狽する)

巡査。又しても孕み女になつたり、不具者になつたり不埒な奴等だ。

女乞食。ハイ、もうこんな眞似はいたしませんから、何卒御許し下さいませ。

男乞食等。何卒、お情けを……。

刑事の一。幾度云つて聞かせても、その場限りの空耳だ、怪しからん奴等だ、人を欺して金を貰ふのはかたりだぞ、こん度こそ署へ引張つて行く。

巡査、刑事等。さあさあ立て、立てッ。

(男女の乞食を引立てる。泣いたり、喚いたりする)

太郎。(門の內から出て來て、傍へ寄つて行く)はア、ちよつと申上ます、この憐れた乞食等を引立てるつて、あんまり嚴しい御沙汰ではありますまいか?

六郎。可わいさうな不具者や孕み女で、自分の力で喰へねえから、人樣の袖にすがるだべあ、內地のお役人衆は、人情が無さ過ぎらア。

太郎。貴方方も正義は御存じでせうが?……人道つてものは鬼ケ島でも、內地でも一つ事ちやございませんかな、弱い者をいぢめんで、何卒許してやつて下さい、お願申ます。

巡査。(微笑)ア、貴樣等か? 何處の奧山から出て來た仙人か知らんが、何うもよつ程、お人善しらしいな、この乞食は皆かたりだよ、働けるくせに、怠けやがつて、乞食を職業にしてる仲間だ。

太郎。乞食を職業にするつて、そんな物好きの人間もありますまい。

六郎。誰がすき好んで、乞食をしますべあ。

次郎。人間、仕合が惡けりや、誰でも首くゝつて、オッ死んだら善いていふわけにも行きませんでな。乞食になつてども生きてゐたい

仲間もありませう、生きてりや又運が向いて來るんとも限りません。何卒見のがしてやつて下さい。

刑事の二。ハヽヽヽなかなか同情家が飛び出したもんだね、ぢやア俺等に、この孕み女や不具者の正體を見せて上げやう。

巡査。ウム、それが善からう、本職等もすき好んで、こんなイヤ事をやるんぢやアない、まア見給へ。

(一人の男乞食の、汚れくさつたもじり外套を引剝めくる、その懐から二本の滿足な手が現れる、今一人の乞食の切られた膝は義足で、後の襤褸切れの中に包んだ兩脚が引出される、孕み女は、腹をむき出しにされる。彌次馬はドッと笑ふ)

小山。イヤ、ハヤ、これはとんだ孕み女や不具者だ、欺まされる方が盲目にされてたんだハヽヽヽ。

(乞食等は引立てられて行く)

六郎。(ボンヤリ後を眺め)内地ぢや乞食までかたりだ、コリヤ油斷がならねえ、東京つて恐ろしいところだ。

小山。活き馬の目を抜くつて奴でさアね。

太郎。はア、こりや驚いた、こつちの方が不具者だつたな……だが、誰も好き好んで、あんなかたりまでやつて乞食する者もなからう、やつぱり世間が悪いんだ。

小山。世間も悪いが、あいつ等も悪いんです

六郎。ウム、乞食根性に産み附けられたのかも知れねえ。

太郎。でも己ら、何んだか、あいつ等が憎めないなア。

六郎。今に、金を掘出したら、皆くれてやるか?

小山。それも善いですなハヽヽヽ。

(暗轉)

第三場

場所　カフエー

人物　椿太郎
元村六郎
附添　小山
學生、中年の男等大勢
女給等

カフエーの内部、左右兩側に黒く塗られたボックス、中央に同じ塗色の衝立が立つてゐる、植栽の植木、棒、櫻の造花、合奏管絃樂のバンド、装飾電燈、花やかな蒸すやうな氣流が目まぐるしく渦巻いてゐる　左右のボックスには中年男の背廣、モーニング

が學生服の中に混つて、ゴタ〳〵と込み合つてゐる、華美な服裝に、白エプロン姿の女給等がその間を彩つて縫ひ歩く、一方でW．大學の校歌を謳ひ出せば、それに張合ふやうに、他の一方ではK大學の應援歌を合唱して、互に對應してゐる酒氣を吐く息に空氣が醉ひ、募り行く喧騒が、それを燃やし立てる。

脊廣服の中年男、（一方のボックスからつと起上つて、ひよろひよろと前へ出て、相手方のボックスの方を睨み、肩肱張つて、醉いどれ口調で）まア明日の試合を見て見ろ、空威張や空元氣ぢや、何んにもならんぞへ、、、、だ……。

學生服の青年男（相手のボックスからよろけ出て）去年の秋の試合を忘れたか？ どつちが空威張だい？ へ、、、、だ。

脊廣服の中年男。怪我に勝つたんだから乞食が白銅でも拾つたやうに宇宙天になりやがるんだ、見つともないぞ止せ、俺が附いてる、明日まで待つて見ろッ。

學生服の青年。負惜みを云ふのこそ見つともないぞ、止せ、明日になつて泣面かくなよ（「生意氣云ふか」「どつちが生意氣だ」摑み合ひにが始まろうとする、兩方のボックスがざわめき立つ）（椿太郎と六郎とが、小山に案内されてひよろ〳〵と入つて來る、そして衝立の前に立つ、美しい女給人がやつて來る、喧嘩はこの奇なる闖入者のためには物別れとなる、校歌の對抗戰が始まる。

太郎。（キョト〳〵して）……御盛んな事つたな。

六郎。島の大漁祝ひよりや賑かだべあ、のぼせ上らア……。

小山。まアおかけなさい……これが當世流行のカフエーです……。

太郎。（そこの卓の前に腰をかけて）東京にや閑な人がなか〳〵多いと見えるな。

六郎。遊ぶのが商賣だべあ。

小山。（辯解的に）イヤ、これで晝間は皆忙しく働いたり、勉強したりして頭や體をこき使つてるので、夜はこんな處が繁昌するんです、まア都會地獄の息抜かしとでもいふところですな……何を飲みますか？ 燒酎はありませんから、おやあウヰスキーにしませう。

六郎。（キョト〳〵見廻はして）息抜かしだと云ふても、何んだか己らには息が詰まる處だべあ……なア、汝、島ぢや丘へ上つて、芝草の上へごろッと寢轉ぶだど、清々としたオッ開いた海も、透き通つた空も一時に見えて、ほんとうに腹の底に溜まつたガスがスーと拔けて、極樂往生した氣持になるだが、東京の人間にはあんな眞似が出來ねえんだべあ。

太郎。だが見ろ、美しいあんこがたんとゐるぜ、磯端の藻の中を潛るや鮑鯱が、鰭を返して泳ぎ廻つてゐるやうでねえか？

六郎。ウム、それで大勢か、魚釣るやうに寄つて來るだべあ。

小山。ハヽヽヽ、鈎餌ですかな？　まアそんなもんでせう、ものいふ金魚を釣りに來るんですね、(女給Aウヰスキーを運ぶ)忙しさうだね？

女給A。はい、今夜は大騷ぎですわ、明日のスポーツの應援つていふので、あゝしてこゝへ繰り込んで、皆さん、まるで火のやうになつてらつしやるんです。

太郎。はア、野球かな？　己らも久しく見んが、あれも面白い遊びだな……姉さんまア、こゝへかけたら何うだ？

女給A。ハイ……イ、エ……まだあちらにも、受持があるんですから……。

六郎。いいや、やきゆうて……ア、やつぱりあの牛を鬪はせるんか？

太郎。球の投げ合ひだよ……だが島で野牛を鬪はせるのと、大した違ひはないんだ。

六郎。球の投げ合ひなんかと、野牛を鬪はせるのが一つ口に云へるもんだか？　獸が血みどろになつて、何方か一方斃れるまで突いて突いて、突きまくらせるんだ。あんな男子らしい、威勢のいゝものは内地ぢや見られめへが……。

女給A。旦那方は島から入らしつたのですか？

六郎。ウム、鬼ヶ島から來た男だ

女給A。御じよう談を？

太郎。ほんとうだよ、昔の女護ヶ島、今の八丈島の近所からのお上りさんだ。

モーニングの中年男(近づいて)おぎん何しよる？　早く來ないか？
(女給Aの手を引張る)

女給A。まア待つてゝうだい、こちらは今、入らしつたばかりですもの。

太郎。(睨んで)こちらの女を横取りするつて法があるか？

モーニングの中年男。横取りだつて？　ヘーンだ(向ふへ行く)

小山。大分酩酊つてやがるな……人の席へまで女を釣りに來るなんて亂暴だ。

女給A。醉つたふりして、づうづうしい眞似をするお客さんがあるから困るわ。

太郎。(大分醉つて來た調子)フーム、そいつは怪しからん……一たい汝はいくらで、こゝへ買はれて來たんだ？

女給A。身を賣つたのぢやないわ。

小山。(ニヤニヤ笑つて)だつてお客次第ぢや無理にでも賣らされる事があるんだらう？

女給A（つんとして）知らないわよ。

太郎（熱心に）イヤ、己らが今に、東京の眞ン中から莫大な金を掘出すから、汝や、汝たちの仲間の者を皆助けてやるぞ……つまり救うてやるんだ、他人に自由にされたり、忌な、氣に向かん事をさせられたりするのも、畢竟、金ゆへだらう、金がないから高利貸の老爺の妾にされる、金がないから、かたりの乞食にもなる、金がないからカフエーで男子に釣られる、己らが今、みんなに要る丈の金を分けてやる、キッと分けてやるぞ。

女給A（鼻で笑つて）當にして待つてますわ。

六郎（醉つた口調）この人は、己らが島の學者様だよ……正義人道の先生様だよ……嘘は云はねへ……今、金を掘つてるだから、キッと皆に分けてくれる……嘘は云はねへ。分けてくれる。

女給A。オヤ然うですか？……ぢやア私もその女護ヶ島へ連れて行つてもらひませうか？

太郎（手を握りしめて）連れて行つてやる……己らのかみさんにしてやる、こんな美しい、漆のやうな眼をした、かわいい女は、島のあんこの中には居らんぞ。

六郎。己らも一人、相手にしてつれて歸りたへあ。

小山（苦笑）貴方方も、とう／＼釣りての仲間に引ずり込まれましたなハヽヽヽオイ、カクテールでも持つて來てくれ。

モーニングの中年男（近づいて）おぎん、何うしたんだ？ 何うして來ないんだッ……用があるんだ……。

女給A。分つてますわ。

モーニングの中年男（酒臭い息を吹いて）冷淡な奴だなア……汝は私の胸が分らないんか？……私の胸に燃えてるものが……燃えてる心臓に觸つて見ろ（女の手を取らうとすると、相手は引込める）

女給A（チラと眼を光らせて）貴方の胸つて、火の氣のない、眞黒な石炭の塊りよ、……イヤ、燃え滓だわ……コークス殼だわホヽヽ」

モーニングの中年男（よろけながら）何を云つてるんだ？ 貴様は誤解してる、誤解してる……貴様は己れをそんなドン・フアンだと思つてやがるのか？ 見損ふなッ。

（再び合唱が競ひ起る、あちらでも、こちらでも、醉つたまぎれに女給等の手を引つ張つて、ワルツ、フオックストロット、だらしない亂舞が始まる、男女の狂ほしい笑聲、椅子が倒れる、グラスが砕ける音

モーニングの中年男は、この瞬時に女給Aの手を無理やりにつかんで、ダンスに紛らせながら向ふの方へ連れて行く。）

太郎（その方をヂッと見すえて）女を引つ張つて行きやがつた。……

踊いた野郎だ。

六郎（男女の亂舞を尻目にかけ）ありや何の眞似だべあ？

小山。ダンスです…毛唐の踊りの眞似ですよ、

六郎。ヘン、あれが踊かい？　己らの島ぢや、もつとうまい踊があらア…もつとうまい踊があらア。

太郎。ウム、イヤに香水臭いんぢやアない、ヘンなバタ臭ひんぢやアない、土臭い踊だ、潮臭い踊だ。

○

沖で見た時ア鬼島と見たが、寄されて來て見りやなさけ島。
八丈名物御存じないか、椿の實油に八丈縞。
添へばわが夫、はなれりや他人、深い思はせぬがよい。
わしとお前は砂糖の黍の芽、すゑぢや二人でしめたもの。

（鬼の子を紐でつるしたやうな恰好の手ぶり足取りで、原始的な島踊が始まる）

（ダンスは止んで、、中年男も、學生服も、女給も顔をならべて見入る。　醉つたのは、つり込まれて、後について眞似て踊る、喝采が起る）

太郎（椅子に戻り）つかれた、姐さん、ビールを！。

六郎。己らも一汗かいた……島へ歸つたやうな氣がしたど。

小山。イヤ、なかく結構ですな……我々の先祖の踊りですね……。

脊廣服の中年男。僕は選手上りです、……イヤ、面白く拝見しました、……ホンモノの鬼の子が踊つてるやうでした……さア、獻杯、

（學生等、大勢。獻杯……獻杯。と、グラスをさしつける）

太郎。鬼の子が島の人間に教へてくれたんだらうな、……夫婦の道もセキレイつて鳥が教へてくれたつて話だハ、、、、

（女給たち寄つて集つて。さアお酌しませう……よかつたわ……。面白かつたわ。……と喝采する）

脊廣服の中年男。さア、あちらへ行かうく（力づくで女給等の手を引張る）

太郎（引張り戻し）何んだ？　女たちを店の品物扱ひにするか。奴隷扱ひにするか、無法者！（一撃を加へる）

脊廣服の中年男。打つたな、己は撰手で鳴らした男子だぞ、この野蠻人めッ、（格闘が始まる）

六郎。島の人間、他人の女を眼前でさらへて行きやしねへぞ（女給等を連れ行かうとする學生たちを毆打る

激しい亂鬪が渦卷き起る、女給等の叫ぶ聲、椅子、卓は飛び、グラスは碎け散り、衝立はひつくり返る、太郎と六郎は怒れる野牛

の如く突き廻り、あばれ廻る、大喧躁の中に――（暗轉）

第四場

場所　或る夜の巷、

人物　椿太郎
元村六郎
附添　小山
女　大勢
勞働者、學生、老人その他通行人等

兩側は透視畫的に、新らしい造りの二階屋が立並ぶ、電柱が一本立つてゐる、軒別に、外はガラス戸が嵌まり、中にはスリ硝子に、切穴のやうなのぞき口がついてゐる、軒別に、スリ硝子の玉ごやの電燈、紅、紫に色づけられたのも交る、まだ宵の口、無遠慮な勞働服の男の群れに交つて、中折や學生帽が、息をひそめたり、喘ませたり、のそ〳〵と歩き廻る、兩側ののぞき口からは媚めかしい女の聲がしきりに呼びかける、素見にのぞく客もある。

女の一。ちよいと〳〵、青服の威勢の善い人、まアお寄んなさいよ、私、昨夜、汝さんの夢を見たわ。ほんとうよボキラーが破裂して、ふき上る猛烈な蒸氣力に押上げられちやつてよ。二人が手を取つたまゝ火星の世界へ飛んで行つたつて夢よ、すばらしいでせう、話して上げるわ、お寄んなさいよ……お寄りつてば……。

女の二。ちよいと〳〵學生さん、寄つておいでなさいよ、青春は夢よ、今の中に歡樂の杯を乾さなけりや後悔するわ、お寄んなさい……お寄んなさいよ。

女の三。ちよいと〳〵中折帽のロイド眼鏡のお方、お寄んなさいよ、私、あなた知つてるわよ……すまして素通りなんか厭だわよ……お寄んなさいよ。

女の四。ちよいと〳〵、年の老つた、寂びしさうなお方、お寄んなさいよ、十年ぐらゐ若返らせて上げるわ、お寄んなさいよ。

女の五。ちよいと〳〵、樣子の善いお方、……好男子、氣取らないでお寄んなさいよ、素見は厭ですわ、お寄んなさいよ。

（兩側からの媚めかしい女の聲の交響樂は高まり、低まり目に見えぬ糸を織り出す梭のやうに投げ交はされる、ギリシヤの昔譚の巖頭から誘惑の歌を歌ふニンブの聲に心を蕩かされながら舟人の櫓の手がたるんで行くやうに、通行の男の群の足取りは、立留まつたり、よろめいたり、亂調子になる。）

太郎。(小山に案内されて、巷の一角に現れる)フム……成る程、これは昨夜のカフェーとは又ちがつてるな。居ざらしだ。
六郎。はア…道の兩側から、女の眼玉だけが光つてるだなア……魔ものゝ世界だべア……。
小山。これが例の、闇に咲く花つていふ奴ですよ。
太郎。フーム……いづれ景氣を吹いてるんだろうな……自分で好き好んでこんな商賣をやつてるんでもあるまい…やつぱり金だ…ありや客を呼んでるんぢやアない、金を呼んでる聲だ。
六郎。島にやこんなとこはねえだ、やつぱり人間がウヨ〳〵し過ぎるだ、女がありあまるからだべあ。
小山。結局は、生活難でこんなドン底に落ち込むのですが、一たん落ち込んだら容易に浮ばれません。
太郎。(ため息を吐いて)…皆一つ先祖から出て來たんだから、見ず知らずの兄妹同志だ、それを店へならべて品物扱ひにする、奴隷扱ひにするのは正義でない、人道でない……このまゝぢや己ら堪まらないんだ、あの女どもの聲は、己らに助けてくれ、救うてくれと、呼んでるやうに聞える、金を掘出したら早速助けてやりたい、救うてやりたい、こんなイヤな處はこの大地の上から消して了ひたいな。
六郎。ありやあつて濟む、なけやならうて濟む、男性つてものゝ質が惡く出來てるんだべあ、……まア何んでも實地を善く見れえと話にならん……(素見して)きれいなあんこがゐるぞ……。
女の一。ちよいと〳〵、だんぶくろのやうな洋服を着た、ハワイ歸りの鐘鬼さんのやうな旦那、お寄んなさいよ、日本の料理もたまに食べて御覧なさい、お寄んなさいよ。
女の二。ちよいと、龜の子を毛布にくるんだやうな、愛嬌のある旦那、まアお上んなさいよ。
女の三。ちよいと、洋服の着こなしのうまい、才子らしい眼鏡の旦那、お寄んなさいよ。
(一しきり呼び聲を競ふ)
(太郎もつり込まれて素見しに寄る)
小山。何うですか?いゝせり市でお氣に入つた代物は見つかりませんか?
六郎。玄關だけぢや分らねえだ、座敷も見んぢや、島へ歸つて土產話にもなるめえが……寄ろか?
太郎。己ら、何んだか、牝豚ア檻へ入れて、競り賣りしてるやうで、かわいさうでもありや、みじめにも思ふよ、島の他屋の女たア違はア。
小山。何うします……いゝ加減にして切り上げますか?

太郎。イヤ、このまゝ歸るのも氣がすまん……何處かへあのかわいさうな女たちを集めて見たい……そしてそれ〴〵身上話でも聞いてから、助けてやりたいんだ、救うてやりたいんだ。

小山。(頷いて)さうですか？　おやア檢番か、事務所らしいものがあるやうですから、行つて掛合つて見ませう。相當、花代か、玉代かつけてやらなけやなりますまいが、いゝですか？

太郎。そこは善いやうに計らつて下さい。

六郎。……あそこの格子に髮をお下げにした可愛らしい娘ッ子がゐただ。

太郎。何、お下げの……そいつア酷い……あんまりだ……あんまりだ。

小山。(輕く笑つて)イヤ、傍へ寄つて見ると、いゝ加減なお婆さんです、あのお下げが手です、欺されちやいけません、ハ、、、(暗轉)

第五場

場所　前場の巷の或る家の二階

人物　椿　太郎

元村六郎

附添、小山

女將甲乙

女　等

遊び人大勢

事務所らしい家の二階。正面、上手半分程、簾のぼろ隱しに、寄席藝人の名入の短冊ぢらしに、花や紅葉を染め拔いた暖簾の古びたのが、たるんだまゝ引つかけてある、正面の下手半分は障子格子、上り口は下手、ガランとした大部屋を電燈の照らしてゐる中に、女將らしい大年増が二人、居並び、それにつゞいて逆毛のオールバツクや、耳かくし活動女優擬ひの安つぽいメーキアツプ、拙なひき眉毛、濃い頬紅など大てい同じスタイルの、けばけばしい色のモスや銘仙、中には安物のお召らしいのを着込んだのもゐる、十七八才から三十からみまでの、大てい肉附は善いが、何處か崩れやつれのした、荒んだ女が十二三人行儀惡く居列んでゐる、据膳のビール罎の大半は轉げてゐる、上手の形ばかりの床の間近く、椿太郎が立ち、傍には六郎と小山とが控へてゐる。

太郎。(演說口調で、立てつゞけに)花代……玉代に相當するものを拂つて、皆さんを……諸君をかうして一室にお集り願ふといふ事は……

んだか醉興のやうに思はれる方もございませう。物好きな傾似をやるへんちきな男だと考へられる方もございませう。

女の一。（醉つた口調で）醉興だよ……へんちきだよ。

女將甲。シッ……シッ、靜かにおし……このお客様は十分といふ約束で、錢も價もつけて下さろうつてんだ、チッとして皆お話を伺つてりや善いんださうだから……。

女將乙。（やゝ低調に）でも身上話を聞くんだつて云ふ事だつたが、自分で演說するんぢや約束が違ふぢやアないか？……例の政界車か何かの廻し者ぢやないか知ら。

女將甲。廓とは違ふわね、皆、自前同様だもの、そんな心配はありやしない。こつちや皆の口のひまつぶしさ。

六郎。シッ、シッ……靜かにしてくれべあ。

太郎。で、私は、皆さんに、……諸君に大なる同情を持つものであります、諸君が彼の暴君の如き、又野獸の如き男性の爲めに虐げられて、世間の……社會の隅つこに追ひ込められたといふより、その網の目から篩ひ落されて、じめじめしたどぶ泥の中の腐つた尻切れわらじに生へるカビの花のやうな……。

女の二。（醉つた息を吹いて）カビの花だつて、生意氣いふない……闇に咲いても花は花だよ。

女の三。（冷笑）へ、、、自分こそ最低らしい面をしてるぢやないか？野暮らしいでかい體附だよ。

女將。（低調に）コリヤよつ程朴念木だよ。

小山。靜かに……靜かに……。

六郎。シッ……シッ……シッ……。

太郎。決して皆さんを……諸君を侮辱するのではありません、要するに諸君も吾輩も、同じ日本の先祖の×の血脈を引いてるものであります、兄妹同士であります、その兄妹同士の諸君が、かゝる悲慘なる境遇に陷られたのは、一つは今云つたやうな兄妹同士の關係を忘れてゐる男性のために虐げられたのではありますが、一つの原因は日本の内地に人間がウヨウヨ多過ぎて、食糧が少い、イヤ、日本丈に限らん、今日の時代には何れの國に於きましても國内の人口は是までに見ない程激增しつゝありますが、一方の食糧の増加は遲々たるものでありまして、人口增加率は幾何級數で進んで行つてるのに、一方の食糧增加率は算術級數でしか行つて居ないのであります、人間の毎年、生れる數と、食糧の製產の量とか、つり合ひが取れないのであります。

六郎。（拍手）汝は島の學者だぞ。

小山。（頷いて）なかなか物識りでゐらつしやる。

女將甲。(煙草を吹かせながら) 何が何んだか私たち無學のものには分りませんわ。

太郎。(聲を張上げ) 諸君、そこで産兒制限といふ事は目下の急迫せる社會問題の一つであります。それで子供はあまり産みッ放しにしてはいけない、優れたる子供だけ作つて、低能、白痴、不具の子供は作らないやうな讀みが人間になければならないのです。

六郎。はア、何處やらで聞いたやうだぞ。

女の三。(バット吹かしく\) 私たちは子供なんか生みやしないわ、よつ程何うかしてる先生だよ。

女の四。(ヒステリカルな調子) 私たちは産兒制限の、、をするのよ。

女の五。(嘲るやうに) この先生、よつ程戸迷ひしてるわ。

女の一。(しみぐ\した調子) だがね、私たちも親が産みッ放しにした方よ。

女の二。それはさうだわ。

六郎。(太い聲で) 静かにして……静かにして……。

太郎。(むくれ出す) 君の聲が一番太いよ……姉さんたちも彌次ッては困る、私は演説に慣れて居らんから、混ぜ返されると、自分で自分が何を云ふたか分らなくなるんだ……。

女將皆。皆、大人しく聞くんですよ、もチッとの辛棒だ……。

太郎。チョッと頭がモヤく\して來たので、前の話との連絡は附かないか知れません(小生氣を利かしてグラスに水を持つて行つてやる)……さて私は、私たちは前申上たやうに、青ケ島—所謂、昔の鬼ケ島から來た男でありますが、内地の方はもつと美しい、淸らかな、理想的な文明開化の社會かと思ひましたのに、意外にも、アベコベです、尤も鬼ケ島にないラヂオはあります、自働車はあります、電車も、汽車も、飛行機もあります、工場には大きな煙突が突立つてゐて、八丈富士の噴煙よりも、もつとおびたゞしい黒煙を吐き出してゐます、天にとゞく建築物—ビルヂングもあります、その他いろんな器械は目を驚かし、膽をでんぐり返らせる程たくさんあります、しかし又一方には、憐れな乞食や、カフェーの女給や、また斯うした闇の中に稼ぐ諸君やその他、虐げられてゐる男や女が數知れない程あると思ひます、ところで私の……私たちの鬼ケ島は、貧弱た、狹い島ではありますが、芋にしろ、米麥にしろ、漁つた魚にしろ、島中の者が皆で分け合つて食べてゐますから、乞食は一人もありません、又月の病のある女たちは他家を離れて、他屋—即ち離れ家へ行く習らはしがあります、その間は、男女の關係(六郎が咳拂する)……自由な關係が行はれますが、カフェーや、又こゝで見受るやうな金で賣る、買ふといふやうな事は決してないのであります。

女の三。 おきまりよ、田舎者はみんなお國自慢をするわよ――。

女の四。 聞いて極樂見て地獄つて、相場はちやんときまつてるわ。

六郎。(太い聲で)しッ……靜かに……ほんとうの事を云つてるんだ……。

太郎。エ、エ、エ……それで私は……微力ながら、かゝる虐げられつゝある内地の人々を助けて上げたい、救うて上げたい、正義人道の爲めに盡したいと決心しました、しかし今日の時代に於きましては、正義人道はかりではダメである、金力がなくては、正義人道は口先丈の事になつて、實行が出來ません、然るに何んたる幸ぞ、私は先祖の遺產に恵まれてゐる者でありました、尊敬すべき先祖が、埋めて置いてくれたものを、今、堀出しつゝある最中です、この數日の中に、私の手に、五十萬圓、或は百萬圓、若しかすると、それよりもつと多額の金が入つて來るのであります。

女将甲。(小山をチョッと引張る)……キ印ですか?

小山。(眞顏で)そんな事はない、正氣ですよ。

女将乙。ぢやア正氣の狂人かね、

太郎。……で、私は、この金を虐げられた諸君のために喜んで費したいと思ふのであります、それで先づ諸君の身代を償りて上げます、それから又安樂な、自由な、幸福な生活を送らせて上げたいが、私たちの島も、この頃は食糧問題で、この上、人間の頭數を殖す事はムッかしくなつて來ました、そこで、これは、外國の土地でも買つて、虐げられた諸君の爲めに、樂土を開いて上げるより外に方法はあるまいかと考へてゐるのであります。

女の一。(ビールを娟りながら)虐げられた〳〵つて、さう人を見くびつて貰ひますまいよ、私は斯う見えても辯護士の奥さんでしたよ、主人が自分で放埒をするくせに、私の身持が善いの、惡いのつて、やかましく云ふのがつい癪に障つて、飛出しちやつて、とう〳〵こゝへ納まつたのだわ、難有い事には、こゝぢや身持が善いの、惡いのつて、やかましくいふ者もゐないし、自由で、のん氣で、樂にお金が儲かる商賣だわ、島から來た先生なんかに、何が分るもんか?いらんおせつかいよ。

女の三。(これもビール瓶をくい呑みしたから)私はタイピストだつたのよ、それを色魔の社長が手込にしやがつて、處女の貞操をふみにじつちやつたから、もう自棄になつたの、こうなりや男性への復仇をやらなきや嘘だと思つて、自ら好き好んでこゝへ來たのよ、男つて自惚れが強いからちよつと甘い事を云つてやると、直ぐ本氣になつて、無中でのぼせ上つて騒ぐんだもの、お馬鹿さんだわ、十人が十人、まア片ッ端から輕蔑に價すると思ふわ、少しは胸が慰えた

が、まだ、まだこんな事で足りやしない、一生かゝつて、もつと、もつと復仇してやらなけや、私の十露盤は桁が合わない事よ。

女の四。女工や何かして、綿屑にまみれちやつて一日中働きづめにしたつて、一圓以上取るのは骨だわ、こゝでは坐りながら、そんな下等な勞働者は一人もゐない事よ。

女將甲。斯う見えても、皆、月に千圓近くは稼いでゐませうよ、手取り半分にしても、商賣としちや結構なもんですわ、中には金を溜めて借屋の何軒も建てゝるんですから、馬鹿にはなりませんよ、當節は大の男が、汗みづくになつて、朝から晩まで働いたつて、貯蓄なんぞメッタに出來つこはない。上汁は皆、何處かで吸ひ取られるのが落ちですからね、こゝぢや親類縁者から廢業させにかゝつても、逃げ廻つて、何うしても家へ歸らないつていふのが多いんですよ。

女の四。だからそんな夢の國なんかへ、一人だつて行かうてものはありませんわ、鬼ケ島のお伽話なんぞ、今時は子供だつて聞きたがりはしませんよホゝゝゝ。

(一同の笑ひが爆發する)

(太郎は立往生する)

六郎(女の一の傍へ寄る)フーン、聞いて見りやよそ目で見た程、みじめでもねえだな?

女の五。立派さうに、風采體裁をしてたつて、亭主の云ふなりになつてるんでせう、相手が一人と數が多いと丈の違ひよ。

女の二。夫婦なんて、たいくつなものぢやアないの、…それを我慢してるのは不性なからよ、世間がうるさいからよ。

六郎。(頷く)ウム、さう云やア、己らが島ぢや、好いた間は夫婦暮らし、イヤになつたら他人になるとちやんと昔からの仕來りだ、可愛がらんせ永くは添はぬ、縁はきれもの、はなれものつてなッ…

女の三。オヤ、然、そんな處なら私、行つて見たいわ。

六郎。ウム。ぢや己らと一しよに行くべゑ。

太郎。(つかつかと寄つて、六郎の頭を打つ)己らが折角、皆に云聞かせてるのに汝が女をからかつちや何んにもならんぢやねえか?

六郎。馬鹿い眞似するな……この女が、島へ一しよに行かうて云つてるんだ。

太郎。汝がノロマ面してゐるからだ、男性への復仇つて云つてた女ぢやアねえか?

女の三。だから男つて、ちよいと甘い口を利けやのぼせ上るつていふのよ、ホゝゝ

(又ドッと笑ひが爆發する)

小山。(女將等と耳語き合つて後)何うですまアこゝの女たちはこんな

もんです……そろ〳〵引上げますか？

女將甲。もうそろ〳〵本職が忙しくなりますから、こゝらで皆歸らせて貰ひます。

女將乙。もう、約束の時間が來たんだよ（小山、太郎に勘定書を見せ、金を受取つて、女將に渡す、その間にチョッと手品があるらしい）

太郎。時間が來たら今夜は仕方がない……だが己らは何うしても、この虐げられた女たちを救うてやる……今に大金が手に入るんだ、己らは慾氣はない、皆に分けてやる、喜んで諸君のために使つて了ふ。皆、私の處へ尋ねて來てくれ、さア、宿と事務所はこゝだ（名刺を配る）、こん度又、ゆつくり云つて聞かせる。諸君は金のために自分の肉體を、自分の魂を虐げてゐるんだ、いけない。いけない……（女の一に向ひ）……姉さん、汝は一番怜悧さうだ、こん度、二人でゆつくり話したいな。

女の一。エ、エエ、百萬圓御手に入つたらキッと知らせて下さい、何處へでも飛んで行きますわ。

女の二。だが金がなくなつたら、あばよだつて？

女將甲。さア、皆、御勘定云つて、お立ち〳〵…。

女將乙。……とんだ救世軍の出來損ひだよ、賤い世間には變人もあつたもんだ、成る程鬼ケ島の人間らしいわハヽヽヽ

太郎。（女の一を追ひすがる）君は怜悧さうだ、きつとゆつくり話さうね。

女の一。エ、エエ、何時でも入らつしやい、お相手になつて上げてよ。

（小山も六郎も、それ〳〵に女に追ひすがる）

女將甲。何うも難有う……さア〳〵皆お出で〳〵……とんだ事で店を明けちやつた、何より商賣が大事だよ。

女將乙。さうとも〳〵、あばよ。

あばよ

遊び人數人、（棍棒など持つて、ドヤ〳〵上り口に現れる）。かみさん、やつつけやうか？

女將甲。お周章てゞないよ。たゞの唐變木さ。

女將乙。（腕をたゝいて）何んなもんだい？

（遊び人等と太郎等と睨み合つて擬立する）

第六場

場所　ビルヂングの一部

人物　椿太郎

元村六郎
附添　小山
世界企業會社重役
若いタイピスト
給仕
若い男

ビルヂングの中にある世界企業株式會社の事務室の一部、衝立を隔てゝ下手は應接室、上手は重役室、そこらの壁には南米ブラジルの彩色した大地圖が掲げてあり、珈琲栽培や、牧畜の光景など三色摺、五色摺にしたポスターがベタベタ、貼られてある。

○

重役室の方では、二十才前後の、モダンガール風俗のタイピストが、忙がしさうに器械を鳴らして居り、應接室では、五十才位の、禿頭の、でつぷり太つた、モーニング姿に、鼻目鏡の重役と、背廣にロイド眼鏡の若い男とが、卓を隔てゝ向き合つてゐる、話の調子が次第に高まつて來る。

重役。此方は眞面目にやつてるんだ、さう君等に尻ッぽを摑まれるやうな弱點があつて堪るもんか……現に知名な貴族とか、財界の名士とかゞ、ちやんと重役に加はつてゐるぢやアないか？　近頃は一夜造りのイカモノ會社がひよこ〳〵飛び出すから、斯の方々は、如何に口說かれてもメッタに新會社には關係しない事になつてるが、こ丈けは無論、別格さ、苟も斯うして株式會社の看板を掲げて世間様を相手に仕事をやつてる以上、無責任な事が出來るもんか……。

若い男。（ヘンな笑）エヘヽヽヽヽ（印刷物を指先で捻くりながら）だが、この仲間なんざ、三百圓か五百圓も出しや何んなイカモノ會社へでも名前を借すつて、通り相場になつてますさア？　こゝに列んでゐる所謂財界のお歷々が大てい札附きだつて位の事は、我々の仲間ぢや知れ過ぎてます、廣い世間には、慾に目の無いくせに、足元の陷し穴には氣の附かない、馬鹿リコウな連中が存外多いものだから、斯うした自稱權威かしのお道具立てゞ、ブラジルの土地が無代同様で買へるやうな鳴物入の宣傳をやりや、ウカ〳〵釣り上げられて、自分の財布で首を絞められて了ふんですよ、何んでもバカに景氣が善いつていふぢやアありませんか？

重役。（鼻であしらふやうに）まア可成りな景氣だ、……こつちは創立匆々だし、他の古い移民會社が、商賣敵でいろんな中傷をやるので困る、姑息な事を何年やつてたつて仕方がないぢやアないか？　そこで當會社は、事業上に一新紀元を作る覺悟で、進んでサン、パウ

ロの州政府と正式の契約書を取交はして、極めて安い價で、肥沃な廣大な土地を日本人の所有に出來るやうに、やつと手續をつけたんだ、それまでの苦心はなか〱お話にならんさ。

若い男。（ニヤ〱笑つて）ぢやアその苦心談でも書き立てゝ上げませうか？　僕等の方の新聞もまだ發行した許りで、紙數は他の大新聞並みには行きませんが、社會の一部にはなか〱信用があるのです、それを味方にすると、敵にするとでは、出が當るか、外づれるかの別れ道で、結果に於て大へんな相違だといふ事は御存じでせうが？

西役。（苦笑）此方らの事業には裏表はないんだよ、君、我々は唯、誠心誠意で、國家社會の爲め、同胞の發展の爲めに計つてゐるんだから、傍から何んなケチを附けられやうがびくともしないんさ。

若い男。（險しい表情で）はア、ナカ〱出方が大きいですな、しかし私の社の方へは何十通も投書が來てるのです……こゝにも一通持つてゐますが……つい、この隣縣の、さる中流の百姓だと書いてゐますが、百エーケル、三千圓の土地購入の約束で、手附を拂つたが、後で他から注意されて、ブラジル領事館へ問合せると、州政府がそんな約束をする筈はないと云はれたので、手金取戻しに、何度、こゝへ掛合ひに來ても、あいまいな事ばかり云つて、ごまかしてる、大山師に違ひないから、一日も早く、世間のために誅罰を加へてくれといふのです。

西役。（豪放な笑）ハヽヽヽ、その男子なら大てい見當は附いてゐるが、ありや君、頭がヘンになつてるんだよ、アト金の工面が附かないからつて、手附を取戻さうていふのは蟲が善過ぎらア、千口、二千口とある中には、たまにはそんなのも、出て來やうさ、ハヽヽハ、。

若い男。貴方の方の言分は言分として、その本人の言分も一應、紙上へ出さうかと思つてるんですが……？

西役。（口調をかへて）だがね、折角事業を始めて、まだ、幾月にもならんのだから、一部でも世間の誤解を招くのは困るんだ、君の社でもこの事業を賛成して、本社の社運が愈々盛大に赴くやうに、まア厚意を持つてくれ玉へ（横の卓へ向直つて、小切手へ一筆書入れて……）これはほんのおちかづきのしるしだ、樽肴代だ、何分よろしく。

若い男。さうですか？　難有う……（取上げて見て）……もう一桁上げてもらへませんか？　社員の頭數も多いんですから。

西役。（鷹揚に）イヤ、それは君の足代にさし出したんだから、君の善いやうに取計らつてくれ給へ……。

若い男。さうですか？………ぢや又その中に改めてゆつくりお伺ひする事にしませう。　（立上つて、扉口へ）

重役。……ア、うるさい奴だ……度々御伺ひされて堪るもんか（云ひ云ひ重役室へ歸る）

○

若いタイピスト。いろんな處からゆすりに來るのね、刑事さんでも頼んで張番してもらつちや何う？

重役。（苦笑）ウム、ゆすりを追ッ拂ふには善いだらうが、かんじんのお客さんまで寄附かなくなつちや困るよ、ハ、、、、、、。

若いタイピスト。それもさうだわ、この會社の方が、刑事に縛られるかも知れないわね？

重役。（卓上の書類をひねくりながら）生意氣云ふなッ。すぐこれだから困る。

若いタイピスト。いゝえ、私、心配なのはこの頃、專務さんが、毎晩、藝者屋町へ入りびたりだつて皆の噂が高いからです、五日大盡で通つてるて？　私、その譯は知らないが、この會社の信用に瑕が附きはしないかとそれ許り氣にしてゐますのよ……私だつて、たまに日曜日くらゐには又鎌倉邊りへでも、自動車をライドしたいのよ。

重役。（笑顏）ア、さういふ意味か？　よし、よし、この次の日曜日には、さう出來るかも知れないよ（チッと見て）、藝者遊びは、商賣の手段だ、善い御得意を逃がさない爲めさ、やつぱり若返つた氣持になるのは、藝者を相手にした時に限るんだよ……しかし五日大盡なんて、綽名が通つて來ちやおつたんかなア、ハ、、、、

（若いタイピストは默つてゐる、眼に涙が光る）

重役（寄つて行き）何うしたんだね？　ヘンな子だよ……。

若いタイピスト。貴方のは、何も彼も手段だわ、……商賣だの、若返るのだつてばかり云つて……私、さうぢやアないのよ……。

重役。……オヤ、すね出したのかね……困るなア。

若いタイピスト（愼けんに）私、本氣なのよ……この頃ぢやア私、心から貴方のモノになつたつもりよ……それに貴方は……（涙ぐんだ態）

重役。ア、分つた……分つた……こゝだつてさうだよ（両手で抱いて接吻する）

（扉をノックして、給仕、名刺を持つて來る）

重役。（急に威嚴を作る）……ウム……何ういふ用事だ？

給仕。ブラジルの土地購入の事についてお聞きしたいといふのださうです。

重役。よし……應接へ通してくれ……（卓に倚つて、書類をいぢくり始める）

（椿太郎、元村六郎、小山に連れられて、給仕の案内で應接の方へ通る、物珍らしさうに、彩色の地圖や、ポスターなど見廻してゐる）

重役。（印刷物を手にし出て來る）私がこの會社の專務です、……よく入らつしやつた、ブラジルの土地購入の御用件ですか？

小山。ハイ……ポスターがお目に附いて、寄つて見たいと云はれるので、御一しよに上りました、八丈島の方から出て來られたのですがお金には御不自由のない御方です、

重役。はア、さうですか？　それは〳〵……（チロ〳〵見る）

太郎。私らの島でもさうだが、內地へ來て見ると、何處でも彼處でも、人間がウヨ〳〵し過ぎてゐるので、彈き出された奴は乞食だの、女給だの、賣笑婦だのに成下つて、みじめな生活をする、產兒制限が賣藥屋の宣傳にまで使はれるのも一應尤もだが、しかしその爲めに民族絕滅とか、國家衰亡の結果を招いては一大事だ。

重役。御尤もです……八丈島の方から入らつしやつたといふに、なかなかの御見識で、敬服しますよ、御世辭でなく……。

六郎。（太い聲で）こりや、島でも學者だよ……それに代々名主をつとめた家柄たからな……。

太郎。私も島を出て來た時は、唯ボンヤリ考へてゐただけだが、內地へ來て見て生きた學問をしましたよ、日本もこのまゝぢやいけない、このまゝぢやそれこそ今に產兒制限だ、……そんな眞似をせんで、遠慮なくドン〳〵生めよ、殖えよ、人間の頭數を增させて行くが善い、それについちや何處か、外國の土地でも買入れて、內地でありあまる人間のはけ口を拵さへて置かんといけないんだ。幸、私には先祖が莫大な金を遺してくれたので、それを投げ出して、この意義ある事業に盡したいと思ふてた矢先、ブラジルの土地を賣渡すといふ廣告が目についたので、やつて來たのです。

六郎。內地へ來て見りや、皆、我利〳〵亡者許りで、儲けたい〳〵で、血眼になつてやがる、乞食までが猿を腹へ入れたり、滿足な體に、木の足をつぎ足して、一錢二錢をかつぱ取るだべあ、大きな看板出して、立派な洋服着て、大きな面アして納まり返つてる奴でも乞食の兄弟分でやつぱり腹から猿を出したり、木のつぎ足を見せて事だ、そんな中へ來て、この太郎旦那は、自分の手に入つた大金をぶち蒔いて、世間の人の役に立てたいといふ心がけの人だから、己ら、島のためにこの天狗鼻ア高うするだ……何うだ、さうしたものでねえか？

小山。(調子を合せて)全く感心なお心がけです。

重役。(誇張的に)全く感服します、……ところで、大體はその印刷物を御覽下されば分りますが、今回、ブラジルの州政府と契約して、極めて安い値段でお譲り渡し出來る土地はこのサンパウロの南の方の、こゝらの高原地でありまして、有名な珈琲の栽培に適當してるのは勿論ですが、その外に綿花も出來ます、米も作れます、牧畜にも適してゐます、附近には金銀も、タングステンも、それから寶石が出る見込の場所もあります、何しろ、投資なさるには至極有望ですから、賣切れぬ中に一刻も早くお申込なさる事をお勸めします。

太郎。一たい値段は何れ位ですか?

重役。その中にもくわしく書いてありますが一エーケル、三十圓から、五十圓です、一エーケルは御存の通り、日本の二町五反歩に當りますから、三エーケル乃至、五エーケルもあれば先づ一家族の御仕事には十分です、最初は處女林を開墾して珈琲の種子をまく、これが四年目から花が咲いて實が取れます、何しろ一目千里といふ廣々とした赤土の上に、銀のやうな眞白な珈琲の花が一時に咲き出した眺望は、實に何んとも云へぬ、美しい壯大なものださうですよ。

六郎。フーム……さうですよつて、汝さん、ブラジルから來た日本人かと思ふたが、まだ一度も行つた事はないづら。

重役。(一寸とヘドモドして)イヤ……エエ……いづれこれからブラジルへ出かけますよ。

太郎。一エーケル、百ミル……ミルつて、いくらだ?

重役。エ、、相場の變動はありますが、まア三ミルが日本金一圓當り位のものでせうね。

太郎。フム、一エーケル、三十圓……無代見たやうなもんだナア。

六郎。成程、無代より安いくらゐなもんだべあ。

小山。要らん金があつたら、此方らも一口乘りたいですな、洋服細民には何うも手が出ないんだが、昔から地所を買つて置いて損をしたものはありません、十年の中にはキット十倍位の價が出ますよ、地所は寢かせたまゝで、一人で稼いでくれるんだから得ですな。

重役。(含み笑)さうですなア、ソッとして寢かせて置いても、ひとりでに金を生んでくれるんですから、資本を入れるには、これに越したものは先づありませんな、まア試みに一萬圓投げ出して御覽なさい、五六百町歩、のものがあなたの御名儀になりますから、思ひ切つて御契約なすつちや何うです、惡い事はお勸めいたしません。

太郎。買ふくらゐなら、一萬圓なんて、そんな端タ金は出さないんだ。こつちはチと望が大きいんだから。

重役。(面喰つて)へエー……こちらでも勿論多い程結構ですが、一時に

に大資本をお役にたさいと云つてお勸めするのも、お客様によつちや、ヘンに思はれても困りますし、可成多人數のお方に分割して、社會の公利公益を計りたいのが本社の主旨でもありますから、手數い處を申上げたんですが、何に、五萬でも十萬でも、別に制限をお附けするわけではありません……。

太郎。五萬や、十萬の端た金で、土地を購つたつて、內地の人口問題や食糧問題の形が附きやしまい、此方の望はチト大きいんだつて云つてるんだよ。

六郎。この人は今、金を堀らせてるんだよ、五十萬圓がものが出るか、百萬圓がものが出るか、この二三日の中に決るんだべあ、その金も身に附けやうていふぢやねえ、皆、世間の人のために投出すいふんだから內地のケチくした人間たア了見が違ふだ、馬鹿にしちやアいかんぞ、洋服の恰好は惡うても、腹の中は、內地の者よりりつぱだよ、ずつとりつぱだよ。

重役。(眼をパチツカセて)イヤ、…エ…結構です、結構ですとも……いくらでも御契約なされたい丈け、御話をつけませうか、一たい、何れ位の土地が御入用ですか?

太郎。まア、少くも、最初、五六十萬圓……それで何町步、買入れが出來るかね?

重役。ヘエ……五六十萬圓なら、チヨツと二萬町步くらゐは買へませうか? チヨツト……(小山を引張つて、次室へ行く)

（　）

重役。(低聲で)あの人のいふ事は馬鹿に大きいが、チと頭がヘンぢやありませんか?……キ印ぢやアないんですか?

小山。さア、私にも分りませんな。

重役。(紙幣を、相手のポケットに押込み)……手巾代りです……何うでせう? いゝ、ほんとうに金を持つてる人か、何うか敎へて下さい、話の仕方がありますから……?

小山。遠慮なく頂戴します……今、實は金を掘つてるんです、それを掘當てたら大ヘンなもんです……。

重役。金鑛をですか?……はア、さうですか?

(若いタイピストも耳傾けてゐる、重役は獨り頷いて、小山と一しよに、再び應接室へ出る)

重役。イヤ、失禮しました、ちよつと小山さんに伺ひたい事があつたんですが、貴方の事は十分信用いたして居ります、では御希望通り、如何樣にも御契約いたしませう、それには手附金が要るんですが、幾何位でせうね?

太郎。いくら要りますか?

重役。契約成立と同時に一割五分乃至、二割ですな、三萬町歩、約六十萬圓としまして、その二割なら十二萬圓見當です、尤も金高が大きいから勉強して、割引はしませうが？

太郎。ア、善うがす、明日か、明後日までには拂ひ込みます。

六郎。ア、それ位、わけはねえだべあ。

重役。おやア一應、契約書は作らせて置きます、暫らく御待ち下さい

(重役室へ行つて、タイプライターを打たせる)

六郎。ゑれえ事だ、三萬町歩の土地買入れて珈琲畑作らせる、そこのビラ夢か本モノになるんだな、汝が行くなら、己もついて行くべあ。

太郎。ウム、島中の者も來たい奴は皆連れて行くし、內地の乞食も、女給も、賣笑婦も、それから他に虐げられて氣の毒な、みじめな暮ししてる者は、誰でも連れて行つてやる、だが三萬町歩ぢや、たつた一萬人位の人間しか食つて行けまいた、せめて十萬町歩位に買擴ろげるか？

六郎。十萬町歩でも、百萬町歩でも、そりや廣い程善いだろうが、まア一時に大げさな事しても、始末に困らア、ゆつくりやるがよかべあ。

太郎。(頷いて)ウム、それはさうだ、物事には手順があるでな、己らア法螺ア吹いて、空威張したくはないんだ。

小山。うまく金に掘り當てりや善いですがなア、今朝の工合ぢやア、まだ見當が附かない様子でしたよ。

太郎。何アに、そんな心配はムダな心配だ……己らの先祖は、嘘の證文なんか書殘すやうな罰當りぢやない、そんな惡狡い人間たら、島流しなんかに逢ふもんか……。

六郎。そりやさうぢやとも……嘘やかたりの出來る人間なら、內地にヂツとして居着いてられるだ、あんまり正直過ぎて、胸に隱し事が出來ねえだで、流人なんかにされたもんだべあ。……時に、あの隣りで、蟬か何かの鳴くやうな音がしてるのは何んだらう？（重役室をのぞく、タイプライターに目を附け、それからヂロ〳〵と、若いタイピストを見てゐる)

重役。御待遠さま……一通り、契約書の原本は出來ました……

六郎。珍らしい器械だな…打つたら字が出るんだな (女と器械と等分に見くらべて笑つてゐる)

重役。あの、ちよいと伺ひますが。あそこの方は、頭は確かでせうね？

六郎。エ？

重役。キ印ぢやアないですな？

六郎。（太い聲で）キ印つて何んだへあ？

重役。（咳をして、サッサと應接室の方へ行く）何うも御待たせしました、……御掛下さい。

六郎。（取上げて見る）……三萬町步……五十九萬六千五百圓也……

重役。エヱ…特に割引してあるのです、手附金の方は無論明日で宜いですが、印紙代とか、手數料とか、こゝで二三百圓、一時お預りして置けると、好都合ですが……

太郎。それ位はこゝに持つちやゐるが、まだ契約書も取交はさんで、現金を預けるつて可笑しいぢやないか？

重役。イヤ、折々お流れになるのがありますから大きな契約を申込まれる方には、さうした方法をお願ひもするわけですが、貴方方にはその必要もありますまい…勿論萬事明日で結構です…エヱ…ともう夕刻でもありますし、お近づきのしるしに一寸と御飯でもさし上げたいんですが、何うでせう？甚だ失禮ですがお交際下さいませんか？私の行きつけのつい鼻先ですが……？

太郎。お近づきですか？

重役。イヤ、今後も又いろ／＼御援助に預りたいのですし、ゆつくりお話も伺ひたいのです、御交際下されば光榮です。

太郎。さうですか？ぢやア遠慮なしにお交際しませう。

重役。貴方も御一しよに……

小川。さうですか？如何う。

重役。お出かけませう（コートを引ッかける）

太郎。オイ、六郎君……六郎君、何うした？

六郎。（やつと氣附いたやうに驅け來る）何んだ？用か？

太郎。お交際に御馳走するていふんだよ。

（六郎は早速、出かける支度をする）

○

重役。（重役室の卓へ歸り）私はこれから又出かける……いゝ加減に仕舞つて歸つてくれ。

若いタイピスト。又何時もの處へでせう？

重役。いゝ御得意さんだからおちかづきになつてをくんだよ。

若いタイピスト。（嬌態をして）私、一人でカフェへ寄るわ、お小遣を？

重役。困るなア……（紙幣をやる）

太郎（應接室から）まだ、手間がかゝるかね？

重役。（走つて來て）イヤ、失禮しました、今日は支配人が出かけて、まだ歸つて居りませんので、私一人が御主人役ですが、さア、參りませう。

（皆々、扉の方へ行く、若いタイピストは後を見送つて立つ）――

暗轉。

第七場

場所　或る待合

人物　棒太郎

元村六郎

附添　小山

重役

女將

藝妓、等、

刑事その他、

或待合の座敷、三方は黄色がゝつた襖、上手の一方に、床の間が附いて居り、天井から釣り電燈が花やかに照り輝いてゐる、隣りでは華やいだ絃歌の聲が湧上つて、絶えつ、續きつ、聞えて來る。

男衆が、黄色な布に、赤い日形の線を入れたのを捧げ込んで來て、坐敷の疊の上にくり擴げる、女中の手で、上手と下手とに厚つぼたい、坐蒲團が運ばれる。

女將。（奥に向つて）さア／＼、いつものやうに、すつかりお支度が出來ましたよ。

（隣に應じて、重役が俄に赤らんだ顏を出す）

重役。…さア…さア、これから余興の始まり、始まり……美人體操隊も繰り出して來いッ……。

（太郎、六郎、小山が、いづれも醉拂つた態度で後へつゞいて、ふら／＼と入つて來る）

重役。（下手へ坐つて）さア、何卒、そちらへ……先づ／＼御着席……四本柱はそちらと、こちらへ坐つて戴きませう、イヤ何うも、とんだ醜態ですハヽヽヽヽヽ。

太郎（醉つぶれた口調で）五目ならべなら己らにだつて出來ん事はないが、藝者と違つて生きた美人を指先で自由に動かせるものか知ら……。

重役。イヤ、それが號令一つで、こつちの思ふまゝに動かせる處が面白いんです、いろんなお[illegible]破りの遊びもし盡して見ちやつまりませんから、新發明の實驗場です…、美人を藝者代りに使ふところが、たまらなく愉快ですよ。

太郎。（息を吹いて）フーム、人様にやれる位なら私にやれん事もありますまい…しかし…しかし　…つく／＼考へて見りや、人間をオモチヤにして…遊び道具にしてそれで善いものかなア……。

小山。（手を振つて）イヤ、そんな六ッかしい事は、今夜は云はないつて、約束だつたぢやアありませんか？

重役。働く時は働く、遊ぶ時は遊ぶ、働く間を眞面目に働きさへすりや、遊ぶには、ハメを外づしたつて構ひません、又それでなけや遊びとは云へませんよ、分つてるぢやアありませんか？　分らなけや大悟徹底するまで遊びなさい、ハヽヽヽ。

六郎。（これも大分醉つた口調で）イヤ、口ぢや六ッかしい事を云うても、あれで遊ぶ方はナカ〳〵好きな先生だよ……美人を碁石にして遊ぶといふのは、私、まだ聞いた事も、見た事もねえだ、早く始めるがよかべあ。

小山。後學のために見て置く事ですな、ハヽヽヽヽ。

太郎。勝つた方が、その美人を渡へて行くといふのだつたら、はづみが附くがなア。

重役。はア、それも面白いでせうが、どちらにしても、賭勝負としませうよ、……オイ、聯珠隊はまだか？　何した？

女將。ハイ、唯今……五目大將がお待ちかねだよ。

（白裝束の藝者の一列と、黑裝束の藝者の一列と、くり出して來て、相對して、そこに列んで、挨拶する）

重役。（女たちとしきりに視線を交換しながら）……お客さまが白……主人役は黑だ、きまつてらア、さア、兩方へ別れて坐るんだ……。

（黑の中に重役の馴染女が交つてゐるので、白の組は、手を拍つたり。五目大將〳〵。と、ワアー〳〵笑つてさわぐ）

重役。何をさわぐ……誰か口を利くて事はない、默つて……默つて……。

小山。成る程、コリヤ碁石の代りですな……美人碁石だ……こりや善い……。

六郎。（坐り直して）はア、黑と白の行列だべあ。

太郎。（ニコ〳〵笑つて）何卒よろしく頼みますぜ。

重役。さア始めませう、……私から……まづ盤のまン中に、黑を一つ打ちませう。

（眼で知らせる、黑の女の一、盤のまん中に歩み出て、坐る、又笑つたり、手を拍つたり五目大將〳〵と連呼する、重役が、シッ……シッ……と叱る）

太郎。フーン……おやその直ぐ右隣へならべて白だ……御苦勞さま……。

（白の女、進み出て、右の隣へ坐る）

六郎。はア、成る程、こりや生きた碁石だべあ。

重役。黑のこちら……下隣りへ同じく黑と打つ……。

太郎。ウム……初めの黑の下……白の斜向ひに白と打つ、御苦勞さま……。

重役。ではこちらへ延びて、黑の下に黑。

太郎。フーム……ぢやこちらは、白が斜向に延びる……御苦勞さま……。

重役。ぢや黑はもう一つ、下へのびる、……そこ……そこ……。

(傍で、さわぎ立てる)

太郎。黑を留める……御苦勞さまだ……。

重役。フーム……ぢや上から三つ目の黑の隣りへ、黑と打つ。

(傍でワアー〳〵と聲を立てる)

太郎。白の端の、斜向に白と打つ……。

重役。ヤアー、ウッカリぬかつた……しまつた……しまつた。

太郎。さア、白……白……五目にならんで……御苦勞さま……。

(ワーッと手をたたいて勝鬨が上る)

重役。負けました……醉拂つちやつて、五目大趣、つい見落したんだよ、猿も木から落ちるさ(太郎の傍へ倚り)賭勝負に一番負けました……殘念ですが、時の運です(ポケットから紙幣を取り出し)一番負闘として置きませう。現ナマで、納めます、賭は約束に倍上り、潔いですな、決めましたよ、この次は私がキッと勝つて見せますから……。

太郎。イヤ、己ら勝つても金なんかいらん……金なら捨て場に困つてるだ。

重役。おやア、こゝらの雜代どもに分けておやんなさるが潔いでせう、出したものは引ッ込めませんよ。

(白も、黑も。まアひどい事を！ ひどいわ！ と叫ぶ)

小山。何んならこちらでもらつて置きます。

六郎。内地の人は皆、慾の皮が突ッ張つてるだ、島の者もチッと人間が悪くなられえちや、ダメだぞ、折角、貰つたものだ、汝が要らんなら、己が預つてやるべあ。

(ワアー〳〵と白も、黑も羨ましさうな叫聲を上げる.

重役。さア〳〵二番目を始めませうぜ。

(再び席に就く)

六郎。汝、又勝つたぞ。

太郎。ウム、己、ら何うも運の潔い男だから負けやせんぞ。

小山(行司の擬態)しつかり、双方とも見合つて……。

重役。さア行きますぞ。黑、白、左右へ別れて〳〵……負手が先手だ……右から二番目の黑(又ひやかすやらなどよめきが起る)まん中

へ出て、坐つておくれ……打つたぞ……。

太郎。白のあんこさん、あの黒の右、斜向ひに列んでおくれ、頼みます……。

重役。こん度はお次の黒……始めの黒と中一つ飛んで下へ出る……そこ……そこ……。

太郎。フーン、白のあんこさん、あの二番目の黒の右の隣へ頼みますぜ……。

六郎。白、負けるな、しつかりせいッ。

小山。見合つて……見合つて……。

重役。こん度の黒は、今の白の上へ坐る……。

女將。今度負けちやいけませんわ……しつかり……しつかり……。

黒組。(叫ぶ)頼むわ。

白組。(叫ぶ)こん度も勝つて頂戴よ……。

太郎。白のあんこさん……一番目の白の右へ延びる……頼みますぜ。

小山。双方とも見合つて、しつかり〳〵……。

六郎。白、勝て……白、勝て……黒負けろ。

重役。今打つた白のすぐ右へ、黒打ち……勝負あつた……。

(白組も、黒組も、喧躁する)

女將。白、勝ち……勝負あつた。

六郎。まだ三つ列んだだけだ……白、負けんぞ、やつた、やつた。

小山。残つた、残つた……見合つて、見合つて……。

太郎。止めて見るだ……三つ斜向に列んだ黒の右へ、白のあんこさん、出て止めてくれ……。

重役。第一番に打つた黒の右隣り、一つ飛んですわる……これで勝負が見えたでせう。

六郎。まだ五つ列らばねえだよ。

女將。二三が出來ますわね……列んで見せて上げたら宜いわ……。

太郎。……負けた……負けた……。

(白組、は喊声を上げ、黒組は勝鬨を作る)

重役。さア勝運が向いた……二百圓頂戴しますか?……

太郎。もう一番行から……端タ金の勘定なんか、面倒だ、後でする、さア來いッ。

重役。エ、エ、何度でもやるにはやりますが?

黒組。くたびれるわね……。

白組。起つたり、坐つたり、いゝ役だわ。

重役。其奴がものを云う了簡があるか、黙つてろ……黙つてろ。

女將。後でウンと奢つてもらやア善いだろう、祝儀が錆たよ。

(バタ〳〵と人の足音、女中たちの騒ぐ聲)

（女將が飛んで行きかけると、刑事が二三人、そこへ踏込んで來る）

刑事の一。海外企業の重役とか、何んとか名乘る男がゐるだらう？

女將。（興奮して）何の御用です……誰方です？

刑事の二。己れたちは署の者だ、……邪魔アするな（つか／＼と坐敷へ入つて）君だな？　海外企業の重役とかいふのは？　署へ同行せう？

重役。エ……何の御用ですか？

刑事の二。覺えがある筈だ——さア一しよに行かう……。

重役。まア、待つて下さい……（身支度するふりして、隙を覗つて、急に逃げ出さうとする、刑事がバラ／＼と飛びかゝつて格鬪する）

太郎。何うしたんだ？

重役。（擲られながら）暴力團だ、助けてくれ——

太郎。暴力團だ？　怪しからん……（六郎も、小山も、助力して更に格鬪が始まる、女たちは悲鳴を上げて、逃げ出す）

刑事の一。何を血迷うてる、刑事だぞ、君等はこの大山師のペテンにかゝりかけてたんだ……、尻が割れかゝつたので高飛びする惧れがあるから訴によつて拘引に來た、邪魔アするな。

（三人急に手を控へて、小さくなつてゐる）

重役。（圖々しく）己を拘引するなら、この男等も拘引しろ、一しよにバクチをやつたんだ。

刑事。何に？

小山。……イヤ、全く云ひがゝりでございます、唯遊んでゐましたので……。

太郎。ひどい野郎だ（と毆りかゝる）

六郎。内地つて恐ろしいところだ（と毆りつけ紙幣を取り出して）掏つた物ア歸してやるぞ。

刑事の一。（目を附ける）何んだ、オモチヤの紙幣ぢやないか？

刑事の二。君等の住所、姓名を聞かせてくれ、

太郎。鬼ケ島から來た男でございます。

（小山がいろ／＼辯解する）

刑事の二。さうか？　ペテンにかゝつちやいかん……氣を附ける……さア行け（引立てる、皆を睨んで引かれて行く、女將は後について行く）

（藝者等も二人、三人と座敷へ戻つて來る）

○まア、驚いちまつたわ。……

○大へんだわ。

○馬鹿ア見たのね。

○ごみくた大谷だわ。

（黒組の女一人は、隅で泣いてゐる、冷やかす者もゐる同情する者もゐる）

女將（歸つて來て）……ひどい目に逢つちやつた。……とんだ五月大難だ、今夜の會計は貴方方から戴いてくれていふ事です。

六郎（むくれて）そんな法があるか？

小山。イヤ、こりやひどい……醉も何も醒めちやつた。

太郎。何アに金の事なら、女將さん、心配するな、私が引受けた、二三日中に宿まで取りに來てくれ……イヤ、この醉者衆も氣の毒なもんだ、可わいさうだ、悲慘にしたのは己らちやアない、己らがペテンにかゝつたのだから許してくれ、金を融通したら皆を助けてやる、救うてやる、決して見殺すにはせんぞ……。

六郎。何うも恐ろしい處だ、宿へ歸らう〱。

黒組の女の一。（隅で泣いてゐたのが、ヒステリカルに興奮し切つて）この人たちのせいだよ、ひどいわひどいわ……人を悲慘にしちやつて……オモチヤにしちやつて、このまゝぢやすまされんわ。……

（女たちは急に噪ぎ立つ）

さうよ〱、何んとかあいさつして下さい、でなけりやこのまゝ歸しやしない〱。

口惜しいッ〱、このまゝぢや腹が癒えんわ。

さうよ。歸しやしたい〱このまゝぢや腹が癒えんわ。

（白い組の女は太郎に、黒い組の女は六郎や、小山に、競ひかゝつて、首にぶら下つたり、足を引つ張つたり、胸の下をそこぐつたり、犯人の群のやうにさん〲にふざけちらす、三人の男は鞠の如く轉ろげ廻りながら。ア、負けた…。負けた。息がつまる、…息がつまる殺されさうだ。……苦しさうに笑ひながら叫ぶ――暗轉。）

第八場

場所　空地裏

人物　椿太郎
元村六郎
附添小山
請負師
會計
土工大勢
見物人大勢

上手と下手とは板塀で圍ひ、眞中が開いてゐる、舞臺中央に、起

重機の吊り柱などが見えてゐる、內部には、掘り上げた土や石があちこちに小山になつて重り合ひ、セメント樽や、板切れ、木切れなどが、亂雜に置ッ放しになつてある。

○

請負師が一つのセメントの空樽に腰をかけてゐる、十數人の土方が、それを取圍いて、氣色ばんでゐる。

土方の一。知つた事ぢやねえたア云はせねえよ、昨日の勘定は割増になつてねえ、頭ア刎ねたんだ、約束通り、勘定の始末をつけろ。

土方の二。(シヤベルを振つたまゝ)話が片附いてからでなけや今日は皆、仕事にかゝられねえよ、人を馬鹿にしてやがら。

土方の三。こんな處を掘くり返したつて、小判どころか、鐚錢一文も出る氣遣はねえや、それを善い加減に、ゴマかして、あの馬鹿から賃金を絞り上げやうて了見が氣に喰はねえ、おまけにこちとらの賃金の頭まで刎ねやうて、さううまくは行かねえや。

請負師。(土方を見返つて)默つて聞いてりや、圖に乘つて出放題な事を云ひやがる、己は相手をゴマかしも欺しもした覺はみぢんもねえぞ、掘つて見てくれていふから、仕事を請負つて掘らせてる丈だ、小判が出やうが、みゝずが出やうが、己の知つた事ぢやアねえ、又賃金も當前に勘定して取つてるから割増しなんか出せる筈はねい、云ひがゝりを附けると承知しねえぞ。己に話しがありや小頭から聞かう。

會計員。賃金の割增つて約束なんか、初めからした覺えはないのです、仕事が仕事だから、萬一、金にでも掘當てたら、酒錢は別に出つて上げる位の事は云つたでせう、小頭がそれは承知の筈だ。

土方の一。小頭があやふやな事許り云つて、信用出來ねえから皆が、直接に談を附けに來たんだ、文句を云はねえで勘定の不足分を出してもらはふ。

土方の三。(鶴嘴を杖いて)唯の土ほぜりたア違はアな、小判が出るか、出ねえかていふ、一か八かの賭け仕事だ、氣を附けてやつてくれて云渡しだから、その時、こつちらが念を押して、増錢を出す口約束が出來てたんだ、十人も二十人もの耳で聞いてらア。

土方等。さうだ〱……ゴマかすない……ひでい奴だ(口々に叫ぶ)

會計員。旦那が、そんな口約束までした覺えはないつて云つてられるんだ、土を掘るのは何處を掘つたつて、同し勞力ぢやアないか。

土方の一。自分でよけいな賃金をせしめて置いて、己等、働くものには、少としか寄越さんのだから勘辨ならねえていふんだ。

土方等。會計の靑びようたんめ、すッ込んでろ、……貴様たんかに分るもんか……。

請負師（獨り頷きながら）イヤ、双方の勘違ひがあつたかも知れねえ……少しでも色をつけてくれといふ頼みなら、俺も男だ、自腹を切つてゞも増錢を出さう、ところでこの仕事あ、もう大抵にして、今日位で打切らざアなるまいよ、昨日で一週間經つたが、まだ目當は附かないんだし、一丈何尺の深さまで掘込んだから水は湧上るし、近所の家主からも、根太が下るつて苦情を持込んださうで、こん度は地主がやかましく云ひ出したんだ。

土方の一。打切るなら打切るで善いが、勘定の方は仕事にかゝる前に、きれいに、片附けてもらはふぢやないか？

土方の二。今日日、己れたちの仕事は他にいくらでもあらアな、こんな的のない、土を掘るのやら、雲を掴むのやら、わけの分らん、ふざけた真似をやつてるよりや、鐵筋コンクリートの、大きな工事の土臺でも堅めてやる方が、同じ雇人足でも、まだ働き甲斐があるてもんだ。

土方の三。その方がずつと割合があるよ、馬鹿の手傳ひや、こつちまでが、馬鹿にならアハヽヽヽ。

土方の四。さア不足分を先へきれいに拂つてくれ。

請負師。銀行が開いたら拂つてやる、會計に云付けてあるから、とにかく仕事にかゝつてくれ、今日一日丈の辛抱だ。

土方の一。イヤだ、先きに拂へッ。

その二。さうだ、さうだ、直ぐ拂へッ。

請負師。人を馬鹿にするなッ……。

土方の一。どつちが馬鹿にするんだ。

その三。眼をむいて見せたつて始まらねえぞ、己れ等の手の獲物が見えねえか？

（シャベルや、鶴嘴がふり上げられる）

太郎。（ひよこ〳〵と入つて來る）ヤ、皆さん、毎日、何うも御苦勞さまで……。

六郎。ヤ、皆さま……まだ出ませんだか？

太郎。（それを見て）ア、こりや何うしたんだ？　仕事にもかゝらんで……コリヤ何うしたんだ？

請負師。ヤ、旦那、皆がチとしぶくり出したんでさア……酒代が多いとか……少いとか云つてな……。

太郎。ア、酒代か……イヤ、酒代なんかいくらでも出すよ、今に掘出した小判を一枚づゝでも、二枚づゝでも分けて上げる、早く仕事にかかつてもらはふぢやアないか？

六郎。皆、怠けんで、やつてくんなよ、己らも手傳つて上げらア、今日こそ、掘出されるだべあ。

土方の一。（吹出すやうに笑つて）小判なんかどアテになるもんですか？　相手が出るなら先きへ買ひてい。

土方の二。まだ見附からん小判よりや、銅貨や白銅の方が手ッ取早く通用するで、よつ程難有いぞ。

土方等。さうだ〳〵……。

六郎　フーン、慾が少いだべあ。

太郎。ウーム、勞働者はやつぱり正直たもんだ、慾の皮なんか突ッ張らせない、……小判は小判で上げるが、とにかく酒代を出すよ。

土方の一。難有い〳〵……十圓紙幣が五枚だ……皆來い、皆來いッ。

（皆が寄つて來て挨拶する）

土方の一。このまゝおや分けられねえから後で小さくくづしてやるよ

土方等。善いとも〳〵。

太郎。さア、直ぐ景氣よく仕事にかゝつてくれ。

請負師。皆が酒代を戴いて難有うございます……地主から催促、やかましく云つて來ますので、仕事の方は、今日限り、打切りにしますから、何卒さう御承知を願ひます。

太郎。（頷いて）フーン、だがア今日中に、いよ〳〵金を掘出す目當が附いたんだな……ア、もう出る頃だ、キッと出るだらう。

六郎。いよ〳〵出るだかッ……。

請負師。イヤ、それは請合へませんが、もう一丈五六尺も掘下げました、何しろこゝらは、土一升に金一升の目貫の場所ですから、さう何時までも、的なしにいぢくちやゐられませんでな。

太郎。フーム、土一升に金一升……出るよ、もう少し掘つたら出るとも、出るとも……先祖は竹内式部の一味で、あんまり正直た人間だつたから、島流しにされたんだよ、嘘たんか云はれるもんか？

嘘の證文たんか書かれるもんか……。

六郎。早く、この目で見て見たいな、この、手で觸りたいな……。

請負師。人夫どもは、仕事を始めました。

小山。（現れる）何うですか？　出さうですか？

太郎。ウム、……ウム……今に出るとも……何か石の響か、大概かに、鶴嘴の先がガンと打つかりやしぬたもんだかな……。

六郎。小判がパッと散らばる時や、何んた音がするかなア……

太郎。今に、父様も、母様も、姉様も、あの昔彼の娘たちも、聞き附けてこゝへ押寄せて來るかも知れん、皆の見る前で、鍬か、鶴嘴の先がピチンと觸れて、大判小判が、ピカ、ピカ光つて宙に跳ねッ返りや面白いな……。

六郎。ア、鶴嘴の先からぱつと火花が飛んだ、……何んだか、打つかつたのは

小山。何んだ？　ガンと音がしたが？

(地下から。煉瓦の片に打つつかつたんだ、、、)

太郎。煉瓦……赤土にまみれた箱かも知れんぞ……よく氣を附けて見てくれ。

六郎。錆び附いた金ぢやねえだか？

(土方の聲。錆び附いた煉瓦ぢやハ、、、)

(カンと音がする)

請負師。何んだ今の音は？

太郎。(のぞき込んで)今のは、たしか、金の音だ。

六郎。ウム、ガンと鳴つた、……ガンと鳴つた。

小山。たしかに私も聞きました。

(土方の聲……。たしかに金だ……)

太郎。金か……金か……先祖樣はやつぱり噓は云はねえ……ブラジルの土地三萬町歩買へるぞ、乞食も、女給も、賣笑婦も、甚礼の藝者も、誰でも彼でも虐げられた者は皆、そこへ連れて行つてやる、そこで皆が自由に、幸福に暮らせるのだ、そこに正義人道の國が榮えるのだ、正義人道には金力が要るぞ……出たか〳〵。

太郎。(歡喜の表情)ア、出たらしい……出たらしい。

(救世軍のバンドが、板塀の外を通つて行く)

請負師。何んだい？……今のは何んだい……。

(土方一の聲。金は金だが古金だ……。)

(土方二の聲。大やかんが、埋り込んでたんだ。……地下でドーツと笑ふ聲)

太郎。大やかん！　そんな筈はねえだ、汝たちは眼が惡いんだ、土の底にばかり入つてるので、眼が昏らんだのだらう。己らが見てやる

(掘つた穴の中へ飛び込む)

六郎。(のぞいて)何うだ？　金か？　金が出たか？　小判か？　大判か？

土方等。(泥まみれになつて、出て來る)もう水がジク〳〵涌上つてダメだ……とても見當はつかん、偶に出りや古やかんだハ、、、、。

太郎。(泥まみれになり、大きな、古やかんの片われを抱いてはひ上つて來る)古やかんが出た、こん度は瓶か、甕かゞ出るんだ、もつと掘れッ……もつと掘れッ、掘り下げろ……。

土方の一。もう水が湧くばかりで、とても見込はありませんよ。

その二。そんな金銀を入れた瓶や甕を埋めて置くつて、お伽話でさア、ハ、、、。

その三。もうそんな馬鹿な夢なんか見ん事つた。

太郎。(齊脊になつて)もつと掘れッ、もつと掘れッ、掘下げい、キッ

ト出る……先祖の爲めだ……皆のためだ、世間のためだ、社會の爲めだ、人類の爲めだ……ブラジルの土地が買へる、食糧問題も心配いらん、生めよ殖えよだ、人助けだ、正義人道だ、掘り下げろ、もつと深く、もつと深く……もつと……もつと……。

請負師。もう大抵にして止めたが好いでせう……あきらめませう。

太郎。あきらめろ……馬鹿ア云つちやいかん、見ろ、見ろ、女たちが皆やつて來た、皆やつて來た……今に、金が出るぞ、先祖が嘘は云はん、掘れ、掘れツ、ぐつと掘下げろ、地球の心まで掘り下げろ、地球のドン底まで掘り拔けろ……ア、皆笑つてやがる、何を笑ふんだ……その鶴嘴を貸せ、シヤベルをよこせ、己らが掘るツ。

六郎。己らも掘る、(二人が穴へ飛込む)

(通行人、男、女、老少、大勢ガヤ／＼と寄り集まつて、穴をのぞく)

甲。馬鹿野郎ーツやい。

乙。氣違ひやーいツ。

丙。とん馬だよ。

丁。鬼ヶ島から來た男だ。

(哄笑が爆發する)

太郎。(穴の底から叫ぶ)……さア見ろ、見ろ、皆、金だ、皆銀だ、そこら中、金だらけだ、銀だらけだ…水と思つてるのは、黄金の溶け汁だ。(土をドン／＼抛り出す)

六郎(やはり穴の底から)土一升に金一升……この土も皆、金だ、金だ、金の屑だ(土まみれになつて、太郎等は現れる)

太郎。明盲め！ そこら中の土や石だと思つてるのは、皆、金だぞ、銀だぞ、小判の片だ、大判の片だ、黄金の粉末だ、よく見ろ、よく見ろ、眼をすえて見て見ろツ。

(土をもれて、太陽の光、そこらの土石を照らして燦然と輝く)……そーら、皆銀の土を踏んでら……銀の土を踏んでら、黄金世界だ……銀のやうに眞白い珊瑚の花が一面に咲いてらア、皆助かつた、皆助かつた、皆救はれた、皆救はれた(雀躍する)

六郎。(も泥まみれになつてはひ上つて來る)ウム、この土や瓦と見えてたのは、皆、金が化つたんだ、土一升に金一升、皆、要る丈、掘るだ、要る丈取るだ……。

小川。成る程、海の水からでも黄金が取れるつていふから、こゝらの土は、大判、小判が溶け込んでるかも知れんな……。

(土方たちも、催眠術にかゝつたやうに、そこらの土や石を掘り返し始める、する中に頭に鉢卷して、手拭に包んだり、やがて法被に包み込んだりする、見物の男女までが誰も／＼と不知でそこら

をほじくり出す、講釋師までも、會計も、小山も血眼になつて、土や石をかき廻はし始める。

太郎（凱歌を上げるやうに）そーら見ろ、とう〳〵見つけたぞ……見つけたぞ、掘出したぞ、掘出したぞ……ブラジルの土地に百萬町步………乞食、女給、賣笑婦、放浪藝人、虐げられてゐる者は皆來い、連れて行く……黄金の世界……正義人道の世界……銀のやうな眞白な珈琲の花が咲く、さア來い……皆來い、さア來い……。

六郎。……さア來い……皆來い。

（狂的に踊り廻る）

（空には飛行機の音、板圍ひの外には救世軍のバンド、一同はしきりに、土をほぜくり、石を拾うてゐる、太陽の光線は舞臺に强く輝く）

――幕――



戲曲　一萬圓

正宗白鳥

人物

今村陽一（四十歲、豐かな實業家）
瀬川才三（同年輩、俸給生活者）
塚田銳吉（三十歲未滿、學生上り）
渡邊さよ子（三十餘歲、今村の元の妻）
戸見田はつ子（二十五歲）
今村謙次（三十餘歲、陽一の弟）
老婢、書生、老婢の娘

年末のある日

（一）ノ一

今村陽一の書齋兼事務室。

テーブル、鞄などと、簡單な洋風の設備がされて、瓦斯ストーブが燃えてゐる。

彼れは四十歳で、今は獨身である。丸の内に事務所を有つてゐるある會社で重要な位地を占めてゐて、可成りの資財を蓄へてゐる。それに、株券に多額な利益の配當を得てゐる。彼れの體格はガッシリしてゐて、活氣が顏に現はれてゐる。

テーブルには、インキ壺やレターペーパーなど、書き物の用具が置かれてゐるが、目立つてゐるのは、幾束かの百圓札が可成り無雜作に置かれてあることである。そして、彼れは今、その札束を見据ゑてゐる。

ふと、扉の音を聞いて、彼れは側にあつた新聞紙でその札束を蔽うて、座を立つて扉を開ける。

老婢が顏を出す。

老婢　瀬川さんがいらつしやいました。

今村（當てが外れたやうに）何だ、瀬川か。……お前に注意して置かうと思つてゐながらうつかりしてゐた。居ると云つたのなら仕方がない、此方へお通ししろ。……それから、女のお客様が來るかも知れないが、さうしたら、瀬川さんが歸つて行くまで、その女のお客様に階下で待つてゐて貰ふやうにして呉れ。忘れちやいけないぜ。

老婢　ハイ（出て行かうとする）

今村　あ、それから。外のお客様が來たら、旦那様は今お出掛けになつて、いつお歸りになるか分らないと云つて、玄關から放擲ふんだぜ。

老婢　ハイ（奧へ引込む）

今村は、札束を新聞紙でよく蔽うて、テーブルの一隅へ押やる。それから、自分の椅子をも來客用の椅子をも、瓦斯ストーブの方へ引寄せて、煙草に火を點けて、椅子に腰をおろして、戸口の方を見やつてゐる。

間もなく、瀬川遊三（今村と同じくらゐな年輩で、顏付は彼れよりも神經質らしく見える）が、着流しで、ノロ〳〵と入つて來る。

「ヤア」と、どちらも愛嬌笑ひを浮べて、快く挨拶する。

瀬川（椅子に腰をおろして）今日は家にゐないだらうと思つてゐたのに。……

今村　だつてまだ早いぢやないか。おれは今起きて朝餐を食べたばかりだよ。先日うちは日曜も祭日もなかつたのだから、今日は久振りの休日で、思切り朝寢をしようと思つたのだが、不斷の習慣でさうもいかないのさ。

瀬川　なに、僕が不思議に思つてるのはね、君が昨夕この寢室に寢たことなんだ。

今村　ホウ。詰らないことを不思議に思ふんだね。僕は近來この寢臺以外の寢床で眠つたことはないよ。いくら夜がおそくなつても、ちやんと此處へ歸つて來て、安眠を樂むのだ。

瀬川　(疑つてゐるやうに)それは本當なのかい。本野や新見の話によると、君はこの頃秘密で天國を見つけてるらしいと云ふことだが。

今村　秘密の天國といふのは何だい。

瀬川　何處かに我々に隱れて潜り込む穴を見つけてるらしいと云つてる。君の態度が少し變だと云つてた。

今村　だが、天國と穴とは明暗の差が非常に違ふぢやないか(眞面目な態度で)おれはね。この頃、君達の伺ひ知らない天國か、雲の絶え間にちら〳〵見えるやうな氣持になつてゐるんだがね。それは、君達の想像してるところとは、全然無關係なんだらうよ。

瀬川　いやに勿體ぶつてるぢやないか。……本當に君は孤獨に安んじて暮してるのかい。

今村　男も獨身でゐると、傍の者がいろ〳〵に邪推を廻して呉れるんだね。しかし、何とか云つて貰える間が花だと喜んでゐていゝ譯だらうな。

瀬川　邪推といふ言葉は少し荒過ぎるよ。僕は噂を聞いて喜んでたのだから。……相手が何者であらうとも、君を惹付ける者がこの世に出て來たことは結構な譯ぢやないか。

今村　それで、お寒いのに。年末で忙しくもあらうのに。早くから探索にやつて來たといふのかい。御苦勞樣だね。

瀬川　いや、僕の爲めには、君が家にゐて呉れた方がよかつたのさ。

今村　どうして?(相手の全身を注意して)今日は暇なのかい。おれは今日は、ゆつくり君のお相手をしちやゐられないのだ。

瀬川　ハヽヽ。さつきは暇らしい口を利いてたくせに。……しかし、僕も今日は、いつものやうに長つたらしくお邪魔はしないよ。これで、なか〳〵用事が溜つてるんだからね。御存じの通り、僕はヤクザな荷物を背負つてるんだから、年の瀬を越すのは容易ぢやないのさ。

今村　ハヽヽヽ。お株がはじまつたね。年末になると、一度は僕に聞かされなきやならない臺詞なんだね。………君は不斷は羽をのばして氣樂に飛廻つてゐながら、一年に一度の愚痴はどうしてもこぼさなきや收まらないのかい。……君は顏は神經質の相をしてゐながら、腹の中は無神經なんだね。

瀬川　假りにさうだとすると、僕は君に正反對なんだね。しかし、無

神經な僕でも、この年末にはぼんやりしちやゐられないんだ。……
…なに大したことぢやないんだけれどね。

今村　おや、おれに御用談を仰せつけようと云ふんだね。（微笑を洩らして）君にいやな思ひをさせたかないが、今度だけは御免を蒙りたいよ。

瀨川　僕の方では今度だけと云ひたいんだが……（急に歎願の調子、弱々しい様子を現はして）僕はかういふ譯なんだよ。

今村（慌たゞしく遮つて）その準備は聞かないことにしよう。

瀨川　一時僕の信用を救つて呉れさへすればいゝのだ。決して君に迷惑を掛けやしないよ。

瀨川は、テーブルの一隅へ何氣なく目を向ける。今村はそれを氣にして横目でそちらを見る。

今村　その譯は今日は許して呉れ。（確かな態度を見せて）一錢一厘も他人に御用立する譯に行かないんだ。……どうかおれの決心を破らせないようにして呉れ。

瀨川　そりや強いてとは云へないがね。僕の要求は僅かなものなんだよ。

今村　その金額も聞かないことにしよう。

瀨川　君は今日はひどく御機嫌が惡いやうだが、どうかしたのかい。

今村　おれが機嫌が惡い？さう見えるのかい。……おれは昨夕ぐつすり眠つて、今朝はこの頃にないいゝ氣持で目を覺ましたのだよ。今朝おれの顏が不機嫌が暗かつたり萎れたりしてるやうぢや、おれの世も末になつた時だが、さうぢやあるまい。君の目がどうかしてる所爲だらうよ（顏を相手の方へ突出して、笑ひを洩らしながら）まあよく見て呉れ。おれの顏には、君がさつき云つた大凶の後光でも差してやしないか。

瀨川（わざと眞面目に相手の顏を覗込んで）顏は不斷の君の顏に違ひないがね。……どうも僕の親友の今村陽一に會つてるやうな氣がしないよ。……あの今村陽一なら僕の年末の歎願を聞いて呉れない譯がないから。

今村　それでいゝんだ。今日のおれは、昨日のおれぢやないんだからね。

瀨川　それはどういふ譯だ？まさかTA會社を辭職して、新奇に自分の職で何かやり出さうといふのぢやあるまいな。さういふ噂はまだ聞かなかつたやうだが。………昨日の君が今日の君でないとは變だね。

瀨川はさう云ひながら、テーブルの一隅が氣になるらしく、頻りにそちらへ目が注がれる。今村も相手の目に誘はれたやうに、知

らず〳〵そちらへ目を注ぐ。と、そこへ、老婢が扉を叩く。

今村　何だ？

老婢、扉を開けて顔を出す。

老婢　瀬見さんからお電話で御座います。

今村（舌打ちして）おれが家にゐると云つたのかい。何の御用だか、お前が代りに聞いてお見れ。

老婢　御用をお伺ひいたしましたら、旦那様に電話口まで出て頂きたいと仰有いました。

今村　煩いな。（不機嫌な顔して云つたが）ちよつと失敬（と、瀬川に向つて云つて、慌たゞしく、老婢を突飛ばすやうにして出て行く）

老婢、扉の側でまご〳〵してゐる。

瀬川（振返つて）此方の旦那様も、大分氣が短くなつたやうだね。やはり、奥さんがゐなきやいけないね。

老婢　左様で御座いますとも。先の奥さんは大變お優しかつたさうですが、此方へはお戻りにならないんで御座いませうね。

瀬川　あゝ。前の奥さんは、この頃は異つた旦那様を有つてるやうだから、此方へ戻つて來る氣遣ひはないよ。

老婢　左様で御座いますか。

老婢は、まだ何か話したさうにしたが、瀬川が顔を轉じて取合はないので、出て行く。

瀬川は、手を伸して、テーブルの上の煙草を取つて火を點けながら、テーブルの一隅に目を留める。そして、疑ひを起して、顔をそちらへ持つて行つて、新聞紙の隙間を覗き、それからそつと中を見て驚く。……扉の方を氣にしながら、顫える手で札束を取上げて、一枚だけそつと引出す。……そして、元の通りに新聞紙で蔽はんとしたが、また別の札束を取上げて、そのうちから一枚だけそつと引出す。……も一枚引出さうとしたが、それは思留つて、新聞紙で元の通りに蔽うて、元の座に腰を掛けて、二枚の百圓紙幣は袂の中に入れる。……そして、首垂れて煙草を吸ひながら、時々上目使ひをして、札束の方を見入つてゐる。

そこへ、今村は慌たゞしく入つて來て、またテーブルの方へ目を留めてから、椅子に腰をおろす。

瀬川　君は今日は、何處へも出ないんだね。

今村　ムン。今日は大事な調べ物をしなきやいけないんだ。暇なら君を饗應したいんだが、まあ明けてからにしよう。折角來て呉れたのに氣の毒だつたね（相手と話すのに氣乘りがしないらしく）妻が朝から出掛けてるので、老婢一人で忙しがつてゐて、お茶も差上げないで。……。

瀬川　なあに。僕もいろ〳〵用事を抱へてるんだから、これでお暇しよう。（椅子から離れて）君も過去つたことはいゝ加減で忘れて、新たに妻君を貰つたらどうだ？　僕なんかこそ、かういふ獨身生活を見ると羨ましくなるが、君は温い家庭を有つた方がいゝだらうね。

今村　ハヽヽヽ。そりや變な理窟だね。おれと君と、そんなに人間が違ふのかい。

瀬川　僕は貧乏だから。

ふと、歸りを急ぐやうに扉の外へ出て行く。

今村は、客を見送つて出たが、間もなく、戸見田はつ子（二十五歳。容貌風姿は派手であるが、服装は簡素である）を從へて入つて來る。

はつ子は、珍らしいところへ來たやうな感じを現はして、あたりを見廻す。

彼女は、數年前離別した今村の妻の從妹であるが、素質は甚だしく相反してゐた。兩親や親戚の勸告を斥け、二三の青年の求婚をも斥けて、今まで獨身主義を保つてゐて、學問で自活しようとしてゐた。英語を學び佛語を學び、宗教にあこがれ文學を嗜んでゐた。今村は、妻と別れた前から、彼女に心を注いでゐたので、この一二年來は、ことに彼女を念頭に置いてゐた。女といふ女のうちで、誰れにも勝つて彼女を自己の空想に描いてゐた。

今村　さあ、此處へお掛けなさい（と、今まで瀬川の腰掛けてゐた椅子を、もつと自分の方へ引寄せて）階下は寒かつたでせうね。

はつ子　えゝ。此處は温かですこと。（立つたまゝ部屋の中を見廻して）ここなら落着いて御勉強が出來ますわね。

今村　勉強？　學問をするのにいゝ部屋だと云ふんですか。はじめてここの部屋を見てさう云ふのは、あなたらしい言葉だね。しかし、わたしは、横文字でも漢語でも、文字を刷つた本なんかを讀む人間ぢやないんだ。……わたしの新しい趣味をお目に掛けようとも云へないもんだから、書齋へお招きしようと云つたのだが、御覽の通り、書物らしい書物は一冊もないんだよ。……まあ、その椅子へお掛けなさい。

はつ子　えゝ。（椅子に腰をおろして）ストーブのせいばかりぢやなくつて、何だか温かさうなお部屋ね。飯倉のお家は何だか陰氣で寒さうに思はれたぢやありませんか。

今村　それは、あなたの氣のせいだよ。……以前の家のことなんか思ひ出すのもいやだが、……でも、あなたは今日、よく約束を違へないでやつて來ましたね。

はつ子　あなたこそ、よくお家にゐらしつたわね。……先日ホテルでわたしにお約束なすつたことは、戯談ぢやないかと、後で疑つてゐましたのよ。あんなことを本気にして訪ねて來る馬鹿があるかと云はれさうに思つてました。

今村　あれを戯談にするやうぢや、あなたはまだ、わたしの本性をよく知らないんだね。

はつ子　無論、あなたの本性なんか、わたしに分りつこはありませんわ。わたしは、御存じの通りの世間知らずなんですもの。年齢だつて、明けて二十六にしきやならないぢやありませんか。あなたのやうな、歳を取つた男子の心なんか、とても分りませんわ。

今村　二十六女の年齢として幼稚な方なのか知らん。(相手に見惚れるやうに)もう爛熟期に入りかける頃ぢやないかな。

はつ子　女が二十六にもなつて若い気でゐるのを變に思つてゐらつしやるの？　……でも、他人はどうでも、わたしはこれから、面白い世が見られさうに思はれてなりませんの。

今村　それはいゝことです。

はつ子　その鑑賞者の一人があなただつてことを、わたしは面白いと思つてますのよ。

今村　面白いといふよりも皮肉な感じがすりやしないかな。

はつ子　先日うちから、いろ／＼な者を見せて頂きましたわね。十年も前に、佛蘭西生れの天主教のお爺さんに、片言の日本語で聞せて貰つた西洋の話よりも、もつとわたしには珍らしく思はれましたのよ。

今村　さうかねえ。わたしには何でもないことだつたが、はつ子さんには、そんなに珍らしかつたのかな。ホテルのダンスなんかゞよつぽど面白かつたのだな。

はつ子　何とかいふ茶屋で御馳走になつたことも夢のやうに思はれますわ。

今村　ホウ。そんなものかな。

はつ子　これからはもつと生々した日を送りたいと、わたし塚田さんにも話してゐますのよ。

今村　あなたがよく引立てる塚田さんとかに一度引合せて貰はふかね。そのうち晩餐を一しよに食べてもいゝ。

はつ子　でも、あの人はあなたにお引合せしない方がいゝかも知れませんの。

今村　どうして？　都會的鑑賞者と、わたしのやうな俗物とは話が合はないと云ふのかね。

はつ子　えゝ。あの人にあなたの感化を受けさせたかありませんわ。

今村　ハヽヽ。おや、あなたゞけは、わたしの惡い感化を受けてもいいつて云ふんだね。……まあ、そんな話は後廻しにして、先日の約束が冗談でなかつた證據を御覽に入れようか（ふと氣づいたやうに、扉の方を見て、獨言のやうに）こんなところを老婢にでも見られちやたまらない。

さう云つて立つて、扉の鍵をおろして來る。はつ子は、稍々不安を感じたらしい面持して扉の方を見る。それに目を留めた今村は、微笑を洩して、

今村　この部屋へ婦人のお客を迎へたのは、あなたがはじめてなんだ。

はつ子　今は奧さんはゐないし、この部屋はあなたのために、淸淨潔白な書齋でもあるし、寢室でもあるといふ譯なのね。（氣取つて云ふ）

今村　しかし、部屋の主人の心が、淸淨だか何だか分らないからね。（元の座に就いて）これがあなたにお約束した代物です（と云つて新聞紙を掃ひ退けて、机の一隅から、はつ子の側に近いところへ、すべての札束を移して、臆揚に）これで、丁度一萬圓ある譯だ。よく數へて御覽。

はつ子（異樣なものを見せつけられたやうに見詰めて）わたし、まだ百圓紙幣といふものを見たことありませんのよ。

今村（得意らしく）それは、まあわたしの一年間の全收入見たいなものだ。……あなたは勝手に自分の懷中へでも袂へでも入れて持つて行つていゝよ。しかし、女がそんなことをして金を持つて行く譯にはいくまいな。後で風呂敷でもお貸して上げよう。

はつ子　一萬圓と云ふと、この百圓紙幣がこゝに百枚も重なつてある譯ね。

今村　極つてるさ。念のために改めて御覽な。

はつ子　でも、これがあなたの全財産てことありませんわね。

今村　そんなことはどちらでもいゝから今からあなたの物にしなさい。決して玩具の紙幣ぢやないから、銀行へ持つて行つて預けたら、預金帳に一萬圓と書込んで呉れるよ。

はつ子　わたしこれを頂いて、あなたにどうお禮をしたらよろしいの？

今村　それよりも、あなたはその金をどうしようと云ふの？　何に使はうと思つてゐるの？　先日一萬圓々々と、あなたが熱心に一萬圓を望んでるから、その使ひ道を訊ねたら、それだけの金をちやんと自分の手に持つた時でなきや、使ひ道だけ話したつて詰らないと云つてゐたぢやないか。

はつ子　おや、わたしがこのお金を何に使ふか知りたいために、これ

だけ此處へ用意をして下すつたの？

今村　さう思つてゐてもよろしい。

はつ子　わたし、一萬圓で試驗をされますのね。……わたし、今思出してよ。二三年前にある婦人雜誌に、何人かの女に、一人當て百圓づゝやつて、勝手に買物をさせた記事が出てゐましたわね。

今村　それは面白い思ひつきだね。はつ子さんなら何を買ふ？

はつ子　さうね。わたし、百圓ばかりしたら、買物しないで、救世軍の社會鍋へでも入れつちまひますわ。

二人はこんな話を事もなげな調子で取りかはしながらも互ひに胸に一物を有つて、相手の心を探り合つてゐる。

はつ子（目を上げて相手を見据ゑて）あなたなら何をお買ひになつて？

今村　さうさ。わたしなら何を買ふだらうか。お正月が近くなつたが、わたしは何も買ひたいものはなささうだよ。

はつ子　嘘を仰有いよ。

彼女の言葉は鋭い。今村はギヨツとする。意外な感に打たれたのだ。

今村　嘘を仰有い？（と、相手の言葉を眞似て訊返す）

はつ子（冷笑を洩らして）あなたは、この一萬圓でわたしを買收しようと思つてゐらつしやるでせう。わたしの靈魂までもあなたの奴隸にしようと企んでるんぢやなくつて？

今村　ハヽヽ。何を云ふかと思つたら、平凡なことを云つてるんだね。

はつ子　あなたには、平凡なことでもそれが本心なんでせう。……あたし、あなたの本心が怖かないけど。

今村　靈魂なんていふ古くさい言葉の濫用は、あなたのお師匠さんの宣教師の感化として、いつもおとなしく承つてゐたが、あなたが欲しいと云つた一萬圓を、耳を揃へて提供したからと云つて、直ぐにわたしがあなたを買收する下心を有つてると思ふのは、あんまり世俗的だね。はつ子さんにも似合はない世俗的な考へだね。（悠然として云ふ）

はつ子　ぢや、わたしが先日一萬圓欲いと云つたから、今日一萬圓わたしに下すつたのね。たゞそれだけのことなんですね。

今村（相手の言葉は聞流して、獨言のやうに言葉を續けて）わたしが獨身の淋しさに耐へられないで、女が欲しくなつたのなら、一萬圓出しや、自分の好みにかなつた女を、幾らでも買收されるんだよ。

はつ子（相手に向つて云ふよりも、自分で自分に云つてるやうに）わたし、あなたが大金を無雜作にお出しになつた氣持が分らない。

……この部屋までも夢に見た家のやうに見えてならない。

今村　この金があなたにはそんな不思議に見えるのかな。銀行の出納掛は毎日不思議なものばかりいじくつてる譯だ。

はつ子　隨分不思議ですのよ。(札束と今村とを見比べて) あなたの奥さんだつたさよ子嬢さんが、あなたは不斷儉約がお好きで、金錢のことについちや、隨分儉約だと云つてゐたんですもの。

今村　あいつ、わたしをケチン坊だと、親類中へ吹聽してゐたんだな。

はつ子　ケチン坊だなんて、そんな汚い口は利きやしなかつたんですけど、……でも、一萬圓といふ大金を、あなたがさよ子嬢さんの前へ投出して、勝手に使へと仰有るやうだつたら、あの人もこちらのお家を出て行きやしなかつたでせう。

今村　おや、あいつは好きなやうに金が使へないのが不平で、わたしの家を飛出したと、あなたは思つてるんだね。それをわれわれの夫婦別れの理由だと、あなた達は思つてるんだね。(ふと感情を昂奮させていまいましさうに云ふ)

はつ子　そればかりぢやないでせうけれど。

今村　重な原因だと云ふんだね……(いやな考へを振拂つて) まあ、今日はあいつに關係した話はしないことにしよう。

はつ子　でも、あの人のことを心に思つてゐらつしやればこそ、あなたはわたしに親切にして下さるんぢやないでせうか。

今村　(心を動かして) これは妙なことを聞くものだ。……ぢや、他所へ再嫁してる女に、わたしが未練を殘してると云ふんだね。隨分見くびられてる譯だね。

はつ子　離別した奥さんを心に思つてゐらつしやると云つたつて、よくお思ひになつてるといふ意味にお取りにならなくつてもよろしいのよ。……お金のために、六十にも近いお爺さんの所へ行つたあの人を、あなただつて、よくお思ひになつちやゐないでせうから。

今村　はつ子さんはなかなか穿つたことを云ふ。世間知らずぢやないね。……しかし、まあそんなことはどちらでもいゝさ。

はつ子　(獨言のやうに) あの人が憎さに、あなたはわたしに一萬圓といふお金を下すつたのか知ら。

今村　さういろいろに考へて見なくつてもいゝだらうに。

はつ子　あの人が憎さにこれを下すつたのなら、わたし快く頂戴しますわ。

今村　(驚いて) どうしてゞす？

はつ子　わたしは、このお金でさよ子嬢さんに復讐しますわ。あの人は、あなたのためにもわたしのためにも共同の敵なんですもの。

今村　共同の敵とは穩だね。兎に角わたしはあいつに復讐しようなんて思つてやしないよ。

はつ子　ぢや、頂けませんわね。理由のないお金なんだから。

今村　あなたが欲しいと云ふ。わたしが上げようと云ふ。事は簡單で、それ以上、理由もへちまも入らないぢやないか。

はつ子　でも……

彼女は、物欲しさうな目で札束を見るやうになる。

その時、扉のノックが聞える。

今村は、はつ子に小聲（見物には聞えないほどの聲）で注意して、新聞紙で札束を蔽うてから、扉へ近づく。不機嫌な顏して扉を開けて、そこから顏を出した老婢に向つて、

今村　何だ？　またお客を取次いだのか（と叱りつける）

老婢　郷里から弟さんがいらつしやいました。旦那樣にお伺ひするまで玄關にお待たせしときました。

今村　弟が來た？　階下の座敷へ通して置け。

老婢、返事もしないで引込む。

はつ子　弟さんがいらしつたのなら、わたしはお暇しなきやなりませんわね。

今村　たに。かまやしないよ。弟は二三時間他所へやつとくことにしよう。あなたは此處にぢつとしてゐらつしやい。

今村、扉の外へ出て行く。

はつ子、獨りになつたことを意識してから、札束の一つを手に取つて、夢見るやうに見惚れる。それから、一萬圓全部を擴げて、その重味を檢べて、夢見るやうに見惚れる。自から微笑が目に泛ぶ。やがて、反省したやうに、札束を下へ置いて立上つて、扉の外へ出る。

間もなく今村が入つて來る。はつ子のゐないのを疑つて、呼鈴を押す。

老婢、入つて來る。

今村　此處にゐたお客樣はどうした？。

老婢　女の方で御座いますか。あの方は只今お歸りになつたやうで御座いました。

今村　歸つた？（不機嫌な顏して）ぢや、それでいゝ。……お前はあちらへ行つといで。

老婢、迂散らしい目で、主人の顏と、それから札束とを見て出て行く。

今村、椅子に腰をおろして考へ込む。

（幕）

(一)ノ二

それから一時間くらゐ後の事。
今村家の女中部屋。
老婢、自分の持物を入れた行李の側で着物を畳まうとしてゐる。

そこへ、書生大島新吉(二十餘歳)が入つて來る。

老婢　ア、大島さん。丁度いゝところへ歸つてお呉れだつた。

書生　老婢さんは、お暇になつて、これから何處かへお出掛けになるのかね。

老婢　娘のところから、大急ぎでちよつと來て呉れつて電話が掛つて來たのです。年末だから何か相談があるんだらうよ。

書生　娘さんは電話なんか掛けないで、自分で此方へ遊びに來たらいゝだらうにね。

老婢　年末は忙しくつて手が離せないんでせうよ。

書生　市へ出ると、世間は忙しさうだが、この家は今年はお正月の仕度も簡單で張合ひがないね。

老婢　さういへばね、大島さん。あなたが出て行らつしやつたあと、間もなく、美しい若い女のお客様がいらつしやつたんだよ。

——(圖畫一)——

老婢は暇ありげにさうしながら、古い着物を脱いで新しいのに着替へようとしてゐるうち、うつかりして、帶の間から百圓札を一枚疊に落す。書生は目敏くそれを目をつけて驚いたが、老婢は氣づかないらしく、熱心に話をつゞける。

老婢　綺麗なお嬢様だつたけれど、何だか用事がありさうなの。あなたに見せたかつたよ。……旦那様のお居間で鍵をおろしてしまつて、長い間二人で、ストーブの前に差向ひで話込んでゐたのぢやないかね。あなた何者だと思ひなすつて?

書生　さあ。僕は見ないから分らないね。(顏には現はさないで、百圓札の方をそつと見下す)

老婢　外のお客様は玄關から追返して、二人はいつまでも、笑つたり泣いたりしていゝ氣になつてるんだからいやになつちまふよ。

書生　おや、そんな女が來るから、僕を邪魔にして、どうでもいゝやうな使に出したんだね。

老婢　さうですとも。わたしがお茶を持つて行つてさへ、旦那様は嫌な目をして、早く彼方へ行けつて追出さうとするんだもの。

老婢はまだ百圓札に氣づかないで、話に力を入れるので、書生はもどかしがつて、

書生　老婢さん、足下に大變なものが落ちてるぢやないか。

老婢　エッ（と云つて、足下を見ると、顔色を變へて、慌てゝ拾つて袂へ入れて、急いで着物を着替える）

書生　僕がまだお目に掛つたことのないやうな物ぢやないか（冷かすやうに云ふ）

老婢（着物を着替えてゐるうちに、心を鎮めて、空呆けた顔して）これはね。わたしが、小石川のお屋敷に御奉公してゐた時分に、お給金の殘りを何年も溜めて、やつとこれだけになつたのさ。娘の相談といふのも、年末のことで、大概分つてゐるから、大事な虎の子を持つて行かうと思つてるんですよ。

書生　さうですか。……しかし、不景氣な年末に羨ましいことだな。

書生がさう云つて、部屋を出て行かうとすると、老婢は引留める。

老婢　まあお待ちなさいよ。直ぐに旦那様のお部屋へいらつしやるの？

書生　あゝ。使の返事を云はなきやならんから。

老婢　今、旦那様のお部屋へ、行きなさらない方がいゝんだよ。

書生　だつて、その奇麗なお客様はもうゐないんだらう。

老婢　お客様はもう行つちやんだけれど、旦那様は、あとで寢臺でお眠つてゐらつしやるんだから。

書生　なに、戸口で一言御返事をしといたらいゝんだよ。

書生がさう云つて行きかけると、老婢は、ふと手を掴へて力を入れて引留める。

書生（不思議さうに）僕をどうするんだね。

老婢　あなたは、わたしが持つてゐたつた一枚のお金を、疑つてゐなさるんだね。旦那様に云付けようと思つてなさるんだらう。

書生　僕はそんなことを思つてやしないよ。

老婢　あなたはわたしが泥棒したやうに思つてるに違ひない。

書生　驚いたな。僕はそんなことは思つてもゐないのに。……その新しい、今銀行から出して來たばかりのやうな百圓紙幣はお婆さんが小石川のお屋敷に奉公してゐた時のお給金なんだらう（揶揄ふやうに云つて、出て行きかける）

老婢、慌てゝ留めようとして、書生の羽織を掴む。羽織の紐が破れる。

書生（怒つて）オイ止さないか。僕の大切な一張羅を破つてどうするんだ。僕は何處へも出られなくなるぢやないか。……ひどい婆あだ。

老婢（涙を浮べて、しをくして）どうも済みません（跪いて詫びて）わたくしが惡かつたんです……どうぞ旦那様には内分になす

つてお受んなさいまし（百圓札を袂から出して）これはあなたにお返しいたしますから。

書生　僕に返すつたつて、それは僕の物ぢやないよ。僕は百圓札なんか持つてゐたことはないんだよ。

老婢　あなたが旦那様に秘密で、元の所へお戻しなすつてお受んなさいまし。

書生　元の所つて、どこにあつたのだ？。

老婢　旦那のテーブルの上に、かういふお札がどつさり重なつてゐるんです。わたしは旦那様が便所にお下りになつた間に、そのうちの一枚だけそつと拔いて取つたので御座います。娘にお正月着が買つてやれると思ひまして。

書生　ホウ、妙だな。そんなに百圓札を積んでどうするんだらう？。

老婢　さつきの女のお客様におやりになる様子で御座いました。

書生（憤慨したらしく）そんな大金を女にやるんだ？　いま／＼しいな。……僕には年末の小使錢を、この百圓札の十分の一も呉れもしないで、（老婢の手から紙幣を取つて見詰める）

そこへ、呼鈴が鳴る。

書生　二階で呼んでるよ。老婢さん行つてお出で。何か云はれても知らん顔してればいゝよ。僕は決して大將に告口はしないよ。

老婢　どうも有難う御座います。

老婢は、書生に對して、言語も動作も次第に卑屈になる。

書生（毅然として）僕は此處で待つてるから、安心して行つてお出でよ。大將があなたを疑つたら、僕が辯護をして上げよう。

老婢　何分よろしくお頼み申します。

呼鈴また鳴る。老婢おど／＼しながら出て行く。

書生、百圓札を見詰めてから袂へ入れる。

だしぬけに襖が開く。書生ビックリする。

老婢の娘、おきぬ（二十歳未滿の可愛らしい女）入つて來る。

娘　アラ（書生を見て極りを惡がる）

書生（微笑して）お母さんはゐるよ。

娘（叮嚀にお辭儀をして）さつきお勝手の方で二三度聲を掛けましたのですけれど。

書生　さうですか。……お母さんはこれからあなたの所へ行くと云つて、着物を着替へたところなんだよ。

娘　母はあたしに急用があると申しまして？

書生　おきぬちやんの所から電話が掛つたと云つてたよ。

娘　アラ。あたし、電話なぞ掛けやしませんわ。

書生（微笑して）成程、さうだらうな。

娘　どうした間違ひなんでせうか。

書生　まあいゝよ。……お母さんはね、あなたにお正月の着物を買つて上げると云つてたよ。

娘　さう？（書生の顔を見て）あなたがいゝ加減なこと云つてゐらつしやるのね。

書生　嘘だか本當だか、今にお母さんが二階から下りて來たら分るよ。おきぬちやんには着物が出來ても、僕もこの通りだ（ブラ〱に綻びた羽織の袖を見せる）

娘　アラ、どうなすつたの？

書生　老人に縋りつかれて破られたのぢや有難くないね。こんなになつてちや戸外へ出られやしない。きぬちやん縫つて呉れないかね。

娘　えゝ。縫つて上げますわ。針箱は何處にあるか知ら。

娘が押入を開けて、針箱を捜してゐるところへ、老婢入つて來る。あたり前の顔付をしてゐる。

老婢　おきぬ、いつ來たの？

書生　さつきから勝手口に來てゐて立聞きをしてたんだつて。

老婢（眉を顰めて）來る時には電話を掛けろと云つといたのに。

書生　ハヽヽ。まあいゝさ。……大將は何かいやなこと云つたのかね。

老婢　いゝえ、何も變つたことは仰有いません。

書生　それはよかつた。

書生　お午御飯は二階のお部屋で召上るさうです。

書生　その用事だつたのか。おや、よかつたね。……僕は今羽織の綻びを、きぬちやんに縫つて貰ふことにしたのだ。

老婢、間が惡さうにする。書生、羽織を脱いで、おきぬに渡す。

書生　おや、お頼みします。

娘　このお羽織いゝ柄ね。どうしてこんなに綻びたんでせう。アラ、ここのとこは破れてますわ。

書生　どうにか誤魔化しとけばいゝんだよ。（老婢に向つて）あなたは、きぬちやんにお正月着を買つて上げると云つてゐたね。これから、一しよに三越へでも何處へでも行つて、一つ奮發していゝものを買つてお上げな。大將が許して呉れたら、僕もお伴をしてもいゝね。

老婢（溜息を吐くやうにして）お金なんかありもしないのに。

書生　小石川のお屋敷のお給金の貯蓄を出したらいゝぢやないか（磊落な調子で云つて、袂から百圓札を二人の前へ投げ出す）

娘（吃驚して）アラ。大きなお札（と云つて、取出して見る）

背生　構ふことはない。使つちまふさ（と云つて、老婢に目くばせする）

（幕）

（三）ノ一

その日の午後。

下宿屋の一室。塚田銳吉の部屋。

塚田は、私立學校の教師を勤めて生活して、哲學などの研究に耽つてゐる三十未滿の、溫厚な、現代離れのした男子である。

この部屋には、今村の部屋とは違つて、數多の洋書が置かれてゐる。

彼れと戸見田はつ子とが、机の側の火鉢に向合つて坐つて、しめやかな話に耽つてゐるところ。

はつ子　あなたはどうお思ひになつて？

塚田　僕にはそんな心理狀態は分りませんね。

はつ子　わたしも、今村さんの云つたことは、無論戲談だと思つて、そのつもりで遊びに行つたのですけれど、先方では、商賣の取引でもするやうに、ちやんと、一萬圓を內端親撒で揃へて待つてるんですもの。わたし吃驚してゐる。……それが離れかねないやうなのよ。

塚田　それで、先方ぢやあなたに獻上しようと云ふのをあなたは辭退して、一萬圓を棄てゝ來たんですね。

はつ子　はつきり斷つて來た譯ぢやなかつたのですけど。……

塚田　でも、つまりは大金を見せて貰つただけで、それをあなたの懷中へ突込んで、そこに持つてる譯ぢやないんでせう。

はつ子　でも、まだ一萬圓を手に入れる可能性がありさうですのよ。わたし、話の途中で座を外して此方へお伺ひしたのだから。……わたし、此方へまゐる間に、電車の中でも步いてる間にでも、そのことばかり考へてゐました。無條件でやらうといふ者を斷はるには及ばないと、思はれてたりませんの。

塚田　今日あなたの入つて來た時の樣子が、どうも變だつた。何かに魅せられてゐたやうでしたよ。一萬圓の力なんですね。……そんなに欲しいのなら、遠慮しないで貰つて來ちやどうです？

はつ子　あなたの批判力で判斷して、それがいゝと仰有れば、わたし、これから、大急ぎで行つて貰つて來ますわ。

塚田　僕は貰つていゝとも惡いとも云やしませんよ。

はつ子　だつて、わたしはあなたの優れた判斷力によつて判斷して貰はうと思つてますの。

塚田　僕の眼にかけちや、僕の判斷力なんか役に立ちさうもない

な。

はつ子　だつて、わたしがそのお金を欲しがるのは、自分のためばかりぢやないんですもの。……あなたゞつて、いつまでもこんな日當りの悪い陰氣な下宿屋なんかにゐらつしやらないで、小ざつぱりした氣持のいゝ家をお持ちになつたら、御勉強がよく出來ていゝに違ひないと思はれますわ。今村さんの新築の家の書齋は、そりや居心地がよささうですのよ。あなたもあんな書齋をお建てになるといゝんですわね。わたしがお伴しますから、あなたも一度あの書齋を見にゐらつしやいね。

塚田　いや、僕はこの部屋で結構です。他人の書齋を羨むのは詰らないことぢやありませんか。

はつ子　でも、書物を一冊讀みもしない人が、あんないゝ書齋を有つてゐて、あなたのやうな方が、こんな物置小屋見たいな書齋にゐらつしやるのは、不當なやうに思はれますわ。

塚田　一萬圓の書齋か。夢見たいな話だ。……それに、貰つた金をみんな僕の書齋の建築費にしてしまつたら、あなたは御自分のために使ふ金がなくなるぢやありませんか。

はつ子　さうね。ぢや、あなたの書齋の建築費は五千圓に負けて頂いて、殘りの五千圓で自分の身の廻りを飾ることにしませうよ。

塚田　それは、あなたからはじめて承る言葉ですね（嚴然たる態度で）心靈の修養ばかり考へてゐたあなたが、自分の肉體を飾ることを考へだしたのは不思議に思はれますね。

はつ子　でも、神樣から授つた身體は、美しく飾るのが、人間としての正しい道ぢやないんでせうか。わたし、この頃になつてさう思はれますのよ。

塚田（一層相手の身體に注意を向けて）それはさうかも知れませんね。あなたが當時の流行の衣服を着たところを見せて呉れるんですか。さよ子さんのやうな服裝をしたところを。

はつ子（ふと氣色ばんで）さよ子姉さんは、この頃もよくあなたを訪ねて來るんでせう。

塚田　滅多に來ませんよ。來たつて、あの人と僕とだけぢや話のしようがないんです。

はつ子　どうだか分らないわ。

塚田　あんな世間的な樂しか知らない人と、僕と話が合ふ譯はないぢやありませんか。

はつ子　わたし、先日まではさう思つてましたけれど、この頃はそんなことは信じられなくなりましたわ。あなたも、奇麗な衣服に魅せられる方なのよ。

塚田　僕でもさうか知ら（考へる眞似をする）

はつ子　考へなくつたつてさうなんです。……わたし、さよ子姉さんたんぞに馬鹿にされたかありませんわ。あの人、二十をよつぽど過ぎて、身體はお婆さんになりかゝつてるくせに、身装がいゝためばかりで、羽をのばして威張つてるんですもの。

塚田　あんな物質的な女と競爭する氣があるんですか。今日のあなたはどうも不思議でならない。

はつ子（氣色ばんで）あなたはさよ子姉さんの外形に魅せられてらつしやるでせうけれど、わたしの肉體は決してあの人に劣つてやしないんです。たゞ美しい服装で飾つてるのと飾つてゐないとの相違があるだけなのよ。

塚田　僕はあの人に魅されてやしませんよ。あなたの邪推だ。

はつ子　邪推なら邪推でもよ御座んすわ。……わたし、虚榮心のつよい女ぢやないんですけど、若い今のうちに着たいものを着て、自分のしたいことをしたいと思つてますの。それが神樣に對してもいけないことゝは思はれませんわ。

塚田（笑つて）理窟は兎に角として、第一その一萬圓が無條件で手に入るんですか。それが根本の問題ぢやありませんよ。

はつ子（獨言のやうに）わたし、あの時遠慮なしに貰つて來ればよかつた。

塚田（獨言のやうに）目が醒めてよく見たら、百圓札が枯れつ葉だつたかも知れない。

はつ子　わたしは自惚れて云ふのぢやないんですけれど、一萬圓くらゐなお金は、誰れかから授つてもいゝと思はれますのよ。あなたゞつてさうよ。……なぜさうお思ひにならない？

塚田　ハヽヽ。人間はそのくらゐな自信がなきや駄目ですね。……だけど、あなたには、それだけの價値があるんでせうけれど、僕はそんな人間ぢやなさゝうですよ。あなたに時々訪問して頂けるのを、分に過ぎた幸福だと思つてるんです。

はつ子　謙遜も度を過ぎると卑屈に見えてよ。

塚田（調子に乘つて）ぢや、明日の日、洋行費の一萬圓くらゐ、誰れかが出して呉れると當てにして待つてゐませうか。今日は書齋の新築費が五千圓。明日は洋行費が一萬圓。さうなると、僕も運が向いて來た譯だ。ハヽヽヽ。

二人は、互ひに幸福を描いてゐるやうな風で顏を見合はす。

はつ子（ふと思立つたやうに）こんなこと云つてる暇に、わたし電話でも掛けときますわ（立上る）

塚田　何處へ電話を掛けるんです？

はつ子　今村さんへ（アタフタと出て行く）

塚田　一萬圓を引込められないやうにか。ハヽヽヽ。

塚田が机の上の洋書を讀みかけてゐると、間もなく、襖の外から、「御免なさい。入つてもよくつて」といふ聲がして、渡邊さよ子が、裾模様の派手過ぎるやうな衣服を着け、指環でも頭のものでも華美な光を放つた、女優見たいな様子をして入つて來る。手に風呂敷包を持つてゐる。

彼女は、ある不行跡のために、今村の家を出た後、ある老いたる實業家の後妻として再婚して、以前とちがつた奢侈遊惰な生活をしてゐる。塚田とは、はつ子と同様に、少年時代からの知合ひである。

さよ子　はつ子さんが來てるんでせう。

會釋して火鉢の側に坐る。塚田は快い顔をしないで、少し後しさりする。

さよ子　今、電話口に立つてる人の後姿がはつ子さんのやうでしたよ。來てんのね。

塚田　えゝ、來てゐます

さよ子　よく來るんでせう

塚田　さうでもありません。

さよ子　あの人はわたしを輕蔑して、わたしの家へはちつとも寄付かないんですよ。女は學問があると、あんなにお高く留りたがるんですかね。

塚田　さうでもないでせう。

さよ子　わたしは以前からはつ子さんが好きだつたし、今だつて悪意をもつてやしないのに、どうしたんでせう。わたしが時々此方へお伺ひするのが、あの人の氣に障るのか知ら。

塚田（極りの悪さうに）そんなことはないでせう。

さよ子　あなたとあの人とはよくお話が合ふんでせうね。學者同士だから。

塚田　そんなことはありません。

そこへ、はつ子が歸つて來る。襖を開けてさよ子の顔を見ると、思はず足を留める。さよ子、ニツコリして會釋する。はつ子、打解けぬ顔して、二人から少し離れて座に就く。

さよ子　もつと此方へお寄んなさいなね。

はつ子　えゝ。

さよ子　暫くだつたわね。

はつ子　えゝ

さよ子　わたし、お正月の買物に三越と松屋とへ行つて來たのよ。あ

なたがお暇だつたのなら、お誘ひすりやよかつた。わたし、買物に
でも、連れのあつた方が面白いのよ。

はつ子　わたし、今朝は大變忙しかつたのです。

さよ子　學校はもうお休みなんでせう。（風呂敷包を開けて反物を出して）わたし、この柄が塚田さんによく似合ふと思つたもんだから、氣紛れに買つて來たのよ。あなたどう思つて？

はつ子、ふと緊張した態度で反物を手に取つて見る。

はつ子　こんなニヤケた柄が塚田さんに似合ふかしら。

さよ子　着物のことなんかあなたには分らないのね。大島なんかよりは、かういつたお召の方が、塚田さんにはよく似合ふのよ。寸法が分つてれば呉服屋に頼んで直ぐに仕立てさせるのだつたけれど。

塚田（當惑したやうに）僕はかういふいゝ衣服を着る柄ぢやないんですから、誰れか外の人にお上げになつちやどうです。

さよ子　でも、折角わたしが見立てて買つて來たのぢやありませんか。恥をかゝせるもんぢやありませんよ。

塚田　困りますねえ。

さよ子　何が困るんです？（反物を擴げて、塚田の膝に掛けて）はつ子さん、見て頂戴。よく似合ふぢやないの？

はつ子　わたしには着物のことなんか分りませんわ。

さよ子　いや味なんか云はないでさ。わたしが買つて來たこの反物を、あなたが年内に仕立てゝ、塚田さんのお正月着にしたらいゝぢやないの。

塚田　まあ、今度は辭退しませう。

彼れは、はつ子の思惑をも憚つて、いかにも當惑したやうな態度を示す。

さよ子　ぶこちな方ね。……わたしが、今日偶然見付けて買つて來た反物が、來年あなたの運の開けるお祝ひにはたらないでせうか。……塚田さんとはつ子さんとお二人の間には、來年はいゝことがありさうに思はれるのに。

塚田とはつ子は、極りの悪さうな表情をする。

さよ子　他人の好意のある贈り物は辭退するもんぢやありませんよ。百萬圓の財産でも、高が一反ばかりの反物でも、天の賜物だと思つて、快くお受けなさいたね。

はつ子は、さよ子の言葉にも、思はず感動する。しかし、二人は何とも返事をしない。

さよ子（朗らかな笑ひを浮べて）わたしを前科者あつかひしなくつてもいゝぢやないの。わたしは詰らない人間なんでせうけれど、塚田さんにもはつ子さんにも好意は有つてるんですから、お二人とも、

わたしを毛蟲のやうに見下げたいやうにして下さいね。好いてる人に蔑まれちや、わたしだつて淋しくなるわよ。

塚山（生眞面目に）あなたを蔑むなんてことはありませんよ。

さよ子　それでは、わたしの贈り物は快くお受けなさいね。何なら、はつ子さんが仕立てゝお上げになるといゝわ（はつ子の方を見て）さう云へばね、わたし今日松屋で珍らしい人に會つて感じたことがあるのよ。

はつ子　珍らしい人？（氣のない受答へをする）

さよ子　瀬川さんのことなの。あなたも知つてるでせう。あの人、奥さんを連れて買物に行つてゐたのよ。

はつ子　瀬川さんて方は、今村の兄さんのお友達なんでせう。あなたはその方と話をなすつたの？

さよ子　いゝえ。わたしの方ぢやかまやしないけれど、先方では遠慮したのか、顔を外らしてゐたの。先方でさうなら、此方から頭を下げて行つて、御機嫌を伺ふには及ばないから、わたしも知らん顔してゐたのだけれどね。年末に御夫婦連れで何を買ひに來たのかと氣になつたから、時々そつと見てると、わたし驚いたのさ。あの貧乏自慢の瀬川さんが、新しい百圓札を出して買物の支拂ひをしてるぢやないの。今銀行から引出して來たばかりのやうな、手の切れさうな百圓札を振りまはしてゐたから、わたし驚いたのさ。

はつ子　さう？（瀬川の話には何の感じも起さないらしく、冷淡に受答へをする）

さよ子　だつて、以前は年末になると、僅かなお金の無心に來てゐた人なんですもの。……この頃はいゝ仕事に有りついてるのか知ら。

はつ子　でも、この頃のあなたが、百圓ばかりのお金に驚くつてことありませんわね。

さよ子　百圓ばかりなんて、はつ子さんも氣が大きくなつたわね。

はつ子（ふと興に乘つたやうに）えゝ、わたし、百圓紙幣を一枚や二枚見たつて驚かなくなつてよ。

さよ子（意外に感じたらしく）えらいことね。……それから、わたしは三越でも、思ひがけない人に會つたのよ。何だか、今日は不思議な日のやうに思はれてならないの。

はつ子　さう？（それを聞きたがらうとはしたい）

さよ子　元、今村の玄關にゐた大島といふ書生のことなのさ。今もまだゐるのかも知れないけれど。……その男が、五十くらゐな女と、可愛らしい二十くらゐな娘とを連れて買物に行つてゐたのよ。わたし、見つからないやうに氣をつけてそつと見てゐると、今度も驚かされたのさ。だつて、瀬川さんの時と同じやうに、新しい百圓

札を出して支拂ひをしてゐるんですもの。……今年の暮は世間一般にそんなに景氣がいゝのか知ら。わたし、不思議に思はれてならないの。

はつ子　でも、百圓ばかりのお金に驚くことはないでせう。

さよ子　今日、はつ子さんは變ね（不思議さうに相手を見詰める）

はつ子　わたし、お金なんか、欲しいと思つたら、何處からか授かるやうに思はれてよ。瀬川さんだつて何處からか授かつたに違ひないわね。

さよ子　今までのはつ子さんとは思へないやうなこと云ふぢやないの。……瀬川さんも、瀬川さんの奧さんも、銘仙の大島も、身裝は、昔とちつとも變つてやしなかつたのよ。

はつ子　身裝はお金さへ出せば、今直ぐにでも變へられますわよ。塚田さんだつて、この反物を仕立てゝ着たら、直ぐに、何處かのお金持の若旦那見たいになるのぢやありませんか。

さつきから不快な顏してゐた塚田は、この時、「ちよつと失禮します」と云つて座を立つて、襖の外へ出る。

さよ子　何處へいらつしやるの？（と聲を掛けてから、はつ子に向つて）塚田さんは、わたしが出拔けに訪ねて來たことを怒つてるんぢやないか知ら。あなたと仲よくお話してゐたところへ、お邪魔をして。

はつ子　そんなことがあるものですか。

さよ子　あなたは、今日はお金々々と、お金のことばかり云つてるやうね。お金なんか汚れたものには目も呉れないのが、あなたの價値ぢやなかつたの？

はつ子　どちらにしたつて、あなたの前にはわたしは價値のある女ぢやありませんわ。

さよ子　あんないやみを云つて。……わたしね、あなたに會つたら訊かう〳〵と思つてゐたことがあるのよ。あなたはこの頃、今村によく會つてるんだつてね。

はつ子　えゝ、今村の兄さんには時々會つてますわ。わたしを誘つて帝國ホテルの洋食を御馳走して下すつたり、芝居や活動を見せて下すつたりするのです。

さよ子　いやねえ。あなた何だつて今村に隨いてそんな所へ行くんです？（さも侮蔑したやうに云ふ）

はつ子　（反抗的に）それがなぜいけないの？　わたしが洋食を饗ばれたり芝居を見せて貰つたりするのがなぜいけないの？　今村の兄さんは、この頃はお金がどつさり入るやうになつたのか、物惜みをしない、氣持がいゝのよ。わたしがお金を頂戴と云ふと、いくらでも出

して見れさうなのよ。

さよ子（いきり立つて）何をお云ひだ？　あの人が一時のお金だつて何で無意味に出すものかね。はつちやんの考へ無しにも呆れつちまふよ。

はつ子（得意らしく）神様が今村さんを使つて、わたしにお金を授けて下さるんぢやないかと思はれてよ。

さよ子　フン（と嘲笑つて）難かしいにも程があるよ。去年は西洋のお宗旨に凝つて尼にならうと云つてた人が、今村の誘惑に乗つたりして。

はつ子　あなたこそ、氣がどうかしてるんぢやないの？御自分の方から愛想を盡かした前の御亭主のことを何だのかだのと云つたりして。

さよ子　生意氣お云ひでないよ。當り前の結婚さへしないのを自慢にしてた人が、今村なんかにお金で買はれる氣になつたのかい。……呆れたものだ。

はつ子　それは誰れのこと？……反物一反で塚田さんの歡心を買はうとする人の心が、わたしには可笑くつてならない（ヒステリックに笑ふ）

さよ子、怒るよりも呆れて相手を見捨てる。

そこへ、下宿屋の女中が顔を出す。

女中　あの、塚田さんは、御散歩にお出掛けになりました。夕方でなければお歸りにならないさうで御座います。

さよ子　塚田さんは散歩にいらしつたんですつて？

女中　はあ。お客様にさう申上げるやうにと仰有いました。

女中は不思議さうに部屋の様子を見て引込む。

さよ子（獨言のやうに）塚田さんは變人ねえ。わたし達に訪問されて悦しいとも思はないのか知ら。こんな穢しい下宿屋へ遊びに來て上げたのに有難いとも思はないのか知ら。

はつ子　あなたが此方へ來る時には、特別におめかしして、塚田さんを誘かさうたつて駄目よ。塚田さんは着物やお化粧に誘かされるやうな俗物とは人がちがふんだから。

はつ子の物狂はしい擧動に、さよ子は恐怖を感じて後退りする。やがて、努めて穏やかな態度を作つて、

さよ子　御主人のゐない部屋にゐたつて仕様がないから歸りませうよ。あなたは一人で此處に待つてるんでせう。

はつ子　わたし、これから大切な用事があるんだから愚圖々々しちやゐられないの。

さよ子（なだめるやうに）おや、一しよに歸りませうね。わたし、自

俥を待たせてあるのよ。

はつ子　でも、わたしは外へ出なきやならないの。

さよ子　何処へでも、あなたの行きたい所へ、わたしの自動車で送届けてあげますよ。

さよ子、反物は机の上に置いて立上る。しかし、はつ子は容易に立上らうとしない。

さよ子、相手を促して、手を執つて立上らせようとする。はつ子、その手を振放つて、睨見るやうな目付で、

はつ子　わたし、これから今村さんの事務所へ行かなきやならないんだから、あなたに自動車で送つて頂く訳には行かないわね。

さよ子　今村の家へこれから行くんだつて？……送届けて上げるわよ。何のために今村の家へ行くのか知らないけれども、送届けて上げますとも。……どんな家を新築してるのか、わたし、外から見るだけ見てもいゝんだから。

はつ子　あなたが愛想を盡した今村の兄さんは、一しよう懸命、わたしの歡心を買はうとしてゐるのよ。

さよ子（ふと忌々しくなつて）それで、あなたがいゝ気になつて逆上せ上つたのね。

はつ子　御両親はわたしに一週間といふお餞を呉れるんですつて。百円札で百枚、事務所のテーブルの上に積上げて、わたしの來るのを待つてゐるのよ。

さよ子　あなた、目を開けて夢を見てるの？

はつ子　嘘と思ふなら、これからわたしと一しよに行つて、事務所の窓の外から覗いて御覧なさい。

さよ子　あの人、こんな世間知らずを手懐けてわたしに復讐しようと思つてるんだな。

はつ子　わたし、早く出掛けなければ。

つと立つて行きかける。その様子が變なので、さよ子抱き留める。

さよ子　まあお待ちなさい。

（幕）

（三）ノ二

（一）と同じ今村の部屋。

テーブルの一隅には、前の如く札束が新聞紙に蔽はれたまゝ置かれてゐる。

今村隆一と、弟敏次（三十餘歳、田舎者らしい服装をしてゐる）とが、札束のテーブルを前に椅子に腰を掛けてゐる。

謙次　どうしてもいけないのか。

今村　氣の毒だが駄目だよ。おれの會社の内情は、お前には本當のことを打明けてもいゝが、見かけほどよくないのだ。……それで、お前の要求通りに資金を用立てる餘裕は、僕にはないのだから、今度は勘辨して呉れ。

謙次（不平らしく）僕の方ぢや、こんな大事な場合に、三千や五千の金が融通して貰えん筈はないと思つてた。

今村　おれは、お前なんか田舍の人間が思つてるほど、經濟が豐かぢやないんだよ。

謙次　さうかなあ、何に使ふんだね。獨身生活でそんなに費用が嵩むのは不思議だね。

今村　獨身だから無駄な費用が入るやうな譯さ。

謙治は六ケしい顏してうつむいてゐる。

今村は煙草を吹かしながら何か空想してゐる。

そこへ、書生が扉をノツクして顏を出す。

書生（名刺を出して）この方が是非お目に掛りたいと云つてゐます。

今村（名刺を受取つて）塚田銘吉（と讀んで、ちよつと考へて）あ、さうか。ここへ通して呉れ。

書生退く。

謙次　僕はゐてもいゝのか。

今村　さうだね。座を外して貰つた方が都合がいゝね。この他にも客がまだ來るかも知れないから、晩餐時分まで、何處かへ見物に行つて來るやうにして呉れ。

謙次　寒いのに、幾度も當てのない見物なんかさせられちや溜らない。階下で午睡でもしてゐようか。

さう云つて、椅子を離れて出て行かうとしてゐるところへ、塚田が興奮した顏して入つて來る。今村、思つた事を豫想する。謙治も扉の側に立つたまゝ、出て行くのを躊躇する。

塚田　わたくしが塚田と申します。

今村　お名前は承はつて居りますが、どういふ御用です？

塚田　大變な事が出來まして。

今村　大變なこと？　はつ子さんがどうかしたのですか（顏色を變へる）

塚田　さうです。あの人は、さつきわたくしの部屋で精神に異狀を起しました。そして、あなたの書齋のテーブルの上の一萬圓のことばかり口に出してゐました。

今村　それは不思議だ（テーブルの上の新聞包みを氣にしながら）はつ子さんは發狂したんですね。

塚田　發狂したのかどうだか、まだ分りませんが、その一萬圓のことで、いろいろな妄想を起して苦しんでゐるんです

今村　そりや不思議ですね（次第に冷靜な態度を持して）どんな妄想を起してゐます？　あなたは、まあそこへお掛けなさい。

塚田（突立つたまゝ）直接にわたくしが見てゐたのぢやありません。……あなたの前の奧さんとはつ子さんと二人だけで、わたくしの部屋にゐたのですが、自分の身體は一萬圓の身體だと云つて自慢したさうです。

今村　それは本當ですか。

塚田　あなたの前の奧さんから聞きました。……それから、あなたに、天女のやうな歩きぶりだと褒められたと云つて、天女のやうな身振りをして部屋の中を歩き廻つたさうです。

今村（笑ひを堪えて）それが精神に異狀のある證據なんですか。

塚田　自分の肉體は、さよ子さんよりも美しくつて若いと云つて、帶を解いて見せたさうです。

今村　あなたはそれを御覽にならなかつたんですね。

塚田　わたくしは、二人の話を聞くに忍びないから、座を外してゐました

今村　それで、はつ子さんは今何處に居ります？

塚田　あなたの前の奧さんが、はつ子さんを自働車に乘せてはつ子さんの家へ送届けたさうです。……わたくしは、只今あなたの前の奧さんから譯を聞いて、はつ子さんの發狂は、あなたの責任だと斷定しました（責めるやうに云ふ）

今村　これは驚いた。どうしてわたしの責任になります？

塚田　あなたは、少くも一萬圓を餌に、はつ子さんの心を汚したのぢやありませんか。

さう云つて、塚田は、テーブルの一隅の新聞包みを鋭い目で見つけるや否や、「これだな」と叫んで、手早く奪ひ取つて、ストーブへ投込む

今村　馬鹿ッ。君はさよ子の彼女に唆かされたのだな。

今村は塚田に摑みかゝる。讓次、呆氣に取られてゐる　（幕）



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その一

先生、わたくし今日はすつかり聞いて頂くつもりで伺ひましたんですけれど、でもあの、……折角お仕事中のところをお宜しいんでございますの？　それはそれは詳しく申し上げますと實に長いんでございますのよ。ほんたうにわたくし、せめてもう少し自由に筆が動きましたら、自分で此の事を何から何まで書き留めて、小說のやうな風にまとめて、先生に見て頂かうかとも思つたり致しましたんですが、……實は此の間中ちよつと書き出して見ましたんですが、何しろ事件があんまりこんがらがつてゐて、どう云ふ風に何處から筆を着けてよいやら、とてもわたくしなんかには見當がつきませんの。それでやつぱり先生にでも聞いて頂くより仕樣がないと存じましてお邪魔に出ましたんですけれど、でも先生はわたくしのために大事なお時間を滅茶滅茶にされておしまひになつて、飛んだ御迷惑でいらつしやいますのね。ほんたうにお宜しいんでございますこと？　わたくし先生にはもう毎度毎度おやさしくして頂きますものですから、つい御親切に甘へる氣になつて、御厄介にばかりなりまして、どんなに感謝いたしましてもしきれない

確だと存じてをりますの。それであのう、いつでしたか大へん御心配をかけましたあの人の事ね、あれからお話し申さなければならないんでございますが、あれはあの後に申し上げました通り、先生があんなに仰つしやつて下さいましたので、自分でもしみじみ考へまして、あれきりふつつり絶交してしまひましたの。その当座は未練とでも申しますのか、何かにつけて想ひ出されますもんですから、家にゐましてもまるでヒステリーのやうになつてをりましたけれど、そのうちにだんだんあの人がよくない男だつたと云ふことがはつきり分つて参りまして、……先生はあの時、私がお目にかけましたあの人のラヴレターを御覧になつて、どうもこの手紙は高等教育を受けた男の書いたものとは思はれない、苟くも大学を出た男ならラヴレターにしてももつと書きやうがありさうなものだ。此れで見ると此の男の恋愛には精神的なところが全くない、肉感的な、それもまるで娼婦にでも送るやうな野卑な文句が中学生程度のセンチメンタリズムを入れて並べてあるばかりだと、さう仰つしやいましたのね。それに先生は、僕が此の男だつたら、こんなイヤらしい桃色の封筒へわざと紫インキを使つて女みたいな字を書いたり、女名前の署名をしたりはしないだらう。それあいいが、さうして平気で他人の家庭へ出入して、他人の夫とも姦通同様の行ひをしてゐるとか云ふのは、あまりづうづうしい、良心のある男にはさうまで陰険な事は出来ない。女に駈け落ちを迫るほど真剣に恋ひしてゐるなら、僕なら正直に婦人の夫に情を打ち明けて、此方へその人を譲つて貰ふ、それも駄目とならばその時は駈け落ちと云ふ手段もあへてとられるが、相手は仮りにも夫や子供のある女だ、向ふが進んで駈け落ちしようと云ふなら格別、此方から迫ると云ふ法はない。なんとしても此の男は立派な人物とは受け取りにくいつて仰つしやつたでございませう？　ああ云ふお言葉を思ひ合はせまして、やつぱり先生はおえらい方だ、手紙を御覧になつたばかりでちやんと人間を見ておしまひになる、だのに自分はあんなに深く附き合つてゐながら、やつと今頃気がついたなんて、ほんたうに何と云ふボンヤリなのかしらと、つくづく自分の馬鹿なのに呆れてしまひましたの。しかし兎に角眼がさめたのはまあよかつたと思ひまして、自分でも成るべく過ぎ去つた事は忘れるやうに努めまして、あの人からは怒つた手紙が二三度参りましたけれど、勿論返事なぞ出しはいたしませんでした。主人も私が以前は始終そはそはして音楽会だの何だのと云つては出歩いてばかりをりましたのに、先生の御宅へ寄せて頂くやうになりましてから、すつかり様子が変りまして、絵を描いたり、ピアノのお稽古をしたり、子供の面倒を見たりして、一日家に落ち着いてをりますものですから、この頃はお前も女らしくなつたねえ」なんかと申しまし

て、陰ながら先生の御好意をよろこんでをりました。尤もわたくし、あの人の事に就いては何も主人には申しませんでしたの。「夫に過去のあやまちを隱しておくのはよろしくないから、――殊に肉體上の關係がなかつたのなら告白し易い譯だから、すべてを打ち明けておしまひなさい」つて先生は仰つしやつて下さいましたけれど、………けれどどうも、………それはまあ、主人にしましても或ひはうすうす氣がついてをりましたかも知れませんのですが、私の口からは何だか云ひにくくもございましたし、濟んでしまつたことだのに今更いやな思ひをさせたくもございませんしするものですから、此の後間違ひがないやうに自分さへ注意すればいいのだと存じまして、何事も胸に收めてをつたのでございます。ですから主人は私が先生からどんなお話を伺つて參つたのやら、それは存じませんでしたけれど、いろいろ爲めになることを教へて頂いたに違ひないと思つて、さう云ふ心がけになつたのはいい傾向だと申してをりましたの。

そんな譯で、それから暫くは大人しく家に引き籠つてをりましたものですから、此の樣子ならまあ安心だと思ひましたものか、とうとう己も遊んではゐられないからつて、そんなに主人は申しまして、大阪の今橋ビルディングに事務所を借りまして辯護士を開業いたしましたのが、あれが昨年の二月頃でございましたかしら。――はあ、さうなのでございます。大學の方は法律をやりましたので、辯護士にならいつでもなれましたのでございます。始めは何でもプロフエッサアになりたいやうに申してをりまして、ちやうど私のあの事件がありました時分には、引きつづいて大學院の研究室の方へ通つてをりましたんですが、辯護士をやる氣になりましたのは別に此れと云ふ理由もないのでございますけれど、さういつ迄も私の實家の方の世話にばかりなつてをりましては義理も惡いし、私に對しても頭が上らないと思つたのでございませう。いつたい主人は大學時代に秀才だと云ふ評判で、たいへんにいい成績で卒業しましたものですから、さう云ふ人間ならばと云ふので、嫁に參つたとは申すものの、婿を取るのも同樣にして結婚したのでございます。それでもう私の親たちは主人を信用してをりまして、いくらか財産も分けてくれまして、まあまあ、あせるには及ばないから、學者になりたければ學者になるで、ゆつくり勉強するがいい。洋行もしたければ夫婦で二三年彼方へ行つて來るがいいなどと申してくれましたんですけれど、――結局は主人も大さう喜んで、そんなつもりもあつたらしいのでございますけれど、――私があせり我が儘なので、實家の方を笠に着て威張るんだと云ふ風に取つて、それが癪に觸つたのかも知れません。しかし性格が學者肌に出來てをりまして、いつ迄たつても書生流のぶつきらぼうが拔けませんで、まあ

いそは下手でございますし、それはそれは人づきあひが悪い方なのでございますから、縫取なんかになりましたところで一向仕事なぞありはいたしませんの。それでも毎日事務所へだけはきちんきちんと出てをりましたが、さうなりますと、私の方は一日家にぼんやりいたしてをりまして、しよざいがないものでございますから、自然また、いろいろと、一旦忘れてゐたことが胸に浮かんで參るのでございます。以前は暇がございますと歌を作つたりいたしましたが、歌は却つて想ひ出の種になりますので、もう此の頃はいたしませんのでございませう？ それでわたくし、かうやつてゐてはろくな事は考へないから、これは何とかしなければいけない。何か氣が紛れるやうな事はと存じまして、――先生は御存知でいらつしやいませうか、――あのう、天王寺の方に女子技藝學校と云ふのがございますのよ。私立の詰まらない學校なのでございますが、繪と、音樂と、裁縫と、刺繍と、それからまた外にも何か、まあそんな風に科が分れてをりまして、入學の資格なぞむづかしいことも何もなく、大人でも子供でも自由に這入れるのでございます。わたくし實は前にも日本畫を稽古いたしてをりましたし、下手ではございますけれど、その方になら幾らか趣味を持つてをりますものですから、それへ毎日、朝は主人と一緒に出かけるやうにしまして、兎も角もまあ、通ふことにいたしましたの。尤も稽古とは申しましても、そんな學校でございますから、休みたい時は勝手に休んだりいたしましたけれど、……

主人は繪だの文學だのにはさつぱり趣味がない方なのでございますが、私が學校へ行きますことは賛成いたしてくれまして、それは結構だ、いい思ひつきだから精出して行くがいいと云つて、自分から勸めたくらゐなのでございました。毎朝出かけますのにも、私が行きますのは九時のこともあり、十時のこともあり、自分の都合でいろいろになることがございましたけれど、主人の方も事務所が暇なのでございますから、何時にならうと大概待つてゐてくれまして、阪神電車で梅田まで一緒に參り、それから二人で圓タクに乘つて堺筋の電車通りの今橋の角で主人をおろしまして、私はずつとその車で天王寺へ參ります。主人はさう云ふ風にして一緒に出かけますことを樂しみにしてをつたらしうございます。「またもう一度學生時代に復つたやうな氣がするねえ」などと申しますから、「夫婦づれで自動車で通ふ學生があつたらをかしいわねえ」つて申しますと、あはあは笑つたり何かして、車の中でも上機嫌でございました。午後に歸ります時分にも成るべく誘つてくれるやうにと申しますので、電話で打ち合はせして置いて、事務所へ寄つたり、難波や阪神で待ち合はせたりして、一緒に松竹座なぞへ參つたりいたしましたの。さう云つたやうな動機で、主人との間は大分

變工合よく行つてをりましたんですが、あれは四月の半ば頃でございましたか、わたくしほんの詰まらない事で學校の校長さんと喧嘩をしてしまひましたの。それはあのう、妙なことなのでございますが、學校でモデルを使つて、それにいろいろの服裝をさせたり、ポーズを取らせたりいたしまして、――日本畫の方は裸體のデッサンはやりませんのでございますけれど、――それを寫生いたします時間がございますの。ところがちやうどその時分に使つてをりましたのが、Y子さんと云ふ十九になる娘で、大阪でも有名な美人のモデルなんださうで、それに楊柳觀音の姿をさせまして、――まあ、いくらかそんな風をすれば裸體に近くなりますので、多少裸體の研究も出來ると云ふ譯だつたのでございます。私それを外の生徒たちと一緒に寫生してをりますと、或る日校長先生が教室へ這入つていらしつて、「柿内さん、あなたの繪はちつともモデルに似てをらんやうですね、あなたは誰か、外にモデルがあるんではないですか」つて仰つしやつて、何だか斯う、意味ありげにお笑ひになるんですの。それが校長先生ばかりでなく、外の生徒たちも先生がお笑ひになると、あとからクスクス忍び笑ひをするのでございます。わたくし思はずはつとしまして顏が赧くなりましたけれど、どう云ふ譯で赧くなつたのかその時はまだ自分で自分に分りませなんだ。今になつて考へますと確かにあの時赧くなつたやうな氣がするのでございますが、或ひはさうでなかつたかも知れません。しかし「外にモデルがある」と云はれますと、さう云はれる迄は自分では意識してをりませんでしたのに、何かしらはつと胸にこたへるものがございましたの。でも、それでは誰をモデルにしたかと云ふことは、はつきりいたしてをつたのではございません。たゞ何かしら頭の中にY子さん以外の或る人の印象が刻みついてゐて、Y子さんを眼の前に見ながら、知らず識らずその印象の方をモデルに使つてをつた、――使ふつもりもなく、自然と筆がその人の姿を寫してをつた、と云ふだけなのでございます。

もう先生にはお分りになつていらつしやいませうが、その、わたくしが無意識のうちにモデルにしてゐた方と云ふのが、――どうせ新聞にも出ましたのですから申し上げてしまひますが、――徳光光子さんなのでございます。（作者註、柿内未亡人はその異常なる經驗の後に却りに窶れた痕がなく、服裝も態度も一年前と同樣に派手できらびやかに、未亡人と云ふよりは寧ろ令孃の如くに見える典型的な關西式の若奧樣である。彼女は決して美女ではないが、「徳光光子」の名を云ふ時、その顏は不思議に照り輝やいた。）けれど私は、まだその頃には光子さんとお友達になつてゐた譯ではございません。光子さんは洋畫の方を習つていらしつて、教室も違つてをりましたから、口をきく機會も

なかつた筈でございます。ですから光子さんの方では私の顔を御存知なかつたか、御存知であつても別に気に留めてはいらつしやらなかつたでせう。私の方にしましてもそれほど光子さんに注意してゐたとは思へないのでございますが、でも何となく好もしさうな方だと云ふ風に考へてをつたに違ひないのでございます。それもしかし、口をきいたことがないくらゐでございますから、性質とか気だてとか、そんなことは分りませんのでしたけれど、――まあ、何となく、ただ全体の感じなのでございますね。さう云へば私が案外早くから光子さんに気をつけてをりました証拠には、もうその時分に誰から聞いたと云ふでもなしに、光子さんの名前やお宅を、――船場の方にお店のある羅紗問屋のお嬢様で、住まひは阪急の蘆屋川にあるのだと云ふやうなこと迄ちやんと知つてをりましたの。それでわたくし、校長さんにそんなことを云はれましたので、あとでいろいろ考へてみたのでございますが、成る程その絵は光子さんに似てゐますけれど、故意に似せたと云ふではなし、また故意に似せたにしましたところが、せんたいモデルにY子さんを使ふと云ふのは、Y子さんの顔を寫すのが目的ではないのでございませう？ ただY子さんに観音さまのやうな姿をさせて、その體つきや、白衣の襞の工合を研究して、なほその上に観音さまの感じが出せたらいい譯でございませう？ Y子さんはモデル女の中では美人かも知れませんけれども、光子さんの方がもつと美人で、その絵の感じに合つてゐるとしましたら、光子さんをモデルにしても差支へないではございませんか。――私はさう思つたのでございます。

（つゞく）

卍

編輯だより

◇政府黨勝つか民政勝つか、本誌が市中に出るころにはもう勝負はついてをる。民政の策戰は足が早かつたが、政府黨はいろいろの飛道具があるのが有利であつた。しかし今日の大衆はその飛道具に怖るるものはなくなつた。

◇本誌の「觀戰記」や「普選議會に向つての第一の要求」の集中には既成政黨の方々へも原稿を依頼したが、原稿の到着が〆切におくれたりして間に合はなかつた。掲載することの出來なかつたのは右の事情によるものであるから惡からず諒としてもらいたい。

◇何、近く臨時議會も開かることであらうが、大衆は自分が選出した議員の行動を嚴重に監督すべきだ。しかし地方問題や個人問題を公人に依頼することだけは絶對にやるべきでない。何や彼やといつても制限議會當時の選擧よりは一段の進步を示したことだけは認める。

◇「世界大衆文學全集」は申込殺到し「現代日本文學全集」に劣らざる形勢を呈するに至つた。そして內容見本が出來ないうちに數萬の申込があつたことは讀者がいかに本社を信じて下さるかを思うて淚なきを得ませんでした。

◇「マルクス全集」總內容は四月號にて發表いたします。

◇「上田敏全集」は本社より出版することとなりました。これも四月號で發表します。

◇「現代日本文學全集」の四月配本は久米正雄集近松秋江集といたします。久米集には長篇「破船」「和靈」「三浦製糸場主」「地藏教由來」「阿武隈心中」その他が這入り近松集には「別れた妻」「舞鶴心中」「疑惑」「疑惑續篇」「黑髮」「子の愛の爲に」その他が這入ります。五月配本は「正岡子規集」を刊行しその名作全部が這入ります。

◇最近の讀書界で尤も多く讀まれつつあるのは有川治助著「ヘンリ・フオード」及び「新選名作集」中の「谷崎潤一郎集」「菊池寬集」であるさうだ。「新選名作集」は「現代日本文學全集」の姉妹出版であるから兩對立して讀む人が多いのだらう。「永井荷風集」「武者小路實篤集」も近く發賣さるる筈。

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

改造定價

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲増大號其他定價變更になる前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

(價五十錢)
(郵稅二錢)

昭和三年二月十八日印刷納本
昭和三年三月一日發行

東京市芝區愛宕下町四丁目六
編輯兼發行人 山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六
改造社
振替東京八四〇二三
電話芝(43)二二一二・二二一三・二二一四

世界大衆文學全集解說

本全集は世界中で一ばん多く讀まれ、そして世界中で一番面白い小說ばかりです。怪奇、戀愛、家庭、滑稽、傳奇、探偵、科學、軍事小說の最も不朽の名作のみで、世界人氣の焦點となつたものばかりであるから、一度讀み出したが最後終りまでやめられぬもののみだ。此以上に面白い全集は他に絶對にない。殊に飜譯者は日本一流の人々のみを嚴選したから文章の平易でうまいことは他に比較がない。又裝幀が美はしくて廉價なことも他の追隨を許さない。內容見本を取寄せて其解說を一讀して下さい。數ある幾十の全集中これほど世界的に知識づけ、日本人の未來を明るくするものが他にあらうか。內容も形式もいろ／＼比較考慮して最後の一斷を本全集に申込み下さい。

1 鐵假面（ボアゴベ）

大佛次郎

鐵假面は今日に到るも依然として世界史上の大きな謎である。榮華一世を掩うたルイ十四世は、何を憚つてか、一人の囚人に鐵の假面を着せ、脫いだならば殺すと嚴命して、初めはサンマルグリテ、後にはバスチユの牢獄に二十餘年間を幽閉した。華やかなりし王の死と共に、その囚人の何人なりしやは、永久の秘密、解けぬ謎となつたまゝ今日に及んだ。時代は王朝の爛熟期で叛亂のきざし漸く現れかゝつた頃、繁華の都巴里を中心に此の不可解の興味が潜在してゐるのだから、ユーゴー、デユマ等も共に同名の名作を殘したが、ボアゴベの作が一番面白い。古く黑岩涙香氏が「鐵假面」の名で、抄譯翻案して紹介したことがある。元來探偵小說はボウが創始し、ガボリオが名稱を與へ、ボアゴベが一般に流布したと言はれ、その稀有の大手腕は傳奇小說壇の帝王の觀がある。譯者大佛次郎氏は「照る日曇る日」「鞍馬天狗」其他の作者として我大衆文學壇の花形であり重鎭である。殊に大佛氏は佛蘭西通の外交官出身で、ボアゴベの譯者として、壯快極まるものを提供される。

2 家なき兒（マロオ）

菊池幽芳

兩親知らぬ捨子の少年が、懷しき育ての母の手から、名譽ある遍歷の驚歎すべき人生觀の持ち主である老旅藝人の手に渡され、猿や犬と一座して街頭に藝を賣るうち、運命の神が思ひもかけぬ幸福を少年にもたらすまでの波瀾多き物語で、唯一篇の悲劇小說やお伽噺ではなく、讀者は強く正しき教訓に胸を摶き拓られるであらう。フランスの作家マロオの世界的名作の家庭小說で、既に三十ケ國以上の國語に翻譯され、その名聲は世界を席捲してゐるのである。我國でも故五來素川氏が「まだ見ぬ親」と題してその抄譯を發表されて以來、屢々少年物語風に要譯されてはゐるが、家庭小說としての全譯は幽芳氏の本篇あるばかりである。氏はフランスに遊んだ直後、彼地で求められた最も信用すべき原書から直接に飜譯されたもので、アメリカ版からの重譯などとは趣きを異にし實に世界に誇るべき名譯である。譯者菊池幽芳氏に就いては、今更語るまでもない。明治大正を通じての最も尊敬すべき家庭小說の泰斗で、「乳姉妹」「白蓮紅蓮」その他多くの名作は、公にされ、家庭の空氣を明るからしめた。

3 前線十萬（ヤン・ヘイ）

櫻井忠温

怪物ツエッペリンが毎夜毎夜倫敦の空を脅かす、出沒自在の獨逸潜航艇は北海を襲撃する、罪もない少女が斃される、ジョンブルの血が湧いた、キッチナー元帥の精鋭十萬人は、チペラリーの唄を高唱し海を渡つて獨佛戰線へ——扨て其の最初の十萬人は何うなつたであらう。作者は彼等の運命にテーマをとつて本篇を描きあげた。原著者ヤン・ヘイは謎の人物である、火の如き熱情と刄の如き批判を以て大進軍のロマンスを描き、毒瓦斯とタンクの戰線にかくれた秘密を發いてゐる。これほど面白い激情的な大戰文字が又と他にあらうか。譯者櫻井忠温大佐は「肉彈」「銃後」の著者として我が戰爭文學の第一人者、情熱雄麗の文章を以て世に知られた大家である。今や陸軍省新聞班長の劇職にあるにも拘らず特に本全集の爲に本卷を擔當された。原著者譯者相俟つて光彩陸離たるものがある。敢て讀者の期待を乞ふ所以である。



「前線十萬」中の一場面

4 アルセエヌ・ルパン（ルブラン）

保篠龍緒

義賊アルセエヌ・ルパンには三つの名前がある。一度ルパンと言へば賊となり、セルニン公爵と言へばロシア貴族となり、ルノルマンと言へば巴里警視廳の刑事課長となり、さしもの巴里も神出鬼沒な彼の脚下に飜弄される。彼はあれ程な兇賊でありながら殺人が嫌ひだ。彼は長い間の準備の後破天荒な計畫で泥棒を決行する。世界第一の柔道の達人で腕ひしぎを得意とし、強きを挫き弱きを助け、富める者を脅かし、貧しきを賑はす仁俠の義賊である。奇智縱横、敏捷快活なモダンボーイでもある。アルセエヌ・ルパンこそは戰後佛蘭西青年の理想の人物である。原作者ルブランは處女作「八一三」を出して以來新興の探偵小説壇に彗星の如く光つてゐる佛蘭西現代の人氣作家である。飜譯者保篠龍緒氏は歐洲探偵小説の研究家でルブラン殊にルブラン物の飜譯は事實とする所、譯文は流麗明快宛らルパンを見るやうだ。

5 椿姫（小デュマ）
マノン・レスコオ（プレヴォ）

久米正雄

白椿の花に埋もれて死んだ薄命な女優の一生である。外國の小說には珍らしく義理と人情の柵を描いた「椿姫」は我國でも紅葉山人の種本となつたり、芝居に仕組まれたり或は映畫になつて問題を惹き起したりして馴染の深い物語である。原作はデュマが親しく接した實在の女性をモデルにしたもので、ゾラの「ナナ」とは異り女主人公の可憐純眞な一生が讀む者に哀憐の涙を誘ふ。作者プレヴォは數多い著作の中「マノン・レスコオ」を殘さなかつたならば忘れられたかも知れない。美しい娘マノンに對する若い貴族デ・グリユウの狂亂の戀が、遂に巴里の墮落の生活となり女の不貞實な生活となり、女の歡心を買ふ爲の男の罪惡の生活となり、男はアメリカに迄流れて行くが最後に病死した女を荒涼たる山中に葬るといふ悲戀を描く譯者久米正雄氏は當代戀愛小說の大家、其麗譯が待たれる。



ノーマ・タルマッヂの椿姫

6 三銃士（大デュマ）

三上於菟吉

武士道華かなりしルイ王朝の頃、朝廷の銃士を志して都に出た若きダルタアニヤンが、當時全歐洲に雷名を轟かしたルイ十三世の三羽烏アトオ、ポルトー、アラミスに伍し武勇と戀を爭つて幾度か命がけの冒險をしたのち王廷銃士の頭、佛蘭西陸軍總帥に推される迄の極めて劇的に組立てられた物語が、此の大デュマの「三銃士」である。本篇はカアル・マルクスさへも愛讀した、デュマの三部作の中でも最も痛快な變化に富んだものでダグラスが映畫にしたのも無理はない。非常に有名なものでありながら、完全な邦譯のなかつたのは、遺憾であつた。今度新に三上於菟吉氏の完譯を得たのは、本全集の誇りである。三上氏はもともと外國文學の紹介に努められてゐたが、一轉して大衆文學に筆を染め、目下東京日日大阪毎日兩新聞連載中の「激流」その他、大作を次ぎ〳〵に發表して、斯界の寵兒であることは人の知るところである。

7 放蕩息子（ケイン）

菊池寛

霧深きアイスランド總督の二人息子、謹嚴な兄は豪商の姉娘と婚約を結んでゐたが偶々倫敦留學から歸つたモダンボーイの弟は言葉巧に兄の許嫁を口說き落して結婚してしまつたが、それから兄の悲痛な失戀生活と、弟の放縱な肉慾生活が平行する。弟は音樂の趣味があつたので、其を利用して妻の妹とも關係を結んでしまつた。妻は兄に反いた罪と弟の不倫を悲しみ小さな娘を殘して死んでしまつた。妻の死は弟息子の生活を暗くした。幾年かの後音樂家として成功した彼が遂に雪崩に打たれて慘死するまでの放蕩息子の一生を描いた、悲しい家庭小說で近代的な主人公の生活を愉快なテンポが「近頃のものでこれほど面白い小說はない」と吾が文壇の大家菊池寛氏を感嘆せしめ遂に本社の乞を容れて飜譯の筆を執るに至つたものである。因にアイスランドを舞臺にとつた小說は世界にも餘り類が無く隨つて地理的の興味も深からう。



ダグラスの三銃士

8 金剛石（フレッチャー） カートライト事件（同）

森下雨村

ロンドンのとある店頭の箱の中から現はれた唯一個のダイアモンドではあつたが、それがもとの所有主に歸るまでには、八人もの男女が變死を遂げるといふ物凄い探偵小說――これが「金剛石」である。「カートライト事件」はカートライト公園の一隅に起つた殺人事件を材料とし變化を極めた探偵小說で、共に原作者の特色を濃厚に發揮した名作だ。原作者フレッチャーは英國現代の探偵小說家中最も本格的な作家で開卷第一頁より思はず知ず讀者を引きずつて行く怪筆を持つてゐる。もと詩人で鄕土藝術研究家であつたが、偶々世界の大新聞倫敦タイムスに懇願されて大衆文學に筆を染めた人だけに、冒し難い氣品を具へてゐる。譯者森下雨村氏は我が探偵小說界の父と稱せられ、開拓者である。殊にフレッチャーは氏の最も愛好する作者で、其の「謎の函」と題する長篇は曾て氏の名譯によつて世に紹介されたことがある。

9 オリヴァー・ツイスト（チッケンス）

馬場孤蝶

地獄の墓場のやうなロンドンの貧民窟へ田舎の育兒院から逃れた可憐な孤兒ツイストは惡漢の仲間に誘拐されて限りなく暗い生活を教へられる、貧民窟に咲いた一輪の花、惡漢の妻ナンシーの母性が陰ながらツイストを守つてゐる。そこへ親切な老博士が現れて此の少年を光明の世界に導く。最後に少年の素性が知れて目出度く大團圓を結ぶ憐れな、また社會性に富んだ好個の家庭物語で、篇中二十の異つた性格の所有者が入り亂れて渦を卷くのに筋が些も混雜しないところに原作者チッケンスの流石に名匠たる所以が知られるのである。曾て世界の寵兒ヂャッキー・クーガンが主演し映畫となつて日本にも輸入され人々の涙を絞つたことは今尚ほ諸君の記憶に殘つてゐる筈だ。譯者馬場孤蝶氏は我が英文學者中の耆宿であると共に、大衆文藝の紹介者として今の新進作家達から仰がれてゐる大家である。



クーガンのオリヴァー・ツイスト

10 トウエーン名作集（マーク・トウエン）

佐々木邦

華やかなロマンスも宜から情に訴へる物語も結構である現實曝露の探偵小說もとより可。しかし茲に紹介する一卷は他と全く趣を異にした諧謔本位の文學である。我が文壇に於てこれまで獨り諧謔小說が繼兒扱ひされて來たのは、本邦在來のユーモア文學が氣品に乏しく內容貧しく、動ともすれば卑猥に流れ易い爲め自然に等閑視されたのではあるまいか。苦鬪を日常の生活とする近代人の間には、讀んで微笑を禁じ得ないユーモア文學も亦魂の安息所として確かに必要ではあるまいか。マークトウエーンは世界の諧謔小說の王樣である。彼の諧謔は世の虛僞に對する熱烈な憤激であり笑の蔭には苦い涙が潛んでゐる。彼は普通の滑稽文學者でなく一段高い道德觀を以て世間を覺醒しようとした偉大なるユーモリストである。譯者佐々木邦氏は二十餘年の長きに亙りトウエーン研究に沒頭された大家として知らる。

11 婚約（マンゾーニ）

木村毅

凡ゆる西洋の名作が矢繼早く移植されてゐる中に、不思議にもただ一つだけ網の目を洩れて、燐光のやうな光りを放つてゐたのは此の作である。生活そのものが直ちに傳奇であつた十七世紀の伊太利ミラノを背景に、レンゾ、ルチアの二人の野の若者の花の如く美しく露の如く汚れなき婚約の物語である。二人の婚約は、「法律の防護」を以て自ら任ずる男爵山賊ドン・ロドリゴの陷穽に依つて阻まれ支障を來すけれども結局は幸福な結婚の美酒を乾すといふ筋。殊に山賊一味の活躍は、映畫の如き効果をもつてゐる。原作者マンゾーニは「デカメロン」のボッカチオ、「ロビンソンクルーソオ」のデフオ、「アイバンホウ」のスコット——この三者の面白味を合はせ持つ文豪で、譯者木村毅氏は創作、批評、飜譯行くとして可ならざるなき現文壇の才人で、東京朝日新聞連載の「島原美少年録」の著者として知られてゐる。



家なき兒の一場面

12 巴里の秘密（シュー）

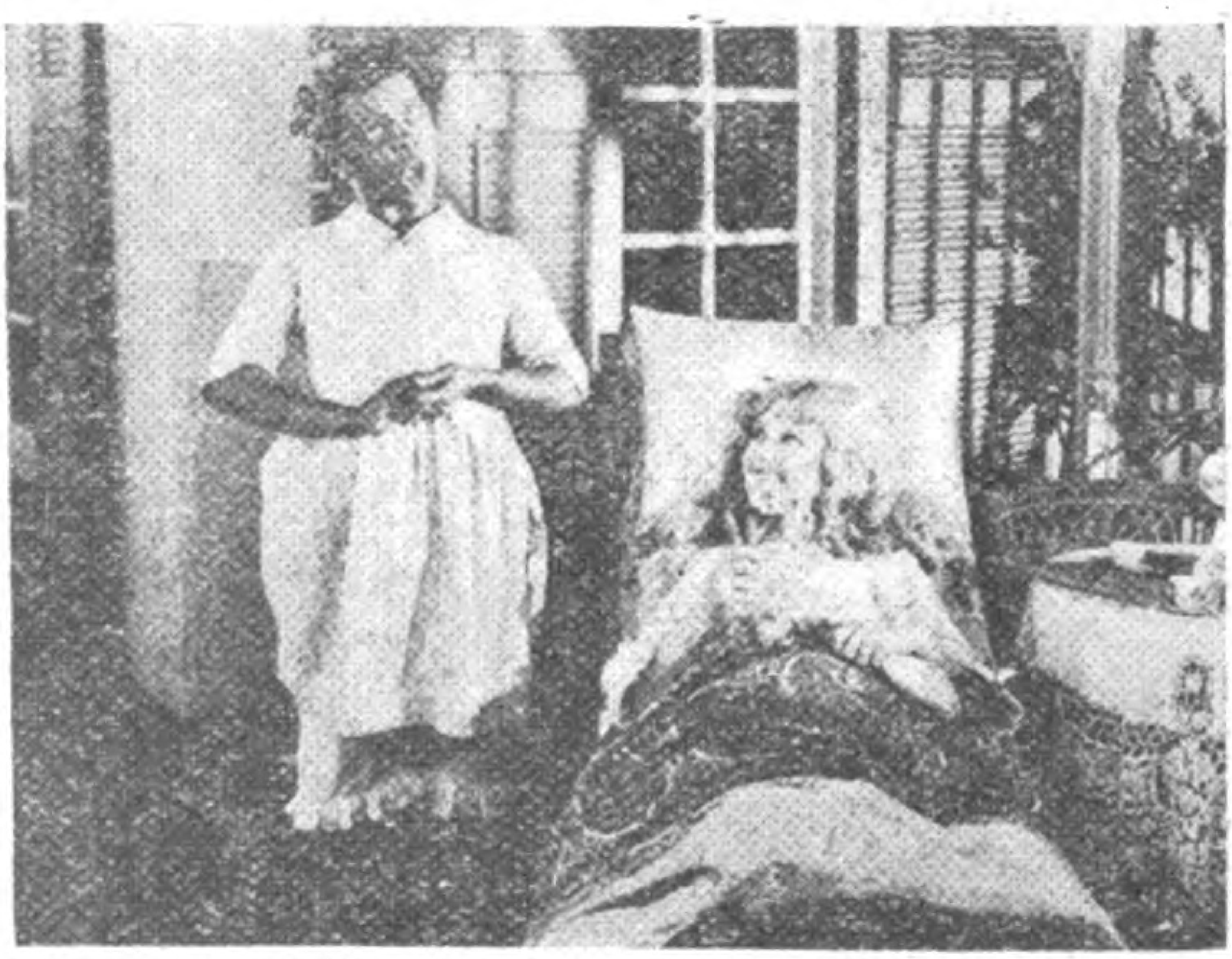
武林無想庵

過去一世紀に亙つて歐羅巴で最も多く讀まれた物語はウーゼーヌ・シューの「巴里の秘密」である。本全集を編纂するに當り、純文壇大衆文藝を代表する各大家が異口一致推薦されたのは本書であつた。シューは九十年前の巴里の秘密を發いたが、譯者無想庵氏は今日の巴里の秘密の底まで知れる人。而も目下巴里暮しの氏は、餘りに文章が難しいため未だ邦譯されなかつた本書の大衆的飜譯者として此上なき適任者と云はねばならぬ。「巴里の秘密」は文明と云ふものが人間を墮落さすことを説明せんために、千八百四十年代の巴里に漲つた悪德と貧乏をいろいろの事件をかりて描いたもので、傳奇的なところも探偵的なところもあり、廣く讀まれたのも無理はない。

13 アンクルトムスケビン（ストー）

牧逸馬

かよわき女性の筆端から奴隷解放運動を生み、南北戰爭が勃發した世界的名著である。ストー夫人は正義人道の情熱に燃えながら、神の如き奴隷トムの悲惨なる生涯を描いた。可哀さうなトムは世界幾千萬人の涙を絞つた。「此書こそは、グラント將軍十萬の精兵が南軍の城砦を陷れしよりも其の功績まされり」と、徳富蘆花氏は賞揚してゐる。（本社の現代日本文學全集五五三頁「一枝の筆」參照）米國は勿論、英國及殖民地に於て百五十萬部を賣り盡した本書は、遂に自由の國アメリカを統一し吾が懷しき「オールドケンタッキーホーム」のメロデーを生み最近パラマウント社が世界に誇る大映畫「アルクルトムスケビン」となつた。原著はアメリカ俗語を以て書かれ完全な邦譯は至難とされたが、多年アメリカに在つて下層社會の言葉を研究された牧逸馬氏に懇願して快諾を得た。牧氏は谷讓次、林不忘等のペンネームをもつ文壇の流行兒である。



アンクルトムスケビンの一場面

14 黒星（マッカレエ）

和氣律次郎

三上於菟吉氏がサンデー毎日に連載して好評を博した「仇討日月篁子」あれの種本はマッカレエの代表作、「雙生兒の復讐」だ。雙生兒の兄弟が伯父の讐を報ぜんため六人の政治家と實業家を對手に闘ふ凄い話だ。善良た悪漢サムを主人公とした、名作「地下鐵サム」は日本にも紹介された。實に作家マッカレエは、今やアメリカのあらゆる階級の人氣を一身に蒐め、軽快で俊敏な、如何にもヤンキーらしい、素晴らしい探偵作家である。和氣律次郎氏はマッカレエにかけては右に出るものなき專門大家で、原作者の文脈から風格を其の儘移す名譯者。既に數十篇のマッカレエ物を紹介されてゐるが、今回は特に今まで手掛けたことのない「黒星」を本全集の爲めに飜譯される。「地下鐵サム」よりも「雙生兒の復讐」よりも若き日本の讀書階級の血を湧かすことであらう。そして作家マッカレエは、我等の流行兒となることも遠くはなからう。

15 トンネル（ケラアマン）

秦豊吉

大西洋の海底に一大隧道工事を起して、歐洲と米大陸の連絡を計畫した青年技師を主人公とし、その工事中に織出する幾多の椿事と、面倒な戀愛關係とを巧みに織り込んだ、近代的な科學冒險小說である。最近獨逸でこれほど飛ぶやうに賣れて問題を捲き起した小說はない。ケラアマンはベルリン日日新聞特派員として米國に滯在中この怪奇な物語の筋を得たもので、興味清新なる傑作である。原作者は一九二一年頃日本にも來て「日本の散步」「さつさよさつさ」の二篇を發表し、藝者遊びの話など書いた。彼は今アラビヤに自動車旅行中。伯林の女優ドリリユエの情夫で、その近作「シエレンベルヒ兄弟」はコンラドフワイト主演の映畫になつてゐる。譯者秦豐吉氏は獨逸文學の第一人者、名譯「ウエルテルの悲哀」以下數十篇の譯あり。最近まで獨逸に留學し、純文藝以外に此の種大衆文藝に造詣深く、特に本全集の爲めに此の名作を選定して下さつた。



ドロレスデレリオのカチユーシヤ

16 カチューシヤ（トルストイ）

近松秋江

雪のシベリアをとぼとぼ歩むカチューシヤ、戀と自責の懊みを抱いて默然と從ふ若き侯爵ネフリュードフ。二人は何の爲に何處から何處へ行くのか。大トルストイが不朽の名篇「復活」は悲しき運命の物語である。神聖なる兩性の問題小說である、されば世界を風靡し、我國でも小唄のメロデーとなり或は松井須磨子の芝居となり國民には「不如歸」「金色夜叉」以上に親まれてゐながら、讀物として讀書界を風靡し得ないのは從來の譯文が難澁であまりに西洋風すぎたためであつた。近松秋江氏はトルストイ物にかけては名譯家と明治大正の文壇に謳はれた老巧者。その氏が「名譯して本物そのままの味を必ず出させる」と斷言し、艶麗哀愁を以て鳴らした氏一流の文章で此の大事業に着手されたので、薄命可憐のカチューシヤが甦て生けるが如く諸君の淚を拭ひ大トルストイの人道主義が諸君の心を照す日も遠くはあるまい。

17 九十三年（ユーゴー）

早阪二郎

九十三年とは一七九三年、「自由・平等・博愛」の三色旗の下に、佛蘭西大革命の戰塵があがつてゐた。革命軍司令官ゴオヴアンは伯父ラントナック侯爵の率ゐる反革命軍討伐に向つた。反革命軍は戰利あらずして主將ラントナックは捕へられた。ゴオヴアンの胸には恩愛の情と愛國の念とが入亂れたが、彼は遂に伯父を殺さずに救つた。ゴオヴアンの行動を監視してゐたのは彼の少年時代の家庭教師シムウルダンであつた。シムウルダンはゴオヴアンを軍法會議に廻し自ら判決を下して死刑に處した。と同時に彼は元の師弟の情にかへつて、自ら心臓を打つて死んだ。配するにマラー、ダントン、ロベスピエール等革命の大立物を以てし雄大なる構想は「レ・ミゼラブル」を凌ぎ、德富蘇峰先生の如き推賞措かぬ大作である。譯者早阪二郎氏は目下萬朝報紙上に「胸をかくす女」を連載してゐる新進作家だが實は曾ては東京諸新聞社に活動してゐた文明批評家である。



九十三年の一場面

18 寶島（スチブンソン）・チェキールとハイド

野尻清彦

秘密の地圖を手に入れた少年が、寶の島にあこがれて探偵船に乗り込み、幾度か危險を經たのち孤島の海賊雙脚のシルヴアに打ち勝ち財寶を發見する可憐と戰慄の探偵的冒險小說が「寶島」で「チェキール博士とハイド氏」は鬼氣人に迫る名篇だ。慈悲の權化チェキール博士が、身を試驗臺にして己が發見した粉藥を服用すると性格風貌が一變して獸性の儘に行動する、遂に藥が解けなくて狂ひ死する物凄い二重人格を描いた世界に二つとない異色ある作品で名優バリモワの主演で映畫となつた。譯者野尻清彦氏は寶島に出て來る海賊語に就ては多年苦心の研究を重ね完璧を期して譯出して居られることを聞き特に本全集に乞ひ得たもので從つて文章も原著の味を失はぬ平易な氣高き名文である。因に夏目漱石氏は少年時代からスチブンソンを愛讀し遂に大影響を受けたと自ら告白してゐる。

19 スペードのキング（ヅーゼ）

小酒井不木

群雄割據の世界探偵小説界に最近になつて突然顔出した不思議な作家、瑞典のヅーゼは、特異な科學的な探偵術を盡してすつかり世界的驚異の的となつてしまつた、本篇は彼の代表作「スペードのキング」「コブラの秘密」「クラブの四」の三篇を收めたものであるが、ヅーゼが何故他の英米作家のやうに日本に紹介されてないかと云へば獨逸語ばかりで英佛譯がなかつたためであつた。恰も探偵小説家の總元締小酒井博士が發見せられて今ではヅーゼの譯は手に入つたものである。

うまく食へば食物は營養となる。
面白く讀めば書物は身となる。

20 ステラ・ダラス（ブローチ） ラ・ボエム（ムルジエ）

森岩雄

ステラ・ダラスは小さな工場町に育つた無智で正直な女だ、ふとした縁から、紐育の社交界を逃れた青年と結婚し、可愛い娘まで生れながら夫は無智なステラの貞操を誤解して都に去り、娘は父を慕うて都に追うた、わが憐れなステラは娘の幸福を願ふため獨り寂しく涙の生活に入るといふ愚かな妻、無智な母を描いた最上の家庭小説で妻たり母たる者はぜひとも一讀すべきである。作者は憐れ愚かな母ステラを心からの同情で浮彫させてゐる。華の都巴里の藝術家街カルチエ、ラタン、または美しきブウロンの森に若き生命の喜びに浸る哀切極りなきロマンスがアンリームルジエのラ・ボエムである。貧きを分ち、喜びを共にし、身を盡す友情の物語、若き人々が心の琴線に觸れる理想的な家庭の讀物、譯者森岩雄氏は名映畫「街の手品師」の作者として曾て佛蘭西に遊んだ映畫界の權威者であり、又情味豐かな才筆の持主として知られてゐる。



ベル・ベネットのステラダラス

21 シヤロツク・ホームズ（コナン・ドイル）

延原謙

―シヤロツク・ホームズ―

探偵小說と言へばドイル、ドイルと言へばシヤロツク・ホームズ此の書出でて英國の探偵法は全然一變したと云ふ。小說の實際上に及ぼす驚くべき影響だ。ホームズには「冒險」「回想」「歸還」「最後の挨拶」及び最後に出た「捕物帳」の五冊があるが、本篇は一卷よくホームズ全集の觀を成してゐる。殊に最近の、愈々熟した愉快な探偵物語は、本書によつて初めて江湖に紹介されるであらう。長篇の形式は取つてはゐるが、名探偵ホームズの取扱つた事件の一つ一つを一篇として描いたもの故、どの一篇を讀んでも精彩ある短篇的興味がある。英國に於ける以上の大センセエシヨンを惹き起すであらう。譯者延原謙氏は探偵小說專門の飜譯家で、早稻田大學電氣科の出身でありながら今では電氣技師を廢業して道樂だつた探偵小說の飜譯を本業としてゐる風變りな人で、博文館の探偵叢書の中にも氏の飜譯が數卷を占めてゐる。



バリモアのホームズ探偵

22 ゼンダ城の虜（ホープ）

寺田鼎

戴冠式の夜、ルリタニア國王ルドルフは行方不明になつてしまつた。これは王位を狙ふ王弟ミハエル一味の陰謀に陷つたためだつた。恰も其の夜、王と同名の英國紳士ルドルフは何にも知らずに此の首府に到着し、計らずも事件の渦中に捲き込まれて了つた。彼は花の如き王姬フラビアと戀に陷つたため陰謀の眞相を知り、男性的俠氣からあらゆる危險を冒して活躍し、遂に惡人を滅ぼす、一篇陰謀と戀愛の連鎖にも拘らず、まことに健康な男性的讀物で、歐米各國では廣く家庭に歡迎されてゐる。原作者アンソニイ・ホープの數ある作品の中でも此の作は一際ロマンチツクで繪畫のやうに美しい。屢々劇に仕組まれ、映畫となつて日本に輸入されたことは知られる通りである。飜譯者寺田鼎氏は曾てアドバタイザアの記者として活躍された少壯英學者、今は世界の映畫王國ユーナイテツトアーチスト社の社員として活動してゐる。

23 紅蘩蔞（オルツイ）

松本泰

昨日も今日も貴族はギロチンへ送られた。身を以て國外に逃れようとしても、東も西も關門といふ關門はすべて、武裝した革命黨員に依て固められ、蟻一匹匍ひ出る事が出來なかつた。此の佛蘭西大革命のどさくさの中に現れて、覆面の義人「紅蘩蔞」は、貴族の味方であつたらうか！或は革命黨の味方であつたらうか？彼は奇智と勇氣の權化、英國人の理想とする紳士であつた。原作者オルツイ男爵夫人は英國隨一の最も人氣ある大衆女流作家である。英國人に何か面白い小説はないかと訊ねたら十人が十人迄夫人の「紅蘩蔞」を讀めといふに違ない。最初の一頁より最後の頁迄息詰るやうな話が溢れ、深刻な冒險味が底を流れてゐる、女ならではと思はせる纎細な味も見逃せない。譯者松本泰氏は現探偵小説界の元老もと三田派の中堅作家で、中途より探偵小説に筆を染て以來、斯界の權威を以て目されてゐる。



ラ・ボエムの一場面

24 平妖傳（羅貫中）

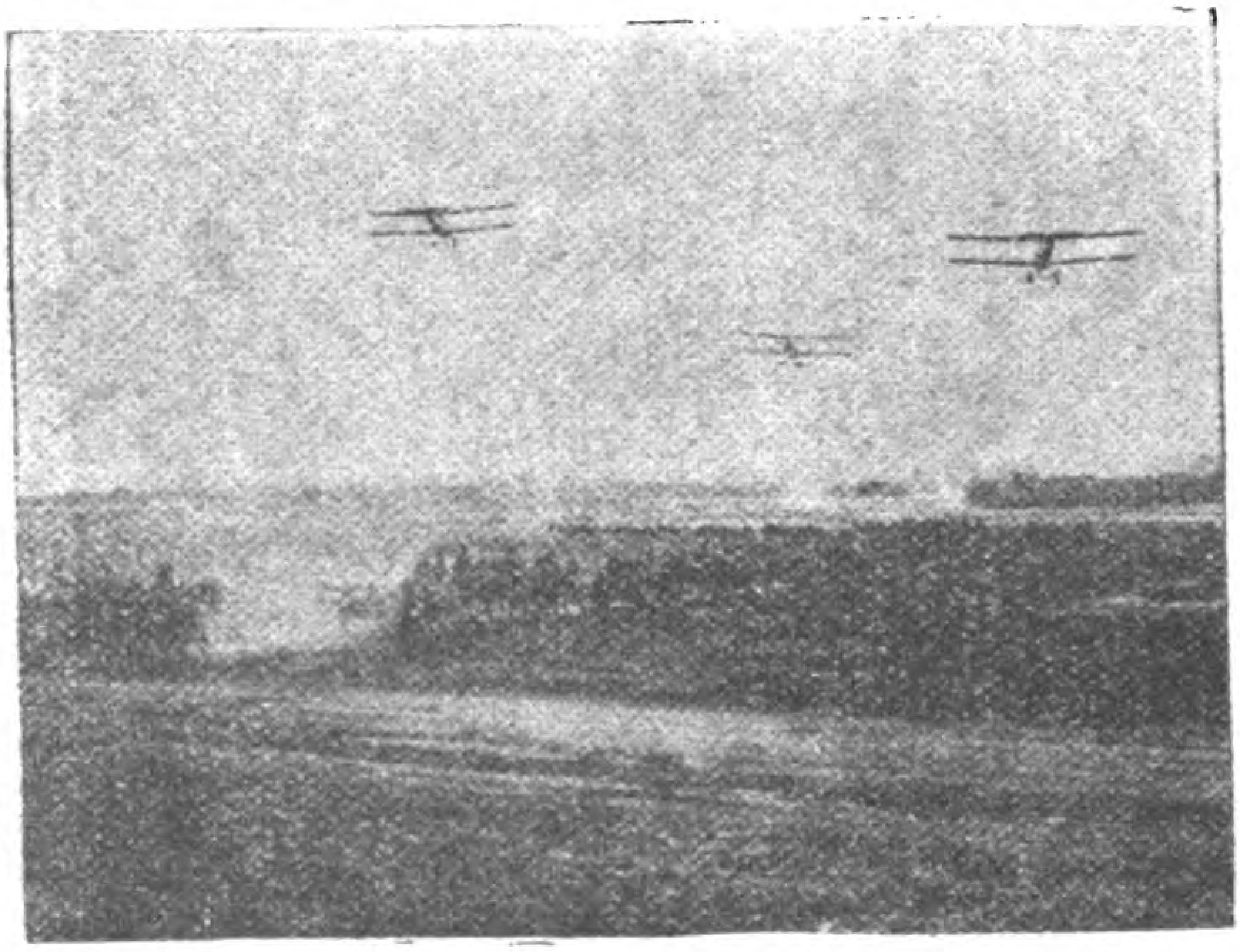
佐藤春夫

支那の面白い小説と云へば直ぐに三國誌、水滸傳、西遊記の三つを聯想するが、此の平妖傳は前記三物語を捏ねて一丸とした雄勁奇怪な物語で支那の古文學中では先づ第一位に推さるべき大雄篇でありながら、吾國では前記三篇ほど有名でないのは、徳川時代に林羅山が邦譯しかけて果さず、その後瀧澤馬琴が飜譯を計畫しながら逝去したので、今日まで日本人の前に現はれないためである。支那文學の權威幸田露伴博士が特に本全集のため數ある古文書中から選擇されて、支那文學の邦譯にかけては全文壇右に出るものなしと云はれてゐる文壇の重鎭佐藤春夫氏が詩情豐な名文を振つて之を完譯されると云ふ、文壇空前の壯擧ではあるまいか。數多き西洋の物語の中に伍して僅かに一篇の東洋物ではあるが構想記述ともに西歐物に比して何等遜色なく、吾等東洋人のために大に氣を吐いてくれるところが愉快である。

25 空中戰爭（ウエルズ）
空中旅行（ヴエルヌ）

木村信兒

H・G・ウエルズは最も進歩した科學小說家で、ジユル・ヴエルヌは半世紀前の空想的科學小說家である、ウエルズの科學小說は背景に社會問題を持つてゐるが、ヴエルヌは好んで見知らぬ世界の消息を描いた。時代と傾向こそ異れ此の二篇の科學小說は共に豐富な通俗味を以てゐて一度び卷を繙けば吾を忘れて讀了する。而も讀後の豐富な科學的智識を獲得することが出來ると云ふのが科學小說の特長である、ウエルズはロマンチックな空想を描くのではない、どこまでも現在の社會問題と自然科學を基礎として事實を寫すと云つた風だ。譯者木村信兒氏は科學小說專門の少壯英學者でこれまでウエルズの飜譯數卷を世に問うてゐる。



空中戰爭

26 ルコック探偵 河畔の悲劇（ガボリオー）

田中早苗

何か深い事情があるであらう、旅藝人と自稱する奇怪な囚人と變幻出沒極まりなきその一味の徒黨を向ふに廻して飜弄の限りをつくされ惡戰苦鬪する少壯氣鋭の名探偵ルコックの物語、セーヌ河畔の貴族の庭園から發見された死美人に端を發する、戀と嫉妬の難事件、何れも探偵ルコックが飄風の如き活躍とともに暗澹たる人情の波瀾曲折を描いて涙を誘はうといふ、名作家ガボリオーの作品中で最も變化に富んだ二名篇。ガボリオーの作は恰も黒天鵞絨の如き手觸りがあつて、その瑰麗な魅惑は讀者の一生涯忘れる能はぬものである、譯者は吾が文壇第一のガボリオー通で多年大衆文藝飜譯界の重鎭をもつて許さるゝ田中早苗氏である。

本全集の内容は一二の例外を除きて總て新譯か改譯で未だ活字になつたことのないものばかりだ。此の點は他の全集ものとちがふ特色である。

27

スカラムッシュ シーホーク（サバティーニ）

小田律

舞臺は大革命時代のフランスであつた。淫蕩な貴族を父とし而もその父を知らぬ宿命の私生兒が革命黨に加はつて數度のロマンスと冒險を經たのち道化役者となつてジプシーの群に投じ放浪生活を續けてゐた、革命勃發の日、彼は豫て怨み重なる老貴族に出合つて決鬪を約し將に刺し殺さんとする刹那相手が實父であることを知るといふロマンチックな筋で、それに熱烈な戀も絡つた規模の宏大と構想の妙を極め古今軼文學中の雄篇が「スカラムッシュ」で、戀に破れたイギリスの一貴族が、心に復讐を誓ひ海賊王となつて地中海上を跳梁し遂に意中の貴婦人を吾がものにするといふ筋が「シーホーク」でロマンチックな冒險談、豪快極まる海洋小說で、原著者サバティーニは現代のチューマと稱せられ亞米利加文壇に覇を稱へる大家、譯者小田律氏は我が大衆譯壇の大先輩、老巧を以て鳴らした名譯者である。



シーホークの海賊船

28

彼女 ソロモン王坑山（ハガード）

平林初之輔

「ソロモン王坑山」は南部アフリカに千古の祕密となつて所在さへ不明であつたダイヤモンド坑を探險家アラン、コーターマンが謎の地圖をたよりに探つてゆくうち次から次へ驚天動地の事件が展開して讀み出したが最後終りまで卷を蔽ふことができないといふ萬人向の探偵冒險小說で、「彼女」は中部アフリカの神祕境に二千年來永遠の戀人をまつてゐる美女と自分の死期を正確に豫言して、財產と遺書を鐵箱に密封し死んでゆく青年とを織りませた、東西古今第一等のロマンチックな物語である。原著者のハガードは近代英國の生んだ最も偉大な大衆文藝作家でまた有名な冒險家で、譯者平林初之輔氏は曾つて早稻田大學の教授で社會思想家として知られてゐるが大衆文藝に趣味を持ちその方面にも聞こえた名飜譯家である。因にロマン、ローランはハガードの作品を民衆藝術の眼目であると激賞してゐる。

29 海の義賊（ベルネード）
ロビンフード（イートマン）

高橋邦太郎

海賊シュルクーフは紀元千八百年頃西部佛蘭西のサンマローを根據にして地中海へ迄進入し盛んに活躍した實在の人物で、彼は海賊とはいへ熱情的な愛國者で義俠に富み宛で國定忠次を純粹にした樣な人物であつた爲土地の人からは神樣の樣に崇められ一昨年サンマローで彼の三百年祭が盛大に擧行された、此の一篇は佛蘭西一流の大衆作家ボルネードが彼の一代を題材にした仁俠豪快な海賊小說である「ロビンフード」はダグラスの映畫でも有名だが中世の英吉利の或貴族が十字軍遠征中、奸臣の讒言に會ひ位置も勳功も奪ひ取れ遂に山賊になつたが而し國王に對する忠誠を忘れず、彼は部下の山賊を率ゐ神出鬼沒の活動をして遂に王の側近から奸惡の徒を一掃すると云ふ男性的な雄篇である。譯者高橋邦太郎氏は新進の佛蘭西文學者で、ラマルチイヌの「青春の夢」、ヴィルドラックの「郵船テナシチイ」等の著書あり、今は築地小劇場の事業に携はつてゐる。



ナヴアロオのスカラムツシユ

30 ポオ・ホフマンその他（ポー・ホフマン）

江戸川亂步

ホフマンは獨逸に生れた探偵小說の元祖で、とても物凄い數篇の話を書いて居る。日本では明治三十年頃森鷗外博士が「珠を抱いて罪あり」と題しその一篇を飜譯紹介されてゐるが今日の探偵小說が科學的である反對にホフマンの作はロマンチックな筋をもつてゐて一種の物語風になつてゐるのが萬人の興味を惹く、ホフマンは音樂家としても知られてゐる。だから音樂の趣味のある人に一番面白いのはホフマンの物語である。ポーは文學を愛する人、物語の好きな人には一番よく知られた怪奇小說の大家で黃金蟲、モルグ街の殺人、赤い死の假面など有名な話は幾度も日本に紹介されてゐる。日本の探偵小說の權威である本卷の飜譯者江戸川亂步氏は實は平井太郎と云ふ本名を持て居られるがエドガー・アラン・ポーを愛好するの餘り、エドガワランポと云ふ雅號を作つたほどで、亂步がポーを飜譯する、と云つて文壇では大問題になつてゐる。

31

三等水兵マルチン（タフレイル）

福永恭助

北洋の大海戰、艨々相磨するドレッドノートの砲塔の蔭から、三等水兵ピン公のマルチンは何を見て居たか、豪快極まる構想の中に輕いユーモアーと深い涙を隱た長篇海戰小說、作者タッフレイル（船尾欄干）とはもとより匿名、何人であるか知れないが、英國海軍の秘事を發いた思ひ切つた描寫が戰後の歐洲に大問題を捲き起したものである。譯者は最近軍事小說を專門に大衆文壇に進出して忽ち一流の大家と仰がれるに至つた海軍少佐福永恭助氏、何にしても軍事小說にはその筋の專門家でなくては譯せない個所が多い、陸の櫻井大佐、海の福永少佐と海陸の文人相對したところにも本全集の値打がわかる。

此の全集三十六卷を通讀すれば、三百年も長命して世界中を股にかけ一番面白い譚を漁つて步くといふ奇怪な空想が實現される愉快々々

32

幻島ロマンス（ゲイル）

野口米次郎

幻島はどこにあるか、南極か北極か西か東かそれはたゞ此の物語に出て來る人々だけが知つてゐる秘密だ。ある埠頭に姿を現はした怪しの潛水艇に乘り込んだ妙齡の美人が、地圖にも幻島（實はヤクエ島といふ名があるのだが）へ出掛けるのを、待ち構へてゐた快走艇が追跡すると云へば讀者は恐らく快走艇に一人の青年が乘り組んでゐてその美少女と戀に陷るのだと思ふであらうが、正にその通り御推量命中である、だが何故に美少女が幻島へ乘り出すのかそれは想像がつかないであらう。つまり其處が此の小說の大切な問題である、ヤクエ島では我々の世界で不思議だと云はれてゐることが尋常で、夢が現實だ、さう云ふと架空的な探偵譚か夢物語のやうに思はれるが實は極めて實際的であるところに此の作の面白味がある。おまけに快走艇で追跡してゆくのは少女が船出の前日、不思議な犯人に狙撃せられたのを知つたある大新聞の社會部の青年記者で、今や戀と職務の兩道かけて大活動をしようと云ふのだから此の不思議な物語に更に探偵的變化を加味し、稀に見る愉快な物語としてゐる。原著者のゾナ・ゲールは譯者野口米次郎氏とは三十年來の親友で、現代米國の女流作家中の第一人者である。因みに本篇は譯者の工夫で舞臺を日本にとることになつてゐる。詩人野口氏の怪奇な想像力も働いて定めて愉快な物語となるであらう。

33 ロモラ（エリオット）

賀川豐彦

藝術と宗教と眩華錯綜せるルネッサンスを背景に伊太利の古都フローレンスに起つた戀と陰謀と信仰の物語である。深窓に育つた貴族の娘ロモラを愛人の手から奪ひ取つた野心家のテイトは背徳の限りを盡した末遂にフローレンスの支配權を握り民衆に厚き聖僧サボナロラに死刑を宣告した。ロモラは夫の惡業に居たたまらず家を捨てて巡禮の旅にのぼるまでを前半とし、テイトの最後、ロモラの幸福な後半生それに絡る花賣娘の哀れな一生を描き出した熱情的な雄篇で「僕はロモラをやらう、身も心も打ち込んでロモラを譯さう」と情熱兒賀川豐彦氏が卓を叩いて叫んだ程の名篇だ。譯者賀川氏が此の宗教的戀愛小説の擔當者として如何に適任であるかは云ふまでもあるまい。一九二五年メトロゴールドウイン社はギッシュ姉妹を主役として本篇を映畫化し日本では一流館の特別映畫として大喝采を博したものだ。



リリアンギッシュのロモラ

34 世界滑稽名作集

東健而

笑のない世界は墓場だ、高尚な笑ひの文學は良き夫を作り、良き妻を作り、よき子を作る。笑ひは家庭を春の如くに幸福にし、健全な朗らかな國民を作る。「笑ふ門には福來る」と云ひながら眞に笑ふことを知らぬは日本の國民だ。本卷は高尚な健全なる笑ひの文學のみ十數篇を蒐めたもので、何れもジャズとチヤールストンの現代に傑出した歐米の大家の代表作のみである。譯者は「蚊とんぼスミス」の名譯者とし、森田みね子のペンネイムで知られたるユーモア文學の權威、東健而氏。

泣いて笑つて恐れて歡んで、そして心の糧となる、これが此の全集の效能だ。

35

世界怪談集

岡本綺堂

デフォーの「ヴィール夫人の亡靈」コムパートの「語らぬ女」ヘンソンの「旅に出た男」キプリングの「幻の人力車」芥川龍之介が愛讀し、作品に著しくその影響を受けたアンブローズビアースなどの最近作家に到るまで、最も傑れた怪奇家の代表作中から鬼氣眞に迫る物凄い物語ばかりを選んで綺堂先生が邦譯されるのが此の一卷である。劇壇の耆宿脚本綺堂先生はまた捕物作家としては捕物と怪談の大家である。殊に先生は前髪時代英國人についてみつしり英文學を研究しその後歐洲を漫遊して本場で大陸文學を研究された、その外國文學の素養と先生の眞に迫る文章は兩々相俟つて此の一卷が世界に誇るべき怪談集となつたのである。

36

世界怪奇探偵事實物語

歐米諸大家

事實は小説よりも奇なりと云ふ言葉がある。此の島國の日本でさへも、時々とてつもなく面白い事件が起つて、新聞の三面を幾日も賑はすことがある。いはんや世界的の大事件例へばロシアの「ラスプチーン暗殺事件」「佛蘭西の殺人鬼青髭事件」を世界的な文學者が記述して居るのだから、面白くない筈はないのである。斯うした大事件は日を經るまゝに忘れられ、誤られ、歷史に殘るときにはほんの筋書になつてしまふ。外國では斯ういふ記録を數卷に纏めた叢書があつて、此の一卷はその中から知名な事件のみを選んで各々專門家に飜譯して貰ふのである。

本全集四十餘篇の分類

傳奇小説
鐵假面
三銃士
巴里の秘密
ゼンダ城の虜
不妖傳
スカラムッシュ
海の義賊

探偵小説
アルセーヌ・ルパン
月長石
カートライト事件
黒猫
毒女
スペードのキング
コブラの秘密
クラブの門
シャロックホームズ
紅蘩蔞
ルコック探偵
河畔の悲劇

冒險小説
ソロモン王の坑山
寶島
シー・ホーク
ロビン・フード

怪奇小説
チエキールとハイド
ポオ・ホフマンその他
幻島ロマンス
世界怪談集

科學小説
トンネル
空中戰爭
海底旅行

戀愛小説
椿姫
マノン・レスコオ
カチューシャ
ラ・ボエーム

家庭小説
家なき兒
放蕩息子
オリヴア・ツウイスト
[illegible]
アンクル・トムス・ケビン
ステラ・ダラス

宗教小説
ロモラ

滑稽小説
トウエーン名作集
世界滑稽名作集

軍事小説
前線十萬
三等水兵マルチン

都合により内容細目書を一二變更する場合があるかも知れません。

文字の大公園

佐藤春夫

藝術の世界は廣い。文字の中にもいろ／＼の文學があり得る。譬へば或ひは學校のやうな、或ひは教會堂のやうな、或ひは裁判所のやうな、或ひは田舍道のやうな、或ひは宮殿のやうな、或ひは深山幽谷のやうな文學もそれ／＼にあり得る。それらの悉くを綜合して一つにした世界そのもの丶やうな文學は有り得ないかも知れないがそれらのいくつかを兼ね具へた文學はあり得る。改造社が「世界大衆文學全集」と呼ぶところの文學叢書は、謂はゞ公園のやうな文學的著作の集粹であるらしい。何人も容易にその中に入ることが出来て、その中で神身の健康を樂しみ、次の時日のために休息し、しばし勞務を忘れしめようといふのが、この叢書の目的であるらしい。即ち文學を以て一大公園を築かうといふのにあるらしい。僕が賛成する所以である。

戰爭文學も入つた

櫻井忠溫

改造社が「現代文學全集」によつて日本文學を大衆に開放したが、未だ廣く世界文學を紹介するに至らなかつた。併し今回「世界大衆文學全集」を刊行するに至つたので、始めて同社の全集物發行の意義が、立派に完成されたのである。「現代日本文學全集」あつて「世界大衆文學全集」なきは、畢竟片輪者である。この點に於て、同社が一途に文化の前衛を以て任じ、營利を外にして前進せんとする勇氣と誠意に對し敬仰の念を禁じ得ない。殊にその内容を一瞥して、頗る新味のある計畫だと敬服した。例へば「現代日本文學全集」に戰記物を取り入れたやうに「世界大衆文學全集」にも歐洲大戰が生んだ新しい戰記小説に[illegible]歩のやうなある一部の戰爭物とは違つて、東野若くはそれに近い戰記物を組み入れたことには、古い殼を脫いだ現代戰術の戰記物が始めて、日本に紹介されるわけで、同社の事業に頗る新味があることを證據立てゝゐる。私は「世界大衆文學全集」の完成を以て、文壇を國際的に大衆の前に擴張するものと信し、その成功を祈つて止まぬものである。

特に探偵物に就て

森下雨村

この全集に選ばれた四十篇に近い作品は、その孰れをみても一粒選りの世界的名作であることに異存はない。而もその内容が、俗に墮せず高級に失せず、飽迄興味中心の名篇揃ひであることは、題目を一瞥しただけでもわかる。甚だ大膽な申分ながら、單にこれだけ

の理由からしても、この全集出でゝ日本の讀書界は、世界的大衆讀物の如何なるものであるかを知り得ると斷言して憚らない。實はかく言ふ私自身が、その喜びを滿喫し得る一人である。といふのは、原本の得難きため、或は語學の足らぬため、その名を聞いて未だ讀むことの出來なかつた名篇大作が、いくらも含まれてゐるからである。この意味に於て、私は非常なる喜悦と、十分な感謝と讚辭を本全集に呈する次第である。次に、この全集に含まるる探偵小說について は、推薦者として一言して置きたい。近代人特有の獵奇趣味から生れ出た探偵小說は、ポオの怪奇小說から、ガボリオの純探偵小說に一轉し、更に幾多の分野に開展した。私はこの特異な近代的大衆文學の發達の跡を辿り得ると同時に、現在の探偵小說が取りつつある傾向を知り得るやうに心掛けて、數十百の作家中から最も代表的なものを嚴選したのである。ポオとガボリオを前期とすれば、ドイル、ルブラン、オルチイ夫人は中期、爾餘は現代の花形作家である。その作品は皆各作家の出世作として知られ、本國に於て數十版乃至數百版を重ね、世界の大衆文學史上に遺るべき名著である。十二分の自信を以て推薦する所以である。

流行作品

菊池寛

日本に於て最もよく讀まれたるものは、「不如歸」であり、「死線を越えて」であり、「金色夜叉」であるごとく、西洋において萬人に讀まれたるものは、「ゼンダ城の虜」であり、「椿姬」であり、「放蕩息子」である。これらの作品は、その時代に於て、それ〴〵一大流行(×××三)を作つて、五十萬百萬を賣つた作品である。文藝の大衆化が叫ばれる現代に於て、これらの民衆的傑作が、最も大規模に飜譯移植せらるゝことは、欣ばしきことでなければならない。

西洋文學の魅惑

岡倉由三郎

一圓本の跳梁以來、「世界文學全集」とか「世界戲曲全集」とか、世界を一纏めにした文學の集聚が續々我國に紹介しかけられて來たために、我々日本人も、西洋人が如何に生活し、如何に苦惱し、又如何に歡喜するか……略判りかけて來たと見てよい。然し今日までのものは譯文が難解であつたり、原作に所謂面白味が乏しかつたりして、完全に日本人のものとなつてゐない傾きがある。改造社の今度の企てに依れば、泰西無數の名作の中より、日本人に最もファミリアな、而も面白い筋、奇拔な變化に富む物語りのみを集めて、而も五十錢で之を賣らうといふのだから、一寸びつくりせざるを得ない。このやうな大きな物語りは、人間にとつて丁度空氣や日光のやう

なもので、その價値は無限と云つてもいゝから、空氣や日光のやうに無料……に近い廉價で提供される事に國民全體の喜びでなければならぬ。日本の文壇の話などでは、よく行きつまつてゐるといふ嘆聲を聞くが、よし行きつまりは洋の東西を問はず同様であつても、日本のものから西洋のものに眼を轉ずる時、……美術館などで日本畫ばかり見馴れて來た眼に、一度西洋畫が映ると、初めて視野が開けて生きかへつたやうな心持になるのと同様に、我々の心が何かしら新しい希望と興奮とを感ずると思ふ。

世界の心を知る

賀川豐彦

大衆の思ふところは、小說の病理學者や心理學者の敎へるところとは自ら違つてゐる。高級な文學者の文學は、云はば病理學者の病理學であり、心理學者の心理學である。大衆の考へるところは、そんな專門的なものでない。然し、そこに、血あり、火あり、熖がある。そこに生命がある。人情がある。義理がある。いや、そこに人間がある。それはあらゆる環境に揉まれ踏み躙られつつも猶根強く延びて行く大衆の意氣を最も愉快に描いて呉れる。今度改造社で選はれた世界大衆文學は、最も有名なものばかりで、たゞに我等の魂を高く引き上げるのみならず、各國の國民性を知るにこれほど

善き教科書はない。ヂッケンスの作物に、それによつて、英國の國民性を作り上げたとまで言はれてゐる。その他皆一度は讀まなくてはならぬものばかりである。私はこんな種類のものがこん形で、こんなに安く手に入れられるとは思はなかつた。うれしいことだ。

大衆文學の道德

野上彌生子

古來から多くの人々に悦んで讀まれた作物は多くの心を引きつける一般的興味、即ち筋の面白さとか、冒險とか、諧謔とか、涙とか、戀とかの外に、或る嚴粛なモラルに支配されてゐるのが常である。このことは、正義と美が認識され、惡と醜が滅びる、これである。このことは、洋の東西を問はず、すべての通俗的讀みものから、我々の讚歎に値するまで共通の最も大事な魅力であると共に、往古のすぐれた古典、並びに各時代の名作雄篇と稱せられるものの基調を形成するものも、このヒューマニズムに外ならない。(中略)大衆文藝と云ふ文字を、現代の日本に於てなされてゐるやうな不幸な解釋から救ひ出し、本來の正しい意義に拔き、うんと立派な、氣持のよい讀みものを供給されんことを希望する。またさうすることは依つて、我が讀書界に瀰漫してゐる俗惡醜陋な趣味を一掃し、よき好尚と選擇の下に讀む傾向を誘導することは、出版者の愉快な使命であらう。

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

株式會社秀英舎印刷部